

ありふれた脇役でも主人公になりたい

ユキシア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平野浩二は転生者だ。だが、転生者だからといってチートもなければ特別な才能もなく、優れた容姿でもない。どこにでもいるありふれた存在だ。

そして平野浩二の周囲には天之河光輝、坂上龍太郎、白崎香織、八重樫雫といったイケメン美少女の幼馴染がいる。彼等彼女等が主人公やヒロインだというのなら自分はその脇役だ。

だから己の分を弁えて生きるのが賢い生き方だ。それでも、彼は渴望する。

好きな女の前だけぐらいは主人公になりたいと。

目次

脇役 2 4	脇役 2 3	脇役 2 2	脇役 2 1	脇役 2 0	脇役 1 9	脇役 1 8	脇役 1 7	脇役 1 6	脇役 1 5	脇役 1 4	脇役 1 3	脇役 1 2	脇役 1 1	脇役 1 0	脇役 0 9	脇役 0 8	脇役 0 7	脇役 0 6	脇役 0 5	脇役 0 4	脇役 0 3	脇役 0 2	脇役 0 1
151	144	138	131	121	115	109	103	97	93	83	77	72	65	60	55	45	39	31	22	16	10	5	1

主人公13	主人公12	主人公11	主人公10	主人公09	主人公08	主人公07	主人公06	主人公05	主人公04	主人公03	主人公02	主人公01	脇役36	脇役35	脇役34	脇役33	脇役32	脇役31	脇役30	脇役29	脇役28	脇役27	脇役26	脇役25
327	320	310	304	297	292	286	281	274	267	259	250	243	235	229	221	214	208	204	195	189	180	173	163	157

主人公38	主人公37	主人公36	主人公35	主人公34	主人公33	主人公32	主人公31	主人公30	主人公29	主人公28	主人公27	主人公26	主人公25	主人公24	主人公23	主人公22	主人公21	主人公20	主人公19	主人公18	主人公17	主人公16	主人公15	主人公14
481	474	467	461	453	447	442	436	427	423	417	409	401	394	387	382	377	371	366	361	356	350	345	338	333

主人公56	主人公55	主人公54	主人公53	主人公52	主人公51	主人公50	主人公49	主人公48	主人公47	主人公46	主人公45	主人公44	主人公43	主人公42	主人公41	主人公40	主人公39
628	623	617	610	603	597	591	579	569	563	554	546	540	526	517	512	503	493

脇役01

平野浩二ひらのこうじは転生者だ。

一度目の人生で命を落として二度目の人生を謳歌する彼は神様から貰った特典でチートし放題、やり放題、当然女子からもモテモテ。………なんてことは幻想の中だけで終わりを迎えたのであった。

何故なら浩二は神様に会ったわけでもチート能力も特典も何も貰っていない。気がついたら二度目の人生を送っていたのだから。

それでも転生者だから何かに特化したもの、才能ぐらいはあるかとも思い、幼馴染である八重樫雫の実家である剣術道場に入るも、後から入ってきた天之河光輝に当然の如く敗北し、雫には一本も取ることもさえできず、ならばスポーツならと思いきや色々のスポーツに手を出すも興味本位で手を出した光輝に敗北し、更には坂上龍太郎にも敗北を叩きつけられた。

「なら勉強だ。と勉強に励む。」

八重樫雫の実家が剣術道場なら浩二の実家は両親が経営している小さな病院の一人息子。だから頭がいいというわけではないが、前世の知識がある分他の人達よりかは断然有利。

だが敗北。

惜しくも僅かな点差で敗北を叩きつけられて浩二は「ちくしょう……」と双眸から透明な液体が零れ落ちたことは誰も知らない。

成長するにつれてイケメン、美少女、筋肉バカになつていく幼馴染達に嫉妬を通り越して諦観の念を抱き始めた浩二は自分が脇役だと自覚した。

自分には才能がない。何かに特化したものもなければ優れていることもない。

精々同年代に比べて医学に長けていることぐらいが唯一の取り柄だ。

主人公を陰でフォローしたり、支えたり、主人公を活躍の場に立たせたりとそういう役割を持って転生したのだと思った。

それならそれで余計な恨みつらみを買わない様に己の分を弁えて生活しようと浩二は心に決めた。

「あ、浩二くん。おはよう」

「おー、おはよう」

登校時間、浩二は幼馴染である白崎香織と遭遇していつも通りに挨拶を返す。

「浩二。おはよう」

「おはよう。雫」

そしてもう一人の幼馴染である雫にも挨拶を返したら。

「おはよう。香織、雫、浩二」

「おはよっさん」

続けて光輝に竜太郎も姿を現す。

こうして主人公とも言える幼馴染達を持つ浩二は肩身が狭い思いをしながら共に学校に登校するのであったが……。

「これが日常系だったらよかつたんだけどな……」

浩二は知っている。これから自分達に何が起きるのかを。

？ありふれた職業で世界最強”

それは浩二が転生する前、読みふけていたライトノベル。

主人公である南雲ハジメ。そしてクラスメイト（+畑山愛子）は異世界？トータス”へ転移してしまう。

そこで魔族との戦争に巻き込まれてしまい、戦闘訓練をする最中、非戦闘職？錬成師”である南雲ハジメが奈落に落ちて変貌を遂げ、吸血姫ユエと出会う。

それから色々な出会いと戦闘があり、最終的にはエヒトを倒して無事に元の世界に帰還する。そういう物語だ。

天之河光輝達と出会い、ここがその？ありふれた職業で世界最強”の世界に転生してしまったことを理解した浩二は当然取れる手段は取っている。

自分には才能がない。素質もない。

神様にも出会っていないし、チートもない。そんな脇役が危険だらけの異世界に赴けば待つているのはデッドエンド一択。

流石に二度も死にたくはない浩二は才能がない分、努力で埋めてきた。

毎朝早く起きてトレーニング。ジョギングと筋トレを行い、負けながらも雫の道場に通って剣の腕を少しでも磨き、両親の医学書を読みふけったり、サバイバル術を向上する為に時折山に籠ったりと取れる手段は取って来た。

死なない為に。そしてもう一つ。

「浩二。お昼にしましょう」

「ああ」

八重樫雫を護る為に。

お前は何を言っているんだ？　と思えるぐらいに烏澁がましく分不相応な想いである。

そもそも浩二はこれまで雫に勝ったことがない。それどころか光輝にも勝った覚えがない。実力が確実に雫の方が上だと浩二はその身で知っている。

こうして昼食に誘われるのも全ては？幼馴染”としてだ。幼馴染でなければ浩二は雫と一緒に食事を取ることなど皆無に等しい。

だがそれでも浩二は雫を護りたい。男として惚れた女を護りたい。

(けど、雫は最後には南雲と……………)

物語の最後では八重樫雫は南雲ハジメに好意を寄せるようになり、ハジメハーレムの一員になる。

だから男として惚れた女を護りたいと思うのも密かに雫に好意を寄せていることも何もかもが分不相応。脇役とヒロインが結ばれるなんてことは決してありえない。

例えそれが本来存在しない転生者である浩二がいたとしても物語では脇役が一人追加された程度だ。何の支障もない。

「浩二。どうかしたの？」

「え？　なにが？」

「箸が進んでないから……………もしかして体調でも悪いの？　それなら

保健室まで一緒に行くわよ?」

「あー、いや、大丈夫だ。昨日、香織から色々とな……………」

「ああ、ご苦労様」

それだけで全てを察した雫は現在進行形でハジメに突撃している親友に視線を送る。

原作通り、白崎香織は南雲ハジメが好きだ。

だから相談相手にされている浩二と雫は時折香織から相談を受けている。深夜遅くまで。

頼むからもう寝かせてくれ、という懇願は香織の気持ちが悪く落ちてくまで聞き届いてはくれない。

安眠の為に香織とハジメをさっさとくつつけようと割と本気でそう考えた。

「え? 何で、光輝くんの許しがいるの?」

「ブフツ」

親友の素の一言に雫は思わず吹き出す。

すると、光輝の足元に白銀に光り輝く円環の幾何学模様が現れた。

俗に言う魔法陣。それが一気に教室全体を満たすほどの大きさに拡大し、輝きを増し続ける。

(いよいよか……………)

それが何なのか、これから先どうなるのか、既に知識として知っている浩二は靴に手を伸ばす。

そうして異世界? トータス? へと転移するのであった。

脇役02

「?ありふれた職業で世界最強」の世界に転生した平野浩二は原作通り、異世界?トータス?へ転移した。そこでイシユタルから原作の内容と同じ台詞を耳にしながら納得する。

(やっぱり原作通りだな……)

人間族、魔人族、亜人族と三つの種族に分けられた世界。そして魔人族は魔物を使役する力を得て人間族は滅びの危機を迎えていた。

そこにこの世界の神として崇められているエヒトが浩二達を召喚したのであった。

当然戦争に参加することに反論の意を唱えたのは教師である畑山愛子。だがしかし、帰る手段がなく、生徒達はパニックになる。

そこに天之河光輝のカリスマ性が発揮して生徒達は冷静さと活気を取り戻した。

「俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

(最後の方は敵側なんだけどね、お前……)

内心そうツツコミを入れる。

だがそれが真実だということを知っているのは浩二ただ一人。

「へっ、お前ならそう言うと思っただぜ。お前一人じゃ心配だからな。

……俺もやるぜ?」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわよね。……気にくわないけど……私もやるわ」

「雫……」

「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ!」

「香織……」

そして何も発言していない幼馴染である浩二に視線を向ける光輝に浩二は肩を竦めながら言う。

「戦争そのものに反対したいが、これでも医者の子だ。怪我人を放っておくことはできない」

「浩二……」

いつもの幼馴染メンバーの賛同にクラスメイト達も次々に戦争の参加に賛同していく。

これから先、どうなるのかも知らないで……。

戦争参加を決意した一同は王宮に赴いて国王や王子、王女やお偉い様方と挨拶したり、晩餐会で料理を堪能しつつ各自に与えられた一室で休息をとったその次の日から早速訓練と座学が始まった。

まず集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られ、それがなんなのか、騎士団長であるメルド・ロギンスが説明する。

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれる。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これで迷子になつても平気だからな、失くすなよ？」

気楽な喋り方をする騎士団長。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。？ステータスオープン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

「アーティファクトっていうのはな、現大じゃ再現できない強力な能力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、昔からこの世界に普及しているものとして唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般人にも流通している。身分証に便利だからな」

その説明を耳にして浩二は早速ステータスプレートに自身の血を擦りつけた。すると、魔法陣が一瞬淡く輝いて、灰色へと変色した。

そして自分のステータスプレートに視線を落とす。そこには
……………。

平野浩二 17歳 レベル：1

天職：医療師

筋力：40

体力：55

耐性：30

敏捷：42

魔力：80

魔耐：70

技能：医学・調合・侵入・改造・投擲・回復魔法・光属性適正・闇
属性適正・高速魔力回復・言語理解

完全なまでの後方支援の天職と技能がずらりと並んでいた。

そしてメルドかたステータスプレートに関する説明中のなか雫が
浩二に声をかける。

「浩二。貴方はどうなの？」

「ん」

己のステータスプレートを雫に渡すと雫は納得するかのような顔
で頷く。

「流石は医者の子だね。投擲はうちが影響しているのかしら？ 浩二
の投擲の腕はよかつたし」

「俺的には剣術があつて欲しかったけど……………」

八重樫道場には八重樫流投擲術がある。八重樫流は刀を失つても
戦えるように鞘術と体術そして投擲術なども組み込まれており、浩二
は投擲だけは他のよりまだマシなレベルだ。

それでも雫より劣るが……………。

「雫は……………剣士つてところか」

「ええ、まあ妥当ね」

そう答えて雫も浩二にステータスプレートを見せる。

(こつちも原作通りか……………)

現段階で浩二の存在以外は原作通りに進み、浩二は己のステータスプレートをメルドに見せる。

「ほう、医療師か……………」

「珍しい職業なんですか？」

「いや、珍しいというわけではない。だが医術に関して右に出る者はいない天職だ。治癒や回復はもちろん高位の回復薬の調合などでもできる。後方支援としてこれ以上にならない天職だ」

「そうですか……………」

結局は脇役にぴったりの職業。ここまで脇役に相応しい天職と技能が出てくれば笑いが出てくる。

(というか香織の天職とかぶる……………)

白崎香織の天職は？ 治癒師”。 治癒系魔法に天性の才を示す天職。

？ 医療師” などそれと大差ない天職だ。

(そういうえば南雲は？)

この物語の主人公である南雲ハジメ。彼の天職がもし万が一に変わっていたとしたらどうなるのだろうか？ 不安と焦燥を抱いていると。

「ああ、その、何だ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときには便利だとか……………」

歯切れ悪くメルドはハジメの天職を説明していた。

原作通り、南雲ハジメの天職は？ 錬成師”。 それを聞いて少しばかりの安堵の息を漏らす。

(でも良くも悪くもない俺は脇役だな……………)

天之河光輝のような？ 勇者” の天職でもなく、南雲ハジメのような？ 錬成師” でもない。その他大勢と同じ天職とステータス。

言ってしまうばそれこそ脇役だ。良くも悪くもないから脇役のポジションに納まってしまおう。

(むしろここまで脇役ばかりならもはや運命としか言えねえ……………)

おお、神よ。どうして私をそこまで脇役にしたがるのですか？ と

言いたげな顔で空を仰ぐ。

そうこうしている内に国の宝物庫から浩二に渡されたのは手袋のアーティファクト。指先の精密動作を引き上げる。それを渡された浩二は。

「それではこちらをお願いします」

早速と言わんばかりの回復薬の調合レシピとその材料を王女リリアーナ自ら渡された。

「あの、王女様……………このレシピ。ただの魔力回復薬だけじゃなく、他の回復薬の調合までびっしり書いているのですが……………？」

これを戦闘訓練と座学の合間にやれと？」

それはもう目を凝らさないと見えないほどにびっしりと書き連ねているレシピにリリアーナは笑みを崩すことなく言う。

「平野さんの天職は？ 医療師”。ですのでいぎという時の為にも回復薬を調合できるようになって欲しいのです。あと、私の事はリリアーナで構いませんよ？」

暗にやれという言葉がひしひしと伝わってくるのは浩二がネガティブだからか？ リリアーナに容赦という二文字がないのかは定かではない。

ただこれからも？ 王女様”と呼ぼうと内心そう決めた浩二であった。

（まあ、せっかくの異世界だ。魔法だけじゃなく薬学についても調べてみよう）

落ち込んでいる暇などはない。死なない為に、そして雫を護る為にやるべきこと知るべきことは山のようにある。

まずは手始めに眼前のものから取り組むことから始めた。

脇役03

異世界？トータス”へ転移した浩二の天職は？医療師”。

後方支援の天職だった浩二は戦闘訓練、座学、その合間に回復薬の調合を繰り返しては休憩時間を利用してトータスに存在する薬毒について調べては研究し、更には動物や魔物の死体を使って解剖、実験を行う日々。

トータスに転移してから約一週間。浩二はある決断をした。

「よし」

机に置かれているのは調合したあらゆる回復アイテム。それ以外にも魔法陣を記した紙も用意している。

明かな入念の準備。いざという時の備えをしている浩二がこれから行おうとすることは下手をすれば死ぬ可能性もゼロではない実験。だけどこの世界で生き抜く為にも、そして雫を護る為にも決して避けては通れない。

これから浩二がやろうとしていること。そして浩二が手に入れようとしているものはなんなのか。

それは？魔力操作”。

それはこの物語の主人公である南雲ハジメが魔物の肉を食べて手に入れた技能。魔法陣も詠唱も必要とせずに魔法を発動させることができるこの技能はこれから先の戦闘には必要不可欠だ。

本来魔物しかない特性だが、魔物の肉を食べたハジメ以外にも例外が二人いる。

それは？ユエ”と？シア”。

生まれつき魔力操作の技能を持つその二人は当然ハジメのように魔物の肉を食べてはいない。そこで浩二は閃いた。

——もしかして肉体に何かしらの弊害があるのかもしれない。

そして二人は生まれつきその弊害がなく、魔力操作の技能を持っているとしたら浩二の技能？改造”で魔力操作の技能を獲得できる可能性はある。

しかし、これから行う行為は完全なる人体改造。恐怖がないと言え

ば嘘になる。

それでも浩二にやらないという選択はない。これぐらい乗り越えなければ、これから先の戦闘では脇役どころか確実に足を引っ張ってしまう。

一度大きく息を吸って浩二は自己改造を取り始める。

「?・改造」

刹那、自身の灰色の魔力が全身に循環する。

すると全身の体内がまるで目で見ているかのようによくわかり、どこをどうすればいいのか手に取るようにわかる。

まるで執刀医と患者を同時に味わっているかのように自身の身体を改造していく。

血管、リンパ系、筋肉組織、神経。全身の何もかもが望んだ形に向けて変わっていくことを実感すること数十分。

浩二は自身のステータスプレートを確認する。

平野浩二 17歳 レベル：5

天職：医療師

筋力：70

体力：85

耐性：50

敏捷：60

魔力：120

魔耐：90

技能：医学「+診察」・調合「+薬毒鑑定」「+高速調合」「+効果上昇」・侵入・改造「+解剖」「+最適化」「+自己改造」・投擲・魔力操作「+魔力循環」・回復魔法・光属性適正・闇属性適正・高速魔力回復・言語理解

「よっしやー!」

念願に?・魔力操作”の技能の獲得に思わずガッツポーズ。

それどこかいくつかの技能に派生技能も獲得したという浩二に

とって喜ばしい結果となったのだが……………。

「?魔力循環” ってなんだ……………?」

文字通り魔力を循環させる派生技能ならいったいそれが何の役に立つんだ? と首を傾げるも。

「まあ、その辺はおいおい調べていくか……………」

今は念願の?魔力操作” を獲得できただけでよしとする。これで詠唱も魔法陣も必要とせずは無詠唱で魔法を発動させることができる。

「さて、今日はもう遅いし、明日の訓練に備えて寝るか」

今日の分の調合も終えて、念願の技能も手に入れられて一息ついた浩二は大きな欠伸をしながら明日に備えて休もうとする。

「浩二。まだ起きてるかしら?」

「雫?」

その時、深夜の時間にも関わらず雫が部屋の扉をノックしてきて浩二は扉を開ける。

「どうした? こんな時間に?」

普段から自己管理ができている雫が深夜の時間に部屋に訪れてくるのは珍しいことだ。

「ごめんなさい。少し体調が悪くて……………薬とかないかしら?」

薄暗くてよく見えなかったが、部屋に訪れてきた雫の顔色がよろしくない。それに気付いた浩二はすぐに雫を部屋の中に入れた。

「診察するからちよつとそこに座れ」

「え? 別にそこまでしなくても……………」

大袈裟な、と言わんばかりの顔で遠慮がちに言う雫だが浩二は問答無用で椅子に座らせる。

「とにかく診るから座ってろ」

有無を言わせない迫力に満ちた顔で告げられた雫は「は、はい……………」と思わず敬語で返事をした。

そうして浩二は元の世界から持ってきていた簡易の診察道具で診察しながら。

「俺達は突然にこの世界に召喚されたんだ。常識も何もかもが違うこ

の世界に召喚されて、慣れない戦闘訓練や覚えなければならぬことを覚えていけば嫌でもストレスが溜まる。それがいずれ身体にも影響を及ぼすんだ。そうなってからじゃ遅い」

現にクラスメイトの何人かは既に体調を崩している者もいる為、浩二は密かに薬を処方している。

「それに雫は周囲に気を配り過ぎだ。その上、また夜遅くまで自主練していただろ？ お前は色々溜め込みやすいんだから少しは自分を大切にしろ」

「……………むう」

同級生それも幼馴染からの説教に眉根を寄せるも事実だから反論できない雫であった。

「雫だつて女の子なんだ。香織ほどは勘弁して欲しいけど少しは我儘を言つたらどうだ？」

「我儘って……………誰に言えばいいのよ？」

「あー、俺か香織だな。光輝は論外だし、龍太郎は脳筋だからな……………」

消去法として浩二か香織の二人に絞られる。

「香織なら喜んで抱き枕になってくれるんじゃないか？ それとも俺がなつてあげようか？」

「結構よ」

天職？ 剣士”らしくばつさりと断る雫。

そんな冗談半分本気半分を言っている合間に診察は終わった。

「お疲れ様。疲労とストレスが溜まっているからよく食べ、よく寝れば治る。あと一応薬を渡しておくな。さつきちようどいいのを調合したばかりだから、それを朝と夕方に一錠ずつ飲めばいいから」

手慣れた動きで薬を用意するその姿はもはや医者だ。

そんな浩二に雫は思わずクールビューティーの表情を崩して笑みを浮かべる。

「本当に変わらないわよね、貴方のそういうところ。少しでも怪我や病気をしたらすぐに病院に連れて行くんだもの」

「そりゃ子供の頃から怪我と病気の恐ろしさを教わっていたからな」

医者の子息として両親からそれはもう耳にタコができるほど聞かされた。

「それに馬鹿と脳筋がいつも喧嘩に飛び込むから手当てにも苦労にも慣れたものだ。あ、あと喧嘩を除いたら突撃娘にもか」

「ええ、そうね……………」

互いに持つ幼馴染に苦労して二人共大きなため息を吐く。「お互い苦労してますなあ」「いえいえ、そちらの方こそ」と苦労人同士で会話が続きと。

「……………ねえ、浩二。さつき我儘を言ってもいいって言ってくれたわよね？」

「ああ、出来る範囲でならな」

「なら少しだけ私の愚痴に付き合ってくれないかしら？」

「いいぞ」

「……………怖い。戦うのが」

そこにいるのはいつもの凛々しいお姉様ではなく、凄腕美少女剣士でもなく、恐怖に身体を震わせる一人の女の子だった。

戦いたくない、死にたくない、戦場に行きたくない、家族に会いたい。そんな誰もが抱く恐怖と不安を雫は吐き出している。

そんな我儘も愚痴も言える状況ではないのは雫は重々承知している。だからいつも恐怖や不安を押し殺して、それを誤魔化す様に剣を振るっている。

浩二はそんな雫の言葉を一字一句全てに耳を傾けて話を聞いた。その上で浩二は雫に言う。

「俺が雫を護るよ」

分不相応の言葉を口にした。

「俺の天職は？ 医療師」。メルド団長が言うには後方支援としてこれ以上にならない天職らしい。雫の隣に立つことはできないし、一緒に戦うことが出来ないけど、俺がいる限りは絶対に雫は死なせない。死なせてたまるか」

「浩二……………」

雫は浩二のその真剣な顔に驚きに包まれる。

今までに浩二がそんな表情をする時は必ず目の前で誰かが傷付いている時だけだ。

(あの時と同じ)……………)

それはまだ中学の時、いつもの幼馴染メンバーで行動していた際に近くで交通事故が起きた。誰もが驚き、その現場を遠巻きで見っていた時、浩二だけは動いていた。

真剣な顔で、必死の表情で目の前の傷ついた人を救おうとしていた彼のその行動はまさに命の尊さと重さを知っている医者顔だった。

その後、浩二の的確な応急処置のおかげで一命を取り留めて浩二は人命救助の活躍で賞状を受け取った。

本人は「これでも医者の子ですから」と曖昧な笑みと共にそう答えたが、雫は今でもあの時の顔を覚えている。

そんな浩二の顔を見て雫はいつもの調子で言う。

「……………もう、なに言っているのよ？　むしろ貴方は護られる側でしょ？　道場で私に勝ったことあったかしら？」

「うぐ」

「それに後方支援の浩二が戦ってどうするのよ？　回復役はパーティーの生命線なのよ？　誰も死なせたくないのなら浩二は戦うべきではないわ」

「あぐ」

次々に言葉の刃が浩二に突き刺さる。脇役が分不相応なことを言ったからだ。

「でも浩二が後ろにいてくれたら私も安心して戦える。だから私の後ろは任せられたわよ？」

「ああ、任せられた」

互いの背中を預けるわけではないけど、それでもいいと浩二は差し出された雫の手を取った。

脇役04

新しい技能である？ 魔力操作”を獲得することに成功した浩二は更なる研究と実験を積み重ねて様々な薬を調合できるようになった。それ以外にも？ 投擲”の技能を上げる為に密かに訓練したり、日本で身に付けた八重樫流刀術、鞘術、体術を忘れない為に時折雫と模擬戦をしている。

二週間、みっちりと入念な準備と取り組み、訓練を行ってきた。

まあ、それでも光輝を除いた他のクラスメイトよりかは少しはマシ程度だが。

そしていよいよ、その日がやってくる。

【オルクス大迷宮】

実戦訓練の一環として向かう大迷宮。

ここで現在？ 無能”のレッテルを貼られた南雲ハジメが豹変して吸血姫ユエと出会う。まさにこの世界の運命が左右されるルートである。

(南雲には悪いけど、原作通り奈落に落ちて貰わねえと……………)

浩二は自分でも最低なことを思っている自覚はある。だけどエヒトと戦い、勝利する為にはここでハジメが奈落に落ちて貰う必要がある。

それを転生者である浩二が変えてしまえばこれから先の運命がわからなくなってしまう。

だからこそ、浩二はハジメとの接触を避けてきた。

仮に浩二がハジメを助けて代わりに浩二がユエと出会うようになったら主人公になれるかもしれない。だが、浩二とハジメは違う。

最終局面でエヒトと戦うことになったら浩二は自分では絶対に勝てないと断言できるし、奈落に落ちたからこそハジメはエヒトを殺して多くの人を救う結果になった。

ハジメの代わりに浩二がそうになったら最悪の展開が起きても不思議ではない。

「トリアージだ、俺。最善を尽くせ」

主人公になりたい。そんな自己満足の我儘を貫く為に多くの人達の命を犠牲にするわけにはいかない。

全てはこの日の為に。これから先のこの世界の命運の為に。

「オルクス大迷宮」の入口を見据えながらこれから待ち受けている悲劇に生唾を飲み込む。

そこへ龍太郎が。

「なあ、浩二よ。初めての实战訓練だから緊張しているのはわかるけどよお……………」

どこか緊張が抜けるといふか、なんとも言えない顔で龍太郎は言う。

「その格好。どうにかなんねえのか？」

龍太郎の言葉に近くにいたクラスメイトはうんうんと頷く。

「どこか変か？ 割と似合うと思うんだけど？」

「いや、似合っちゃいるけどな。なんで医者 of 恰好で来ているかって言いたいんだよ、俺は」

浩二が現在身に付けている装備は元の世界の医者がよく着ている白衣コートもしくはドクターコート。他のクラスメイトは鎧や装備はしっかりしているのに一人だけ場違いの恰好で立っている。

それを聞いた浩二は龍太郎を鼻で笑う。

「ふっ、龍太郎よ。これがただのドクターコートだと思ったら大間違いだ」

「はあ？ もしかしてそれもアーティファクトか？」

「いや、自作だけど？ 縫うのは苦労した」

「自作かよ!？」

脳筋を揶揄う医者。しかしながらも浩二の言った通りただのドクターコートではない。特殊な魔物の皮を薬液につけて伸縮自在にして、更には魔力操作によって柔軟性と強靭性を高める。もはやアーティファクトと言っても過言ではない浩二、自慢の一品だ。

(とはいえ、奈落から這い上がった時の南雲のよりかは格段に劣るが……………)

錬成と生成魔法によって銃から手榴弾。それ以外にも様々なアー

ティファクトを創り上げるハジメに比べたらどうしても劣ってしま
う。

鍛冶職に比べれば専門外だから仕方がないということもあるが、少
しはそちら方面に手を伸ばしてみるのもいいかもしれない。

「浩二くん。どうしたのその恰好？ 似合ってるよ」

「サンキュー、香織。お互い回復役として頑張ろうな」

「うん」

お互いに後方支援の役割を持っている浩二と香織。そこにいつも
の幼馴染メンバーである光輝と雫もやってくる。

「浩二。戦う気があるのか？」

「何を言ってるんだ、光輝。俺の天職は？ 医療師」だぞ？ 後方支援が
俺の役割なら下手に鎧を着るよりも回避しやすい装備を身に付ける
もんだろう？」

「だからといってこれから戦いの場に行くのにその恰好はおかしいだ
ろう？」

「何を言ってるんだ？ 俺達の世界でも戦場に軍医はつきもの。そうだ
ろ？」

それを言われれば何も言い返せなくなる光輝に雫は小さく息を吐
いて言う。

「つまり浩二は医者として戦場に赴くことね」

「ああ、言うなればこれが俺の鎧であり、医者として戦場に立つ決意の
表れだ」

「浩二くん、今の台詞格好いいね」

「そう褒めるな、香織。はい、魔力回復薬グレネード」

「あ、ありがとう……………」

褒められてドクターコートの内側から魔力回復薬（強化版）を差し
出す浩二に香織は苦笑しながらも受け取った。

そうこうしている間に実戦訓練が始まった。

騎士団に守られながら順番に魔物の討伐を行っていくなか、一体の
魔物——ラットマンが光輝の間合いを向けてその素早い動きで向
かってくるも、一本のナイフがラットマンの胸部に突き刺さる。

すると、ラットマンは泡を吹いて倒れる。

「うん、ちゃんと効果は出てるな」

浩二が投げたナイフの柄尻にはビー玉サイズの球体を取り付けられていた。

ハイリヒ王国直属の筆頭錬成師ウオルペン達に頼んで錬成して貰った投擲ナイフ。投擲して相手に突き刺さると刺さった部分から毒物を注入させる。

調査した毒の効果がしっかりとラットマンに現れて満足げに頷く。

「おい、浩二！今の絶対に俺達に当ててるなよ!？」

魔物が毒殺されたシーンを目撃した龍太郎が額に冷汗を垂らしながらそう叫ぶ。

「安心しろ、龍太郎。俺が八重樫道場で投擲の練習していたの知ってるだろう？それに投擲の技能もあるからへまはしない」

「そ、そうか……………」

「万が一に当たったらちゃんと治してやるよ……………採血してな」

「おい!!」

最後にボソリと呟いたその言葉に背中に恐怖を抱く光輝達。そのなかで雫がぼつりと言う。

「出たわね、マッド浩二……………」

医学に長けている浩二は傷や怪我の手当てなどもきちんとするが、マッドサイエンティストの気質も併せ持っている。

蛙、鼠、その他諸々の小動物を切開して解剖するシーンを雫達はこれまでにも何度も目撃している。浩二曰く？医者のお大半はマッドサイエンティスト”らしい。

普段は隠しているが、幼い頃から家族同然に過ごしている幼馴染には周知の事実。

流石に人体実験の類はしていないだろうが、してもいいのなら彼はやる。

幼馴染一同は？浩二ならやる”そう断言できる。

ステータスプレートに閥属性適正があったのはマッドサイエンティストだからではないだろうか？という疑念が脳裏を過った。

(まあ、それ以外にも色々と用意はしてあるが……………)

念には念を入れてドクターコートの下には様々な薬品などがあるが、使わないことを祈りつつ魔法で対応する。

そうこうしている内に二十階層を探索する。

「擬態しているぞ！ 周りをよく注意しておけ！」

忠告の直後、前方でせり出していた壁が突如変色しながら起き上がった。カメレオンのような擬態能力を持ったゴリラの魔物だ。

「ロックマウントだ！ 二本の腕に注意しろ！ 剛腕だぞ！」

メルドの声が響く。光輝達が相手をしているとロックマウントは後ろに下がり仰け反りながら大きく息を吸った。

「グウガガアアアアアアアア——！！」

部屋全体を振動させるような強烈な咆哮が発せられた。

ロックマウントの固有魔法？ 威圧の咆哮だ。魔力を乗せた咆哮は一時的に相手を麻痺させる。

硬直する光輝達を無視してロックマウントは香織達がいる場所に岩を投げた。と思いきや、その岩もロックマウント。両腕をいっぱい広げて香織達へ迫る。

「？縛光刃」

するとそこへロックマウントの上空から光の十字架——光属性捕縛魔法？ 縛光刃が降り注がれてロックマウントは地面に縫い付けられる。

「浩二！ よくやった！」

ロックマウントの動きを封じた浩二を褒めてトドメをさすメルドだが、ここでキレル若者が一人。

「貴様……………よくも香織達を……………許さない！」

怒りを露にする光輝は純白の魔力が噴き上がり、それに呼応するように聖剣が輝き出す。

「万翔羽ばたき、天へと至れ、？天翔閃！」

完全なるオーバーキル。ロックマウントどころかその後ろにある破壊し尽くした。

当然メルドの拳骨が炸裂。説教を受ける勇者様いた。

その時、ふと香織が崩れた壁の方に視線を向けた。

「……………あれ、何かな？ キラキラしてる……………」
そこには青白く発光する鉱物——グランツ鉱石が壁から生えていた。

それを香織は見ていると……………。

「だったら俺らで回収しようぜ！」

檜山が唐突に動き出した。崩れた壁を上って檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、トラップが発動した。鉱石を中心に魔法陣が広がって全員別の場所に転移した。

(ここが六十五階層……………運命の分かれ道……………)

転移した先は巨大な橋の上。南雲ハジメにとつての運命の分かれ道だ。

そしてこの階層には当然、奴がいる。

剣を携えた骨格だけの魔物トラウムソルジャー。そしてそれ以上に恐ろしい魔物が姿を現す。体長十メートル級の四足で頭部に兜のような物を取り付けた魔物。

その名は……………。

「まさか……………ベヒモス……………なのか……………」

脇役05

——?ベヒモス”

それはかつて?最強”と言わしめた冒険者をして齒が立たなかつた六十五階層の魔物。いくらチートである光輝達でも今は決して敵わない相手にメルドは即座に撤退を宣言した。

だが、数百体を超えるガイコツ戦士、トラウムソルジャーが逃げ道を塞いでいる。

前門ベヒモス、後門トラウムソルジャー。

二つの魔物に挟まれてしまったクラスメイトと騎士団達は端的に言つて絶体絶命の状況に立たされている。

迫りくるベヒモスにハイリヒ最高戦力の騎士達が生徒達を守る。

だが、撤退中のクラスメイト達は突然の事に半ばパニック状態。目前に迫る恐怖にがむしゃらに階段を進もうとしていく。

そのなかクラスメイトの谷口鈴にトラウムソルジャーの剣が振り下ろされる。

「鈴?!」

それに気付いた中村恵理が声をあげるも少し遅い。

トラウムソルジャーの剣が鈴を両断しようとその凶刃を振り下ろす。

「大丈夫か? 鈴?」

だが、その凶刃を受け止めた者がいる。

「こ、浩二くん……………」

それを止めたのは天職は?医療師”の後方支援の役割を持っている平野浩二は両腕を漆黒に染め上げた腕で凶刃を受け止めていたのであった。

「そ、その腕……………いつから武装色の〇気を……………」

「結構余裕があるな、お前……………」

こんな時までネタに走る鈴に若干呆れるように息を漏らしつつ元の世界で身に付けた八重樫流体術でトラウムソルジャーを地面に叩きつけてその剣を拾う。

「言っておくけど俺は海賊の世界にまで転移した覚えはねえよ。この腕は体内にある炭素の結合度を変化させて表皮に集中させることでダイヤモンド並みに硬化しているだけだ」

「にやるほど、浩二くんはホムンクルスだったと」

「お前もホムンクルスにしてやろうか？ まあ、今はおふざけは置いておいて鈴、結界を張って防御に専念しろ。突破口が開くまで防御に専念しておけば助かる可能性が高い」

「りよ、了解！ でも浩二くんは……………」

「他の奴等を出来る限り助ける。天職？ 医療師」にかけて誰も死なせはしない」

そう告げて浩二は元の世界で身に付けた八重樫流の技を披露する。

例え後方支援の天職でも戦闘の技能がなくても幼い頃から身体に叩き込んだ技術と経験はこの世界でも通用できる。

「？ 回天」？ 縛煌鎖」

トラウムソルジャーを退けながら怪我をしたクラスメイトを治療させ、トラウムソルジャーの動きを封じる浩二は舌打ちする。

（クソ！ 今の俺じゃこれが精一杯だ！ 突破口を開けるだけの力もなければこの状況を打破できる方法もない！ 本当に脇役だよ、俺は！）

いくらこうなることが原作知識でわかっていたとしても、それに備えていたとしても震える身体を誤魔化して一人でも多くのクラスメイトを助けようとするので精一杯。

己の力の無さに痛感していると背後から奇襲してきたトラウムソルジャーの一撃を許してしまった。

「ぐっ！ …？ 自己改造」！

斬られた箇所には灰色の己の魔力を循環させて傷口を修復、いや、細胞分裂を活性化させて無理矢理治した。

（やべえ！ 流石に数が……………ッ！）

クラスメイトを助けながらトラウムソルジャーの相手をするのは浩二には荷が重すぎる。このままでは浩二の方が先に倒れてしまう。

（奥の手はあるが……………こいつらには効果が薄そうだな）

見た目は完全にガイコツ。こいつらに薬も毒も通用するかわからない。

襲いかかるトラウムソルジャー。そこに希望の一閃が放たれる。

「全てを斬り裂く至上の一閃、？絶断！」

魔法によって自身の魔力色である瑠璃色を纏い切れ味を増した雫のアーティファクトの剣が浩二を襲うトラウムソルジャーを一刀両断した。

「雫……………」

「皆を守ってくれてありがとう、浩二。後は私達に任せて」

颯爽と現れたのは天職？剣士”を持つ八重樫雫。そして続けて光輝と龍太郎も参戦してトラウムソルジャーを倒していく。

「？天翔閃！」

「オラッ！」

光輝達の参戦にクラスメイト達は沈んでいた気持ち達が復活して訓練通りの連携を取り始めて反撃の狼煙が上がった。

チートであるクラスメイト達は強力な魔法と武技の波状攻撃に凄まじい速度で殲滅していく。そして階段への道が開ける。

「皆… 続け！… 階段前を確保するぞ！」

光輝が掛け声と同時に走り出す。

続けてクラスメイト達も包囲網を突破した。後はベヒモスを抑えている南雲ハジメだけ。

そうして後衛組は遠距離魔法準備。それによる一斉攻撃でハジメが逃げる為の足止めを行おうとする。

そしてハジメが猛然と逃げ出した五秒後にあらゆる属性の攻撃魔法が殺到した。

ハジメのすぐ頭上に致死性の魔法が次々と通っていくなか、それは起きた。

空を駆ける数多の魔法の中で、一つの火球が軌道を曲げてハジメに突き刺さり、ベヒモスの前に吹き飛ばされてしまう。

そして……………」

ハジメはベヒモスと共に奈落に落ちた。

(ごめん、南雲……………)

こうなることはわかっていた。恐らくではあるが魔法を放った檜山を止めることもできた。それでもこの世界の命運の為に浩二はハジメを見殺しにした。

必要なことだと、世界の為だと、死ぬ訳じゃない、と頭の中で散々言い訳が思いつくが少なくとも浩二はこうなることを選んだ時点でハジメを見殺しにしたと同然だ。檜山のことをどうこう言えることはできない。

(どうか生きていてくれ、南雲)

後はもう祈るしかない。

そしてもし原作通りに再会することができたら謝ろう、と浩二はそう決めた。

「離して！ 南雲くんの所に行かないと！ 約束したのに！ 私があ、私が守るって！ 離してえ！」

飛び出そうとする香織を光輝と雫が必死に羽交い締めする。

「香織っ、ダメよ！ 香織！」

「香織！ 君まで死ぬ気か！ 南雲はもう無理だ！ 落ち着くんだ！」

このままじゃ体が壊れてしまう！」

「無理って何!? 南雲くんは死んでいない！ 行かないと、きつと助けを求めてる！」

ハジメを助けに行こうとする香織に浩二が近づいて香織の頭に手を置く。

「？侵入」

灰色の魔力が浩二の手に出た瞬間、香織は糸が切れた人形のように動かなくなつた。

「浩二！ 香織に何をしたんだ!?!」

「眠らせただけだ。三日あれば目を覚ます。それよりも速く離脱するぞ。このままじゃ他の皆にまで危険を晒すことになる」

淡々と言いながら香織を背負う。それがまるで自分が犯した罪の重さでも背負っているかのように重たかった。

「浩二……………クラスメイトが死んだのにどうしてあんなに平然と

「していただけるんだ？」

まるで作業をするかのように淡々と傷ついたクラスメイト達を治療する姿に光輝は思わずそう口にしてしまう。

「光輝。本当にそう思っているのなら浩二に謝りなさい。誰よりも命の重さを知っている浩二が平気なわけないでしょう？ でも今は無理をしても平静にしておかないと皆の心にダメージが残ってしまう。だからああして無理にでもいつも通りにしているのよ」

雫の言葉に黙り込んでしまう光輝。

「それよりも今は浩二の言っていた通りに速くここから脱出しましょう」

「そうだな。早く出よう」

そうして光輝達は撤退し、全員が無事に地上に戻ることに成功した。

迷宮で死闘と喪失を味わった日から三日が経過している。

浩二達は既に王国へ戻って迷宮でのトラップと南雲ハジメの死について国王とイシュタルに報告。初めての死という現実を目前にしたクラスメイトの大半は自室に引き籠もった。

この世界では死は隣りあわせ。漫画のようなご都合主義など一切ないことによく気がついた。

それでも光輝や龍太郎。少数のクラスメイトはそれを受け入れてより一層に訓練に励んでいる。

そんななか、浩二は雫と共に香織が目覚めるのを待っていると香織の睨が開いた。

「香織ー」

ベッドに身を乗り出し、目の端に涙を浮かべながら香織を見下ろす雫。香織はしばらく焦点の合わない瞳で周囲を見渡してから親友の名前を呼んだ。

「……………雫ちゃん？」

「ええ、そうよ。私よ。香織、体はどう？ 違和感はない？」

「う、うん。平気だよ。ちょっと怠いけど……………寝ていたからだろうし……………」

「そうね、三日も眠っていたのだもの……………怠くもなるわ」

「三日？ そんなに……………どうして……………私、確か迷宮に行つて……………それで……………」

「そこでようやく香織は思い出した。」

「それで……………あ…………………………南雲くんは？」

「ッ……………それは」

「雫。いい。俺が話す」

苦しいな表情でどう伝えるべきか悩む雫の代わりに浩二が代わって口を開いた。

「浩二くん？」

「香織。南雲はここにはいない。あの時、ベヒモスと共に奈落に落ちた」

一切誤魔化すことなくありのままに現実を伝えた。

「……………嘘だよ、ね。そうでしょ？ 雫ちゃん。私が気絶した後、南雲くんも助かったんだよね？ ね、ね？ そうでしょ？

ここ、お城の部屋だよ？ 皆で帰つて来たんだよね？ 南雲くんは

……………訓練かな？ 訓練所にいるよね？ うん……………私、ちよつと行つてくるね。南雲くんにお礼言わなきゃ……………だから、放して？ 雫ちゃん」

現実逃避するように次々と言葉を零しハジメを捜しに行こうとする香織の腕を雫は掴んで放そうとしない。

そんな香織に浩二はもう一度言う。

「香織。南雲はここにはいない」

「やめて……………」

「お前が見て、聞いた記憶通り」

「やめてよ……………」

「南雲は奈落に落ちた」

「いや、やめてよ……………やめてったら！」

「それが現実だ」

その時、浩二の顔に枕が直撃する。投げたのは言わなくても香織だ。

「ちがう！ 死んでなんかいない！ 絶対、そんなことない！ どうして、そんな酷いこと言うの！ いくら浩二くんでも許さないよ！」
「ああ、許さなくていい。だが聞け。南雲は」

「いや！ 聞きたくない！ それ以上言わないで!!」

イヤイヤと首を振りながら、何とか雫の拘束から逃れようとする香織。雫は絶対放してなるものかとキツく抱き締める。

「放して！ 放してよお！ 南雲くんを捜しに行かなきゃ！ お願いだからあ……………絶対、生きているんだからあ……………放してよお」

いつしか香織は？放して”と叫びながら雫の胸に顔を埋めて泣きじやくつていた。

縋りつくようにしがみつき、喉を哽らさんばかり大声を上げて泣く。雫は、唯々ひたすらに己の親友を抱きしめ続けて浩二は黙ってそれを見守っている。

次第に落ち着きを取り戻した香織に浩二は再び口を開いた。

「南雲は落ちた。だが死んだとは言い切れない。まだ誰も死体を確認したわけじゃないからな」

「うん……………」

「だが、今の俺達にはそれを確かめに行くだけの力はない。わかるか？」

「うん……………」

一つ一つ確かめるようにゆつくりと現状を伝えていく。

「なら俺達はどうすればいいのか、わかるよな？」

その問いに香織は力強く頷く。

「強くなる……………それであんな状況でも今度守れるくらい強く
なって、自分の目で確かめる。南雲くんのことを。だから浩二くん」
「なんだ？」

「私に医学を教えてください」

香織は今よりも強くなる為と同じ後方支援の天職で医学に長けて

いる幼馴染に頼む。

「ああ、いいぞ」

それを聞いた浩二はすぐにそれに応じた。

「俺も確かめたいからな。南雲の捜索に俺も雫も協力する」

「ええ、香織が納得するまでとことん付き合うって浩二と話し合ったからね」

「雫ちゃんー！」

香織は雫に抱きつき何度も礼を言う。

ちよつと百合百合しい光景に苦笑しながら親が子を見守るような優しい目で見守る香織に浩二はある提案をする。

「二人共。これを見てみる」

渡したのは浩二のステータスプレート。怪訝しながらそれを見る二人は目を見開いた。

「本来魔物しか持たない魔力の直接操作。俺は？改造”の技能を使つて？魔力操作”の技能を獲得した。それによって俺は詠唱も魔法陣も必要ない。無詠唱で魔法を発動することができる。そしてこれは迷宮を攻略するのなら必要な技能だと俺は思ってる」

「でもこれって……………」

「そうだ、雫。これは魔物と同然の力だ。下手にその技能を持つていることが教会にでも知られたら俺は魔物か魔族、もしくは異端認定される可能性がある」

だからこそその？提案”なのだ。

「選べ、香織。リスクを承知でその技能を獲得するか。地道に努力して強くなつていくかを。ちなみに俺は後者を勧める。流石の俺も幼馴染を改造するのは気が引ける」

選択権は香織にある。

どちらを選んでも後悔しない選択を選ばせる浩二だが、香織の答えは既に決まっている。

「浩二くん、お願い。私を改造して」

「香織……………」

「少しでも強くないといけないから。その為のリスクなら私は背

「負うよ」

力強く輝くその瞳に浩二は深い溜息を吐いた。

こうなった香織はテコでも動かないことを知っているからだ。

「わかった。香織の覚悟、確かに受け取った。ならさっそくだが、着ているものを全部脱げ」

「え？」

脇役06

「ちよつとどういふことよ!？」

部屋に顔を真っ赤にした雫の怒声が響き渡る。

その原因は香織に？着ているものを全部脱げ”と言った浩二の発言のせいだ。だが、浩二は真面目に言う。

「自分の身体のことをよく知っている自分自身ならいいが、他者の身体を改造するには直接肌に触れる必要がある。簡単に言えば手術と同じだ」

「で、でも、裸になるなんて……………私、初めては南雲くんって決めて……………」

ちよつと危ない発言をする香織だが、浩二は構わずに続ける。

「手順はこうだ。まず俺の技能？侵入”で俺の魔力を香織に流し込み、？魔力循環”で全身を巡らせる。そこで？改造”の技能で香織の身体を改造する」

「そ、それなら別に服を着たままでもできるでしょう?」

「確かに可能だ。だが、身体を改造させるんだぞ? 精密性も問われる。万が一にどこか不調があれば香織にどんな副作用が及ぶのかわからない。だから裸になつてくれた方が確実なんだ」

「そ、それはそうかもしれないけど……………」

雫が何が言いたいのか。それが分からない浩二ではない。

幼馴染とはいえ、同年代それも異性に親友の裸を見られるだけではなく触られるのだから反論しないわけにはいかない。

「安心しろ。やましいことは一切しないと医者 of 矜持に賭けて誓う。それでも信じられないのなら雫が傍で俺を監視していればいい」

「別に浩二を信用していないわけじゃないわよ……………」

香織も雫も浩二が変なことをするつもりはないのは重々理解しているし、信用もしている。

ただ年頃の女の子として当然の反応をしているだけだ。

「香織。リスクを背負う覚悟ができたんだろ?」

「!？」

「なら、お前が決める。ここで止めたって俺は別に構わない」

どうしてもというのなら浩二も無理強いはしない。素直に止める。だけど香織は。

「わかったよ。浩二さんに私の全てを預けるね」

「香織!?!」

決意を固めたように香織は身に付けているものを脱ぎ始める。

「いいの、雫ちゃん。これは私が決めたことだから」

「香織……………」

親友の覚悟に雫はただ啞然とするなか、香織は身に付けているものを全て脱ぎ去って横になる。

「雫。誰も入ってこない様に見張っててくれ。邪魔でもされたら大変だからな」

香織も浩二もどちらも真剣な顔。そこに割って入る余地など雫にはなかった為に雫は浩二の言われた通りに部屋の外で誰も入ってこない様に見張りにつく。

「行くぞ、香織」

「うん」

「?侵入」

改造手術が始まった。

改造手術から一時間後。

無事に改造手術が終えた浩二は紅茶モドキを飲んで一息ついた頃、雫は部屋に入ってきた。

「香織は大丈夫なの?」

穏やかな表情で眠りに付いている香織。その口元には涎が垂れて「ハジメくん……………」と寝言を言っている。どんな夢を見ているのだろうか?!

「ああ、無事に終わった。何度も確認したが何の後遺症も副作用もなく無事に?魔力操作」の技能を獲得した」

「そう、よかった……………」

安堵の息を漏らしながら寝ている親友の頬に手を添えるその姿はまさに子供を見るオカンそのもの。

姉妹のように仲がいいが、実際は親子のようだ。

そして香織を改造したことで浩二にも新しい技能が追加されていた。

平野浩二 17歳 レベル：14

天職：医療師

筋力：160

体力：178

耐性：200

敏捷：135

魔力：230

魔耐：220

技能：医学「＋診察」「＋肉体構造把握」・調合「＋薬毒鑑定」「＋高速調合」「＋効果上昇」・侵入「＋範囲増加」・改造「＋解剖」「＋最適化」「＋自己改造」「＋構造化」・投擲・魔力操作「＋魔力循環」・回復魔法・光属性適正・闇属性適正・高速魔力回復・言語理解

他者を改造したことで新しい派生技能を獲得した。

香織も新しい技能を獲得し、浩二も新しい技能が獲得で来てどちらもいい結果になった。

するとそこへ雫が。

「ねえ、浩二って香織のことが好きなの？」

「ブツ！」

突拍子もないその発言も思わず紅茶を吹き出してしまった。

「な、なんで……………」

「だっていくら幼馴染とはいえ、香織の為にここまでするなんて、それって香織に？特別な感情を持っているからじゃないの？」

雫の言い分も確かだ。

いくら家族同然に育った幼馴染同士とはいえ、ここまで香織の為に

するのだからそういう感情を持っていても不思議ではない。

だがそれは浩二にとっては否定しなければいけない案件だ。

「そんなわけないだろう！ だいたい俺は——」

そこで慌てて口を閉ざす。

「俺は、なに？」

「別に。なんでもない……………」

そっぽを向きながら誤魔化す浩二は内心心臓がバクバクだ。

（あ、危ねえ〜こんなところで雫が好きだって言うところだった……………）

危うく自身の恋心を想い人に告げてしまうところだった浩二。

もちろんそれが分不相応だということは重々承知している。けど、それで諦めることが出来るのならとつくに諦めてる。

それでも諦めきれないから今でもずっと浩二は雫のことが好きなのだ。

そしてどうして浩二がそこまで香織の為にするかというところ……………。

（好きな人の為に頑張りたい気持ちはよくわかるから……………）

他の誰でもない浩二自身がそうだからだ。

雫の為ならどんな努力も厭わない。例えばそれが叶わぬ恋に終わってしまったとしてもそれでも諦めたくない。

だからこそ浩二は強くなりたい香織の背中を押ししたのだ。

「……………？ まあいいわ。少なからず浩二にも好きな人がいるってわかったから」

それが自分だと気付かずにそう返す雫に浩二は思わず訊く。

「……………なあ、雫。もし、もしだぞ？ 俺に好きな人がいて、自分の想いをその好きな人に告げたとする。そしたらその人はどう思うかな？」

思い切ってそう言ってみた。

好意を寄せている人本人に。すると雫は。

「そうね。その人が羨ましいわね」

「え？」

それは浩二にとって全く予想外な言葉だった。

「羨ましいってなんでだ？ 俺は光輝のように才能にも容姿にも恵まれていない。勉強もスポーツも光輝より断然下だ。脇役に惚れるようなヒロインがいるかよ」

そう、自分は脇役だ。

迷宮での死闘でそれが更に自覚してしまった浩二は八つ当たり気味にそう言ってしまった。けれど雫はそんな浩二の頭にチョップを入れる。

「お馬鹿。誰も浩二のことを脇役なんて思っていないわよ。それに浩二は知らないかもしれないけどね、学校でも結構女子から人気があったのよ？」

「はあ？ 俺が？」

とても信じられない顔をする浩二に雫は頷いた。

「ええ。確かに光輝の方がそりやモテるでしょうけど、少なからず貴方に好意を寄せている女子もいるのよ？」

「でも、告白なんてされたことないぞ？ 雫、無理して励まさなくても」

「事実よ。告白されなかったのは……まあ、光輝が原因でしょうね。ほら、よくあったでしょ？ 貴方を通して光輝に告白しようとする女子。だから自分もその一人になって迷惑をかけるかもって思ったのでしょうね」

それには浩二も覚えがある。

よく女子からラブレターと思われる手紙を差し出されて「これを光輝さんに渡して！」と言ってくる女子がけっこういた。

「でも、俺のどこに………？」

それでも浩二は信じられない。いったい自分のどこに魅力を感じたのか。

「浩二に好意を持っている女子はたいていは貴方に助けられて励まされた子ばかりよ。傷や怪我をしている人がいたら浩二は相手が誰だろうがすぐに駆け付けるでしょ？ それがたいした怪我じゃなくてもちやんと治療して『もう大丈夫』や『跡が残ったら大変だもん』と

かそういう相手を心配してくれたり、一生懸命に治してくれる浩二に感謝して好意を抱いているのよ」

「いや、それは医者の子供として当然のことです……………」

「貴方にとって当然のことでもそう思わない女子もいるってことよ」
知らなかった。

浩二にとってそれは当然のこと。感謝されるいわれなどない当たり前のことをしたに過ぎない。だから脇役である自分に好意を寄せられている女子がいるなんて知らなかった。

「けど、それがどうして雫は羨ましいんだ？」

浩二にとってはむしろそっちの方が気になっていた。

「？当然のように大切にしてくれる」。だから羨ましいの。きっと浩二と付き合う人がいたらその人はきっと幸せになるって断言できるわ」

その一言に浩二は思わず嬉しくなり、胸いっぱい幸せに包まれた。

それは雫の本心ではなくあくまで？幼馴染”として向けられた言葉だったとしても、それでも惚れた女が自分の事をそういう風に思っていてくれたことに心底嬉しかった。

「さて、香織の無事も確認できたことだし、私は光輝達に香織のことについて言ってくるわ」

「……………ああ」

雫は香織が目覚めたことを他の幼馴染達に告げに部屋を出て行く。

浩二は変えられないにやけ顔で顔をあげる。

すると、香織と目が合った。

「……………」

互いに目を合わせたまま無言の静寂が場を支配する。当然浩二はにやけ顔のまま顔中に冷汗を流す。すると。

「浩二くんって雫ちゃんのが好きなんだね」

聖女を思わせるような優しい眼差しで告げられたその一言が浩二にクリティカルヒット。幼い頃から秘めていた想いが知られてしまった。

「い、いつから、起きて……………いましてのでござるか?」

動揺のあまり変な口調で尋ねる浩二に香織は「んーとね」と言いながら。

「浩二くんが私のことが好きって雫ちゃんが言っていた辺りかな?」

「ほぼ最初っからじゃねえか!?!」

本人はもちろん他の誰にも知られない様に隠していた雫に対する恋心。それが遂に知られてしまった浩二は穴があつたら頭からダイブしたい気分だ。

「ああああああああああ……………終わつた、なに
もかも……………いっそのこと殺せ……………」

「そ、そこまで落ち込まなくても誰にも言つたりしないよ?」

四つん這いになつて暗黒を背負う浩二に香織は必死に励ますも。

「でも、どうして雫ちゃんなのかな? ううん、ダメつてわけじゃないし、浩二くんなら雫ちゃんと一緒になつてくれたら私は嬉しいよ?」

励ますもそこは親友として気になつてしまう。

浩二も秘めていた想いが知られたことに観念して香織に言う。

「……………別に一目惚れしたとか最初っから雫のことが好きつてわけじゃなかった。むしろ雫に近づいたのは同情に近かつた」

「同情? 雫ちゃんに?」

「香織は知らないかもしれないけどな、雫は昔、女子から虐めを受けていたんだよ」

「え?」

「原因は雫の道場に入門した光輝だ。ほら、光輝はモテるだろ? だからいつも光輝の近くにいる雫が気に入らなかつたんだよ。それで虐めだ」

「雫ちゃんにそんなことが……………でもそれなら光輝くんが」

「どうにかするつてか? あいつがそんなこと信じるわけないだろ?」

雫がどんなに頼つても光輝が雫に与えたのはやつかみだけだ。正直、小学校の時に香織がいなかつたら雫の心は折れていたと思う」

浩二は光輝のことを幼馴染として信用も信頼もしてはいるが、頼ろうと思つたことは無い。どうなるかわかつているからだ。

「香織と出会うまで雫は一人だったんだよ。だから同情して雫に声をかけたのがきっかけだ」

（まあ、原作で知っていたとはいえ、あれは放っておくことができなかったしな）

実際にその時の雫を見て流石に放ってはおけない思った浩二は雫に近づいて声をかけた。通う道場の門下生としてという気持ちが大きかっただろう。

「でも、雫と一緒にいて気がついたら俺は雫に惚れていた。もう白状するとベタ惚れだ。何度諦めようと思っても諦めきれず、女々しくも今でも俺は雫に惚れてる」

「ほあ〜」

白状したその想いに香織は思わず嬉しく思った。

親友をそこまで想ってくれる人がいたら嬉しくないわけがない。それが信用できる幼馴染なら尚更だ。

すると香織は浩二の手を取って。

「浩二くん！ お互い頑張ろうね！」

満面の笑みでそう言うのであった。

互いの想いを成就させる為に香織は全力で浩二の恋を応援することにした。これまで雫と共に応援され、励まされ、相談に乗ってくれた浩二にこれからは自分もそうしようと思つたと香織はそう決めた。

「元の世界に戻ったらダブルデートしよう！ 私と南雲くんと浩二くんと雫ちゃんまで！」

「はいはい……………」

目前で嬉しそうにはしゃぐ幼馴染に肩を竦める。

脇役07

幼馴染である香織に雫に対する恋心がバレて応援してくれることになった香織はハジメを助ける為に死に物狂いで強くなろうと努力している。

基礎体力の訓練はもちろん、魔法に対する訓練や浩二から医学についても教わっている。

周囲が止めたくなくなるほど訓練に打ち込んでいる香織は以前のようなほんわかした雰囲気なくなり、大人っぽい雰囲気を醸し出している。

やり過ぎない様に浩二と雫で気を遣いながら全力で香織の背中を押している。

そして浩二はというと……………。

「ギィイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

「ふむ。やっぱり魔物の構造は魔石を除いたら動物に似ているな。発達具合やそれ以外にも微妙に異なる点もあるけど概ねは同じか」

捕獲してきた魔物を解剖している。

ハイリヒ王国直属の錬成師達に頼んで錬成して貰ったメスや鋏などを使って現在魔物の研究に没頭している。

今回は生きたまま魔物を解体して内臓や血管、それに骨髄など他の魔物とどう違うのか、それと反応がどれほどなのかと思っただ事を記録していく。

誰もが頬を引きつかせて思わず距離を取ってしまうような光景のなか、一人だけ満足そうに微笑むマッドサイエンティスト。

「だけど、魔物によって魔石の大きさが違う。個体差によって変化するのか？ それとも食生活？ いや、魔石には魔力が蓄えてあるからもしかして動物の体内で結晶化したものが魔石になるのか？ そしてそれが魔物に変化する。ふむ、これを仮説として今度は動物を捕まえて体内に魔石を埋め込んでみるか」

次の研究課題を決めて浩二は時間を確認すると、服を着替えて研究室を出る。

天職？医療師”である浩二はやることが多い。

まず南雲ハジメの死をきつかけに？戦いの果ての死”というものを強く実感してしまったクラスメイト達はまともな戦闘ができなくなった者が多い。しかし聖教会側はそれでは困るかのように戦闘への復帰を促すもそれも猛然と抗議したのが畑山愛子だ。

戦えない生徒をこれ以上戦場に送り出すことを断じて許せなかった愛子の抗議を受け入れた。天職？作農師”の激レアな天職を持つ愛子との関係を悪化させない為だ。

故に自ら戦闘訓練に望んだ者のみ訓練を継続させる形となった。だが、聖教会側がいい顔をしていないのは事実。そこで聖教会は天職？医療師”である平野浩二に目を付けた。

どうか戦争に参加できるように彼等を治療して欲しいと強欲にもそう懇願してきた。

それに浩二は条件付きで応じた。

一つ、精神疾患の患者の治療には時間がかかる。薬は処方するが最終的に判断するのは本人達だ。だから余計な負担を与えない為にも戦場に赴く催促は厳禁。

二つ、研究室とこちらが望む研究道具や機材、材料を無償で提供する。必要なら望む薬も調合する。

三つ、俺達の邪魔をするな。

その三つを聖教会側に突き付けた浩二に聖教会側は顔を僅かに顰めるも、その条件を呑んだ。それも実際に浩二の？医療師”としての調合や日本で身に付けた医学なども相まってトータスの医術を発展させたからだ。

浩二が調合した薬を国や聖教会に提供しているので、聖教会側もその薬が断たれるのを恐れた。

「園部」

「平野くん……………」

浩二はトラウマを負っているクラスメイトの園部優花は手渡される薬を無言で受け取る。

「玉井達の方もいるから後で渡しておいてくれ。あ、毎度言うが不安

だからって一度に大量の飲むなよ？ もし飲んだら無理矢理にでも吐けよ？」

注意事項だけ告げて踵を返す浩二は零達がいる訓練場に向かおうと足を動かす。

「どうして、戦えるの……………？ 死ぬのが怖くないの……………？」

——が、背後から聞こえた怯えの混ざった声にその足を止める。

「園部は怖いのか？」

「当り前じゃない。だって、死んだら終わりなのよ？ 私、？彼」が死んで、怖くて、わけわかんなくて、頭の中ぐちゃぐちゃで……………もうどうしたらいいのかわからないよ」

心が折れた優花は声を震わせながら本心を口にする。すると浩二は言った。

「俺だって死ぬのは怖い。死にたくなんかない」

「……………え？」

それは優花にとって意外な答えだった。

六十五階層で誰もがパニック状態になった混戦の中で浩二は一人でも多くを救おうと戦っていたのを優花は見ていた。だからこそその答えが意外なものだった。

「それでも俺は戦う。例え非戦闘職だったとしても、戦いの才能がなくとも、俺は戦場に行く」

「どうして……………？」

優花はまるで答えを求めるときのように問いかけた。

「俺の天職が？ 医療師」だからだ。そして俺自身、医者でもある。だから一人でも多くの人を治す為に、助ける為に俺は戦場に赴く。誰も死なせない為に」

「……………強いなだね。私には無理。」

私にはそんな勇氣はないから」

強き意思の宿るその言葉に優花は俯く。だが。

「園部。それは違う。俺は強くもないし、勇氣だってない。むしろ自分が惨めに思えるぐらいに弱いし、戦場に足を運べば怖くて足が震えるほどだ。俺は光輝のような主人公じゃなくて脇役だ、脇役。いつ死

んでもおかしくはない」

「なら、どうして……………」

脇役なのにどうして戦えるのか？ 浩二は答える。

「俺には戦いで死ぬことよりも怖いことがある。自分の命を賭するに値するものが俺にはある。それが俺の戦場に赴き、戦う理由だ」

「戦う、理由……………」

「人間は強くはない。だからこそ？理由」がいる。それがあからそこそ俺は戦える。園部、お前にはないのか？ 守りたいものとか、失いたくない人とか」

「私は……………」

「？理由」はなんだっていい。一度ゆっくりと思いついたらいい。例えばそれで理由がなくても、戦いたくなくてもいい。俺がいる限り、患者であるお前達には誰にも手を出させないからな」

そう告げて浩二は再び足を動かすと、背後から小さい声で「……………」ありがとう」と聞こえた気がした。

「さて、次に行くか」

動き出す浩二は光輝達がいる訓練場に足を運び、戦闘訓練を行う。

「ハッ！」

「と！」

雫の鋭い一閃。浩二は辛うじて防ぐ。

「腕を上げたわね……………」

「教官がいいものでね」

互いに笑みを浮かべながら鏢迫り合いになる。だがここで手を緩める雫ではない。より過激により鋭く、より速くするのが雫だ。要は雫はスパルタだ。

「あああああつ！」

気合の一声。放たれるのは抜刀術による高速の逆風——八重樫流刀術の一つ？登龍”。行使者は雫だ。だが、同じ道場の門下生として何度も見てきた浩二は抜刀術を防ぎ、更には跳躍してからの空中回し蹴りと鞘による横薙の二連撃を躲してみせる。

「何度も喰らってたまるか！」

流石の浩二もこれまでに何十回も受けてきた攻撃に学習している。もちろんその技の弱点も熟知している。跳躍したことによって空中にいる今の雫には避ける術はない。

(着地時点で決めるー)

雫が足を地面につける前に一撃を与えようとするが……………。

「甘いー」

「え？ うげ!？」

だが雫はそれを読んでいた。

空中でそのまま一回転して着地するタイミングをずらして浩二の脳天に木刀を叩きつける。

無様に地面に倒れる浩二に華麗に着地する雫。

どちらが敗者でどちらが勝者なのか一目瞭然。二人の模擬戦を見ていた一部は雫に拍手を送った。

「くそ、今日こそはと思ったのに……………」

頭を擦りながら起き上がる浩二に雫は手を差し出す。

「そう簡単に負けてあげないわよ。ほら、次は香織と魔法の訓練をするのでしよう。気張りなさい」

「はいはい……………」

差し出された雫の手を取って立ち上がる浩二は悔し気に「クソ、次こそは……………」とぼやきながら香織の元へ向かう。

「香織。どうだ？」

「浩二くん。うん、まだイメージは掴めていないけどいい感じかな」

浩二の手によって肉体を改造した結果、?魔力操作?の技能を獲得した香織は詠唱を唱えるフリをしながら実質無詠唱で魔法を扱っている。

「もうすぐ【オルクス大迷宮】に再度挑むからな。それまでには完成しておかないとな」

「うん、私はやるよ。南雲くんが待っているから」

強い意思と明確なまでの戦う?理由?を持つ香織は疲弊を滲ませながらも訓練に励む。

(香織は強いなあ……………)

そう思いながらも自身も魔法訓練を始める浩二の横顔を香織はチラリと見る。

(浩二くんは凄いなあ……………)

？ 治癒師”である香織には？ 調合”の技能はない。そして浩二のように剣も体術も使えない為に魔法の訓練に集中することができるが、浩二は現在進行形で行っている魔法訓練の他にも薬の調合や前衛である雫達の稽古相手や香織に医学を教えたりしている。そしてそれ以外にも多くの事をこなしている。

休む暇もないぐらいにせわしい浩二。それも全ては雫の為。惚れた女の為に頑張っていることを香織は知っている。

もちろん医者としての本分や矜持もあるのだろうけど、香織は雫に對する想いの方が強いのだと思っている。

(頑張ってるね、浩二くん。私は応援するよ！)

親友に恋した幼馴染を応援する香織はより一層に訓練に精を出す。

結果、倒れるまで訓練してしまった香織は雫に小一時間、説教を受けて浩二に苦笑されながら薬を渡されるのであった。

脇役08

光輝達勇者一行は、再び「オルクス大迷宮」にやって来ていた。自ら戦闘訓練を望んだ光輝達はもう一度訓練を兼ねて「オルクス大迷宮」に挑むことになった。今回もメルド団長と数人の騎士団員が付き添って、今日で迷宮攻略六日目。

現在六十階層。確認されている最高到達階層まで後五階層である。しかし、光輝達は現在、立ち往生していた。目の前には何時かのものとは異なるが断崖絶壁が広がっていて、それが何時かの悪夢を思い出して思わず立ち止まってしまったのだ。

次の階層に進むのは崖にかかった吊り橋を進まなければならない。それ自体は簡単でもどうしても思い出してしまう。

特に、香織は、奈落へと続いているかのような崖下の闇をジッと見つめたまま動かなかった。

雫は強い眼差しで眼下を眺めていた香織に一声かけようとするも、浩二はそれを制する。

「香織なら大丈夫だ」

浩二のその一言はすぐに雫も察した。

洞察力に優れ、人の機微に敏感な雫には香織の瞳に強い輝きを放っていることに気づいている。

自らの納得のため前へ進もうとする香織に雫は親友として誇らしい気持ちで一杯だ。

だが、そこで空気を読まないのが勇者クオリティー。

眼下を見つめる香織の姿にハジメの死を思い出し嘆いているように映った。クラスメイトの死に、優しい香織は今も苦しんでいるのだと結論づいた光輝はズレた慰めの言葉をかけてしまう。

「香織……君の優しいところ、俺は好きだ。でも、クラスメイトの死に、何時までも囚われていちゃいけない！ 前へ進むんだ。きつと、南雲もそれを望んでいる！」

「ちよつと、光輝……」

「雫は黙っていてくれ！ たとえ厳しくても、幼馴染である俺が言わ

ないといけないんだ。……………香織、大丈夫だ。俺が傍にいる。俺は死んだりしない。もう誰も死なせはしない。香織を悲しませたりしない約束する」

「ああ……………また始まった……………」

「はあく、何時もの暴走ね……………」

何時もの暴走に深い溜息を溢す苦勞人二人。

完全に口説いているように聞こえる台詞だが光輝は下心も打算もなく真面目に言っている。自分の信じたことを疑わずに貫き通す幼馴染の暴走に香織は何も言わずに光輝に合わせる。

例え光輝に香織の気持ちを伝えたとしてもそれは伝わらない。

良くも悪くも光輝は信じたことを疑わないのだ。

(ちった疑えよ、光輝……………)

それは決して届かない願いなのだろうか？ それとも願うこと自体が傲慢なのか？

それ以前に浩二はそんな光輝の考えを矯正しようとした時期がある。

だが、三日で匙を投げる。

結論として手遅れだと判明。断じて途中から面倒になったからではない。

(まあ、それを除けばいい奴なんだよな……………)

だからこそなんとも言えなくなる。故に苦勞が増して浩二と雫は揃って溜息を溢すのだ。

「香織ちゃん、私、応援しているから、出来ることがあつたら言つてね」「そうだよ、鈴は何時でもカオリンの味方だからね！」

光輝の会話を傍で聞いていて、会話に参加した恵理と鈴。そして浩二は恵理をじつと見る。

(本当、裏切るとは思えない……………。それにこれが猫を被っているなんて女とは恐ろしい)

原作知識として浩二は中村恵理が裏切り者になることを知っている。

光輝を手に入れる為に魔人族側についた恵理だが……………。

(でも、今回はそれがわからないんだよな……………主に俺のせいで……………)

運が良くも悪くも幼少期に浩二は中村恵理と接触してしまった。

中村恵理は五歳の時に父親を亡くし、夫に依存していた母親から暴力と罵詈雑言を耐える日常を送っていた。

父親を死なせてしまったのは自分のせいだと自責と孤独と心の痛みを何年を耐え続け、九歳の時に母親が家に連れて来た男に強姦されそうになった。

幸い、恵理の悲鳴を聞いた近所が通報して貞操を散らすことはなかったが、母親が恵理を愛さないことを理解し、恵理の心は壊れた。そして自殺しようとする際に恵理は出会った光輝に。

そして光輝はいつものように恵理に言った。
——もう一人じゃない。俺が恵理を守つてやる、と。

それに恵理は簡潔に言えば光輝に惚れた。しかし、恵理は勘違いしていたのだ。

光輝にとって恵理は正義のヒーローが助けるべき一人に過ぎなかったということに。

自分が光輝の？特別”ではないということに。

——だが。

(そこで俺がカウンセリング紛いをしたんだよな……………)

恵理のような女子は別段初めてではない。流石に恵理ほどではなくも、光輝のせいで自分が光輝のお姫様だと信じて疑わない女子に浩二はカウンセリング紛いをしていたのだ。

光輝の性格を説明したり、気持ちを落ち着かせたり、時にはぶたれたり幼少の頃から光輝に苦労していた浩二は恵理にもカウンセリング紛いを行っていたのだ。

(それが原作とどう違うのか……………流石にそれは俺もわからん)

投げやりのように聞こえるも浩二は己が使える手は尽くしたつもりだ。後は恵理がどうするか出方を窺うしかない。

「うん、恵理ちゃん、鈴ちゃん、ありがとう」

高校で出来た親友二人に、嬉しげに微笑む香織。

「うう、カオリンは健気だねえ、南雲君め！ 鈴のカオリンをこんなに悲しませて！ 生きてなかったら鈴が殺っちゃうんだからね！」

「す、鈴？ 生きてなかったら、その、こ、殺せないと思うよ？」

「細かいことはいいの！ そうだ、死んだらエリリンの降霊術でカオリンに侍らせちゃえばいいんだよ！」

「す、鈴、デリカシーないよ！ 香織ちゃんは、南雲君は生きているって信じているんだから！それに、私、降霊術は……………」

「ならそこは浩二君！ 確か閨属性の適性あったよね!? エリリンの代わりに南雲君をえいやって！」

「鈴、降霊術はあくまで死者の残留思念に作用する魔法だぞ？ 確かに使えるが、生き返らせるわけじゃない」

恵理と同じ閨系魔法の適性を持つ浩二も降霊術は使える。超高難度魔法ではあるが、浩二はしっかりと使えるように訓練しているのだ。

「それに仮に南雲が死んでいたとしても安心しろ。生き返らせる方法はある」

「おおっ！ それは!？」

「南雲ハジメのクローンを作って代替霊魂と精神を組み合わせてクローン人間として南雲ハジメを蘇らせる。もちろん記憶も人格もそのままで」

「え？ そんなことできるの?？」

「できないと思うか?？」

口角を歪ませて悪魔のような微笑みを見せる浩二に鈴は思わず恵理の背に隠れた。そして思った。

『こ、こいつならやりかねない!』

伊達にマッドサイエンティストと呼ばれている男ではない。気がつけばもう一人の自分に会える日が来るかもしれないと思うと背筋が凍てつく。

(まあ、冗談だけど……………流石にクローン人間なんて作れねえし)

そもそも原作通りでは南雲ハジメは生きている。もちろん原作通り生きているとは限らないので浩二自身もそれを確かめるとい

味でも香織に付き合っているのだ。

そうこうしている内に一行は遂に歴代最高到達階層である六十五階層に辿り着いた。

「気を引き締めろ！　ここのマップは不完全だ。何が起こるかわからんからな！」

メルド団長の声に光輝達は表情を引き締め未知の領域に足を踏み入れた。

そして、奴が現れる。

見覚えのある赤黒い脈動する直径十メートル程の魔法陣。そこから姿を現れるのは死んだと思われていたベヒモスだ。

迷宮の魔物の発生原因は解明されていない。その為、一度倒した魔物と何度も遭遇することは普通にある。そしていざという時の為に退路は確保しておくメルド団長に光輝が言う。

「メルドさん。俺達はもうあの時の俺達じゃありません！　何倍も強くなっただんだ！　もう負けはしない！　必ず勝ってみせます！」

「へっ、その通りだぜ。何時までも負けっぱなしは性に合わねえ。こちらでリベンジマッチだ！」

龍太郎も不敵な笑みを浮かべて呼応する。それにメルド団長はやれやれと肩を竦め、今の光輝達なら大丈夫だろうと同じく不敵な笑みを浮かべる。

「グウガアアア!!」

咆哮を上げ、血を踏み鳴らす異形。ベヒモスが光輝達を壮絶な殺意を宿した眼光で睨む。

そして香織は決然として表情で真っ直ぐベヒモスを睨み返して誰にも聞こえないかのような声で確かな意思の力を宿らせた声で宣言する。

「もう誰も奪わせない。あなたを踏み越えて、私は彼のもとへ行く」
今、過去を乗り越える戦いが始まった。

先手は光輝だった。

「万翔羽ばたき、天へと至れ、？天翔閃！」

曲線状の光の斬撃が、轟音を轟かせながらベヒモスに直撃し、ベヒモスの身体に傷を与えた。

「いける！俺達は確実に強くなってる！永山達は左側から、檜山達は背後を、メルドさん達は右側から！後衛は魔法準備！上級を頼む！」

メルド団長直々の指揮官訓練の成果を発揮する光輝は浩二に指示を出す！

「浩二！可能な限りでいい！奴の動きを阻害してくれ！」

「了解！？墮識！」

光輝の指示で浩二は闇系魔法の一つである？墮識”を発動。相手の意識を数瞬の間だけ飛ばしたりすることができる。

それによりベヒモスは数瞬だけ意識が飛ばされ、その間に包囲網は完成した。

前衛組が、暴れるベヒモスを後衛には行かすまいと必死に防衛戦を張る。

「グルウアアア!!」

だが、ベヒモスは踏み込んで地面を粉碎しながら突進を始めようとした瞬間。

「？邪纏」

その一瞬を許すことなく浩二は脳から身体へ発せられる命令を阻害する魔法？邪纏”を発動させてそれを防いだ。

そしてそれが致命的な隙となって雫とメルド団長が攻める。

「全てを斬り裂く至上の一閃、？絶断！」

「粉碎せよ、破碎せよ、爆破せよ、？豪撃！」

魔法によって切れ味を増した雫の一閃と剣速と腕力を強化した鋭く重い一撃を叩きつける二人の攻撃によってベヒモスの角は一本断ち切られた。

「ガアアアア!?!」

角を切り落とされた衝撃にベヒモスは大暴れし、二人を吹き飛ばす。

「？光臨！」

そこに無詠唱で発動した香織の魔法によって地面に叩きつけられそうになった二人を光の輪が無数に合わさって出来た網が優しく包み込んだ。

形を変化させることで衝撃を殺す光の防御魔法。更には。

「?・回天!!」

即座に中級光系回復魔法で二人の傷を癒した。

「龍太郎!・ 永山!・ これを飲め!」

浩二はドクターコートの下から小瓶を取り出した二人に投擲。正確無比に二人の手元に投げられた小瓶を二人はキャッチして即座に飲み干す。

すると二人の身体から尋常じゃない力が漲る。

「どりゃー!」

「フーン!」

二人はその漲る力を持ってベヒモスの顔面を殴りつけた。

「ガアアア!!」

尋常じゃないその二人の拳にベヒモスの牙は碎け折れて口腔は血だらけになる。

浩二が二人に投げたのは一定時間、ステータスの筋力を三倍する強化薬。天職?拳士”と?重闘士”である二人にはまさに鬼に金棒の強化薬だ。

「?・光爆!!」

聖剣に蓄えられた膨大な魔力が、差し込まれた傷口からベヒモスへと流れ込み、大爆発を起こした。

「ガアアア!!」

傷口を抉られ大量の出血をしながらも、ベヒモスは、技後硬直中の僅かな隙を逃さず鋭い爪を光輝に振るった。

「させるかよ!・ ?・邪纏!!」

だが寸前に?邪纏”で使ってベヒモスの動きを阻害し、光輝は吹き飛ばされることなくベヒモスと距離を取った。

ベヒモスは、奮闘している他のメンバーを咆哮と跳躍による衝撃波で吹き飛ばし、折れた角にもお構いなく赤熱化させていく。

「……………角が折れても出来るのね。あれが来るわよ！」

雫の警告とベヒモスの跳躍は同時だった。

ベヒモスの固有魔法は経験済みなので皆一斉に身構える。しかし、今回のベヒモスの跳躍は予想外だった。

——二人を除いては。

「?縛煌鎖”!!」

無詠唱で発動する浩二と香織。二人の捕縛魔法であるおびただし数の光の鎖はベヒモスの足に絡み付いてその動きを封じた。それによつてベヒモスは中途半端の跳躍しかできず、地面に叩きつけられる。

「フツッ！」

そこで浩二は薬液が仕込まれている投擲ナイフをベヒモスの目に突き刺す。すると、赤熱化していたベヒモスの角が消えていく。

「……………何をしたの?」

「魔力鎮静効果のある静因石を頼んで液体化してそこに俺が独自に配合した薬も加えて即効性を高めた。効果はあつたみたいだな。さて、光輝！」

「ああ! ?限界突破”!!」

一時的に基礎ステータスを三倍に引き上げる?限界突破”を発動した光輝は聖剣を構えてベヒモスに突っ走る。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおツツ!!」

?限界突破”したその一撃でベヒモスを切り裂く。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

確実な致命打を受けたベヒモスの血飛沫が舞い散り、

「下がって！」

そこに後衛代表の恵理の合図と共に前衛組は後退した。そして……………。

「””?炎天”」

術者五人による上級魔法が放たれる。

超高温の炎が球体となり、太陽のように周囲一帯を焼き尽くす。ベ

ヒモスの直上に創られた？炎天”は、一瞬で直径八メートルに膨らみ、直後、ベヒモスへと落下した。

絶大な熱量がベヒモスを襲い、その堅固な外殻を融解していった。「グウルアガアアアアアア!!!」

ベヒモスの断末魔の悲鳴が広間に響き渡る。鼓膜が破れそうなほどのその叫びは少しずつ細くなり、やがて、その叫びすら燃やし尽くされたかのように消えていった。

最後に残ったのはベヒモスのものと思われる残骸だけだった。

「か、勝ったのか？」

「勝ったんだろ……………」

「勝っちゃったよ……………」

「マジか？」

「マジで？」

皆が皆、ポツリポツリと勝利を確認するように呟く。そこに浩二が光輝の肩を叩いて正気に戻させ、光輝は背筋を伸ばし聖剣を頭上へ真っ直ぐ掲げた。

「そうだ！俺達の勝ちだ！」

勝鬨を上げる光輝。その声に、ようやく勝利を実感したのか、一斉に歓声が沸き上がった。

皆の歓声に肩の荷が下りたかのように息を吐く浩二の肩に雫は手を置く。

「お疲れ様。助かったわ」

「そつちもお疲れ。俺の事は気にすんな。俺は後方支援としての仕事をしただけだ」

何気なく言うも恐らくこの戦いで一番貢献したのは浩二と香織だと雫は思っている。

二人がいなければ恐らくはもっと苦戦していたら。

そしてもう一人の功労者である香織はベヒモスのいた場所をボーと眺めている。

「雫。皆の治療は俺がやっておくから香織を頼む」

「ええ、わかったわ」

親友である雫に香織を任せて浩二は怪我をした人達の治療に当たる。

脇役09

過去を乗り越えて見事ベヒモスを打ち倒すことに成功した勇者一行は、一時迷宮攻略を中断してハイリヒ王国王都に戻っていた。

マッピングされていない階層の地道な探索や、魔物の強さの上昇などから疲労が激しく休養を取るという意味もあるが、一番の理由はこれまで音沙汰のなかったヘルシャー帝国から勇者一行へ会談の申込みがなされたのだ。

ヘルシャー帝国とはある名を馳せた傭兵が興した国であり、完全実力主義の国だ。

ハイリヒ王国とは同盟国であっても、突然現れ、人間族を率いる勇者と言われても納得はできず、召喚されたばかりの光輝達には興味はなかったとも思われる。

だが、歴史上の最高記録である六十五階層を突破したという事実を持って帝国は光輝達に興味を示して今更ながら会ってみたいという知らせが来たのだ。

そんな話を馬車の中で教えられながら王宮に到着すると、一人の少年が駆けて来る。

十歳ぐらいの金髪碧眼の美少年。やんちゃそうに見えるもその正体はハイリヒ王国王子ランデル・S・B・ハイリヒである。

そのランデル殿下は思わず犬耳と尻尾が幻視してしまいそうな雰囲気だ。困気で駆け寄ってくると大声で叫んだ。

「香織！ よく帰った！ 待ちわびたぞ！」

まるで香織以外見えていないように叫ぶが光輝達もしっかりいる。ただ召喚された日からランデル殿下は香織に惚れているのである。

恋は盲目とはよく言ったものだ。

召喚された日から香織に猛アピールするランデル殿下だが、彼は十歳。香織からして見れば弟のようにしか思われていない為にランデル殿下の初恋は実らないだろう。南無。

「ランデル殿下。お久しぶりです」

「ああ、本当に久しぶりだな。お前が迷宮に行っている間は生きた心

地がしなかつたぞ。怪我はしてないか？ 余がもつと強ければ、お前にこんなことをさせないというのに……………」

精一杯男らしくするも香織からして見れば少年の微笑ましい心意気ではない。

「お気づかい下さり有難うございます。ですが、私なら大丈夫ですよ？ 自分で望んでやっていることですから」

「いや、香織に戦いは似合わない。そ、その、ほら、もつとこう安全な仕事もあるだろう？」

「安全な仕事ですか？」

「う、うむ。例えば、侍女などどうだ？ その、今なら余の専属にしてやってもよいぞ」

「侍女ですか？ いえ、すみません。私は治癒師ですから……………」
「な、なら医療院に入ればいい。迷宮なんて危険な場所や前線に行く必要はないだろう？」

医療院とは、国営の病院であり、王宮のすぐ傍にある。要するにラッセル殿下は香織と離れるのが嫌なのだ。しかし、鈍感な香織にはその気持ちは届かない。

「いえ、前線でなければ直ぐに癒せませんから。心配して下さい有り難うございます」

「うう」
(憐れな……………)

幼き少年の決して敵わむ無垢な初恋に浩二は憐れみと同情の眼差しを向けながら少しだけ尊敬の念を送る。

(俺も殿下みたいに積極的にアピールするべきか……………?)

チラリと雫に視線を向けながらそう考えてしまう浩二も現在進行形で初恋の相手は雫だ。だが、アピールしようにも自分に向けられる恋路には鈍感な雫はきつと気付かない。普段はあれだけ人の機微に察せられるのに自分の事に関しては雫も香織のことは言えない。

浩二自身も香織や殿下のように積極的に自身をアピールする度胸がない為に想いは秘めたままだ。

「ラッセル殿下、香織は俺の大切な幼馴染です。俺がいる限り、絶対に

守り抜きますよ」

(それかこの馬鹿みたいに空気を読まずにやってみるか?)

己の恋心に空気を読まない幼馴染を参考にしようと思つたと本気で考える浩二さんだった。

そんな空気を読まない勇者にランデル殿下は猛犬のように敵意を剥き出しにしていると少し厳しさの含んだ声が響いた。

「ランデル。いい加減にきなさい。香織が困っているでしょう? 光輝さんにもご迷惑ですよ」

現れたのはランデル殿下の姉である王女リリアーナを目撃した浩二は雫の背に隠れた。

「あ、姉上!?! ……………し、しかし」

「しかしではありません。皆さんお疲れなのに、こんな場所で引き止めて……………相手のことを考えていないのは誰ですか?」

「うっ……………で、ですが……………」

「ランデル?」

「よ、用事を思い出しました! 失礼します!」

己の非を認めたくなく脱兎の如くこの場を離れるランデル殿下の背中を見送るリリアーナは溜息を吐く。

「香織、光輝さん。弟が失礼しました。代わつてお詫びしますわ」

「ううん、気にしてないよ、リリィ。ランデル殿下は気を遣つてくれただけだよ」

「そうだな。なぜ、怒っていたのかわからないけど……………何か失礼なことをしたんなら俺の方こそ謝らないと」

香織と光輝の言葉に苦笑いするリリアーナは雫の後ろに隠れている浩二に向けてスツと目を細める。

「浩二さん。御機嫌よう。どうして雫さんの後ろに隠れておいでなのですか?」

「はは……………御機嫌よう王女様。どうか私の事は空気とと思っていただいて構いませんよ?」

「ふふ、御冗談を。我が国の医学を発展し、これまで難病とまで言われた病の特効薬まで次々と調合してくださる浩二さんを空気になんて

できませんわ。ささ、どうぞ前へ」

手招きするリリアーナ。浩二にはその手招きが？地獄においで”
と言われているようにしか見えない。そこに雫が。

「浩二。何をそんなに怯えているのよ？ 貴方らしくもない」

「そうだよ、浩二くん。リリイは怖くないよ？」

リリアーナは、現在十四歳の才媛だ。その容姿も非常に優れていて、国民にも大変人気のある

金髪碧眼の美少女である。正確は真面目で温和、しかし、堅すぎるということもない。TPOをわかまえて使用人達とも気さくに接する人当たりの良さを持っている。

だからこそ雫達は怪訝している。

どうして浩二はまるで恐ろしいものと遭遇したかのように怯えているのか。

ベヒモスの時でさえ怯えるようなことはなかったのに。

そこに光輝が。

「浩二。君のその態度はリリイに対して失礼だぞ？ それに雫にも迷惑をかけるものじゃない。いったい何をそんなに怯えているんだ？」
「……………戦うことしか能がない勇者にはわかるまい」

だが、いつもなら適当に聞き流す光輝の善意の塊に文句を言う。

「王女様は俺が天職？ 医療師」だとわかった日から多種多様の魔法薬を調整させられ、それが終わったと思ったら今度は別の薬の調整を押し付けられてきた俺の気持ちにはわかるのか？ わからないだろうな？ ええ？ お前、できるか？ 毎日の訓練と座学その合間に薬の調整だぞ？ 新薬の開発も含めて俺がこの世界に召喚されてから睡眠時間はたったの二時間だぞ？ 倒れそうになるたびに魔法や薬でどうにかしているんだよ。無茶ぶりに言ってくる上司に振り回されるブラック企業の社員の気持ち、お前、わかるか？ ええ？ 言ってみろよ、勇者。俺がどれだけ薬を調整、開発してきたかわかるか？ 覚えている範囲だけでももう五十種類は超えたんだぞ？ また無茶を言ってくるかと思うと隠れるのは当然だろうか？ ああ？」

異世界に召喚され、どれだけ苦勞が増したのか、その言葉にはその重みがあった。

流石の光輝もその言葉に口を噤む。

「……………リリイ。それは本当？」

雫は思わずそう尋ねるとリリアーナは申し訳なさそうに言う。

「……………はい。浩二さんには大変ご迷惑と苦勞を掛けております。しかし、それも国民を一人でも多く救う為には浩二さんの知識と技術がどうしても必要だったのです。現に浩二さんが調べてくださった薬のおかげで多くの国民が救われております。本来であれば国を代表して感謝状の一つでも送るべきなのでしょうが……………どうでしょう？ 浩二さん。私でできることでしたら何でも構いません。何かお望みのものをご用意しますが？」

申し訳なさそうに褒賞を与えようとするリリアーナに浩二は。

「……………いや、別にいい。俺の苦勞で一人でも多くの人が救われたのなら医者冥利に尽きるもんだ」

その褒賞を断った。

どれだけ無理難題を押し付けられても、苦勞させられても、それでも一人でも多くに人が病から救えるのなら医者としてのこれ以上の褒美はない。

そんな浩二にリリアーナは笑みを溢す。

「浩二さん。国王に代わり貴方様に感謝を。それと私の事はリリアーナとお呼びください」

「はいはい。感謝の言葉は受け取っておくよ、？王女様」

「むう、なかなか手強いですわ……………」

頑なに名前を呼んでくれない浩二にむすつと頬を膨らませるもすぐに表情を変えて光輝達に告げる。

「とにかくお疲れ様でした。お食事の準備も、清めの準備もできておりますから、ゆつくりとお寛ぎくださいませ。帝国からの使者が来られるのは未だ数日は掛かりますから、お気になさらず」

こうして迷宮で疲弊した心と身体を癒していく光輝達だった。

脇役10

迷宮攻略で疲弊した身体を癒す光輝達は「オルクス大迷宮」から一時王宮に帰還した三日後に帝国の使者が訪れた。

現在、謁見の間にて、レツドカーペットの中央に帝国の使者が五人ほど立ったままエリヒド陛下と向かい合っている。光輝達、迷宮攻略に赴いたメンバーと王国の重鎮達、そしてイシユタル率いる司祭数人も揃っている。

「使者殿、よく参られた。勇者方の至上の武勇、存分に確かめられるがよからう」

「陛下、この度は急な訪問の願い、聞き入れて下さり誠に感謝いたします。して、どなたが勇者様なのでしょう？」

「うむ。まずは紹介させて頂こうか。光輝殿、前へ出てくれるか？」
「はい」

定型的な挨拶のあと、早速、光輝達のお披露目となり、陛下に促されて光輝は前に出る。

「ほう、貴方が勇者様ですか。随分とお若いすな。失礼ですが、本当に六十五階層を突破したのです？ 確か、あそこにはベヒモスという化け物が出ると記憶しておりますが……………」

疑わしい眼差しを向けられ、更には護衛の一人に値踏みするように上から下までジロジロと眺められている光輝は居心地悪そうに身じろぎしながら、答える。

「えっと、ではお話ししましょうか？ どのように倒したかとか、あつ、六十六階層のマップを見せるとかどうでしょう？」

色々と提案をする光輝だが、使者は首を横に振り、不敵な笑みを浮かべる。

「いえ、お話は結構。それよりも手っ取り早い方法があります。私の護衛一人と模擬戦でもしてもらえませんか？ それで、勇者殿の実力も一目瞭然でしょう」

その言葉に急遽、勇者対帝国使者の護衛という模擬戦の開催が決定し、一行はそろそろと場所を変えるのだった。

場所を変えて、光輝は聖剣を手に、護衛の一人と模擬戦を行う前、浩二が声をかけた。

「光輝。初めから本気で行け」

「どうしてだ？」

「平凡そうに見えるもあれは姿を偽っている。外見と肉体構造がまるで違う。かなりの強者だと思って当たった方がいい」

(まあ、皇帝陛下だからな……………)

完全実力主義の頂点に立つ皇帝陛下。当然、その実力も帝国最強と言っても過言ではない。それを原作知識で知っている浩二は皇帝陛下とは告げずに光輝に注意を促す。

「わかった。最初っから本気で行く」

浩二の忠告に頷く光輝の表情から油断と慢心が消えた。

だがしかし、相手はそれ以上の実力だった。

(流石はガハルド皇帝陛下ってところか……………)

あまりにも自然すぎたその動き、重く、鋭い一振りには鍛錬だけではない数え切れないほどの実戦を乗り越えた者にしか身に付けることが出来ない強者の動き。

光輝は魔法も限界突破も使ってはいない。純粋な剣のみで相手にしているからこれが実戦であればまだ変わっていたかもしれないが……………

(むしろ、これが模擬戦でよかった……………)

これが実戦であれば光輝は既に死んでいる。それだけ実力差があるんだ。

なにより。

(何より光輝には相手、人を殺す覚悟がない)

これが日本での試合などなら光輝は問題ないが、実戦と試合は違う。

皇帝陛下であるガハルドもそれに気付いて光輝に問いかけている。それに対して光輝は己の思ったことを口にするも返ってくるのは酷評だった。

「傷つけることも、傷つけられることも恐れているガキに何ができる

？ 剣に殺気一つ込められない奴が、ご大層なこと言ってるじゃねえよ。？本気”なんて言葉はな、もうちよつと現実つてもんを見てから言え」

そう告げて一方的に模擬戦の終了を宣言する。

一方的な終わり宣言に周囲がざわめき始める。そこでイシユタルが護衛の正体を看破して護衛は本来の姿に戻る。

四十代位の野性味溢れる男。短く刈り上げられた銀髪に狼を連想させる鋭い碧眼。スマートでありながらその身体は極限まで引き絞られたかのように筋肉がミッシリと詰まっているのが服越しでもわかる。

そう、使者の護衛としてやってきたその男こそがヘルシャー帝国現皇帝ガハルド・D・ヘルシャーその人である。

なんでも皇帝陛下はフットワークが物凄く軽く、このようなサプライズは日常茶飯事だそうだ。

そんな皇帝陛下は勇者である光輝を一瞥し、浩二にその鋭い碧眼を向ける。

「おい、そのの。勇者様に助言したお前さんだ」

「おい、龍太郎。呼ばれているぞ？」

「いや、どう見てもお前だろう……………」

さり気なく幼馴染に擦り付ける浩二に龍太郎は呆れ気味に言う。

「えくと、なんでございましょうか？ 皇帝陛下」

「なに、たいしたことじゃねえよ。お前さん、どうして俺の正体に気づいた？ 勇者様や他の使徒様と違ってお前さんだけ違う目で俺を見ていたことぐらい気付いてんだぞ？」

(よく見てやがる……………)

流石は皇帝陛下とも言うべきか。視野が広い。

「……………別に皇帝陛下の正体に気づいたわけではありませんよ？ただ外見と肉体構造に違いがありましたので何かしらの手段で姿を変えていることには気づきましたけど」

それを聞いたガハルド皇帝陛下は可笑しそうに笑う。

「くくく、普通はそんなもんわからねえよ。そうか、お前さんが最近耳

にする？医療師”か……………。俺の国でもお前さんの薬は使っているぜ。ありやいいもんだ」

「それはどうも」

「んで、お前さん。俺の国に来る気はねえか？」

まるでちよつとコンビニに行つてくるかのような気軽さで勧誘された。

(この場所でもよくも堂々と勧誘できるもんだな……………)

すぐそこにイシユタルとエリヒド陛下がいるにも関わらず、臆することもなく堂々と神の使徒である浩二を勧誘してきた。

「俺の国の治療院で働く気はねえか？働き次第によつて優遇するぞ？」

「帝国に行く理由がないのでお断りさせていただきます」

丁重にその勧誘を断る浩二だが。

「んじゃ、その勇者の続きの相手をお前さんにして貰うか」

「はい？」

何が、んじゃ、だろうか？

いったい何をどう結び付けたらそうなるのか。浩二を含めた誰もが啞然とするなかでガハルド皇帝陛下はエリヒド陛下に申し出る。

「陛下。先の勇者の続きの相手をこの者にして頂きたい。なに、勝つたら帝国に連れて行くなんてことはしません。ただこちらも中途半端な形で終わるのが不本意なだけです」

当然、それにエリヒド陛下はいい顔をしない。

神の使徒のなかで一番の実力者は？勇者”である光輝だ。それに浩二は後衛であつて戦闘が本分ではない。

どちらが戦えば勝つのは明白だ。

「ガハルド皇帝陛下。失礼ながら俺は勇者である光輝よりも弱いですよ？どうしても戦いたいのであればこちらの天職？拳士”である龍太郎はどうでしょうか？」

前衛である龍太郎にガハルド皇帝陛下の模擬戦相手をさせようとする浩二だが、ガハルド皇帝陛下は首を横に振った。

「強いかわいかわいねえよ。俺がお前さんに興味があるだけだ。どう

だ？」

「どうだと言われましても……………」

乗り気ではない。それが誰が見ても明らかだ。そんな浩二にガハルド皇帝陛下は雫を一瞥して笑みを見せる。

「その髪を結って剣を持っている女。いい女だな。よし、お前さんに勝ったら俺の愛人になるか誘ってみるとしよう」

「ああ？」

その一言に浩二の怒りのボルテージがMAXになった。

そんなガハルド皇帝陛下の言葉が聞こえた雫は苦労人特有の深い溜息を吐いて、空気を読まない勇者は「雫を愛人にだど!? ふざけるな！」と憤る。

——だが。

浩二は明かな作り笑みで言葉を発する。

「ガハルド皇帝陛下。あまり冗談が過ぎると解体バラしますよ？」

実験動物モルモットを見るかのような無感情な瞳でマツドサイエンティストの笑みを浮かべる浩二にガハルド皇帝陛下は剛毅な笑みを見せる。

「くくく、いいぜ。俺を倒すことができたら煮るなり焼くなり好きにしな」

「医者を怒らせるとどうなるか、その身で教えてあげますよ」

こうして皇帝対医療師の模擬戦が始まった。

脇役11

突如始まったヘルシャー帝国の現皇帝であるガハルドと浩二の模擬戦。

勇者である光輝でさえ手も足も出ずに敗北した相手に後方支援である浩二が勝てるわけがないと誰もが思っているだろう。

現にイシユタル、エリヒド陛下。そしてクラスメイト達は浩二は負けることに疑いを持っていない。

「香織。すぐにでも回復魔法を使えるようにしておいて。相手は皇帝陛下。もしものことがあったら大変だわ」

「うん」

「光輝、龍太郎。わかっているわね？ いざという時は私達が浩二を止めるわよ？」

「ああ」

「おう」

だが、浩二の幼馴染達は違った。

浩二が負けるに心配するどころか逆にガハルドの心配をしている雫達に鈴が怪訝しながら雫に問いかける。

「えっと、シズシズ？ なにしてるの？」

「鈴。ちようどよかった。もしもの時の為に防御をお願い。？聖絶”がいいわね」

真剣な顔で告げる雫の言葉にクラスメイト達は揃って首を傾げる。

雫達の行動はまるで浩二が勝つことを前提にしているかのような動き。だがしかし、後方支援それも天職？医療師”である浩二がガハルド皇帝陛下に勝てるイメージがどうしても持てないからそれは無理もないだろう。

「……………浩二くんって実は強い？」

これまで訓練での模擬戦で浩二が雫達に勝ったところを見たことがない。惜しい、と思われることはあってもあと一步届かず負けるところしか見えていない鈴は当然の疑問を口にする。だがしかし、それは実力を隠していたのかもしれない。

しかし、雫は首を横に振った。

「私達は試合で浩二に負けたことはないわ」

「ならどうして?」

「でもルール無用の喧嘩なら勝った事がないのよ」

「え?」

試合では負けるも喧嘩では勝つ。まるで矛盾しているかのように聞こえるその言葉の真意を聞こうとする鈴だけどその意味はすぐに理解することが出来た。

模擬戦が始まった。

余裕たっぷりと自然体で剣を持つガハルド相手に浩二は地面に薬品を叩きつけた。それが大気中の空気に触れた瞬間、煙となって周囲に広がっていく。

「鈴!」

「りよ、了解! ここは聖域なりて、神敵を通さず、? 聖絶!」

雫の合図に咄嗟に光のドームでクラスメイト達を守るなか、ガハルドの奇声が聞こえた。

「ぐおおおおおおおお!! 痒い痒い痒い! おい! いきなりなんだこれは!」

全身を掻きむしりながら文句を飛ばすガハルド。だが、浩二の返答は投擲ナイフだ。

「舐めるな!」

だが、その程度で怯むような皇帝陛下ではない。痒みに堪えながらも投擲してくるナイフを弾き落としていくと。

バリン、と投擲ナイフと思い弾いてしまったのは小瓶。その中身を思わず浴びてしまう。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!! 目が、目が!!」

薬液を浴びた目から光が消え、ガハルドは視覚を奪われた。

それでも流石というべきだろう。視覚が封じられたというのに投擲ナイフの風切り音だけで弾いていくも、頭上からそれも正確無比にガハルドの頭上に落ちてきた薬液を頭から浴びてしまう。

「くせえ!! なんだこれくせえぞ!!」

あまりの臭さに思わず鼻を掴んでしまったガハルドに次々と投擲ナイフ、薬液入りの小瓶、薬液が仕込まれた投擲ナイフが放たれる。

「おい! 少しは真面目に戦いやがれ! これならさっきの勇者の方がまだましだぞ!」

あまりのまともではない戦いぶりに苛立ちと共に叫び散らすも返答は無言だったことにガハルドは内心舌打ちした。

声で居場所を特定してやろうと思ってもガハルドの思惑を理解しているかのようにも答ええない。今は気配と音のみで対応している。

そんな戦いぶりを見ている幼馴染達は溜息と共に相変わらずのえげつない戦い方に頬を引きつかせる。

「……………浩二くんはね、自分が弱いということを実感しているの」

えげつない戦い方を披露する浩二にドン引き中のクラスメイト達に幼馴染達は説明する。

「だからあらゆる策を練って使える手段は全部使うの」

「試合ではルールがあるもの。だから浩二の使える手段は限られているから私達が勝てるけど……………」

「なんでもありの喧嘩なら浩二の十八番だ。ありとあらゆる手段、方法を使って相手を確実に弱らせて戦いやがる。それもえげつない方法でな」

「毒蛇や毒蛙も浩二は当たり前のようを使うから……………」

「あつたわね。そんなことも……………」

幼馴染達のその説明にクラスメイト一同は言葉が出なかった。

子供の頃、誰もが一度は経験したことがある喧嘩。大体は自身の拳や蹴りであるものだが、浩二は勝つ為なら手段は問わないことを当たり前のようを使う。

(でも、今回はきつと……………)

香織は思う。

今回はそれ以上にいやらしくも惨たらしくするだろう。

惚れた女を愛人にしようとしている相手に浩二は躊躇いがない。

もはやガハルド皇帝陛下は浩二にとって実験動物と同じだ。

その証拠に浩二がガハルドを見る目は完全に実験動物。しかもマツドな笑みも浮かべて攻撃している。

(が、頑張らないと……………ッ！)

このままでは皇帝陛下が死んでしまう。いや、死んだ方がマシだという残酷なめに会ってしまふ。そうなる前に止めなければ、幼馴染として。

香織は両手を握りしめてフンスと鼻を鳴らす。

「クソが！ ああ痒い!!」

悪態を吐きながら全身の痒みを堪えつつ戦うガハルドは少しずつ冷静さを取り戻してこの戦いにも慣れたきた。

そのとき、背後から近づいてくる気配を掴んだ。

「そこか！」

背後に振り返って一閃。確かな手応えを感じながら口角を曲げるガハルドだが、背後からの衝撃に吹き飛ばされる。

「がふっ！ な、何が起きやがった……………！」

確かに斬った。そう確信したはずなのに気がつけば背後から殴られていたガハルドには見えなかった。

浩二の髪が自由自在に伸びて拳を作っているのを。

まるで髪が意思でも持っているかのように動いて人の手の形となり、拳になっている。ガハルドが斬ったのは伸びた浩二の髪だ。

そしてどうして浩二の髪が自由自在に動いているのか、その答えは？ 改造”の派生技能？ 構造変化”。体内の構造を自在に変化させることができるこの技能を使えば髪を伸ばすどころか爪も舌も伸びるし、身体を大きくも小さくすることができる。それ以外にも身体を異様に柔らかくすることも、手足を伸び縮みすることも可能だ。

簡単に言えば肉体を自在に操作することができる。そこに？ 魔力操作”の派生技能である？ 魔力循環”を使えばある程度の強度は補強される。

魔力でコーティングされている髪はもはや鋼と同然。それが自由自在なら恐ろしいに限る。そしてそんな浩二を見たクラスメイト達

は啞然としているとクラスメイト代表として鈴が皆の気持ちを代弁する。

「浩二くん、もう人を辞めてるよ……………」

その言葉に全員が頷いて同意した。

そして浩二はドクターコートから紫色の液体が入っているフラスコを取り出してそれを自身の髪に掴ませてガハルドにかけようと髪を操る。だが。

「何をするつもりは知らんが、そうおいそれと喰らってたまるか!？」

直感、本能といった長年培った危機回避センサーで避け、浩二に接近するガハルドは一瞬で浩二の懐に潜り込んでその刃で今度こそ斬った。

「なっ!？」

だが、ガハルドの持っている剣が儂い音と共に折れて刃先が宙を舞った。

何が起きた？ と疑念が脳裏を過るガハルドだが、視覚が奪われていた為に気付かなかった浩二に身体が漆黒に染まっていることを。

浩二は攻撃を受ける前から己の体内にある炭素の結合度を変化させて表皮に集中し、肉体をダイヤモンド並みに硬化した。その硬度は技能？金剛”と同格。

それならばただの模擬剣は折れるのは道理というものだ。

そして接近したガハルドの手足を浩二は己の髪で縛り上げて宙を浮かせて魔法の詠唱を封じる為に口も塞ぎ、ついでに鎧も服を引き裂いてパンツ一丁にさせる。

流石のパンツの中にまで魔法陣は隠してはいないだろう。

「皇帝陛下。確かに貴方は俺の何倍も強いでしょう。まともに戦えば確実に俺は負けます。ですが、力が強さではありません。そして強さが必要しも勝利とは限りません」

そう、光輝のように戦えば浩二は必ず負ける。だからこそ姑息でも卑怯でも外道でも使える手段は取って勝利を手にする。

だからこそ幼馴染である光輝達を除いて誰もがこの光景に目を見開いている。

光輝を圧倒したガハルド皇帝陛下を浩二が捕えるという光景に。

「……………」

観念したのか、負けを認めたのか、全身を脱力するガハルドに浩二は口の部分だけ解放するとガハルドは豪快に笑った後、己の敗北を認めた。

「俺の負けだ！ その女を愛人に誘うのは諦めるぜ！」

流石は実力主義の国の皇帝なだけあって潔く勝者に従うその姿に誰もが模擬戦の終わりを想像した。

——浩二は髪で無数の拳を作るのを見るまでは。

そしてその髪はガハルドの下半身、正確には股間に向けられている。

「お、おい……………まさか……………」

嫌な予感が全身を襲い、ガハルドは冷や汗を浮かべながら「冗談だろ？」という表情で浩二を見るも、その瞳は実験動物モルモットを見る瞳だ。

周囲の誰もがこれから行われる惨劇を想像してしまい、特に男性陣は顔を青ざめる。

そして浩二はマッドサイエンティストの笑みを浮かべながらとある吸血姫の言葉を頂戴する。

「……………漢女になるがいい」

髪が連続でガハルド皇帝陛下に叩き込まれる。

「浩二！ やめなさい！！ 光輝！ 龍太郎！ 行くわよ！ 香織も早く！」

「おい、浩二！ もうよせ！ 相手は皇帝陛下なんだぞ！」

「流石にそれはやべえって！！」

「浩二くん！ それは駄目！ 流石にそれは駄目！！」

この場にいる男性陣の誰もがその光景と鈍い音に股間を両手で押さえて涙目になるなかで幼馴染の暴拳を必死に止めに行く光輝達だが、浩二はやめない。

「離せ！ 二度と雫の前に現れない様でここで漢女にしてやる！ 去勢してやる！ 引き千切って女性ホルモンを高めて女に改造してやる！！」

雫に羽交い締めされ、光輝と龍太郎に両腕を掴まれ、正面から香織に抱きつかれながらも「オラオラオラオラオラッ！」と言わんばかりに髪の手をガハルドの股間に叩きつける。

あまりの光景に帝国の使者と護衛は一瞬遅れて正気を取り戻してガハルドを救いに駆け出す。このままでは皇帝が皇女になりかねない。

それから数分後、光輝達の必死の説得というよりも「雫ちゃんの膝枕権あげるから！」という浩二の恋心を利用した香織の言葉のおかげで矛を収めた浩二。そして股間を集中的にしつこく攻撃されたガハルド皇帝陛下は泡を吹きながら白目で倒れる。

そして皇帝陛下の股間は流石というべきか、運がよかったというべきか辛うじて無事であったことに浩二は盛大に舌打ちする。

香織の回復魔法のおかげで復活したガハルドだが、若干浩二に恐怖心を抱いたのは無理もない。

ガハルド皇帝陛下は即、帰国した。まるで恐怖から逃れるように。「雫に手え出したら女に改造してやるからな？」

決してその言葉が怖かったわけではない。ただ用事を思い出しただけなのだ。

脇役12

「おはようございます。浩二様」

目を覚ますと視界一杯に銀色が見える。

窓から差し込む太陽によってその銀色は反射してキラキラと輝きを放ち、それが眩しくも浩二は今にもキスしてきそうなほどの至近距離で起こしてくる専属使用人に声をかける。

「……………毎回この起こし方やめてください。寝覚めに悪いですよ、ティニアさん」

太陽の光に反射して輝く銀色の髪に同じく銀色の瞳を持つメイド

——ティニア・セルヴィス。

王女殿下であるリリアーナの近衛兵で現在は浩二の使用人を務めているティニアは誰が見ても美女と呼ぶに相応しい。

そんな美女に毎朝キスをしてしまいそうになるほどにの至近距離で起こされては心臓に悪い浩二だが、ティニアは態度を変えずに言う。

「申し訳ございません。浩二様の寝顔があまりにも可愛らしくてつい見惚れておりました」

「はいはい……………」

そんな冗談を真に受けることなく適当に流す。

イケメンである光輝ならともかく浩二は己の顔が普通だということとは重々承知している為に可愛いわけがないのはとつくに知っている。

いったいなぜ、そんな起こし方をするのかは不明だが、浩二はもうすっかり慣れてベッドから起き上がる。

「お着替えのお手伝いはっ？」

「いりません」

着替えを手伝おうとするティニアの申し出を断りながら思う。

(それにしてもこの人、原作でも出てこなかったな……………)

転生前に読んだ原作をいくら思い出してもティニア・セルヴィスという名前が思い出せない。というよりもいたかどうかさえ不明だ。

(ということはその他大勢扱いされている人つてことか……………)
物語に姿を見せない脇役。つまりはそういうことだ。

(まあ、特に気にすることもないか……………)

毎朝変な起こし方をしてくること以外はよくできた人である専属
使用人に意識を向けることなく欠伸交じりに着替えると浩二は思い
出したかのようにティニアに言う。

「あ、そうそう。王女様に頼まれた新薬とその調合方法。机の上に置
いてありますからいつも通り王女様に渡しておいてください」

浩二が指す机の上には薬剤とその調合方法が記された紙がある。
それを手にしたティニアが。

「もう開発されたのですか？ まだ三日も経ってないでしょうに」

「王女様の無茶ぶりにはもう慣れましたよ……………」

苦労人特有の溜息を溢す浩二にティニアは思わず尋ねる。

「浩二様。どうして貴方様はそこまでなされるのですか？ 神の使徒
とはいえ、貴方様がそこまでする義理はないでしょうに」

突然トータスに召喚されて日常を奪われて、人間族の勝手な事情で
戦争に巻き込んでいる。怒りを向けられても、理不尽だと罵られても
おかしくはない。浩二達にとってこの世界は自分達とはまるで関わ
り合いもない世界の筈だ。助ける義理も、救う義務もどこにもない。
それなのに浩二は戦争に参加すること以外でも身を粉にしてまでこ
の世界の人々を救おうとしている。

そんな義理も義務もないのに疑問を浩二は答えた。

「それは俺が医者だからですかね……………まあ、学生だから医師免
許は持ってませんが正確には違いますけど、それでも俺に誰かを救
える力があるのなら俺はそれを使うだけです。例えば世界は違えど、病
気に苦しむ人がいるのなら見捨てることなんてできない。まあ、自己
満足の為ですよ」

苦笑交じりでそう答える。

ティニアもそれ以上は追言することなく新しい薬と調合レシピを
持ってそれをリリアーナに渡しに行く。浩二も朝食をとる為に部屋
を出る。

「と、その前に……………」

朝食をとる前に行かなければいけないところがある。

浩二は訓練場に足を運ぶと予想通りと言えはいいのか、いつもの幼馴染達が朝練をしていた。

「おーい、そろそろ飯の時間だぞ」

浩二の声に気づいた光輝達は「そろそろか……………」と浩二の登場に朝食の時間が来たことに気づいて朝練を終わらせる。

「毎朝、精が出るな」

「ええ。まあ、私の場合は日課だけどね」

「んで光輝と龍太郎はまた模擬戦か？ いい加減毎朝、魔法をかけるのも面倒になってきたぞ？ ・？回天」

「俺はもつと強くならないといけないからな」

「おう、悪いな」

「それでそこで倒れている香織はまた魔力切れか？ ・？讓天」

「ええ、起きたらまず説教ね」

また無茶な訓練をした香織に呆れながら回復魔法を施す浩二に雫は後に説教することを決めて気絶している香織を背負うとそのまま食堂に向かう。

「確か今日からまた迷宮攻略だったな」

「ああ、今回の攻略で七十階層を目指す」

「おうよ、やってやるぜ」

「やる気を出すのはいいことだが、無茶はするなよ？ 毎度毎度お前

等の尻拭いをする俺と雫の苦勞も少しはわかれ」

「そうね。次はもう放置にしましょうか？」

苦勞人二人の言葉にバツ悪そうにする馬鹿と脳筋。ついでに突撃娘も含めて苦勞が絶えない二人は揃って肩を竦める。

「俺を後衛から中衛にですか？」

【オルクス大迷宮】攻略を目指して移動する際、馬車に乗ろうとした時、浩二はメルド団長に呼び止められて現在のポジションを後衛から中衛に変えないか？ と提案された。

「浩二、お前は剣も扱えるだろ？ それに雫から聞いた話だと体術も使えるそうじゃないか。投擲の技能もあるし、魔法の腕もある。あの無詠唱のような魔法の技術は俺も教わりたいぐらいだぞ？」
(そりゃ無詠唱ですから……………)

「？ 魔力操作」の技能を持っているから無詠唱で魔法を扱うことができるが、それを知らないメルド団長がそう言うのも無理はない。

「これから先の迷宮攻略はより過酷になることは間違いない。だからお前を後方支援のままにしておくのも惜しいと思ってな。前衛をサポートしつつ後衛の役割も担うことから大変だとは思いますが、引き受けては貰えないか？」

(まあ、メルド団長の言い分は尤もだ……………)

これから先の迷宮攻略はより激しさを増すだろう。だから浩二を後方支援のままに置いておくのは勿体ないと思うのは当然のことだ。「わかりました。できるかどうかは実際に試さないとわかりませんが、引き受けます」

(後衛には香織もいるし、回復は香織に任せて俺は雫達のサポートに集中するとしてよう)

「すまんな……………お前も忙しいのに余計な負担をかけてしまつて」

「いいですよ、雫諸共こういうことには慣れておりますから」

馬鹿に脳筋に突撃娘。その三人に散々苦労を掛けられている為にすっかり苦労に慣れてしまった浩二はそんな自分に呆れるように息を吐いた。

そして今度こそ馬車に乗ろうとした時。

「浩二様」

「ティニアさん……………？」

不意に現れたティニアに驚きながらも馬車に乗るのをやめてティニアと向かい合うと浩二はティニアからバスケットを手渡された。

「道中でどうぞお召し上がりください」

「え？ あ、ありがとう……………」

「いえ、それではご武運を」

一礼して去っていくテイニアに首を傾げながらバスケットを持ったまま馬車に入るとそこにはニヤニヤと笑みを浮かべている鈴が早速といわんばかりに浩二をからかう。

「このこのっ！ 浩二くんの色男め！ いつの間にあんな美人メイドさんを口説いたのさあ！ そのテクを鈴にも教えてよお！」

「別に口説いてねえよ……………」

（どうせ王女様に気にかけてやってくれとか言われてんだろうしな……………）

絡んでくる鈴を適当にあしらいながら浩二はそう推測する。

あれだけ綺麗な人が光輝ではなく自分にこのようなことをするのは思えない。それにテイニアは元はリリアーナの近衛兵。浩二の使用人になる前にリリアーナがきつとこう言ったのだろう。？浩二さんには苦勞を掛けていますから出来る限り気に掛けてあげてください」と。そうでなければこんなことはありえない。

そう結論を出す浩二はチラリと雫を見るも特に不機嫌にはなっていないかった。それどころかむしろ微笑ましい顔で浩二を見ていて香織は何故か怒っている。

（浩二のことを理解してくれる人がやっと現れたのね……………）

（浩二くん！ 雫ちゃんという人がいながら！）

幼馴染にやっと訪れた春に思わずほろりとしてしまう雫に二股疑惑の眼差しを向ける香織。浩二は雫に男として見てくれないことに肩を落としながら席に座る。

（雫にとって俺はまだ？ 幼馴染か……………）

前途多難の己の初恋に深い溜息を溢す。

「あ、これ凄く美味しい！」

「鈴！ それ浩二くんに渡されたものなんだから勝手に食べちゃダメだよ！」

バスケットの蓋を開けて中に入っているサンドイッチを食す鈴に恵理は怒る。

とりあえず浩二は人の物を勝手に食べた鈴に？くしやみが止まらない闇属性魔法^{ろい}を罰としてかけた。

脇役13

「オルクス大迷宮」六十七階層。

勇者一行は迷宮攻略を目指して階層を攻略していく。

マツピングされていない階層の地道や探索や罠への警戒。階層ごとに強くなっていく魔物の強さに疲弊しながらもそれでも順調に階層を攻略しつつある。

「ハッ！」

迫りくる魔物を聖剣で一刀両断する光輝。

「セリヤー！」

更にはその光輝を死角から襲おうとする魔物を龍太郎がその拳を叩きつける。

「助かった！ 龍太郎！」

「へっ、どうってことねえさ！ こんなもの！」

互いに背を預けて死角を減らして襲いかかってくる魔物を迎撃していく光輝のすぐ近くでは得意の剣術と持ち前の素早さで魔物を切り捨てていく勇者パーティーのエース、雫は二人を叱咤する。

「光輝も龍太郎も前に出過ぎよ！ もっと後ろにも気を遣いなさい！」

叱咤を飛ばす雫にも魔物の脅威は襲ってくる。だが、その魔物の目に正確無比で放たれる投擲ナイフが突き刺さり、薬液が体内に注入されて絶命する。

「八重樫流投擲術？ 穿礫」。なんつつて」

後方支援から新しく中衛を担うことになった浩二は得意の薬液入りの投擲ナイフで魔物を倒しながら

「？ 邪纏」

闇属性魔法で光輝を手助けしている。

「何か来るぞ!!」

？ 気配感知”に何か捉えた光輝は全員に警戒を促す。

すると階層の奥から額に角が生えた大蛇のような魔物が姿を現す。

「万翔羽ばたき天へと至れ、？ 天翔閃」！」

大蛇が現れて光輝は先手必勝のように光の斬撃を放つ。だが、大蛇はその巨体とは似合わない俊敏な動きで光輝の攻撃を躲した。「なっ!？」

自分の攻撃が躲されたことに驚く光輝に大蛇は目を光らせて大口を開けて光輝に襲いかかる。

「?封禁!」

だがしかし、光輝のピンチに香織が無詠唱で光属性中級捕縛魔法?封禁〃を行使する。本来?封禁〃は対象を中心に光の檻を作り出して閉じ込める魔法だが、香織はその魔法を光輝にかけることで大蛇の攻撃を弾いた。

「すまない! 香織!」

香織に助けられた光輝は再び聖剣を振るう。だが今度は龍太郎、雫の三人がかりで三方向からの連携攻撃を行うが、躲されてしまう。

「チッ! ちよろまかと動きやがって!」

「文句を言っている暇があるのなら攻撃しなさい!」

攻撃が通らないことに悪態を吐く龍太郎に雫が攻撃の手を緩めずに叫ぶ。

「?縛光刃!」

「?縛煌鎖!」

動きの素早い大蛇の動きを封じようと浩二と香織は光属性捕縛魔法である?縛光刃〃と?縛煌鎖〃を行使し、大蛇の上空から光の十字架と地面から光の鎖が飛び出してくる。

上下からの捕縛魔法。これには流石の素早い大蛇でも躲し切れず、身体の動きを封じられてしまう。

「よし! トドメだ!」

動きが封じられた大蛇に光輝は聖剣を振り上げるが、大蛇は口腔を開いて毒液を噴出させる。

「うあ!」

「光輝!」

その毒液を直撃してしまった光輝に雫は悲痛の叫びを上げるも先に大蛇を倒すことを優先する。瞬時に思考を切り換えて雫は大蛇の

首を斬り落とす。

「浩二！ 香織！ 早く回復を！」

「任せろ！」

「うん！」

毒液をモロに浴びてしまった光輝の肌には紫色の斑点が出ていて、光輝は苦痛の表情を浮かべて尋常じゃない量の汗を流す。

すぐさま回復魔法を施す浩二と香織。二人の魔法の腕に光輝はすぐに毒状態から脱することができた。

「ありがとう。香織、浩二。おかげで助かった」

「ううん、気にしないで」

「むしろお前はこれからのことに覚悟を決めた方がいいぞ？」

二人のおかげで命拾いした光輝は感謝の言葉を送るも、浩二のその言葉に怪訝し、浩二の指す方向を見てみるとそこには見るからに怒っている雫が仁王立ちしていた。

「光輝。ちよつとそこに正座しなさい」

「はい……………」

幼馴染である雫に説教を受ける勇者。

ガミガミと説教する雫に言い訳も許さずに説教を受ける光輝に浩二達は苦笑いを浮かべながら他のメンバーに周囲の警戒と魔石の回収を行わせる。

誰一人、光輝を助けようとする者はいない。雫の説教に巻き込まれたくないからだ。

「お前達、無事か？」

「メルド団長。はい、光輝以外は」

少し離れた位置にいたメルド団長が浩二達に近づいて無事を確かめる。とりあえず怪我人はいないことに一息つく。

「光輝は……………まあ、仕方あるまい。最後のアレは油断していた光輝が悪いからな。最後まで油断するものじゃない」

説教を受けている光輝を見て浩二達同様に苦笑いしながら仕方がないと納得する。

「ところで浩二。どうだった？ これからも中衛としてやっていけそ

うか?」

「今のところ問題はありません」

「そうか。何かあればいつでも言えよ?」

「はい」

メルド団長の気遣いに感謝しながら浩二は香織と共に他の負傷者の手当てに入る。

「香織。俺は檜山達と騎士団の人達を治すから永山達の方を頼む。辻さん一人じゃ負担も大きいしな」

「うん、わかった」

その巨体を以て仲間の盾となることが常である永山の怪我はいつも多くて香織と同じ? 治癒師” である辻綾子だけでは負担も大きい。故に浩二はそちらに香織を向かわせて小悪党達と騎士団に魔法薬を渡していく。

「よし、今日はここで撤退とする! 全員、地上を目指すぞ!」

ある程度の休息を取った後でメルド団長の撤退宣言に誰もが頷いて地上を目指す。

【オルクス大迷宮】を出て近郊にある【宿場町ホルアド】で一時的の休息を取ることにした。六十七階層を突破し、次の六十八階層を目指して休息と準備に勤しむ勇者一行。浩二はその休息の合間に薬を調べていた。

いざという時も備えて消費した分はしっかりと補充しておく浩二に雫が歩み寄ってくる。

「消費した魔法薬の分を調べているの?」

「ああ、こういうのはこまめにやっておかないとな」

流石、と思いつつながら雫は浩二の邪魔にならないように横に腰を落착かせる。すると浩二は……………。

「ところで雫。話は変わるけどさ、お前、異世界に来てまで? お姉様” って呼ばれているんだな。いったいどれだけ義妹を作れば気が済むんですか? 雫お姉様?」

「わ、私だって好きで作ってないわよ!? 知らない間に勝手に増えた

のよ!! とうか浩二まで私をお姉様呼びするのやめなさい!」

突然の話題に顔を真つ赤にする雫に浩二は肩を竦める。

《ソウルシスターズ》。それは雫に心を撃ち抜かれた女性達が雫をお姉様と慕い、支える秘密組織。雫の為なら世界ですら喧嘩を売る覚悟を持つ（自称）義妹達。

その秘密組織のことをどうして浩二が知っているのか？ その答えは簡単だ。

「この前、ちよっかいかけられたぞ？ 流石に元の世界でも似たようなことされたから対処できたけど、目が血走っていて怖かった」

向こうからちよっかいをかけてきたからだ。

幼馴染メンバーで特に雫と香織と行動を共にしている浩二がソウルシスターズにとって嫉妬の対象でしかなかった。そして雫を慕うあまりの暴走で？ 絶対に我慢できない腹下しの闇属性魔法^呪をかけられるところだったのだ。

そして元の世界でも似たように雫から浩二を引き剥がそうと誘惑、脅迫など、時には雫の為に貞操すら散らそうとしてくる女子までいる始末。

異世界でもそんな経験をすれば元凶である雫に文句の一つでも言いたくなる。

「ごめんなさい……………」

下手な言い訳をせずに素直に謝罪を口にする雫に息を漏らす。

「まあ、向かってきたから一人残さずとっ捕まえて実験材料にしてやったから気にしてないさ」

「……………無事よね？ ねえ、流石に変なことしていないわよね？」

「おいおい、雫。確かに俺はマッドサイエンティストだが、女性を無理矢理犯したり、乱暴にするようなことするわけないだろう？ ちよつと新しい薬の検証をただけだ」

「そう、よか——」

「ちゃんと傷口も記憶も消しておいたから何の問題もない」

「あるわよ、このお馬鹿!!」

何が問題ないのか。雫の脳天チヨツプが炸裂する。

脇役14

勇者一行は順調に階層を攻略していき、現在では八十九階層にまで到達している。

鍛え上げた武技や魔法で八十九階層にいる蟻型と蝙蝠型の魔物を次々に撃退していく光輝達は自分達でもかなり成長していると自負している。

既にこの場にメルド団長率いる王国騎士団達はいない。実力的にリタイアし、三十階層へ繋がる七十階層の転移陣の警護を務めるようになってから光輝達は自分達の力で完全突破目前まで来ていた。

そんな光輝達の現在のステータスが……………

天之河光輝 17歳 男 レベル72

天職：勇者

筋力：880

体力：880

耐性：880

敏捷：880

魔力：880

魔耐：880

技能：全属性適正「＋光属性効果上昇」「＋発動速度上昇」・全属性耐性「＋光属性効果上昇」・物理耐性「＋治癒力上昇」「＋衝撃緩和」・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

坂上龍太郎 17歳 男 レベル72

天職：拳士

筋力：820

体力：820

耐性：680

敏捷：550

魔力：280
魔耐：280

技能：格闘術「＋身体強化」「＋部分強化」「＋集中強化」「＋浸透破壊」・縮地・物理耐性「＋金剛」・全属性耐性・言語理解

八重樫雫 17歳 女 レベル72

天職：剣士

筋力：450

体力：560

耐性：320

敏捷：1110

魔力：380

魔耐：380

技能：剣術「＋斬撃速度上昇」「＋抜刀速度上昇」・縮地「＋重縮地」

「＋震脚」「＋無拍子」・先読・気配感知・隠形「＋幻撃」・言語理解

白崎香織 17歳 女 レベル72

天職：治癒師

筋力：280

体力：460

耐性：360

敏捷：380

魔力：1380

魔耐：1380

技能：回復魔法「＋効果上昇」「＋回復速度上昇」「＋イメージ補強力上昇」「＋浸透看破」「＋範囲効果上昇」「＋遠隔回復効果上昇」「＋状態異常回復効果上昇」「＋消費魔力減少」「＋魔力効率上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋付加発動」・光属性適正「＋発動速度上昇」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋遅延発動」・高速魔力回復「＋瞑想」・魔力操作「＋精密操作」「＋イメージ補強力上昇」「＋遠隔操作」「＋効率上昇」・言語理解

それが浩二の幼馴染達の現在のステータス。そして浩二は

.....。

平野浩二 17歳 レベル：72

天職：医療師

筋力：370

体力：510

耐性：480

敏捷：430

魔力：1500

魔耐：1500

技能：医学「＋診察」「＋肉体構造把握」「＋精密診査」「＋診断」「＋経穴」「＋心霊医術」・調合「＋薬毒鑑定」「＋高速調合」「＋効果上昇」「＋効能上昇」「＋調合改良」「＋保存期間延長」「＋劣化防止」「＋品質上昇」「＋服用量低下」「＋特殊調合」・侵入「＋範囲増加」「＋精神操作」「＋記憶操作」・改造「＋解剖」「＋最適化」「＋自己改造」「＋構造変化」「＋肉体操作」「＋肉体硬化」「＋肉体改造負担低下」「＋物質改造」「＋魔物融合」「＋物質混合」「＋改造強化」「＋改造改良」「＋改造改悪」・投擲「＋精密投擲」「＋飛距離上昇」「＋気配感知」「＋視野強化」「＋視覚強化」・魔力操作「＋魔力循環」「＋魔力硬化」「＋精密操作」「＋効率上昇」「＋遠隔操作」「＋魔力放射」「＋魔力範囲拡大」「＋魔力変換」「＋変換効率上昇」「＋治癒力上昇」「＋魔力感知」・回復魔法「＋回復速度上昇」「＋状態異常回復上昇」「＋消費魔力減少」「＋魔力効率上昇」「＋発動速度上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋イメージ補強上昇」・光属性適正「＋発動速度上昇」「＋光属性効果上昇」「＋効率上昇」「＋魔力消費減少」・闇属性適正「＋発動速度上昇」「＋闇属性効果上昇」「＋効率上昇」「＋魔力消費減少」・高速魔力回復「＋魔力吸収」・言語理解

やり過ぎてしまった感満載の総技能数。

魔力、魔耐に続いて総技能数は完全に？勇者“どころか香織さえ上回っている。

でもそうしなければならぬ理由が浩二にはあった。

(そろそろ九十階層.....魔人族との遭遇だ.....)

変成魔法によって強化された魔物とその魔物を操る魔人族。原作では光輝達とその魔人族と交戦して全滅しかけた。

運よくそこで主人公である南雲ハジメが現れたことで九死に一生を得たが……………。

(転生者である俺がいる限り、南雲が生きている保証なんてない。最悪、俺がなんとかしないと……………)

死なない為に、雫を護る為に、幼馴染達やクラスメイトを助ける為に浩二は今日の日の為に備えてきたと言っても過言ではない。

万が一に南雲ハジメが現れなかった場合はその責任は転生者である浩二にある。だからその責任を取らなければいけない。

その為に鍛え、研究し、己の身体を改造してきた。

十分な備えも準備もしてきた。後はもう賭けに出るしかない。

気持ちを落ち着かせて光輝達と共に九十階層に到着した。見た目は今まで探索した八十階層台と何ら変わらない作りのようだが何が起こるかわからない以上は警戒する。

そして階層を突き進むも、光輝達はまだ魔物と遭遇しないことに怪訝する。

「……………どうなってる？　なんでこれだけ探索しているのに、ただの一体も魔物に遭遇しないんだ？」

既に探索は半分近く済ませているにも関わらず、一体も魔物の姿を現さないことに明らかな異常性を感じ取った。

「……………なんつうか、不気味だな。最初からいなかったのか？」

龍太郎と同じようにその可能性を話し合うも、雫が一度戻ることを光輝に告げる。

「……………光輝。一度、戻らない？　なんだか嫌な予感がするわ。団長達なら、こういう事態について何か知っているかもしれないし」

警戒を強めながら、光輝に提案するも光輝は逡巡する様子を見せる。その時。

「これ……………血……………だよな？」

遠藤の言葉に全員地面や壁を注意深く観察し始めると、周囲のあちこちについていた。

それもかなりの量で。

そして全員の視線が浩二に向けられる。この中で誰よりも魔物に詳しい浩二に意見を求める。

「……………魔物が魔物を襲うことはある。だが、痕跡を隠蔽する知能を持つ魔物はまずいない。それにこれは明かな隠蔽工作。それはつまり、この階層にはいるんだ。魔人族が」

その言葉に誰もが険しい顔で警戒レベルを最大に引き上げる。

その時。

「その通りだよ」

突如、聞いたことのない女の声が広間に反響し、声がした方に視線を向けると燃えるような赤い髪をした妙齡の女。その耳は僅かに尖っており、肌は浅黒かった。

（あれが魔人族か……………）

原作通り、姿を現した魔人族の女に浩二は薬液入りの投擲ナイフをいつでも投擲できるように構える。

「勇者はあんたでいいんだよね？ そののアホみたいにキラキラした鎧を着ているあんたで」

「ア、アホ……………う、嫌い！ 魔人族なんかアホ呼ばわりされるいわれはないぞ！ それより、なぜ魔人族がこんな所にいる！」

あんまりと言えばあんまりな物言いに軽くイラツときた光輝が、その勢いで驚愕から立ち直って女魔族の目的を問いただすも、女魔族は煩そうに光輝の質問を無視すると。

「この中に天職が？ 医療師」がいるって聞いたのだけど、どいつだい？」

女魔族の言葉に光輝達の視線が浩二に集まる。

（俺……………？）

どうして女魔族は浩二を探しているのか、浩二はそれを探る為、そして時間を稼ぐために一度雫に視線を送る。すると雫も浩二の意図に察したかのように神妙に頷く。

「俺が？ 医療師」の平野浩二だ。それで魔人族が俺に何の用だ？」

「浩二!？」

自ら正体を明かす浩二に光輝は浩二を下げようとするも浩二がそれを制する。

「落ち着け、光輝。直情的になるのはお前の長所でもあり短所だ。ここは俺に任せろ」

光輝を説得して前に出る浩二。すると女魔族は冷笑を浮かべたまま口を開く。

「へえ、あんたがそうかい。なんか思っていたより普通だね。まあいいさ。要件は簡単だよ。あたし側に来ないかい？」

「人間族から魔族側に寝返れつてことか？」

「そうそう。いろいろ、優遇するよ？ 特にあんたと勇者君はね」

「勇者である光輝はわかるが、どうして俺まで勧誘対象になっている？」

「あんたは気付いてないかもしれないけどね、あたしら魔族側ではあんたの調合のレベルを高く買っているのさ。なんせここ数ヶ月で人間族側の医学を発達させ、あんたの調合した薬でかなりの数の人間族が死なずに済んでる。今はどうつてことはないが、数年、数十年も経てば人間族は数を増していく。これは魔族側でも脅威でもある。だが、逆に」

「味方になれば心強い、ということか」

「そうさ。だから勧誘にあたしが遣わされた。一応、お仲間も一緒にいって上からは言われているけど？」

(なるほど、王女様に頼まれた薬か……………)

それが魔族側からして見れば厄介だろう。怪我や病で死ぬはずだった人が生きていればそれだけ人間の数が増えるのは明白。それに医学が更なる発展を遂げれば厄介だと思いうのも無理はない。

さて、どう答えようか。と頭を悩ませていると。

「断る！ 人間族を、仲間達を、王国の人達をつ、裏切れなんて、よくもそんなことが言えたな！ やっぱり、お前達魔族は聞いていた通り邪悪な存在だ！ わざわざ俺と浩二を勧誘しに来たようだが、一人でやって来るなんて愚かだったな。多勢に無勢だ。投降しろ！」

浩二が返答する前に痺れを切らした光輝が断った。

(原作通りのキャラとはいえ、言わせてくれ。このアホ!!)

状況が状況でなければ頭を思い切り引つ張っていた。

「……………そう。なら、あんたに用はない。言っておくけど、あんた等の勧誘は絶対ってわけじゃないよ。命令は、?可能であればだ。状況によっては、排除の命令も出てる。殺されなんなんて甘いことは考えないことだね。ルトス、ハベル、エンキ。餌の時間だよ!」

「ツ?! 雫! 永山! 横に跳べ!!」

女魔族が三つの名を呼ぶのと、バリンツ! という破碎音と共に、雫と永山は苦悶の声を上げて吹き飛びそうになるも、浩二の咄嗟の指示に反射的に動いたおかげで間一髪で回避に成功した。

だが、二人を吹き飛ばそうとした正体は不明。そこで浩二がドクターコートからあるものを取り出した上空に放り投げ、投擲ナイフで破壊する。

すると中に入っている薬液が空気に触れて塵となり、広間一帯に振りかかると、それは姿を現す。ライオンのような頭部に竜のような手足に鋭い爪、蛇の尻尾と、鷲の翼を持つ奇怪の魔物。命名するならキメラだ。

更にはそのキメラだけではなく、体長が二メートル半程の見た目はブルータルに近い魔物が次々と姿を現す。

浩二が開発した魔法薬? 乱魔薬”。

魔力を乱す効果を持つ魔法薬を浩二が改良して空気の酸素に触れると粉塵化して辺り一面に広がる。人体にはそれほど影響を及ぼさない代物だけど迷彩という姿だけではなく気配も消す固有魔法を持っている魔物には有効だ。

(そもそも、今日の為に調合した俺のとおきのおきの一つだ!)

とっておきの一つを披露した浩二は続けさまに薬液入りの投擲ナイフをキメラに投げる。投擲ナイフがキメラに突き刺さり、薬液がキメラの体内に注入して絶命する。

「グルアアアアアアアッ」

「!?!」

筈なのにそんなもの効くかと言わんばかりに凶爪を振るう。

「?天絶!」

咄嗟に無詠唱で光属性中級防御魔法で防御するも、ガラスでも砕くかのように砕け散る。

「チッ!」

防御を突破して凶爪を振るうキメラの攻撃を?改造”によって進化した人間離れの動きで回避する。

(おかしい……………ッ! 毒が効かないなんて原作じゃなかったぞ!)

無論、薬や毒をメインに戦闘するのは浩二ぐらいでそれ以外の光輝達は剣や魔法で戦っている。もしかしたら自分が知らないだけで耐性を持っているのかもしれないと推測する。

複数のキメラやブルタールモドキとの戦闘で悪戦苦闘を繰り広げる光輝達は魔物の強さだけではなくその数の多さにも押されている。

そしてキメラやブルタールモドキだけではなく魔法を飲み込む亀や回復役を担っている双頭の白い鴉。

(わかっていたことだが……………やっぱりここは撤退がベストか!)

「光輝! 撤退だ! このままじゃ俺達は——」

「仲間がやられたまま引き下がれるか!? 限界突破”!」

浩二の言葉を遮って?限界突破”を発動した光輝。その基礎ステータスは三倍になり、一気に魔物も女魔族を倒そうとする。

「この、馬鹿がっ!!」

頭に血が上っている勇者に悪態を吐きながら浩二は魔法で応戦しつつ投擲ナイフで魔物の視界を潰していく。だがそれでも魔物の数が尋常じゃない。

「雫! 龍太郎! 馬鹿を止めて撤退だ! 一度引いて態勢を立て直すぞ!」

「ええ! わかったわ!」

「おう!」

「香織! お前は回復に専念しろ! 鈴! お前はいつでも結界を張れるようにしろ! 恵理は鈴をカバ―! 檜山達は香織達を死ぬ気で護れ! 永山達はきついだらうが、引き続き魔物を相手にしてくれ

！」

暴走する馬鹿の尻拭いをする為、代わりに指示を飛ばす浩二は雫と龍太郎と共に光輝を止めに入る。

そんな浩二に女魔族は薄っすらと笑みを浮かべる。

「へえ、状況を見て迷わずに撤退を選ぶなんて勇者君と違ってたいした判断力じゃないか。だけど、それをあたしが許すと思っっているのかい?」

女魔族の言葉と共に更なる魔物が追加される。

四つ目の狼に背中に四本の触手を生やした黒猫が浩二達に襲いかかる。

「舐めるなよ! ?改造!」

己の髪を急速に伸ばしてその髪を操って魔力でコーティング。ガハルド皇帝陛下の時より更に硬度も跳ね上げて髪で拳と刃に作り変えて魔物を攻撃する。

人間離れした攻撃に襲ってきた狼と黒猫は倒され、浩二はそのまま髪で光輝を捕まえる。

「浩二!? 離せ! このままじゃ!」

「光輝! 今の状況をよく見なさい! あんたが一人で突貫してどうこうできる問題じゃないのよ! 敵の手札が尽きるとも限らない以上はここで撤退よ!」

「ぐっ、だが……………」

「冷静になりなさい! 悔しいのは皆一緒よ!」

幼馴染の雫の言葉に唇を噛んで逡巡するが、それよりも速く浩二が光輝の意識を刈り取った。

医学の派生技能である?経穴”。生物にある経穴を突くことで安全かつ確実に光輝の眠らせて聖剣を拾う。

ここで後は撤退できればと思った時。詠唱が聞こえた。

「地の底に眠りし金眼の蜥蜴、大地が産みし魔眼の主、宿るは暗闇見通し射抜く呪い、もたらすは永久不変の闇牢獄。恐怖も絶望も悲観もなく、その眼を以て己が敵の全てを閉じる。残るは終焉——」

「?邪纏!」

女魔族がこれから発動しようとしている魔法を閻属性魔法によって妨害。そしてドクターコートからいくつもの薬液を取り出して地面に叩きつける。すると広間に緑色の煙が発煙する。

「なっ!?!」

「全員撤退!・来た道を戻れ!!」

浩二の撤退宣言にクラスメイト達は一目散に撤退を始める。

そして緑色のおかしな煙に警戒してしまった女魔族は浩二達を取り逃がしてしまう。

「……………やられたね。でも、次はこうはいかないよ」

運よく撤退に成功した光輝達。だが、まだ終わりではなかった。

脇役15

八十九階層の最奥付近の部屋。

その正八角形の大きな部屋には四つの出入り口がある。しかし、現在は、その内の二つの入口の間に、もう一つの通路が存在しており、その奥には十畳ほどの大きさの隠し部屋があり、入り口は上手くカモフラージュされて閉じられている。

そこでは光輝達が思い思いに身を投げ出して休息を取っていたが、皆、その表情は暗く沈んでおり、顔を俯かせる者が多かった。

初めての魔族との戦い。これまで順調に迷宮を攻略していた光輝達にとって初めての敗北であり、敗走である。

それでも皆、満身創痍のものはおらず、浩二、香織、辻が怪我を負った者を治療したおかげだ。

「香織、辻さん、魔力回復薬だ。飲んでけ」

「うん、ありがとう」

「平野くん、助かるよ」

治療で魔力を消費した二人の魔力を回復させる為に魔力回復薬を渡す浩二もその表情は暗い。その原因はつい先ほどまで行われていた光輝との口論というより口喧嘩のせいだ。

「どうして撤退なんてしたんだ!?!」

目を覚ますと光輝は浩二の胸ぐらを掴みながらそう喚いた。

「仲間を傷つけられて、どうして俺達が逃げなければいけない! 撤退なんてせずに立ち向かうべきじゃないのか!?!」

その言葉に浩二も光輝の胸ぐらを掴んで言う。

「その結果、仲間が死んでもいいって言うのか? 仮にあの魔族に勝てたとしてもあのままあそこにいれば確実に何人かは死んでいたんだぞ? お前は自分の身勝手な行動で仲間を殺すのか?」

「そうは言っていないだろ!?! そもそも撤退を決めるかどうか判断するのは俺の筈だ。身勝手な行動をしているのは浩二だろう!?!」

「頭に血が上ったお前に冷静な判断ができたのかよ? はっきり言う

が俺はあそこで撤退を宣言したことが間違いだとは思ってない。最善の判断をしたと自負してる。文句があるのならその直情的な悪癖を治せ。ガキの頃から何度も言っているだろうが」

「なんだと!？」

「落ち着きなさい! 二人共! 今は喧嘩している場合じゃないでしょうが!!」

今にも喧嘩しそうなほど一触即発の二人の間に雫が割って入る。

「光輝。私も浩二の撤退の判断は正しいと思うわ」

「雫!？」

「あのままじゃ私達の誰かは確実に死んでいたわ。仮にそうでなくても撤退はしていたでしょうね。今、こうして私達が五体満足でいられるのも浩二の機転があったからこそよ? 断言するわ。仮に浩二がいなくても浩二の代わりに私があんたに撤退を提案していたわ」

理路整然とした雫の言葉に口を噤む。

「それよりも今は全員で生き残る方法を考えるのが先よ。いいわね?」

「……………ああ」

雫のおかげで喧嘩になることはなかったが、光輝はそれから黙り込んで己の回復に務めている。浩二も他の人の治療や魔法薬のストックを把握している。

それでも二人の間に険悪な空気が漂っているのは確かだ。

ムードメーカーである鈴もその険悪な空気をどうすればいいのかとオロオロしている。

(さて、どうする……………?)

浩二は己のこれからの行動に頭を悩ませる。

(ああなった光輝は俺が何を言っても聞かないだろうし、仮に聞いたとしても光輝がああ魔族を殺せるとは思えない)

ならどうすればいいのか? その答えは必然と理解出来る。

(奥の手、使えないか……………)

出来れば使いたくない。それが浩二の本音だ。だがしかし、そんな

ことを言っている余裕などはない。そして何より浩二は既に覚悟を決めている。

(本来なら南雲が助けしてくれるはずだけどそう悠長に言っではいられないえ……………)

ピンチにかけつけるそれこそ主人公のような登場で魔物を殲滅し、女魔族を殺す。それが原作での流れだ。だけど、それを待っていたら仲間が、雫が死んでしまうかもしれない。

(やるしかない……………)

再度己の覚悟を固める浩二。するとそのタイミングを見計らったかのように。

「ガアアアアアアッ!!」

凄まじい咆哮と共に隠し部屋と外を隔てる壁が粉微塵に粉碎された。

「うわっ!」

「きやあああ!!」

衝撃にとつて吹き飛んできた壁の残骸が弾丸となって飛来し、直線状にいた近藤と吉野の直撃する。

「戦闘態勢!」

「ちくしょう!　なんで見つかったんだ!」

光輝が、号令をかけながらすぐさま聖剣を抜いてキメラに斬りかかる。更に侵入しようとしてくるブルータルモドキを龍太郎が抑えるが、黒猫が数十体侵入してしまった。

「――?天絶!」

「――?天絶!」

黒猫の触手を障壁を展開することで防いだ鈴と香織。

「っ、光輝!　?限界突破」を使って外に出て!　部屋の奴等は私達でなんとかするわ!」

「だ、だが……………」

「このままじゃ押し切られるわ!　お願い!　一点突破で魔人族を討って!」

「光輝!　こっちは任せろ!　絶対、死なせやしねえ!」

「……………分かった！ こっちは任せる！ ？限界突破！」

状況を打破すべく本日二度目の？限界突破”を発動した光輝はこのような窮地に追いやった魔族に対する怒りと仲間を救う使命感に滾らせ、魔族を討とうとする。

——だが。

そこに血塗れで瀕死の状態のメルド団長を目撃した光輝は激昂し、我を忘れたかのように魔族に突進しようとしたら別の馬頭の魔物の攻撃を受けてしまう。

ダメージ覚悟で反撃に出ようとするも？限界突破”のタイムリミットがやってきた光輝は敗北した。

前回の光輝の直情的な性格を魔族は把握していた。それでもメルド団長も光輝を殺さないでいるのは神の使徒である全員を魔族に迎え入れる為。いや、奴隷にする為が正しいだろう。

そして隠し部屋から出てきた雫達は光輝の敗北に戦意を喪失していく。

雫も戦意が折られそうになるも気丈に振る舞って冷静さを取り繕うなか、不意に肩に手を置かれた。

「浩」……………？」

「後は任せろ」

短くそう雫に伝えてクラスメイト達よりも前に出る浩二は奥の手を行使する。

「？無形の貌」

脇役16

「?無形の貌」

強力な魔物を従え、勇者一行の前に姿を現した女魔族。従えさせている魔物の強さと数に光輝達は劣勢を強いられ、ついには勇者である光輝が倒され、メルド団長でさえも瀕死の重体。

光輝の敗北に誰もが心が折れ、戦意を喪失するなかで浩二がそう口にした。

——すると、浩二の姿が変貌する。

頭には禍々しい二本の角を生やし、黒髪が灰色に変色して地面につくと思えるぐらいに長くなる。更には両腕はドラゴンの鱗と思えるような堅牢な黒く鈍く輝く鱗に覆われて、爪は鋭利に尖る。

「浩二……………」

変貌した浩二の姿に戸惑う雫。そんななか女魔族が口を開いた。

「随分おかしな姿に変わったね? まるで魔物じゃないかい」

「……………まあ、否定はしないさ」

「でも今更そんな姿になったところでこっちは人質がいる。この二人がどうなってもいいのかい?」

女魔族の言葉通り、光輝とメルド団長は敵の手中にいる。下手に手を出すことが出来ない。

だが——

二人を捕えている魔物の首が宙を舞った。

「なっ!」

あまりの瞬殺撃に女魔族の顔が驚愕に染まる。

二体の魔物の首を切断したのは灰色に変色した浩二の髪が刃のような形になり、その髪の手で魔物の首を斬り落とし、光輝とメルド団長を救出した。

「香織。二人の治療を頼む」

「う、うん!」

二人の治療を香織に任せて浩二は再び女魔族と目を合わせる。

「殺れ!」

本能が鳴らす警鐘に従って魔物達に命令を下す。キメラ、ブルター
ルモドキ、四つ目の狼、黒猫。それぞれの魔物が一斉に浩二に襲いか
かるも、浩二は己の髪を刃に変えて全てを切り裂いた。

更には……………。

「そこ」

その鋭く尖った爪を何も無い空間に突き刺すと、そこから気配と姿
を消していたキメラの死体が出現する。

「な、なんで分かったのさ……………」

「姿と気配が見えなくても、今の俺ならそれ以外の方法で見つけられ
る」

淡々と語る浩二に女魔族は次々に魔物に命令を下して浩二を殺そ
うとする。だが、魔物の命は無意味に散る。

「？髪刃」

鋼鉄の刃のように鋭利な髪が魔物達を次々と斬り裂く。だが
それだけでは終わらない。飛びかかる四つ目の狼の頭を掴んでその
まま握り潰し、背後から触手で襲いかかる黒猫の攻撃が浩二の背中に
直撃するも、触手は浩二を貫くことができず、髪が刃の餌食となる。
ブルタールモドキの顔を拳一発で粉碎し、キメラを蹴り殺す。

それはもう蹂躪だ。

圧倒的強者になす術もなくただ魔物達はその命を散らしていく。

「？血弾」

手を銃の形にすると指先から血を凝結させた弾丸を発射させた。

その血の弾丸は女魔族の肩にいる双頭の白い鴉を貫いた。

「何者なのさ、あんたは……………」

驚愕と困惑に包まれながら思わずそう尋ねてしまった女魔族に浩
二は言う。

「ただの脇役だよ」

わざとらしくもそう答える浩二は血の刃を生み出して剣術で魔物
を斬り裂いては、血の弾で遠距離攻撃を開始する。

浩二の奥の手——？無形の貌”

それは浩二が仲間を、雫を護りたい一心で？変成魔法”をヒントに

地道な努力と研究を積み重ねていった姿が今の浩二だ。

“変成魔法”は普通の生物を魔物に作り変える魔法。術者の魔力と対象の生物の魔力を使って体内に魔石を生成し、それを核として作り替える。更には既にある魔物の魔石に干渉して自分の魔力を交えることで強化したり、従えさせたりすることができる。そして変成魔法には強化段階があり、幾重も変成の重ね掛けを行うことができ、その分だけ強力な魔物を生み出す。

原作では変成魔法を獲得した龍太郎が魔石を媒体に自らの肉体を変成させ、使用した魔石の魔物の特性をその身に宿すという変成魔法としては少々特異な魔法を行使していた。

そしてもう一つ、ティオ・クラルス。？竜化”の固有魔法を持つ竜人族。

浩二は変成魔法を起源として龍太郎の？天魔転変”、ティオの？竜化”。その二人のやり方なら浩二は自身の技能？改造”で変成魔法に近い何かを手に入れることができるかもしれないと踏んで？改造”の技能を磨いて魔物の研究を重ねていった。

そして辿り着いたのが浩二の奥の手——？無形の貌”

多くの魔物の細胞、多種多様の鉱石、あらゆる薬草や毒草などを？改造”の技能によって体内に取り込んでひたすらに強化改造していったのが？無形の貌”

その力は原作の龍太郎の？天魔転変”のように魔物の特性を宿すことは叶わなかったが、ティオの？竜化”のように？無形の貌”の発動状態の時だけ、浩二のステータスは大幅に上昇する。

こんな感じに……………。

平野浩二 17歳 レベル：72

天職：医療師

筋力：370 [＋5430]

体力：510 [＋5780]

耐性：480 [＋6150]

敏捷：430 [＋5900]

魔力：1500 [＋7200]

魔耐：1500 [＋7200]

完全に勇者を上回るステータスを手に入れた浩二だけど、これは決してチートでも浩二が天才だからではない。

例え、原作知識があったとしても、これは幾重にも自身の改造を繰り返して強化し続けた浩二の研究と研鑽によるもの。

脇役だろうと、分不相応だと理解していても浩二は惚れた女を護りたい。それを原動力に浩二は神代魔法の領域に手をかけたのだ。

しかし、？無形の貌”には代償が存在する。

竜人族の？竜化”のように姿を変え、ステータスを上げることには成功した。だがしかし、浩二はこの力を使いたくなかったのは代償が存在するからだ。

一つは肉体への負担が大きい。

それ故に三分以上の行使は肉体だけではなく命にも影響を及ぼしてしまう。

二つ目は一度？無形の貌”を発動したら丸三日は使用することができない。もし、使えばどうなるか浩二自身でさえわからない。

代償があるから浩二は使わない様に奥の手として取っておいた。だが、一度行使した以上は……………。

「終わらせる」

魔物を殲滅して残された女魔族に向かって動き出す浩二に女魔族は残された最後の魔物、六本足の亀形の魔物に命令を下す。

「アブソド！」

六本足の亀の魔物——アブソドは主を守ろうと動こうとするが、その頭を浩二が放った血の弾丸に撃ち抜かれる。

「ッ!? ちくしょう！」

女魔族は、最後の望み！ と逃走のために温存しておいた魔法を浩二に向かって放とうとするが……………。

「？邪纏」

「っ!」

閻属性魔法によって妨害されてしまい、その一瞬で浩二は女魔族の

首を掴んで持ち上げる。

「ぐう……………な、なぜ、それだけの力を……………ッ」

「使わなかったのか、か？ まあ、一番の理由は代償があるからだ。色々な魔物や鉱物などを自分の身体に取り込んで改造したから、出来れば使いたくなかった俺の奥の手だ」

「く、狂っていやがる……………ッ！ 自分の身体を改造するなんて頭がおかしいんじゃないかい？」

「まあ、否定はしないさ。後は光輝に俺達は戦争をしていることを自覚して欲しかったからだな」

浩二は幼馴染だけあって光輝の性格をよく知っている。だから実際に魔族と戦うのなら原作通り戦わせてみようかと一考していた。今回が原作と違った結末になってしまったが、そんなの今更だ。

「ぐう……………」

浩二は女魔族を掴んでいるその手に力を入れる。

「悪いけど、俺は護るものの為なら殺す覚悟はできてる。当然、殺される覚悟もな」

その言葉を聞いた女魔族は諦観したかのように殺しを催促する。

「さ、ひと思いに殺りなよ。あたしは、捕虜になるつもりはないからね……………」

「……………ああ」

捕虜にされるくらいならば、どんな手を使っても自殺してやると女魔族の表情が物語っている。浩二は女魔族の意を酌んでその命を終わらせようとそれに応じる。

「いつかあたしの恋人があんたを殺すよ」

「その時は逃げずに受けてやる」

その言葉を聞きて、苦しませない様に力を入れてその首の骨をへし折ろうとする瞬間、大声で制止がかかる。

「待て！ 待つんだ、浩二！ 彼女はもう戦えないんだぞ！ 殺す必要はないだろ！」

香織の魔法によって回復した光輝はフラフラしながらも何とか立ち上がった。声を張り上げた。

「捕虜に、そうだ、捕虜にすればいい。無抵抗な人を殺すなんて、絶対ダメだ。浩二、君だって命を救う医者の子供だろ？ なら止めるんだ」

しかし、その制止も虚しくゴキリと鈍い音が響き渡り、女魔族は動かぬ肉塊となった。

脇役17

ゴキリという鈍い音が室内に木霊し、女魔族は物言わぬ肉塊と成り果てる。

静寂が辺りを包み込むなか、浩二は？無形の貌”を解いて女魔族を地面に寝かせる。

——浩二が人を殺した。

光輝達は、今更だと頭ではわかっているけど、同じクラスメイトが人を殺した光景に息を呑み戸惑ったようにただ佇む。

誰もが、いずれはとは思いついてはいた。この世界で、戦いに身を投じるといふことはそういうことだ。迷宮の魔物を相手にしていたのは、あくまで実戦訓練であり、いずれは人を殺さなければならぬ日が来ると覚悟していた。

だが、それを最初に行ったのが、勇者である光輝でも、前衛を務めている龍太郎でも雫でもない。天職？医療師”の浩二だ。

誰よりも命の尊さを重きを知っている。その調合の腕前で多くの人の命を救っている医者が人を殺した。

光輝達を圧倒した強力な魔物を殲滅できるだけの力を持って。

そんな浩二が踵を返して香織に声を飛ばす。

「香織。メルド団長は？」

「え、う、うん。危なかったけど、もう大丈夫だよ……………」

「そっか。よかった」

メルド団長の容態を聞いて安堵の息を漏らす浩二に声を押し殺したような光輝の声が響いた。

「なぜ、なぜ殺したんだ。殺す必要があったのか……………」

その疑問に浩二は小さく息を吐きながら言う。

「なら捕虜にすればよかったのか？」

「ああ、彼女は既に戦意は喪失していたんだ。殺す必要はなかったはずだ」

「ちよつと、光輝。浩二は——」

雫が自分達を助けてくれた浩二を庇おうと光輝に反論しようとする

るも浩二がそれを制する。

「光輝、お前は？限界突破」を二度使った。今だって歩くのが精一杯。そして俺も奥の手を使ったからお前と似たような状態だ。他の皆も体力も魔力も気力も低下している。皆の今の状態で敵を殺さずに捕虜にする余裕がどこにある？」

「だからって無抵抗の相手を殺すなんて間違ってる。浩二、お前がしたことは許されることじゃない」

「……………そうだな。理由はどうであれ、殺しは殺しだ。俺はそれから目を背けることも否定するつもりもない。だが光輝、お前は考えた上で彼女を捕虜にしようと言ったのか？」

「なにを……………？」

「彼女が捕虜になった後のことだ」

その言葉に雫や永山といった思慮深い者は気づいた。だが、眼前の勇者はまるで気付いていないかのようにキョトンとしている。

それを見た浩二は若干呆れながら教える。

「間違いなく拷問されるだろうな。魔族側の情報を得る為に。それも女だ、男以上に凄惨な目にあわされるだろう。それで欲しい情報が手に入って殺されるのならまだいい方だ。最悪の場合はどつかの変態に一生飼い殺されることだってありえる」

「なっ——」

まるでそんなこと想像していなかったのだろう。光輝は驚きを隠せず、一部の女子は小さく悲鳴を上げていた。

「それでもお前は捕虜にするべきだと言うのか？」

「そ、そんなこと俺がさせたりしない！俺が彼女に手を出させないように言えば誰も手を出さない筈だ！」

「かもな。だけど基本的前にお前は俺達と一緒に迷宮を攻略にここまで来ている。その間、誰も彼女に手を出さないといい切れるのか？魔族に恨みや憎しみを抱く奴だっている。捕虜にした彼女に暴行を加え、お前が帰って来た時だけ傷や痣は薬や回復魔法で治してしまえば証拠は残らない。お前が知らない所でそうならないと言えるのか？」

「そ、それは……………だけど」

「確かに殺しはよくない。だが、彼女のこれから先の未来が苦痛でしかないのなら俺は医者としてその命を終わらせる。どれだけ恨まれようが、憎まれようがそれが医者の義務であり矜持だ」

「浩二……………」

雫は納得した。

敵だから殺した。もちろん、それもあるだろう。だけど浩二はその先も考えた上で女魔族の命を終わらせたのだ。敗北した以上、女魔族の辿る道は二つ。死ぬか、捕虜にされるか。だが、後者の場合は間違いなく苦痛を強いられる。

女魔族の尊厳と誇りを護る為に浩二は医者として苦痛を与える事なく、その命を終わらせたのだ。その結果、誰かに恨まれ、憎まれたとしてもそれを受け入れる覚悟が浩二にはあった。

「光輝。俺達がしているのは日本でしていた喧嘩じゃない。戦争をしているんだ。殺さなければ自分が、仲間が殺されてしまう。それを今日、実感した筈だ。そしてこれからも魔族と戦うというのなら覚悟を決めろ。今回は俺がどうにかした。次は勇者であるお前がどうにかしてみせろ」

結局、浩二がしたことはいつもの光輝の尻拭いに過ぎない。だが、光輝はそれを認めず、さらなる反論をしようとした際、凄まじい轟音と共に、天井が崩落した。

原因は、紅い雷をスパークさせる漆黒の巨杭。それが、天井をぶち抜いて飛び出してきたのだ。

誰もが時を止められたかのように硬直しているなか、崩落した天井から人影が飛び降りてきた。

「なんだあ？ もう終わってんのか。これなら来る必要なかったじゃねえか」

嘆息しながら現れたのは白髪眼帯黒コートの男性。その声と姿に香織は彼だと確信する。

「ハジメくん！」

この物語の主人公、南雲ハジメ。少し遅れてやってきた。

突然現れた南雲ハジメ。変わり果てた彼の姿を一発で看破した香織はハジメが生きていたことに約束を守れなかったことにホロホロと涙を零しながら謝った。

ハジメの胸に飛び込む香織はハジメの胸元に縋りついて泣き、雫と浩二の「抱きしめて慰めてやれよー」と言いたげな眼差しで訴えもあり、軽いハグというなんとも言えない形で止めた。ハジメのヘタレ……………。

原作通り、ハジメに続き、ユエ、シアの登場に浩二はハジメが生きていたことに安堵の息を漏らす。

そしてハジメ達と共に地上に戻る道中で浩二がハジメに声をかける。

「南雲、お前、魔物の肉でも食べたのか？ 明らかに肉体が変質している」

「ああ、奈落の底じゃそれしか食うのがなかったからな」

浩二の質問になんともないかのように答える。

(なるほど、それじゃ南雲は原作通りにここまでやってきたと思ってもいいようだな)

こちらでは少し原作を改変させてしまったが、ハジメの方は何も変わっていないかった。

「……………なるほど。悪い、見殺しにするような真似しちまって」

「別に気にしちやいねえよ。どうでもいいしな」

謝罪するもハジメは本当に気にしていないかのように呆気なくそう答える。

「とりあえず南雲。地上に戻ったらお前の身体を診察させてくれ」

「ああ？ 別にどこも悪くはねえが？」

「いや、お前、考えてみろよ。どういう手段を使って魔物の肉を食べて生きてきたかは知らないけど、なんともないことはないだろう？ 今はそうかもしれないけど、後から影響が出てくる可能性だってある。

それに見たところ、お前のパーティーには回復役がないみたいだし、なにより医者として今のお前をそのままにしておくことはできない。手間はかけさせないからとりあえず受けとけ」

「……………チツ、わかったよ。手早く終わらせてくれよ？」

「はいはい」

嫌々ながらも浩二の診察を受けることに了承するハジメに浩二は肩を竦める。

(さて、お膳立てはこのくらいにしときますか……………)

医者としてハジメを診察するのは本音だ。だが浩二はハジメに自身のパーティーに回復役がないことを認識させることも視野に入れてそう言ったのだ。

香織をハジメのパーティーに入れやすくする為に。

(もう一押ししてやりますかね……………)

浩二は今度は香織の元へ足を動かす。

「どうした？ 妙にへこんでいるみたいだが？」

「浩二くん……………」

「既に南雲の隣に？ 特別」がいることを気にしてんのか？」

浩二のその言葉に香織は静かに頷いた。

香織は既に気付いていた。今のハジメの隣にはユエという？ 特別」がいる。ユエがハジメを強く想っていることを察し、ハジメもまたユエを特別に想っている。

想い合う二人に香織は今更、自分が想いを寄せても迷惑なだけではないか、その迷いがあった。浩二はそんな香織の頭に軽くチョップを入れる。

「なに迷ってんだよ？ 香織らしくもない。いつもの突撃はどうした？ 突撃は？ お前の得意技だろ？」

「浩二くん、でも……………」

「負けてない」

「え？」

「香織の想いは誰にも負けていない。幼馴染である俺が保証してやる」

優しい眼差しで香織の頭を撫でながら浩二は言葉を続ける。

「お前のこれまでの努力は決して生半可なものじゃなかった。途中で心が折れてもおかしくないほどお前は南雲の為に頑張った。ずっとお前の努力を見てきた俺と雫がその証人だ。だから迷うことなんてない。いつものように突撃してこいよ、突撃娘」

バン！ と浩二に背中を叩かれて「うっ！」と声を漏らす香織に浩二は。

「俺と雫はいつでもお前の味方だ。だから安心して南雲の？特別」になつてこい」

安心させるようにそう告げた。

その言葉を聞いた香織の表情から迷いが消えた。

「うん、行つてくるね」

「ああ」

迷いが晴れて得意の突撃を実行する香織の背に一息つくと、気が緩んで思わず横に倒れそうになるが、雫に支えられる。

「無理するからよ」

「わるい……………」

？無形の貌”の反動で既に余裕はなく気力でどうにかしていた浩二だが、それも限界に向かえて雫に肩を借りた。

「お節介だったかな……………」

「ええ、ついでに過保護もつけてあげるわ」

(雫が言うか……………)

お前も人のこと言えないだろう、と内心ぼやく。

「後は香織次第か……………」

「そうね」

幼馴染の二人に見守られながら香織は南雲に言った。

「ハジメくん、私もハジメくんについて行かせてくれないかな？……………ううん、絶対、ついて行くから、よろしくね？」

香織はハジメに向かって突撃した。

脇役18

——【宿場町ホルアド】

その宿の一室で浩二は魔物の肉を食べて生き延びたハジメの身体を診察していた。

その背後にはユエ、シア、テイオ、ミユウそして香織に見守られながらハジメはただ浩二に診察されていく。

ハジメの容態に若干ハラハラしながらも見守る香織達。すると、診察が終えて浩二がハジメの身体について診察の結果を伝える。

「バイタルが人間とは少し異なるけど、特に問題はない」

その言葉に安堵する香織達。ハジメも問題がないことに若干安堵の息を漏らす。

「強いてあげるのなら体幹が少し左に傾いている。恐らくは義手の重さのせいだろうから軽量したり、毎日ストレッチとかするのを勧める」

「ああ」

医者からの注意事項に頷いて上着を着始めるハジメに浩二は言う。

「まあ、香織もいるから旅の道中では香織に診て貰え。香織に医学を叩きつけたのは俺だからな。頼むぞ、香織」

「任せて」

弟子に今後を任せる浩二は内面嬉しい気持ちでいっぱいだ。

香織がこれまで秘めていた想いをハジメに告げ、ハジメのパーティーに加わることができたからだ。

無論、空気を読めない鈍感系主人公こと勇者の光輝はそれを強く反対したが、浩二が経穴について強制的に夢の世界に行かせた。

「南雲も香織のことを頼むぞ？ じゃなかったら雫と一緒に前回の痛い二つ名を広めてやるからな？」

「このラスボスどもがあ………！」

「なんとも言え。俺と雫は何があっても香織の味方だ。邪険になんか扱ったら容赦なく広めてやるから覚悟しろ」

精神的大打撃を受けるハジメは浩二に恨めしい視線を送るも浩二

はスルー。

大事な幼馴染の手助けをするのは当然のことだ。

「? 隻眼ビュビル・ガンナーの銃士」、? 漢ザ・ハーレムの体現者」……………。他にも色々と雫と一緒に考えておくからな」

「こ、この野郎……………ッ!」

顔を青褪めて痛い二つ名を広めようと画策している浩二と雫は親バカとも言っても過言ではない。それも過保護と言ってもいいお節介ぶりだ。

「これぐらい当然だ。中学の頃から香織はお前に惚れて、南雲のことを知る為に俺と雫はあれやこれやと付き合わされたんだぞ? エロゲー買いに付き合わされた時はマジで頭を抱えたぞ……………」

「こ、浩二くん! それは内緒にして言つたよね!」

「これぐらいの愚痴ぐらい言わせる、突撃娘。何がお父さんのお使いだ。娘にエロゲーを買いに行かせる父親がいて堪るか」

顔を真っ赤にして怒る香織に苦労人特有の溜息を吐き出す浩二。エロゲーが何かわからないユ工達は首を傾げるも、ハジメは香織がそんなことをしていたことに頭を抱えた。

「その、なんだ、平野。お前も八重樫同様苦労してんだな……………」
「まあな。おかげで苦労が身に沁みちまった」

同情の眼差しを向けられてまた口から溜息を溢す浩二にハジメは「宝物庫」から白塗りの鞘に入った刀を浩二に手渡した。

「やるよ。診てくれた礼つてことで。八重樫に渡したやつより少し性能は劣るが、問題はねえだろう」

「お、悪いな」

白塗りの鞘に収められた刀。ハジメが雫に手渡した黒塗りの刀とは対極の白い刀に浩二は代わりと言わんばかりにある物をハジメに手渡した。

「なら代わりにコレやるよ」

「これは……………薬か?」

中身を見てみるとそこには錠剤が入っていた。何の薬かと尋ねる前に浩二がそれを教える。

「ああ、避妊薬だ」

「ぶっ！」

予想外のものにハジメは思わず吹き出してしまった。

「お前——」

「避妊は大事なことだぞ？ 南雲も中学で習っただろ？」

「それはそうだが！ けどなあ！ なんでこんなもんをクラスメイトから貰わなきゃなんなんだ!？」

「ごもつとも。」

誰だつて同級生からそんなものを貰えば戸惑ってしまうのも無理はない。

「そりゃ作れるのは俺しかいなからな。この世界は避妊薬も避妊具もないから色々と危ないし、南雲達は旅をしてるんだろ？ それで万が一にできたら大変だろうが。あ、ちゃんとやる前に飲ませてやれよ？ それと急いで作ったから絶対とは言い切れないからできるだけ外に出すように——」

「やめろお!! そんな生々しいアドバイスをしてくるんじやねえ!!」

羞恥心いっぱい頭を抱えるハジメに浩二は首を傾げる。

「別に恥ずかしがることはないだろ？ 性行為は生物にとって当然のことで恥ずべきことじゃない。ただ旅の途中で赤ちゃんができたら色々大変だろうから渡しているんだ。香織にもちゃんと飲ませてからやれよ?」

「おい！ 何で俺が白崎に手を出すことを前提で言っていやがる!？」

「ああ!? 香織には魅力がねえって言いてえのか!？」

「お前も大概面倒くさい奴だな!!」

互いに睨み合って胸ぐらを掴み、頭突きする浩二とハジメ。なんとも不毛な争いか。

話題にされた香織は何を想像したのか、顔を真っ赤にして両手を覆い、避妊薬のことにユエはハジメを見ながら妖艶の笑みを溢した。シアとテイオは興味深そうにハジメが持っている避妊薬を見つめる。

「たくつ、まあ、貰えるもんは貰っておく。もういいだろ?」

「ああ、お疲れ様」

診察が終えてもう用はないかのように部屋から出て行くハジメ達。そして最後に部屋から出ようとする香織が踵を返して浩二に耳打ちする。

「浩二くんの雫ちゃんを想う気持ちも誰にも負けていないよ」

微笑みながら最後にそれだけを言い残してハジメの後を追う香織に浩二は肩を竦めて、ハジメを診察した際に手に入れたあるものをする。

「それにしても採血した南雲の血液はともかく、まさか魔石が南雲の体内に生成されていたとはな……………」

大きさは一センチにも満たない魔石。それが南雲ハジメの体内に生成されており、浩二はそれを摘出していた。

（原作でもこんなものはなかったはずだが……………）

原作知識としてはハジメの体内に魔石があるという話はなかった。だが現にこうして南雲ハジメから魔石を摘出したのは確かだ。

「まあ、魔物の肉を食べたから魔石が出来る可能性も十分にあるが……………」

魔物の肉を食べ続けた結果、体内に魔石が生成された。そう仮説を立てればおかしいところはない。ただこれは原作ではないものであるのは確かだ。

「浩二」

「ん？ 雫か……………」

「ええ、私よ」

診察が終えて香織達が出て行った後で雫が浩二の元までやってきた。

「光輝の面倒を見ていたんじゃないか？」

「それが……………」

頭痛でもするのか、頭を押さえながら雫は事情を説明する。

ついさつき光輝は起きてハジメから香織を連れ戻そうと部屋から飛び出したらしい。それを聞いた浩二も雫共々頭を押さえる。

（まあ、光輝じゃ南雲には勝てないだろうから無視でいいだろう……………）

断じて止めに行くのが面倒だからではない。原作通り酷い目に会うだろうから後に回収に回った方が楽でいいとも思っていない。

「まあ、光輝のことは今は置いておくわ。それよりも浩二、大丈夫なの？。」

「ん？ ああ、まだ戦闘は難しいけど普通に動く分には問題は——」

「そつちじゃなくて心の方よ。人を殺したのだから……」

肉体面ではなく精神面、心は大丈夫なのかと問いかけてくる雫に浩二は言う。

「医者には時に患者の命を奪うこともあるから元より覚悟はできてる。だから安心しろ」

苦笑いを浮かべながらそう答える浩二に雫はじつと浩二を見据えて口を開く。

「嘘ね」

はつきりと浩二の言葉を否定した。

「浩二。貴方は気付いていないのでしょうけど、貴方は嘘をつくとき、左手を二回握る癖があるのよ？」

「え？」

思わず自身の左手を見てしまう浩二に雫は続けて言う。

「私の前ぐらい自分を誤魔化さなくてもいいのよ？ ちゃんと吐き出さないと心が保たないわ」

幼馴染としてそう言ってくる雫に浩二は何とも言えない表情となる。

(無茶言うな……………)

確かに浩二は魔族とはいえ、人を殺してしまった事に何も思っていないわけではない。首の骨を折った感触も、最後の表情も脳裏にこびりついて離れない。

罪悪感で吐き気を催すも、身体を？改造？させて無理に押しとどめている。表情も出さないように注意しているのに雫はそれを見抜いた。

だけど、一番誤魔化さなくてはならない相手である雫はそれを見抜いてしまった。浩二は一人の男として惚れた女の前ぐらいは気丈に

振る舞いたかったにも関わらず。

だが雫は気丈に隠していた浩二の心情を見抜いて心配してくれている。心配してくれる気持ちは嬉しくもそれは浩二を？男”としてではなく？幼馴染”として心配してくれる。だから？男”として情けない姿を晒したくはない。

(本当、自分の気持ちを素直に南雲にぶつけた香織は凄いな……………)

いや、それ以前に浩二は恐れている。

浩二は自身と雫はつり合わないことを重々承知している。それでも雫を想う気持ちが諦めきれず、香織以上に長い片思いを抱いている。

だからこそ、怖い。その思いが壊れることに。そして一度思いを告げたら最後、もういつもの幼馴染ではいられなくなることを恐れている。当然雫は浩二の想いに微塵も気付いていない。

「……………そうだな。雫がぎゅって抱きしめてくれたら気持ちも落ち着くな」

？男”として惚れた女に弱音を吐き出したくない浩二は冗談交じりにそう言っただけのけた。これなら雫もこれ以上追言してこないだろうと踏んで。

——だが。

雫はそんな浩二を抱き寄せた。

「……………あの、雫さん？」

「なに？…これで落ち着くのでしょうか？」

「いやまあ、そう言ったのはそうですけど……………その、胸が……………」
顔に雫の胸が当たり、服越しから伝わる胸の柔らかさと女性特有の甘い匂いが伝わってくるにも関わらず、雫はそんなこと気にも止めずに浩二に言う。

「無理をさせてごめんなさい。これぐらいはさせてちょうだい」

自分達を助ける為に人を殺めた浩二に雫は贖罪の意味も込めて浩二を抱きしめるも、浩二はそのことになんとも言えず、雫から離れるまで抱きしめられるのであった。

脇役19

南雲ハジメとの再会から三週間後が経過し、光輝達は王都に戻ってきていた。

その理由は？人を殺す”という致命的な欠点を克服する為だ。これからの魔人族の戦争に参加するのなら？人殺し”の経験は必ず必要となる。

克服できなければ戦争に参加しても返り討ちに遭うだけだから。

「やばいやばい！ 寝坊した〜！」

現在、騎士達と対人戦の訓練を行っている光輝達。鈴は寝坊して大急ぎで訓練場に向かって駆け出している。

「エリリンも起こしてよ〜」

起こしてくれなかった親友に愚痴を言いながらも急いで訓練場を目指す鈴。

すると。

『そうか。答えは変わらないのだな？』

「ん？」

聞き覚えのある声に思わずその足を止めてしまった。

そこは騎士団長であるメルドの自室。今の声もメルドのものなら鈴も特に気にはしなかっただろう。

『はい。もう決めましたので』

だが、そこにもう一つの聞き覚えのある声に鈴は思わず聞き耳を立ててしまう。

(浩二さんと団長……………いったい何を話してるんだろう?)

急いで訓練場に向かわなければならぬが、それ以上に好奇心が勝つたのだろう。どんな話をしているのか、それを後でネタにして浩二を揶揄つてやろうと悪戯笑みを浮かべる。

『勇者パーティーを抜けて明日にでもこの王都を出て行きます』

「え……………？」

その言葉に鈴は目が点になった。

「エリリ〜ン!! シズシズ〜!! みんな〜!! 大変だよ〜!!」

ドタバタと足音を鳴らしているかのように慌てふためきながら訓練場にやってきた鈴に雫は遅刻した鈴に説教しようと思っていたが、その慌ただしい様子に首を傾げる。

「鈴。どうしたのよ? そんなに慌てて何かあったのかしら?」

肩で息をする鈴に何が起きたのか説明を促す雫に他のクラスメイトも怪訝しながらその説明を求めていた。すると鈴が。

「浩二くんが、浩二くんが……………」

「浩二がどうかしたの?」

「浩二くんが、パーティーを抜けて王都を出るって……………さつきメルド団長と話してた」

「え?」

その言葉に雫だけではない。他のクラスメイトも目を見開いていた。

「おい鈴! どういうことだ!? 説明しろ!」

「す、鈴だってわかんないよ! さつき話してたのを聞いて、皆に知らせないと思って……………」

龍太郎が更なる説明を求めるが、それ以上は知らないと言はそう告げる。そこに――

「悪い、少し遅れた。……………ってどうしたんだ?」

浩二本人が訓練場にやってきた。

「浩二。パーティーを抜けて王都を出るってどういうこと?」

雫が真っ先にそう問いかけると浩二は一瞬どうしてそれを? という顔になるも鈴を見てどこか納得するように頷いてその理由について話す。

「俺はこれ以上のパーティーにいることはできない。これ以上俺がいれば全体の士気に関わる」

淡々と告げるその言葉に雫そして龍太郎がそれを否定する。

「そんなことはないわ! 私達には貴方が必要よ!」

「そうだぜ！ 前だってお前がいたから俺達は助かったんだ！」

「それに香織が抜けた今、回復役は貴方と辻さんだけになるのよ!?
そこに貴方まで抜けられたら……………ッ！」

雫は気付いてしまった。

「浩二がどうしてパーティーを抜けて王都に出ようとするその理由
について。」

「……………もしかして、魔族を、彼女を殺したことを私達が
気にしているから？」

その言葉に浩二は頷く。

「俺がここにいれば皆、俺を気にするだろ？ 頭ではわかっているけど
俺が人を殺したという事実を受け入れられない。最近、皆の俺に対す
る態度を見ていけばわかる」

浩二は視線を周囲に向けると誰もが咄嗟に目を逸らしてしまう。

理解はできている。浩二がしたことは間違いではない。むしろ、正
しい判断をしたと誰もが思っている。だが、それを受け入れるのはま
た別問題だ。

皆が皆、浩二のように人を殺す覚悟を持っていないのだ。

そして浩二はそれを察してこれ以上は自分という存在は害悪でし
かないと判断して時間をかけてメルド団長を説き伏せた。

メルド団長も渋々ながらもそれを了承した。

「だけだよお、それは俺達が……………ッ！」

悪いのは自分達の甘さだと龍太郎もそれを理解している。理解し
ているも、どうしても一歩引いてしまう。

「……………どうして、どうしてなのよ」

「雫？」

「どうして、あんたは自分を切り捨てられるのよ……………ッ！」

悪いのは自分達なのに、浩二は何も悪くないのに。それでも自身を
切り捨てて他者を優先する浩二に雫は自身の不甲斐無さと浩二の自
己犠牲に苛立ちながらどうにか引き止めようと思うた矢先。

「浩二から離れるんだ、雫」

勇者である光輝がやってくる。

「浩二。パーティーを抜けるのは本当か？」

「ああ、明日にでも王都を出て行く」

「その後はどうするつもりだ？」

「公の理由として俺は勇者パーティーを抜けて世界を歩いて怪我や病で苦しんでいる人を救いながら神の使徒の存在と名声を上げるって感じかな？」

「……………そうか」

浩二の説明に光輝は一度瞑目して浩二に言う。

「なら浩二。もう二度と雫に近づかないと誓え」

「ッ！ 光輝！ どういう意味よ！」

突然の光輝の無茶ぶりに雫が異を唱える。

「雫。浩二は医者 of 癖に人を殺したんだ。それも無抵抗な人を、だ。あんなの間違ってる。そもそも医者が人を殺すなんておかしいだろう。人を殺すような医者に雫を近づかせるわけにはいかない」

「光輝！ あの時、浩二がいなかったら私達が殺されていたのよ！」

浩二は私達を助ける為にああしたのよ！」

「だからといって殺す必要はない筈だ！ 人を殺すなんて間違ってる！」

「光輝、あんたねえ……………ッ！」

「大丈夫だ、雫。俺が雫を守る。今度こそ魔族に後れを取ったりはしない！ 約束する！ 俺が皆を救ってみせる！」

いつも通りの暴走に若干呆れながら嘆息する浩二はさてどうするか、と悩んでいると。ふと、銀色が視界に捉えた。

「テイニアさん…………？」

自身の専属使用人の登場に怪訝し、口論している光輝や雫も突然現れた彼女の存在に思わず口論を中断する。するとテイニアは光輝に頭を下げる。

「勇者様。先に謝罪させて頂きます。申し訳ございません」

「え？ な——」

何を、と光輝が口を開くより前に乾いた音が訓練場に響き渡る。

その音の正体はテイニアが光輝の頬を叩いたからだ。

誰もが予想だにできなかったことに浩二も叩かれた光輝でさえも啞然とするなかでティニアは口を開く。

「勇者様は本当に浩二様の幼馴染なのですか？ とてもそうは思えません」

「え？」

「勇者様は浩二様がどれだけ自身の時間を削り、どれだけの苦労と努力を成されているのか、それを知っておられるのですか？ 勇者様が眠っておられる時も浩二様は一人でも多くの人を救おうと薬を調合なされているのですよ？」

光輝は啞然としながら叩かれた頬に手を当てる。

「そもそも魔族を倒すべきなのは勇者様、貴方様ではないのですか？ それなのにどうして天職が？ 医療師〴〵の浩二様が魔族を倒しておられるのですか？」

「それは……」

「？ 医療師〴〵より弱い？ 勇者〴〵にいったい何が守れるというのですか？ 誰を救えるというのですか？」

静かにけれどその言葉には確かな怒気を滲ませながら問いかけるティニアに光輝は一瞬怯むも反論する。

「だ、だが、浩二は人を殺したのは紛れもない事実だろう！ そんな人として医者としても間違ってる!？」

だが、再び光輝はその頬を叩かれる。

「浩二様に人を殺させたそもその元凶は勇者様、貴方様です。勇者様が弱いから浩二様が勇者様の代わりにそれを成し遂げた。ご自身の弱さを浩二様に擦り付け、尚且つご自身は正しいことをしているように装うのは止めてください。それでも貴方様は？ 勇者〴〵なのですか？」

続けて。

「薬を調合され、多くの人の命を救い、仲間である皆様を御守りし、それでも自分がいたらパーティーの士気に関わると王城から、王都から出ようとしている。そこに雫様に近づくなと、勇者様がそれを言う資格がいったいどこにあると言うのですか？ 誰も護れず、何も救えな

かった勇者様、貴方様が！」

今にも光輝の胸ぐらを掴みかかりそうならい剣呑な雰囲気を出しているテイニアに浩二を始めてこの場にいる者は誰も何も言えず、動けなかった。

「こんなの、ご自身を犠牲にしてまで多くの人を救っている浩二様が報われないではないですか……ッ」

「テイニア、さん……」

浩二は知らなかった。この人が自分の事をそんな風に思っていることに。

「勇者様。私は貴方様を？勇者」とは認めません」

テイニアは訓練場にいる零達や騎士達の前で臆することもなく堂々と光輝の勇者としての存在を否認した。

「今の貴方様は自身の思い通りにならないことに癩癩を起こしている？子供”です。そんな子供をいったい誰が勇者とお認めになられるというのですか？少なくとも私は認めません」

冷然と告げられるその言葉に光輝は啞然としたまま黙り込み、そんな光輝を見てテイニアは一步引いてこの場にいる全員に告げる。

「皆様方。訓練の邪魔をしてしまい申し訳ございません。それでは失礼します」

最後に一礼して踵を返して訓練場から離れていくテイニアの後姿を見据えながらも誰一人何も言うことができなかった。それだけにテイニアの怒りが凄まじかった。

それから少しして、メルド団長が訓練場にやってくるまで誰も何も言えなかった。

脇役20

時刻は深夜。

雫は月を眺めながらどうすればいいのかと悩んでいた。

その悩みの種は浩二だ。浩二が明日にでも王城を出て行き、王都を発つ。

パーティーの士気を下げたまま恐ろしいからと自らの意思でパーティーから離れようとしている浩二に雫は悩んでいた。

(貴方は何も悪くないのに……)

そう、浩二は何も悪くはない。ただ仲間を護る為に魔族を殺したに過ぎない。雫だって殺し合いをしている自覚はしている。あの女魔族を殺すつもりでいたが、実力が足りず、どうすることもできなかった。

それを浩二がしたのだ。それを責める権利なんて誰にもない。

「……………やっぱり、間違っているわ」

浩二がパーティーを抜けるのは間違っている。そう思った雫は今すぐにでも浩二を引き止めようと動きに入る。例えば光輝が何を言い出しても自分がなんとかすればいい、と雫は浩二の部屋に向かおうとした時、扉をノックする音が響いた。

「雫。少しいいか？ 話があるんだ」

扉の向かうから聞こえた声はこれから引き止めに行こうと思ったいた浩二だった。雫はちよūdいと思つて部屋の扉を開けて浩二を中に招く。

「悪いな、こんな時間に」

「いいわよ。ちよūd私も貴方の部屋に行こうと思つていたのでから」

浩二を椅子に座らせて雫は備え付けのカップと紅茶を用意して浩二に差し出し、向かいの席に座った。

「ありがとう」

礼を告げて紅茶を受け取る浩二はまずはティニアのことについて雫に伝える。

「テイニアさんはクビになった。流石に公衆の面前で勇者に平手打ち
はまずかつたらしい。それでも本来ならもつと重い処罰を科せられ
るはずだけど、俺のこれまでの功績と王女様の鶴の一声でその程度で
済んだ」

「……そう」

それでもと思う気持ちはあるも、それは雫自身がどうこうできる問
題ではない。

雫は気持ちを切り換えて本題に入る。

「浩二。考えを改める気はないの？」

「ああ、明日の早朝には王城を出る」

それがもう決定事項と言わんばかりに当然のように答える浩二に
雫は言う。

「光輝が言ったことを気にしているの？ それなら私になんとかする
わ。だからこれまで通り、私達のパーティーに残ってちょうだい」

「無理だな。光輝が、あいつが俺達の言葉をまともに聞き入れたこと
があつたか？ 光輝にとって俺はもう人殺しの悪だ。そして光輝は
良くも悪くも周囲に影響を与える。あいつの性格とカリスマ性を考
えれば俺という害悪がいるだけでパーティーの士気が下がるのは明
白だ」

それには雫は何も言い返せなかった。

直情的な性格や思い込みの激しき、そして正義を疑わない自己解釈
など、これまで何度も注意してきたが、未だに治る気配どころか治す
気配すら見受けられない。

（まあ、あいつの場合はただ単においしい所を横取りされたことにム
カついているだけだろうな。そこにいつものご都合解釈で俺を追い
出したいだけだろうけど）

そうでなければ仮にも幼馴染である浩二にああも言うまい。今ま
で自分が主人公で脇役である浩二が活躍したことが気に入らない。
だから人を殺したという悪というレッテルを浩二に貼り付け、自分の
都合のいいように自己解釈していることぐらい浩二は気付いている。

そして、光輝の性格と光輝が与える影響力をよく理解しているから

こそ、自身がパーティーを抜けることで士気の低下を防ぐという最善の手を取ったに過ぎない。

「戦場で士気の低下は死亡率を上げる。雫もそれぐらいは知っているだろう?」

「それはそうだけど……けど、やっぱり貴方が出て行くのは間違っているわ。確かに今は皆、人を殺した貴方にどう接すればいいのか困惑しているのかもしれない。けど、それは私達の人を殺す覚悟が足りないだけ。浩二がパーティーを抜ける理由にはならないわ」

それでも雫はなんとか説得しようと言葉を綴る。すると浩二が……。

「雫。俺がパーティーを抜けるのは個人的な理由もあるんだ」

「個人的な理由……?」

「ああ、? 神代魔法”。大迷宮の攻略者のみに与えられる神代に使われて現代では失伝した魔法。あの魔人族が従えていた魔物がいたただろ? あれはその神代魔法の産物だ」

「……なるほどね。けど、どうして浩二がその神代魔法のことについて知っているの?」

「(本当は原作知識だけど……)あの魔人族の記憶を覗いてその情報を手に入れた。だから俺は【オルクス大迷宮】以外の大迷宮を攻略する為に王都を出る。今よりも強くなる為にな」

浩二の狙いは【メルジーネ海底遺跡】にある? 再生魔法”。天職が? 医療師”である浩二には是非とも手に入れたい神代魔法だ。それを手に入れられたら? 改造”の幅も広がる可能性も高い。

(今から【エリセン】に向かえば南雲達と合流できる可能性は高い。そして南雲達と共に【メルジーネ海底遺跡】の攻略に参加させて貰えば……)

無論、攻略が認められるかどうかは本人次第だが、それでも行かない手はない。

打算的ではあるも、ただでさえ才能がない身である浩二はせっかくの原作知識を活用しない手はない。

「勇者パーティーを抜けるのは皆の為でもあると同時に俺自身の為で

もあるんだ」

自身を一方的に切り捨てるつもりはない。

タイミング的にもパーティーから離れるのにちょうどよかった浩二は自身の考えを雫に伝えると……。

「私も行くわ」

雫はそう言った。

「私も前の戦いで自分の未熟さ、今のままでは駄目ってわかったの。その神代魔法が手に入れば今よりも強くなれるのでしょ？ それなら私も行くわ」

女魔族が従えさせていた魔物に手も足も出ずに敗北して幼馴染である浩二に助けられた雫は己の無力さと未熟さを克服する為に浩二と共に神代魔法を手に入れようと同行を求める。

「光輝達はどうするんだ？ 雫までいなくなるとあいつもつと酷くなるぞ？ それに雫は戦力的にもパーティーには必要だろ？」

勇者パーティーのエース的存在である雫の存在は大きい。もし、雫までパーティーから抜けければその穴は大きい。

(なによりあのバカがまた面倒な自己解釈をするだろうな……。雫にいったい何をした!? とか言いそう……)

その姿が目には浮かぶ。

「別にいいわよ。光輝だつていい加減に自分の尻拭いは自分でさせるべきだわ。それに浩二は基本的に後衛か中衛なのだから旅をするなら前衛は必要でしょ？」

雫の言葉も一理ある。

もちろん浩二も前衛はできるも、さすがに天職が？ 剣士”の雫よりかは劣る。？ 無形の貌”を使っている時は話は変わるが、確かに雫がいてくれれば心強い。

それに今の雫にはハジメから貰った黒刀がある。八重樫流の剣術を最大限に発揮することができたらうから頼もしいこの上ない。

「それに……納得できないわ。これじゃまるで浩二が悪者みたいじゃない」

それが浩二自身の意思だったとしても雫は納得することができな

いでいた。すると……。

「……雫のそれって幼馴染に対する同情？ それとも責任感？ 俺と一緒にいきたいのはただ自分が強くなりたいため？」

「……浩二？」

真顔で告げるその言葉に雫は思わずたじろぐ。

「そりゃ俺も雫と一緒にいてくれたら嬉しいよ？ 俺の事を心配してくれるその気持ちも嬉しい。けどそれは？ 幼馴染」としてそう言っているだけ？」

「浩二、何を、言っているの？」

そこで雫は気づいた。

浩二のその顔は少し前に見た親友と同じ、想い人に想いを告げようとした時の顔に酷似していた。

もしかして、いや、でも、まさか……と雫の頭の中は混乱しているなか、浩二は告げる。

「俺は雫が好きだ。だから？ 幼馴染」としてではなく、俺の？ 恋人”としてついて来て欲しい。今日はそれを言う為にここに来たんだ」
長年に秘めていたその想いを今、打ち明けた。

それに対して雫は頭が真っ白になっていた。浩二に好きな人がいることぐらいは察していた。けれど雫はそれが自身だったなんて微塵も思わなかった。

家族同然のように過ごしてきた大切な幼馴染。その幼馴染からの本気の告白に雫はどうすればいいのかわからなかった。

これまで告白されたことはあった。主に女子生徒から……。けれど、雫はそのつもりは一切なく断ってきた。

碌に話したこともない人と付き合うことはできなかったし、天性の洞察力から下心を持って告白してくる人はすぐにわかる。

しかし今回はそれが無い。浩二は光輝達と共に家族同然に過ごしてきた間柄で良く知っているし、この告白が本気だということも伝わってくる。

雫自身も浩二のことは大切に思っている。だけどそれは？ 幼馴染”としてでだ。これまでずっと？ 大切な幼馴染”として接してきて

いた為に雫もまさか自分自身が浩二の想い人とは露にも思わなかった。

「香織が南雲に告白するのを見て思ったんだよ。俺も自分の気持ちを雫に伝えないときつとわかって貰えない。言わないとずっと？幼馴染」として終わってしまうって。だから俺も香織お得意の突撃を見習って改めて雫に言う」

今にも爆発しそうな心臓を押さえながら小さく息を吸って気持ちを整えて再度言う。

「俺は八重樫雫が好きだ。本気で惚れてる。だからこれからは？幼馴染」としてではなく？恋人」として俺の傍にいてください」

改めて想い人に想いを告げた。

雫とでは分不相応であると理解しながらも長年の想いを言葉に変えて告げた以上はもう？幼馴染”には戻れない。今の関係が壊れることに怖くもあり、戸惑いもあった。けれど、ここで想いを告げなければこのまま一生幼馴染としての関係で終わるかもしれない。そう思った浩二はここで幼馴染としての関係に終止符を打ちに来た。

浩二の告白に対して雫は……。

「…………ごめんなさい」

今にも消えそうなか細い声を振り絞るかのように謝った。

それを聞いた浩二は「…………そっか」とどこか納得したかのように答えて部屋から出て行く。

「お休み」

最後にそれだけを告げて浩二は部屋を後にする。

(ある意味、当然の結末だったな…………)

そもそも本当に雫を護りたいと思うのであれば？トータス”に転移する前に教室の外で昼食を取るように誘導すればいい。少なくともトータスよりも命の危険性は少ない。

けどそれをしなかったのは雫を恋人にしたいという下心があったからだ。原作知識があればうまく立ち回れる。脇役である浩二で

もヒロインの主人公になれるという打算は確かにあった。

いや、むしろそうしなければ、才能も素質も容姿も何もかもが平凡である浩二にはこのトータスに転移でもしなければ雫を恋人にできる可能性は皆無に等しい。だから原作知識があるこのトータスでその可能性に賭けるしかなかった。そうしなければ雫が他の誰か、もしかしたらトータスから帰還してきた南雲ハジメに惚れてしまうかもしれない。

(前の戦いで少しは主人公になれたと思ったけど……)

所詮それは原作知識があつたからこそ。言つてしまえばズルだ。結局、自身は物語の脇役というポジションから何も変わっていない。(所詮、脇役とヒロインは結ばれない運命だつたつてことか……)

そう思うとフラれた悲しみよりも笑いが出てくる。

(それにしても意外に平然としているな、俺……。もつとショックを受けると思つたけど)

本気で雫の事が好きだつた。心から惚れていた。

だから道場でも雫や光輝に負けながらもずっと頑張つてきた。雫につり合う男になろうと色々と努力してきたつもりだつたにも関わらず、浩二は予想よりもショックが小さいことに驚いている。

(もしかしたら、どこかで諦めがついていたかもしれないな……)

あれだけ何度も諦めようと思つた。それでも諦めずに一途に想い続けて雫の為に頑張つて来た。けれども実際に告白して見事に玉砕したにも関わらず、なんともない自分自身にやっぱり無理だつたかと諦観の念を抱いていたのかもしれない。それなら平然としている自分にも納得できる。

(さて、荷物を纏めて朝一番に王城を出るとしますか……)

明日からは自分が死なないように強くなろう。そう思い、自分の部屋と研究室に赴こうとした時。

「……浩二さん？」

「王女様？」

浩二は廊下でリリアーナと遭遇した。

「こんな夜遅くにどうしたのですか？ 早く休まれた方がいいですよ

？」

「そ、その……少し浩二さんとお話ししようと思ひまして……」

「ああ」

浩二は納得する。

リリアーナの性格を考えれば明日の朝に王城を出る浩二と話が出るのは今晚で最後だ。なら別れ話でも思つて部屋に訪れようとするのは当然だ。

「では一緒に部屋まで行きましょうか。ああそれと、テイニアさんの件についてありがとうございます。クビは免れなかつたですけどあの人なら他でも仕事はみつけられるでしょうから」

テイニアを庇ってくれたことに礼を告げて部屋まで共に行こうとする浩二にリリアーナは言う。

「浩二さん。その、大丈夫なのですか？」

「大丈夫とは？」

「……泣いておられますわ」

「え？」

リリアーナに言われて初めて気づいたと言わんばかりに浩二は自身の頬に触れると涙で濡れていた。

「あれ？　なんで……？」

自分でもどうして涙を流しているのが理解出来ず、けれども涙は濁流のように頬に伝つて流れ落ちる。

「おかしいな？　どうして俺、泣いてんだ……？　どうして涙が、止まらないんだ……？」

袖で何度も涙を拭うも涙は次々と溢れ出てくる。

浩二自身、どうしてこんなにも涙を流しているのか理解ができず、そんな浩二にリリアーナはそつと自身の胸元に抱き寄せる。

「ここは私しかおりませんわ。ですから下手に我慢するよりも吐き出した方がいいですわよ？」

とても優しい声で浩二の髪を撫でる。

「何があつたのかはわかりませんが、泣きたい時は素直に泣いていいと思ひますわ」

リリアーナから伝わる温もりと、優しい言葉に浩二は空っぽだった胸に感情という激流でも流れ込むかのように押し寄せてそれが涙となって双眸から零れ落ちる。

「……………ひぐ……………うっ……………」

唇を噛み締めながら必死に声を押し殺しながら感情と涙を吐き出し、リリアーナはそんな浩二をただ黙って抱きしめる。

その時、浩二はようやく気付いた。

それは自分でも気づかないぐらいに心から雫に惚れていたことに。だからフラれたことに浩二自身でも気付かないぐらいにそのシヨックは大きかった。

だからこそ、必死だった。いや、余裕がなかったとも言えるだろう。

浩二は今いる世界が創作物の世界だとわかっている。そして、主人公^{ハジメ}がいる限り自分はこの創作物の脇役でしかなく、雫はヒロイン。いずれは主人公と結ばれる運命にある。

浩二はその運命を変えたくて必死だった。心から惚れた女を主人公^{ハジメ}に奪われたくなく、必死に努力した。だけど自分には何も無い。ヒロイン^雫に振り向いて貰えるような誇れるものは何一つない。

あるのは原作知識。だから雫と恋人同士になるには浩二はそれに随うしかなかった。

色々理由をつけて、主人公^{ハジメ}を見殺しにして、幼馴染である光輝の自己解釈を利用して、取れるべき手段を取り、時には誘導したのも全ては雫^{ヒロイン}に振り向いて貰う為。

例えばそれがどんなに最低でも、打算的なことであつてもそれしかないのならそれを使うしかなかった。なにもない、ありふれた脇役がヒロインと結ばれるにはそうするしかなかったのだ。

それだけ浩二は雫に惚れていた。だからヒロイン^雫に相応しい主人公^{ハジメ}になりたかった。

だけど気がつかないうちに道を踏み外していた。

雫に振り向いて貰うことばかりに意識したせいで姑息で卑怯な手段まで取るようになったことに浩二はフラれてようやくその事に気付いた。

——けどもう遅い。

道を踏み外した代償は大きく、浩二の雫に対する想いも、これまでの努力も涙に変わって零れ落ちていった。

脇役21

雫に想いを告げた浩二は見事に玉砕した。

リリアーナに慰めながら、自身がどれだけ最低な人間だったのかとフラれて初めて気づいた浩二は次の日の早朝に王城を出た。

一人黙って王城を出て行く浩二を見送る者は誰もおらず、浩二は一人静かに王城を出ようとその足を動かすと、浩二の前方に誰が立っていた。

「たくつ、別れの挨拶ぐらいさせろつての」

「龍太郎……」

「せめて見送りぐらいさせてくれ」

「メルド団長……」

そこには幼馴染である龍太郎と騎士団長であるメルド団長がいた。

そんな二人を見て浩二は……。

「見送りなら、もう少し花があつてもいいと思うけどな」

「ならこんな朝早くから出て行こうとすんじゃねえよ。お前の事だからこうするんじゃねえかなと思つて昨日からずっとここで待っていて正解だつたぜ」

（一晩中ここで待っていたのか……）

変わらないの脳筋に嬉しいような悲しいような心境だ。

すると龍太郎は前に出て浩二に言う。

「浩二。俺を殴れ」

「は？」

「いいから殴れ。おもつきりな。手加減なんかすんじゃねえぞ」

頬を差し出してくる龍太郎に浩二は迷いもなくブン殴った。それも？「魔力硬化」で拳の強度を上げた状態で。

「グオツ!!」

何度も地面を跳ねて十メートルぐらいは殴り飛ばされた龍太郎に本当に本気で殴った浩二にメルド団長は頬を引きつかせる。

お互いの事を良く知っている幼馴染だからこそ遠慮も容赦もないのだろう。

「?焦天”。で? 気は済んだか?」

中級の回復魔法を施して言いたいことがあるのならさっさと見えと言外に告げる浩二に龍太郎は拳を天に向けて言う。

「……俺は、強くなる。もう幼馴染のお前だけに全部背負わせることは絶対にしねえ。強くなつてみせる……」

拳を握りしめて決意を言葉にする龍太郎の変わらない脳筋に浩二は肩を竦めるも、その顔はどこか安心するかのように笑みを作っている。

龍太郎もずっと浩二のことを気にしていた。自分が不甲斐無いわかりに浩二に負担を強いらせていることに。だから龍太郎はその一発を持つて気合を注入した。

すると今度はメルド団長が浩二の肩に手を置く。

「浩二。俺を含めてお前に助けられている者は多い。お前に何もしてやれない自分が情けないが、これだけは言わせてくれ。ありがとう、お前がいたからこそ俺達はここにいる」

「……はい」

(その言葉だけで十分ですよ……)

むしろ礼を言うべきは、謝るべきは浩二自身にある。

これまで雫に振り向いて貰う為だけに命の危険を晒したのだ。どうせ死なないから問題ないと高を括つて。それに気付いた今、その感謝の言葉を素直に受け取ることができない。

メルド団長に感謝の言葉を告げられ、ダメージから回復した龍太郎は起き上がる。

「それにしてもよお、光輝はともかくなんで雫まで来ねえんだ? あいつなら絶対に来ると思つたんだが……」

疑問を口にする龍太郎に浩二は仕方がないと内心思った。

告白してつった男にどんな顔をして会えばいいのかわからないのだから。雫の心情を思えばこの場に顔を出さないのは頷ける。

「まあ、仕方がないさ。皆が皆、龍太郎みたいな脳筋じゃないんだし」

「おいコラ」

「だから龍太郎。光輝を、雫を、皆を頼む」

「……おう」

幼馴染の頼みに応じる龍太郎に浩二は「ありがとう」と告げて二人に見送られながら王城を後にする。

(そういえば一人で行動するなんて二度目の人生では初めてだな……)

これまではずっと幼馴染達と共に行動してきた。色々と面倒や苦労も……苦労が圧倒的に多かったけど、いざ一人になってみるとその苦労もいい思い出の一つだ。

(とりあえず、俺のやるべきことは変わらない。「エリセン」に赴いてそこで神代魔法である再生魔法を手に入れる)

例え雫にフラれたとしても行動方針は変わらない。死なない為にも神代魔法は必須だ。その為にもまずは「エリセン」に足を運び、ハジメ達と合流する。

その為に海人族が生活している「エリセン」に堂々と正面からは入れるように公の理由も作っておいた。そして万が一にもハジメ達と合流ができなかつたらその時は、自力で攻略を目指すしかない。

今の浩二での迷宮を攻略の成功率は甘く見積もって三割といったところだろう。そうなったら博打だ。できれば避けたい。

(でも再生魔法は俺には必要だ。絶対に手に入れないと……)

それから先の激戦にも備えて【エリセン】に向かう道中で浩二はその足を止めた。

「お待ちしておりました。浩二様」

そこにいたのは勇者である光輝に平手打ちをかましてクビになった元浩二の専属使用人であるティニアだ。いつもと変わらないメイド服にその近くには私物と思われる荷物が置かれている。

「自らの功績を使ってでも私の罪を軽くして下さい、ありがとうございます」

そう言って深々と頭を下げるティニアに浩二は首を横に振る。

「いや、俺はそこまでしたいことはありませんよ。どちらかという王女様のおかげでしょうし」

「それでも浩二様にも助けて下さったことには変わりありません」

それでもテイニアはただ浩二に感謝する。あまりの感謝にむず痒く思わず頬を掻いてしまう浩二にテイニアは顔を上げて告げる。

「浩二様。どうか私も貴方様の旅のお供をさせてください」

「え？ でも……」

「危険は始めから承知の上です。己の身ぐらい己で守りますからどうか……」

浩二の旅に同行を求めるテイニアだが、浩二は髪を掻きながら言う。

「お断りします。俺が向かうところはテイニアさんには荷が重すぎるぐらい危険な旅です」

「覚悟の上です」

断るも本人はそれでも確固たる強い意思を見せる。

「テイニアさんならクビになってもどこかで安全な仕事を見つけることぐらいできるでしょう？ それに家族だっているのではないですか？ 生活だって……」

「私は元々捨て子でリリアーナ姫殿下に拾われた身です。それゆえに家族はおりません。身を寄せる場所も働いたために必要なツテもない以上は後はこの身体を売るしか生きる術はありません」

「……え？ ちょよ、ちょよと待つてください！ それならどうしてあんなことしたんですか!?!」

勇者である光輝に手を出せばクビになることも、重い処罰を科せられることぐらい誰だって理解できる。それでも浩二はきつと何かしらの保険ぐらい用意していると踏んでいた分、驚きを隠せなかった。

「あの馬鹿の暴走はいつものことです。子供の頃からもう慣れていきます。それなのにどうして……?」

「何も知らないのに好き勝手に浩二様のことを悪く言ったあの勇者がどうしても許せなかったのです。ですなのであの勇者を叩いたことには何の後悔もありません」

「いや、後悔してくださいよ。そのせいで……」

「例え路頭に迷うことになったとしても私はあの行動に一切の後悔は

「ごいません」

「どうして、そこまでして……」

浩二はティニアの原動が理解出来なかった。

どうしてそこまでして自分の為にならなくてくれたのか？ それが多分わかっていないでいた。

——すると。

「貴方様のことをお慕い申し上げます。そうお答えしたら納得して頂けますか？」

「え……う？」

まるで鳩が豆鉄砲を食ったようポカンとしている。まさに、何を言われたのかわからない様子だ。しかし、時間が経つにつれてようやく意味が脳に伝わったのか、浩二は生まれて初めての告白に耳まで真っ赤になる。

「い、いやいやいやいや!! ちょっと、ちょっと待って!! え？」

え？ どういうこと？ ティニアさんが俺のことを？ え？ 嘘でしょ？ どこでフラグを立てた俺？ あれ？」

浩二は混乱した。

平静さも冷静さも時空の遙か先に放り投げたかのように混乱を極める浩二にティニアが言う。

「まだ使徒様達がこちらの世界に転移される前、私は医者から余命一年と宣告を受けました」

「え……一年？」

「はい。とある難病を患って今の医学では治す手段がないとそう告げられました。私自身、私を捨ててくださいたりリアーナ姫殿下に何の恩返しもできず、心苦しい思いをしておりました」

だが。

「しかし、奇跡が起きました。浩二様、他の誰でもない貴方様が調べてくださった薬のおかげで私は命を救われたのです」

ティニアのその言葉に合点がいった。

天職が？ 医療師？ だと判明されたその日からリアーナより数多くの薬の調合をさせられた。恐らくはそのなかにティニアの病を治

す薬もあつたのだろう。

リリアーナは臣下を救う為に薬を調合するようにと浩二にお願いしたのだ。

「だけどそれは……。」

「それならなおさら、あんなことをするべきではなかったはずですよ。俺は王女様に言われた通りに薬を調合しただけ。それ以上でもそれ以下でもありません。結果的にそうなたただけです」

「それでも命を救ってくださった事実には変わりありません。それに浩二様の専属使用人を任され、私は貴方様の人柄に触れ、懸命なそのお姿に心惹かれたのです。ですので私を貴方様のお傍に置いては頂けませんか？」

そう言ってくれるのは素直に嬉しかった。

いや、嬉しくないわけがない。生まれて初めてそれも日本ではまずお目にかかれない美女に告白されて喜ばない男などいない。それでも浩二は……。

「……その気持ちは素直に嬉しいです。だからこそ、俺はその想いに応える資格はありません。俺は惚れた女に振り向いて貰う為に姑息で卑怯な手を使った最低な男です。フラれるまで俺はそれに気付かなかった」

自己嫌悪する。

浩二は今なら昨夜、雫にフラれてよかったと思っただけ。仮に告白に成功していても雫の彼氏だと誇れることはできない。そんな最低な男に誰かの想いを応える資格などない。

この旅は自身が死なないように力を手に入れると同時に自分自身を見つめ直す反省の旅でもある。

（反省したところで俺と雫との関係はもう戻らないけど……）

雫が見送りに来なかったことの浩二は内心安堵していた。どんな顔をすればいいのか、わからなかったからだ。

（でも俺よりも雫の方が問題だな……。雫、ああ見えて乙女だからきつと俺以上に傷ついてる……）

一応リリアーナに雫を気に掛けて貰うように頼み、龍太郎にも頼ん

でおいた。

酷いことを言つて、それで放置。本当に最低だなと自己嫌悪する浩二にティニアが口を開く。

「ですがそれはそれだけ本気だったのでは？ 惚れた人に振り向いて貰う為に一生懸命だったからではないのですか？」

「それは、そうかもしれないですけど……」

「確かに浩二様は最低なことをしたのでしよう。しかし、裏を返せばそれだけ一途に想っていたとも思えます。やり方はどうであれ、その気持ちは、想いは本物の筈です」

ティニアは浩二の頬に触れながら言う。

「その証拠に涙の流れた痕が残っておりますよ？」

「!？」

先の龍太郎はともかくメルド団長ですら気付かなかつたのに流石は女性ということもあつて確かに消したと思つていた僅かな痕跡にすら気づいた。

「……それでも、俺が貴女の気持ちに応えるかどうかは別問題です」

「今はそれで構いません。旅の同行を許して頂けるだけで僥倖です。まあ、もし、同行を許して頂けないのでしたらもう身体を売るしかないのですが、それは浩二様のせいではありませんのでお気になさらず」

「自分を脅迫材料にしないでください」

まさかの脅迫に浩二は諦観するかのような深い溜息を溢す。

「……わかりました。もう好きにして下さい」

「はい。好きにさせて頂きます」

こうして浩二は旅の同伴者としてティニアと共に【エリセン】を指すのであった。

脇役22

勇者パーティーを抜けた浩二は「メルジャーネ海底遺跡」に挑戦する為に「エリセン」を目指して旅を始めた。

当初は一人で「エリセン」に向かう予定だったが、予定外の同行者と共に旅をしている。

「風が気持ちいいですね……」

馬に乗りながら吹いてくる風に銀色の髪が靡きながら心地よさそうにそう言う浩二の元専属使用人であるティニアに浩二は再度溜息を溢す。

(本当……わからないなあ)

雫にフラれて現在進行形で失恋中の身である浩二はどうしてこんな美人な人が自分に好意を寄せてくれていることがわからなかった。

光輝はいつも通りとして……ハジメもまあいい……浩二はその二人に比べればたいしたことではない。それに自分が最低な男だと知って自身の評価はかなり低い認識で、むしろこんな人間を好きになるなんてあり得ないと思ってる。

自身を好きになった経緯は教えて貰っても浩二はそれを素直に信じる事が出来ないぐらい自己嫌悪しているのだ。

(どうするかなあ……)

ティニアの想いに応えるべきではない。少なくとも今の浩二はそう思ってる。

いくら好いてくれるとはいえ、最低なことをした自分がその想いに応える資格などない。だから諦めて欲しいと、そう考えているが……。

チラリ、とティニアに視線を向けると浩二と目が合ったティニアはにつこりと微笑みで返してきた。

「どうかさされましたか?」

「……いや、なんでもない」

視線をティニアから逸らして前を見る。

恐らくは浩二が何を言ってもティニアは浩二のことを諦めないだ

ろう。確信はなくともそんな気はする。

(南雲を見る香織と同じ眼をしているもんな……)

伊達にハジメに恋をした香織の手助けをしてきたわけではない。テイニアが浩二に向けるその瞳は香織がハジメを見る瞳と同じなのだ。

諦める気は微塵もない。その瞳の奥にその意思が宿っている。

今まで女子から告白されたこともなければ好意を向けられたこともない浩二にとってテイニアの告白は本当に衝撃的なものであったし、嬉しかったけど今の浩二はその想いに応える気はない。

(可能性は低いかもしれないけど……どこかの町で仕事を斡旋して貰えるように頼んでみるか)

仕事が見つつかれば身体を売るなんて馬鹿な真似もしないだろうし。そう思いながら馬を歩かせていると前方に町を発見した。

(どうやら今日は野宿しなくてよさそうだ)

浩二はテイニアと共に町に向かう。

「これは使徒様！ ようこそ我等の町へ！ ささつ、どうぞお通り下さい」

門番にハイリヒ王国の紋章が施されたワツペンを見せると門番は畏まった態度で浩二達を町に招いた。

流星は国家権力。色々と融通が利く。

そして浩二達が訪れた町の名前は「ドルフ」というらしい。町中はそれなりに活気があり、「オルクス大迷宮」を攻略の際によく足を運んだ【ホルアド】ほどではないが露店も結構出ている。

「浩二様。先に宿を取られた方がよろしいかと」

「どこかいい宿屋があるかわかりますか？」

「はい。私の記憶通りでしたらこの先に？アルドの宿」があります。そこになさいますか？」

「そうですね。そこにしますか」

テイニアの案内の下で浩二は？アルドの宿」に足を運ぶと一階は食堂になっているのか、複数の人間が食事を取っており浩二達が入る

と視線が二人、いや、ティニアに集まるが当の本人は完全無視^{スレ}。

その視線に気づいた浩二はまあ、美人だからな。と思いつながらカウンターらしき場所に行くと、女性が現れる。

「いらつしやいませ。ようこそ？アルドの宿」へ。本日はお食事だけですか？ それとも宿泊でしょうか？」

「宿泊をお願いします」

「かしこまりました。何泊のご予定ですか？ 別料金で食事もご用意できますが」

「一泊で食事は夕食と明日の朝食の分。計二食で」

「はい、承りました。お部屋は二人部屋でよろしいですか？」

チラリ、とティニアに視線を向けて二人部屋にするかどうか尋ねてくる宿の女性。その瞳は「今晚はお楽しみかしら♪」と語っている。

もちろん断じて否だ。浩二は一人部屋を二つ用意して貰おうと頼もうとするが……。

「はい。二人部屋をお願いします」

先にティニアがそう答えた。

「ちよ、ティニアさん！ なに勝手に決めているんですか!? すみません、一人部屋を二つをお願いします」

勝手に二人部屋を頼むティニアに文句を投げ、改めて一人部屋を二つ頼む浩二だが。

「浩二様。二人部屋の方が料金は安く済みます。節約するべきかと」

「これぐらい必要経費です。それに金には困ってないでしょう？」

一応とはいえ、浩二は神の使徒の存在と名声を上げるといふ名目の下で活動している。その為に金銭的問題は全て国がどうにかしてくれるのだ。だから宿の代金ぐらいどうってこともない。

だがティニアは……。

「それに一緒のお部屋でないと浩二様にご奉仕できないではないですか……」

奉仕できないことに不服そうに言うティニアに食堂にいる男性達から嫉妬の眼差しを一身に受ける羽目になった浩二は思わず冷汗が流れる。

「あらまあ……」

そしてカウンターにいる女性が愉快そうに笑みを浮かべる。

「じ、自分の世話は自分でできますから。とにかく一人部屋を二つ。これで決まり。すみません、一人部屋を二つで……」

お願いします。と宿の女性に言おうとした際、ティニアは数枚の金色の通貨を宿の女性に手渡すと女性は何も言わずに頷いて浩二に言う。

「お客様、申し訳ございません。ただいま空いているお部屋が二人部屋しかございませんのでこちらが部屋の鍵になります」

「まさかの買収!?! さっき節約かどうか言っていたのにそれじゃ意味ないでしょう!?!」

「必要経費です。さあ、部屋に参りましょう」

鍵を受け取って自身と浩二の荷物を手にして部屋に向かうティニアに浩二は文句を言いながらその後を追いながらも結局は二人部屋で落ち着く結果になったのであった。

部屋に入ると荷物を置いて浩二は久々のベッドの上に横になると慣れない旅の疲れですぐに眠りついて、目を覚ますとティニアに膝枕されていたことに驚いて思わず飛び起き、食堂で夕食を取るも「あゝん」と場所もお構いなく食べさせてくるティニアに浩二は周囲の男性達からの血涙を流すかのような激しい嫉妬の眼差しを食事中ずつと浴び続けて味がまったりわからずに食事を終える。風呂場がない宿の為に濡れタオルで身体を拭こうとするもティニアが浩二の身体を拭こうとしてくるが、浩二はそれを断る。しかしそれならばとティニアは「私の身体を拭くか、私に身体を拭かれるか。どちらがお好みですか?」と服に手をかけて今にも脱ぎようとしてくるティニアの脅しに浩二は洩々とティニアに身体を拭かれる羽目になる。「これもうセクハラですよね? そうですよね?」と言う浩二の意見はもの見事に無視^{スルー}。そして寝る前になると薄着となったティニアはごく自然な動きで浩二と同じベッドに入ろうと……。

「いや、ちょっと待って! おかしい! これはおかしいから!」

「浩二様。夜中に大声を出してはいけませんよ? 他のお客様にご迷

惑です」

「なにここで当たり前のことを論ずように言っているんですか!? セクハラされて危うくスルーしそうになったけど、恋人同士でもないのに一緒に寝るなんておかしいでしょう!? 二つあるんですからあっちの方で寝てくださいよ!」

ビシッ! ともう一つのベッドに指差す浩二だが、ティニアは平然とした態度で言う。

「夜のご奉仕という意味でも私は構いませんが?」

「俺が構います! というかなに失恋中の男にそんなこと言っているんですか!? 寝る時ぐらい一人で寝させてください!」

気持ちを落ち着かせる為にも一人で考え事に集中したい浩二にティニアは言う。

「だからこそですよ。だからこそ、こうして一緒に寝ようとしているのです。傷心中の浩二様を体を使って慰めて浩二様の気持ちを私に振り向かせようとしているのですから」

「それって……」

「はい。とても卑怯で打算的、更には女という武器を使った狡猾な方法です」

それは浩二が雫に振り向いて貰う為に行つたのと同じだ。それをティニアが浩二にしている。

「どんなことをしても振り向いて貰いたい。この人の? 特別”になりたい。それは誰もが抱く気持ちです。ですので私はその気持ちを卑怯とは思いません。どんなことをしても振り向いて貰いたいのですから私はこれからも浩二様に姑息で卑怯で狡猾な、ありとあらゆる方法で浩二様を振り向かせてみせます」

「ティニアさん……」

「それだけ私が本気で貴方様をお慕いしていることを証明してみせます。どうやら浩二様は自己評価も低く、妙に屁理屈ですから骨は折れそうですけど……」

「うっ……」

半眼でそう言われて浩二の胸に見えない剣が突き刺さる。

「それに浩二様は報われるべきです。私のように貴方様のおかげで救われた命もあるのですから。私でよろしければいっぱい甘やかしますし、慰めてもあげます。望まれることを全て受け入れてみせますからまずは私に我儘の一つでも仰ってください。そうすれば私も浩二様の好感度をあげることができますから」

それも結局は自身に振り向いて貰う為の打算的な方法なのだろう。それでもテイニアがそれだけ本気だという気持ち伝わってくる。そんなテイニアに浩二は横になって背を向けた。

「……明日も朝は早いのですからもう寝ましよう」
ただ一言だけそう告げる浩二にテイニアは哀愁漂うその小さな背にそつと寄り添う。

「お休みなさいませ。浩二様」

「……おやすみ」

そうして二人は眠りについた。

脇役23

月が消え、朝日も顔を出していない宿の一角で風を切る音が響く。その音の正体は南雲ハジメより頂いた刀を振るう浩二であり、人気がない宿の一角で浩二は日本で身に付けた八重樫流の剣術を振っている。

長年に渡って毎日のように振り続けた八重樫流の技が風を切る音と同時に披露される。

その動きは洗練されて、流れるような自然さを以て振るわれる。

——だが。

「……ダメだ、こんなんじや」

浩二は自身の動きに当然のように納得しなかった。

幼少の頃よりずっと振り続けた剣術、鞘術、体術、投擲術。どれも必死に努力して毎日のように振るってきた。それでもどれだけ努力しても雫にも光輝にも及ばなかった。

——才能の有無。

それが雫や光輝との差だろう。

なにより今はそれ以前の問題として技の冴え以上に心が荒れている。

八重樫流の道場で剣術を習い始めた時から精神を整え、静かな状態を保つ教えを受けてきた浩二は精神を整えて静かな状態を保とうとしてもあの夜のことを思い出してしまう。

「女々しいんだよ、俺は……ッ！」

型も何もないただ自身の心を表すかのように我武者羅に刀を振るう浩二はまだ雫のことを諦めきれていなかった。

雫に想いを遂げて見事に玉砕した浩二は後に自身の取り返しのつかない愚かさと過ちに気づき、雫に抱く恋心も想いも何もかも諦めて死なないように強くなろうと決めていた。けど、それでもまだ諦めきれない想いが確かに浩二の胸の中に宿っている。

初恋は涙と共に捨てた。その筈なのに浩二はまだ女々しくも雫に想いを寄せていた。

刀を振りながら必死に雫の事を諦め、幼馴染もしくは友人として接するようになり気持ちを切り替える。

「雫は幼馴染、そう幼馴染だ。香織や龍太郎……ついでに光輝と同じ大事な俺の……」

幼馴染。そう言葉にするのは簡単なのに口が動かなかった。

「ああ、もう！」

女々しい自分に、諦めきれない自分自身に苛立ちと共に刀を振るう。

「どんだけだよ、俺!! 香織のこと何も言えねえ!」

現在ハジメと共に行動している幼馴染に文句一つ言えない。

だがしかし、それは無理もない。今の平野浩二は雫に想いを寄せていたから形成された存在と言っても過言ではなく、雫を諦めるということは己のこれまでの人生を否定することに繋がる。それ故に一度フラれた程度で諦められるほど浩二は大人ではなかった。

それから暫く、もはや型とは呼べない滅茶苦茶な素振りを行い肩で息をしながら呼吸を整えながらぼやく。

「こんなんでこれからどうすんだよ、俺……死ぬぞ……」

死なない為にも強くなるといけない。しかし、今のままでは死んでしまう。死なない為にも雫の想いを断ち切らなければいけない。

「こちらにおられましたか」

「ティニアさん……」

呼吸を整えている時、旅に同伴しているティニアが浩二の元に歩み寄り、浩二の持つ刀に視線を向ける。

「浩二様は剣術も扱えるのですね」

「……雫や光輝に勝ったことはありませんけど」

自虐気味に告げる。

(今じゃもつと勝てないだろうけど……)

雫の天職は？ 剣士”。で光輝は？ 勇者”。そして二人共、？ 剣術”の技能を所持している。投擲のみならともかく剣術はもう天と地ほどの差があるだろう。

(浩二様の自己評価の低さはその劣等感のせいでしょう……)

間近に天才がいればどうしても劣等感を抱いてしまう。浩二がまさにそれだ。それでも剣術を捨てることも諦めることもしなかった為に自分自身の評価まで低くなってしまったとティニアは推測する。(浩二様も十分凄いい方ですのに……)

それは惚れているからではなく、鼻肩目抜きでティニアはそう思っている。

医学を身に付けるだけでも相応の努力が必要だ。それなのに技能もなく剣術を使える浩二は本当に血を滲むような努力をされてきたことがわかる。

才能もなく努力のみでそこまで成し遂げた浩二のその根性と精神力はもはやアザンチウム鉱石に匹敵するだろう。

自己評価の低さゆえに本人はそれを認めようとはしないだろうが……。

(今ここで言葉を尽くしても聞き入れてはくださらないでしょう。少しづつ自信をつけさせていくしかありませんね。後は私に振り向いて貰えるように気持ちを誘導させれば浩二様を私のモノにできますし)

ティニアは打算的ではあるも、とても強かな女であった。

慌てることも急かすこともなくゆつくりと浩二の心を己に向かせる為にあらゆる方法を模索して行動する。浩二の心を驚掴みにする為。

「浩二様。そろそろ朝食のお時間になりますので共に参りましょう」

「もうそんな時間か……。わかりました」

気がつけばもう朝日も顔を出していた浩二は刀を鞘に収めて食堂で朝食にしようと足を動かすと……。

「使徒様！ 使徒様はおられますか!？」

どうやらすぐに朝食を取ることはできないようだ。

「?アルドの宿」の入口に宿の店主とその従業員それと宿泊客が何事かと思い、集まっている。そんな彼等の視線の先には一人の子供を抱えている親子の姿が見受けられる。

そして朝食を取ろうと足を動かしていた浩二の登場に彼等の視線は浩二に集中し、親子も浩二に気づいて浩二の元まで駆け寄った。

「使徒様！　どうか、どうか我が子を助けて下さい！」

「お願いします！　お願いします！」

抱きかかえる我が子を救う為に必死の思いで使徒である浩二に頭を下げて懇願する親子に浩二は言う。

「落ち着いてください。患者はこの子で？」

「……はい」

父親が子供に被せていた毛布を取ると誰もが目を見開かせた。

何故ならその子供の手足がまるで結晶のようになっていているからだ。

手足が赤黒い結晶になっている子供を見て浩二はすぐに何の病か察した。

「魔結晶病か……」

「魔結晶病ですか？」

「ああ、千人に一人ぐらいの割合でなる魔力が結晶化してしまう病気だ」

魔結晶病。　そう病名を告げる浩二だが、その進行具合に眉根を寄せ

る。
「魔結晶病は最初は手足の痺れから始まって指先から魔力の結晶化が始まる。そこから内臓器官のある所まで症状が進行していき、最後には全身が結晶化してしまう。既に手足の殆どが結晶化している。この子供の身体を考えればあともって一週間が限界だろう」

「……回復魔法で治すことは？」

「逆効果。この結晶は魔力を吸収して症状を悪化させる。回復魔法をかけたらこの子供の命を縮めてしまう」

回復魔法では治せない。　そう告げられて顔を青ざめる親子に浩二は言う。

「だけど俺はこの病気の特効薬を既に調合したはず。何故それを買わないのですか？　薬が広まっていないことはない筈ですが……」

「そ、それは……」

浩二の言葉に言葉を濁らす父親。　母親も浩二から目を逸らす。そ

れに怪訝の表情を浮かべる浩二に宿の店主が浩二に言う。

「使徒様。実は使徒様が調合してくださった薬は我々、一般人には手が届かない程に高額なのです」

「え……？ いや、そんなことは無い筈ですが？」

「本当なんです！ ですから我々も薬が欲しくても買えずに……」

宿の店主それから他の人達の表情を見てそれが嘘ではないことに察する浩二は首を傾げる。開発した薬やその調合方法はリリアーナに広めるように頼んでいるし、リリアーナ本人もそれを了承した。現に「ホルアド」でも浩二が調合した薬が販売されていたが、ちゃんと一般人にも手が届く代金になっていることは確認済みだ。

それがどうしてここだけ高額になっているのか？ それに疑問を抱いている浩二にティニアは耳打ちする。

「恐らくは一部の聖教会の仕業かと。寄付と称して大金を要求する者も聖教会にはおられます。その方々が浩二様の薬を利用して高額で販売し、利益を得ようとしているのと思われれます」

「……教会は碌な奴がないな」

確かに浩二はリリアーナの他に聖教会側にもいくつかの薬を送っていた。しかし、リリアーナ同様に一般人にも手が届く価格設定にするように伝えたはずだが、一部の教会関係者が金に目が眩んで高額設定にしたのだろう。

その高額設定された一つがこの魔結晶病の薬だったというわけだ。「なら誰かその薬を売っているところまで案内してください。俺が言えば素直に薬を渡してくれるでしょうから」

だがいくら高額設定されているからといって薬を調合した浩二が薬を販売している者に一言、譲れとそう伝えればいいだけの話だ。使徒である浩二の言葉にわざわざ逆らう者はいない。

しかし――

「それが、昨日から店がもぬけの殻で、薬が一つもなく……」

「はあ？」

それには思わず浩二も呆気を取られた。

「どうしてまた急に？ ……いや、もしかして」

「浩二様の存在にお気づきになられたのでしよう。それで薬を抱えてこの町から逃げた。そう推測してもよろしいかと」

浩二がこの町に訪れた以上、万が一にバレたらもう薬を売ることは出来ないかと判断したのか、薬を売っている者は浩二に出会う前にとんずらしたのだ。

(面倒なことをしてくれやがって……)

内心舌打ちする浩二だが、薬が売っていない以上は自身で新たに調合するしか術はないのだが……。

(魔結晶病の薬を調合する為に必要な材料が足りない……)

ある程度は手持ちでどうとでもなる。最悪、浩二自身の体内にある薬毒を排出させて改造すれば打つ手はある。だがそれでもどうしても必要な材料がなかった。

(でも、この付近にあるかどうかわからない薬の材料を探すのにどれだけ時間がかかる……?)

旅には目的がある。浩二は一刻も早く「エリセン」に足を運ばなくてはいけない。

ハイリヒ王国の権力が使える浩二は旅人のように無理に「グリューエン大砂漠」を超える必要もなく、貴族や一部の商人など高額を払って使用することができる「エリセン」行きの船(海人族の護衛付き)に乗ることが出来る為、その船に到着するまでまだ日数がある。だからここで足を止めている暇はないのだ。

死なない為に強くなる必要がある。その為に浩二は先を急がなければいけない。

だけど――

(それが患者を見捨てる理由にはならない。間に合わなかった時はその時に考えればいい)

浩二は目の前の命を救うことを優先する。

「薬を調合する為に必要な材料を集めてきます。それまでこの子にこれを飲ませてあげてください。症状を緩和させることができます」

症状を緩和させる薬を父親に手渡し、浩二はティニアに謝る。

「テイニアさん。すみませんが、薬の材料を探すのを手伝ってくれませんか？」

「かしこまりました。ですがよろしいのですか？」

「はい。患者を放っておくことはできません」

心身に染み付いた性分とも言えるだろう。ここで患者である子供を見捨てれば浩二はずっと後悔することになる。それが自分が損する結果になったとしても浩二は目の前の命を救う選択を選ぶ。

そして浩二達は子供の病気を治す薬の材料を探しに向かう。

脇役24

魔結晶病を患った子供の命を救う為に浩二は薬の材料となる素材を探すべく、町付近の森に入ってそれを探している。

魔物がいる森に入るのは普通なら危険だが、浩二は後衛とはいえず、勇者パーティーでは中衛も務めてこの世界の人達よりも高いステータスを持っている為に何も問題ではない。

それに今は？ 投擲”の派生技能に？ 気配感知”があるので近づく魔物がいれば即座に薬液入りの投擲ナイフが魔物に突き刺さる。

しかし、魔物の対処は容易くてもこの広い森の中で薬の材料となる素材を探すのは骨が折れるが、幸運にも浩二にはテイニアがいる。

「この付近には目的のモノはないようですね」

天職？ 探索者”であるテイニアは人や物を探すのに長けている。今も？ 気配感知”の派生技能である？ 広域把握”を使って目的のモノを探して貰っている。

因みにその天職を聞いた浩二はこの人、どうして冒険者にならないんだろうか？ と思った。その天職と技能それとリリアーナの近衛兵として鍛え上げた腕前があれば？ 金”ランクとまではいかなくても？ 黒”や？ 銀”ランクにはなれるはず。

そう思った浩二は思わず「冒険者になつたらどうですか？ きつと人気者になりますよ」と冒険者になることを勧めた。

冒険者向けの天職に技能それにテイニアの美貌があればきつとどのパーティーからも引つ張りだだろう。それに対してテイニアは。「有象無象の人気者になるよりも私は浩二様のお傍におりたいです」

真顔でそう言われて浩二は恥ずかしさのあまり目を逸らした。

本当に浩二に好意を寄せてくれているテイニアに浩二はいつそのこと、この人と恋人同士になればと思った自分を殴った。

いくらなんでもそんな理由でテイニアと付き合うのは本気で浩二に好意を寄せてくれているテイニアに対して失礼過ぎる。テイニアを自身の逃げ道、諦める理由にしてはいけない。

「……思っていたより時間がかかりそうだな」

出来ることならさっさと発見して薬を調合し、患者であるあの子供を治してすぐにでも出発したいが、世の中そう甘くはない。

「それでしたら保安署に掛け合い、国から薬を提供してもらおうという手もありますか？」

「それだと時間がかかります。その方法だと一番早くても一週間。その間に症状が少しでも悪化すれば患者であるあの子供が死んでしまいます。そんなギリギリな方法を選ぶぐらいなら俺が直接、素材を探して調合した方が早いです」

（それに聖教会が絡んでいるのならあの親子に高額な代金を請求する可能性もあるしな……）

まさか自身の調合した薬が高額で販売されていることに気づかなかった浩二は聖教会に文句を言おうと心に決めた。

「……」

「ティニアさん……？ どうしましたか？」

不意に無言となつてじつと見つめてくるティニアに浩二は声をかける。するとティニアは……。

「浩二様。以前から思われていたのですが、私に敬称は不要です。あと敬語ではなく普通に話しかけてください」

「え？ いや、でも、失礼ですけどティニアさんって俺より年上でしよう？」

「確かに私は19歳で処女ではありませんが」

「二つ目は訊いてません」

年齢を訊いただけなのに男性経験がないことまで聞かされて思わずツツコミを入れてしまう。

「敬称や敬語を使われると浩二様との距離を感じてしまいますので、できれば失くして頂けると幸いです」

「はあ……でも、俺の国では年上には敬意を払うものなので、つい……」

日本で染み付いた教育や環境に年上には敬意を払う様に接している。むろん、敬意を払うのはその相手にも寄るが、浩二にとってティニアは十分に敬意を払う人である。

「浩二様の国の教育はとても素晴らしいものだとは思いますが、それは本人の意思を無視してまで行わなければいけないことなのですか？」

「いや、そんなことは無いと思いますけど……」

「それでしたら敬称も敬語も取って頂いても構いませんね。これからは私の事はティニアとお呼びください。敬語も不要です」
「でも……」

それでもと思う浩二はどうすればいいのか頬を搔く。真面目とも思われるも日本で育った日本人だからどうしても抵抗がある。

「……まあ、すぐにとは申しません。どうやら浩二様に振り向いて貰うにはまだまだ時間がかかるとわかっただけでも収穫としましよ
う」

無理強いはせずに改めて目的のモノを探し始めるティニアに浩二は申し訳なく思う。

(甲斐性なし、だな……)

男なら甲斐性の一つぐらい見せるべきなのにそれすらできなかつた自分に呆れる。

それもまだ未練たらたらに雫を想っている自身の諦めの悪さが原因だ。

(いい加減に諦めろよ、俺……)

フラれたことをきっかけに諦めようとするも、諦めきれず未練がましくも雫の事を考えてしまう浩二はそんな自分に溜息を零しながら目的のモノを探していると……。

「これは……」

「はい。この付近に誰かいます。それも衰弱していますね」

？気配感知”によって捉えたその気配を頼りにその場に向かって駆け出すと、そこには一人の美女がいた。

見た目は二十代前半ぐらい。浩二の魔力色と同じ腰ぐらいまである長い灰色の髪をし、和服のような衣服を身に纏うその美女は全身が傷だらけで意識がないのかぐったりと倒れている。

浩二はすぐに診察に入ると、全身の傷が酷くて魔力が枯渇している

ことがすぐに判明。そして心身が疲弊して衰弱しつつある。

(意識を失って丸二日つてところか……)

診断を終えてすぐに治療を開始する。枯渇した魔力を？讓天”で回復させて肉体の傷を？聖典”で癒して体内に蓄積している疲労は魔法薬を飲ませて、ひとまず命の危機は脱した浩二は改めて首を傾げた。

(どうして竜人族がここにいるんだ……?)

すぐに治療した美女が竜人族だと気づいた浩二は怪訝そうにする。

原作では確かに竜人族は存在しているが、普段は竜人族の隠れ里で生活して表舞台には関わらない種族の掟がある。しかし例外を上げるとすれば？異世界からの来訪者”について調査する為に隠れ里から出てきた、ハジメと行動を共にしているティオクラルスただ一人。

それ以外の竜人族は隠れ里にいる筈なのに、どうしてティオ以外の竜人族がこんなところで死にかけていたのか、浩二は？侵入”の派生技能である？記憶操作”を使ってその竜人族の記憶を覗き込む。

(……なるほど。目的はティオクラルスと同じ？異世界からの来訪者”の調査。ティオクラルスとは別方向からその調査をしていたってことか……)

ティオクラルスと同じ理由で里を出てきたが、それが何故こんなところで衰弱していたのか……。

(……おい、ちょっと待て。どうしてこの人はここでアレと……ツー) 記憶を覗いて竜人族である彼女が倒れているその理由にありえないと浩二は心から思った。

それは偶然的な遭遇であったとしても相手に彼女を殺す理由がなく、見逃したとしても浩二の心に焦りと恐怖が生じる。

「浩二様……？ 大丈夫ですか？」

「……はい、大丈夫です」

心配そうに声をかけてくるティニアだがそれも無理はない。今の浩二は内心を表すかのように表情が出ているからだ。

(何故アレがここにいたのかはわからない。けど、ここに長く留まる

ことはしない方がよさそうだ……)

交戦の意思はないかもしれないが、狙いが分からない以上は警戒した方がいい。今の浩二では絶対に勝てない相手だ。どう戦うかよりも、どう逃げるかを考えた方が賢明だろう。

(よくアレと遭遇して生き残れたものだな……)

ティオークラルスと同じ目的で里を出て、運悪く遭遇したアレと仕方なしに交戦して生き残ただけでも称賛に値する。それでももしこれが原作通りだとしたらきつと彼女はここで命尽き果てていただろう。もしかしたらアレもそうなるかとわかっていて彼女にトドメをささなかったのかもしれない。

そして彼女も全身に傷を負い、魔力も枯渇していた。浩二のおかげで九死に一生を得たに過ぎない。

平野浩二という転生者がいなければ今頃魔物の餌か衰弱死か。その二択だ。

すると横たわっている竜人族が目を覚ました。

「ここは……」

「目が覚めましたか？」

まだ意識が定まっていないのか、灰色の瞳を動かしながら周囲を見渡す竜人族はそこでようやく身体がまともに動かさないことに気づいた。

「まだ無理に起き上がらない方がいいですよ？　どうしても動きたいのでしたら肩ぐらい貸しますが」

言葉をかける浩二に警戒心を帯びた瞳で見据えながら確かめるように尋ねる。

「貴方が傷を……？　それに魔力も……」

「これでも天職が？　医療師？　ですから。失礼ながら弱り切っていた貴女に回復魔法を施させて頂きました」

「……そうですか」

浩二の言葉に一度瞑目して呼吸を整える。

「名も知らぬ方。私はエフェル・サンドルと申します。傷を癒してくれた貴方に感謝の言葉を送らせてください」

「別にお礼なんていいですよ。それと俺の名前は浩二です。あちらがティニアです。それよりもやっぱり肩を貸します。このままここに置いておくんなんてことはできませんし」

「申し訳づごいません……まだ身体が……」

「こういう性分なんでお気になさらず」

申し訳なく謝るエフェルに気にしていないと告げる浩二だが、内心は焦っていた。

(速く薬の材料を見つけないと……)

アレに見つかる前に。

見つからないことを祈りながら浩二達は足を動かす。

脇役25

偶然にも出会った竜人族のエフェル・サンドルを治療し、魔結晶病を治す薬の材料探しを再開する。

「そうでしたか……子供の命を助ける薬の材料を探しに……」

エフェルに肩を貸しながら浩二は自分達がここにいる事情を説明すると、エフェルは申し訳なさそうに俯く。

「それでしたら私をここに置いて探すことに集中してください。浩二さんの回復魔法のおかげで自衛ぐらいはできますから」

自身のことよりも顔も名前もわからない子供を優先するエフェルだが、浩二は首を横に振る。

「そういうわけにはいきません。今のエフェルさんは万全ではありません。そんな貴女をここに置いていく選択肢はありません」

まだ弱り切っているエフェルを置いておくという選択肢は浩二にはない。

確かにエフェルの言う通り、自衛ぐらいはできるだろう。自身に襲いかかってくる魔物ぐらいは撃退はできる。しかし、浩二はそれをよしとしない理由がある。

一つはまだ万全ではないエフェルを魔物がいる森に置いておくのは己の矜持に反する。置いていくにしても安全な村にでも運んでからだ。そしてもう一つは……。

「エフェルさん。竜人族である貴女に聞きたいことがあります」

エフェルから聞いておかなければいけないことがあるからだ。

「……何故、私が竜人族だと？」

目を細めて警戒を強いる。

名は明かしても自身の種族までは明かしていない。それなのにどうして竜人族だと知っている浩二に静かに問う。

まだ碌に身体を動かすことさえできないにも関わらず、エフェルから感じる静かで重い、重圧にも似たその気迫に浩二は竜に喰われるイメージが脳裏に過るも、それを追い払って冷静に言葉を続ける。

「診察した際に貴女が竜人族だとすぐにわかりましたが、別にエフェ

ルさんをどうこうする気はありません。そのつもりなら、まだ意識が目覚めていないうちに拘束具の一つでもつけてます」

「……それもそうですね。騙すにしても他にやりようがあるでしょうし、信用しましょう」

ひとまず、といった感じに警戒を緩めてくれたのか、気迫が消えて浩二は安堵の息を漏らす。

「それで私に訊きたいことというのは？ 同胞や里のことについてはお話することはできませんが、それ以外でよろしければお答えします」

「貴女と戦った相手についてです」

その一言にエフエルは深刻な表情を見せる。

「何故交戦になったのか、アレは何をしていたのか、それらを教えて欲しいのです」

「浩二さん。貴方はあの存在をご存知なのですか？」

「……一応、とだけお答えします」

原作知識として、とは流石に言えず曖昧に返す。

「ですが、アレがこの付近にいるということは何かしらの目的があると考えるべきです。それがなんなのか、それを知っておきたい。万が一にアレに出くわしたら最悪、俺達は全員死にます」

嘘でも冗談でも比喻でもない。本当の意味で死が待っている。

それだけの強敵なのだ。だから鉢合わせや衝突を避ける為にも実際にいくわしたエフエルから情報を得ようとしている。

するとエフエルは。

「……私とはある任務で同胞達と住む里から出てこの地までやって参りました。その際にあの存在と出くわしました。出くわしたのは本当にたまたまなのでしよう。相手も口ぶりも偶発的な感じもしましたし」

互いに運悪くも出くわしてしまったということになる。

「なら何故交戦を？」

「目的を果たす為に私が邪魔といった感じでしたね。止むを得ず応戦しましたが多少の手傷を与える程度で精一杯で……」

(いや、アレに手傷を負わせただけでも凄いやと思うんだが……)

自信が喪失するかのようによく溜息を零しながら告げられたその言葉に逆に浩二は凄いやと思った。

流星は竜人族。ただではやられない。

(でもいったい何が目的なんだ?)

竜人族であるエフェルを確実に仕留めなかった辺りからエフェルは目的ではないのは確かだ。ただ邪魔だからこの場から排除したにすぎない。恐らくその場から逃走もしくは離脱しても追うことはなかっただろう。

それならば目的は他にある。

いったいそれがなんなのか、頭を悩ませていると。

「浩二様。発見しました」

ティニアが魔結晶病を治す薬の材料を発見して、浩二は手渡されたそれを手に取って確認する。

「間違いない、これだ。ありがとうございます、ティニアさんのおかげで早く見つけることが出来ました」

「浩二様のお役に立ててなりよりです」

ティニアのおかげで予想よりも早く目的の材料が手に入った以上は後は街に戻って薬を調合するだけ。そしたら何も気にすることなく出発することができる。

(これなら今日中には出発できそうだ……)

浩二はまだ青白い空を見上げて今日には出発できることに安堵すると、浩二は見てしまった。

「浩二様……?」

「浩二さん……?」

空を見上げたまま青ざめた表情で固まる浩二にティニアもエフェルも怪訝そうにしながら揃って空を見上げると浩二同様にソレを発見してしまう。

「う、そだろ……?」

思わずそう呟いてしまう。

それが本当に嘘であればどれだけよかったのか。しかし、現実是非

常。空に漂るソレは確かに浩二を見ている。

能面という表現がしっくりくるような無表情な顔にその瞳には人間らしさが全くない機械的で無感情な瞳。氷如き冷たさを持つその瞳は浩二を見下ろしている。

(なんで、俺を見てる……?)

浩二は理解が追いつかなかった。

どうしてアレはここにいるのか、どうしてアレは自分を見下ろしているのか、何もかもわからない。

そんな浩二の心情などどうでもいいかのように一対の銀色の翼を羽ばたかせて地上に降りようとすするにつれてその姿がはつきりと認識できる。

太陽の光に反射してキラキラと輝く銀髪に、大きく切れ長の碧眼、少女にも大人の女にも見える不思議で神秘的な顔立ち、全てのパーツが完璧な位置で整っている。慎重は、女性にしては高い百七十センチくらいあり、白磁のようになめらかで白い肌、スラリとした手足。胸は大きすぎず小さすぎず、全体のバランスを考えれば、まさに絶妙な大きさだろう。

そしてその恰好は北欧神話に登場するワルキューレのような戦闘服。ノースリーブの膝下まであるワンピースのドレスに、腕と足、そして頭に金属製の防具を身に付け、腰から両サイドに金属プレートを吊るしている。

白を基調としたドレス甲冑を身に纏うソレの存在を浩二は知っている。

「……? 神の使徒」

浩二達のような転移者ではなく、正真正銘の神の使徒は地上へと降り立った。

ただそこにいるだけで浩二は冷汗が止まらず、ティニアもエフェルも本物の神の使徒の存在に当てられ、身を強張らせている。

神の使徒は美しい、しかしどこか機械的な冷たさのある声音で浩二に話しかけた。

「はじめまして、平野浩二。私はフィアトと申します。あなたを迎

えに来ました」

「迎え……っ？」

「あなたは我が主のお役に立てる。これはこれ以上ない名誉なことです」

意味が分からない。フィニアートの言葉を聞いたそう思った。

(どうしてエヒトが俺を……っ?)

聞いている限りは敵対意識はない。むしろエヒトにとって浩二は何かしらの利益があると考えるのが妥当だろう。だがそれが何か、それがわからない。

エヒトにとつてこの世界は盤上でしかなく、人間という駒を玩具として遊んでいる。

そんな存在がどうして浩二を欲しているのか？ 浩二はその答えに探すべく必死に脳をフル回転させて原作知識を思い出してある仮説が生まれた。

(……改造?)

元々この世界は人間しかおらず、エヒトがこの世界の原住民である人間と魔物をかけ合わせて作り出した合成生物が亜人や魔人、竜人だ。その理由はエヒトが己を受け止めることができる肉体を作るためで、その過程で現代の魔物や使徒までも作り出した。

魂魄だけの存在であるエヒトにはどうしても肉体が必要だった。そうでなければ神域から出られないからだ。

(原作では確かユエだった……。けど、まだエヒトはユエの存在を知らない。もしくは手が出せない状態だとすれば他に己の魂を受け止めることができる肉体を手にする方法、いや、手にできるかもしれない可能性があるとするれば、それは天職か？ 医療師”であり、改造の技能を持つている俺だ。だからエヒトは俺に目を付けた)

それなら浩二を迎えに来たフィニアートの言葉にも説明はつく。

だけど……。

(だけどそれは完全にエヒト側につくということだ。そうなれば脇役じゃなくて敵役になって主人公に殺されるかもしれない)

それに必ずしもそれまで命の保証があるかもわからない。殺され

る可能性も十分にあるし、洗脳されて駒にされる可能性だってある。少なくともエヒト側につけば碌なことにはならないのは確かだ。

「……もし、断れば?」

「命は奪いません。ですが、多少痛い思いをして頂きますのでお覚悟を」

その時、ガントレットが一瞬輝き、フィーアトの両手には白い鏢無しの大剣が握られていた。

(手足の一本や二本は斬り落としてでも連れて行くってことか……)

そう思わせる意味を込めて敢えて不要である大剣を出したのだろう。それだけにフィーアトと浩二の間には決して埋まらない実力差はある。

全員でかかっても勝てる確率は万に一つもない。なら取れる手段は一つだけ。

「ティニアさん。エフェルさんと一緒に逃げてください」

浩二は肩を貸しているエフェルをティニアに渡して逃走を促す。

「奴の狙いは俺です。ですから俺が奴を引き連れている間にできるだけ遠くへ逃げてください」

「ですが——」

「頼みます」

返答も聞かずに浩二は「無形の貌」を発動。上昇したステータスでその場から消えるように離脱する。

「浩二様!?!」

悲痛染みだしたティニアに声を背にして森に中を駆ける浩二にフィーアトは取り残された二人にはもう用がないと言わんばかりに無視して浩二を追いかける。

脇役26

浩二の前に突如現れた神の使徒であるフイーアトと絶賛鬼ごっこ中の浩二は後ろから追いかけてきているフイーアトに内心舌打ちする。

(一瞬で戦闘不能にできるのに、それをしないのは俺の心を折るつもりだな……)

フイーアトの目的はあくまで浩二を主であるエヒトの元まで送り届けること。殺すことではない。だから心を折ろうとしている。

どれだけ逃げて、抗っても、戦っても、全てが無意味であることを思い知らせて浩二の心を折り、その後でエヒトの元に連れて行くこうとしている。

完全に舐められている。しかしながらもそれは正しい。殺すことが目的でない以上、下手に攻撃をすれば浩二を殺してしまう可能性がある。しかしながらもそれは主であるエヒトの命令に反する。だから手間でも心を折った方が確実だ。

「いつまで逃げるおつもりですか？」

「っ!？」

背後にいた筈のフイーアトが突如前方に現れて思わず、足を止める。

「私から逃げられるとは思わないでください。早々に諦めることを勧めます」

「……生憎と諦めの悪さだけは誰にも負けない自信があつてな」

鞆から刀を抜いて構える。

(前の「オルクス大迷宮」で変成魔法によって強化された魔物とは違う。なら……)

髪を伸ばして鎧のように全身に纏わせる。更には手を切つて刀を血で染める。

「?・改造」

それらを改造して髪を灰色の鎧に改造し、刀身を朱色に染め上げる。

「……いいでしょう」

戦闘の意思があると捉えたフィーアトは手間だけどまずはその戦意から折ろうと大剣を構えた瞬間、姿が消えた。

「!?」

「いい反応です」

一瞬で背後に移動したフィーアトの一之大剣を反射的に刀で防御する。反応で来たのは長年八重檜流の道場で稽古を受けてきた？経験による直感が反射的に働いたおかげだ。

(南雲から刀を貰っておいでよかった……)

そうでなければ今の一太刀は防ぐことができなかった。回避する暇もなかった為にハジメから刀を貰っていたおかげで防ぐことが出来た。

「ぐっふっ」

だが、大剣での攻撃を防いでも次に放たれる膝蹴りが直撃し、後方のある木々に背をぶつける。

「……なるほど。ただの髪でできた鎧かと思いましたが、それなりの防御力はあるようです」

浩二の全身に纏う髪の毛の鎧に見た目以上の防御力があることが判明したフィーアトは言う。

「それではもう少し力を出しても死ぬことはないでしょう」

今の浩二ならもう少し本気を出しても問題ないと判断したフィーアトは再び消えた。今度は浩二が反応できないぐらいの速度を持って大剣を叩きつける。

「ぐっ！」

「次は左から行きます。防いでください」

「っ!? ?天絶!」

咄嗟に自身の左側に光の障壁を十五枚も展開させる浩二。しかし、フィーアトはまるでガラスでも割るかのように十五枚の障壁を全て破壊して浩二に接近。剣の腹で浩二を叩き飛ばす。

「がっ！」

何度も地面をバウンドしてようやく動きを止める浩二はすぐに体

内に取り込んでいる薬草を全身に巡らせて傷を癒し、消耗した魔力も回復させる。

その間、フィータトは何もしてこない。追い打ちもしなければ連続で攻撃することもなくただ浩二が立ち上がるのを待っている。

余裕、なのは間違いないのだろう。だからわざわざ自身の動きを教えたり、剣の腹で攻撃している。いくら浩二が奥の手である？無形の貌”を発動させてステータスを大幅に上昇したとしてもまだ神の使徒であるフィータトには届かない。

(前の戦いで変成魔法によって強化した魔物の血肉を体内に取り込んだおかげで発動時間も伸びてステータスも更に上げることが出来たけど、それでも届かないのか……)

流星は神の使徒だけあって強い。なにより神の使徒の固有魔法である？分解”という凶悪な能力をまだ使っていない。今のフィータトは剣のみで浩二を圧倒している。

浩二は正直、今すぐにも逃げ出したいと思っているがそれは出来ないでいる。フィータトから逃げおおせる実力もない以上は逃げられないからだ。

(恐らくは閻系魔法もあまり効果はないだろう。あっても一瞬では意味がない)

精神や意識に作用する閻系魔法。対象にバッドステータスを与える魔法だが、実力差が離れている相手には効果が薄いと判断した。そもそもわざわざ閻系魔法を受けてくれるような相手ではない。

(正攻法ではまず無理。ならそれ以外の方法でどうにかすればいい)

思考を巡らせて考えを纏める。そこにフィータトが口を開いた。

「考えはまとまりましたか？」

敢えて浩二に考えを纏めるだけの時間を与えた。

その策ごと打ち破って完膚なきまでの敗北を浩二に与える為に。

「……おかげさまで」

笑みを浮かべる浩二に僅かに眉根を寄せるフィータトは再び姿を消すかのような高速移動で浩二に迫る。

「!？」

だが、髪の毛の鎧の一部が変形して無数の棘がフィートを串刺しにせんと襲いかかるも。

「無駄です」

その棘を一之大剣で斬り裂いて二之大剣で浩二を攻撃するも、浩二は二之大剣を刀で受け流した。

八重樫流刀術の一つ——？木ノ葉舞い”。相手の攻撃を刀身を利用して滑らせることで受け流す技だ。髪の毛の鎧から繰り出された棘の対処に一瞬だけ攻撃の手が止まったその僅かな隙に浩二は身に付けた八重樫流の技を繰り出しただけでは終わらない。

「？聖絶——！」

そこで浩二は何を血迷ったのか、光属性上級防御魔法を発動させた。輝く障壁がドーム状となった浩二とフィートを包み込む。それには流石の神の使徒も理解が出来ずに怪訝する。

「いったい何を……？」

敵も結界内に包み込めば何の意味もない。ここで上級魔法を発動させた浩二の意図が読めないフィートに浩二は唇を吊り上げる。

「？溶解毒」

すると浩二の体内から猛毒のガスが発生する。

ガスに触れた草木だけではなく石までもドロドロに溶けて消えるのを目にしたフィートは即座に浩二から離れて結界を破壊しようとするが、それを読んでいたかのように髪の毛の鎧が伸びてフィートの全身を縛り付ける。

「くっ！…このようなものでっ！」

だがフィートにとつてそれは拘束でもなんでもない。力づくで髪を引き千切ることもできれば？分解”の能力で行使して脱出することさえできる。拘束時間は数秒と言ったところだろう。

だがその数秒あれば十分。

浩二はフィートに抱き着く時間は数秒あれば十分だ。

「へえ、冷たい印象があったけどちゃんと温もりはあるんだな。意外」
フィートに抱き着いて肌に確かな温もりがあったことに意外そうにばかり浩二にフィートは冷たい眼差しを向ける。

「……それで私の動きを止めたつもりですか？　そもそも貴方程式が私に抱き着いたところで無意味なことですよ」

抱き着いたことよって動きを封じたと思ったフィアトは銀翼を輝かせて分解能力を行使しようとする。結界も毒も全て分解しようとして銀翼を大きく広げようとした瞬間。

「だよな？　ここで分解能力を使うと思ってた」

その言葉にフィアトの動きが止まった。

(なぜ、分解能力のことを……?)

戦闘の際には一度も見せても教えてもない神の使徒の固有魔法？　分解”。それなのに今の浩二の口ぶりはまるでそれを知っているかのようなだった。そこに僅かばかりの隙が生じる。

「？改造”!!」

浩二は得意の？　改造”をフィアトに行った。

？　改造”の派生技能には？　改造改悪”という技能がある。これは改造を行う対象を改悪、つまり破壊させる技能。この技能は生体に直接干渉する為に物理・魔法による耐性も毒の耐性も機能しない。

あらゆる耐性を無価値にする。浩二のもう一つの奥の手。

だけどこの技能は対象に直接接触しなければ発動することができないデメリットがある。だから浩二は刀を握り、髪を鎧に変えて戦う意思を見せたのも、？　聖絶”や？　溶解毒”も全てはこのための布石。

だがそれも全てはフィアトが浩二を殺さないでいたからこそできたことだ。初めから殺すつもりなら浩二は間違いなく殺されていたし、最初っから魔法や分解能力を使っけていても負けていた。

浩二を見下し、本気を出すまでもないと油断して心を折るつもりで痛めつけていたからこそ、生まれた勝機。例えるなら百戦中九十九回負ける戦いのなか、残りの一回の勝利を最初に引き当てたようなものだ。

運が良かったといえはそれまでだが、自身より圧倒的強者相手に勝機を探し出し、掴み取ったのは浩二の諦めの悪さゆえだ。諦めなかったからこそ、浩二は勝利を手にした。

「わた、し……が……」

全身に亀裂が走り、手足から崩れ落ちる神の使徒は最後に空を見上げて謝罪を口にした。

「もうしわ、け、ごごいません……わが、あるじ……」

そして神の使徒は全身が崩壊して崩れ落ちて灰へと姿を変える。ファイアトの最後を見届けた浩二は結界と溶解毒を消して肩で息をしながらその場に座り込む。

「し、死ぬかと思った……」

？無形の貌の限界時間に達して元の姿に戻る浩二は運よく生き残れたことに安堵しつつ灰となった神の使徒に触れて？改造”。自身の体内に取り込むことでその力を得る。

ステータスプレートを使ってどれだけステータスが上がったのか、もしくは技能を獲得することができたのか確認したが、今は休みたい。文字通り九死に一生を得たのだ。少しぐらい休んでもいいはずだ。

「……まあ、終わりよければすべてよし」

最悪な遭遇だったとはいえ、神の使徒を取り込んで自身の力に変えることが出来たのは大きい。でも今は身体も魔力も限界。少し休んでからティニア達と合流しようとして浩二は地面の上に寝転がる。

「まさかファイアトが倒されるとは思いもしませんでした」

「!？」

聞き覚えのある美しくも機械的な冷たさのある声音に浩二は飛び起きてソレを見た。

「おいおい、何の冗談だよ……」

それが冗談であればどれだけよかったのか、しかしながら眼前にいる存在は冗談なんかではない。

「なんで、二人もいるんだよ……ッ！」

もう一人の神の使徒が姿を現した。

「フუნフトと申します。ファイアトに代わってあなたを我が主の元へ連れて行きます」

刹那、フუნフトの拳が浩二の腹部に直撃する。

「ハイッ……」

口から大量の血を吐き出し、殴り飛ばされた背後にある木に背中を強打する。

「あなたとファイアトの戦闘の一部始終を見させていただきました。どうやらあなたの手に触れなければ問題はないようですね。それでは腕を切り落として瀕死の状態となったあなたを我が主の元へ連れて行くとしましょう」

機械的に淡々と語るフუნフトは大剣を握りしめて浩二に歩み寄る。

(どんだけ、運が悪いんだよ……俺は……)

現れた二人目の神の使徒に浩二は己の不運さに恨みを抱く。

全力を出し切って運よく神の使徒を倒したと思えば今度は別の神の使徒が現れた。

(もうこっちは戦うだけの余力なんてないっていうのに……)

ファイアトの戦いで限界だというのにそこで別の神の使徒がやってくるなんてなんてムリゲーだ。

(それともこれは罰なのかも……。雫に振り向いて貰いたい為だけに卑怯で姑息な手段を取った俺への罰……)

色々と犠牲にし、利用して、誘導してきた愚かな自分自身に与えられた罰だというのならこの理不尽にも少しは納得できる。それだけ最低なことをした自覚が浩二にはあるから。

(雫にフラれてよかった……)

もし、告白に成功して雫がこの場にいたらいったい雫はどれだけ傷ついてしまうかわからない。だからあの夜、フラれてよかったと浩二は心底思ったと同時に、笑った。

(ああ、俺、やっぱり雫のことが好きだ……)

フラれたのに、諦めようと決めたのに、それでも諦めきれない程に浩二は雫の事が好きでいた。走馬灯のように脳裏に過るのはこれまで過ごしてきた半生と雫との大切な思い出。

(ヒロインに相応しい主人公になりたかった……)

眼前まで迫りくるフუნフトに浩二は諦めたかのように瞳を閉ざし、フუნフトは大剣で浩二の両腕を切り落とそうと振り下ろす。

「鳴け、遍く風よ、？風槌！」

瞬間、風の砲弾がフンフトに向けられて放たれた。だが、フンフトは大剣を一振りしただけで風の砲弾を打ち消して、風系魔法が放たれた方に視線を向ける。

浩二も思わず顔を上げてそちらを見ると、そこには両の手の平を構えたティニアがそこにいた。

「な、んで……なんで……」

愕然としながらそう言わざるを得ない浩二はティニアに怒鳴りつけた。

「なんでここに来たんだよ!? 逃げてくれって言っただろうが!! それなのにどうして……!?!」

「貴方様を助けに参りました」

一喝する浩二に対してティニアは真っ直ぐにそう言った。

「こいつはお前が勝てる相手じゃない! 無駄死にするだけだ! それぐらいわかるだろう!! こいつの狙いはあくまで俺だ! だから――」

「お断りします」

逃げる。と告げるより前にティニアはそれを拒絶したが浩二は言葉を綴る。

「頼むから……逃げてくれ。せつかく承らえた命をこんなところで散らせたら助かった意味がないだろうが……」

ティニアがフンフトと戦えば絶対に殺される。それぐらいティニアにも理解しているはずだ。

それなのにどうして逃げないのか、ティニアはそれを浩二に教える。

「愛する人を護りたい。その為なら命を賭ける覚悟はできております」

「!?!」

「それに私の命は貴方様に救われたもの。その命を貴方様に捧げられるというのであれば本望というものです」

剣を手にして構えるティニアにフンフトは視線を浩二からティ

ニアに向ける。

「おい、なにしてんだよ？ お前の目的は俺だろうが……」

「邪魔をするのなら排除するまでです」

もう碌に動けない浩二を一瞥して大剣をティニアに向けられる。

「やめろ……」

動けない身体に鞭を打って立ち上がろうとするも、倒れてしまう。先のフイーアトとの戦いでまともに身体を動かすことが出来ず、ただ見ていることしかできない。

（なにもできないって言うのかよ……ッ！ 俺は、俺を好きでいてくれる人を失うって言うのか……ッ）

転生前も転生後もティニアが初めてだった。

好意を示してくれたのも、好きだと言ってくれたのも、共にいてくれたのも、寄り添ってくれたのも、護ろうとしてくれているのも初めてだ。

（俺はそんな人を失うって言うのかよ！ いいわけねえだろうが!!）

己の無力さに歯を噛み締める内心に憤る激情を燃やしながら浩二はソレを手にする。

浩二が取り出したのは赤い液体が入った小瓶。その小瓶の蓋を外す。

（下手をすれば死ぬかもしれない。けど、奴に勝つ為には、ティニアを護る為にはコレしかない）

浩二はそれを口にする。

（俺は最低な男だけど、女を見殺しにするようなクズにだけはなりたくない!）

それが結果的に己の命を失う結果になったとしても浩二に迷いはない。

するとドクン、と浩二の鼓動が高まる。

それと同時に膨大な魔力が噴出する。

「これは……」

突然の魔力の増加に目を見開くフუნフトはゆっくりと立ち上がる。浩二から目が離せない。

先ほどまでの弱り切っていた身体からどこにそれだけの魔力を噴出することができるのか、フロンフトは灰色に紅い魔力を交えた浩二を警戒するように見据える。

「浩二様……？」

突然の変化にテイニアでさえ戸惑いを覚えながら浩二の名を呼ぶ。すると浩二は俯いていた顔をあげる。

「解体^{バラ}してやるから覚悟しろ。神の人形」

そこには片目を紅く染めオツドアイとなった浩二が刀を握りしめて再び神の使徒との戦いの幕を開ける。

脇役27

凄まじい剣戟が行われている。

互いの得物が重なり合う度に両者の間に飛び散る火花と擦過音そして金属音が周囲に響き渡る。片方は二本の大剣、もう片方は刀を手に超接近戦を繰り返していた。

一之大剣による乾竹割りの斬撃を刀で受け流してそのまま流れるようにフュンフトの首を切断しようと刀を振るうが、フュンフトは身をかがめてそれを避けて二之大剣を薙ぐも、それまた浩二は受け流す。

「すごい……」

その攻防を間近で見っていたティニアは自然にそう口にした。

互いに全ての攻撃を紙一重に躲して攻撃に転じている。ティニアにはもうお互いがどこをどう攻撃しているのか目で全く追い切れない。ただ凄いとしか二人の戦いを表現することしかできない。

しかし、ティニアは思う。

(いったいどこに浩二様にあれほどの力が……)

浩二の天職は？ 医療師だ。戦闘職でもあくまで後方支援がメインの天職であって間違っても前衛で剣を持って戦うような天職ではない。

それ以前に浩二は先のファイアトとの戦闘で既に限界を迎えていた。それなのにいったいどこにあれだけの力を有していたのか。

ドーピング？ いや、今の浩二の力は、もはやそんな些細なモノで済ませていいものではない。急激に上昇したステータス。爆発的なまでに増加した魔力。

いったいどんなインチキを使えばそんなことが可能なのか？ いや、それ以前にそれだけのインチキを使つて無事で済むわけがない。それ相応の代償が存在しているはずだ。

代償なき奇跡など存在しないのだから。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ!!」

「くっ」

ここで拮抗していた筈の互いの力量に差が出始めてきた。少しずつではあるも浩二が神の使徒であるフンフトを押し始めている。

「神の使徒を凌駕するなど、不遜と知りなさい！」

大剣に銀光を纏わせてフンフトは固有魔法である？「分解」を付与させて浩二の得物である刀を壊そうとする。

——だが。

同じく灰色に紅色を交えた魔力を刀に纏わせることで浩二は分解が付与された大剣を防いだ。そしてフンフトは刀に纏った魔力を見て目を見開く。

「これは？「分解」……フイーアトの力を吸収したというのですか？」

「ああ、運よくな」

「？「分解」をもって？「分解」を相殺する。」

剛毅な笑みを浮かべて答えるも、本当に？「改造」によって取り込み、奪うことが出来たのは偶然であり、ぶっつけ本番だった為に内心ドキドキしている。

成功してよかった、と内心で安堵しているもフンフトは銀翼を羽ばたかせて制空権を確保すると、その銀翼から分解が付与された銀羽の魔弾を射出した。

その攻撃は明かに浩二を殺しにかかっている。もう殺さずにエヒトの元まで連れて行く余裕がないのだろうか？ もしくは殺して連れて行くか、たまたま生きていたら連れて行くか。どちらにしても浩二からしたら御免被る。

「？「縛光刃」！」

銀羽の魔弾に対して浩二は光の十字架（分解付与バージョン）で全て相殺する。

更には——

「飛べるのはお前だけだと思っな！」

その背に紅の線が入った灰翼を広げてフンフトと同じように空に飛び立つ。

そんな浩二に銀色の砲撃と銀羽の弾幕を射出する。

「？天絶！」

分解付与が施された障壁を展開させてその攻撃を防ぐも、フuntimeトは防ぐことがわかっていたかのように浩二の背後から銀光を纏う大剣で攻撃する。

「ぐっ！」

「どうやら空中戦では私に分があるようですね」

飛ぶことはできてもフuntimeトのように空を自由自在に動くことはできない。そう判断したフuntimeトはそう口にするも浩二は口角を曲げる。

「？白昼夢」

刹那、フuntimeトの視界から浩二が消えた。

「なっ、これは……」

消えたのは浩二だけではない。場所も風景も何もかも変わっている。そこはフuntimeトにとって神の使徒にとって大事な場所。そしてそこには――

「はっ」

そこで意識が元に戻ったフuntimeトは眼前まで迫りくる刃を間髪で避けることができた。

「チツ、まだ荒いか」

舌打ちする。ぶつつけ本番とはいえもう一秒あれば今のでフuntimeトの首を斬り落とすことに成功したのにそれがあと一步届かなかった。

浩二から距離を取ったフuntimeトは己の首筋に触れると赤い液体が流れていた。

「闇系魔法……？ 平野浩二。私に何をしたのですか？」

「そんなの教えるわけないだろ」

自分の技をわざわざ敵に教えるほど浩二はお人好しではない。

浩二オリジナル魔法？白昼夢”。それは対象にとって都合のいい夢を見せる魔法である。

？魔力操作”の派生技能には？魔力範囲増加”と？遠隔操作”がある。そこに？侵入”の派生技能である？記憶操作”及び？精神操

作”を使えば触れずとも対象の記憶や精神を操ることができる。だが、洗脳同様に人のような強い自我のある者などの記憶や精神はそう簡単に操ることはできない。記憶を覗くことはできるけど。

だけど、対象の脳に干渉することができる。そこに闇系魔法を施して対処にとつて都合のいい夢を見せることで対象の意識を深層意識に送り込む。それが浩二オリジナル魔法？白昼夢”だ。

(とはいえ、今だからこそ使えた魔法なんだよな……)

浩二が劇的なパワーアップができたのは以前に主人公を診察した際に手に入れた血液と魔石だ。それらを調合と改造を繰り返して完成させたのが浩二がフュンフトと戦う前に飲んだ魔法薬だ。

だが、都合よく飲んでパワーアップというわけにはいかなかった。

その理由は単純に南雲ハジメという薬の元となった材料が強力過ぎるからだ。

猛毒なんて優しいものではない。身体を内側から破壊するウィルスのようなものだ。そのウィルスを体内に取り込めば完成させた張本人である浩二とはいえ、命の保証はなかった為に浩二は飲むのは？再生魔法”を取得してからと決めていた。

(飲む前に神の使徒を取り込んだおかげで今は魔力が若干変質しているのと片目が変色しているぐらいで収まってる程度でどうにかなっているが……まだわからねえな)

自分の身体がどうなっているのか、後で調べないといけない浩二は今はともかく眼前の神の使徒を倒すことに集中する。

(今の俺の攻撃なら奴に通じる。魔法も効果がある。神の使徒の固有魔法である？分解”やその他の技能も手に入ったのは嬉しい誤算だ。多分、魔力の供給をしていた魔石ごと取り込んだおかげだろう。そう考えると魔石を取り込んだらその固有魔法を取得できる可能性はあるな……)

それなら主人公の十八番である？錬成”も使えるのでは？と
南雲ハジメ
思っ
て試
しに
刀で
？錬
成”
を試
みよ
うと
する
と、
何も
起き
なかつ
た。
どう
やら
必ず
取得
でき
ると
いう
わけ
では
なさ
そう
だ。

とはいえ、主人公のように魔物の肉を食べてその特性を得ることが

できるかもしれない。それだけわかれば後は地道に研究していけばいい。

すると、フンフトの体全体が銀色の魔力で覆われて、感じる威圧感が跳ね上がっていく。それはまるで光輝が使う？限界突破”のよう。

その姿に浩二は意識を集中して神経を極限まで研ぎ澄ませる。

「ああああああああああああっっ!!」

「はああああああああああっっ!!」

互いに雄叫びを上げて衝突する。

互いの攻撃を判断する余裕もなく全て経験と直感を頼りに互いの命を断とうと銀と紅の斬線を軌跡を残していく。

一秒、一手を掻い潜り互いが生き残る度に、際限なく速度は上がっていく。それに対してフンフトは。

(ありえない…ッ！ こんなことが起こりえるなんて！)

驚愕に包まれていた。

その理由は今もかすり傷は負いながらもフンフトの神速の剣撃について来れている浩二に対してだ。

フンフトは己の全てのステータスや技能をそれこそ？限界突破”を発動しているのと同じぐらいに桁違いに上がっている。それなのにどうして？限界突破”の技能を持っていない浩二がフンフトの剣撃について来れているのかわからなかった。

その理由は浩二は自らの意思で生存本能^{リミッター}を意図的に破壊して本来使えない力に手を付けているからだ。言ってしまうえば疑似的な？限界突破”。

そしてもう一つ、巧いのだ。

才能もなく、剣の素質もなく、ただひたすら愚直に愚行に突き進んで研鑽し続けてきた八重樫流の技がここにきて本来の実力以上の力を発揮している。

剣術の才能がなくとも、剣術の技能がなくとも、諦めることなく、折れることもなく強い意思と想いの力を持って浩二は神の使徒と渡り合ってる。

才能もなく、技能もなく、自身よりも強い強者と互角の勝負にしているのは？勇氣”。

一瞬でも臆すれば死ぬ。そんな極限状態で己を全てをぶつけられる驚くほどに強い精神力。

しかしそれでも壁は大きい。

その諦めの悪さ、努力、そして臆することもない勇氣は称賛に値する。しかしそれでも才能という壁は高く、技能がない浩二は限界以上の力が発揮できたところで次第に押し負けてしまう。

その証拠に浩二の体に赤い線が増えていく。

「ぐっ」

徐々に傷が増えていく浩二にフンフトはこのまま押し倒そうと攻撃の手を緩めることなく押し続ける。

そして遂に。

浩二の手から刀が弾き飛ばされた。

「——っ」

「終わりです。平野浩二」

得物が手から離れ、神速の速度で振り下ろされる剣撃を避けることは叶わず、銀光を纏う大剣は命を奪う死神の鎌のように振り下ろされる。

その直前。

突然灰色の閃光がフンフトを襲った。

「っ——」

咄嗟に防御態勢を取ったフンフトはその閃光を防ぐ。その閃光が放たれた方向には……。

『竜人族を舐めないでください』

それは竜化し、灰色の竜へと姿を変えたエフェルが放った竜のブレス。僅かに回復したその力を神の使徒に一矢報いる為に行使したのだ。

そして突然の竜のブレスによって反射的に防御態勢を取ったことによって生まれたその隙を浩二は見逃さなかった。

フンフトの顔を鷲掴みにして浩二は叫ぶ。

「?改造!!」

「フイーアトと同じく?改造」の派生技能である?改造改悪」を使ってフუნフトのその身を灰へと変えて風と共に散り舞い、最後に浩二の手の中に残されたのはフუნフト、神の使徒の魔石に似た器官だけだ。

「終わった……」

浩二は戦闘が終わると糸が切れた操り人形のようにそのまま地面に落下していくが、その前に竜化したエフェルに助けられて地面の落下は免れた。

浩二を背に地上に降りるエフェルは駆け寄ってくるティニアに浩二を委ねる。

「浩二様!」

『大丈夫です。意識を失っているだけのようですから』

傷はあるも致命傷はない。呼吸もしていることからティニアは安堵の息を漏らす。

「凄い人です。まさか神の使徒を倒してしまうなんて……」

竜化を解いて人の姿になるエフェルは今でも信じられない者を見る目で浩二を見ている。ただの人間である浩二が自身よりも圧倒的に強い神の使徒を倒したのだ。驚かない方が無理な話だ。

いくらエフェルが助力したとはいえ、ほぼ単独で倒した浩二にエフェルは素直に称賛する。

そしてティニアは応急処置を済ませると気絶している浩二に言う。

「浩二様。貴方様はお認めにならないかもしれません。そんなことはないと否定なされると思います。ですが言わせてください。貴方様は最低な殿方でも、脇役なんかでもありません。少なくとも私にとつては貴方様は立派な主人公ヒーローです」

意識を失っている浩二を抱きかかえながらティニアは己の主人公ヒーローを讃えた。

脇役28

浩二は目を覚ますと見覚えのない天井だった。

「……は……？」

まだ定まっていない意識のなか、視線を動かして周囲を見渡すと銀色が視界に映る。

「浩二様！」

ティニアが目を覚ました浩二を見て、目尻に薄っすらと涙を浮かばせながら目を覚ました浩二に思わず抱き着く。

「あぎい!？」

抱き着かれて浩二の身体に激痛が走り、浩二は痛みあまり思わず奇声を上げた。

「す、すみません……」

その悲鳴に咄嗟に離れるティニアは指で涙を拭い、激痛のおかげで完全に目が覚めた浩二は体内にある鎮痛剤を施して痛みを緩和させる。それでも痛いものは痛い……。

「……ティニアさん。子供は？ 俺はどれぐらい眠っていたのですか……？」

現状と魔結晶病を患っている子供はどうなっているのか？ それをティニアに訊くとティニアは呆れるように。

「少しは……自身の心配をしてください。三日も眠っておられたのですよ?。」

目が覚めて最初に言葉にしたのは魔結晶病の子供の容態についてだったことに呆れながらティニアは神の使徒——フンフトとの死闘後について語り出す。

神の使徒との戦いが終えて意識を失った浩二を背負い、町に戻って宿で浩二を休ませてティニアとエフェルが交代で看病をしていた。そして魔結晶病を患っている子供は事前に浩二が症状を緩和させる薬を飲ませていた為に悪化はしていない。

それを聞いた浩二は……。

「なら急いで薬を……」

「そのような身体で無茶はいけません。まだ猶予はあります。今はご自身の回復に努めてください」

今にも薬の調合に取り掛かりそうな浩二を必死に制止させる。

「でも……」

「それで失敗したらどうするのですか？　まずは浩二様が回復する方が優先です」

ティニアのその言葉に浩二は渋々と回復に努め、自身の状態を診察する。

（魔力が若干変質している。恐らくは片目も紅いままだな……。骨格、神経、内臓などは問題なし。いや、むしろ目覚める前よりもいい……）

「……ティニアさん。俺のステータスプレートを取ってくださいませんか？」

「どうぞ」

浩二は今の自身の状態を客観的に知る為に己のステータスプレートを試してみようと……。

「うわぁお」

浩二は頬を引きつかせながらも一度、自身のステータスプレートを見る。

平野浩二 17歳 レベル：???

天職：医療師

筋力：11830

体力：11990

耐力：12080

敏捷：12001

魔力：12980

魔耐：12980

技能・医学「＋診察」「＋肉体構造把握」「＋精密診査」「＋診断」「＋

経穴」「＋心霊医療」・調合「＋薬毒鑑定」「＋高速調合」「＋効果上昇」

「＋効能上昇」「＋調合改良」「＋保存期間延長」「＋劣化防止」「＋品質

上昇」「＋服用量低下」「＋特殊調合」・侵入「＋範囲増加」「＋精神操作」「＋記憶操作」・改造「＋解剖」「＋最適化」「＋自己改造」「＋構造変化」「＋肉体操作」「＋肉体硬化」「＋肉体改造負担低下」「＋物質改造」「＋魔物融合」「＋物質混合」「＋改造強化」「＋改造改良」「＋改造改善」「＋再構築」「＋限界解除」・投擲「＋精密投擲」「＋飛距離上昇」「＋気配感知」「＋視野強化」「＋視覚強化」・魔力操作「＋魔力循環」「＋魔力硬化」「＋精密操作」「＋効率上昇」「＋遠隔操作」「＋魔力放射」「＋魔力範囲拡大」「＋魔力変換」「＋変換効率上昇」「＋治療力上昇」「＋魔力感知」「＋魔力変質」「＋身体強化」・回復魔法「＋回復速度上昇」「＋状態異常回復上昇」「＋消費魔力減少」「＋魔力効率上昇」「＋発動速度上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋イメーシ補強上昇」・光属性適正「＋発動速度上昇」「＋光属性効果上昇」「＋効率上昇」「＋魔力消費減少」「＋イメーシ補強上昇」「＋閻属性効果上昇」「＋効率上昇」「＋魔力消費減少」「＋イメーシ補強上昇」・高速魔力回復「＋魔力吸収」・分解・双大剣術・全属性適正・複合魔法・言語理解「＋知覚拡大」「＋高速認識」

もはやバグキャラとなっていた浩二さんだった。

神の使徒であるファイアトを？改造南雲ハジメして自身に取り込み、それから調合と改造を繰り返して完成させた主人公南雲ハジメの血液と魔石を体内に取り入れた為にこのようにステータスがバグったのだろう。

もはや主人南雲ハジメ公同様の存在になってしまったことに嬉しくもあり、なんだかなあ、と思う浩二であった。

（神の使徒の技能は運よく手に入ったみたいだけど、南雲の技能は……ないな、相性？ もしくは何かしらの別の要因でもあるのか……？）

そこまで考えて思考を止める。

今ここで考えても意味がない。追々検証していけばいいと決める。それよりも前に浩二にはやっておかなければいけないことがある。

「浩二様。まだ横になられた方が……」

起き上がろうとする浩二を支えようとするティニアに浩二は手で

制止して上半身だけ起こして浩二はティニアに言う。

「こんなとき、いえ、今だからこそティニアさんに言っておきたいことがあります」

「私に？」

「俺はやっぱり雫の事が好きです。諦めたくありません」

自身に想いを寄せてくれているティニアに浩二は嘘偽りない本当の気持ちをありのままにティニアに伝える。

「フラれた身でありながらしつこいとは思いますが。ですが俺はやっぱり雫のことを諦めたくありません。それだけ俺は雫に惚れています。たぶんこれからもずっと俺のこの想いは変わることはないと思います。だからこそ、この想いに嘘をついてまでティニアさん、貴女の想いに応えることはできません」

ティニアがどれだけ浩二のことを好いていてくれるのか。それは浩二が一番よくわかっている。

だからこそ、ちゃんと伝えないといけない。

「俺はティニアさんのことがきつと好きです。でもそれ以上に俺にとって雫は？特別”な存在なんです。だからごめんなさい、俺は貴女の想いに応えることができません」

頭を下げる。

生まれて初めて浩二を好きになってくれた人。支え、慰め、励まされ、寄り添ってくれた人。浩二の為に命を捧げるほどに愛してくれる人の想いをフツても浩二は雫を選んだ。

それだけ浩二にとっては雫は？特別”な存在なんだ。だからこそ、己の気持ちに嘘をつきたくはないし、諦めきれない想いを抱えたままティニアの想いに応えるのは不誠実だ。

そう思ったからこそ浩二はハッキリと口にした。

悲しませる思いをさせてしまうだろう、罵詈雑言を吐かれるかもしれない、殴られるかもしれない。それでも浩二はその覚悟で自身の本当の気持ちを口にした。

「……頭をお上げください」

暫くの沈黙の後、ティニアがそう口にする。

浩二は言われた通りに頭を上げてティニアに顔を向けると、いつものクールビューティーの表情でティニアが口を開く。

「浩二様のお気持ちは痛いほどによくわかりました。その上で言わせて頂きます」

「……はい」

「浩二様が雫様を諦めないように私も浩二様を諦める気はございません」

「え……？」

予想外な言葉に目を丸くする。

「私にとっても浩二様は？特別」な存在です。これから先の未来、私の全ては浩二様に捧げております」

「で、でも、俺は……」

「存じております。それでもです」

浩二が雫を諦めないようにティニアもまた浩二を諦めない。

同じなのだ。浩二もティニアもお互いの？特別」に心から惚れているからこそ諦めようとしないのだ。

「それに浩二様が私のことを好いているということは私が浩二様の？特別」になれるチャンスはあるということですね。いずれ私が浩二様の？特別」になってみせますのでお覚悟を」

不敵に笑みを浮かべるティニアはいつたいたいだけ強かなのだらうか？ 下手をすれば浩二以上に諦めが悪いのかもしれない。

そんなティニアに浩二は言う。

「……辛いだけかもしれないですよ？」

「望むところです」

「俺を諦めて他の人を探した方が幸せになれるかもしれません」

「浩二様を諦める選択肢など私にはありません」

「俺にとつて雫が？特別」です。仮に雫が俺以外の誰かに惚れたとしてもこの想いは変わらないと思います」

「私のこの想いも決して変わりません」

「……」

もう何を言っても諦めようとはしないだろう。浩二は息を漏らす。

「……わかりました、いや、わかったよ、ティニア。なら改めてよろしく」

「はい。よろしく願います」

改めて手を重ね合う。

もういくら言葉を尽くしても止まらないだろう。その気持ちは浩二もよくわかる。

だってティニアが抱くその気持ちは浩二が雫に抱く気持ちと同じだからだ。ならティニアが浩二の事を諦めないということは浩二自身が一番よくわかってる。

「あの、よろしいでしょうか？」

そんな二人にいつの間にか部屋に入って来ていたエフェルが申し訳なさそうに声をかける。

「エフェルさん、どうかしましたか？」

「はい。お二人はこれからも旅を続けられるのですか？」

「まあ、一応そうなるかな……？」

今の目的地は「エリセン」だがその大迷宮を攻略したら他の大迷宮を攻略する為に動くかもしれない為に曖昧ながらも浩二は肯定した。するとエフェルが。

「それでは私もお二人の旅に同行してもよろしいでしょうか？」

「それは構いませんが……いいんですか？」

「はい。お二人と共に行動すれば任務の効率もいいですし、お二人の力にもなれます」

確かに竜人族が仲間になってくれれば心強い。同行を受け入れる理由はあっても拒む理由はない。

「それに私のこの命は救われた命です。必ずやお役に立ちましょう」

死に体であったエフェルを偶然にも助けた浩二にその恩を返そうとしているのだろう。

別に気にすることではないが、戦力にはなる。拒む理由がない以上はむしろいてくれた方がいい。

「わかりました。それではよろしく願います」

「はい。よろしく願いますね、旦那様」

「……今、なんと?」

聞き間違いかな? と思つて再度訊く浩二にエフェルは頬を薄っすらと赤く染めて咳払いして言う。

「だ、旦那様と申しました。率直に申し上げまして浩二さん、私は貴方に惚れました。ですので一緒にいさせてください」

何を言っているのか、一瞬理解が追いつかなかつた浩二は思った。

(俺、どこでフラグを立てた? 助けた時か……?)

テイニアに続いてエフェルまで告白された浩二は混乱していたが、エフェルはそんな浩二を置いてどうして惚れたのかを語り出した。

「私はティオ様、竜人族の姫には劣りますがそれでも里では強い方です。ですので私は添い遂げる殿方は自分よりも強い男性だと決めています」

「……えっと、でも俺、エフェルさんと戦つていませんよね?」

「私を倒した神の使徒を倒したのです。そんな浩二さんが私より弱いわけがありません」

そう言われれば確かにそうだ。

「それにただ強いから惚れたというわけではありません。何の得もないのに私に回復魔法を施して命を救って頂き、神の使徒を相手に浩二さんは自身が逃げる為ではなく私達を助ける為に行動を取ってくれました。浩二さんの優しさ、強さ、そして強者に立ち向かうあの勇敢なお姿に私、エフェルⅡサンドルはこの身を浩二さんに捧げると決めました。先ほど旦那様と申しましたが、別に愛人でも妾でも構いません。浩二さんには雫さんという? 特別”なお方もおられるようですし、テイニアさんもいますから三番目でも私は気にしません」

(いや、俺が気にします)

内心ツツコミを入れる。

え? なにこれ? モテ期到来? とさえ浩二は自身のモテっぷりに思わずそう思った。

「えっと、エフェルさん。好意を寄せてくれるのは凄く嬉しいです。でも、先ほど聞いていらしたように俺にはどうしても諦めきれない人がいます……」

「私は好みではありませんか……？　それとも竜人族だからでしょうか？」

「あ、いや、別にそういうことは……ただ俺の国では一夫一妻が当然で複数の女性と関係を持つというのはいんですよ。この世界では当然かもしれないが、どうしても抵抗というか、倫理的にというか……ともかく好みのタイプではないからとか、竜人族だからというわけではありません」

浩二だつて男の子だ。

いくら雫に惚れているからといってハーレムに全く興味がないと言えれば嘘になる。

それが女性の方からそれも二人続けてプロポーズされて嬉しくない訳がない。それもどちらも美女だ、美女。大事なことなので二回言った。

そこでティニアが。

「浩二様自身のお気持ちはどうなのですか？」

「俺の、気持ち？」

「はい。先ほどのお話を聞く限りそれは浩二様の国での一般常識もしくは倫理的価値観なのでしょう。ですがそれを取り払って浩二様自身の本当のお気持ちはどうなのですか？」

浩二自身の本心を語って欲しい。そう言外に告げるティニアに浩二は考える。

浩二は雫が好きだ。惚れている。それは間違いない。

そしてそんな浩二に好意を寄せてくれるティニアとエフェルの気持ちは嬉しく思っている。けど、いや、だからこそ不誠実な真似だけはしたくないのが本心だ。

関係を持つのならちゃんとして大事にしたい。けどそんな甲斐性が自分にあるのか？　そう思ってしまう。

(いや、それこそ本心ではないな……)

だがそれは自分の気持ちを誤魔化す為の言い訳に過ぎない。だからこそ浩二は自分の本心を言う。

「愛人とか妾とか、三番目でいいから受け入れようとは思わない。関

係を持つのならちゃんとしたいし、大切にしたい。それは相手が誰だろうが、どんな種族だろうが変わらない。それは確かだ。けど俺には既に惚れている人がいる。一度はフラれたけど俺は諦めようとは思わない。エフェルさん、テイニアにも言ったけど、それでも？」

——それでも俺について来ますか？

そう告げられたエフェルは真剣な顔で頷く。

「はい。それでもです。出会ってまだ間もないですが、きつとこれは運命なのでしょう。私は浩二さんと出会ったこの運命に感謝し、共にありたいと思ってます」

それを聞いた浩二は思わず顔に手を当てる。

(どうしてこの世界の女性は諦めが悪いのだろうか……いや、俺もだけど……)

今だけ主人公南雲ハジメの気持ち少しはわかる気がした。

「……わかった。ならエフェル、これからよろしく頼む」

「はいー」

なにはともあれ、浩二の新たな仲間、竜人族のエフェルが加わった。

脇役29

神の使徒——フュンフトとの死闘から目を覚ました浩二は己の身体を回復させ、魔結晶病の子供の病を治す薬を調査してもう大丈夫だと判断してから新しい仲間であるエフェルと共に旅を再開した。

そして現在、「エリセン」行きの船の上で潮風に当たりながら黄昏ていた。

（我が人生にモテ期到来……）

そんなアホなことを思いながら浩二はチラリと視線を横にする。

そこには浩二の旅の仲間であるティニアとエフェルが仲親し気に会話を弾ませていた。

何を話しているのか、気にならない訳ではないが、盗み聞きはよろしくないの二人から視線を逸らす。

浩二はいまだに美女二人に告白されたことに内心驚きを隠せないでいる。

ティニアもエフェルも主人公南雲ハジメのヒロインであるユエやシア達にも負けず劣らずに整った容姿をしている。

その証拠にこれまでの道のりで二人の美貌に見惚れる者も多く、ナンパ目的で声をかける者もいれば、白昼堂々告白してくる者もいた。

なかには強引に自分のモノにしようと暴走して二人に手を出そうとする者がいたが、浩二が止める前に二人の手によって撃沈した。

まあ、そういう輩が出るほどに二人は美しいのだ。美しい女で美女なのだ。そんな美女に告白されたのだ、浩二は。したのではなく、された。これは重要。

そんな美女二人に告白されて修羅場が起きるかとも思えばそんなことはなく、二人は浩二を共有しているのか争うようなことはない。そのうえ……。

（二人とも積極的なんだよな……）

隙あらばスキンシップしてきたり、そのたわわに育った胸の谷間に腕を挟んできたり、寝ていたら気がつけば二人に挟まれて目を覚ましたり、と男として羨ましい日々を送っている。

転移前はそんな気は一切なかった。女の子からのバレンタイン
チヨコなど母親か、幼馴染である雫と香織ぐらいいしか貰っていない。
そんな非リアの日々を過ごしていたから今の状況に驚き、戸惑いを覚
えてしまう。

(まあ、好意を向けられること自体、嬉しいけど……)

潮風に当たりながら海面にいる海人族の護衛を眺めていると……。
「ん？」

浩二の？ 気配感知”に海面下から何か巨大なモノの気配を感知す
るとソレはすぐに姿を現した。

激しい水飛沫と共に海上へと姿を現したのは体長三十メートルは
あり、三十本以上はある触手を持つ巨大なイカっぽい何か。触手をう
ねらせるその姿は海の怪物クラークンを連想させてしまう。

突然現れたイカモドキに船上にいる船員や客はパニックになり、悲
鳴や助けを求める声を投げ、護衛を務めている海人族はその触手に囚
われている。

そんななか、浩二は自身でも驚く以上に冷静だった。

(まあ、神の使徒と戦った後だからな……)

それに比べればこのイカモドキはたいしたことではない。浩二は早
速手に入れた？ 分解”を使ってイカモドキを倒そうとするも――

「浩二様。ここは私にお任せください」

それより前にティニアがそう言うてきた。

「浩二様の手によって新しく手に入れたこの力を試すいい機会ですの
で」

「ああ、まだ試していなかったし、大迷宮に挑む前の練習にはちょうど
いいのか」

納得し、この場をティニアに譲ると、ティニアはその背から白銀色
に輝く翼を出現させてその翼から白銀色の羽の魔弾を射出するとイ
カモドキはその魔弾で絶命した。

「……思っていたより操作が難しいですね。これは練習しなければ」

誰もが啞然とした顔をしているなか、一人そんなことを呟くティニ
アに浩二はやれやれと肩を竦める。

(神の使徒の魔石と俺の肉体の一部を改造して取り込ませたけどこれは予想以上……)

内心そうぼやく。

ティニアの今の力は浩二が？改造”によって神の使徒の力を取り込んだように、フロンフトの魔石と浩二自身の肉体の一部をティニアに取り込んだ結果、浩二同様に神の使徒の力を手に入れた。

以前の戦闘の際にティニアは己の力不足、力の無さに痛感してこのままでは浩二の足手纏いになると思った。だが、どれだけ鍛えたとしても実際に目の当たりにした神の使徒には届かない。

そこでティニアは浩二に自らの意思で改造を望んだ。強くなる為にこの身を改造してくださいと。

当然浩二はいい顔はしなかったが、ティニアの決意は固く頷くしかなかった。浩二は最強の改造人間にしてやろうと思ったところで浩二は閃いた。「あれ、使えるんじゃないか？」と。

それは偶然手に入れた神の使徒であるフロンフトの魔石のような器官を改造してティニアに取り入れて更には浩二は自らの肉体の一部も改造したうえでティニアに取り入れさせた。そして見事に神の使徒の力を手に入れたのだ。

そんな今のティニアのステータスは……。

ティニア・セルヴィス 19歳 女 レベル：52

天職：探索者

筋力：75 [+12000]

体力：89 [+12000]

耐性：68 [+12000]

敏捷：71 [+12000]

魔力：64 [+12000]

魔耐：64 [+12000]

技能：探索「+認識範囲拡大」・気配感知「+特定感知」「+広域把握」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・先読「+未来予測」・遠目「+夜目」・風属性適正「+魔力消費減少」・土属性適正「+

魔力消費減少」・魔力操作・分解・双大剣術・全属性適正・複合魔法

改造した結果、このようなステータスになった。

浩二とほぼ同等のステータスとなって更には神の使徒の固有魔法
やその他の技能も手に入ったティニアは満足だった。もはや主人公南雲ハジメ
達にも引きを取らないだろう。

最強メイドここに現る！　と言いたいが、ティニアはまだ改造によつて得たその力を使いこなせてはおらず、練習が必要のよう
で最強メイドの称号はまだまだ先になるだろう。

「さて、その船員さん。脅威は去ったから船を動かしてくれ」

「え、はい……」

固まっている船員に声をかけて正気に戻させて船は再び動き出すと、啞然としていた客達も正気を取り戻して脅威を追い払ったティニアに礼を言う人もいればどこかの貴族のような坊ちゃんが「僕の家
の使用人に……」などと言っている者もいるがティニアは丁重に断っていた。

「浩二さん。先ほどからボーとしているようですが、どうかされまし
たか？」

「ん？　ああ、色々と変わったなあと思つてな（モテるという意味で）」

「そうですね、変わりましたね（見た目が）」

互いに頷く。その中身の意味は全く違うというのに……。

「それよりも見えてきましたよ？」

「おっ、遂にか……」

浩二達はようやく目的地である【エリセン】に到着したのだった。

【エリセン】に到着した浩二達はその海人族のお偉いさんと思われ
る人が待っていた。

「ようこそ【エリセン】へ。お待ちしておりました、平野様」

礼儀正しく挨拶してくるお偉いさんに浩二は「あれ？　何で俺の事
知ってんの？」と怪訝するかのように首を傾げると、そんな浩二に察

したのかお偉いさんは教えてくれた。

「平野様の噂と調合された薬はこの町にも届いております。平野様のお薬のおかげで病に苦しむ者も減り、この町にはいつも以上に活気に満ちているのです。その平野様がこの町に足を運ぶと耳にしてお待ちしておりました」

「はあ……まあどうも……」

納得しつつも妙にムズ痒い思いをしながら握手に応じる浩二にお偉いさんは申し訳なさそうに懇願する。

「到着早々、お手間を取らせるようで申し訳ないのですが、ぜひ名高き平野様に診て頂きたい人がいるのですが、よろしいでしょうか？」

「はい。すぐに案内してください」

「ありがとうございます。ではこちらです」

克蘭ケ患者がいることに浩二はすぐにその患者の元に案内してもらう。その道中で海人族や観光に訪れている客や商人の人達にあれやこれと噂されているが、今はそれを無視して浩二は患者の元までお偉いさんに案内してもらう。

「レミアさん。医者連れて来た。この方ならきつとその足を治して下さる」

（おー、この人だったのか……）

案内された所にいたのは原作にも登場した海人族のレミアだった。

「まあ、その人があの……」

「ああ、数々の薬を調合し、多くの人をお救いになった平野様だ。この人ならきつと治してくれる」

あまりにも称えられて浩二は照れくさく、今にも身悶えしそうなほど恥ずかしい思いをするが、テイニアとエフェルはむしろ誇らしげに頷く。浩二は意識を切り換えて患者であるレミアの足を診ることにする。

「失礼」

両足の包帯を外して診察する。見た目の火傷もだがそれ以上に神経がやられているも浩二にとってはその程度でしかない。回復魔法と魔法薬、改造を駆使して数分のしないうちにレミアの足を治した。

「これで治療は完了です。お疲れ様でした」

「え？ もう……？」

もう歩くことも泳ぐこともできないほど傷ついているその足をほんの数分で治したことにレミアもそれを見守っていた他の海人族の人達も訝しむが。

「あ、あらあら……本当に、私……」

レミアは立ち上がり、歩いて見せた。その姿に見守っていた海人族の人達も歓声をあげた。

「もう歩けないと思っておりましたのに……なんとお礼を言えいいのか……」

「別に礼なんていいですよ。医者として当然の義務を果たしただけです。とはいえ、まだ治ったばかりです。少しでも異変があるのでしたら教えてください。一応この町に滞在する予定ですから」

「あの、それでしたら滞在中はこの家をお使いください。幸い、部屋はゆとりがありますから、後ろにいるお二人の分の部屋も空いています」

滞在することをレミアはこれ幸いと、自分の家を使って欲しいと訴えた。

（まあ、その方が色々都合もいいか……）

治したばかりの足のこともあるし、主人公達はまだこの町に到着していないのはレミアの怪我で判明した。それならばこの家で滞在した方が浩二達もわざわざ宿を探すより手間が減る。

「それではお邪魔させて頂きます」

浩二達はそのご厚意に甘えることにした。

脇役30

南雲ハジメ
主人公達と共に「メルジーネ海底遺跡」挑戦する為に目的地である「エリセン」に到着した浩二はレミアの厚意に甘えて家に厄介になることになり、浩二は主人公達が「エリセン」に訪れるまで「エリセン」に住む海人族達などの健診を行っていた。

「はい、あ〜ん」

健診を行っているその場所はちよつとした診療所になっており、体調が悪い人や健康について相談したい人達などを浩二は一人一人対応している。

「はい、次の人どうぞ」

その診療所に訪れる人も神の使徒である浩二に診て貰おうと足を運ぶ人も多く、ちよつとした行列ができています。

浩二自身の治療の腕もレミアの足を治した時に既に知れ渡っていることもあって浩二は診察したり、検査したり、調べたりと大忙し。

だけど手を抜くなんてことはしない。いくら忙しくても患者の僅かな変化も見逃してはならないからだ。

「次の人どうぞ」

「浩二様。先ほどの方で最後のようです」

「あ、終わり？ ふう〜」

「お疲れ様でした」

診察が終えて一息つく浩二に労いの言葉を送るも、診察が終了したら今度は今日診た患者に必要な薬を調合しなければならない。そう思うと余計に疲れが出てくる。

「ティニア。ちよつと外を歩いてくる」

「はい。お気をつけて」

気分転換も兼ねて少し外に出て散歩することにした浩二は町中を歩きながらもまだ「エリセン」に到着していない主人公達のことを気に掛ける。

（遅いな、南雲達……。まだ海底にでもいるのか？）

原作通りでなら「グリューエン大火山」のマグマから海底に流され

て九死に一生を得て、この「エリセン」に到着するのだが、浩二達の方が先に到着したあたり、まだ海底にいるのだろう。

「あ、浩二さん。こちらにおられましたか」

「エフェル。どうした？」

未だ到着していない主人公達の事をエフェルが浩二の元まで駆け寄ってきた。

「特に用事があるというわけではないのですが、私も一緒に町を歩こうかと。お邪魔でしたか？」

「あー、いや、一緒に行こうか」

「はい」

美女にそんな事を言われて断ることもできず、浩二はエフェルと共に町中を闊歩する。エフェルは当然のように浩二の腕を組んだ。その際、浩二の腕に二つのメロンが挟まれて、柔らかな感触とほのかに甘い匂いが浩二の鼻腔を擦らせる。その二人を見る海人族達は生温かい眼差しと微笑ましい笑みを向けられている。

「こうして旦那様と二人つきりになるなんて初めてですね」

「そうか？」

「そうですよ。いつもティニアさんがいましたから」

「そう言われてそういえばそうだな、と納得するも……」

「なあ、その旦那様って呼び方やめてくれない？　なんかむず痒い……」

名前ならともかく、まだ高校生である浩二はその？「旦那様」呼びはどうもむず痒いゆえにエフェルのような美人にそう呼ばれるもはど
うも照れてしまう。

「しかし将来的にはそうなりますのですから遅かれ早かれ慣れておいた方がいいかと」

もう浩二と結婚することは決定事項のように当たり前のように言うエフェルに頬を掻く。

エフェルは誰が見ても美人だ。それにとっても献身的なのは短いながら共に旅をしてわかった。将来、良妻になるだろうと思えるぐらいに献身的だ。

「……俺が言うのもなんだけど、ティニアもだけどエフェルも独占欲とか一身に寵愛が欲しいとか、そういうのはないの？ 見た感じ、二人は俺を取り合おうとかそういう修羅場みたいものはないみたいだけど」

この人は私だけのもの！ みたいに浩二を独占しようと修羅場みたいな展開は起きていない。原作ではユエや香織がよくしていたキヤットフアイト的な展開は起きず、ティニアとエフェルは二人で仲良く浩二を共有している。

「独占欲などは勿論ありますが、良き殿方には複数の伴侶を持つのは当然のことです。それに愛する人の妻になる者同士、仲良くしたいではありませんか」

「……まあ、仲がいいのは良いことだな」

(別に修羅場が見たいわけではないし……)

「それにこうして短い時間ですけど旦那様を独占できていますし」

そう微笑んで組んでいる腕に力を入れるエフェルにその胸がより浩二の腕に密着する。

なるほど、そういう風に浩二を独占できる時間帯を話し合っていて決めているわけだ。複数の女性と関係を持つ、言ってしまうえばハーレムは男のロマンだけど、実際そうなると悩まされることもあることを浩二は知った。

「ところで旦那様。以前からお伺いしようと思っていたのですが、旦那様の？ 特別”である雫さんとはどういう方なのですか？」

「雫のこと？ どうしてまた？」

「旦那様が一途にお慕いしているお方ですよ？ 気にならないわけないじゃないですか」

ティニアとエフェル。二人の美女の想いをフツてでも雫を選ぼうとした浩二。雫の事について何も知らないエフェルは雫がどういう人なのか知っておきたい。

「雫とは幼馴染で俺が小さい頃から通っている道場の娘さんだ。純粋な剣の勝負なら俺は勝った事がない」

「あれほどの剣術を繰り出した旦那様以上となると……よほど才に恵

まれているのか、努力しているのか。その両方ですかね？」

「両方だな。雫は才能がありながらも努力を怠ることはしなかった」

浩二の脳裏に過るは道場に通っていた頃から雫にコテンパンにされた自分の姿。

「真面目で面倒見が良くて自分よりも他人を優先してしまふ苦勞人で見えた目とは裏腹に可愛いものが好きな乙女で天然の義妹ソウルシスターズ生産機（本人否定）なお姉様だな」
「？」

エフェルの頭に疑問符が浮かび上がる。浩二の説明で雫という人物がどういった人なのか思い浮かばなかった。

「まあ、どういった人かは実際に会えばわかる」

今ここであれこれと想像させるよりも実際に会わせた方が早いと判断してここでこの会話を終わらせる。

（今度は打算もなにもない俺の想いをそのまま雫に伝えてみせる）

もう一度想いを遂げる為にも今は神代魔法を手に入れることを優先する。すると二人の前を立ちはだかる者が現れた。

全身をローブで隠し、顔も見えないぐらいにフードを深くかぶっている。

「平野浩二で間違いない？」

短く尋ねてくるその謎の人物に浩二は頷こうとしたが、隣にいるエフェルが制止の声を投げた。

「お待ちください、旦那様。周りを見てください」

そう言われて辺りを見渡すと、先ほどと変わらない風景やいつも通りに生活している海人族達だが、浩二は妙な違和感に気づいた。

「お気づきですか？ 誰も私達を認識しておりません」

「!？」

エフェルに言われてようやく気付いた。先ほどまで多くの視線や声の集めていたのに、今はそれが無い。まるで二人の姿が見えていないかのようだ。

「あたしの固有魔法？ 幻惑”。その派生技能の？ 認識阻害”を使って。そうじゃないと話ができないから」

「話……?」

「その前に確認。平野浩二で間違いない?」

もう一度本人かどうか確かめてくる相手に浩二は頷いた。

「ああ、俺が平野浩二で間違いない。なんならステータスプレートで確認するか?」

「ううん。そこまで言うのなら信用する」

「そうか。それで話とはなんだ?」

すると、フードを取り払って素顔を露にする。

赤というよりも赤銅色に近い髪をした少女。その少女の耳は僅かに尖っており、肌が浅黒かった。その顔を見てすぐに正体が判明した。

「見ての通り、あたしは魔人族。名はイリエ。平野浩二、あんたに頼みがあつてここまで来た」

「俺の頼み……? 魔人族側につけというのならお断りだぞ?」

「違う。あたしを仲間に、ううん、神代魔法を手に入れる為にあたしに協力して欲しい」

「どういうことだ?」

怪訝する浩二に魔人族の少女、イリエは苦虫を噛み締めたような顔で言う。

「……みんな、おかしくなった。アルヴ様の為にと、そのせいで父が殺された」

イリエは語る。

イリエは生まれた時から魔力を直接操作する術を持っており、更には固有魔法?幻惑”にも目覚めた。そのせいか、魔人族側の兵士として戦うことが義務付けられていたが、イリエはそれに不満などなかった。

イリエの父親は魔人族の軍に所属しており、いずれは自分もその軍に所属して父親と一緒に魔人族の安寧の為に戦うつもりでいた。だから生まれ持った自身の力を疎ましく思うことはなく、むしろ魔人族の力になれると歓喜した。父親に鍛え上げられ、兵士となったイリエは一人の魔人族として戦い続けた。

そんな時、魔人族側に朗報があった。

「フリード様が七大迷宮の一つを攻略して神代魔法を手に入れてから全てが変わった……」

「魔人族の為に」と戦っていたはずなのに気がつけば？アルヴ様の為に」と多くの魔人族が信仰にその心身を捧げて命を落としていった。それに気付いたイリエの父親はフリードにそのことを直訴した。

「我々は魔人族の平和と安寧の為に戦っているはずだ」、このままでは無駄死だ、今すぐに彼等の目を覚まさせるべきだ」と。フリードにこう直訴したが。

『目を覚ますのはどちらか、それは貴殿ではないか？ アルヴ様の為にその身を捧げるのは当然のこと。何故それが分からない？』

それが当たり前のように告げるフリードにイリエの父親は絶句した。だが、それでも異を唱え続けた。

多くの魔人族の為に、これからの平和と安寧の為にその意を唱え続けた結果——斬首。

「神敵」とされ、フリード自らの手でイリエの父親は殺された。

そして軍に所属しているイリエもその母親も異教者の烙印を押されて一族郎党神罰が決定された。

しかし、イリエは己の固有魔法である？幻惑」と父親と軍に鍛え上げた力で母親と一緒に逃走するも、異端者の烙印を押された二人を魔人族はしつこくも追いかけてくる。

徐々に追い詰められていくなか、戦いとは縁遠い母親を庇いながら逃げるのが難しくなっていくなかでイリエの母親はこのままでは娘のイリエまでも殺されてしまうことを恐れて自ら命を断った。

それに慟哭し、涙を流しながらもイリエは必死に追手から逃げた。魔人族の安寧の為に兵士として一人の魔人族として戦っていたのに、父親を殺され、母親も命を断ち、一人となったイリエは疑惑、混乱、怒り、憎悪、慟哭とあらゆる感情が溢れ出るなか、このままでは駄目だと思った。

「あたしには力がある。フリード様の真意を確かめる為にもあたしに

は力がある。その為に神代魔法を手に入れないといけない」

「……それで王都から離れて行動している俺に目を付けたってことか？」

「あんたの噂は魔人族の国【ガーランド】まで届いてる。その実力を見込んで頼みにきた」

(そんなになり有名なのか、俺は……)

「いったいどんな噂が流れているのか、若干気になるけど……」

「いいのか？ 俺は【オルクス大迷宮】で赤い髪をした女の魔人族を殺している。それでもか？」

「……あたしも似たようなもの。母を護る為にこの手で同族を殺した。同族を殺したからと言ってあんたを恨むのは筋違い。だから同族を殺したからと言ってあんたに危害を加えることはしない」

一応、話の筋は通っている。それにその話が嘘かどうかは浩二は相手を見ればわかる為に確信している。

イリエは嘘は言っていない。

「いくつか訊いていいか？ 神代魔法を手に入れてそのフリードの真意を確かめた後はどうするつもりだ？ 父親の仇でも取るのか？ 悪いが復讐に加担するつもりはないぞ？」

家族を殺したフリードに復讐でもするのかと思ひ尋ねるもイリエは首を横に振る。

「場合によっては戦う。けどそれは家族の仇を討つ為じゃない。あたし自身のケジメをつける為にフリード様に会う。勿論、ただで協力してもらおうつもりはない。全てが終わればあたしを殺すなり、慰み者にするなり好きにしている」

己の全てを代価として差し出すイリエに浩二は小さく溜息を溢す。

「別に全てが終わってもお前を殺さないし、慰み者にもしない。俺達の目的も神代魔法を手に入れることだ。目的が同じならお互いの為に協力しようぜ。仲間ってことで」

「……いいの？」

「こつちから言っているんだ、いいに決まっているだろ？ それにお前、ケジメさえつけければ死んでもいいって思ってるだろ？」

「っ」

その言葉にイリエは肩を僅かに震わせる。それで浩二は確信した。「だろうな。けどな、お前の母親はお前を生かそうと自ら命を断つたのならお前には生き続けなきゃいけない義務がある。どれだけ苦しくても、辛くても最後までしつかりと生き続けなきゃいけない」

「けど、あたしにはもう……」

「自分のケジメをつけたら俺を生きる理由にすればいい」

「え……？」

「どうせ死ぬつもりならその命は俺が貰ってやるって言ってたんだ。だから俺を生きる理由にしろ。そして生かして貰ったその命を大事にしろ。勝手に死ぬことは俺が許さん。殺してでも生かしてやるからな、そのつもりでいろ」

殺してでも生かす、と滅茶苦茶なことを言う浩二にイリエは啞然となるも……。

「わかった。約束する」

確かに首を縦に振った。

「エフェルもいいか？俺が勝手に決めちゃったけど？」

「旦那様がそうおっしゃるのでしたら私はそれに従うまでです」

浩二の決定に従うエフェル。けれど、その瞳の奥からはイリエに対して警戒の色を見せる。

(一応、警戒しておくとしましよう……)

あくまで一応の範囲で警戒するエフェルを置いて浩二はイリエに向けて手を差し出す。

「それじゃよろしく」

「よろしく。浩二」

互いに手を交わして浩二は「改造」と告げてイリエの見た目を改造した。突然の自身の変化に驚くも。

「それならフードで顔を隠す必要もないだろ？」

髪の色はそのまま。けど尖った耳は人間族のように丸くなり、浅黒い肌も白くなっている。確かにこれなら顔を隠す必要もない。

「……あんた、本当に人間？」

一瞬で外見を変えられたイリエは驚愕と疑惑の表情を浮かべながら思わずそう問いかける。それに対して浩二はこう答えた。

「ただの化け物だよ」
おいしやさん

脇役31

「エリセン」で出会った魔族のイリエを新たな仲間に加えた浩二はティニアにもイリエのことを紹介し、レミアにもう一人分だけ部屋を追加してもらい、一息ついて浩二は借りている部屋で薬を調合していた。

手持ちの道具で患者に適した薬を調合していく。王城でもう四桁はくだらないと言えるぐらいに調合してきた浩二のその手腕は的確かつ速い。

最短最速で次々に薬を調合していくその手際はもはや神業に匹敵するだろう。

そんな調合をしている浩二の後ろで控えているティニアが尋ねる。

「浩二様。本当によろしいのですか？」

「イリエを仲間に加えたこと？」

手を止めずにそう言う浩二にティニアは頷いた。

「はい。彼女は魔族。万が一にも浩二様の命を狙う可能性はゼロではありません。今の内に何かしらの対策をなされた方が良いのでは？」

イリエは浩二と出会うまで追手から逃げる旅をしていてよほど憔悴していたのだろう。部屋を借りるなり、倒れるように眠りについた。だがそれも無理もない。

父親と共に魔族、種族の為に戦い続けたイリエにとっては突然父親が殺され、異端者の烙印を押されて追われる身となった。その際に母親まで失ったんだ。心身共に限界だったに違いない。

しかし、いや、だからこそティニアは今の内にイリエに対して対策を施すべきだと浩二に進言するも。

「その必要はないよ。そもそもあいつにその気はないし、俺達とイリエでは実力差があり過ぎるからね」

浩二はそう断言する。

実力的にも、そしてイリエの心情的にも浩二達を殺すような真似はしない。何故なら……。

「あいつはただ死に場所を求めているだけだ。そういう目をしていた」

浩二はイリエの瞳を見てすぐにそう気づいた。

己自身のケジメをつけたいというのも本音だろう。その為に力を求めることも、フリードに会うことも本当だ。けれど、それが終われば最後は戦って死ぬことを望んでいる。そのことに浩二は気付いていた。

「今のイリエの心は空っぽだ。何も無い空洞。何もかも失ったあいつは最後に魔人族の一人としてのケジメをつけたらそのフリードに殺されるつもりなんだと思う。確信はないけど」

（もしくは自分の命を犠牲に妄信している魔人族を正気に戻させようとしているのか……）

どちらにしても今のイリエは生に全く執着していないのは確かだ。既に死を覚悟しているからこそ浩二はそれを止めさせようと言ったけど……。

（？俺を生きる理由にすればいい）なんてどこの主人公だよ、たく……）

今更ながらそんな口説き文句を言った自分自身が恥ずかしく思う。しかし、言ったことに後悔はない。

（でもあいつは、イリエは生かされた命だ。それをあいつの都合で途絶えさせるわけにはいかない）

イリエは父親に、母親に、家族に愛されているからこそ繋がった命だ。だからもうイリエの命はイリエ自身のものではない。だからこそイリエは生き続ける義務がある。家族の分まで生きる義務が。

「ティニアやエフェルが警戒する気持ちはわかるけど、俺は魔人族だからといって死に進もうとしているあいつを放っておくことはできない。せめてイリエ自身が生きる理由を見つかるまでは俺があいつの生きる理由になる」

医者として自ら死に進む者を放置することはできない。

それが人間族だろうと亜人族だろうと魔人族だろうと変わらない。

そんな浩二にティニアは小さく息を零した。

「わかりました。浩二様がそこまで仰るのでしたらこれ以上は何も申しません」

「ありがとうございます」

「お礼には及びません。私はそういう浩二様だからこそお慕いしているのですから」

薄っすらと微笑むティニアに思わず頬を搔いて照れ隠してしまふ。

(本当、俺にはもったいない人だよ……)

もし、ティニアがいなければきつとまだ失恋のショックから立ち直れていなかったかもしれない。今のように傍にいてくれたからこそ立ち直ることができた。だからティニアには感謝してもし足りない。

(……雫に心底惚れていなかったらたぶん、惚れてたな)

そう思えるぐらいの感情は浩二にはある。それだけティニアは浩二に尽くしてくれている。

(礼ぐらいするべきだよな……)

色々含めてティニアのおかげで助かったことは多い。ならその恩を返そうと思い、浩二はティニアに尋ねる。

「なあ、ティニア。何かして欲しいこととかあるか？」

自身のできる範囲でティニアに報いよう思っただけで尋ねる。するとティニアは。

「では浩二様に夜のご奉仕をさせていただきます」

「却下で」

「……どうしてですか？ 経験はありませんが知識はあります。私の全身を使っただけで奉仕しますのに」

やっと夜のご奉仕が出来ると思いきや、即答で却下されたことにティニアは不服そうにする。

「私ではご不満ですか？ これでも胸の大ききさにも形にも自信はありますし、スタイルだって雫様に負けておりません」

ティニア自身の言う通り、男性好みのスタイルをしているのは着ているメイド服の上からでもわかる。けど、浩二が言いたいのはそこで

はない。

「テイニア。きつと俺は雫がいなかったらテイニアが俺の？特別”になつていたと思う。少なくとも俺はテイニアにそれだけの好意は持っている。けど俺にとつて？特別”は雫だ」

「存じております。それでも私は浩二様のことを諦める気は一切ございません」

「わかっている。だから俺もあれから色々と考えた。常識や価値観とか抜いて俺自身がどうしたいのかを必死に考えた」

浩二はテイニアと向かい合つて真剣な顔で告げる。

「俺はテイニアもエフェルも受け入れようと思つて、いや、受け入れたいと思つてる。雫という？特別”がいながら他の女を受け入れるなんてどうかしていると思う。けど俺は理屈や常識、価値観など置いて自分の気持ちを優先したい。子供のような我儘なのは自覚している、最低だということも理解している。俺みたいな脇役が複数の女性と関係を結ぼうとしているなんて烏滸がましいのだろうけど、俺は自分の気持ちに正直に生きたいと思う。だからテイニア、これはそんな俺の初めての我儘だ」

そう告げて浩二はテイニアに告げる。

「テイニア。俺はお前を一人の？女”として抱きたい。そしてこれから先もずっと俺の傍にいて欲しい。こんな俺の我儘を受け止めてはくれないか？」

少し自信なさげに、けれど自身の我儘を口にする。それに対してテイニアの答えは変わらない。

「はい。私はいつまでもお傍におります。ですが、私は浩二様の？特別”を諦めたりはしません。いずれ、雫様よりも私の方が？特別”だと言わせてみせます。ですが今は……」

待ちに待った夜のご奉仕にテイニアは浩二を抱き寄せてベッドの上に押し倒すとそのまま一晩、浩二はテイニアの夜のご奉仕を受けるのであった。

脇役32

目を覚ますと視界いっぱい銀色が映る。

(ああ、そっか……)

その美しい銀色の髪の毛の正体は昨夜、浩二と共に一夜を共にして肌を重ね合ったティニアが浩二に寄り添う態勢で眠っている。

(いっぱいしてくれたもんな……)

普段のクールビューティーとは思えないほど積極的に情熱的な奉仕を行ったティニアは珍しくも浩二に寝顔を晒している。

その無防備なまでの寝顔は芸術のように美しく、思わず手を伸ばしてその頬に触れてしまいたいほどだ。

(本当、美人だよな……俺なんかには勿体ないぐらいに)

けど、ティニアはそれでも浩二を選んだ。

浩二には雫という「特別」がいる。それでも浩二を諦めることなく想いを寄せて貞操を捧げた。どれだけ浩二の事を愛してくれているか、その想いの大きさが伝わるほどに。

だからこそ浩二は日本の常識も価値観も捨ててティニアの想いを受け入れたいと決めた。

例えばそれが順序を無視し、様々な過程をすっ飛ばしたことになっても浩二は自分の気持ちを優先する。それが我儘だとしても、色々と問題が発生することがわかっていたとしても、自分の気持ちを優先し、正直に生きると決めた。

だからこそティニアを抱いた。浩二自身がそう決めたから。

(俺は脇役かもしれない。南雲ハジメ主人公のようになれないかもしれない。だからこそ俺は俺の道に行く。こんな最低な男を信じて、愛してくれる人達の為に……)

そつとティニアの綺麗な銀髪を撫でる。すると、ティニアは目を開ける。

「おはようございます。浩二様」

「おはよう」

目を覚ますといつものクールビューティーな表情となるティニア

は薄っすらと笑みを浮かべる。

「浩二様は意外とケダモノでしたね。何度失神しかけたかわかりません」

「俺だって驚いてるよ……」

浩二自身も自分の新たな一面を知って驚いた。けれど、初めてだからそれも仕方がない。

（やっている時、人が変わる人はいるって聞いたことはあるけどまさか俺もそうだったとはな……）

知識としては豊富。けれど百聞は一見に如かず。経験に勝る知識なし。浩二は己の新たな一面を知ったのだ。

（いや、もしかしたら色々なモノを身体に取り込んだからその影響も出ているのか？）

もう既に肉体の8割は人間ではない。改造に改造を重ねた今の浩二の肉体はほぼ改造人間だ。肉体を改造した結果、そちらの方面にも何かしらの影響が出ているのかもしれない。

（今度、詳しく検査しよう）

暇が出来たら自身を精密検査しようと考えていると、ティニアがその豊満な胸を浩二に押し当てる。

「浩二様。朝のご奉仕は必要ですか？」

ティニアの視線の先には朝特有の生理現象を起こしているところある場所に向けられて、それを見たティニアは「私のご奉仕が不足だったようです……」と妖艶な微笑を見せる。

それから先の展開は想像の通り。

敢えて言わせて貰うのなら朝に出した方が男性には健康にもいいそうだ。

「あらあら、昨夜はよく眠れましたか？」

少し遅れてリビングまで足を運ぶと微笑ましい顔を浮かべているレミアが朝一番にそう言ってきた。その笑みは昨夜、二人が何をしていたのかを察している笑みだ。

「旦那様、今夜は私ですよ？」

それとは別にエフェルは少し不服そうにそう言ってくる。どうやら浩二の最初の相手に選ばれなかったことが不服だったようだ。

「ああ、わかった」

浩二はそれを断ることなく了承した。二人を受け入れると決めた以上はティニアだけじゃなくエフェルもちゃんと相手をする。

（まあ流石にこれ以上増えることはないだろう。主人公南雲ハジメじゃあるまいし）

ティニアとエフェル。二人の美女と関係を結べただけでも浩二にとっては奇跡に等しい。だからもう二人のように浩二に惚れる人は現れないだろうと踏んでいた。

そんなフラグ染みたことを思っているところの場にもう一人、姿を現す人がいる。

「目が覚めたか？ イリエ」

「……うん」

浩二の改造の技能のおかげで見た目は人間族のようになっていてもその実は魔族のイリエは若干、皆と距離を取っているが浩二がイリエの手を掴む。

「ほら、さっさと飯にするぞ。俺達の仲間になった以上はやることもあるからな。朝の食事は大事だからしっかり食べるよ？」

「わ、わかった……」

こうしてレミア、浩二、ティニア、エフェルそしてイリエと同じテーブルで一緒に食事を取り始める。

（……不思議な人間）

食事を口に運ばせながらイリエは視線を浩二に向ける。

ティニアとエフェルに食事を食べさせられ、その光景をレミアは微笑ましく見守っているという穏やかな日常。もう見ることはないと思っていたその光景とその中心にいる浩二を見てイリエはそう思った。

（敵同士なのに殺さないなんて……）

人間族と魔族は何百年も戦争を続けている。二つの種族の境に

は数え切れないほどの死と怒りと憎しみに満たされ、出会えば殺し合うほどに憎しみ合っている。

イリエ自身も魔族の兵士として数多くの人間族を殺している。だから浩二に出会い、協力を求めるのは一種の賭けだった。

最悪の場合は出会ってすぐに戦闘も視野に入れて話を求めた結果、仲間になることに成功した。その経緯で奴隷になることも覚悟していたが、今は何の拘束もされずに正体さえ隠してくれている。

浩二自身に何のメリットもないのに……。

(あたしにはこの人間がわからない)

けど、命を大事にしろと言われたその約束は守る。イリエ自身、どこまで守れるかはわからないけどそれが浩二の仲間でいられる条件としたら安いものだから。

「平野様！ 平野様はおられますか!?!」

昼頃、いつものように「エリセン」に住む人達を診察していたら一人の海人族の兵士が慌ただしくも浩二の元まで駆け付けてきた。

「どうかしましたか?」

「ど、どうかご助力を! 正体不明な船と謎の不審者が停泊場に! 仲間も負傷している者が多く、お力添えを!」

「正体不明な船と謎の不審者……? ああ」

(やっと到着したのか……)

海人族の兵士の言葉にようやくか、と思い兵士と共にその場に向かうとそこには一触即発のような空気を漂わせている海人族の兵士達と主人公達南雲ハジメがいた。

それを見た浩二は小さく溜息を吐いて二人の間に割って入る。

「はい。そこまで」

「平野様!?!」

「ん? 平野? なんでお前がここにいやがる?」

いる筈のないクラスメイトに怪訝な顔を浮かべるハジメに駐在部隊の隊長格である男は鋭い眼をハジメに向ける。

「貴様っ! 我々はともかく平野様になんて口の利き方を!?! 平野様

がこの町に訪れてからどれだけ我々海人族の皆を無償で治療してくださったことか!!」

(……無償じゃないけどね)

実際は治療費や必要経費は全て国が負担してくれている為に無償ではない。

「落ち着いてください。それとこの人達は敵ではありません。この人達の安全は俺が保証します」

「し、しかし……いえ、平野様がそうおっしゃるのでしたら」

浩二の言葉に渋々ながらも頷いて矛を収める。それに一息ついて浩二はハジメ達に視線を向ける。

「南雲達も久しぶり、でもないか。「ホルアド」で別れて以来だな。とここで香織はどうした?」

「ああ、それなら」

「ん? 今なにか……」

ハジメは香織達はアンカジにいることを浩二に伝えようとした時、シアがウサミミをピコピコと動かしながらキョロキョロと空を見渡し始めて、ハジメも浩二もうつつすらと声と気配が感じられた。

「——ッ」

「あ? なんだ?」

「——パッ!」

「おい、まさか!」

「——パパあー!!」

「うわあ……」

空から両手を広げて満面の笑みで自由落下している幼女がいた。

「ミュウツ!」

パラシュートなしのスカイダイビング。その幼女の背には黒竜と香織の姿が見えた。

ハジメは自由落下しているミュウを認識すると否や「空力」と「縮地」を発動。その場から一気に跳躍して空中でミュウを腕の中に収めた。

(原作で知っていたとはいえ、ミュウちゃんの胆力は絶対に四歳児

じゃないな……)

呆れと感心半々でそう思った浩二。すると騒ぎに気づいたティニア達が浩二の元へ駆けつけた。

「あれはティオ様!? どうしてここに!?!」

黒竜姿のティオを見てエフェルはまさかの再会に驚きを隠せれない様子だ。

「香織様もいらっしやいますね」

ティニアも顔見知りである香織の姿を発見した。

こうして浩二は主人公達と合流することができた。

脇役33

「ひっぐ、ぐすつ、ひう」

ボロボロになった浅橋の近くで、幼い少女のすすり泣く音が響く。野次馬やら兵士達やらで人がごった返しているのだが、喧騒など微塵もなく、妙に静まり返っていた。

その理由は四歳児とは思えない胆力でパラシユートなしのスカイダイビングをやつてのけた少女——ミュウをハジメが盛大に叱りつけたからだ。

「ぐすつ、パパ、ごめんない……」

「もうあんな危ないことはしないって約束できるか？」

「うん、しゆる」

「よし、ならいい。ほら、来な」

「パパあー！」

ハジメをパパと呼び、本当の父親のように慕うミュウ。ミュウのことを知っている海人族はただその光景に唾然とするばかり。

泣きじやくるミュウを慰めるハジメに香織が抱き着く。

「よかった……。本当によかったよお、ぐすつ」

ハジメが無事であったことに安堵の涙を流す。内心、それだけ不安だったのだろ。そんな香織に「おい、なに幼馴染を泣かしてんだ？

ああ？」と視線を叩きつける過保護な幼馴染が一人。

「心配かけて悪かった。この通り、ピンピンしてるよ。だから……泣くなよ。香織に泣かれるのは、いろいろ困る」

「うっ、ひっぐ、じゃ、じゃあ、もう少しこのまま……」

そして竜化を解いたティオがハジメの頭を抱き抱え自らの胸の谷間に押し付けた。

「ぬおっ!? おい、ティオ」

「信じておったよ? 信じておったが……やはり、こうして再会すると……。しばし、時間をおくれ、ご主人様よ」

大切なものが腕の中にあることを噛み締めるような表情をして、目の端に涙を溜めていた。そこにミュウもハジメの首筋に抱き着き、ハ

ジメは衆人環視の中、美少女、美少女、美女を身体が見えなくなるくらい全身に纏わりつかせていた。

周囲の視線が困惑から次第に生暖かいものへと変わっていく。その時――

「ミュウ!? ミュウなのね!？」

「ママ!？」

騒ぎに駆けつけたレミアがミュウの存在に気づいてミュウも母親の声に顔を輝かせて母親を目視するとハジメから跳び下りてステテテー! と勢いよく走り、母親であるレミアの胸元へ満面の笑みで飛び込んだ。

もう二度と離れないというように固く抱きしめ合う母娘の姿に、周囲の人々が温かな眼差しを向けている。中には涙ぐむ者もいた。

感動の親子の再会を見届けたハジメは次にこの場にいる浩二に視線を向けた。

「で? なんでお前がここにいるんだ? 平野」

「え? 浩二くん!? どうしてここにいるの!？」

ようやく幼馴染の存在に気づいた香織は心底驚いた顔でまじまじと浩二を見る。

「ん? お主、エフェルか? どうしてお主がここにおる?」

「お久しぶりです、ティオ様。理由はティオ様と同じです」

そしてティオもまた同胞の存在に気づいて声を投げる。

「ああ、実はかくかくしかじかまるまるうまうま」

「え!?! 光輝くん達のパーティーにいられなくなったからパーティーを抜けて一人で行動しているの!？」

「……よくわかるな」

「……んっ、以心伝心」

「ハジメさんとユエさんみたいですな」

流星は幼馴染なだけあって意思疎通などお手の物。

「ふむ。それでお主はそちらの者達と行動を共にしておるのじゃな」

「はい。旦那様がいなければ私はこの場にはいなかったでしょう」

「ふふ、お主もよき出会いがあったようだなにより」

竜人族の二人も互いの事情を説明し合い、納得するように頷いていた。

「まあ、ここじゃなんだし。落ち着く場所で話をしないか？ 南雲達にも伝えておきたいこともあるしな」

浩二達は一度場所を変えて話をすることにした。

「なるほど。本物の神の使徒か……」

場所を変えてレミアの家で浩二は勇者パーティーを抜けて王都を出てその時、神の使徒と出くわし、戦って生き残った。オッドアイなのはその際の影響だと告げてハジメはその話に頷いて、浩二は本題を告げる。

「俺はあれから色々知った。これから備えて大迷宮の攻略、そして神代魔法は必須だと。そこで南雲達に大迷宮攻略の為に同行させて貰おうと思つてな。行くんだらう？ 大迷宮に」

「いや、行きたきゃお前等だけで行けよ」

同行を求める浩二達にハジメは呆れ顔でそう言った。

その瞳は迷惑だと物語っている。

もちろん浩二はその答えは予測済み。だから原作知識も含めたその情報と戦力になることを対価に同行を許して貰おうと思ひ、口を開こうとした瞬間。

「ご主人様よ、この者達の同行を許しては貰えぬか？」

まさかの援護射撃。ティオがハジメに口添えした。

「ああ？ なんてだよ？」

「エフェルは里でも妾の次に続く強者でエフェルも己より強い者しか伴侶にしないと告げるほどじゃ。そのエフェルが選んだ相手であるこの者は下手をすれば妾、いや、ご主人様と同等かそれ以上に強いと思うのじゃ」

ティオの言葉にハジメ達は目を見開く。

ハジメのその強さを間近で見えて来たユエ達にとって浩二がそのハジメと同等以上に強いことにまさかと思うも、それを告げているのが

テイオならあり得るかもしれないと思ってしまう。

思慮深く聡明なテイオの言葉には一考の価値はある。

「当然です。旦那様は私を倒したその神の使徒を一人で二人も倒したのですから」

自身満々に答えるエフェルだけどハジメ達はその神の使徒がどれだけ強いのかは知らない為に実感は持てない。だが、テイオに続く竜人族であるエフェルを圧倒した存在であることは確かだ。

なら、それを二人も倒した浩二の実力はそれ以上と考えた方が妥当だろう。

「ハジメくん。私からもお願いできないかな？」

続けて香織がそう言った。

「浩二くんの治療の技術は私より上だし、浩二くん自身も凄く強いよ。いつも目立たないけど光輝くんや雫ちゃんたちのフォローをよくしてくれたし、ダメかな？」

幼馴染である香織にハジメに浩二達の同行を許して貰おうと口添えする。仲間であるテイオと香織の口添えにハジメは肩を竦めながら浩二に言う。

「寄生したところで、魔法は手に入らないぞ？ 迷宮に攻略したと認められるだけの行動と結果が必要だ」

「覚悟の上だ。それに南雲にとってもこれからの戦いに向けて戦力は多い方がいいだろう？」

その言葉にハジメは逡巡する。

浩二の言葉が本当だとするのならいざれハジメの前にもその神の使徒は現れるというのなら浩二の言う通り、戦力は多い方がいい。なにより面倒事を押し付けることもできるし、いざという時の肉壁にもなる。

(碌でもないことを考えているな、こいつ……)

ハジメの僅かな仕草で何を考えているのか察した浩二は内心呆れていた。

「……ついてくるのなら好きにしろ」

「ああ、好きにさせて貰う」

こうして浩二達はハジメ達と共に行動することができるようになった。すると香織が……。

「浩二くん、なんだか雰囲気が変わったね。なんか落ち着いたというか、憑き物が取れたみたいだよ」

「まあ、雫に告白して見事に玉砕したからな」

「ええ!? 雫ちゃんに!」

軽く雫にフラれたことを幼馴染である香織に伝える浩二に香織はびつくりと言わんばかりに驚いていた。

「王都に出る前に恋人として一緒に来てくれって告白したらごめんなさいって返されてな。いや、その後は自分でも驚くぐらいに泣いた泣いた」

軽くそのことを口にするも香織はどう反応すればいいのかわからなかった。

シヨックを受けているようにも見えず、けどその内容は決して嘘ではないようにも聞こえる為になんて声をかけていいのか、わからないのだ。

「えつと、大丈夫……?」

「ん? ああ、今ではあの時、フラれてよかったと思っている。自分がどれだけ最低な男なのか自覚することができたし、今度はちゃんと自分の気持ちを伝えるつもりだ」

「……?」

その言葉の意味がわからず首を傾げる香織に浩二はポンポンと香織の頭を叩いて言う。

「要は俺は雫を諦める気はないってことだ。雫が折れるまで何度でも告白するつもりだ」

「……そっか。うん、それでこそ浩二くんだね」

浩二の雫に対する想いを知っている香織は諦めない意思を見せる浩二に安堵の息を漏らす。

「それに今はこんな俺を支えてくれる “大切” な人達もできたしな」

後ろに振り返る。そこには雫という “特別” がいながらもそれでも浩二についてきた二人は笑みを見せる。

「え？ 浩二くん、それって……？」

「香織の想像通りで間違いないぞ。まあ、そのことは後で話す。それよりも南雲」

「なんだ？」

「ちよつと俺と模擬戦してくれないか？ ほぼ実戦形式で」

「はあ？」

突然の模擬戦の申し込みに訝しむハジメに浩二は言葉を続ける。

「理由は三つある。一つは今の俺がどこまで強くなったのか、それを把握する為。二つ目は俺達が戦力になるか、お前達目で確かめて欲しい。三つ目は俺個人の理由だ」

「なんだよ？ 個人的な理由って」

「お前も男ならわかるだろ？ 打ち破りたいものが、乗り越えたいものがある。その為にはどうすればいいのかぐらい」

「……」

「俺は俺という過去を乗り越える為にはどうしてもお前と戦う必要がある。だから俺と戦ってくれ、南雲^{主人}ハジメ」

浩二が乗り越えなければいけないもの、それは脇役という己自身。才能もなく素質もなくどこまでいっても物語の脇役でしかない己自身で思い込んでいたその殻を破るには主人公^{南雲ハジメ}と戦う必要がある。

もう主人公など脇役など関係ない。己の道は己で進む為にも浩二^{南雲ハジメ}は主人公に模擬戦を申し込んだ。

「断る」

が、そこで断るのがハジメクオリティー。

「なんで俺がそんなことに付き合わなきゃいけないんだよ？ 戦いたきゃ大迷宮で存分に戦えばいいだろうが、めんどろくせえ」

面倒くさそうにそう告げるハジメ。しかし……。

「自惚れるなよ、南雲」

そこで口調ががらりと変わった浩二は剣呑な眼差しでハジメを見据える。

「確かに俺達は同行を求めたが、別に俺がお前より弱いから同行を求めたつもりはない。【メルジーネ海底遺跡】に挑戦する為にお前達に

同行した方が都合がよかつただけだ。それ以上でもそれ以下でもない」

その言葉にはハジメもいい顔はしなかった。

「ハッ、言ってくれるじゃねえか。だったらなんだ？ お前は俺よりも強いとでも言いたいのか？」

「それを知りたきや俺と戦え。俺とお前、どっちが強いかわ黒つけようじゃねえか」

「おもしろえ。いいぜ、受けてやるよ」

互いに剛毅な笑みを見せ合い、浩二脇役と南雲ハジメ主人公の戦いの幕が開かれる。

脇役34

海上の遙か上空、空に漂う二人の男性。

灰色に紅い線が入った翼を広げて空を跳ぶ浩二に「空力」で空中を足場にして留まっているハジメ。二人が互いに得物をその手に向かい合っていた。

それを顔を見上げて地上から観戦している浩二とハジメの仲間達はこれから始まる戦いを見守っている。

「やめるなら今の内だぞ?」

鋭い眼差しを作りながら最終警告を告げるハジメ。今ならまだなかつたことにできると言外にそう告げるも浩二は首を横に振った。

「まさか。言っただろ? 俺は俺を乗り越える為にもお前と戦う必要があると。やめるわけにも、逃げるわけにもいかない」

脇役も主人公も関係ない。己自身の道に進む為に浩二はこの戦いから降りるわけにはいかない。

「そうかよ……」

覚悟を決めた浩二に小さく肩を竦める。

浩二が何を思って、どういうつもりで勝負を申し込んだのかはハジメは知らないし、興味もない。だが、そのつもりだというのなら相手をするだけだ。

「コインが海に落ちたら開始。異論はあるか?」

「いや」

異論がないことに首を横に振るハジメに浩二はコインを弾く。

コインが自然落下で海に向かって落ちていくのを待ちながら身構えていると不意に浩二が口を開く。

「南雲。お前の強さは『理不尽』の領域に達している。それぐらい診たらすぐにわかった」

「ああ……?」

(いきなり何を言っただ? こいつ)

しかしハジメはその言葉を否定する気はない。奈落の底で死に物狂いで魔物を殺し続け、故郷に帰る為に七大迷宮を攻略し、自身でも

それなりの強さはあると自負している。

そうでなければ「グリュウエン大火山」で遭遇したフリードとそのフリードに従っている白竜の攻撃によって死んでいた。無論、ユエやシアといった仲間達の力を借りていることも否定しないが、ハジメ本人も浩二の言う「理不尽」の領域に達している。

「だけどその領域に達しているのはもう、お前だけじゃない」

そこで二人の耳にポチャンとコインが海に落ちた音が聞こえた瞬間——浩二は一瞬でハジメの眼前に現れた。

「!?」

「油断していると死ぬぞ?」

鋭い剣閃がハジメを襲う。

「チッ!」

舌打ちと同時に反射的に紅い魔力の塊を圧縮させてその剣閃を防ぐ。「金剛」の派生技能「集中強化」によって防ぐも、刀には灰色に紅色の魔力を纏っている。それは神の使徒であるファイアトを取り込んだことによつて手に入れた「分解」。その能力でその防御を切り裂いた。

だが、一瞬だけ防げば十分。ハジメはドンナーの照準を浩二に向けて発砲する。至近距離から放たれた銃弾を浩二は最小限の動きで回避と同時に次の攻撃態勢を取つて刀を振るうと同時にハジメは魔力を纏っていない身体に「豪脚」、魔力を纏わせた蹴撃を炸裂させようとするも浩二の動きがピタリと止まってハジメの蹴撃は空振りに終わった。

(こいつ、俺の動きを……!)

「ああ、視えてる」

そしてハジメは浩二が放つ一閃をその身に受ける。

ユエ達は顔を見上げながらその戦いにただ驚いていた。

ハジメの強さをずっと傍で見続けてきた彼女達に取つてその戦いは信じられないと思うばかり。始まる前はすぐに終わるだろうと高を括つていた彼女達の思惑は簡単に覆させられた。

「うそ……ハジメさんが……」

シアは啞然としながら上空で起きた戦いにただ驚愕に包まれる。何故なら「あのハジメ」に一撃与えたのだ。不意打ちでも奇襲でもない。正面からの戦いでハジメは初めてその一撃を受けてしまった。

「ユエさん！ ハジメさんが、ハジメさんが……！」

「……落ち着く。まだ終わってない」

慌てふためくシアを宥めつつユエはじつと二人の戦いを見続ける。

ハジメは「空力」と「縮地」を使ってドンナー&シユラークで攻撃しつつ「宝物庫」から他の兵器を取り出すも浩二に当たる気配がまるでない。

「それぞれころか……」

「浩二くんが押してる……？」

そう、それでも浩二が優勢だ。

ハジメの攻撃が浩二の横を通り過ぎて、浩二の攻撃が吸い込まれるように当たっている。

「これは「経験」の差じゃな」

その戦いを観戦しているティオがポツリとそう呟いた。

「「経験」ですか……？」

「うむ。ご主人様は確かに強い。じゃが、ご主人様がこれまでに対峙してきた多くは本能を剥き出しに襲いかかる魔物であつたはずじゃ。それに対して平野殿の動きは明かに対人慣れしておる」

魔物は常に本気で襲いかかる。だがしかし、人は違う。

様子を窺い、動きを読もうとし、騙しや駆け引きまでも用いる。ハジメはこれまでずっと魔物と対峙してきた為に対人での経験は少なく、尚且つ自身と互角に戦える相手が浩二が初めてだった。

それに対して浩二は子供の頃から八重樫流の道場で技を身に付け、磨き、対人での戦い方を身に付けてきた。これはお互いが積み重ねてきた「経験」に差が生じたのだ。

「流石はエフェルが伴侶として認めただけはあるのう。あれほどの技を磨くのに相応以上の努力をしたはずじゃ」

「うん、浩二くんは私達のなかで誰よりも努力していたよ」

雫や光輝と違って才能がない分、努力でその差を埋めようと努力してきた。香織はそれをこの中で誰よりも知っている。

その全ては雫に振り向いて貰う為。けど、香織はどこか納得いかない想いがある。

「香織様」

そんな時、テイニアが香織に声をかけた。

「テイ、テイニアさん……」

「どうか浩二様を悪く思わないでください。浩二様にとって『特別』は雫様だけですの」

「え？ で、でも……」

「浩二様は自分の『特別』は雫様だけ。だから私達の想いに応えられないとハッキリとそう言ってくれました。しかし、それでもという私達の想いに応えて下さったのです。私達の我儘を受け入れて下さった浩二様をどうか、悪く思わないで上げてください」

浩二はそのことについて己は最低だと自覚しているが、テイニア達は浩二よりも自分達の方が最低だと思ってる。『特別』がいる浩二に諦めない想いを抱き、それでもと寄り添うテイニア達の我儘を受け入れた。

その間、色々と悩み、苦しみ、考えさせられた筈なのにそれでもと言うテイニア達を浩二は受け入れたのだ。

香織は何か思い悩むような顔で再び上空に視線を向けて二人の戦いを見ていると、ハジメの銃弾が浩二の肩を貫いた。

「なるほどな……視えているはそういうことだったか」

何かに納得したかのようにぼやくハジメに浩二は貫かれた肩の傷を癒す。

「悪かったな、平野。俺はお前の事を甘く見過ぎていた。正直、最初の一発で終わるだろうと思っていたぜ」

評価を改めて、自身がどれだけ天狗になっていたのかを知ったハジメは猛省する。

「対人戦闘で技と駆け引き、ブラフがどれだけ重要なのか。お前と

戦って痛感した。確かにお前に言われていた通り、俺は自惚れていた」

「……もう少し自惚れていてくれればこっちが勝てただけだな」

「だろうな。少なくとも対人戦闘なら俺よりお前の方が上だ。だが」

ハジメはドンナー&シユラークを構えて告げる。

「勝つのは俺だ」

撃ち放った紅色の弾丸を「魔力操作」の派生技能「遠隔操作」で誘導して浩二の身体を貫こうとするも「分解」が付与された刀でそれを斬り払う。だが、弾丸は確かに浩二を貫いた。

「ぐっ！」「焦天！」

回復魔法でその傷を治す浩二にハジメが言う。

「その神の使徒から奪った分解能力は確かに凶悪だ。だが、一瞬で魔力と物体を同時に分解することはできねえみたいだな。もしくはお前自身がまだその能力を使いこなしていないか。そうだろう？」

弱点を見破ったと言わんばかりの笑みで告げるハジメに浩二は口角を曲げる。

「……そうだとしてもそれなら回避に集中すればいい。それだけの話だ」

「できるならな」

ハジメは「瞬光」の状態へと突入する。世界が色褪せるほどの知覚能力の増大。時の流れが遅くなった世界で浩二がどれだけ素早く動こうともその動きをハジメはしっかりと捉えている。

そして紅色の弾丸を放つ。しかしながら浩二はそれを回避してハジメに接近するも、ハジメはドンナーの照準を浩二に向けて至近距離で発砲。それでも浩二は避けた。

（貫った！）

しかし、ハジメもその攻撃を避ける。

剣撃と銃撃。互いに至近距離で相手の武器を躲し、逸らし、弾きながら攻撃を繰り返す。

（やっぱりな、視えているってのはそういうことか！）

（ここまで視えているのに避けてる！ 南雲の奴、瞬光を使っている

な！)

浩二は己の手の内に気づかれたことに内心舌打ちする。

ハジメは疑問に思った。

どうしてこちらの攻撃が当たらず、向こうの攻撃が当たるのかを。動きを読まれているのは確かだが、浩二の天職は「医療師」。ハジメと同じ戦闘向きの天職ではない。

それに浩二は「読んでいる」ではなく「視えている」と言った。そこで浩二の天職を踏まえてハジメは気づいた。

浩二には相手の肉体構造が透過しているように視えているのではないかと。

地球の病院で扱っているレントゲン、X線撮影のように浩二の視界には相手の肉体の内部構造が視えているというのなら視線や筋肉、神経などの僅かな動きで相手の動きを先読みしている可能性が高い。

それならそれに対抗する為にハジメは「瞬光」を使うことで浩二と互角に渡り合うが……。

(チツ！ だがこのままじゃジリ貧だ！ 対人なら平野の方が上だ！)

対人での戦闘では浩二が一枚も二枚も上手だ。その証拠に既に「瞬光」に突入しているハジメの動きに対応し始めている。更には浩二の天職は「医療師」。回復魔法を持っている為に自身の傷も状態異常も治すことができる。

ハジメも奈落で魔物の肉を食べていくつかの耐性を持ってはいるが、治す手段は限られている。

(それに香織から聞いた話じゃ、自分の身体を改造して自在に操れるって話だ。下手をすりゃ身体的スペックは俺以上だと思った方が良さそうだな)

「考え事とは余裕だな、南雲」

「分解」が付与された刀がハジメの腕を斬り落とそうと振るわれるが、「金剛」の派生技能「集中強化」によって魔力を消費させつても防ぐ。

「そういうお前は随分と余裕がねえな？ 現段階じゃお前は俺より上

だぞ？ 少しは喜んだらどうだ？」

「この程度で喜べるかよ。それに対人戦闘ではそれは隙になるって零の道場で教わったからな」

「そうかよ」

本当に油断も隙もない。なにより浩二は本気でハジメに勝とうとしている。その気迫が伝わってくる。

「平野。どうしてお前はそこまで俺との戦いに拘る？ 俺は十分にお前の実力を知った。戦力になることも確認した。それなのにいったい何がお前を動かす？」

ハジメは思った疑問をそのまま浩二にぶつける。すると……。

「……俺は主人公になりたいんだよ。ヒロイン零に相応しい主人公に」

「はあ？」

「でも今の俺の心には自分がどうしようもない『脇役』だと根付いている俺がいる。それじゃ駄目だ。あいつに振り向いてもらうにはあいつの相応しい主人公になるしかない！ その為にも俺には『力』がいる！ 『強さ』がいる！ なにより自分が主人公だと思える『自信』がいる！ それを手に入れる為には南雲、俺はお前に勝たなきゃいけないえ!!」

「……」

「お前にとってはいいい迷惑だというのも、ただの自己満足だというのもわかってる！ それでも諦めきれない想いがある！ 貫きたい意地がある！ 惚れた女に相応しい男にならないといけないんだよ!!」

俺は!!」

その為にも『脇役』から『主人公』になる必要がある。

だからこそ浩二は戦わないといけない、勝たないといけない。本物の主人公南雲ハジメに。

それらを聞いたハジメは深い、それはもう深い溜息を吐いた。

「たくっ、自分が脇役だのなんだの、くだらねえことに俺を巻き込むじゃねえよ」

心底迷惑だと言わんばかりの目を向けるハジメだけど、同じ男として浩二の気持ちはわからなくはない。

(惚れた女に相応しい男、ね……。よく言うぜ。俺なんかより十分強いじゃねえか、お前は)

たったそれだけのことにどれだけ努力してきたのか、頑張ってきたのか、戦っているハジメにはよくわかる。だからこそハジメはそんな浩二に本気で勝ちたいと思った。

「いいぜ。最後まで付き合っつてやるよ。死んでも文句言うんじゃないぞ?」

ハジメは全身から紅色の魔力が噴き上がり身体を覆っていく。〃限界突破〃を発動した。

「それは俺の台詞だ」

それに対して浩二は自らの意思で生存本能^{リミッター}を意図的に破壊して本来使えない力に手を付ける疑似的な〃限界突破〃。フュンフトとの戦闘で壁を超えて新たに手に入れた〃改造〃の派生技能〃限界解除〃を発動する。

南雲ハジメ 平野浩二
主人公と脇役の第二ラウンドが始まった。

脇役35

紅色と灰色の魔力が衝突する。

ハジメと浩二。二人は限界を超えた力を発揮して対峙している存在をこの世から消し去るかのような激しい戦いを繰り広げている。

それはもはや模擬戦でもなんでもない。完全なる殺し合いだ。

ハジメの放つドンナー&シユラークが浩二の頭、喉、心臓とその命を撃ち貫こうと弾丸を斉射するも、浩二はそれらを全て躲してハジメを物言わぬ肉の塊に切り刻もうと刀を振るう。

そんな過激では済まされない激戦を繰り広げている二人を見て香織は思わず……。

「二人共もうやめて!! それ以上戦わないで!!」

その戦いに見ていられずに制止の声を投げるも、二人は戦いを止めない。

見ていられなかった。

自身の愛する人と大切な幼馴染がその身から血を飛ばし、相手の命を奪わんとする殺し合いをする光景を。

「ユエー! それにシアもテイオさん! ティニアさんとエフェルさんも二人を止めて!」

「そ、そうですね。これはいくらなんでも……」

懇願するかのような香織の叫びにシアも頬に冷汗を垂らしながらそれに同意するように頷くもユエが首を横に振った。

「……それはダメ」

「そうじゃの。それはできぬ」

ユエに同意するようにテイオもまた香織の懇願を断った。それに香織は思わず言った。

「どうして!?! ハジメくんがどうなってもいいの!?! ティニアさん達もこのままじゃ浩二くんが!?!」

二人の身を案じてどうにか止めようと仲間に声を飛ばすもテイニアもユエとテイオと同じく首を横に振った。

「それはできません」

「私もテイオ様と同じく二人の戦いを止めに入ることにはできません」
香織の懇願はシア以外誰もが首を横に振った。

それがどうしてか？ 理解が出来ない香織にユエが言う。

「……ハジメ、楽しそう」

「えっ？」

その一言に香織は顔を上げて二人の戦いを見るも、香織には二人の戦いが速過ぎて顔まで視認することが出来なかった。そこにテイオがユエに続いて。

「笑っておるのじゃよ、ご主人様」

「ど、どうして……？」

今にもどちらかが死んでもおかしくない戦いをしているのに。そんな疑問を脳裏に過らせる香織にテイオは言葉を続ける。

「ご主人様は強い。じゃがそれは自分の全力を出し切る相手がいないということじゃ。しかし今はどうじゃ？ 今のご主人様の目の前には自分の全力を出し切っても倒し切れない相手がおる、向かってくる相手がおる。なら、そんな相手に勝ちたいと思うのは当然のことじゃ。ふふ、ご主人様も男じゃのう」

まるで負けず嫌いの子供の喧嘩を見守る母親のように微笑ましい表情を見せる。

「で、でも、もしものがあれば……」

それでも万が一のことがある。

「かもしれない。じゃが、それでも止められぬ戦いもある」

万が一にも死ぬかもしれない。それでも誰にも止められない戦いというものはある。

「浩二様にとってこの戦いは避けては通れないもの。乗り越えなければならぬ戦いなのです」

惚れた女に相応しい主人公になる為に浩二は脇役という殻を突き破ろうとしている。

雫に対するその想いはもはや狂信に近いほどの真っ直ぐで頑固な一途な恋心。好きだから、惚れたから、なにもかも全てが愛おしくてたまらない。惚れた女の全てが欲しい。

の度に主人公の手によって破壊されていく。

(回復が、追いつけない……ッ！)

ハジメの攻撃が浩二の治癒を上回り、後数秒でも攻撃が続けば浩二は回復する手段がなくなってしまう。いや、それだけではなく、このままでは負けてしまう。

浩二は強くなる為にあらゆる鉱石を改造して体内に取り込んでいたが、それが今となって仇となった。

(俺の体内にある鉱石を「錬成」できるなんて、どんだけだよ……)

粒子、分子レベルの鉱石を「錬成」させた主人公南雲ハジメの錬成。ハジメ自身も自覚した成功率の低い一か八かの賭けだったが、ハジメはその可能性を掴み取った。

(結局、主人公南雲ハジメには勝てないってことかよ……)

諦観が過る。

どう足掻いても脇役という運命は変えられない。脇役は主人公にはなれない。

——だが。

(ふざけるな……)

浩二は諦めていなかった。

そんな運命などクソ喰らえ、と言わんばかりの激しい怒り。全身の毛が逆立つような衝動。

(そんなもので諦められるかよ!!)

分不相応な想いだということは自覚している。決して叶わぬ初恋だということもわかってる。ヒロイン南雲ハジメは主人公のヒロインだということも。

諦めていい理由などいくらでもある。誰もそれを責めることなどしないということもわかっている。

それでも浩二は諦めきれないほどに雫を愛している。

(南雲、お前がどれだけ女を侍らせようがお前の好きにしたらしい。そこに香織を加えても香織本人がいいのなら俺は何も言わねえ。それはお前と香織の問題だからな。だけどな！ 雫だけは、俺が心底惚れている女だけは譲れねえ！ それだけは絶対に譲るわけにはいか

ねえんだよ!!)

それは嫉妬だと理解しながらも浩二はその思いだけは譲ることはできなかった。

(だから俺はお前に勝たなきゃいけないんだよ!!)

全てはヒロインの主人公になる為に浩二は運命も脇役も何もかもを改造させる。

「改造!!!」

脇役から主人公になる為の言葉を唱えた。

脇役36

「『改造』!!」

浩二がその技能を使用した次の瞬間、全ての弾丸が斬られた。「なっ!?!」

無限とも思える銃弾の嵐。それを全て斬った浩二にハジメは一瞬驚くも続けて斉射する。しかし、その弾丸は直撃するよりも前に全て浩二の刀にとつて斬り落とされた。

「南雲、もうお前の攻撃は俺には届かない」

刹那、ハジメは斬られた。

「!?!」

痛みよりも前にハジメは困惑を隠せない。

ハジメはもう浩二に対して油断も慢心も微塵も抱いていない。一瞬たりとも目を逸らしてもいない。それに今は『瞬光』の状態だ。世界が色褪せるほどに知覚能力を爆発的に高めている。更には『限界突破』も使っているというのにハジメは浩二を捉えることができなかった。

それなのに気がついたら斬られていた。

そう思ったハジメは……。

(俺の精神に干渉したのか!? ……いや、これは単純に俺より速くなっただけだ!)

残像どころか僅かな身動きすらも認識することができなかったハジメは浩二が何かしらの方法で自身に干渉しているのではないかと推測するが、それを否定する。

仮にそんなことが可能であるのならば戦ってすぐにそれらしい方法を一つや二つは使ってもおかしくはない。だが、浩二は戦いはじめてから一度も精神や記憶に干渉する技能は使っていない。

(そういや平野の奴、闇系統の魔法を持っている筈だよな……? どうして使わねえんだ?)

ハジメは疑問を抱く。

香織から浩二のことは聞いている。医療の腕前は勿論、闇系統の魔

法による前衛へのサポートの腕前もよいと聞いた覚えがあるし、浩二は勝つことに手段を選ばない性格だということも聞いている。

それなのにどうして開戦してから闇系統の魔法を使ってこないのか？

(手を抜いてる……？ いや、平野がそういうことをする奴じゃねえのは戦っている俺が知っている。ということは使わない理由があるに違いねえ……)

その理由についてはハジメはわからない。だが、浩二にとって使わないことに何かしらの意味があることぐらいは察することができる。

(俺との戦いは平野にとって乗り越えなければいけないこと……。過去の決別ってどこか……)

納得している間にもハジメの身体にまた赤い線が刻まれる。

「このッー！」

だがそれでも流石の一言だろう。

僅かな身動きすら捉えられない浩二の動きをこれまで培ってきた勘で狙いを定めて発射する。しかし、その弾丸は浩二に届くことはなかった。

それどころかそのお返しと言わんばかりにハジメを切り刻む。

「がっ!?!」

ほぼ全身を切り刻まれるも、ハジメは冷静だった。

(わからねえことはあるが、平野の奴が勝負を決めにきているのは確かだ！ この馬鹿げた力は恐らくは……ッー！)

「ああ、お前の考えている通りだ。南雲」

ハジメの思考などお見通しかのように浩二は告げる。

「俺には才能がない、素質がない。お前のように色々な兵器を作れるだけの技術もない。何も無い俺に賭けられるものといえばこの身体とこの命、そして魂しかない。ならその全部を使って俺は勝つ！ そして手に入れるんだ！ “力”も“強さ”も“自信”も何もかも俺は手に入れてあいつの主人公になるんだ!!」

血も肉も魂も全てを力に“改造”してハジメを上回るステータスで圧倒する。

文字通りの「命がけ」。自らの命を糧に浩二はハジメを切り刻む。
「ぐうううううううッ!!」

全身を「金剛」で防御するもそんなものなど無意味だと言わんばかりにハジメはその身体に赤い線を刻まれていく。

(強え……ッ!!)

その気迫、覚悟、想いの強さがハジメの身体だけではなく、魂にまで刻まれていく。

「ユエと共に故郷に帰る」。奈落の底から這い上がって来たハジメのその強さ、その強さに至るまでの経緯、なによりその強靱な精神力は並大抵のモノではないだろう。

だが、這い上がってきた者はハジメだけではない。

浩二だって何度もドン底から這い上がって来た。何度も叩き落とされようとも、雫に振り向いて欲しい、雫の主人公になりたいという一心で這い上がって来た。

何度諦めようとしたかわからない、何度挫折しそうになったのかもわからない。それでも浩二は這い上がって来たんだ。雫を諦めたくないその想いだけは浩二は誰にも負けない。

そして――

「八重樫流刀術――」

(やべえ!?)

反射的にハジメは持てる全てを防御力に回したが、一手遅かった。

「――桜吹雪」

刹那、ハジメの身体から大量の血飛沫が宙を舞った。

「かは……」

血を吐き出し、上空に留まっていた「空力」が消えてハジメはそのまま海に向かって落ちていく。

(俺が……負けた……)

白濁する意識のなかでハジメはそう思いながら海に向かって落ちていく。だが、辛うじて意識があるのは浩二がギリギリで致命傷を避けたおかげだが、それでももうハジメには指先一本も動かす力は残されていない。

(こんな気持ちも久しぶりだな……)

海に向かって落ちながらハジメはここまでズタボロにされたのは奈落の底に落ちて以来だ、とふと思った。だが、この敗北は当然なのかもしれない。

(俺と平野とじゃ：背負っている重さも覚悟も違うってことかよ……)

その結果がこの敗北。

浩二には惚れた女の為に命をかけてでもなりたいモノがある。その命がけの攻撃がハジメの魂にまで響いた。海に向かって落ちるハジメは僅かに残されている意識が閉ざそうとしたその時、見てしまった。

香織も、テイオも、シアでさえも誰もがハジメの敗北にショックを受けているなかでユエだけは違った。

吸血姫の瞳はまだハジメの勝利を信じている。

その瞳を見た時、ハジメは歯を噛み締めて意識を強引に引き戻した。

(なに諦めようとしていやがる！ ユエが見ているだろうが!!)

直後、ハジメは紅い魔力を脈動させた。

(動け、俺の身体！ こんなところでへばってんじゃねえぞ!!)

ドクンツドクンツと波打ち、**“限界突破”**の魔力が更に際限なく上昇していく。直後、噴火したかのように紅の魔力が噴き上がった。

螺旋を描きながら天を衝く紅い魔力の奔流—— **“限界突破”**の最終派生 **“霸潰”**だ。

通常の **“限界突破”** は基本ステータスの三倍の力を制限時間内だけ発揮するのに対して、**“霸潰”** は基本ステータスの五倍の力を得ることができる。ただし、限界突破しているところを、更に無理やり力を引きずり出すのだ。その副作用は甚大。けれど、ハジメにはそんなことどうでもよかった。

すぐさまに **“空力”** を発動させてハジメは再び浩二と同じ位置まで跳んでくる。

「……ここでパワーアップとかふざけんなよ、おい」

「悪いな。だが俺も惚れた女の前で格好悪いところを見せるわけにはいかねえんだよ」

男としての意地を見せるハジメだが、今の状態が長くは続かないのは承知済み。そして浩二もまたもう長くは戦えない。

——短期決戦。

二人の内、どちらかが勝利を手にするにはそれしかない。

「……なあ、南雲。ここで一つ提案があるんだが」

「奇遇だな。俺もだ」

二人は互いに剛毅な笑みを見せ合い、銃を、刀を収めて拳を握りしめる。

最後は拳で決着をつける。既に二人の肉体は限界を超えており、強靱な精神力と意地のみで肉体を無理矢理動かしているに過ぎない。これ以上の深刻の損傷は本当に命にかかると考えた二人は素手での決着を選んだ。

しかし、そういう建前よりも二人は男としてのロマンを優先したかったのが本音だ。

最後は己の拳で勝利を手に入れる。ただそれだけだ。だが、それだけで十分。

二人は拳を放ち、互いの頬を殴った。

「カッ！」

「ハッ！」

顔を、腹を、胸を、腕を。ただただ殴り続ける。尋常じゃないその力を拳に込めて相手に拳を放り込ませる。

超至近距離による子供のようなバカげるほどに単純な殴り合い。

——だが。

「南雲！俺はお前に勝つ!!」

例え単純な殴り合いだろうと浩二の方がハジメよりも一枚上手だ。ハジメが強くなったのはこの世界“トータス”に転移、奈落に落ちてからだ。それに対して浩二は幼い頃から八重樫流を磨き続けてきた。当然、体術も浩二は身に付けている。

ハジメと浩二とは積み上げてきた“経験”という絶対的な差が

ある。それはどうすることもできない。だがそれでもハジメは諦めようとはしなかった。

「それは、俺の台詞だ!!」

絶対的なまでに「経験」に差はあろうとも関係ない。ユエが見ている。それだけで十分……と言いたいところだが、ハジメの拳が浩二に当たるまでに、浩二はハジメの防御を通り抜けて的確に二、三発当ててくる。このままでは先に動けなくなるのはハジメであることは明らかだ。

だからこそハジメは狙う。一撃必殺のその一撃を。

(そこだッ!!)

浩二の攻撃を耐え抜き、僅かに見せた隙に左腕のギミックの「振動破碎」。そして「豪腕」と膨大な魔力を注ぎ込んだ「衝撃変換」による絶大な威力の拳撃を放った。

ハジメの全力の一撃が浩二の胸に吸い込まれるように向かっていく。しかし、それは浩二がワザと見せた隙であった。

「なっ!?!」

全力の一撃が紙一重で避けられた。

技と駆け引き。ハジメは浩二の仕掛けた罠に嵌り、全力の一撃を空振りに終わらせた。そして無防備となったハジメに浩二は口角を曲げる。

「俺の勝ちだッ!!」

己の勝利を確信した浩二の渾身の一撃がハジメの頬に直撃した。

「——ッ」

頬から伝わる衝撃に脳を揺さぶられ、ハジメから紅色の魔力が消失する。「限界突破」の最終派生「霸潰」のタイムリミット。それを見た浩二は己の勝利を疑わなかった。

——だが浩二はハジメの目は死んでいなかったことに気づかなかった。

「ッ!?!」

勝った。そう確信した浩二の胸ぐらをハジメは掴み、義手である拳を構える。

「……最後の最後で、やっと油断しやがったな」

そして再び、ハジメは紅色の魔力を噴出させる。二度目の「霸潰」だ。

(なんで!?)

それを見て驚きを隠せない浩二だが、すぐにそれを理解できた。

先ほどハジメは「限界突破」の最終派生である「霸潰」のタイムリミットが訪れたから魔力が消失したのではない。自らの意思で「霸潰」を解いたのだ。

だから僅かにタイムリミットを残した状態で再び「霸潰」を発動させることができた。しかしそれでも数秒。その上、今のハジメの身体では発動できるかどうかかわからない。むしろ、発動したその時点で命を落としていた可能性もあった。だがそうでもしなければ浩二には勝てない。だからハジメは僅かな可能性に己の全てを賭けた。

油断したその身にハジメは最後の力を振り絞ったその一撃を浩二に叩きつけた。

「か、は……」

ハジメの義手が浩二の身体を貫通したかのような衝撃が浩二を襲う。それと同時にハジメは「霸潰」のタイムリミットが訪れる。

(ちく、しょう……)

(くそ、たれ……)

勝てなかった悔しさと共に二人は同時に意識が途絶え、二人一緒に海に向かって落ちていく。しかし、ハジメにはユエが、浩二にはティニアが海に落ちる前に二人を救出する。

「ハジメさん!」

「ご主人様!」

「旦那様!」

「ハジメくん! 浩二くん!」

二人に駆け寄る仲間達。香織はすぐさま二人に回復魔法を施す。

(二人共、酷い傷……どうして……まで……)

目尻に涙を溜めながら必死に傷を癒していく香織だが、その傷は深くそう簡単には治りそうにない。するとユエが……。

「……香織。これを二人に使って」

「え？ これって……」

ユエが香織に渡したのは神水。今では手元に残っているのも僅かな貴重な神水をユエは二人に使わせようとする。

「これって貴重なんじゃない……」

「……んっ。けどいい。どっちも凄く頑張った」

この戦いでユエは浩二のことを認めた。だから貴重な神水を使うのも惜しいとは思わない。

香織が二人に神水を飲ませると重症であつた二人の傷はすぐに元どおりになつた。それを見て香織達はホッと胸を撫でおろした。

しかし、この戦いで浩二は主人公南雲ハジメに勝つことはできなかつた。それに対して浩二は思うことはあるだろう。それでもこの場にいる者達、そしてあの戦いを見た者は浩二を「脇役」だと思ふ者はいないだろう。

ヒロインに相応しい主人公になれたかどうかはわからない。けれど、その一步は踏み出せた筈だ。

主人公01

南雲ハジメと平野浩二の戦いは引き分けで幕を閉じた。
それから数時間後、ハジメは目を覚ました。

「……起きた？」

「ユエ……」

目を覚ますと目の前には最愛の恋人がいた。後頭部から温かく柔らかい感触から膝枕をしてきている事に気づきながらハジメは尋ねる。

「ここは……それに勝負はどうなった？」

「……ここはレミアの家。勝負は引き分け」

「そうか……」

場所と結果を聞いてハジメは右手で顔を覆う。

(引き分け、か……)

違う、とハジメは否定する。

(もし平野が「勝利」に拘っていたら俺は負けていた……)

無論、浩二もハジメに勝つつもりでいた。そのつもりで戦ったのだ。だが、浩二が真に勝ちたいのは己自身。己を乗り越える為にハジメに勝負を申し込んだのだ。

もし、浩二が何よりもハジメに勝つことを優先していれば勝負の行方はどうなっていたかわからない。いや、ハジメが負ける可能性が高かっただろう。

それだけハジメは追い詰められていたのだ。

今回、浩二との戦いでハジメは辛うじて引き分けまで持つて行くことが出来たのがその証拠だ。

ギリ、と歯を噛み締めるハジメの心にあるのは悔しいという感情。次は負けないという勝利に対する執念。南雲ハジメは最愛の恋人に誓う。

「……ユエ。俺は強くなる」

「……んっ」

悔しさを糧に強くなることを誓う最愛の人の頬をユエは愛おしそ

うに撫でるのであった。

同時刻。浩二もまた目を覚ました。

「お目覚めになられましたか？」

「テイニア……」

「ご気分は大丈夫ですか？」

「エフェル……」

目を覚ますと仲間である二人が傍にいてくれたが、それよりも気になることを尋ねる。

「……勝負の結果は？」

浩二は二人に勝負の行方を問いかけると、テイニアが端的に告げる。

「引き分けでした」

「そうか……」

その結果に小さくそう返答した。

（勝てなかったか……）

流石は主人公。南雲ハジメそう簡単に勝たしてくれる相手ではなかった。

（あと一步、届かなかったか……）

最後の最後で油断した。勝利を確信した際が最も油断すると教わっていたはずなのに。

（俺もまだまだ……）

勝利を掴むことはできなかった浩二だけど、得るモノはあった。それだけでも浩二にとっては十分だと思いたい。けれども勝てなかったことに悔しいという感情が芽吹く。

「……エフェル。悪いけど俺の鞆を取ってくれ」

「はい」

エフェルは机の上に置かれている鞆を浩二に手渡すと、浩二は鞆から緑色の液体が入った容器を取り出してそれを飲み干し、続けて赤色の液体も飲んでいく。

（これで『改造』によって失った生命エネルギーは回復した。それでも体内にストックしていた薬や薬草はほぼ無くなったな……化物め）

自分の事を棚に上げてそう愚痴る。

ハジメから言わせれば何十発もその身に弾丸を受けていながら平然と斬りかかってくる浩二の方が化物だ。

そこでふと浩二は気づいた。

「イリエや香織達は？」

「イリエ様は家の外で槍を振るっておりました。香織様達は……」

その言葉を遮るように隣の部屋から声が響いた。それだけで何をしているのか明白だ。

「賑やかですね」

喧騒が響き渡る隣部屋をティニアはその一言で片づけた。

そんな賑やかな隣部屋は置いておいて、ティニアは浩二に問いかける。

「それで浩二様。これから先はどうなさるおつもりですか？」

南雲ハジメ主人公との戦いが終え、一種のケジメをつけた浩二にティニアは今後のことについて問いかけるも……。

「目的は変わらない。南雲達と共に神代魔法を手に入れる」

ハツキリとそう告げる。

「今以上に強くなる為にも神代魔法は必須だ。だからこれからは極力南雲達と協力して神代魔法を手に入れていく」

戦いが終わっても神代魔法を手に入れるという目的は変わらない。

例えハジメ達との協力がなくても自分達で手に入れていくつもりだ。

「二人はどうする？」

「私の答えは変わりません。どこまでもお供させて頂きます」

「私も旦那様について参ります」

即答だった。

あまり頼もしさに逆に驚かされた。

危険な旅だということとは二人も理解しているはずだ。神代魔法を手に入れるというのも浩二の我儘に近い。それでも二人は浩二の傍にいようとしてくれる。

「……なら改めて言わせてくれ。ティニア、エフェル、これからも俺の傍にいてくれ。そして俺が馬鹿な真似をしたらその時は遠慮はいら

ない。ぶん殴ってでも止めてくれ」

「はい」

結束を固める三人。頼もしい仲間、浩二は感謝する。

ハジメも浩二も互いに目を覚まし、身体の調子を取り戻して一件落着。……と、思いきや不穏な気配がレミアの家で漂っている。

「いったいどういうことか説明して頂いても……?」

エフェルが静かにそう問いかける。

言葉こそ丁寧だが、その口調はかつてないほど怒気に満ちてその瞳は怒りが込められている。今すぐにでも「竜化」してもおかしくない。

そんな怒髪冠を衝くエフェルの視線が向けられている相手は南雲ハジメ。エフェルにとって一生添い遂げる相手である浩二と互角以上に戦った男だ。

エフェルにとっても南雲ハジメの強さは想像以上。自身よりも強者であるハジメにはそれなりの敬意を以て接しようと考えていたが、今のエフェルにはハジメに対してはらう敬意など皆無。むしろ、返答次第ではこの身を犠牲にしても一矢報いるという気迫が伝わってくる。

そんな二人にユエ達や浩二達は割って入ろうとはしない。何故なら……。

「いったい貴方はテイオ様に何をしたのですか!？」

憤りを露にするエフェル。その理由は竜人族の姫であるテイオがドがつく変態になっていることについてだ。

その問いにハジメは冷汗を流しながらエフェルから視線を逸らした。

「南雲ハジメさん！ 正直にお答えください！ お尻に杭を刺した、それでテイオ様が変態になったなんて話はどう考えても嘘だということぐらいはわかります！ 洗脳したというのでしたら今すぐに解きなさい！ そうすれば私もこの煮えたぎる怒りを収めることを約

束します！」

怒るエフエル。だが残念なことにそれは嘘ではなかった。

ハジメ達と浩二達はお互いにこれまでの経緯などについて話し合い、情報を纏めて整理していた。その際にポロリと出た話題が「テイオの変態化」である。これはテイオと同じ竜人族であるエフエルは無視していい話ではなかった。

その時の話を聞いたエフエルは現在、ハジメを問い詰めている。

「これ、エフエル。余りご主人様に失礼なことを言うでない。妾は本心からご主人様をお慕いしておる。いくらお主でも失礼が過ぎれば妾も黙っておらんぞ」

「姫様！ 貴女様は騙されております！ 目をお覚まし下さい！」

「姫？」

ハジメが呟く。

「……姫？」

ユエが呟く。

「姫？」

シアが呟く。

「姫？」

香織が呟く。

視線をテイオに向ける。するとテイオはまるで家族に「ちゃん付け」で呼ばれている事を同級生に知られた思春期男子の如き恥ずかしげな様子で、頬をポツと染めて視線を逸らした。

そして、皆が一斉に声を揃えながら呟いた。

「「「ないわく」」」

テイオが咆える。

「な、なんでじゃ！ 姫と呼ばれとつたら悪いか！ 一応、族長の孫なんじゃから、そう呼ばれてもおかしくなからう！」

「そうです！ 姫様は我等竜人の姫君であり、聡明で情に厚く、その実力は族長と同等以上！ 誰からも親しみと畏敬の念を抱かれる偉大なお方です！ 断じてお尻に杭を刺されて変態になられるようなお方ではありません！ それならば南雲ハジメさん、貴方が姫様に何か

したと考えるのが自然でしょう！」

「「確かに」」

ハジメ達は頷いた。もっともな指摘であると。

「本当に姫様がお慕いしていらっしやるのであれば私は何も言いません。私も旦那様、浩二さんのことを心からお慕い申し上げておりますから。ですが、私の目標であり、誰よりも尊敬するお方が……お方が……ぐす」

「おーよしよし」

遂には浩二の胸の中で泣き崩れるエフェルを浩二は慰める。

よほどテイオの変態化がショックだったのだろう。だがそれも無理はない。尊敬する人が再会したら変態になっていたら誰だってショックを受けるものだ。心中お察しします。

泣き崩れるエフェルに流石のハジメも黙っているわけにはいかなかった。

「あーその、なんだ……。悪かった。テイオに変な扉を開けてしまったのは俺が原因だ」

「エフェルよ、どうか泣き止んでおくれ。妾はお主を失望させてしまったかもしれないが、それでもご主人様を慕う妾の気持ちは本当じゃ。今は納得も理解もして欲しいとは言わぬ。じゃが、妾の気持ちはだけはわかって欲しいのじゃ」

二人の言葉にエフェルは涙を拭い、浩二から離れる。

「……わかりました。テイオ様がそこまで申されるのでしたら私からは何も言いません。ですが、南雲ハジメさん。責任はしっかりと取ってください」

「……お、おう」

涙目の女性の前にはハジメも頷くしかなかった。

「ああ、族長に父上、里の皆さんになんて報告すれば……」

「その時は俺も付き添ってやる」

「旦那様！」

愛する人の優しい言葉にエフェルは抱き着き、涙を流す。よほど付き添いが出来たことが嬉しかったのだろう。

その時、浩二はふと思った。

(性癖って精神や記憶を改竄したら性癖も改竄されるのだろうか……?)

ちよつと実証実験を試してみたいな、と思いつつエフェルを抱きしめる浩二であった。

主人公02

「メルジャーネ海底遺跡」に挑戦する前に浩二とハジメの二人は万全の状態で七大迷宮に挑む為に十分な休息とその準備に勤しんでいる。

ハジメは消耗した分の武器の補充と新たな兵器の開発。特に浩二から聞いた本物の神の使徒との戦闘も踏まえて新しい兵器の開発は必須となっている。

しかしそれだけではない。浩二との戦いでハジメは「強くなる」と自身と愛する恋人に誓いを立てた。だからこれまで以上に兵器の開発に熱が入っている。

そうして浩二も新たな魔法薬の開発や改造による能力改善、向上を目指して己自身と武器を片っ端から改造している。

そして――

「りやああああああああ!!」

「フッ!」

ドリユッケンを振り回し、攻撃を仕掛けるシアと鋭い槍の連撃を披露するイリエ。二人の攻撃は浩二を襲う。しかし、浩二にはかすりもしない。

「ああもう! どうして当たらないのですか!?!」

「文句を言う暇があったら攻撃する!」

「わかっていきますよ!!」

愚痴を叫ぶシアにイリエは注意を飛ばす。

何故二人が浩二と戦っているのか? それはこれから大迷宮に挑戦する為にも互いの力量や足を引っ張り合わないようにする為に訓練している。

そこで浩二がシアとイリエ。近接戦闘を得意とする二人の相手を浩二がしている。それ以外にもテイニアはユエと共に空中で魔法訓練。テイニアはそれに並列して神の使徒の力に慣れるようにしてユエは対神の使徒戦に向けて備えてエフェルは同じ竜人族であるテイオと訓練している。無論、全員周囲に被害を出さない様に力は抑えている。

「てやあああああ!!」

シアは技能である「未来視」を使って先の未来を読んで攻撃を仕掛け、イリエも「幻惑」の技能を駆使して攻撃するも浩二には届かない。

「二人共まだまだだな」

「ッ!？」

シアはこれから浩二が攻撃をしてくる未来が見えて躲そうと動く。だが、未来を見たはずなのに浩二の蹴撃がシアを襲う。

「ぐふっ!」

蹴り飛ばされるシア。イリエはシアに攻撃をしてできた浩二の間隙を狙う様に槍を穿つ。当然槍には「幻惑」を施しており、本物の槍は浩二にはわからないはずだ。

それなのに……。

「うそ……」

浩二は見えない筈のイリエの槍を掴んで止めた。

「残念」

ポン、と頭に手を置かれてイリエは敗北し、浩二は二人に完勝する。そこで蹴り飛ばされたシアが二人のところまで戻ってきて反省会が始まった。

「うう〜、ここまでやられたのはユエさんの時以来ですよ……。浩二さんはどうして私の動きがわかったんですか？　もしかして浩二さんも予知系の能力を持っているんですか？」

「あたしもどうして「幻惑」を見破ったのか知りたい」

どうやって二人に完勝できたのか、浩二はその答えを言う。

「俺は別にシアのように予知系の能力は持っていない。未来が見えるというのならそれを踏まえて動けばいい。これは駄目ならあれみたいな感じで対策を三つ、四つ踏まえて動いただけだ。まあ、見える未来は一つとは限らないってことだ」

「なるほど……?」

どうやらシアはよくわかっているようだ。

「まあ、経験を積みれば技能を使わなくても相手の動きを予測すること

はできる。シアは少し技能に頼り過ぎている傾向があるからもう少し地力を鍛えた方がいいぞ」

「うっ」

「どうやら心当たりがあるようだ。」

「そしてイリエだが、一つ勘違いをしている。お前は『幻惑』の技能を使っていない。俺が先に闇系魔法で『技能を使ったと錯覚させた』からだ」

「……つまり、あたしは技能を使わずにあんたに攻撃をしていたってこと？」

「ああ」

『幻惑』はイリエにとって切札であり、最も得意とするもの。その力で魔族から逃げきれたと言ってもいい。だが浩二は闇系魔法によつてその力を封じた。それならば『幻惑』を使っていると錯覚していたイリエの攻撃を簡単に防ぐことができたことに説明がつく。

「シアはもう少し地力を鍛える必要はあるけど、イリエは下地はできているから後はその力をどう応用、発展するかだな」

「はい……」

「………わかった」

欠点と改善点を告げる浩二に二人は頷いた。とはいえ、二人が本気で戦えば浩二もここまで簡単には勝てない。本気で戦うことになれば負けることはなくても多少の手傷は負う。

「……浩二さんってなんといいですか、面倒見がいいですよ。頼りになるといいですか」

「そりゃ、手のかかる問題児の面倒を三人もみていたらな……」

遠い眼差しで答える。

馬鹿に脳筋に突撃娘と雫と一緒に手のかかる問題児の面倒をみていれば自然と面倒見もよくなるというものだ。

「あく浩二さんと香織さんは勇者さんの幼馴染でしたね……」

【ホルアド】で一度光輝と出会っているシアは若干尊敬の眼差しで浩二を見た。よくあんなのと幼馴染でいられて、見限ることもしなかったことに。

「どうしてあんな人が勇者なんですかね……？」

「そう言わないでやってくれ。あいつはあいつでいいところはあるんだよ。ただちよつと挫折を知らずに育っただけなんだよ。ガキだと思えば別にそう思うこともないから」

幼馴染として一応弁明する。

「人間族の勇者はそんなにおかしいの？」

「おかしいというより生理的に受け付けません。思い出しただけで鳥肌が立ちますよ」

シアは思い出しただけで両手で腕を擦っている。よく見れば本当に鳥肌が立っていた。

(そんなにか……)

そんな幼馴染を持つ者としてシアの反応には少なからず思うところはあつても、事実ゆえに言い返せない。

(異世界に来てから光輝のやつ、ご都合解釈が増したからな……。そう思われるのも無理はないのか?)

日本に比べて命の値段が軽いこの世界にとって光輝の理想はただの理想でしかない。子供がヒーローの活躍するシーンを見て僕もヒーローになると言っているようなものだ。

しかしながら光輝にはヒーローとしての実力とカリスマ性があるからタチが悪い。

「まあ、あの馬鹿の事は置いておいて。まだするか？」

「当然ですー」

「もちろん」

三人の訓練は再開する。

昼間の訓練が終えた浩二は夕方は「エリセン」の人達の治療。夜は魔法薬の調合に没頭している時。

「浩二くん。ちよつといいかな？」

「香織か？ ああ、いいぞ」

「お邪魔します」

部屋に入ってきたのは幼馴染である香織が最初に目に入ったのはマッドな笑みで何かしらの怪しい薬を調合している幼馴染の姿だった。

「……何してるの？」

既に見慣れた姿に香織は特に思うこともなくそう尋ねる。

「ん？ 新しい薬の調合」

簡潔にそう答える浩二はフラスコに入っている出来立ての薬を飲み干す。そしてその効果はすぐにでてきた。

「よし、まあこんなもんか」

及第点。と言わんばかりにひとまず納得した浩二は改めて香織と対面する。

「それでどうした？ どこが具合でも悪いのか？」

「それなら自分でどうにかできるよ」

「それもそうか」

香織は浩二から医学を学んでいる。浩二ほどではなくても症状だけである程度のことには理解し、治療することぐらいできる。そんな香織に具合の良し悪しなど確認するまでもない。

「……………浩二さんに相談したいことがあるの」

「ふむ、それで相談の内容は？」

断ることもなく相談する内容を問う。思いを寄せているハジメではなく幼馴染である浩二に相談するのはハジメには言い出せないこと。香織はそれを浩二にぶちまけた。

「……………私って弱いよね？」

「ああ、そうだな」

スカートを強く握りしめながら己の弱さを口にする香織を浩二は肯定した。

何故ならそれは紛れもない事実だから。「そんなことはない」や「これから頑張ればいい」などという空っぽな励ましなど何の意味がないことことを浩二は知っている。だから肯定したのは。

己の弱さとその現実を受け入れさせるために。

「それでも一応言わせて貰えば、俺達は一般人よりかは強い。けど俺

達より強い奴等などいくらでもいる」

「……うん」

香織は力なく頷く。

その「強い奴等」が誰を指しているのかわかるからだ。

「魔物の肉を食べてその特性を手に入れた南雲ハジメ、吸血姫のユエ、生まれながら魔力操作と固有魔法を持つシア、最強種族である竜人族。それ以外と言えば神代魔法を持つ者そして神の使徒。挙げればキリがないな……」

(比較する対象も悪いか……)

苦笑いを浮かべながらそう思う。

「そもそも人間という種族は弱い。いくら強くなろうとしても人間という種族の限界がある」

「でも、浩二くんは……」

「ああ、俺と南雲、後はティニアは人間を辞めた」

あつさりとそう口にした。

「南雲は魔物の肉を食べ、俺とティニアは自分の身体を改造して人間族としての種族の限界を超えた」

浩二は紅く染まり上がった片目に手を置く。

「ティニアさんも……?」

「ステータスだけなら俺と南雲と同等だ」

その言葉に香織は目を見開いた。

「ティニアは雫にフラれて失恋中の俺を何度も励まし支えてくれた。命を投げ打つてでも俺を助けようとしてくれた。雫を諦めきれない俺をそれでもと言ってまで愛してくれる。ティニアがいなければ俺はまだ失恋から立ち直れていなかったと思う。もう、俺の中ではそれだけティニアの存在は大きい」

「……………」

「エフェルも似たようなものだ。出会ってまだ間もないけど俺は二人を大切にしたい。雫という特別な人がいるというのに二人にそういう感情を抱き、尚且つ受け入れているなんて最低で不誠実だということとは自覚している。そう言われても俺は否定しない。それでも俺は

俺という最低な男を受け入れてくれた二人を大切にしたい」

ある意味では光輝のことは何も言えない。しかし、それでも浩二は譲る気は一切ない。

「香織はそんな俺をどう思う？ やっぱり軽蔑するか？ 雫ちゃんと
いう人がいながらって」

「……………そう思う私はいるよ。けど、軽蔑はしない。だつ
てそれは浩二くんはいつぱい悩んで考えた答えだと思うから」

そう言った香織に浩二は微笑しながらその頭を撫でる。

「でもちゃんと雫ちゃんのことも見えてあげないと怒るからね？ 雫
ちゃん、繊細で乙女チックなところがあるから」

「ああ、約束する。さて、話はズレたな。さっきの話の続きとして香織
は強くなりたいてってことでいいよな？ 南雲達、正確にはユエ達と対
等にいられるために」

「うん。浩二くんなら何かいい手があるかなって思ってた
「ふむ…………」

浩二は両腕を組んで思考に耽る。そして…………。

「南雲達と同等は無理だけど、強くなれる方法はある」
「本当!?!」

強くなれる方法。それがあることに香織は思わず立ち上がるほど
に喜ぶも、浩二が指を二本立てる。

「一つはドーピングだ。身体能力向上、魔力増加、ステータス上昇の魔
法薬をいくつか作ってある。それを使えば一時的とはいえ今以上に
強くなれる」

「うん」

「二つ目は名付けて『白崎香織改造人間計画』。俺と南雲で香織を半
機械化。アンドロイドやサイボーグと言った存在に改造する。どこ
まで強くなれるかは俺と南雲の腕にもよるが、最低でも今の8倍は強
くなれることは保証する」

「うん。…………ねえ、浩二くん。もしかしてだけどそれって私が相談に
乗って貰う前から考えていたのかな？ かな？」

「そんなことないよ」

その背に刀を構えた般若が見えた気がするが、浩二はおもつきり目を逸らした。

「……浩二くんやティニアさんのように『改造』して強くはなれないの？」

「無理だな」

ハッキリと無理だと告げた。

「俺の『改造』の技能には材料がいる。そして俺とティニアは神の使徒を『改造』の材料にしてそのステータスと技能を手に入れることができた。その材料が手元にならない以上は不可能だ」

「そっか……」

「そもそも香織の天職は『治療師』で香織自身戦う術は限られてる。それは理解できるか？」

「うん……」

香織は浩二のように剣術を身に付けているわけでも何かしらの武術や格闘技を学んでいるわけでもない。浩二のように天職が？ 医療師？ でありながら刀を扱えるわけではないのだ。

「だから今の香織が取れる手段はドーピングでパワーアップか回復役に専念するか、その両方か。それぐらいだ。今すぐに南雲達と同じぐらいに強くなることは現状は不可能だ」

浩二も強くなりたいと望む香織の願いを叶えてあげたいが、無理なものは無理だ。浩二から香織に提案できるのはせいぜいドーピングか本当に半機械化のアンドロイドにしてやるかぐらいだ。

「まあ、どうするかどうかは香織自身が決めてくれ。俺は香織の意志を尊重するし、協力もする。とりあえずこれだけは持つておけ。とつておきの魔法薬だ」

浩二が香織に渡したのは赤、青、緑色の液体が入った瓶と取扱説明書。

「どんな効果を持っているかはこれに書いてある。これをどうするかは香織が決めたらしい」

「……うん、ありがとう」

香織はそれを受け取って部屋から去ろうとする際に浩二に言う。

「やっぱり浩二くんは凄い人だよ。光輝くんよりもずっとずっと凄い人だよ」

「いきなりなんだよ?」

「ううん、なんでもない。それじゃおやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

部屋から出て行った香織を見送って浩二は再び調合に没頭する。

「さて、もうひと踏ん張りしますか」

主人公03

【海上の町エリセン】から西北西に約三百キロメートル。

そこが、七大迷宮の一つ【メルジーネ海底遺跡】の存在する場所だ。ハジメはミレディ・ライセンから聞いた情報を元に大海原を進んできた。

浩二は潜水艦内で瞑想をしていた。

八重樫流の精神統一、心を静める方法は幼少の頃より零の祖父と父に叩き込まれている為に浩二はこれから向かう七大迷宮に入る前に心を静めていた。

浩二にとって初めての迷宮攻略。これから向かう【メルジーネ海底遺跡】がどのようなコンセプトの迷宮だということは原作知識で知っているとはいえ、【メルジーネ海底遺跡】で試されるのは戦闘力ではなく精神力、心の方だ。だから油断はできない。

「……平野浩二」

「どうした？」

そんな時、精神統一をしている浩二に声をかけたのはイリエだった。

「その、どうしてあたしにまで新しい武器を？」

イリエが持っている槍は浩二に出会うまで使っていたものではない。？錬成師”ハジメの手によって魔改造された槍である。基本性能はもちろんのこと魔力を流し込むことで槍に雷を纏わせることができるし、矛の部分はアザンチウム製なのでメンテナンス不要だ。更にはそこに浩二も少し手を加えて矛に毒を浸透させている。かすり傷だろうとも致命傷は避けられない。

「前の槍はボロボロだったから南雲に頼んだんだ。それにテイニアにも新しい武器が必要だったからそのついでだ」

浩二同様に？改造”によって神の使徒の力を手に入れたテイニアは双大剣術の技能がある。それを十二分に活用できるように神の使徒が使用していた大剣を二振り程作ってくれと浩二はハジメに頼んでいた。その時についてに戦力アップの為にイリエの槍も直して貰

えるように頼んだだけだ。

ちなみに浩二にも双大剣術の技能はあるも、既に八重樫流刀術が身体に染み付いている浩二にとって使い慣れていない技能の為に放置気味である。

一応、訓練して使えるようにする気はあるもそれは今ではない。

「礼なら南雲に言ってくれ。それよりもお前の今の内にシャワーでも浴びてきたらどうだ？」

現在、テイニア達はシャワールームにいる。ユエ達の後にはシャワールームに向かうテイニア達に誘われたが、大迷宮に挑む為に精神統一したいと言ったら残念そうにはしていたが納得してもらった。

ちなみにハジメは無理矢理シャワールームに連れ込まれそうになつたらしく、甲板に避難したようだ。

「あたしはいい。別に気にしないし、それに人間族とどう接すればいいのかわからないから……」

「そうか。……そうだよな」

イリエは人間族と敵対している魔人族。いくらイリエが魔人族から異端審問にかけられた罪人とはいえ、これまで敵対していた人間族とどう接すればいいのかわからないのは当然のことだ。

イリエが魔人族だと知ったハジメ達は別にどうでもいい反応だったが、この世界の人間族であるテイニアは表情には出さないが、イリエに対していい感情は抱いていない。いつ裏切るかと警戒している。別にテイニアは嫌っているわけではないだろうが、気を許しているわけでもない。

イリエもそれを察して浩二達とは距離を取っている。

「あんたは人間族なのにどうして魔人族のあたしと普通に話せるの？」

「俺はこの世界で生まれたわけじゃないし、人間族だからといって魔人族という種族そのものを恨むのは筋違いだろう？ まあ、納得できない部分もあるだろうがそういうことに気にしない人間族もいるってことだ」

「……あたしがあんたを殺す為に遣わされた刺客だと言つても？」

「お前にその気はないことぐらい知ってる。下手な嘘はやめとけ」
「……」

確かに嘘ではあるも、こうもあっさりと言われたら少しなんとも言えない気持ちになる。仮にそれが本当だったとしても浩二の実力を知っている今のイリエでは勝つことはできない。

「ともかく俺もそしてお前も求めているのは大迷宮を攻略して神代魔法を手に入れることなのは間違いない。お互いの為に協力関係と行こう」

「……わかった」

浩二の言う通り、イリエの目的は神代魔法を手に入れる事。目的が同じならそれに便乗する。

そしていよいよ【メルジーネ海底遺跡】の攻略が始まる。

潜水艇で海を潜行する。ハジメ達の持つ【グリューエン大火山】攻略の証であるペンダントの光が示している先を目指す。海底の岩壁地帯の岩壁がペンダントの光によって真つ二つに裂けて扉のように左右に開き出した。その割れ目へ侵入して迫りくる魔物を潜水艇に装備している魚雷で仕留めたりして浩二達は洞窟のある場所に出る。「どうやら、ここからが本番みたいだな。海底遺跡っていうよりただの洞窟だが」

「……全部水中でなくて良かった」

ハジメは潜水艇を「宝物庫」に戻しながら、洞窟の奥に見える通路を進もうとユエ達を促す——寸前でユエに呼びかけた。

「ユエ」

「ん」

それだけで、ユエは即座に障壁を展開した。

刹那、頭上からレーザーの如き水流が流星さながら襲いかかる。圧縮された水のレーザーは直撃すれば人体に穴を穿つだろう。天より降り注ぐ暴威をあっさりと防ぎ切ったユエ。そして浩二達が攻撃に入る。

「?螺旋」

浩二とテイニアが同時に炎属性の魔法「螺旋」で天井を焼き払うとフジツボのような魔物が落ちてきた。どうやら水のレーザーを放っていたのはこの魔物のようだ。

「……」

「どうかされましたか?」

フジツボの排除が終わると様子がおかしい浩二にテイニアが声をかける。

「いや、こういった直接的な攻撃魔法ってやっぱりいいなと思ってな……」

浩二がこれまで使用してきたのは回復魔法。そして光属性魔法と闇属性魔法だ。?螺旋」のように直接的な攻撃魔法はこれまで使えなかった。だが、神の使徒を取り込んだことよって全属性適正を獲得した浩二は直接的な攻撃魔法が使えることが少し嬉しかった。そんな浩二にテイニアはクスリと小さく微笑む。

「おい、先に進むぞ」

ハジメの一声に浩二達も奥の通路へと歩みを進める。通路は先程の部屋よりも低くなっており、足元は膝上くらいまで海水で満たされていた。

「……むう」

ユエが可愛らしい唸り声を上げた。見てみれば、身長の高いユエは、腰元まで浸かっており、相当歩き辛そうだ。そんなユエを抱きあげて肩車したのはハジメだ。肩車されていることに羞恥で頬を染めるユエに皆は生暖かい視線を送るのであった。

それからすぐに魔物の襲撃を迎撃しながらも通路の先にある大きな空間に入る。

「つ……なんだ?」

ハジメ達が、その空間に入った途端、半透明でゼリー状の何かが通路へ続く入口を一瞬で塞いだのだ。

「私がやります! うりゃあ!!」

咄嗟に、最後尾にいたシアは、その壁を壊そうとドリユツケンを振

るった。が、表面が飛び散っただけで、ゼリー状の壁自体は壊れなかった。そして、その飛沫がシアの胸元に付着する。

「ひゃわ！ なんですか、これ！」

シアが、困惑と驚愕の混じった声を張り上げた。ハジメ達が視線を向ければ、なんと、シアの胸元の衣類が溶けだしている。衣類と下着に包まれた、シアの豊満な双丘がドンドンさらけ出されていく！

「シア、動くでない！」

咄嗟に、テイオが、絶妙な火加減でゼリー状の飛沫だけを焼き尽くしたことで赤く腫れる程度ですんだ。どうやら出入り口を塞いだゼリーは強力な溶解作用があるようだ。

「っ！ また来るぞー！」

警戒して、ゼリーの壁から離れた直後、今度は頭上から、無数の触手が襲いかかった。先端は槍のように尖ってはいるが、見た目は出入り口を塞いだゼリーと同じだ。だとすれば同じように強力な溶解作用があるかもしれない。

すると浩二とテイニアが背中から灰色に紅色を交えた翼を白銀色に輝く翼を広げる。

そして翼から魔弾を掃射。？分解”が付与されている魔弾は瞬間に溶解作用が触手を消し去った。

「……本当、神の使徒の攻撃って反則だよな」

「……んっ。魔法までも分解されるから厄介」

一瞬で触手を消し去ったその攻撃に改めて神の使徒がどれだけ厄介な相手なのかを思い知ったハジメ達は今の段階で神の使徒とその能力を知れてよかったと思った。

それを余裕と見たのか、シアがハジメの傍にそろりそろりと近寄り、あらわになった胸の谷間を殊更強調して、頬を染めながら上目遣いでおねだりを始めた。

「あのお、ハジメさん。火傷しちゃったので、お薬塗ってもらえませんかあ？」

「……お前、状況分かってんの？」

「いや、浩二さん達がいれば大丈夫かと。こういう細かいところで

アピールしないと、香織さんの参戦で影が薄くなりそうですし……」
「?天恵」

「ああ、お胸を触ってもらうチャンスがあ!」

いい笑顔で香織はすかさずシアの負傷を治して、シアはそれに嘆き、全員が冷たい眼差しを送る。

そんななか、遂にゼリーを操っている魔物が姿を現した。

天上の僅かな亀裂から染み出すように現れたそれは、空中に留まり形を形成していく。半透明で大雑把な人型、ただし手足はヒレのようで、全身に極小の赤いキラキラした斑点を持ち、頭部には触手のようなものが二本生えている。その姿はクリオネのようだ。ただし全長十メートルある巨大クリオネだが。

その巨大クリオネは何の予備動作もなく全身から触手を飛び出させ、同時に頭部からシャワーのようにゼリーの飛沫を飛び散らした。

「ユエも攻撃して! 浩二くん!」

「ああ!」

「!?聖絶!!」

香織の呼び声に応じて同時に?聖絶”を発動させる。そしてユエとテイオ、それからティニアとエフェルは巨大クリオネに火炎を繰り出して直撃し、その身体を消滅させ、あるいは爆発四散させる。

そこで満足気な表情をするユエ達を諫めるようにハジメが警告の声を上げる。

「まだまだ! 反応が消えていない。香織と平野は、障壁を維持しろ……なんだこれ、魔物の反応が部屋全体に……」

ハジメの懸念が当たったかのように四散したクリオネは瞬く間に再生してその腹には先ほどハジメ達が撃退した魔物がジュワーと音を立てながら溶かされていた。

「ふむ。どうやら弱いと思っておった魔物は本当にただの魔物で、こやつは食料だったみたいじゃな。……ご主人様よ、無限に再生されてはかなわん。魔石はどこじゃ?」

「そういえば、透明の癖に魔石が見当たりませんか?」

ティアの推測に頷きつつ、シアがハジメを見るが、ハジメは巨大ク

リオネを凝視し魔石の居場所を探しつつ困惑したような表情をしている。

「……ハジメ？」

ユエが呼びかけると、ハジメは、頭をガリガリと掻きながら見たままを報告した。

「……ない。あいつには、魔石がない」

その言葉に全員が目を丸くする。

「ハ、ハジメくん？　魔石がないって……じゃあ、あれは魔物じゃないってこと？」

「分からん。だが、強いて言うなら、あのゼリー状の体、その全てが魔石だ。俺の魔眼石には、あいつの体全てが赤黒い色一色に染まって見える。あと、部屋全体も同じ色だから注意しろ。あるいは、ここは既に奴の腹の中だ！」

ハジメが驚愕な事実を離すと同時、再び、巨大クリオネが攻撃を開始した。今度は触手とゼリーの豪雨だけではなく、足元から海水を伝って魚雷のように身体の一部を飛ばしている。

ハジメは？　宝物庫”から火炎放射器を取り出して周囲の赤黒い反応を示す？　壁”を焼き尽くす。そして巨大クリオネも本気になって来たのか、壁全体から凄まじい勢いで湧き出してきた。しかも、いつの間にか水位までも上がって来ており、最初は膝辺りまでだったのが、今や腰辺りまで増水している。ユエ達が何度も巨大クリオネを倒しているのだが、直ぐにゼリーが集まって復活してしまい、一向に終わりが見えない。

そこでハジメは一時離脱を決断して地面にある亀裂から渦巻きが発生しているのを発見した。

「一度、態勢を立て直すぞ！　地面の下に空間がある。どこに繋がっているかわからない。覚悟を決めろっ」

「んっ」

「はいですう」

「承知じゃ」

「分かったよ！」

「了解」

「かしこまりました」

「承知しました」

「わかった」

全員の返事を受け取り、ハジメは渦巻く亀裂に向かって？鍊成”を行った。亀裂を押し広げ、ドンドン深く穴を開けていく。ハジメは水中で？鍊成”を繰り返していき、やがては地面が反応しなくなると？宝物庫”からパイルバンカーを取り出して階層を突き破り、貫通した縦穴から途轍もない勢いで水が流れ始めたので、ユエ達も足をさらわれて穴へと流れて来る。

(さて、ここからが大迷宮の本番だな……)

浩二は自らを？改造”してその身を海人族と同じ身体に造り変えて仲間の救助へ向かう。

主人公04

「けほっ、こほっ」

「ほら、しっかりとしろ」

結構な量の海水を飲んでしまったイリエはむせながら浩二に背中を擦って貰っている。

二人がいる場所は砂浜のような場所でそれ以外は特に何も見当たらない場所だ。

巨大クリオネから戦力的撤退を図ったハジメ達。

彼等が落ちた場所は巨大な球体状の空間で、何十箇所にも穴が空いており、その全てから凄まじい勢いで海流が噴き出し、あるいは流れ込んでいて、まるで嵐のような滅茶苦茶な潮流となっている場所だった。

その激流に身体を海人族と同じになるように？改造した浩二は皆を助けようとしたが、予想以上に激しくランダムな流れに身体が思うように動かなかった。それでもテイニアとエフェルが近くに流れしてきたので二人に手を伸ばすも、苦しいイリエの姿を捉えた。

テイニアとエフェルは自身よりもイリエを優先させようと浩二に促し、浩二も二人を信じてイリエを救出。そのまま激流にさらされ、一つの穴に吸い込まれるように流されていた。そして水流が弱まったところで光が見えて浮上し、今に至る。

「……どうして、あたしを助けた？」

「はあ？」

呼吸が落ち着いて喋れるようになったイリエは浩二にそう尋ねた。

「あたしよりもあの二人を助けるべき」

「そしたらお前は死んでいた。だからお前を助けた。それにあの二人なら問題ない」

(香織は……まあ、問題ないだろう)

原作通り、ハジメが香織を助けに行っている姿は目撃したし、もしも時の保険も施している。少なくとも溺死することはないだろう。

それにテイニア達もその保険を施しているから今の浩二達のように

にどこかに浮上して行動に移している頃だ。

「それよりも動けるか？ 身体には問題はないように診えるが」

「……ん、もう動ける」

流石は元は魔族の兵士なだけあって心身共に強靱だ。もう呼吸を整えて万全な状態に戻している。

「他の皆も深部を目指して行動している筈だから俺達もそうしよう」
「了解」

浩二とイリエも他のメンバーと合流する為にも迷宮のゴールを目指す。浜辺を歩きながら浩二は先程の巨大クリオネのことについて考えていた。

（あれが？・悪食”。遙か昔、太古から巣くう化け物か……想像以上に厄介なモンスターだ）

原作知識で知っていたとはいえ、舐めていた。いざとなれば？改造”の派生技能である？改造改悪”でどうにかできると踏んでいたからだ。

神の使徒でも通用したこの技なら悪食にも通用する。そう思っていた浩二だが悪食を目の当たりにして気づいた。

——あ、無理、と。

浩二の？改造”の派生技能である？改造改悪”は対象を改悪、破壊させる技能で生体に直接干渉する為にあらゆる耐性を無価値にするのだが、その？改造改悪”が悪食には通用しないことを診て気づいた。

悪食には生体に直接干渉する為の肉体構造、人間でいうところの細胞やDNA、身体を構成させる為の組織などがなかった。言ってしまうえば？生命”ではあるも？生物”ではない。それが悪食の正体だ。

？生物”でなければ浩二の十八番おはこである？改造”は通用しない。

（やばいな……）

内心でそうぼやきながら歩みを進めていくと周囲の風景がぐにやりと歪み始める。驚いて足を止めた浩二達が何事かと周囲を見渡すが、そうしている間にも風景の歪みは一層激しくなり——気がつけば戦場へと変わっていた。

人間族や魔人族がそれぞれ武器や魔法を使って雄叫びを上げながら戦う光景。

突然、戦場に放り込まれたように驚く二人だが、辛うじて混乱しそうな精神を落ち着かせて周囲の様子を見渡す。

「これは幻覚……？」

「？幻惑」の固有魔法を持つイリエはその光景に見てそう呟く。

「神の御心のままにいー！」

一人の兵士と思われる男性がイリエに襲いかかる。しかし、反射的にイリエは槍を振るって迎撃しようとするとその槍は男性をすり抜けた。

「え？」

それに目が点になるイリエに剣が振り下ろされそうになるも。

「？光絶」

浩二の光属性の初球防御魔法の障壁で防いだ。そして浩二は魔力を纏わせた刃でその男性を斬ると淡い光となって霧散した。

「どうやら魔力を纏った攻撃なら通用するみたいだ。イリエ、攻撃の槍は槍に魔力を纏わせておけ」

「……わかった」

対処法に領き、浩二と同じように？「魔力操作」で槍に魔力を流して襲ってくる兵士を迎撃するイリエだが、その表情は優れない。

「全てはエヒト様の為に!!」

「異教徒めがあ！ 死ねえ！」

「エヒト様！ 万歳！」

二人が体験しているこの戦場にいる者全てに共通していることは誰もが神の為に戦っているということだ。その瞳に狂気を宿して自らの命を顧みず、神敵を殺そうとしている。

こちらの気まで狂いそうになる戦争にイリエの方が先に参ってしまいそうになる。

「……どうして」

イリエには理解出来なかった。

どうしてそこまでして神の為に戦えるのか？ 身命を捧げられる

のか？ 命を捨てられるその信仰心がイリエにはわからなかった。

「イリエ」

「！」

浩二はイリエを脇に抱きかかえて翼を広げて空高く飛翔すると魔弾を掃射。狂気に彩られた兵士達を一掃して殲滅させる。

「神の使徒の力があってよかった……」

殲滅に超便利な攻撃方法。その力を使って一瞬で戦争を終わらせた浩二達は再び、周囲の景色がぐにやりと歪み、気がつけば元いた場所に戻っていた。

「大丈夫か？」

ひとまず、危機は去ったことから浩二は脇に抱えているイリエを下ろすも本人は顔を俯かせて無言だった。

「先に進むぞ？」

浩二の言葉にイリエは頷いて応じた。

そして先に進むと全長三百メートル以上はある巨大帆船で荘厳な装飾が施されている豪華客船だ。二人はその豪華客船の最上部にあるテラスへと降り立つと案の定、周囲の空間が歪み始める。

今度は海上に浮かぶ豪華客船の上にあった。時刻は夜で、満月が夜天に輝いている。甲板には様々な飾りつけと立食式の料理が所狭しと並んでいて、多くの人々が豪華な料理を片手に楽しげに談笑していた。

「パーティー……？」

先ほどの凄惨な光景とは程遠く肩透かしを喰ったような気になるイリエ。そして甲板には人間族だけではなく魔族や亜人族も多くいる。その誰もが、種族の区別なく談笑をしていた。

「もしかして終戦後？ 和平でも結ばれた……？」

先の光景の後。戦争が終わった後の光景でも見せられていると思っただけはそう推測すると楽しそうに談話している同族の姿に思わず頬を緩ませてしまう。

しかし、檀上に登った初老の男性の演説を聞いてその表情は凍りついた。

「——こうして和平条約を結び終え、一年経って思うのだ。……実に、愚かだったと」

「え？」

その言葉に多くの人が聞き間違いだと己の耳を疑う。イリエも同様に聞き間違いだと自身に言い聞かせるも。

「そう、実に愚かだった。獣風情と杯を交わすことも、異教徒共と未来を語ることも……愚かの極みだった。分かるかね、諸君。そう、君達のことだ」

「い、いつたい、何を言っているのだ、アレイストよ！　いつたい、どうしたと言う——がはっ!？」

国王アレイストの豹変に、一人の魔人族が動揺したような声音で前に進み出たが、その結果は胸から剣を生やすことになった。

崩れ落ちる魔人族に場が騒然とする。

「さて、諸君。最初に言った通り、私は、諸君が一堂に会してくれて本当に嬉しい。我が神から見放された悪しき種族如きが国を作り、我ら人間と対等のつもりでいるという耐え難い状況も、創世神にして唯一神たる？エヒト様”に背を向け、下らぬ異教の神を崇める愚か者共を放置せねばならぬ苦痛も、今日この一日に終わる！　全てを滅ぼす以外に平和など有り得んのだ！　それ故に、各国の重鎮が一度に片付けられる今日この日が、私は、堪らなく嬉しいのだよ！　さあ、神の忠実な下僕達よ！　獣共と異教徒共に捌きの鉄槌を下せえ！　ああ、エヒト様！　見ておられますかあ!!」

膝を突き、天を仰いで哄笑を上げるアレイスト王。彼が合図すると同時に、パーティー会場である甲板を完全包囲する形で船員に扮した兵士達が現れた。

それから数分もしないうちに甲板は一瞬で血の海に様変わり、海に飛び込んだ者もすぐに殺されて海が鮮血に染まる。

「うう」

その光景に吐き気を催すイリエだが、どうにか堪える。それでもイリエにとってはショックが大きい。嘔吐しなかったのが奇跡だ。

「……」

隣で必死に堪えているイリエの横で浩二はフードの人物を見ていた。

(間違いなく神の使徒だ……)

既にその目で見ている為に見間違えるはずもない。つまりこの惨劇を生み出したのはエヒトの仕業である。

(本当に気持ち悪い光景だ……)

知っていたとしてもこれは気持ち悪い。見ているだけで吐き気がする。

「……どうして」

すると、浩二の横でイリエは膝を突いて涙ながらに己の疑問を口にする。

「どうして、こんなことに……？ そんなに神が大事……？ 平和な未来を壊してまで守らなければいけないこと……？ それじゃ、あたしは、あたしの家族は……何の為に……」

イリエとイリエの父親は魔人族の平和の為に戦ってきた。しかし、神からのたった一つの神託によつてそれは簡単に壊されることを知ったイリエはもはや戦う意味を見失おうとしている。

そんなイリエに浩二は言う。

「折れるな、イリエ。折れたら本当に戦えなくなるぞ」

「けど、あたしは……」

「お前は何の為にここに来た？」

「それは……」

「神代魔法を手に入れてフリードとかいう奴の真意を確かめる為だろう？ それならここで折れていいわけがない」

「だけど！ あたしにはもう！」

——なにもない。

そう言おうとしたイリエに浩二が言う。

「俺がいるだろうが」

その言葉にイリエは思わず顔を上げた。

「人は何かを信じなければ生きてはいけない弱い生物だ。信じるものがなんであろうとも大切なのは自分を見失わないことだ」

「自分を、見失わない……？」

「自分を見失えば思考が停止し、ただ信じるものの道具、先の狂信者に成り果てる。だから自分の心を強く持て、イリエ。その先へ進めるかどうかはお前自身が決断することだ」

「あたし自身が……」

浩二はイリエに手を差し伸ばす。

「立て、イリエ。お前にはまだやるべきことが残っている筈だ。歩みを止めるのはそれからでも遅くはないだろ？ それまでは俺がお前を生かす理由になつてやる」

「……」

イリエは涙を拭い、浩二の手を取って立ち上がる。

「……ごめん、迷惑かけた」

「気にするな。仲間だろ？」

「……うん」

小さく頷くイリエ。すると周囲の景色がぐにやりと歪み、元いた場所に戻ってきた。

「それじゃ、こんな気味の悪い迷宮さつさと攻略するぞ」

「うん」

二人は大迷宮攻略の為に先へ進む。

主人公05

【メルジーネ海底遺跡】で狂った神がもたらす悲惨さを知り、心が折れそうになったイリエダけど、浩二の言葉によって立ち直り迷宮攻略を認められるようにその力を発揮している。

「ハアッ！」

霧に包まれながら魔力を纏わせた鋭い一突きが怪奇現象を撃破していく。それだけでは止まらず、並の技量ではない騎士や拳士達も葬っていく。

元より魔人族の兵士として鍛えられていたこともあるのか、その動きは洗礼されていて無駄がなく、どこか雫に通じた気迫が伝わってくる。

（やればできるじゃんか……）

迷いが無いその動きにもう大丈夫だろうと思いつながら浩二も（分解付与した）刀を振るい怪奇現象も亡霊も次々分解していく。本当に神の使徒の？分解”は超便利だ。

「終わり」

最後に残された一体を倒すと奥にある魔法陣が輝き出して二人は躊躇うことなく魔法陣に足を踏み入れると、転移した先の空間には、中央に神殿のような建造物があり、四本の巨大な支柱に支えられている。支柱の間には壁がなく、吹き抜けになっている。神殿の中央の祭壇らしき場所には精緻で複雑な魔法陣が描かれていた。

（俺の記憶が正しければ恐らくここは……）

【メルジーネ海底遺跡】の最奥。つまり、大迷宮を攻略した者が踏み入れる場所に浩二達は辿り着いたのだ。だが……。

（いや、まだわからない。問題は迷宮に攻略が認められたかだ）

原作でもハジメ達と同行して大迷宮に挑んだ光輝達だったが、攻略が認められずに神代魔法を手に入れることが出来なかった。浩二もまたハジメの力を借りてここまで来ている為に迷宮に攻略が認められているかどうかは定かではない。

しかしそれもあの魔法陣に足を踏み入れれば解決する。浩二は神

代魔法が手に入る魔法陣に足を踏み入れようとすると、別の魔法陣が輝き出した。

そこからは……。

「南雲それに香織……」

「浩二くん。それにイリエさんも無事だったんだね」

ハジメと香織が魔法陣から姿を現した。大切な幼馴染が無事であることに安堵する。

「どうやらそつちも無事のようだな」

「ああ」

確認事項のように訊いてくるハジメに肯定する。そして浩二は香織に尋ねる。

「香織。大丈夫か？」

それに香織は満面の笑みで答えた。

「うん、私はもう大丈夫だよ。何があってもハジメくんのことは諦めないって決めたから」

「そうか……」

香織の表情から悩みは消えていた。それでも色々と問い詰めたことももある浩二だったが、香織のその言葉を聞いて聞かないことにした。

(少し、寂しくなるな……)

もう香織から相談を受けることは少なくなるだろう。それが香織にとって成長した証ではあるも、今までのように頼って来てくれないことに少しだけ寂しい気持ちがあるのは否定できない。だけどそれ以上に香織が成長したことが嬉しかった。

「……香織、少し見ない間に立派になって」

「ちよ!?、ハ、浩二くん!? そんな娘が成長したことに喜ぶお父さんみたいなこと言って泣かないでよ!」

しかもガチ泣きである。ハジメとイリエが思わず引くぐらいにガチ泣きしている。

しかし、それも無理はない。

幼少の頃からずっと香織の成長を見てきて、香織の悪癖である突撃

に巻き込まれたり、後始末したり、謝罪に回ったり、恋愛相談を受けたり、そんなトラブルメイカーである香織が立派に成長したらこれまでの苦労が報われて、つい親心で涙を流してしまうのも無理はない。(雫、香織はこんなにも立派に成長しているぞ……)

この場にカメラがないことがどれだけ悔やまれることか。手元であれば幼馴染の成長した姿を激写して保管するというのに。

そしてすぐにユエ達やティニア達が魔法陣から姿を現してガチ泣きしている浩二とそんな浩二を慰めている香織。その光景に引いているハジメとイリエに思わず首を傾げた。

浩二が泣き止み、香織が改めてユエに自身の気持ちを伝えて全員が魔法陣へと足を踏み入れる。すると脳内を精査され、記憶が読み取られて、他の者が経験したことを一緒に見させられる。そして肝心の神代魔法はというと……。

「どうやら攻略を認められたみたいだな」

「……ああ」

ハジメの言葉に浩二は肯定する。

浩二を始めとしたティニア、エフェル、イリエも攻略が認められて念願の神代魔法？再生魔法〃を手に入れることが出来た。

「やりましたね、浩二様」

「ああ……」

念願の？再生魔法〃を獲得したことに思わず喜びを見せる。

「これで……」

イリエもまたフリードと同じ神代魔法を獲得したことに自然と手に力が入る。

神代魔法を手に入れたことに喜ぶ浩二達の前に魔法陣の輝きが薄くなつていくと同時に床から直方体がせり出して小さな祭壇になり、更に光が人型の形になる。そこにはかつて解放者と呼ばれた一人、メル・メルジーネが攻略者に向けてメッセージを残していた。

彼女は最後に。

「……どうか、神に縋らないで。頼らないで。与えられることに慣れないで。掴み取る為に足掻いて。己の意思で決めて、己の足で前へ進んで。どんな難題でも、答えは常に貴方の中にある。貴方の中にしかない。神が魅せる甘い答えに惑わされないで。自由に意志の元にこそ、幸福はある。貴方に、幸福の雨が降り注ぐことを祈っています」

そう締め括り、メイル・メルジーネは再び淡い光となって霧散した。直後、彼女が座っていた場所に小さな魔法陣が浮き出て輝き、その光が収まると、そこにはメルジーネの紋章が彫られたコインが置かれていた。

これでハジメ達は樹海の大迷宮〔ハルツィナ樹海〕に挑戦することが出来る。そして、証をしまった途端、神殿が鳴動を始めて周囲の海水がいきなり水位を上げ始めた。

「うおっ!!? チツ、強制排出ってかつ。全員、掴み合え!」

凄まじい勢いで増加する海水にハジメ達は潜水艇を出して乗り込む暇もなく、あつという間に水没していく。咄嗟に? 宝物庫”から酸素ボンベを取り出して口に装着し、全員がすっかりお互いの服を掴み合った。そしてハジメ達は勢いよく遺跡の外、広大な海中へ放り出された。

そこで一番会いたくない存在がやってくる。

『ツ!!? 回避だっ』

念話による怒声が伝播した。

その瞬間、ハジメ達の眼前を凄まじい勢いで半透明の触手が通り過ぎ、潜水艇が勢いよく弾き飛ばされた。

「悪食……」

全てを溶かし、無限に再生し続ける凶悪で最悪な怪物、巨大クリオネである悪食が攻略が終えたハジメ達に無数の触手を射出する。

「? 聖絶”——」

? 改造”によって自らの身体を海人族と同じにしている浩二は水中でも呼吸はできる。そして襲いかかってくる触手を分解能力を付与した? 聖絶”によって皆を守る。

溶解と分解。どちらも最悪に等しい能力のぶつかり合い。しかし、

悪食は浩二にとって相性が悪い最悪の相手だ。今は分解能力を付与した？聖絶”で触手からの攻撃を防げて入るが、その能力は無限に使えるわけではない。いずれ浩二の方が先に力尽きる。

(それに例え分解を攻撃に回してもあいつには大したダメージはない……)

本物の神の使徒であろうとも悪食は倒せれないだろう。そして悪食には浩二が得意とする？改造”の効果は薄い。神の使徒のように簡単には倒せない。

『ユエ、海上を目指せ。水中じゃあ嬲り殺しだ!』

『んっ』

浩二が防いでいる間にハジメはユエに指示を出すと、ユエは水流を操作して浮上を試みてハジメは潜水艇を遠隔操作して悪食に魚雷を叩きつける。その隙に海上を目指そうとするハジメ達だが、浮上するハジメ達の頭上は、既に半透明のゼリーで覆い尽くされていた。しかも無秩序に漂っていただけのそれらは数瞬で集まり固まると、五メートルサイズの悪食になり、ハジメ達を障壁ごと飲み込む。

分解能力を付与している為に障壁が溶かされることはないが、このままではまずいのは確かだ。

『ユエ。？アレ”を頼む』

『……四十秒はかかる』

『平野。四十秒だけどうにか耐えてくれ!』

『早くしてくれよ……』

障壁を消さないように耐える浩二。襲いかかってくる触手をハジメ、テイオ、エフェル、ティニアが迎撃していくと、待ちわびた瞬間が来た。

『……？界穿”!』

ユエの空間転移魔法が発動する。それによって生み出されるゲートに全員が飛び込むと転移した先は上空。凄まじい浮遊感がハジメ達を襲うが、テイオとエフェルは？竜化”をし、その背にハジメ達や浩二達を乗せて浮遊する。

誰もが無事に海中から脱出できたことに安堵するのも束の間、凄ま

じい水音と共に、ハジメ達の背後から巨大な津波が襲いかかってきた。

悪食はまだハジメ達を諦めてはいなかった。

海を操り、周囲から透明のゼリーを集めながら更に巨大化していく悪食。襲いかかってくる津波と触手は？聖絶”で防ぐも誰もが己の？死”を悟った。

しかし、そんな危機的状況の中で浩二だけはある疑問点が浮上した。

（あれ、そういえばなんでこいつはこうも積極的に餌を求めているんだ……？）

生きる為には食する。それは生物であるのなら当然のことの為に疑問が生じることはなかったが、悪食は？生命”ではあるも？生物”ではない為に食事を求める理由はほぼない。だがしかし、餌を求めるのが食事が目的ではないとしたら考え方が変わる。そして悪食に似た存在が地球にも存在していることを思い出した。

——それはウイルス。

ウイルスは自分で細胞を持たない。ウイルスには細胞がない為に他の細胞に入り込んで生きている。人体にウイルスが侵入すると、人体の細胞の中に入って自分のコピーを作って増殖する。

言ってしまうえば自己増殖する性質を持ち合わせている。それは悪食の再生能力によく似ている。

（こいつが餌を求めている理由がただ単に捕食が目的ではなく、生存本能だとしたら……）

これまでの悪食の行動にも納得できる。

そう考えれば悪食は生きた巨大なウイルスのようなもの。それならば天職？医療師”である浩二の出番だ。技能？医学”の派生技能である？診察”を使って悪食を診察する。

「そういうことか……」

診察が終えて浩二は背中から紅色の線が入った灰翼を広げて悪食に接近する。そんな浩二を絶好の餌かと思ったのか、悪食はパクリと浩二を食べた。その光景を目撃したハジメ達は啞然とするも。

「?改造」

悪食からその声が聞こえて分解を付与した砲撃を放って脱出。ハジメ達の元に戻ってきた。すると……。

「……動きが」

「……止まった?」

津波が消えて悪食も触手もその動きを止めた。いったい何をしたのか、誰もが怪訝の顔を浩二に向ける。

「何をしたんだ……?」

「ペニシリンって知っているか?」

ペニシリンとは抗生物質であり、感染症から多くの人を救った。そしてペニシリンには増殖を抑制する力があり、殺菌作用がある為に浩二がこの世界?トータス」に転移してから?調合」の技能を使って最初に調合した抗生物質がこのペニシリンである。それだけこのペニシリンは有用であり、人体に与える副作用も少ないから浩二はこのペニシリンを常時携帯している。

そしてそのペニシリンを浩二は悪食に吸収させたのだ。当然ただのペニシリンでは効果がない。悪食を診察した上で悪食専用のペニシリンに?改造」したのだ。

まあ、簡単に話を纏めると……。

「あいつはもう消えるってことだ」

浩二の言う通り、悪食の身体がまるで溶けていくかのような消滅していく。生き永らえようと必死に足掻こうとするも悪食の再生能力はペニシリンによって死滅しているようなもの。完全消滅するのも時間の問題だ。

「消えてなくなれ」

こうして太古の怪物——悪食は完全消滅した。

主人公06

「メルジーネ海底遺跡」を攻略してエリセンに戻ってきた浩二達はレミアの家で世話になりながら新たに手に入れた神代魔法の習熟と装備品の充実に時間を当てている。

「予想通り、再生魔法の適性は高かったな……」

浩二は神代魔法である再生魔法が自身に適正のある魔法だと再認識する。ハジメ達も含めて一番適正が高かったのは浩二。次に香織だ。

（本当ならこの魔法を手に入れてからアレを飲むつもりだったんだけどな……）

南雲ハジメの血液と魔石を調査、改造して作り上げた特性薬。本来であればそれを大迷宮を攻略した今頃に飲む予定であった。

しかし、予想外にも神の使徒の襲撃を受けて先に飲んでしまった。あの時、神の使徒であるファイアトを取り込んでいなければ死んでいたかもしれない。もしくはエヒトの肉体を作る為の駒として働かされていた可能性もある。

こうしてここにいられるのはある意味、奇跡に等しい。しかし、結果的には当初の予定以上の力を手に入れることができたのは嬉しい誤算だ。

（神の使徒の力、それに再生魔法。体内にストックしている薬物などを含めれば完全とまではいわないが、不死身に近い存在になれたな……）

今の浩二であれば身体の一部でも首から下が消滅しようともすぐに復活することができる。ゲームで言えば即死出ない限りHP全快で復活する化け物になったということだ。

（ただ油断はできない。）

（頭部もしくは全身を消滅させるほどの広範囲高威力の攻撃を受けたら流石に死ぬな）

例えば、ハジメが開発した広範囲攻撃やフリードのウラノス白竜のブレスなどをまともに受けければ流石の浩二も死ぬ。浩二はユエの？自動

再生”のように自動で発動したりもしないのだ。奇襲による広範囲高威力攻撃を受けなければ死ぬ可能性は極めて高い。

となれば……。

(次に手に入れるべき神代魔法は？魂魄魔法”だな……)

魂の干渉する神代魔法。それを手に入れる為には【神山】に赴く必要がある。

(本当なら再生魔法よりも先に手に入れようと思ったのだが……)

まだ王宮で活動していた頃に浩二は何度か【神山】でもある聖教協会の総本山に足を踏み入れたことがある。だが、結果的には手に入れることが出来なかった。

何故なら聖教協会の総本山でもある【神山】のどこに大迷宮の入口があるのわからないだけでなく、神聖な場所ということもあって守りがガチガチだ。

更には何かしらの手段で手駒にされかねない為に当時の浩二はこれは無理だと悟り、魂魄魔法を一度断念した。

しかし今なら問題なく足を踏み入れることが出来る。それだけの力を身に付けたのだから。

だがそれは王都に一度帰還するということだ。それはつまり……。

(雫……)

想い人である雫の事を思い出す。一度はフラれて諦めようと思っていた雫をどうしても諦めきれず、もう一度想いをぶつけようと浩二は心に決めている。今度は何の打算もなしに真っ直ぐに自分の気持ちぶつける。

(今の雫は俺の事をどう思うのだろうか……?)

王都を出てから浩二は変わった。見た目や実力もそうだが、なにによりハジメと戦った事で心境にも変化が生じた。

なにより、？大切”な存在が二人もいることに雫はどう思うのか？(それでも俺はお前の事を諦めないぞ)

浩二は思考を切り換えて今の自分自身を受け入れて貰えるように努力すればいいと考える。

(雫や皆は大丈夫かな……?)

王都にいる皆のことを考え、浩二は薬の調合を進める。

時は少し遡る。まだ浩二達が【メルジーネ海底遺跡】を攻略する前のことだ。【ハイリヒ王国】王都にある王宮ではギスギスとした空気が流れていた。

その原因は元勇者パーティーのメンバーであつた平野浩二が王都を去つたからである。クラスメイトの前で魔族を殺したという現実を直視されてクラスメイトの大半は浩二に対してなんとも言えない気持ちを抱くようになってしまった。それに対して浩二はパーティーの士気を下げない様に自らの意思で王都を去つたのだが、それに非難の声を上げる者もいた。

それは畑山愛子を始めとする実戦で心が折れて戦線から離脱した園部優花達だ。

彼等彼女等は自分達の身を案じて薬を調合してくれたり、カウンセリングをしてくれたりとかと何かと浩二の世話を受けた者達。

「その場になかった私が言えることじゃないけど、平野くんは何も悪くないじゃない。それなのにどうしてここから離れる必要があるの……？」

優花の言葉に誰も言い返せる者はおらず。愛子は己を責めた。

「平野くんも私の大切な生徒で彼もまだ高校生なんですよ。それなのにそんな……」

教師として生徒にとんでもないものを背負わせてしまったことに対する罪悪感と何もできなかつた己の無力さに後悔する。

彼女達だけではない。あの場にいた勇者パーティーにも溝が生じてしまった。

その原因は？勇者である天之河光輝である。

始めこそは光輝の実力とカリスマ性で迷宮攻略を進めてきたが、いざ魔族との戦いで見せた光輝の言動や行動。自身の正義を疑わない光輝に疑問が生まれた。

そして浩二が王都を出て行くこと皆の前に告げた時に言った浩二を責めるような言葉。なにより、そんな光輝に平手打ちをかましたティニアの言葉が決定打となった。

永山パーティーは今の光輝にはついていけないと判断してこれからのことについて話し合うことが多くなった。

「これからどうする?」

「どうするって、どうするんだよ?」

食堂の端で永山パーティーは話し合いを行っている。

「平野くんがいなくなったのはやっぱり痛いよね……」

「? 治療師”である辻綾子の言葉に一同は口を閉ざす。

いなくなつて初めて気づく。浩二がどれだけパーティーに貢献してきたかを。その行動は光輝に比べて地味で目立たないことでも、皆の支えになつていてくれた。

回復にサポートに治療にと。パーティー全体を支援してきた浩二の不在はやはり大きかった。

しかしここで浩二の事を話していても仕方がない。重吾は話題を変える。

「皆の意見が訊きたい。天之河について」

「無理だ。俺はあいつにはついて行けねえ」

「私も……」

「同じく」

重吾の言葉に一番に否定的な言葉を述べたのは? 土術師”である野村健太郎だ。綾子そして? 付与術師”の吉野真央も便乗するように同意する。

「そりゃ天之河くんも思うこともあつたとしてもあれはない……」

「私もあれは言いすぎだと思う。平野くんがいなかったら私達は……」

最悪の展開を想像した女性陣二人は顔を青くする。

「俺も二人に同意見だ。そりゃ、俺達にも平野を避けていた責任はあるけど平野は俺達を助けてくれたんだ。感謝はしても非難するのはおかしいだろ? 正直、あの時の天之河はどうかしていると思え

ねえ」

「ふむ」

皆の意見は概ね重吾が予想していた通りだ。

因みにその光輝は今も龍太郎と共に訓練に励んでいる。

「それに平野くんがいなくなつてから雫の様子もおかしいし」

真央の言葉には全員が思い当たることがある。

いつもなら冷静沈着である雫は浩二が王都を去つてから表情が暗い。いつも通りに振る舞っているように見えるも隠しきれていない。どうしたのかと尋ねても何でもないの一点張りだ。今は雫の専属であるニアとムードメーカーである鈴がどうにか支えている状態だ。

「どう考えても平野くんがいなくなったのが原因だよね……。雫、何かと平野くんを頼りにしていたし」

「うん。八重樫さんと平野くんつてどっちも頼りになるといふか、苦労人というか……」

けど今はその浩二がいない。

雫にとつてそれは頼れる人がなくなったということに等しい。

「八重樫については鈴達に任せよう。俺達もどうすればいいのかわからないからな」

雫については頼つてきたら力を貸そうという話で終わり、これからのことについて話し合う重吾達。だが、彼等彼女等は気付いていない。

「あの、俺もいるんだけど……」

同じ永山パーティーである遠藤浩介の存在を。

主人公07

浩二が王都を出て行つてから「ハイリヒ王国」の王宮内にある訓練場では光輝達は致命的な欠点である？人を殺す”ことについて浅慮が過ぎるといふ点を克服しようとしている。魔族との戦闘に参加するのなら決して避けて通れないだから？人殺し”の経験は必ず必要になってくる。

現在はメルド団長率いる騎士団と対人戦の訓練を行っていた。龍太郎達や近藤達、永山達も、ある程度は覚悟はあつたものの、実際、浩二が女魔族を殺す瞬間を見て、その覚悟が揺らいでしまった。果たして自分にもできるのかと、対人戦を重ねながら自問自答を繰り返していた。

そのなかでも誰よりも訓練に励んでいる者が二人いる。？勇者”である天之河光輝と？拳士”である坂上龍太郎だ。今よりも強くなるうと日々激しい訓練を行っているも、その心情には違いがあつた。光輝はこの世界に転移してきてからと変わらず、皆を守る為、世界を救う為に強くなるうとしているに對して龍太郎は先の女魔族の一件で幼馴染である浩二に負担を背負わせてしまったことを悔やみ、強くなるうとしている。

強くなるうという気持ちは一緒でもその想いは違う。すると龍太郎が休憩ついでに光輝に言った。

「……なあ、光輝。どうして浩二にあんなことを言ったんだ？」

「あんなこと？」

「雫に近づくなつて流石に酷くねえか？」

そう言われて光輝の顔が若干不機嫌になるも、険しい顔で答える。「浩二は人を殺したんだ。そんな危険人物を雫に近づかせるわけにはいかない」

「けどよお、浩二がいなかったら俺やお前だけじゃねえ。他の皆も死んでいたかもしれねえんだぞ？」

「だからといって無抵抗の人を殺すのは間違っているだろ」

光輝の言い分は何も変わらなかった。どう聞いても人を殺した浩

二が悪いと言い切り、自分ならこうしたなどと供述する。

だが、そんな光輝に殆どのクラスメイト達は距離を取り始めた。そのことに光輝は気づいてはいるも気付かない振りをしている。

ここ最近では訓練相手に付き合ってくれているのは幼馴染である龍太郎だけであった。

「それに浩二がいなくなってから雫の様子がおかしい」

「……ああ、どうしちまったんだらうな」

光輝の言葉に龍太郎も同意する。

普段通りに振る舞っているように見えるもその表情には陰があり、時折、呆けていることもある。普段であればそんな雫を浩二が放っておくわけがなく、何かしらのケアを行うのだが、今はその浩二がいない。

「……」

龍太郎は思う。？トータス”に転移する前はいつも一緒にいた幼馴染が今ではバラバラ。もうあの頃の関係には戻れないのだろうか、と。

珍しくも物思いに耽っている龍太郎の隣で光輝がポツリと言葉を漏らす。

「……もしかしたら浩二は魔族と繋がりがあるのかもしれない」

「はあ？」

「だっておかしいだろ？　これから大変なこの時期にどうして浩二はここから出て行ったんだ？　もしかしたら浩二は魔族と手を組み、この国を陥れようとしているのかもしれない。彼女を殺したのも万が一に自分の情報を俺達に漏らさないように口封じしたというのなら納得できるし、ここ最近、王宮内の空気がおかしいのにも説明がつく。そうだ、きつと浩二が——」

刹那、光輝の頬に衝撃が走った。

突然の衝撃に転倒して痛みが後になって襲いかかり、自分が殴られたことに気づく。そしてその下手人はただ一人。

「光輝。それ以上言うんじゃない……。もし言ったら俺はお前を許さねえからな」

「……龍太郎」

怒りで顔を歪ませて手を強く握りしめる幼馴染の姿に光輝は啞然する。

「浩二が俺達を裏切るわけがねえだろうが？ あいつが、浩二が俺達を裏切るわけがねえだろうが」

「だが浩二は——」

「ああ、人を殺した。だけどあいつがそのことに一回でも否定したかよ？ してねえだろ？」

「それは……」

「浩二がここにいないのも俺達の事を気に掛けてくれたからだろうが。ガキの頃からずっと俺達より一步引いて助けてくれたのは誰だよ？ あいつだろ？ 俺とお前が喧嘩した後も文句言いながらも手当てしてくれたじゃねえか。病氣した時も看病してくれたのもいつも浩二だったよな？ そんなあいつが俺達を裏切るって本気で思ってたのか？ 光輝」

「……」

龍太郎は浩二に殴られた頬に手を置く。

「俺は浩二にお前や雫のことを頼まれた。俺は馬鹿だから上手くできる自信はねえけど、もうあいつの助けが必要にないぐらいに強くなってみせる。もう浩二にだけ背負わせる真似は絶対にしねえ。光輝、お前は違うのか？」

「……俺は」

光輝は答えない。何か言葉を出そうとするも口を閉ざしてしまふ。

「……悪い。言いすぎた。ちよつと頭冷やしてくるわ」

殴ったことに謝ってその場から離れていく龍太郎。光輝は暫くの間、そこから動かなかった。

王宮の片隅、場所的に普段からほとんど使用されない別の訓練場で雫は黒刀を振るっていた。だが、その剣閃はいつもと比べて鈍く、日課を作業的に行っているようにも見える。

雑念がある。と言えばそれで終わりだ。雫も何度も心落ち着かせようと明鏡止水、精神を整えようとする度にあの夜の日のことを思い出す。

思い出すたびに雫は心になんともいえない気持ちが湧き上がる。

(浩二が私のことを……)

浩二が好意を寄せていたのは自分自身だったことに雫は微塵も気付かなかった。洞察力に優れ、人の機微に敏感な雫でも自身に向けられる好意には鈍いのか、それとも浩二が隠すのがうまいのかもしくはその両方か。

ともかく雫にとってあの日の夜の事はとても忘れられるものではなかった。

(私はどうしてあの時、あんなことを言ったのかしら……?)

雫は浩二をフツた。しかし、雫には浩二の気持ちを無下にする理由がなかった。ただ突然の告白になんて言い返せばいいのかわからなかった。

(私にとって浩二はなに?)

当然? 幼馴染”と返す。現に光輝や龍太郎には幼馴染以上の感情は抱いていない。なら浩二も二人と一緒にだ。大切な幼馴染。それ以上でもそれ以下でもない。

これまでずっと幼馴染として共に過ごしてきた。暴走する幼馴染を共に止めては説教し、苦労を分かち合ってきた。

だから浩二は苦労を分かち合う大切な幼馴染だ。雫は何度もそう己に言い聞かせるも納得できないでいる自分がいる。

(そもそも私は浩二のことをどう思っているの?)

雫は浩二がいなくなってからそんな自問自答を繰り返してきた。けれど納得のいく答えが出てこないで迷走しているのは火を見るよりも明らか。そのせいでニアや鈴達に心配をかけている。

「駄目ね、私……」

これ以上刀を振っても無駄だと判断して雫は自室に戻ろうとする。そこに。

「はじめまして、八重樫雫」

「っ!？」

気落ちしていたせいか、彼女の存在に気づかなかった雫は反射的に彼女と距離を取って黒刀を構える。そして視界に捉えるのは聖教協会の修道服を着た女性である。

雫は彼女の瞳を見て本能的に理解した。目の前にいる彼女は女魔族よりも遥かに強いということ。

「……どなたかしら？」

警戒をしながら静かに問いかける。だけど女性は刀を構える雫に對して片手に白い鍔なしの大剣を手にする。

「少々手合わせを願います」

機械的な冷たい声音で雫の了承もなしに大剣を振るってくる彼女に雫は止む得ず応戦する。

「問答無用ってわけね!」

大剣と黒刀が衝突する。先ほどまで落ち込んでいた気持ちから戦鬨に切り替えた雫は流石と言えるだろう。幼少の頃より磨き上げた剣技は洗練されており、一種の舞でも踊っているようにも見える。世界広しといえど雫ほど剣技を磨き上げた者は少ないだろう。

——しかし。

「なるほど。もう結構です」

彼女にとつてはただの確認作業でしかなかった。

雫の黒刀は弾かれて彼女の強烈な拳が雫の鳩尾に叩き込まれて雫は崩れ落ちる。意識が闇に呑み込まれていくのを感じながら雫は視線を彼女に向ける。

「もしもと思ひ貴女を警戒していましたが、やはり平野浩二には及びませんね。彼は例外だったということでしょう」

(浩二……?)

「ご安心を。貴女を殺しはしません。貴女にはこれから平野浩二の制御役としての人質になって頂きます。彼は我が主の役に立って貰わなければいけませんので」

(どういふことなの……?)

疑問が過るもそれを声に出すことが出来ずに雫の意識は闇に吞ま

れる。それから暫くして雫がその場に黒刀だけを残して行方不明になつたことが王宮を騒がせた。

「し、知らせないと……浩二くん……」

偶然にもそれを目撃してしまった彼女は黒刀を手に助けを求めに動き出す。

主人公08

最初に、その騒動に気づいたのはシアだった。

「あれ？ ハジメさん、あれって……何か襲われてませんか？」

その言葉の通り、どこかの隊商が賊に襲われているようで、相対する二組の集団が激しい攻防を繰り返しているのだが、隊商全体を覆うような結界に苦戦しているのか、賊の数は徐々に減っている。今は数の差で賊が押しているようだが、すぐにその有利も消えて賊が逃走するのも時間の問題かもしれない。

それならばスルーしても問題ないのだが、香織と浩二はその結界に見覚えがあった。

「なあ、香織。あの結界って……」

「うん、間違いないよ。あれは鈴ちゃんの結界だよ」

同じ勇者パーティーに所属していた二人はその結界がすぐに天職が？結界師”の谷口鈴のものだとわかった。だが同時に疑問を抱いた。

勇者パーティーのムードメーカーである彼女がどうしてこんなところにいるのか？ という疑問が浮上するも今は助けに行く方が優先だ。

助けに行こうと香織はハジメに救援を求め、浩二は翼を広げて飛んで行こうとする前にテイニアが一足先に動いていた。

「失礼」

そう告げて魔力駆動四輪から飛び出すテイニアに続いて浩二もそれに続く。テイニアはハジメから借りた？宝物庫”から二振りの大剣を手にして賊に斬りかかる。

悲鳴を与える猶予も与えずに両断するテイニア。その銀色の瞳からは普段は見せることのない怒気に近い感情が込められており、その怒りを賊にぶつけている。

「散りなさい」

そして白銀の羽を宙に散らし、その羽は弾丸となって賊を一瞬で皆殺しにした。

浩二が手を貸すまでもなく賊は全滅したので浩二は賊にやられた負傷者達の治療をしていく。そして逃げる暇すら与えることなく全滅させたティニアは安全を確認すると結界内にいる鈴に声をかける。「鈴様。周辺に賊はおりませんので、もう結界を解いても問題ありません」

「は、はい……」

啞然としながらも結界を解いた鈴だが、その恰好は如何にも怪しい目深のフードを被って正体を隠しているようにも見える。しかし、ティニアはそんなことを気にも止めずに鈴の隣にいる同じく目深のフードを被っている小柄の人の前に跪いた。

「ご無事でなによりです。リリアーナ姫殿下」

「はい。助かりました、ティニア」

そこにいたのはハイリヒ王国女王リリアーナ・S・B・ハイリヒその人だった。ティニアはかつての主人であり、恩人でもあるリリアーナを助ける為に誰よりもいち早く動いたのだ。

「リリイ!? それに鈴ちゃん!」

魔力駆動四輪でやってきたハジメ達。香織はここにいる二人の存在に驚愕する。すると、顔なじみである香織を見て鈴は飛びついた。

「カオリン!!」

「わっ! 鈴ちゃん!」

飛びついてギュツと抱き着いてくる鈴に香織は受け止める。

「よかったよ。二人に会えて本当によかったよ」

涙ながら再会を喜ぶ鈴だけどハジメ達からすればどうしてここに谷口が? という疑問が浮上するが、その隣でリリアーナは浩二に歩み寄っていた。

「浩二さん。お久しぶりというわけではありませんが、こんなところで会えるとは思いませんでした。……僥倖です。私の運もまだまだ尽きていないようですね」

「そ、そうだな……」

治療が終えた浩二はリリアーナから視線を逸らしつつ歯切れ悪そうにそう返事をした。

何故なら顔を合わせずらいからだ。

雫にフラれた日に浩二はリリアーナの胸で思いきり泣きじやくつた。王女とはいえ、自分よりも年下の女の子に慰められたことを浩二は少なからず意識している。

「……あの時は、助かった。ありがとう」

「ふふ、あれぐらいでよければ何度でもしてあげますよ」

慰めてくれたことに礼を告げる浩二にリリアーナは微笑みながらそう告げる。するとそこで鈴が香織達と再会できたことで落ち着きを取り戻したのか、香織達に言う。

「大変なんだよ！ 愛ちゃん先生とシズシズが攫われたの!!」

鈴の口からとんでもない言葉が出てきた。

鈴とリリアーナの話を要約するところだ。

最近、王宮内の空気がどこかおかしく、リリアーナは違和感を覚えていた。国王を始めとする重鎮が？エヒト様”を崇め、信仰心を強めていった。それだけではなく、生気のない騎士や兵士達が増えていく。更にはハジメの異端者認定にリリアーナは国王であり父親でもあるエリヒドに猛抗議をしたが、考えを変える気はなかった。

極めつけは銀髪の修道服を着た女に愛子が気絶させられ担がれているところをリリアーナは目撃した。幸いリリアーナは王族のみ知る隠し通路で息を潜めていた為に難を逃れることが出来たが、このことを誰かに伝えなければいけないと思いい立ち上がった。

悩んだ末、リリアーナは、今、王都にいない頼りになる存在である香織と浩二を思い出した。そして香織の傍にはハジメがいる。リリアーナは隠し通路から王都に出て、一路【アンカジ公国】を目指す際に偶然にも鈴と遭遇した。

そして鈴もまた雫が銀髪の修道服を着た女に雫が攫われていくところ目撃してしまい、そのことを浩二に伝えようと黒刀を手に王都を出ようとしたらしい。

そこからユニケル商会の隊商にお願いして便乗させてもらい、その

道中で賊に襲われている所をティニアに助けられた。

そこまで話を聞いた浩二は……。

「へえ？ 雫をねえ……」

そうぼやいた。

その顔は笑っているも目は全く笑っていない。そして幼馴染である香織はその顔が本気で怒っていることにすぐに気付いた。

(こ、浩二くんが本気で怒ってる……)

思わず鈴を抱きしめたくなくなるほど怯えている香織。鈴も香織に抱き着いて恐怖を和らげようとするほどに今の浩二は怖いのだ。

これまで浩二を怒らせる人はいた。だがそれは別に本気ではない。精々、軽いトラウマを植え付ける程度で終わらせるぐらいだ。だから浩二が本気で怒るところを見たことがあるのは香織でも数える程度しかない。だが本気で怒った浩二に僅かな慈悲も無いことを香織は知っている。

「浩二様。落ち着いてください」

「旦那様。お氣を確かに」

そんな浩二の気持ちを静めようとティニアとエフェルが歩み寄ると浩二も気持ちを落ち着かせて鈴が持つ黒刀に視線を向ける。

「……なるほど。だから鈴が雫の刀を持っているんだな」

「う、うん。それぐらいしか鈴にできることがなくて……ごめんなさい」

鈴も修羅場を潜ってきた。だから一目で銀髪の修道服を着た女との力量差を理解したからその上で自分にできることを考えて行動したのだ。そのおかげで浩二はそのことを知ることが出来た。

「鈴が謝ることはねえよ。それは俺が持っけていてもいいか？」

「うん、鈴もそれが一番だと思う」

浩二は鈴から刀を受け取り腰に携える。そしてハジメに言う。

「南雲。俺は今から王都に行つて雫を助けに行くが、お前は どうする？」

「俺も行くぞ。あの人がさらわれたのは俺が原因でもあるし、放つておくわけにもいかない」

そんな二人の言葉にリリアーナも鈴も顔を上げた。
無論ハジメも目的がある。【神山】にある神代魔法を手に入れる為
に愛子を助ける時に神代魔法を頂こうと考えている。こうしてハジ
メ達は王都を目指すのであった。

主人公09

薄暗く明かり一つ無い部屋の中に、格子の嵌った小さな窓から月明かりだけが差し込んで黒と白のコントラストを作り出している。

部屋の中は酷く簡素な作りになっていて、鋼鉄製の六畳一間。木製のベッドにイス、小さな机、そしてむき出しのトイレ。地球の刑務所の方がまだましな空間を提供してくれそうだ。

そんな牢獄にしか思えない部屋で雫は囚われの身となっている。

その手首にはブレスレット型のアーティファクトが付けられており、その効果として雫は魔法が使えない状態となっている。

「このっー」

それでも雫はただ助けを待っているだけのお姫様ではない。脱出を試みようとは何度も鋼鉄の扉に拳や蹴りを叩きつけている。しかし、勇者パーティーの前衛である雫の攻撃でも扉はビクともしない。

「はぁ……はぁ……」

乱れた呼吸を整えながら雫は攫われた時のことを思い出す。

銀髪の修道服を着た女に突然手合わせをしてあっさりと敗北した。万全の状態ではなかったなどというのはただの言い訳。雫はその女に敗北を叩きつけられて人質としてこの牢獄に閉じ込められている。

（私が浩二の枷になるなんて……）

雫はどうして女が浩二を狙っているのかその理由は知らない。けれど浩二の枷になっているのは確かなことだ。

「痛っ!？」

鋼鉄の扉を殴った手から痛みが走る。手だけではなく足からも鈍い痛みが雫を襲う。

（折れてはいないようだけど罅は入っているわね……）

実家で怪我をすることには慣れている雫は痛みには耐性がある。だから冷静に自分の状態を把握することが出来るもどう足掻いてもここから脱出することができないことがわからない雫ではない。

自身をここに閉じ込めた銀髪の修道服を着た女との実力差は歴然。仮にここから出られたとしてもまたここに戻ってくるだけだ。

それでもじっとしていることができない雫は脱出を試みるも無意味に終わっている。

(せめて黒刀があれば……)

それがあればまだ脱出できたかもしれない。しかし、今は雫の手元にはない。

雫は一度落ち着きを取り戻す為にベッドの上で膝を抱えて小さくなる。

「私、どうしちゃったんだろう……」

自身でもらしくないと思うことがある。あの日、浩二が告白してくれたその日から浩二のことが頭から離れない。

雫とてこれまで異性の告白されたことはある。だが、大半が下心丸出しの告白だった為に全て断った。女子生徒からも？お姉様”と熱の籠った視線で告白されたこともあつたけど雫はノーマルなので丁重に断った。

幼馴染の想いに気づけなかった自分に罪悪感を抱く雫はその身を小さくする。

「……私に人質の価値なんてないわよ。だって私がそうしたのだから」

自虐気味のそうぼやく。

まだ浩二がその想いを抱いているのなら人質としての価値はあつただろう。だが、雫は浩二の想いを断ち切った以上はもう浩二が危険を冒してまで助けに来る価値はない。そう考えると雫の諦観したかのように薄く笑う。

(案外、これでよかったのかもしれないわね……)

浩二をフツてよかったと雫は思う。フツたから人質としての価値はない以上浩二の枷にはならない。自分を切り捨てて他の誰かを助けに行ってくれたらいいと雫は考える。

「……浩二」

「ああ、なんだ？ 雫」

ポロリと零れた彼の名を呟いたらこの場にいる筈がない彼の返事が返ってきた雫は思わず、部屋を見渡すが自分以外誰もいない。幻聴

？ だと首を傾げると。

「こつちだ、こつち」

再度聞こえた声に雫は格子の嵌った小さな窓に視線を向けるとそこには、窓から顔を覗かせている黒眼紅瞳のオッドアイの男性がこちらを覗いていた。

「だ、誰!？」

雫は思わず警戒して痛めている手足を動かして八重樫流体術の構えを取ると浩二はがっくりと肩を落とした。

「助けに来た幼馴染に対して酷い言い草だな、ええ、雫さんよ？
ちよつと見た目が変わったただけで間違えるなんて浩二さんはシヨツクだぞ」

「へ？ 浩二？ えっ？ うそ、どうして……？ だつてここ……」

混乱しながらマジマジと目の前にいる浩二と雫が覚えている浩二を見比べてみると確かに面影がある。

「とりあえずちよつと離れてろ。？ 分解」

壁を？ 分解”させて浩二は中に入る。今度は顔だけではなく身体全体を見て雫は本当に浩二なのだと確信した。確信したからこそ口に出てしまう。

「どうして……？」

「囚われのお姫様を助けに来るのは王子様の役目だろ？ と言いたいけど生憎と王子様は似合わないから囚われのお姫様を助けに来た村人Aとでも思ってくれ」

「そういうことを聞いているんじゃないわよ!? どうして私を助けにきたのよ!?! 私は貴方を……ッ!」

フツたはず。だが。

「惚れた女を助けに来るのは当たり前だろ」

「———」

そんなの当然と言わんばかりに平然と言い切った浩二に雫は言葉が出なかった。だけど、やはり、それでも雫はわからなかった。どうしてまだそんなことを言ってくれるのかを。

「というよりも女の子が骨に罅が入るまで鉄の扉を殴るなよ。？ 焦天

“
相変わらずの幼馴染に呆れながらも回復魔法を施す浩二は続けて
雫の手首に嵌められているアーティファクトを？分解”して黒刀を
雫に渡すと雫はそれを黙って受け取るも、なんとも言えない空気が二
人に流れると、浩二が先に口を開いた。

「お前にフラれた時は滅茶苦茶ショックを受けた。生まれて初めて大
泣きするぐらいにショックで何度もお前を諦めようと思った」

「……」

その言葉に黒刀を持つ手に力が入る。

「それでも諦めきれないぐらいに俺はどうしようもないぐらいにお前
に惚れてる。雫にフラれて、雫の傍から離れてようやくそれに気付い
た」

「浩二……」

「けど、南雲ほどじゃないけど俺も皆の傍から離れて色々と変わった。
だから今の俺は雫が知っている俺じゃない。だからこれは宣戦布告
だ」

ビシッ！ と浩二は雫に指先を向けて宣言する。

「俺は必ず今の俺を惚れさせる。これからは？幼馴染”としてじゃな
い。一人の？男”としてお前を惚れさせてみせる。だから俺を見る、
俺の話に耳を傾けろ。心身共に俺無しじゃ生きられないようにして
やるから覚悟しろ」

雫と離れる前はまだ？幼馴染”だった。だが今は違う。一人の？
男”としての宣戦布告だ。改めて浩二は今の自分を好きになって貰
う様に行動する。だからこれはその宣誓でもある。

「……どうして、そこまで」

私の事を——。そう問いかけようとした時、カツ！つと、外から
強烈な光が降り注いだ。

「っ!？」

浩二は雫を抱きかかえて外壁の穴から飛び出した。

「……おかしいとは思ってはいた」

先ほどまで雫を閉じ込めていた牢獄は細かい粒子となり、夜風に吹

かれて空を舞い上がりながら消えていく。その事に関しては浩二は疑問を抱いてはいない。

「雫を俺を誘き寄せる餌兼人質として有効活用する為に用意したことは別にいい。理解できることだ。だが、どうしてそんな人質をこうも簡単に俺の元に返したのか。それがわからなかった」

ここに来るまでに浩二は雫を人質にした戦闘から有効活用に至るまでの利用方法について模索していた。最良から最悪のパターンまで考えていた浩二は雫を助ける前に神の使徒と戦闘があることさえ考えていた。

何もここまで来るまでに戦闘のせの字も雫を人質にした交渉という名の脅迫もなかった。だからこそ浩二は理解できなかつた。せつかく手に入れた浩二の弱みを簡単に手放すことができたのかを。

「そういうことか……」
「うそ……」

二人の前に現れるのは雫を攫った張本人である神の使徒。今は修道服ではなく戦闘服でその両手には銀色の魔力を纏った鍔無しの大剣を手に入れている。しかし、問題はそこではない。

数百人にも及ぶ数の神の使徒の大群が浩二達を取り囲んでいる。

「随分と熱い歓迎だな……」

「初めまして、平野浩二。私は第三の使徒ドリットと申します。貴方を我が主の元へ連れて行きます」

（初めから実力行使が目的なのね……）

エヒトの元へは連れて行く。だが、力の差を思い知らせて連れて行く。そんな無言の圧力がひしひしと伝わってくる。

（俺達を取り囲んでいるのは恐らくは量産型だな……）

目の前にいるドリット。そして浩二が倒したファイアトやフィンフトとは違った同じ姿をした贋作。だが神の使徒としての技能はある。それが数百体以上。

「貴方の力は承知しています。しかし触れなければ脅威ではありません。お荷物を抱え、この数から逃れられるとは思わない事です」

神の使徒であろうとも問答無用で倒すことが出来る？「改造”の派

生技能である？改造改悪”。神の使徒の言う通り、その技能は対象に直接触れなければ発動しない。数を揃えたのは浩二を逃がさないようにする為でもあり、浩二の必殺技を封じるためでもある。更には両腕に雫を抱えている以上は無茶な動きもできない。

「ご安心を。命を奪うことはしません。貴方には我が主の為に役に立ってもらわなければいけませんので」

「こ、浩二……」

自分が足手纏いになっていることに雫は歯痒い思いをしながら浩二の名を呼ぶ。だが。

「お前、馬鹿だろ？」

浩二は呆れるようにそう言い切った。

「神の使徒としてのプライドか、エヒトの命令なのか知らないけどな。俺から言わせることはただ一つ。お前は馬鹿だということだ。……いや、あれこれと考えていた俺が馬鹿だったわ」

哀れみすら見せる浩二に雫はただ啞然となる。

「俺が一番警戒していたのはお前が雫を手元に置いているかどうかだ。？近づけば人質の命はない”や？こちらの命令を聞かなければ殺す”って感じに雫の首元にその大剣を押し付けられていたら流石の俺もできる手段は少なかった。最悪、俺は本当にクソ神の都合のいい駒にされる覚悟もしていたが……まさかこうも簡単に雫を取り返すことができるとは思わなかった」

それはまるでこの状況をどうにかできる。苦戦するまでもないと遠回しに言っているようなものだ。

「……強がり。確かに貴方はイレギュラーと同程度の脅威ではありますが、お荷物を抱えたままこの数をどうにかできるとでも？」

ドリットほどではないにしても量産型にも厄介な？分解”やその他の技能もある。それが数百にも及ぶ数相手にどうにかできるとは思えない。

「そうだな。どんな戦いでも数は重要だ。戦いは数って言葉があるくらいだからな。——だから？死ね”」

刹那、量産型の神の使徒はまるで糸が切れた人形のように地上に落

ちていく。

「なっ!?!」

たった一言。たった一言浩二が？死ね”と口にただけで量産型の神の使徒が地面に向かって落ちていく。流星にそれはドリットも驚きを隠せない。

「いつたい何を……ッ!?!」

「教えるつもりもないし、答える意味もない。まあ、あえて教えてやるとしたら生物である以上は俺の敵じゃないってことだ」

浩二オリジナル魔法？言霊”。

以前神の使徒フィンフトの戦闘の際に使った？白昼夢”が対象に都合にいい夢を見せる魔法ならば？言霊”は浩二が発した言葉を思い込ませる、簡単に例えるのなら超強力な暗示に近い魔法だ。

量産型の神の使徒達は浩二が？死ね”と発したことによって自分は死んだと思いついで生命活動を停止したのだ。今頃は高さ八千メートルから落ちて赤い花が咲いている頃だ。無論、生物相手なら誰でも効果があるというわけではない。魔耐のステータスが高い人や精神力が強い人には効果が薄い、量産型である神の使徒相手には十分だ。

「さてドリットって言ったか？ お前、覚悟しろよ」

浩二の瞳から宿る鮮烈さにドリットは無意識にその身を引いてしまふ。

「俺の？特別”に手を出したんだ。楽には終わらせない、ホルマリン漬けにしてやる」

「——っ」

ドリットは思う。目の前にいるのは本当に人間なのか？ その気迫、その圧力はまるで命を刈り取る死神のようだった。しかし、ドリットはエヒトの忠実な使徒。相手が死神だろうと命令に遂行するまで。

主人公10

量産型である神の使徒をオリジナル魔法である？言霊”によって戦闘不能にした浩二は第三の使徒であるドリットとの戦闘が始まった。

銀翼をはばたかせて銀羽の魔弾を射出するドリット。恐るべき連射性と威力が秘めた銀の魔弾は雨の如く浩二達に放たれる。その銀羽一枚一枚には当然のように？分解”が付与されており、本当に浩二達を神の元に連れて行く気があるのかとツッコミたい。

「雫！ しっかり掴まっっているよ！」

片腕で雫を抱きかかえながら灰色の翼をはばたかせて高速移動をしながら同様に？分解”を付与した灰羽で相殺していく。

しかし、ドリットはそんなことは承知かのように鏢無しの双大剣を手に浩二に接近して斬りかかる。その狙いは雫。だけど浩二がそんなことを許す訳もなく浩二は刀を抜いて防ぐ。

「ぐっ」

「浩二!？」

だがそれはドリットにとって大きな隙だ。浩二の腹部に鋭い蹴撃が炸裂して雫は声を上げるも浩二は無傷だ。咄嗟に？魔力操作”の派生技能である？魔力硬化”で防いだことによつて傷はない。しかしドリットの攻撃の手は緩めない。

銀翼をはばたかせて銀羽を宙にばら撒く。そしたらドリットの前方に一瞬で集まると、何枚もの銀羽が重なって魔法陣を形成する。銀色に輝く巨大な魔法陣がドリットの眼前から浩二を睥睨する。

「――？劫火浪”」

発動された魔法は、天空を焦がす津波如き大火。うねり上げて二人を覆い尽くすように迫る熱量・展開規模に桁外れの大火に、雫は一瞬、世界が紅蓮に染まったのかと錯覚した。

「？聖絶”」

だが、その大火に覆われるよりも早く浩二は光属性上級防御魔法を発動する。こちらにも？分解”を付与されている為に大火は障壁に触

れる度に分解されていく。

(す、凄い……ッ！ 私達とは次元が違う！)

浩二にしがみつきながら雫はただ啞然する。

ドリットと浩二。二人の戦いは雫が入り込める余地がないほど圧倒的な実力差がある。もし、雫が浩二の手助けをと思えば余計な動きをすれば浩二の寿命を縮めるだけだ。

(浩二、貴方に何があったの……?)

浩二が王都を出て行く前はたいした違いはなかった。むしろ、純粋な戦闘力なら雫や光輝、龍太郎の方が上だっただろう。だがしかし今の浩二は違う。

男子、三日会わずれば刮目して見よ。という日本の諺があるが、今の浩二は雫が知っている浩二ではない。王都から出て行っていったい何があったのか。

そして術の効果が終わり、大火が霧散していくと次に雫が目にしたのは灰羽がドリットを取り囲むかのように包囲している光景だった。

「お返しだ」

? 分解 が付与された灰羽は一斉にドリットを襲う。

大火を死角にしてそのままドリットの周囲に灰羽を動かして一斉にドリットに向けて放つも、ドリットは銀翼で身を包み防御態勢をとって防いだ。

「? 縛煌鎖!」

全方位からの攻撃から身を守る為に防御態勢に入ったことよって動きを止めたドリットに浩二はドリットを拘束しようと光属性縛魔法を発動させる。光の鎖がドリットを捕縛しようと迫るもドリットは分解付与した双大剣によって光の鎖を斬り払い、お返しと言わんばかりに銀の砲弾を放つ。

「? 天絶!」

二十枚の障壁を展開させてそれを防ぐ。しかしその背後から高速移動してきたドリットの大剣が浩二に迫る。

「? 邪——」

「遅い」

振り下ろされる大剣が浩二の腕を斬り落とした。

肘から先の腕が宙を舞い、血が噴出する。それを間近で見た雫は目を見開いて悲鳴を上げそうになるも……。

「？絶象」

斬り落とされた腕は何事もなかったかのように元に戻っていた。そしてその腕で抜刀してドリットに一閃するもドリットは浩二から距離を取ることで躲した。

「……腕を斬らせてやれば油断してくれると思ったんだけどな」

「貴方は油断ならないことは承知済みです」

チツと内心舌打ちする。

浩二の腕が何事もなかったかのように元に戻ったのは「メルジーネ海底遺跡」で手に入れた神代魔法である再生魔法のおかげだ。だから相手の油断を誘う為にもワザと斬られたのだが、相手は浩二をかなり警戒しているようだ。

「それにしてもお荷物を抱えたままよく凌ぎますね。ですがそれを抱えている以上貴方に勝ち目がないことは理解している筈です。そろそろ諦めて我が主の元に来て貰います。そうすれば我が主も貴方を歓迎するでしょう」

そろそろ終わらせる。言外にそう告げるドリットの体全体が銀色の魔力で覆われており、感じる威圧感が跳ね上がった。

ハジメや光輝と同じ？限界突破”を発動したドリットに雫の瞳が絶望に染まっていく。

実力が違う、桁が違う、何もかもが違う。ドリットから感じる絶大なプレッシャーの前に雫は勝てるイメージがまるでできなかつた。これは自分達とは違う。存在から何もかもが根本的に違う。

（いくら浩二が強くなったとはいえ、私がいる限り浩二は……）

——勝てない。

その言葉が脳裏を過る雫の頭にポンと手が置かれた。

「え？」

「安心しろ、雫。俺は負けないから」

優しい手つきで頭を撫でられて安心させるかのように告げられる

その言葉にドリットは言う。

「戯言を。そのお荷物を捨てない限り貴方に勝ち目はありません」

その言葉が雫に突き刺さる。

ドリットの言葉は正しかった。雫がいるから浩二は全力で戦えない。それならばと思う雫を前に浩二は口を開いた。

「やっぱり所詮は神が造った人形か。お前は何も理解していない」

「……どういう意味です?」

浩二の言葉に怪訝する。すると浩二はドリットに言った。

「雫がお荷物? 馬鹿言うな、俺は雫の事をそんな風に思っちゃいねえよ。むしろ嬉しいくらいだ。こうして惚れた女を守るのがな」

それは浩二の純粋な気持ちだ。

以前までは考えもしなかった。だからこそこうして雫を守れる存在になれたことが浩二は嬉しかった。

「エヒトにとってそしてお前等にとってもこの世界に住む人達はただの駒のようにしか思っていないがな、人間を甘くみるな。人間は守るべきものがある限り誰よりもどこまでも強くなれる。その為なら限界の一つや二つ余裕でぶっ壊す。それが人間の強さだ」

だからこそ浩二はここにいる。守るべきものを守る為に。

「世迷言を。そんな言葉で現状が変われるほど現実には甘くありません」

ドリットの言う通り現実には甘くはない。

浩二の言う精神論でどうにかできるほど現実には、世界は優しくはない。

「これで終わらせます。お覚悟を」

ドリットは最後の攻撃に移ろうとしたその瞬間、ドリットの動きがピタリと止まった。何が起きたのかと首を傾げる雫を抱えている浩二は笑う。

「ああ、終わりだな。お前がな」

不意にドリットの手足が結晶化していく。

「——っ!? な、なにが起きて!?!」

突然自身の手足が結晶化していく自身の身体の異変に能面のように

なその顔が驚愕に包まれている。そして浩二はそんなドリットに答えを教える。

「知っているかどうかは知らないが、それは魔結晶病。魔力が結晶化していく病気だ」

魔結晶病。それは浩二が王都を出て行って旅に出た先の村で子供が患っていた病名だ。

「魔結晶病の結晶は魔力を吸収するから常時魔力の供給を受けているお前等はいいい苗床だろうな。治すには専用の薬を調合しないと治らない。なんとたつてそれは回復魔法ですら養分にしてしまう恐ろしい病気だ」

「いつの間にこんなものを！ 私は貴方から攻撃を受けていない筈！」

「目に見えているものが全てではない。特に俺の前ではな」

浩二は己の身体を？改造”してあらゆる薬毒がストックしている。そして体内で？調合”を行って薬やウイルスを作ることも造作もない。そして体内で調合したウイルスを体外に放出させれば後は空気感染で感染させても直接ウイルスを打ち込んでもいい。少量でも相手に体内に侵入することができたらその時点で浩二の勝ち揺るがない。

ちなみに雫にはきちんと予防薬を打っているので問題はない。

結晶化が進行して既に両腕と両脚は完全に結晶化してしまい、それでも結晶はドリットの身体を食うかのように進行していく。

しかし、それでもドリットは？分解”の魔力で解毒を試みる。だがそれは悪化させるだけで終わった。

「ああ言い忘れていたけど、？分解”も通じないから。それぐらいの実証実験を俺がしていないとでも？」

悪戯笑みを浮かべながら告げる。

己の身体がなす術もないまま結晶化が進んで行くドリットに浩二は最後の言葉を告げる。

「地に落ちろ。神の人形」

その言葉を最後にドリットは全身が結晶化して全ての機能が停止

すると地面に向かって落ちていく。それを眺めていると浩二が何かを思い出したかのようにあ、と口にする。

「ホルマリン漬けにするんだった」

そんなことを思い出すもま、いつか。と開き直る。

……このような方法、妾の長い生のうちでも思いつかんかった。流石はご主人様の先生殿じゃ。感服じゃよ」

「ちがうんです！ そうじゃないんです！ こんなに爆発するなんて思ってたなくて！ ただ、半端はいけないと思って！ ホントなんです！ はっ!? 教会の皆さんはっ!? どうなりました!?!」

愛子が涙目でオロオロしながら弁解し、廃墟と化した教会に視線を彷徨わせる。

「肉片も残ってないでしょうね。これは流石に俺もどうすることはできねえわ」

南無。と死者に祈りを捧げる。

イシユタル達も教会の結界に過信していたこともあって無防備の状態であの爆発を受ければ助からないだろう。愛子は教会関係者を爆殺してしまったことにその場で嘔吐してしまい、雫が愛子の背中を擦る。

そして愛子が落ち着いた頃にテイオがある異変に気づいた。

『ご主人様よ。人がおる。明らかに普通ではないようじゃが……』

「なに?」

視線の先には白い法衣のようなものを着た禿頭の男がおり、ハジメ達を真っ直ぐに見つめている。しかしテイオの言う通り普通の人間ではない。何故ならその身体が透けてゆらゆらと揺らいでいるからだ。

禿頭の男はハジメ達が自分を認識したことを察したのか、そのまま無言で踵を返して瓦礫の山の向こう側へ移動した。

「行くう」

ハジメ達は警戒しながらもその禿頭の男についていく。すると目的地に到着して禿頭の男が指す瓦礫の場所に踏み込むと瓦礫がふわりと浮き上がり、その下で地面が淡く輝き出した。見れば、そこには大迷宮の紋章の一つが描かれていた。

「……あんたは、解放者か?」

ハジメが質問したのと、地面が発する淡い輝きがハジメ達を包み込んだのは同時だった。気がつけば全く見知らぬ空間に立っており、部

屋の中央には魔法陣が描かれている。どうやら大迷宮の深部に到着してしまつたらしい。

そして全員でその魔法陣の踏み込むと魔法の知識が刻み込まれる。そう、神代魔法である魂魄魔法。魂に干渉できる魔法を手に入れたのだ。すると浩二が。

「雫も手に入れたみたいだな」

「……ええ、そうみたい。これが浩二が言っていた神代魔法なのよね」
ハジメ、テイオ、愛子、浩二だけではなく雫も神代魔法である魂魄魔法を手に入れていた。それには浩二もちよつとびっくり。

【神山】のコンセプトは神に靡かない確固たる意志を有すること。

本来なら正規ルートでその意思を確かめるなにかがあったのだろうが、元々この世界の人間ではないハジメ達は神に対して信仰心など持ち合わせていない。雫も攻略が認められたのは神の使徒に屈することなく脱出を試みようとしていたからかもしれない。

こうして【神山】の神代魔法を手に入れたハジメ達は香織達がいる場所へ向かった。

王都を守る大結界が破られた大音量で光輝達も目を覚ました。そして光輝達はクラスメイト達を起こしに行つて方が一に備えて一緒に行動をすることになる。そこで雫の専属侍女であるニアから魔人族の侵攻のことについて聞かされた。

そこで光輝が王都の人達を避難させる為の時間稼ぎをしようと提案するも、恵理がメルドと合流して騎士団と連携を取るべきだと助言する。

そんな恵理に助言に光輝達も同意してそのように行動したのだが……。

「ど、どういふことだ、恵理！」

光輝達は兵士や騎士達に地面に組み伏せられて身体を剣で貫かれている。それだけではなく、魔力封じの枷までつけられている。

そして唯一襲われていない中村恵理だけはそんな光輝達を愉悦

たつぷりの眼差しで見下ろしながら嗤っていた。そのすぐ傍で兵士や騎士達を従えて。

光輝は体を貫く剣の痛みに耐えながら必死に疑問をぶつける。すると恵理はニマニマと嫌らしい笑みを浮かべたまま答えた。

「そんなの決まっているよ。僕が魔族側に行く為だよ。だってこのまま戦争が続いても人間族に勝ち目があるとは思えないからね。だから、王都への手引きとお人形にした騎士団の献上して僕は魔族側に寝返ることにしたんだよ」

その言葉に誰もが啞然となる。突然の恵理の言葉が理解できない者もいれば彼女と親しい者は信じたくないという者もいる。しかし恵理は本気だ。

その為に恵理は色々と準備してきたのだ。

苦手と言っていた降霊術を極めて？縛魂”という生前の記憶と思考パターンを付与してそれなりに受け答えを可能としたオリジナルの降霊術を開発して王や騎士団を殺害してその？縛魂”で操り、その人形で王都を守る大結界の破壊、そしてこの国の兵士や騎士達を魔族に提供しようとしている。その行動だけで恵理がどれだけ本気なのかかわかる。

しかし、それを信じない者がいた。

「え、恵理！ 君はそんなことをする筈がない！ 魔族に操られているだけだ！ 頼む、目を覚ましてくれ！」

光輝だ。本気で恵理が魔族側に操られて仕方がなくそうしていると疑わない光輝に恵理は可笑しそうに笑う。

「アハハ、本当、光輝くんは優しいね。うん、僕の好きだった光輝くんならそう言うと思っていたよ」

好きだった。そう告げる恵理は光輝の髪を握りしめて無理矢理顔を上げさせる。

「心にもないことを言わないでよ。僕を裏切ったくせに」

狂気と怒気が入り交じった瞳を至近距離で見せられた光輝はその瞳に戸惑いと恐怖を抱きながら頭から困惑が離れない。しかし恵理は光輝から手を離して一番近くにいた近藤のもとへ歩み寄り近藤の

背中に剣を突き刺して殺害した。そして？縛魂”で恵理の操り人形となる。

光輝は困惑しながらも言った。

「恵理……なんで……」

「決まっているでしょ？ 初めから僕はそのつもりだよ。ここでみんなを僕のお人形にしてあげる。決して僕を裏切らない、僕だけを見てくれるお人形に。だから安心して、みんな。ちゃんとみんな一緒に可愛がってあげるから」

彼女は狂っている誰もがそう確信した。その時だった。

「え、恵理……?」

その場に香織、テイニア、リリアーナそして鈴が駆け付けた。

目の前の光景を目の当たりにして驚く鈴はとても信じられない顔を露にする。

「え、え? どういうこと……? どうして恵理が……? うそだよね……」

親友が生み出したその光景を鈴は信じられなかった。しかし、恵理は笑みを崩すことなく口を開いた。

「ああ、鈴、戻ってきたんだね。戻って来なかったらまだもう少しだけ親友でいてあげようと思ったのに。残念だな……それに香織がいるってことはあの二人も王都にいるのか?」

「みなさん! いったい、どうしたのですか! 正気に戻って! 恵理! これはいったいどういうことです!」

本当に残念そうに、そして諦観するかのように小さく息を吐いた恵理は冷静だった。リリアーナは恵理に説明を求めて声を張り上げる。「見ての通りだよ? ここにいる兵士や騎士達は今は僕の可愛いお人形。ああ、安心して。ちゃんとみんな、僕のお人形にするから。仲間外れなんて可哀想なことはしないよ」

今日の夕飯でも決めるかのようにあっさりと告げられた恵理の言葉にリリアーナは理解できなかった。そんなリリアーナにテイニアが言う。

「リリアーナ姫殿下。残念ながら騎士達はもう亡くなられておりま

す。今は恵理様の魔法で操られていると見てまず間違いないでしょう」

「そんな……ッ！」

「ティニアの？熱源感知」によって感知した兵士や騎士達の体温が明らかに低すぎる。それこそ死者と呼べるほどに。そんなティニアに恵理は何かを思い出したかのようにティニアに告げる。

「ああ、浩二にゾツコンのメイドさんか。お仕事クビになったって聞いたけどもしかして浩二と一緒にいるの？」

「はい。浩二様に治療をお求めなら大人しくして頂きたいのですが」

「残念だけでもういいかな。まあ、浩二にはそれなりに恩はあるし、大人しくしてくれたら手は出さないよ。僕は恩は返す女だからね」

「そういうわけにも参りませんので」

「そっか。残念」

恵理は兵士や騎士達に香織達を拘束するように命令を下す。リリアーナは動けない鈴と？治療師である香織を守ろうと結界を展開しようとするも。

「リリアーナ姫殿下。必要ありません」

「え？」

ティニアはその背に白銀の翼を広げて白銀の羽を宙にばらまかせて兵士や騎士達の四肢を切断した。

「え？」

恵理は呆気を取られるような声が口から出た。

自慢の人形が一瞬で地に倒れた。そしてなによりティニアから感じるプレッシャーとその姿が恵理の計画に協力した神の使徒と酷似していた。

「なんなんだよっ！ それっ！」

目の前の理不尽に叫ぶ恵理。しかしそれも無理はない。ティニアの存在は完全に計画から外れたもの。対処する術など持ち合わせていない。なにより恵理が知っている範囲ではティニアにそんな力はなかった。つまり……。

「浩二か!? 本当にお節介な人だよ！」

「ええ、そうですね」

「！」

いったい誰がティニアを理不尽な存在に仕立て上げたのか、その犯人がわかった恵理の喉元に大剣が突き付けられる。

「何もしないことを勧めます。今の私はそこに転がっている勇者よりも強いですよ？」

冗談だと思いたいが、ティニアから感じるプレッシャーが冗談ではないと告げている。

しかし、恵理にはまだ手札が残っている。

まだ温存していた騎士達やメルド、先ほど人形にした？槍術師”近藤礼一がいる。先ほどティニアに倒されたのが雑兵だとすれば今度は精鋭部隊。それも一人は傀儡に成り下がりながらも異世界チートの力を十全に発揮できる礼一だ。いくらティニアが強くても守りながらでは必ず隙が生じる。

狙いは——香織。傀儡と化した精鋭部隊を一斉に香織に向けて強襲させる。

ティニアは一度だけ視線を横にずらして他の騎士達同様に操られているメルドを見て小さく呟く。

「……残念です」

刹那、ティニアはその場から一步も動かすことなく白銀の羽のみで傀儡と化したメルド達を行動不能にした。これには流石の恵理も驚きを隠せない。

「生憎と羽の扱いに関しては浩二様よりも上ですのすので」

ティニアの天職は？探索者”。探知、感知系の技能に優れており、視覚外からでも何があるのかぐらい認識することができる。そして神の使徒の力を己の手足のように自在に操れるのはティニア自身の才能とユエとの特訓そして努力で成し得たものだ。加算されたステータスも含めて今のティニアを止められるのは同じ化け物である南雲ハジメか平野浩二ぐらいだ。

ティニアは愛する人の為に自らの意思で化け物になる道を選んだのだ。この場でその化け物を止められる者はいない。

「香織様。お手数ですが勇者達の治療をお願いします」

「は、はい！？聖典！」

光属性の最上級回復魔法？聖典”で倒れているクラスメイト達の傷を癒す。傷が癒えた光輝達は立ち上がって魔力封じの枷を壊していく。

「さて、二度目の警告です。大人しくしてください」

降伏を勧めるテイニアに恵理は悔し気に歯を噛み締める。拘束から逃れて傷も癒え、枷も外れた今の光輝達をもう一度捕える術は恵理にはない。なにより目の前の化け物から逃げる事が出来ない。

解放された光輝達は警戒しながらも複雑な視線を恵理に向けるなか、光輝がゆつくりと歩み寄る。

「……恵理、どうしてこんなことをしたんだ？」

クラスメイトの心情を代表するかのように光輝はそう尋ねた。やはり魔族に操られているのでは？ と思いつながら尋ねるも恵理の口からは光輝達の期待を裏切るような答えだった。

「どうして？ そもそも僕達が人間族に味方をする理由がどこにあるの？ 何の関係もない僕達を戦争に巻き込んでどうして味方でいて貰えると思う方がどうかしてる。まあ、どこかの勇者様はそんなことも考えずに皆を巻き込んで戦争に参加させたけどね」

恵理の言葉に一部は納得できる考えだ。

そもそもこの世界の戦争に参加する義理も義務もない。それはこの世界で生きる者達で決めることだ。いわば恵理達は戦争に巻き込まれた被害者だ。それなのに戦争に参加している要因の一つは光輝にある。

「俺が世界も皆も救ってみせるだけ？ よく言うよ、救うどころか自分が気に入らない相手は陥れているくせに」

「俺はそんなこと……ッ！」

「していないとでも？ ならどうして浩二にあんなこと言ったのさ？ 雫に近づくなつて。普通はそこまで言わないよね？」

それは龍太郎からも受けた指摘だった。それに光輝は何か反論しようとした時。

「全員動くんじゃないやねえ!!」

怒声が響き渡る。

全員がその怒声がした方に視線を向けるとそこには香織を人質にしている檜山だ。

「檜山! お前、何していやがる!」

「動くなつて言つてんだろうが! 動いたら白崎を殺す! ヒヒ、俺は別に殺してもいいんだぜ?」

香織の首に剣を当てる檜山の瞳は狂気と欲望が混じった醜悪な笑みを浮かべている。

恵理が全員の意識を集めている間に檜山は行動を移した。このままでは恵理共々共倒れになってしまう。そうならない為にも人質が必要だ。そして檜山の目的は香織。だから檜山はここで香織を人質にして恵理共々この場から逃れるようしている。その後で香織を自分のモノにして。

「檜山!」

「動くなつて言つてんのがわからねえのか、天の河!! そのメイドも変な真似してみろ! 殺すからな!」

香織を人質に捕られて動けない光輝達を見て檜山は恵理に告げる。

「中村! この状況をどうにかしてやったんだ! さっさと逃げるぞ!」

檜山にとって目的は香織で大切なのは自分の命。だから後は恵理と共に逃げるのみだ。王宮を出て魔族と合流する。そこまで行けば勝てる確信があった。

しかし檜山は気付いていない。

香織に対して重度とも言える過保護な幼馴染がすぐそこまで来ている事を。

「おい」

「はっ」

頭上から聞こえた声に思わず反応してしまった檜山は顔を上げた瞬間、光の十字架が檜山を串刺しにした。檜山自身に傷はない。しかし、その動きは完全に停止している。そしてこの場にいる誰もが顔を

上げた瞬間、そこには愛子を抱えるハジメと雫をお姫様抱っこしている浩二。そしてテイオだ。

「雫ちゃんー!」

動けない檜山から離れて親友の元に駆け出す香織は雫に抱き着いた。

「無事でよかったよ、雫ちゃん……」

「ええ、心配かけてごめんなさい」

互いの無事を確かめ合う様に抱きしめ合う二人の周りには百合の花が咲き乱れているように見える。その光景を見た浩二は「やはり、一番の強敵は香織か……」と馬鹿なことを考えながら檜山に麻痺毒と激痛を引き起こす猛毒を体内に入れて死なない程度に毒に犯させておく。

「……で? どうなっていやる?」

ハジメの一声が響き渡る。

何がどうなっているのか、状況がわからないハジメを置いて浩二が恵理と対面する。

主人公12

魔人族の侵攻から早くも五日。リリアーナの陣頭指揮によって大混乱のただ中にあつた王宮も直ちに立て直され、負傷者の搬送、状況の調査などが速やかに行われていた。

恵理の傀儡と化した兵士は五百人規模に上り、姿を消した。恐らくは魔人族の領土に行つたのだろう。

今回の魔人族の侵攻、正確には恵理の計画によつて国王を含む重鎮達は既に恵理に殺害されており、今はリリアーナが先頭に立っている。光輝達はリリアーナ達の王都復興に力を貸している。

そして王都復興も少しは安定して時間に多少なり余裕が出来た頃、光輝達が食事処として使用している大部屋で話し合いの場が設けられた。

議題は色々もあるも、リリアーナはまず初めに浩二に問わなければならぬことがあつた。

「浩二さん。お答えください。どうして恵理を逃がしたのですか？」

この五日間、碌に睡眠時間も取れていないリリアーナだが、その顔はとても真剣だ。思いたくもないが場合によつてはという考えも頭の片隅に入れておきながら五日前——ハジメ達が香織達と合流した時のことを思い出す。

『……で？ どうなつていやがる？』

何がどうなつているのか、状況がわからないハジメを置いて浩二が恵理と対面する。

『……恵理。お前の仕業か？』

『……そうだよ。この国の兵士も騎士も王も僕が殺した』

恵理は自白した。半分自棄でも起こしているかのように吐き捨てるように己の犯した所業を自白した恵理に対して浩二は言う。

『そうか。じゃ、さっさと逃げろよ』

『……は？』

それはここに居る誰もが啞然とする発言であつた。そう言われた恵理でさえ開いた口が塞がらなかつた。

『追いもしないし、追わせもしない。一度、皆から距離を取るのもいいことだ。俺もそれで色々を知ることができた』

『……正気?』

『ああ。ほら、さっさと行け』

確かに恵理を捕らえられる状況だというのにその恵理を逃がした浩二に納得できない人もいれば罵声を浴びせさせる者もいた。リリアーナも内心は納得できていないが、浩二にも何かしらの考えがあつて恵理を逃がしたのだと思つている。だから時間と場所を改めてこの場を設けた。浩二の真意を確かめる為に。

「……確かに恵理がやったことは許されることじゃないし、恵理を逃がしたことに王女様も納得できないのもわかつているつもりだ。けど、恵理の過去を知つている身としてはあのまま恵理を捕らえたところで恵理は何も変わらない」

「……浩二は恵理がどうしてあんなつたのかを知つているの?」

雫の言葉に首を縦に振る。

中村恵理の過去。どうしてあのような凶行をしたのか、その理由を知りたくない者はこの場にはいないだろう。

—— 僕を裏切つたくせに。

光輝に告げたあの言葉。いったい二人の間に何があつたのか?

「……過去、恵理に何があつたのか教えてはくさいませんか?」

「あまりいい話じゃないけど……」

本来なら他人の過去をバラすような行為は褒められることではないが、浩二には説明する義務がある。だから浩二は過去、恵理に何があつたのかを事細かに話した。

幼い頃に父親が死んだこと、そのせいで母親から虐待を受けていたことから、小学生の時に性的暴行を受けかけたこと。そして母からも愛されないこと理解して心が壊れて自殺しようとした時に光輝に助けられてその後、浩二からカウンセリングモドキを受けたことまで全てを話した。

恵理の過去について一番ショックが大きいのは鈴だ。親友の恵理について何も知らなかった、知ろうともしなかったことに怒りと後悔

に苛まれてる。それ以外にも多くの者が光輝に非難に近い眼差しを向けている。

「——もう一人じゃない。俺が恵理を守ってやる。光輝、お前は子供の頃に恵理にそう言っていたみたいだけど、お前はいつたい恵理の何を守ったんだ？」

「いや、俺はただ——」

「まあ、子供の頃のことについて責めることはしないが、恵理にとってお前は？ 特別”な存在だったんだ。それこそ白馬に乗った王子様のように。けれど実際はその他大勢の扱い。恵理にとってはそれが裏切りだったんだろう」

「俺は恵理を裏切るつもりなんて……ッ！」

「お前になくても恵理にとってはそうだという話だ。少し考えてみる、大切な父親が死んで、大事な母親から虐待を受けて尚且つ性的暴行まで受けかけて自殺までしようとした恵理にとってお前が唯一の？ 居場所”だったんだ。恵理の勘違いだと言えばそれで終わるけど、そうじゃなかったから恵理は誰も信用しなくなっただろう」

その言葉に光輝はわかりやすくも落ち込む。そこで雫が話題を変えるように浩二に尋ねる。

「浩二。そこまでわかっているのならどうして何も言ってくれなかったの？ もしかしたら防げたかもしれないでしょ？」

「……確証が持てなかった。恵理自身上手く隠していたから誰かに話しても信用してくれるかどうかとも怪しかったからな。後はもしかしたら普通の幸せを手に入れてくれていると信じたかった」

原作知識で裏切りは知っていた。けれど転生者である浩二と接触して変わったかもしれない。普通の女の子として生活しているかもしれないという淡い期待があったのは否定しない。けどそうじゃなかったから原作通りの展開となっている。変わったのは恵理の光輝に向ける好意や心情ぐらいだ。

「恵理を逃がした責任を取れというのなら取る。恵理がこのまま何も変わらずにまた皆に危害を加えようとするのならその時は俺が恵理を終わらせる」

終わらせる。その言葉がわからない者はこの場にはいない。冗談だと思いたいが浩二の顔が冗談ではないことを教えている。リリアーナはそんな浩二の覚悟を尊重するように恵理の件は浩二に一任させる。

「……わかりました。それでは恵理については浩二さんに任せます。それと檜山さんにつきましては——」

檜山は処刑が決定した。恵理と協力関係であることは明白であり、今回の一件は決して擁護できる範囲を大きく超えている為にこの国の法の下で秘密裏に処刑することが決定された。それに対して仲の良かった中野と斎藤はどうにか減刑して貰えるように懇願するもそれはできなかつた。

光輝も香織を人質にした為に檜山を擁護する発言はなかつたが、恵理のことは知ってそれどころではないのかもしれない。しかし、愛子から語られるこの世界の狂った神とハジメ達の旅の目的。そして、愛子と雫が攫われたことや王都侵攻時の総本山での出来事を耳にして声を張り上げた。

「なんだよ、それ。じゃあ、俺達は神様の掌の上で踊っていただけっていうのか？　なら、なんでもっと早く教えてくれなかつたんだ！　オルクスで再会したときに伝えることはできただろう！」

非難するような眼差しと声音に、ハジメは面倒そうにチラリと光輝を見ただけで何も答えない。その態度に、光輝がガタツ！　と音を立てて席を立ち、ハジメに敵意を漲らせる。

「なんとか言ったらどうなんだ！　お前が、もっと速く教えてくれていれば！」

「ちよつと、光輝！」

諫める雫の言葉も聞かず、いきなり立つ光輝にハジメは五月蠅そうに眉をひそめると、盛大に溜息を吐いて面倒くさそうな視線を光輝に向けた。

「俺がそれを言って、お前、信じたのかよ？」

「なんだと？」

「どうせ、思い込みとご都合解釈が大好きなお前のことだ。大多数の

人間が信じている神を？狂っている」と言われた挙句、お前のしていることは無意味だって俺から言われれば、信じないどころか、むしろ、俺を非難したんじゃないか？ その光景が目には浮かぶよ」

「だ、だけど、何度も説明してくれれば……」

「アホか。なんで俺が、わざわざお前等のために骨を折らなけりやならないんだよ？、まさか、俺がクラスメイトだから自分達に力を貸すのは当然とか思っていないよな？」

「でも、これから一緒に神と戦うなら……」

「待て待て、勇者（笑）。俺がいつ神と戦うと言ったよ？ 勝手に決め付けるな。向こうからやって来れば当然殺すが、自分からわざわざ探し出すつもりはないぞ？ 大迷宮を攻略して、さっさと日本に帰りたいからな」

その言葉に、光輝は目を大きく見開く。

「なっ、まさか、この世界の人達がどうなってもいいっていうのか！？ 神をどうにかしないと、これからも人々が弄ばれるんだぞ！ 放っておけるのか！」

「顔も知らない誰かのために振るえる力は、持ち合わせちゃいないな……」

「なんで……なんでだよっ！ 力があるのなら正しいことに使うべきじゃないか！」

光輝が吠える。いつもながら、実に正義感溢れる言葉だ。

しかし、そんな言葉は、確固たる意志のない者ならともかく、ハジメには届かない。

「……う？ 力があるなら」か。そんなだから、いつもお前は肝心なところで地面に這いつくばることになるんだよ。……俺はな、力はいつだって明確な意志のもとに振るわれるべきだと考えてる。力があるから何かを為すんじゃない。何かを為したいから力を求め、使うんだ。？ 力があるから意志に関係なくやらなきゃならないって言うんなら、それはもうきつと、ただの？ 呪い」だろう。お前は、その意志ってのが薄弱すぎるんだよ。……っていうか、お前と俺の行く道について議論する気はないんだ。これ以上食って掛かるなら面倒い

らマジでぶっ飛ばすぞ」

ハジメはそれだけ言うと、光輝達に興味ないということを示すように視線を戻してしまった。その態度からハジメは本当にこの世界に興味がないことを理解させられた光輝。そしてハジメに続くように浩二が口を開いた。

「光輝。南雲には南雲の目的があつてそれは南雲にしかできないことだ。上手く行けば元の世界に帰れる方法がわかるかもしれない。それと光輝、神と戦うって言っていたけど今のお前じゃその使徒にすら倒せない」

「どういう意味だ？」

「言葉通りだ。今の光輝達は神の使徒の足元にも及ばない。戦えば確実に殺される」

「そんなのやってみないとわからないだろう！」

「いいえ、光輝。浩二の言う通りだわ」

「雫！」

「……悔しいけど浩二の言っているのは真実よ。私でさえ手も足も出ずに負けたわ。それも手加減された状態でね。ステータスの数値だけで言えば恐らくは私達の十倍以上だと思っていた方がいいわ」

悔し気にそれでも客観的に神の使徒がどれだけ強くて恐ろしい存在なのかを語る雫の言葉に殆どの人が顔を青くするのも無理はない。雫でも勝てない相手にどう戦えばいいのか、死に行くようなものだ。

「だけど……」

「それでも浩二でも勝てたんだろ？ なら俺達だって負ける筈がない！」

？浩二でも。明らかに浩二を見下しているその発言は悪気があるわけではなく光輝は無意識に言っている。相変わらずの光輝に溜息が出る浩二だが、浩二を慕っているティニアとエフェルは当然いい顔はしなかった。惚れた男を侮辱されて怒らない女はいない。この場でボコボコにしてやろうかと考えるもそれを察した浩二がそれを止めた。流石に光輝が死ぬとそう思つて。そこへハジメが再び視線

を光輝に向けた。

「おい、天之河。お前、マジでいい加減にしろよ?」

僅かばかりに怒りが込められた視線に光輝は一瞬怯むもハジメの言葉が理解出来ずに怪訝する。

「?浩二でも」 ってまるで自分が平野よりも強いのは当然みたいな言い方をしているがな、平野は俺なんかよりもずっと強い覚悟と強さを持つてる。少なくともお前が侮辱していい相手じゃねえんだよ」

まさかハジメからそんなことを言われるとは思わなかった浩二は驚きを隠せれなかった。しかしハジメはそれだけ浩二のことを認めており、強いライバル意識を持っている。共に全力を出し切り、戦った相手だからこそその相手が侮辱されたから我慢できずに口を出した。

「だけど光輝は納得できない、認めたくない子供のようには吠える。

「なら俺が浩二に勝てばいいその神の使徒より強いってことだな!

それなら浩二と戦ってそれを証明してやる!」

こうして光輝と浩二の戦いの幕が開くのであった。

主人公13

場所を変えて訓練場へとやってくるとこれから戦う光輝と浩二の二人が訓練場の中心になって他の皆は端でこれから行われる二人の戦いを見守っている。そのなかで雫は心配そうにオロオロとしている。

「落ち着けよ、八重樫。別に殺し合うわけじゃねえんだから」

「そ、それはそうでしょうけど……というか南雲くんがあんなことを言ったからこうなったのよ?」

二人が戦うことになった発端はハジメにあるもハジメは悪びれもなく言う。

「そりやどこぞの勇者(笑)様と違って俺は平野のことを認めているからな。認めた相手が馬鹿にされたら怒るだろ?」

「それはそうだけど……というよりも南雲くんはどうして浩二のことを認めているの?」

「殺し合った仲だからな」

「嫌な関係ね……」

どうしてそうなった? と問い詰めた雫であったが浩二の事を認めてくれている人がいるというのは嬉しいという気持ちもある。その関係性については気にはなるも。

「平野の強さも覚悟も本物だ。八重樫、お前はいい男に惚れられたもんだな」

「——っ」

悪戯笑みを浮かべて告げるハジメに雫は顔を赤くする。ハジメは既に浩二が雫に惚れているという事は承知済み。浩二はもうそれを隠すのは止めているからこれをネタに揶揄えないが、雫の反応を見て愉快と言わんばかりに笑うハジメさんだった。

「ま、心配すんな。結果はもうわかっていているからな」

何も心配していないかのように告げるハジメを置いて二人の戦いが始まった。

「行くぞ!」

聖剣を持って突撃する光輝。？縮地”で一気に距離を詰めて聖剣を振るう光輝だが、流れるような一連の動作で聖剣は受け流されて光輝の腹部に攻撃は入る。

「ぐっ！」

痛みはあるも傷はない。浩二が手に持つ刀は逆向き、峰打ちされたことに光輝は激情する。

「ふざけているのか、浩二！」

「……」

手加減されていると思い、文句を投げる光輝だけど浩二は何も答えない。ただ黙って刀を構える。それがまた光輝の神経を逆なでさせる。

聖剣に光を纏わせて攻撃を繰り返す光輝の連撃。しかし、その攻撃は浩二にはかすりもしないどころか振るう度に光輝の体に攻撃を受ける。

冷静に淡々と刀を振るう浩二に光輝は戦慄する。これが本当に自分の知っている浩二なのかと、まるで別人のように感じられる。明らかに手加減されている光輝は歯を強く噛み締める。

「刃の如き意志よ、光に宿りて敵を切り裂け——？光刃”！」

聖剣に光の刃を付加させて袈裟斬りするも簡単に避けられる。それでも光輝はまるで意地になっているかのように攻撃の手を緩めなかった。

「万翔羽ばたき、天へと至れ、？天翔閃”！」

曲線状の光の斬撃が轟音を響かせながら浩二に放たれるもそれら？分解”を付与させた刀を一閃することで消滅する。そこで浩二が重い口を開いた。

「……光輝。お前、今まで何をしてきたんだ？」

「どういう意味だ!? 俺を馬鹿にしているのか!？」

「違う。今のお前の動き、何もかも滅茶苦茶だ。太刀筋も踏み込みも元々雫の道場で教わった剣術までもできちやいない。剣筋も派手さばかり追求して大雑把だし、ハッキリ言っこの世界に召喚される前のお前の方が強かったぞ」

まるで自分が目立つかのような動きに身に付けてきた技術を生かし切れていない。そのことに忠告する浩二だけど光輝からはこの世界の人々の為にしてきた自分の努力を否定されているように聞こえた。

「うるさい！ 本番はここからだ！ ? 限界突破”!!」

光輝の? 限界突破”の宣言と共に、その体を純白の光が包み込む。

魔力を消費しながら一時的に基礎ステータスの三倍の力を得る技能。限界を突破した力で浩二を圧倒しようと聖剣を振るう。

「――? 天翔剣四翼”！」

振るわれる聖剣から曲線を描く光の斬撃が飛翔する。? 限界突破”により強化された光輝の十八番だが、浩二はそれを避けることなく先ほどと同じように? 分解”を付与させた刀を振るうことで消滅させる。

「まだまだ!!」

己の限界を突破した力で浩二に攻撃をするも二人の力量はもう一目瞭然。圧倒的なまでの力の差を前にしても光輝は怯むことなくだ我武者羅に聖剣を振るっている。

しかし、限界を突破した力を発動させているのに先ほどと何も変わらない。光輝の攻撃は躲されるか、受け流されて浩二の攻撃は吸い込まれるように光輝に当たっていく。

「っ!?!」

光輝は目の前に起きている現実が信じられなかった。未知の相手ならともかく自分が相手にしているのは幼少の頃から付き合いのある浩二。試合では一度も負けたことのない幼馴染相手にどうして勝てないのか? そんな疑問と? 限界突破”の制限時間が迫る焦りで光輝の攻撃は更に雑になる。

「あああああああああああああああああああああつ!!」

吠える光輝。我武者羅に聖剣を振るうその姿はまるで自分の思い通りにならないことに癩癩を起こしている子供のようにも、信じられない現実から目を逸らそうと見える。

その姿にクラスメイトだけではない同じ幼馴染である龍太郎、香

織、雫でさえもなんとも言えない哀れむような寂しいような眼差しを向けている。

そしてあつという間に？限界突破”のタイムリミットが訪れて弱体化してしまう光輝は倦怠感に襲われて、本来の力の半分程度しか力を発揮できなくなる。

「もういいだろう？　光輝」

「くっ！」

首元に刃を突きつける浩二に光輝は苦悶の顔を作る。そして光輝は嫉妬、猜疑、恐怖、自負、反感、焦燥といった様々な負の感情が込められた瞳を浩二に向けながら言った。

「なんで……なんで隠していた!?　それだけの強さを隠す意味がどこにあるんだ!?!」

「……?　ああ、そういうこと」

何を言ってるんだ？　こいつみたいな顔を作る浩二だけどころに光輝の言っている意味を察した。どうやら光輝は浩二はずっと実力を隠していたと思ひ込んでいるのだろう。

「隠していたつもりはないぞ、光輝。これが今の俺の実力だということだ。お前等から離れるまではこんな風に勝つことなんてできなかっただろうな」

「嘘をつくな！　こんなはずは、こんな筈はないんだ！　俺はお前が出て行ってからもずっと訓練を続けてきた！　毎日、動けなくなるまで必死に努力してきたんだ!」

「だろうな。お前はそういう奴だもんな。そういうところは昔から尊敬している。お前は天才でも努力を怠るような奴じゃなかった。けどな、光輝。一つ質問させてくれ。お前はどうしてそんなに頑張っているんだ?」

意味深の質問に光輝は一瞬怪訝の表情を浮かべるもすぐに答えた。「その狂った神からこの世界の人達を守る為だ！　力は正しいことに使うべきだ!」

「力は正しいことに使うのが当然だというのならお前の?意志”はどこにあるんだ?」

「……意志？」

「困っている人を助ける。迷いもなくそれを為そうとするお前は素直に凄いと思ってる。だけどそこに天之河光輝という人間の意志はあるのか？ その為に何かを捨てる覚悟も失う覚悟もお前にはあるのか？」

「そんなの——」

あるに決まっている。そう言おうとするも言葉に出ない。

「当たり前前を当たり前にするという行為は普通はできない。だから正しくあろうとするお前は冗談抜きで凄いと思ってるし、幼馴染として誇らしいとも思ってる。けどな、？力”も？強さ”も何かを為そうとする？意志”の後についてくるものだ。間違ってもその逆じゃない」

「うるさい！ そんなこと言われなくてもわかってる！」

「？限界突破”の副作用で弱体化しているにも関わらず聖剣を振るってくる光輝に浩二は言葉を続ける。

「力があるから誰かを救うのではなく誰かを救いたいから力を求めるとはまるで違う。光輝、それだからお前の剣は軽いんだ。そこにお前の？意志”がないから」

「黙れ！ 俺は本気でこの世界を救おうと——」

「しているか……。それなら光輝、お前はここで？敗北”を知れ」

刹那、聖剣は宙を舞い、光輝は地面に倒れ込む。

瞬く間のような一瞬で攻撃。雫ですら視認することができなくなった。そして多くの者が間抜けな顔になるなかで刀を鞘に収める浩二はまだ意識のある光輝に告げる。

「敗北を知って挫折して自分がどうあるべきか一度考えてこい。挫折することで見えてくることもある」

今の光輝に最も足りないもの、それは？敗北”。高すぎるスペックが、現実の壁を理想通りに乗り越えさせてしまった。それ故に失敗も挫折もなく、あらゆる局面を自らの力で押し通せてしまった。そのせいで光輝は己の正しさを疑うことをしなくなった。だから幼馴染として同じ雫の道場の門下生——家族として光輝の為に敗北を与え

た。

「ここから新たに成長することを願って。

「それでも認めないというのなら何度でも挑みにこい。逃げずに受けてやる」

その言葉を耳にして光輝は意識を失った。

「？勇者」の敗北。それも天職が？医療師”である浩二に負けた。辛勝ではなく圧倒的なまでの実力差を見せつけるかのようなその戦い方に殆どの人が自分の目を疑った。

光輝は強い。光輝のことをよく思わない永山達でもそれは共通の認識だ。だがその光輝に傷一つ負うこともなく完全勝利を収めた。

雫も改めて浩二の実力を目の当たりにして驚く。その隣で初めからこうなることがわかっていたハジメは「俺の言った通りだろ？」と言うも雫の耳には届かなかった。

主人公14

光輝と浩二の戦いの後でリリアーナはハジメに王都の防衛態勢が整うまで滞在を求めるとハジメはそれを拒否するも大結界の修理だけは了承した。

そして今回の一件で己の力不足を痛感した雫達は神代魔法を手に入れる為に大迷宮への同行を求めた。これは浩二の口添えもあってハジメはあつさり承諾したのだが、腹の中では光輝達を肉壁兼囮扱いにしようとする企みもあつたがそこはスルー。

そうしてハジメが大結界の修復に向かっている少しの間でも強くなるように早速訓練に励んでいる。

特に龍太郎と鈴は死に物狂いと言つていいほどに必死だ。

「うん、やっぱり改造……？ 魔力操作”を覚えようか」

その指導役兼訓練相手として訓練に励んでいる龍太郎達を見て浩二はそう言った。

「今、改造つて聞こえたんだけど鈴の気のせい……？」

「安心しろ、鈴。浩二に限ってそれはねえ」

改造するなら改造する。例えそれがクラスメイトだろうと幼馴染だろうとも変わりない。そんな龍太郎の発言を気にも止めずに浩二は説明を続ける。

「？ 魔力操作”はその名の通り魔力を直接操作するから詠唱も魔法陣も必要ない。これからの戦闘を考慮するならそっちの方がいいだろう？」

「でもそれって魔物の力じゃ……あ、だから浩二くんとカオリンはあんなにすぐに魔法を発動することができたのか」

ほぼ無詠唱で魔法を発動させて勇者パーティーを支えてきた浩二と香織だが、ほぼ無詠唱ではなく無詠唱だったから魔法の発動速度が他の比べて異様に早かったことに鈴は気づいた。

「鈴の言う通り魔力を直接操作することができるのは魔物だけだ。俺は自分を改造してその技能を手に入れたが魔物の力を持つ人間というところが他の人達、特に教会に知られたら厄介だったから隠してい

た。とはいえもう隠す必要もない。むしろこれからのことを考えれば必要な技能だとは思ってる。特に鈴、？結界師”であるお前には必要な技能だろう？」

「……うん」

天職？結界師”。守りを生業とする者として結界の発動速度は自分だけではなく守る者達にも影響を与えてしまう。いちいち詠唱して発動するよりも魔力を直接操作して発動させた早いし効率もいい。そこで浩二が「ちなみに……」と言って。

「既に光輝はその技能を獲得して俺と訓練しているぞ」

浩二が指す方向には光輝ともう一人の浩二と模擬戦を行っていた。「クソッ！」

「甘いぞ、光輝！ この浩二αも倒せないようならオリジナルの俺には到底勝てないぞ！」

「うるさいー！」

刀と聖剣を交えながら戦っているもう一人の浩二αの正体は浩二が？魂魄魔法”を手に入れて生み出した真正銘もう一人の浩二だ。

再生・魂魄複合魔法？クローン”

自らの肉体の一部を切り離して再生魔法を施して肉体だけを再生させて魂魄魔法で己の魂の複製させて義魂として定着させることでもう一人の自分自身を作り出す魔法。

肉体構造を細部まで知り尽くし、再生魔法と魂魄魔法に高い適正を持っている浩二だからこそできる浩二オリジナル魔法だ。

肉体と魂を複製させた複製体は複製した分だけステータスが弱体化してしまう欠点や魔力の消耗率が高い為に今の浩二の魔力では最大二体までしか生み出せないというところだ。

そうして生まれた浩二αと剣を交えながら？魔力操作”の訓練をしている光輝を見て龍太郎達は意外そうな顔をしている。

「……浩二。いったいどうやって光輝を言い包めたんだ？」

「妥協するようには言っただけだ」

事実、浩二は光輝が目覚めてすぐに？魔力操作”の獲得について話した。だが案の定、光輝はそれを拒否したのだが。

『自分に勝った相手から力を貰うのは受け入れがたいことぐらいはわかる。だけど光輝、それは力であることには変わりない筈だろ？ お前が本当にこの世界の人達を守りたいのならその力を掴め。その上で自分の正しさを証明してみせろ』

暗に変に意地を張らずに力を得る為に妥協しろ、と言った浩二さん。そして光輝は己の無力さと敗北した悔しさを噛み締めながら自分の正しさを証明する為に浩二と戦っている。

今の光輝の心境はどうであれ、強くなろうとしているのは確かだ。後は上手い具合に誘導すれば浩二に敗北する前の光輝よりマシにはなるだろう。

(今のところはまだ現実を受け入れがたい部分が強いけど……負けずと俺に食らいつついる所を見ると改善の余地は生まれたみたいだな)

それが単に自分に勝って浩二のことが気に入らなくても、自分の方が正しいと疑っていなくても負けずに浩二αに勝とうとしている姿勢を見れば一歩ぐらいは前進したと思いたい。

(まあ、光輝に関しては今後も経過観察しながら考えて行くか……最悪、記憶と精神を改造させて綺麗な光輝にすればいいし)

さりげなくとんでもないことを考えていた浩二。すると空からまた衝突音が轟いた。顔を上げて空を見上げればそこにいるのは思わず見惚れてしまうような二人の天使。

銀が混じった白董色の翼と瑠璃色の翼を羽ばたかせているのは香織と雫。神の使徒を材料に浩二が？改造して神の使徒と同等の力を手に入れた二人はその力を扱えるように空中で訓練している。監督役としてティニアを連れて。

「行くよ！ 雫ちゃん！」

「ええ！ いつでもいいわよ！」

それはもう新しい玩具を手に入れた子供のように分解砲撃を撃つ香織とその砲撃を雫は分解を付与した黒刀で斬り裂いた。

二大女神ここに降臨！

日本、学校で二大女神と言われ男女問わずに人気を誇る二人の美少

女はトータスに召喚されて、正確には浩二の手によって本当の女神のようになつた。そんな二人を崇める人は少なくない……。自称雫の義妹であるソウルシスターズは天使姿の雫を見て鼻血が噴き出て満面な笑顔のまま倒れたのは言うまでもない。ちなみに元となつた素材は香織はノイントで雫はドリットである。

「二人共凄えよな……。ここからでもとんでもねえプレッシャーを感じるぞ」

「うん、でも鈴達も戦うかもしれない相手だもんね」

敵意を向けられていなくてもそこにいるだけで冷汗が止まらない。本物なら冷汗だけでは済まないかもしれない。そこで鈴が……。

「ところで浩二くん。どうしてあの二人に……？」

劇的にパワーアップできる方法と言えば方法だけどそれをどうして香織と雫に改造して施したのか鈴はそれを率直に浩二に問いかけた。

「香織は元からそういう約束をしていたからな。それに香織自身それを望んでいたし、雫は初めは拒んだけど俺と香織が説得させた」

というよりも主に香織の突撃という名の説得に雫が圧倒されて「わかった！ わかったから！ 香織の言う通りにするから！」と気がつけば首を縦に振っていたの方が正しい。香織ナイス！

「それにあの二人と光輝にしか適性がなかったからな……」

魔法のように？改造”によって取り込める素材にも相性や適性が存在する。適性がなければ多少ステータスに加算されるだけで技能は獲得することができない。以前、浩二がハジメの血液と魔石をブレンドした薬を飲んでも？錬成”を獲得できなかったのは適性が低かったからだ。そして香織と雫それと光輝は神の使徒との適性が高く、？改造”によって香織と雫を強化させた。光輝にしかったのは下手に力を与えて暴走することを防ぐ為でもある。今の光輝に必要なのは精神面の強化だ。使徒の力は必要ない。

「まあ、戦力強化できたいいいかな。それでどうする？ ？魔力操作”を覚える気はあるか？」

「応ッ！ 皆強くなつてんだ！ これ以上遅れるわけにはいかねえ

！」

「鈴もお願い！ もっと強くなって恵理と話をしたい！」

二人の覚悟は本物。それならばそれを浩二が拒む理由はない。浩二は二人に？改造”を施して？魔力操作”の技能を獲得させた。今の浩二なら触れただけで？改造”を施して？魔力操作”の技能を獲得させるなど朝飯前だ。

「おお、なんか不思議な感覚だな……」

「うん、今までと違うから慣れるまで苦労するかも……」

これまで詠唱と魔法陣で戦ってきた二人は魔力を直接操作する？

魔力操作”の扱いに戸惑いを覚えるもそこは慣れて貰うしかない。

「時間もないし、二人同時に相手をするからかかってこい」

「応ッ！」

「うん！」

今よりも強くなる為に二人は訓練を始める。

主人公15

強くなる為に光輝達を鍛えている浩二達は一休憩する為に食堂に足を運ぶとハジメ達がいた。ハジメはチラリと見るだけで興味がないかのように視線を外すもクラスメイト達の方はそうはいかない。ハジメに対して複雑な心境を抱きながらチラチラと視線を向けている。

「ハジメくん！ 隣いいかな？」

「ああ、別に構わねえよ」

香織を筆頭に浩二達も普通にハジメ達に歩み寄って近くに座る。するとハジメは浩二達に尋ねる。

「それでどうなんだ？」

「取りあえず大迷宮に挑むメンバーには？ 魔力操作”を獲得させた。今はまだ慣れない力に戸惑っているみたいだけど問題はないだろう」

「応ッ！ だいぶコツも掴んできたぜ！」

「鈴も結界の発動速度が上がったんだからね！」

龍太郎も鈴も新しい力にだいぶ慣れてきたようだ。

「う〜くん、私はまだ慣れないかな……」

「ええ、自分でも思っていたより制御が難しいことがわかったわ」

龍太郎や鈴とは逆に神の使徒の力を手に入れた香織と雫はまだ慣れない力に戸惑いを覚えているようだ。それでも能力的にはハジメ達と肩を並べるのでこれからだ。

「勇者はどうした？」

「光輝はまだ訓練場で俺と訓練している。よっぼど俺に負けたのが悔しかったんだろうな」

休憩を挟みながらとはいえ、ぶっ続けで模擬戦を繰り返している。そんな光輝に思うことはあっても口にするのではなく浩二αは相手をしている。そんな浩二にハジメが思わず言う。

「八重樫もそうだが、お前もよくあんな勇者の面倒がみれるよなあ？
いくら幼馴染でもどうかと思うぞ？」

最もな言葉に浩二と雫は困った顔で肩を竦めた。

「まあ、身内だからな」

「ええ、見捨てたりできないわよ」

香織と龍太郎以外の頭上に?? が浮かんだ。

「雫の道場というより八重樫流の正式な門下生は？家族」として扱われているんだ」

八重樫流——地元にも古くから根ざしている剣術道場だ。一般向けの剣道教室とは区別されていて、警備会社や警察関係者への武術指南などもしている業界では名の通った流派である。門下生になれる者は限られていて、逆に、一度入門すれば、八重樫家は彼等を？身内“と見なす。

——家族は、決して家族を見捨てない。見捨てないからこそ家族なのだ

数ある八重樫流の教えで雫と浩二が最も大事にしている。

ちなみに光輝は母親で浩二は父親が元は八重樫流の門下生であり、その伝手で入門が許可された。

(忘れねえ……。父さんの伝手で道場に入門した時の師範の顔は……)

それはもうしごいてやろうといい顔をしていた。そしてその通りにしごかれた浩二さんであった。

「そんなわけでいくらかあいつがムカつくぐらいのイケメンクソリア充野郎でも、ケツ、地獄に落ちやがれと思うほどの憎たらしいクソガキでもこの機会にちよつとボコボコにしてそのイケメン面を整形させてやろうかと考えていても放っておくことはできねえよ」

「……浩二。光輝のことそんな風に思っていたの？」

「浩二くん……」

「浩二……」

幼馴染達からジト目を向けられるも浩二さんは華麗にスルーする。

「ま、俺にとって光輝は？優秀だけど面倒な弟”ってところだ」

同級生に弟扱いされる勇者とは……。

「浩二様、どうぞぞ」

「ああ、ありがとう」

香織と雫の監督役を務めていたティニアが浩二に食事を用意してくれてティオと行動していたエフェルとイリエが移動して浩二の隣に座る。すると浩二がイリエに言う。

「それでどうだった？ 話せたのか？」

既にエフェルから魔族の侵攻の際にフリードと話をしたということは聞いている。けど浩二は本人の口から直接聞きたい為にそう尋ねた。

「……あたしの言葉は届かなかった。けど」

イリエは結論から告げた。

父親を神敵として殺したフリードの真意を確かめる為にフリードと出会ったイリエだがフリードの答えは変わらなかった。いくら魔族の未来のことを考えて欲しいと訴えてもフリードは神の為に戦うと断言した。

「あたしは父が為そうしていたことをあたしが為す。その為に戦うと決めた」

フリードが神の為に戦うというのならイリエは父親が最後まで胸に抱いていた理想——？ 魔族の未来”の為に戦うことを決意した。父親の後を継ぐ、それがイリエの答えだ。

「その為にもあたしはまだまだ強くないといけない。だから浩二、これからもよろしく」

「ああ」

その瞳は完全に迷いが消えていた。どうやら色々と吹っ切れたようだ。

「……」

そんなイリエをティニアとエフェルは見るも特に口を挟むつもりはなかった。

「浩二様。お口を開けてください」

「旦那様。あくんしてください」

「……片方ずつにしてくれ」

食事を食べさせようとフォークを差し出す二人に流石に二人同時は無理なので片方ずつ食べる浩二。その近くではハジメはユエとシ

アにあくんをさかれていて香織とティオも慌てて料理にフォークを突き刺す。

ハジメと浩二の二人を中心に桃色結界が発動されて零達は居心地悪そうにしていた。他のクラスメイト達からは女子からは好奇心の眼差しを、男子からは嫉妬と羨望の眼差しを向けられるが二人は揃ってスルーする。

二人共？絶世の”と称しても過言ではない美女・美少女達に囲まれているので無理はない。シアのようなウサミミ少女はオタク的な趣味を持っていなくても男心を的確にくすぐられるが、綺麗なメイドさんにあくんされたり、美女から？旦那様”と呼ばれたのも男の願望の一つであろう。

見た目や強さもそうだけど王都から出て行ってから色々と変わった浩二に色々と秘訣を聞き出したい。特にモテる秘訣を。

「……変態」

「!? ち、違うよ！ なんてこと言うの！ わ、私は普通に食事しているだけだし！」

「……と言いつつ、ハジメ味を堪能」

「し、してないってば！ だ、大体、そんなこと言ったらティオこそ変態でしょ！ ほら、こんなに堂々とフォークを舐めてるんだよ！」

「レロレロレロ、んむ？」

「ティオ様！ そのような品性の無いことはおやめください！ 私まで恥ずかしいです！」

変態に変わり果てた竜人族の姫の品性の無い変態的行動に羞恥心で顔を赤くしながら声を荒げるも、ティオは不満そうに唇を尖らせる。

「むう、仕方なからう。……ご主人様は未だに妾と口づけしてくれんし、こういうときに堪能しておかねば、欲求不満になるんじゃない」

「だからといって仮にも姫という方が恥もなくそのようなことを……」

「エフェル。妾は知っているのじゃぞ。浩二に毎晩のように愛でられておるということを。そんなお主に妾が言えることは一つ。羨まし

いのじや!!」

「そのような本音は聞きたくありませんでした!!」

尊敬していた竜人族の姫が一人の男——南雲ハジメとの出会いによって変態になってしまったことにエフェルはまだシヨックが抜け落ちておらず、浩二に慰めて貰っている。ティオの変態化はエフェルの心に深い傷を与えた。

シクシクと愛する人の胸で泣くエフェルをよしよしと今日もまた浩二が慰める。

「平野、医者ならこの精神患者を引き取って治療してくれ」

「ティオの変態化は南雲が原因なんだから責任取って最後まで面倒みてやれ」

正論である。

「そうじや! ご主人様よ! ご褒美を未だもらっていないのじや!

妾は、約束のご褒美を所望するぞ!」

「あ? ご褒美だあ?」

何のことかと思っていると、どうやら総本山で愛子を預けた時に最後まで愛子が無事ならご褒美を与えると約束したらしい。それでティオがハジメに望むご褒美はというと……。

「安心せよ、無茶なことは言わんよ。なくに、ちよつと初めて会ったときのように……妾のお尻をいじめて欲しいだけじや」

両頬を手で挟んでとんでもない要望を伝える。それによりユエ達以外の全ての人間が激しく動揺し、ハジメに向けられる眼差しが、どこか犯罪者を見るような目になっている。

そして更に涙を流すエフェルに魂魄魔法で精神力の回復・安定化を行う。

「却下だ、この駄竜が。著しく誤解を招くような発言をサラリとしてんじやねえよ」

「な、なぜじや! 無茶な要求ではなからう! あのときののように、黒くて硬くて太い棒で妾のお尻を貫いて欲しいだけじや! 早く抜いてと懇願する妾を無視して、何度もグリグリしたあのときのように!

情け容赦なく妾のお尻をいじめて欲しいだけなのじや!」

「だから！ いちいち誤解を招く言い方してんじやねえよ！」

ハジメに向けられる眼差しが、どこか悪魔を見るような目になっていた。そして残念なことに事実である為にこの場にハジメの味方はいなかった。とはいえ、このままではエフェルの精神に影響が及ぶ可能性があるので浩二が口を挟む。

「二人の変態的プレイはともかくティオ、少しはエフェルのことも考えてやれ。お前のせいで号泣してるんだから。最近なんて胃薬まで服用しているんだぞ？」

「うう……」

「南雲もティオがこうなったのはお前なんだから甘んじて受け入れろ」

「ぐっ……」

「それができないのならできるまで説教するけど、どうする？」

エフェルを慰めながら凄みのある笑顔を向ける。その笑顔を見て幼馴染達は「あ、説教モードだ……」だと呟いた。経験したことのある幼馴染達からしたら雫の説教よりもきついようだ。

「……う、うむ。ご主人様よ。添い寝でどうかのう？ 妾は未だ一度も、ご主人様のすぐ隣で眠ったことがないのじゃ」

「あ、ああ……それぐらいならお安い御用だ」

互いに妥協して頷き合いこの話は終わった。今の浩二には逆らえないと本能が悟ったのだろう。浩二も二人を見て再びエフェルを慰めることに意識を向ける。

その光景に殆どの人が浩二に尊敬の眼差しを向ける。悪魔のようなハジメに反省という二文字を与えることができるのは浩二ぐらいだろう。しかし、それはそれとして自分の胸で美女を慰めている浩二に若干嫉妬と羨望の眼差しが強くなったが浩二はスルーする。

「……」

雫はそんな浩二をじつと見つめる。

浩二は変わった。それは浩二自身が言っていたことで雫から見ても浩二は変わっていると思っっている。見た目や強さだけではなく雰囲気までも以前の浩二とは異なるところが多い。雫自身、再会した時

は浩二だとはすぐに認識することができなかつたぐらいだ。

(本当に変わったのね……)

改めて浩二の変化を実感する雫は複雑な心境になる。

「雫様」

「っ!? ティニアさん……?」

不意に耳元で囁くように呼ばれた雫は驚く。そしてティニアは雫に忠告する。

「雫様ももう少し我儘になるべきですよ。そんな貴女様を喜んで受け入れてくれる人がいるのですから」

「え? それはどういう……」

「急ぎませんと浩二様の? 特別」の席を私が奪う、という意味です」
「!？」

それは忠告であり、宣戦布告でもあった。

浩二にとって? 特別”は雫だ。だが、だからといってその席をティニアが諦めたわけではない。今でも虎視眈々と狙っている。だが、何も伝えずに一方的に奪うのは気が引けたら宣戦布告も兼ねて忠告したに過ぎない。

「ふふ。では失礼」

最後に少しだけ微笑みを残して浩二の元に戻るティニア。その微笑みは挑戦的な微笑みでもあり、私は貴女よりも浩二の傍にいるという余裕の表れでもある。

(雫様が)自身の気持ちに気づくかはどうかはわかりませんが、まあ、その時は私が浩二様を貰うだけです)

ティニアは浩二が複数の女性と関係を結ぶことに関して否定しない。むしろ推奨する。浩二にはもっと大切な人を増やして欲しいとさえ願っている。だけど? 特別”は違う。

雫が何もしなければ浩二の? 特別”を自分が奪う。ただそれだけだ。これ以上わざわざ一番の恋敵ライバルに手を貸す理由はない。所詮はその程度だったと見切りをつけるだけだ。

主人公16

ハジメ達と王都を出る前に浩二はある場所へ足を運んでいた。

王宮の敷地内にある【神山】の岩壁を利用して作られた巨大な忠霊塔。その忠霊塔には今回の騒動で亡くなった多くの人々の遺品や献花が置かれている。

未だ、戦死者の確認中で忠霊塔に名は刻まれていないが、メルド团长もここに名を連ねることになる。浩二は花束を献花台に置いて両手を合わせる。

今の浩二の胸に渦巻くのは悔恨と自責の念。もしかしたらメルドを含めて多くの人が死なずに済んだかもしれないという？IF”の考え。恵理のことを誰かに話していたら、メルドに忠告していたら、自分が王宮に残っていたら何かが変わっていたかもしれない。もちろんそれは全て？IF”でありもう変えることのできない過去である。今更後悔しようとも自責の念に苛まれようともどうすることもできない。

出来ることと言えばこうして冥府へ旅立った者達に冥福を祈るところぐらいだ。

「……」

数分後、浩二は祈りを捧げると何も告げることなく踵を返した。

悔恨も自責も後悔もある。だけど、いや、だからこそここで足を止めるわけにはいかない。まだやるべきことが残っている。守るべき人がいる。その為にも浩二は今よりも強くならなければいけない。

少なくとも今は過去に振り返る余裕はない。

浩二はハジメ達がいる場所に向かう道中で愛子と？投術師”の園部優花と遭遇した。

「先生、それに園部も……どうした？」

一瞬、浩二と同じ墓参りかと思えば二人の表情からそれは違うと察した浩二は尋ねると愛子が口を開いた。

「平野くん、残って貰えないでしょうか……？ 王都にはまだ平野くんのような人が必要なんです」

ハジメ達と共に大迷宮攻略を目指すのではなく、愛子は浩二に優花や永山パーティーと共に残って貰えないかと懇願した。その懇願に一瞬驚くも浩二はすぐに愛子の意図を察した。

もちろん王都復興の為に王都に住む人々の為に天職が？医療師“である浩二に残って欲しいという期待もあるのだろう。だがそれ以上に愛子は浩二を心配してくれている。

魔族を殺して一人王都を去った浩二。愛子はそのことに何の力にもなれなかったことに後悔していた。だから今度は生徒である浩二を支えたいと思い、王都に残って貰えるように懇願している。

それは間違いなく浩二の為を思つての懇願だろう。だけど浩二の答えは変わらない。

「すみません。それはできません」

浩二はその懇願を断つた。

「王都復興の為に医者が必要だとは思いますが、南雲達が向かう大迷宮は誰が死んでもおかしくはない危険な場所です。あいつらの為にも、そして俺自身の為にも俺は行きます」

「そう、ですか……」

浩二の意思の固さは本物だとわかると愛子は肩を落とす。先生として生徒の力になれないことに少なからずのショックがあるのだろう。それには申し訳ないと思うも浩二にも譲れないことがある。

そこに優花が……。

「平野くん。その、ありがとね。私達のことを守ってくれて」

「……何の話だ？」

「あの後、先生から聞いたんだけど平野くん、戦争に参加させようと催促してくる聖教協会から戦えなくなった私達を守ってくれていたって」

「ああ、だけどそれは先生も同じだろ？」

「それでも薬も作ってくれたし、支えてくれた。だから私達はもう大丈夫。代わりに南雲達のことをお願い」

「……ああ、任せろ」

もう大丈夫だとその顔は告げていた。それならもう優花達に医者

は必要ない。浩二は二人と話を終えて廊下を歩いていると。

「平野」

「永山……それに野村も……」

今度は永山パーティーと遭遇した。よく遭遇するなと思つていと突然永山達は浩二に頭を下げてきた。

「すまない。助けてくれたのにお前を避けるようなことをしてしまった。どうか謝らせてくれ」

永山達は魔族の女を殺した浩二とどう接すればいいのかわからずに避けるように距離を取っていた。永山達はそのことに謝罪を口にする。

「別に気にしてないから安心しろ。いきなりあんなところをみたら誰だつてどうすればいいかわからなくなるのは当然だ。永山達は当然の反応をしただけだから気にするな」

「……すまない。ありがとう」

謝罪と感謝の言葉を口にする永山。浩二は律儀だなと思しながら足を動かさそうとした時、永山が口を開いた。

「……平野。お前にこんなことを頼むのはどうかとは思うが、天之河に代わつて俺達のリーダーを務めてくれないだろうか？」

「えっ？」

それを聞いて浩二は思わず足を止める。すると永山に続けて野村が言う。

「お前の事を避けていた俺達がこんなことを言うのもどうかとは思つてる。けど俺達はもう天之河と一緒に戦いたくねえ」

「平野くんが私達の事をよく思っていないかもしれないし、私達がこんなことを言うのも嫌なのかもしれない」

「それでも私達は話し合つて決めたの。あの時、誰よりも戦う覚悟を抱いていた平野くんリーダーをお願いしようつて」

それが永山パーティーが話し合つて決めた結論だ。

光輝とはもう共に戦いたくない永山パーティー。だけど自分達だけでは難しいこともある。だから自分達を引っ張ってくれるリーダー的存在が永山パーティーには必要だった。それで話し合いの末

に浩二が選ばれた。

「できることなら王都に残って欲しいが、無理強いはしない。いざという時に天之河の代わりに戦闘の指揮を平野に任せたい。お前なら俺達も安心して戦える」

元々後方支援で天職が？医療師”である浩二。それに勇者パーティーにいたところは中衛も務めていて魔族の女との戦闘の際は的確な指示を出して撤退した。無謀にもその場で魔族の女を倒そうとしていた光輝とは違って浩二なら自分達の命を預けられるとそう判断して。

だから浩二は永山達に言った。

「悪いけど、それはできない」

申し訳なさそうに浩二は永山達のリーダーになることを断った。

「皆が光輝のことを信用できないのはよくわかる。あいつは現実に目を向けずに理想にしか目に向けないクソガキで変に高スペックでカリスマ性もあるから自分の正しさを疑うことをしなくなった甘ったれだけだ」

いや、そこまで思っていない。と永山達は思った。

もしかしたら光輝に対して一番色々と溜め込んでいるのは浩二なのかもしれない。

「だけど、正しくあろうとするあいつの心は何も間違っていない。現実がどういふものなのかを知らずに育っただけのただの無知な子供なんだ」

まるで出来の悪い息子を持つ父親のように肩を竦めながら浩二は言う。

「子供のように癩癩を起こす光輝のことが信用できないのはわかる。その上で言わせてくれ。もう少しだけあの馬鹿こウキのことを信じてやって欲しい。頼む」

頭を下げて永山達にそう頼み込む。それには流石の永山達も驚きを隠せれなかった。

「あの馬鹿こウキは俺がきちんと矯正させる。だから少しでいい、光輝のことを信じてやってくれ。それでも駄目だったら俺が責任を取って

リーダーを引き受ける」

そう頼み込む浩二に動揺を見せる野村達だが、永山が浩二の頭を上げさせた。

「わかった。平野がそこまで言うのならもう少しだけ天之河のことを信じよう」

「……ありがとう」

どうにか永山達から光輝の信頼を失うことがなくなったことに安堵する。するとそこに香織が現れる。

「浩二くん！ そろそろ行くってハジメくんが言ってるよ！」

「わかった！ すぐ行く！ というわけでこの事を遠藤にも伝えておいてくれ」

そう言つて香織と共にハジメ達がいるところに向かう浩二は気付かなかつた。遠藤は初めから永山達のすぐ傍にいたということに。

「俺、いるのに……」

遠藤の目から涙がほろりと落ちた。

主人公17

眼下の八雲が流れるように後方へと消えていく。

重なる雲の更には下には草原や雑木林、時折小さな村が見えるが、やはりあつという間にはるか後方へと置き去りにされてしまう。

何らかの結界が張ってあるのか、相当な速度が出ているはずなのに、肌を感じる風は驚くほど心地好いそよ風だ。

そんな気持ちの良い微風にトレードマークのポニーテールを泳がせながら、眼下の景色を眺めているのは、八重樫雫、その人だ。

雫は視線を転じて、頭上に燦々と輝く太陽を仰ぎ見た。

雲上から見る恵みの光は、手を伸ばせば届くのでは？ と錯覚させるほど近くを感じる。

雫は、手で日差しを遮りながら手すりに背を預け、どこか達観したような、あるいは考えるのに疲れたような微妙な表情でポツリと呟いた。

「……まさか、飛空艇なんてものまで建造しているなんてね。……彼らってば、もう、なんでもありよね」

そう、雫が現在いる場所は、ハジメが造り出した空飛ぶ大型アーティファクト——飛空艇？フェルニル”の後部甲板なのである。

全長約百二十メートルある飛空艇？フェルニル”は乗り物としては間違いなくこの世界最大、かつ、世界最速となるだろう。

雲上を飛ぶ。周囲は見渡す限りの絶景に雫はまるで夢でも見ているような気がするも、その絶景を心から楽しめる余裕はなかった。

(浩二は私のことが好き……)

これまで幼馴染として家族として接してきた浩二が実は好意を向けられていたことに雫は告白されるまで気付かなかった。そして一度はフツて離れ離れになっても浩二は雫を諦めてはいなかった。それどころは以前よりも強くなって戻ってきた。

雫達よりも圧倒的な強さを身に付けて。

(今だからわかる……。今の私でも浩二には勝てない……)

神の使徒——ドリットを素材に神の使徒のステータスと技能を獲

得した雫はかけ離れていて気づけなかった浩二の実力がようやく理解することが出来た。例え、雫が神の使徒の力を十二分に扱えるようになったとしても浩二には勝てない。

「いったい、王都から去って何があったのか……。雫の悩みは尽きない。」

「ここにいたのか、雫」

「……浩二」

雫が視線を向ける。そこにはちようど考えていた相手、浩二がハツチを開いていた。そして浩二は雫の隣に来て、手すりに背を預ける。

「凄いやな、これ」

「そうね。……もう、いちいち驚くのも疲れたわ」

当然、浩二が言っているのはフェルニルのことである。しかし、その顔は驚いているようには見えなかった。

「浩二一人？ みんなは？」

「光輝は浩二αによって調教…矯正中。龍太郎と近衛の人達はシアが作った飯を食べてる。鈴とティニアは王女様と一緒にだ。エフェルとイリエは何か話し込んでるし、南雲はいつも通りだったな」

「……光輝を矯正中って何してるのよ？」

あまりにも不安な単語に雫は思わず尋ねた。下手をすれば光輝が光輝でなくなるかもしれないと思うって。

「別にたいしたことはしていない。ただ理想と現実が違うってことを教えているだけだ。雫だってもう気付いているんだろ？ 今の光輝はいつ爆発するかわからないってことぐらい」

「……それは、そうだけだ」

「今の光輝の思考は危険だ。下手をすれば俺達に剣を向けてくる可能性だってある。多少強引ではあるが矯正させてやるべきだ」

「……」

「そこまで言っただけで雫は口を閉ざした。」

雫も薄々は気付いていた。今の光輝が危険だということに。だからこそ浩二のやり方に口を挟むことができなかった。元々日本にいた時から自分の正しさを疑わないその思考の危うさに何度も注意し

ていたが、光輝は聞くだけで真剣に受け止めることも改めることもしなかった。だが平和な日本と異なり、殺意と憎悪、超常と非常識が蔓延る異世界では己のスペックとご都合解釈だけでは思い通りにいかなくなったのだ。生まれて初めて光輝は現実の壁というものを目の当たりにして、浩二に敗北したことでもうやく現実を見ようとしている。

多少強引ではあるも、浩二は光輝の為にどうかしようとしている。

(流石に幼馴染が敵側に行くのを知っていてそれを止めないのもどうかと思うしな……)

原作では光輝は人間族を裏切って敵側に回ってしまう。それを回避する為にも今の内に光輝を矯正させているのだ。

「まあ、それはそれとして雫は何一人で黄昏ているんだ？」

「べ、別に黄昏てなんていないわよ……ただ景色を眺めていただけ」

「そうか。それは失礼」

揶揄うように言ってくる浩二に雫は少し頬を膨らませながらも本当に変わったかと思ってしまう。以前ならこんな風に揶揄ってくることはなかった。もう少し空気を読んで行動するのが雫の知っている浩二だ。

まるでもう空気を読むのをやめたかのような振る舞いをする浩二に雫はまだ少し戸惑ってしまう。何を話せばいいのかと思いついていまい雫より先に浩二が口を開いた。

「告白の返事。急いでする必要はないぞ？」

「っ!？」

「ティニアに何か言われたみたいだけど、俺は急がせるつもりは一切ない。どれだけ時間が経とうと俺の気持ちは揺るがないし、お前の事を諦めない。俺にとつての？特別」は雫、お前だけだ」

男らしくも堂々と言つてのける。

以前の浩二ならこんなことはなかった。いつもどこか自分に自信が持てないような人だったのに今では逆だ。自信に満ち足りているようにさえ感じる。

「……どうして、私なの？ 香織じゃなくて？」

率直な疑問をぶつける。

雫は自分でも女の子らしくないと思っている。少なくとも男の子が守ってあげたくなるようなお姫様ではない。それなのにどうしてそこまで想ってくれるのかわからない。すると浩二はもの凄く嫌そうな顔をした。

「……雫、冗談でも言っていることと悪いことがあるぞ。俺が香織を異性として好きになることは天地がひっくり返ってもありえない。あんなトラブルメイカーと将来を共にしたら俺は過労死する自信しかねえ」

「そ、そこまで言わなくても……」

しかし、雫は否定はしなかった。ここに香織がいたら「雫ちゃん！ お願いだから否定して！」と叫んでいるだろう。幼馴染として身内としてならまだしも、将来の伴侶にする気もなろうとする気持ちも浩二には微塵もない。

「それに雫と一緒に香織達の面倒を見て来たからもう異性として見ることはできないしな」

「……その気持ちはわかるわ」

色々と面倒事を起こしてきた馬鹿こうきと脳筋りゆうたろうと突撃娘かおり。その面倒を浩二と共に見てきた雫は浩二のその気持ちはよくわかる。現に雫も光輝のことを？ 手のかかる弟ちのように思っている。後二人も似たようなものだ。

「それならどうして私は違うの？」

それならばどうして自分は光輝達とは違うのか？ その疑問をぶつける。

「正直俺も分からん。気がついたら雫のことがどうしようもないぐらいに好きになっていったからな」

「なによそれ……」

明確に自分の何が好きという理由はない。気がついたら好きになっただけという意味がわからない答えに雫は少し不貞腐れる。

「それでも俺がお前に惚れているのは確かだ。これは間違いない」

あつさりと言つてくる浩二に雫は思わず目を逸らした。

(卑怯よ……)

そんな風に正直に自分の気持ちを恥ずかしくもなく言ってくる浩二に雫はそう思った。だから少しお返ししてやろうと口を開いた。

「……ティニアさん達はどのよ？ 少なくともティニアさんとエフェルさんは浩二のことが……」

「ああ、俺にとつて？ 大切”な人達だ。雫を諦めたくない俺にそれでもと言って心から俺の事を慕ってくれている。ティニアがいなければ俺はフラれたショックから立ち直れなかつたし、エフェルが支えてくれなければ多分、俺はどこかで躓いていた。二人がいるから今の俺はいる」

嘘偽りもない正直な気持ち伝える。

それを聞いて雫の心に僅かに痛みが走った。

「最低なことをしている自覚はある。だがこれが今の俺だ。最低だろうが不誠実だろうが俺は俺を受け入れてくれたあの二人を大切する。誰がなんと言おうともな」

「……それは私でも？」

「ああ」

例えそれが？ 特別”である雫でも譲れない浩二の想い。だからこそ浩二はその上で雫に惚れさせてみせる。後はそうなるように浩二自身が努力するだけだ。

「だから改めて言うぞ、雫。俺はお前の事を諦めないし、あの二人を手放すつもりもない。その上で俺はお前に惚れさせてみせる。小さい頃から家族のように育ててきた雫からしてみたら思うこともあるだろうし、心の整理だつて必要だろう。だから答えを急がせるつもりはない。お前の答えを聞くまで俺は待つてる」

もう十年近くも雫の事を諦めずに想いを寄せている浩二からしてみれば告白の返事を待つなんて些細なこと。それに仮にまたフラれたとしても浩二は雫が首を縦に振るまで諦める気は微塵もない。

その自分の意思を曲げない浩二の言葉を聞いて雫は口を開こうとした瞬間、今まで真っ直ぐに飛行していたフェルニルが進路を逸らし

始めた。遮るもののない空の旅だ。帝国までは真っ直ぐ飛べばいいだけのはずであるから、何事かと顔を見合わせる浩二と雫。

「何かあったみたいだな」

「取り敢えず、中に戻りましょうか」

二人は、一拍おいて頷き合うと急いで艦内へと戻っていった。

不意に帝国まで真つ直ぐ飛んでいたはずのフェルニルが進路を逸らし始めて何事かと思つた浩二と雫は急いでブリッジに入った。そこで立法体形の水晶に帝国兵に追われている二人の兎人族が映し出される。この水晶もハジメが作ったアーティファクトだ。

帝国兵に追われている兎人族の女性が二人。追いつかれるのも時間の問題。光輝がいつものように助けに行こうとハジメに降ろすように声を上げるも、次に水晶に映し出された光景は首を落とされ、あるいは頭部を矢で正確に射抜かれて絶命した帝国兵の死体の山であつた。

帝国兵は次々に兎人族——ハウリア族の手によつて瞬殺されていくというあり得ない光景に、思わずシアを凝視する。

特殊なのはお前だけじゃなかったのか!? と、その目は驚愕に見開かれていた。

「いや、紛れもなく特殊なのは私だけですからね？ 私みたいなのがそう何人もいるわけじゃないですか。ラナさん達のあれは訓練の賜物ですよ。……ハジメさんが施した地獄というのも生温い、魔改造ともいふべき訓練によつて、あんな感じになつたんです」

「……」

全員の視線が一斉にハジメに向けられる。その目は何よりも雄弁に物語つていた。

兎人族の手によつて首が飛ぶ帝国兵。それを啞然呆然とする光輝達を置いてハジメはシュラーゲンを取り出して魔法を発動しようとしていた帝国兵を狙い撃ちにした。

そうしてハジメ達は谷間にフェルニルを着陸してフェルニルから降りると、ハウリア族は整然かつキリツとした顔で並び、ハジメ達を戦々恐々といった様子で注視する数多くの亜人族。その数は百人近くの大所帯であり、兎人族以外にも狐人族や犬人族、猫人族、森人族の女子供が大勢いて、手足と首には金属製の枷がつけられていた。どうやら、輸送馬車は亜人奴隷を運ぶためのものだったらしい。

フェルニルに乗って降りてきたハジメ達は亜人族達にとって未知との遭遇。その未知との遭遇に驚愕と警戒を抱いて絶賛混乱中だ。そんな亜人族を他所に、クロスボウを担いだ少年が駆け寄ってきた。そして、ハジメの手前で背筋を伸ばすと、ビシッ！ と惚れ惚れするような敬礼をしてみせた。

「お久しぶりです、ボス！ 再びお会いできる日を心待ちにしておりました！ まさか、このようなものに乗って登場なさるとは……この必滅のバルドフェルド、改めて感服致しました！ それと先程のご助力、感謝致しますっ！」

「久しぶりだな。まあ、さっきまでの動きを見る限り、余計な手出しだったかもしれないな。今のお前等なら魔法を撃たれた後でも対処できただろう？ 中々、腕を上げたじゃないか」

「……恐縮でありますっ、Sir!!」

一斉に踵を鳴らして足を揃え直し、見事にハモリながら声を張り上げるハウリア族。その声音で感動で打ち震えていた。

温厚で有名な兎人族。それがハジメの魔改造によつてその原型も消え去ったことに光輝達はドン引きしている。

それからハウリア族の痛い二つ名、厨二病によつてハジメとついでにシアの口からエクトプラズムが口から出てきたりなどあると一人の亜人族の女性が声をかけてきた。

「あの……よろしいでしょうか？」

足元まである長く美しい金髪を波打たせた、翡翠の瞳を持つスレンドーな美少女。耳がスツと長く尖っているので森人族だとわかる。

彼女の名前はアルテナ・ハイピスト。かつてハジメがフェアベルゲンで出会った森人族の長老であるアルフレリックの孫娘だ。

細い腕や足には金属の枷がはめられていて、足首につけられている枷は歩く度に擦れるのだろう。彼女の白く滑らかな肌が赤く腫れてしまっている。

よく見れば他の亜人族達も大なり小なりと怪我をしている。飛空艇に乗せるにしてもこのままでは可哀想だ。

「南雲。先に枷を外して治療したいんだけどいいか？」

医者としての性分故に怪我をしている人を放っておけない浩二はハジメに一言声をかけるも。

「それは構わねえが、この数をか？」

亜人族の数は百人近く。一人一人枷を外して治療するには時間がかかる。流石にそれは勘弁して欲しいハジメだけど……。

「すぐに終わる」

浩二は？ 魔力操作〃の派生技能である？ 魔力範囲拡大〃を使って亜人族を包むように灰色の魔力の膜が展開される。

「？ 改造〃」

そして？ 改造〃の派生技能である？ 物質改造〃を使って枷を素手で破壊できるぐらいの脆い物質に改造させて。

「？ 聖典〃」

光属性最上級回復魔法で亜人族達の傷を癒した。

領域内にいる者を全員まとめて回復させる効果を持つ超広範囲型の回復魔法。範囲は術者の魔力量や技量にもよるが、最低でも半径五百メートルだ。普通なら数十人掛かりで行使する魔法であるし、長時間の詠唱と馬鹿でかい魔法陣も必要だ。それをたった一人でそれも一瞬で行使した浩二はチート以外何者でもないのだが、今の浩二にとってはこれぐらい朝飯前ぐらいでしかない為にチートというよりもバグの方が適切かもしれない。

亜人族はまるで信じられないかのように目を見開いている。拘束していた枷は簡単に壊せてあったはずの傷も消えた。魔法が使えない亜人族からしてみたら奇跡の所業に等しいだろう。

リリアーナ達も数百人近くいる亜人族達を瞬く間に治療した浩二の技量に驚かされている。ハジメ達は流石だなと、どこか達観したかのようにぼやいていた。

「気分が悪い人やどこかに問題がある人は言ってください。治療しますから」

一応？ 医学〃の派生技能である？ 診察〃を使って身体に異常がないことは把握している浩二だけど念の為にそう告げる。するとそんな浩二を見て亜人族の誰かがポツリと呟いた。

「医神……様……」

「は……う？」

思わず振り返る。しかし時は既に遅い。

ポツリと呟かれたその言葉はまるで伝染するかのようにながっていき、亜人族が浩二を見る目は神を崇める信者のような目になっていく。

それを見て浩二はこれはまずいと思った。ただでさえエヒトに目を付けられている上に？ 医神〃なんてだいたいそれた二つ名は素直に嫌だった。否定しようとしても聞き入れてもらえず、浩二はハジメに助けを求めるとハジメは笑顔で頷いた。そしてハジメは亜人族に向けて声を張り上げた。

「聞け！ 亜人族達よ！ この御方こそこの世界に降臨なされた？ 医神〃 浩二様である!!」

「ちよっ!? おまつ——」

「浩二様は奇跡の御業を持ってこれまで数多くの命を救ってこられた！ そして今も諸君等の痛ましい姿に心を痛めてその力を行使なされた!! 浩二様こそ世界を癒す御方！ この御方に治せない怪我も癒せない病も存在しない！ そして彼女達は？ 医神〃 浩二様に仕える使徒である!!」

ビシッ!! と浩二の後ろにいるテイニアそして香織と雫を指すハジメの意図に気づいたのか、香織は「ほら、雫ちゃんも」と声をかけて三人の背中から天使の翼を広げる。

その姿に亜人族はおおっ！ と歓声を上げた。そこでハジメはニヤリとほくそ笑み最後の仕上げを行う。

「浩二様、万歳!!」

と、最後の締めには浩二を讃える言葉を張り上げた。

すると、次の瞬間……。

「〇〇浩二様、万歳！ 浩二様、万歳！ 浩二様、万歳！ 浩二様、万歳！」

「〇〇浩二様、万歳！」

「〇〇医神様、万歳！ 医神様、万歳！ 医神様、万歳！ 医神様、万歳！」

「〇〇浩二様、万歳！」

ここに新たな神が誕生した。

亜人族から浴びせられる称賛と信望の眼差し。浩二はハジメの胸ぐらを掴む。

「どういうことだ!? なんでそうなる!?!」

助けを求めたらどういうわけか神にされた。しかし、その元凶は平然と言う。

「いいじゃねえか、この世界のアスクレピオスにでもなつてやれ」

「ふざけんな!!」

——アスクレピオス。優れた医術の技で死者すら蘇らせ、後に神の座についたことから医神として現代も医学の象徴的存在となっている。つまりハジメは浩二にそういう存在になれと言っているのだ。無茶ぶりもいいところだ。

「お前も俺と同じ苦しみを味わうがいい。クク」

「ハウリア族をあんな風にしたのはお前だろうが!! 俺を巻き込むな!!」

どうやらハジメは自分にだけ痛い二つ名をつけられていたことにご立腹でちようどいいところに道連れにできる人がいたから道連れにしたようだ。一応? 豊穰の女神“こと畑山愛子同様に亜人族を始め、医神である浩二の支持を集めて発言権を得て人々の心を掴ませる真つ当の理由があるのだが、果たしてどちらが本音なのやら……。

「俺達、親友じゃねえか」

「……OK。お前は敵だ!」

これ以上にならない満面な笑顔で? 親友“だと言い切ったハジメに浩二は抜刀する。逃げるハジメに追いかける浩二をユエ達はどこか生暖かい眼差しで眺めている。

暫くして亜人族を乗せた飛空艇は「ハルツィナ樹海」に向けて飛ぶのであった。そしてこれより少し先の未来で? 豊穰の女神“と? 医神“を信仰する新たな宗教が始まるのが浩二達はまだそれを知らない。

主人公19

帝国に奴隷として輸送中の亜人族とハウリア族をフェルニルに乗せて樹海に向かう途中でハジメはパル達から事情を聞いた。どうやら魔族が変成魔法で強化された魔物を使ってフェアベルゲンに侵攻していた。幸いにもその時はハジメの手によって魔改造されたハウリア族のおかげでどうにかなったようだが、今度は帝国が侵攻してきた。それも魔族の侵攻で消耗している隙を狙ったかのよう。これも帝国は樹海の特性である感覚を狂わせるのなら、フェアベルゲンが確認できる場所まで樹海を燃やすという荒業に出た。

それも全ては亜人族という労働力を補充する為。帝国も魔族の侵攻で相応の被害を受けたからだ。そして奴隷として攫われた亜人族のなかにはハウリア族、それもシアの父親も捕まっている。

そして帝都近郊では。

フェルニルに詰め込まれた馬車と馬を使ってリリアーナが侍女と近衛兵と共に帝国に突撃訪問するのだが……。

「本当によろしかったのですか？ 浩二さん」

その馬車には浩二それにティニアやエフェルそれにイリエも乗っていた。

「何がでしょう？ 王女様」

「いえ、南雲さん達と一緒に樹海におられた方が……」

リリアーナは浩二の目的がハジメと同じように神代魔法を手に入る為ということを知っている。だからそれを無視してこの場にいることに疑念を抱いているのだ。

「その必要はありませんよ。南雲のことですから大迷宮を攻略する前にシアの同族を助ける方を優先するでしょうから。身内には甘いですからね……」

(それにもしもの為に浩二αがいるしな……)

念には念を入れている。それで神代魔法が手に入るのかは不安ではあるも何もしないでおくよりかはいい。亜人族の治療も浩二αと香織がいればどうにでもなる。

「それに誰かさんのせいで勝手に神にされて崇められるのも嫌ですか……」

苛立ちを吐き捨てるように言う浩二。どこかの錬成師のおかげで浩二はすっかり亜人族にとって信仰の対象にされた為に落ち着けずその場から離れたかった為に後の面倒事は浩二αに丸投げした。

それとどうして浩二がリリアーナと共にいる一番の理由は……。

「それに俺が行かなくてもティニアは王女様と一緒に行くでしょうから」

「浩二様……」

いつもは表情を崩さないクールビューティーの顔が驚きに包まれる。

「王女様のことが心配なんだろう？　なら俺も一緒に行くに決まってるだろ？」

ティニアは何も言わなかった。リリアーナのことが心配だから一緒に行きたいとも、手助けしたいとも言わなかった。しかし浩二はティニアの心情を察していた為にリリアーナと行動を共にすることを選んだのだ。

「俺に遠慮するなよ、ティニア。お前が王女様を助けたいのなら俺も全力でそれを手伝う。それぐらい俺はお前の事を大切に想ってる。だからこれからは何かあれば遠慮なく言ってくれ」

そんな浩二にティニアは深々と頭を下げる。

「浩二様、ありがとうございます……」

「いいよ。気にすんな」

「今晚、遠慮なくご奉仕しますね」

「…はいよ」

「あ、ずるいですよ！　旦那様！　私も一緒に！」

「……はいよ」

どうやら今日は美女二人に挟まれながら眠ることになりそうだ。イリエは我関せずと小窓の外を眺めていた。そんな浩二達にリリアーナはどこか羨望の眼差しで浩二達を見ていた。

するとリリアーナ付きの専属侍女であるヘリーナが浩二に尋ねる。

「浩二様。不躰ながら浩二様は元の世界に帰られるのでしょうか？」
「なんですか？ 急に。……それはまあ、家族も心配しているでしょうし、南雲が元の世界に帰れる方法を見つけたら一緒に帰ろうとは思ってますよ」

嘘偽りのない本心だ。その時はティニア達を連れて日本に帰るつもりだ。

「浩二様から見てリリアーナ様はどう思われますか？」

「ちよっ!? ヘリーナ！ いきなりなにを！」

あまりにも突拍子もない質問。その質問の意図に気づいたりリリアーナは自分の侍女に思わず声を荒げる。ヘリーナは浩二とリリアーナをくつつけようとしているのだ。

浩二の医療の腕前や調査の技量はそれこそ？ 医神”と称してもいいぐらいに神がかっているし、浩二自身の實力もかなりのものだ。それにこれまで不治の病だった薬を調合して特效薬まで作り出しているから民からの信頼も厚い。これからの王国の未来と安寧の為にどうにか浩二を繋ぎ止められないかと打算する。

それに対して浩二の答えは。

「いや別に」

別に興味ありませんが？ と言わんばかりの顔で答えた。そしてその視線はリリアーナの身体のある部分に向けられていてそれに気付いたリリアーナは顔を赤くして両腕でその部分を隠した。

「……浩二さん、今私のどこを見ていましたか？ 怒りませんから言ってください」

「……別に」

思い切り視線を逸らして別に見ていませんよ？ といった風に装う浩二にリリアーナは思わずプツリと何かが切れて思わず口走る。

「ティニア。実は浩二さん、王都を出る前日に私の胸で——」

「ああああああああああああああああああああっっ!!
? 改造”!!」

思わぬ反撃に悲鳴を上げてリリアーナの口を塞ごうと自らの腕を改造させて蝟の足のような触手がリリアーナを襲う。だがしかし、そ

の触手はリリアーナには届かなかった。

「申し訳ございません、浩二様」

「失礼します、旦那様」

「ちよっ!? お前等!!」

まさかの裏切り。リリアーナに迫る触手をティニアが？分解”を付与させた短剣で斬り払い、エフェルが浩二を取り押さえた。二人とも愛する人の知らない一面を是非とも知っておきたいのだ。だがしかし、それは浩二にとって唯一無二の黒歴史。雫にフラれたからといって自分より年下の少女に抱きしめられてその胸で思い切り泣いたなんてとても恥ずかし過ぎる過去。ここで浩二は最後の希望を呼ぶ。

「イリエー！」

最後の希望であるイリエに向けて声を飛ばす。しかしイリエは両手で耳を塞いでこちらに振り向こうともしない。如何にも私は無関係ですと装っているイリエに浩二の希望は絶望へと変わった。

それを見てリリアーナはニヤリと勝利を確信した笑みを浮かべた。

「そう、あれは浩二さんが王都を去る前日に深夜のことでした」

「やめろ!! やめてくれええええええええええ!! 俺が、俺が悪かったからあああああああ!!」

語られる一夜の出来事。それはもうご丁寧に詳細に語るリリアーナにティニア達は興味津々に耳を傾ける。そして浩二はその話を聞く度に吐血でもするのかと思えるほどに羞恥心で悶えるのだ。

「かふ……」

あ、吐血した。

「殺せ、いつそのこと一思いに殺せ……」

馬車の片隅で膝を抱えながら小さくなる浩二。いくら名医だろうとも治せない傷もあるのだ。唯一の救いがあるとすればイリエが聞いていないことぐらいだろう。

そんな浩二を見てリリアーナは勝ち誇った笑みを浮かべてティニ

アとエフエルは全力で慰めに入る。

「何も恥ずかしいことはありませんよ」

「そうですよ。誰にだって泣きたくなる時はあるのですから」

美女二人に挟まれて慰められる浩二。一見してみれば羨ましい光景ではあるも今の浩二はそれどころではない。

「ふふ、もう一度私の胸で慰めてあげましょうか？」

「勘弁してください……」

カモクンと両腕を広げるリリアーナに浩二のライフはゼロだ。不躰な視線を向けたことに浩二は深く反省した。

「さて浩二さん、落ち込むのもそれぐらいにしてももうすぐ到着しますよ」

そうこうしているうちに馬車は帝城へと辿り着いた。

主人公20

「ヘルシャー帝国」は数百年前の大戦で活躍した傭兵団が設立した新興の国で、実力至上主義を掲げる軍事国家だ。帝都民の多くも戦いを生業としており、よく言えば剛気、悪く言えば粗野の気質だ。帝都内には大陸最大規模の闘技場などもあって、年に何度も種類の違う催し
がなされ大いに盛り上がっている。

その「ヘルシャー帝国」の皇帝の座にるのがガハルド・D・ヘルシャーその人だ。そして謁見の部屋で現在、皇帝陛下とリリアーナ姫殿下が魔族による被害の詳細やこの世界の真実。そしてこれから連携について語り合っている。国のこれからのことについての大事な語り合いの邪魔にならないように浩二達は近くの部屋で待機しようとしていたのだが……。

「あの、これはどういうことでしょうか？」

帝城に到着して馬車に降りるとすぐにドレス型の甲冑を身に付けてミディアムの金髪と碧眼をした女性に訓練場と思われる場所まで連れてこられた。突然のことに戸惑いながらも好戦的な意志はあるものも殺意などは感じられないからティニア達を控えさせている。すると女性は好戦的な笑みを浮かべながら口を開いた。

「貴方、皇帝陛下に勝利したようですね」

「はあ、失礼ですがどちら様で……？」

やや吊り気味な碧眼で浩二を見据えながらそう言ってくる女性に浩二は戸惑いながら名を尋ねた。そこで初めて女性は名乗る。

「これは失礼しましたわ。私はレイナ・デューク。一応この国の令嬢ですわ」

「そのような高貴なる身分の方がいったいどのようなご用件で私をここに？」

「それはもちろん、我等が皇帝陛下に勝利した貴方に興味があってですわ。是非とも一手お手合わせをお願いしますわね」

ニコリと淑女のように品性のある笑みを浮かべながら細剣を構えるご令嬢。流石は実力至上主義を掲げる国のご令嬢だけあって強

者に目がないのか、戦わずにはいられないのだろう。

その瞳は自信に満ちていて己の実力に一切の疑いを持っていない。けれど慢心はしていない。笑みは浮かべているもののその瞳は浩二の一挙手一投足を見極めようとしている。

自分は誰にも負けない自信はあるけど慢心はしない。つまり僅かな油断すらも利用してくる最も油断できない相手ということだ。

「それに私自身、貴方に興味がありましたの。この帝国でも貴方の噂は結構耳にしますわ。とても素晴らしい腕の持ち主だと」

「恐縮です」

「ですので私が貴方に勝つたらこの国に仕えて欲しいのですわ。貴方専用の治療院の準備はできていますので」

（これ、絶対あの皇帝の仕業だな……）

まだ諦めていなかったのか、と内心嘆息する。

（どうやらこの勝負、勝っても負けても面倒事が起きるのは確定か……）

勝負の先を見据えた浩二は周囲を見渡してどうかにかこの場から逃れようとも一考するも、既に兵士達が取り囲むように立っている。他にも手練れが数名、身を潜めているのがわかる。

（万が一に俺が帝国に来ることを予測……いや、俺を帝国に招いた時の事も想定して用意していたな、こりや……）

帝国に来て、帝国に招かれてもこうするように画策していたのだろう。浩二を帝国に仕えさせる為に。

（用意周到なこと……）

もはや呆れよりも感心した。

（まあ、でも勝負を申し込まれたら断るわけにもいかないよな……）

それはそれ、これはこれだ。

「こつとも真つ向から勝負を申し込まれたら断るのは気が引ける。

「失礼を承知でお聞きしますが、もしもこちらが勝てば？」

「ふふ、その時はとっておきのものをお渡しますわ」

それを聞いて内心嘆息する浩二は刀は抜かずに八重樫流体術の構えを取る。

「……剣は抜きませんか?」

「必要ありませんから」

「言ってくれますわね……ッ」

ご令嬢の美しい顔が僅かに怒りで歪む。そしてご令嬢から審判役を任された兵士が開始の合図を送ったその瞬間、浩二はレイナの懐に潜り込んだ。

「え?」

すぐさま、ズドンとレイナの腹部に肘鉄が打ち込まれる。

「かはっ……」

「——八重樫流体術 雷突」

開始速攻の一撃。打ち込みと同時に回復魔法をかけて傷も痣も残らず、痛みだけが残るといふ離れ業を密かに使用した浩二は衝撃と痛みで倒れそうになるレイナを支える。そして痛みが引いたレイナは顔を上げる。

「大丈夫ですか?」

少し困ったように心配そうに尋ねてくる浩二にレイナは手も足も出ずに敗北したことを悔やむも己の敗北を受け入れて自分の足で立ち上がる。

「……勝負は勝負。素直に敗北を認めますわ」

駄々を捏ねることなくすんなりと己の敗北を受け入れた。強さこそ至上の帝国の人間らしい振る舞いだ。するとレイナは頬を薄っすらと赤く染めながら咳払いして言う。

「コホン。貴方の実力はわかりましたわ。なるほど、流石は皇帝陛下に勝っただけのことはありますわ。まさか私が手も足も出ずに敗北するとは思いませんでした。魔法薬の腕前だけではなく実力もあるとは……」

「お褒めに預かり恐悦至極です」

「ええ、素直に敗北を受け入れて認めますわ。平野浩二様、貴方を私の夫に迎え入れましょう。デューク家の婿養子となって共に帝国に栄光と繁栄を築き上げましょう」

——オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

レイナの告白と同時に兵士達の新たな帝国人を迎え入れる歓迎の叫びが上がる。レイナは自分の告白に断るわけがないと信じて浩二に手を伸ばすのだが……。

「お断りさせて頂きます」

「……え？」

その手はピタリと止まり、静寂が訪れる。

歓迎の叫びが嘘のように静まり、静寂に包まれるなか、レイナは自分がフラれるとは思っていなかったのか笑顔のまま硬直するもすぐに硬直を解いて浩二に問いかける。

「な、何故?! 私の方になるのですわよ?! 地位も権力も約束されておりますのに何故断るのですか?! それとも私に何かご不満でも?!」
納得できないと言わんばかりに叫ぶご令嬢に浩二は宥めながら言う。

「落ち着いてください。別に貴女に不満があるというわけではありません」

レイナはご令嬢ということだけあつて誰が見ても容姿端麗の美少女だ。普通はそんな美少女に告白されたら二つ返事で了承するだろう。だがしかし、浩二には既に心底惚れている女と自分を慕ってくれる人達がいる。

「私は地位や権力には興味はありません。そして私には既に惚れさせるべき? 特別? な人と? 大切? な人達がいるので申し訳ございませんが断らせて頂きます」

ましてやそれが皇帝陛下の画策なら余計だ。勝負に勝っても負けても浩二を帝国に仕えさせようという魂胆が見え見えだ。とはいえ、大勢のいる前で告白してきた女性を無下に扱うのは酷というもの。浩二は正直な気持ちで答えた上で丁重に断った。

するとレイナは顔を真っ赤に染めて全身を震わせている。

「ふふ……ふふふふ……。ここまでこけにされたのは生まれて初めてですわ……ッ」

レイナは自身に泥を塗った浩二にビシッ! と指を突きつける。

「宣戦布告ですわ! 私はあるとあらゆる手段を用いて貴方を惚れさ

せてみせますわ！ ええ、してみせますとも！ そして私をフツたことを後悔させてあげますのでお覚悟を!!」

どうやら浩二はご令嬢の魂に火をつけてしまった。もしかしたらガハルドはこのことも見越してレイナを浩二に差し向けて戦わせたのかもしれない。

「ではまずは帝都を私が直々にご案内しますわ！ まさか、女性からの誘いまでも断るなどという無粋な真似はしませんわよね？」

「……まあ、それぐらいでしたら」

「誰か馬車の用意を！ それと平野浩二様、私のことはレイナとお呼びくださいませ。私も浩二と呼ばせて頂きますので。それと敬語も不要ですわ」

「……わかったよ、レイナ。それと俺の仲間も一緒にいいか？」

「……二人つきりがベストなのですが、まあいいでしょう。同乗を許します」

こうして浩二達は帝国の令嬢に案内されながら帝都を観光するのであった。

主人公21

帝城に到着するなり、帝国の令嬢であるレイナと戦わせられてレイナに勝利したら夫になれと告白された。浩二はそれを丁重に断るも逆効果であり、レイナは意地でも浩二を惚れさせようと躍起になり、早速（テイニア達込みの）デートで帝都を回った。

バスガイドのようなレイナの案内のおかげで割と満足いく帝都巡りができた浩二達は今度こそ帝城の城内に入れた。

『私の屋敷に來れば盛大にお祝いしますわよ?』

レイナにそう誘われた浩二だったがそれは頑なに断った。わざわざ相手の有利な屋敷フィールドに招待されるわけにはいかない。何をされるかわかったものじゃない。

ないとは願いたいだが、既成事実なんてことをされたら浩二はレイナの家族とその関係者の記憶を改竄して回らなければいけない。

そして城内に入れた浩二達は使用人の案内でリリアーナがいる部屋に訪れた。

「皆さん、お帰りなさい。それと浩二さん、お疲れ様です……」

部屋に入って最初に訪れたのは同情がたっぷり込められた眼差しで出迎えるの言葉を送ってくれたリリアーナだった。どうやら何があつたのかガハルドから聞いているようだ。

「……ありがとう、と言えはいいのか? それともただいまか?」

まあとにかく王女様、ただいま戻りました。糞、いえ、皇帝との協議の方はいかがでしたか?」

「はい。そのことについて浩二さんにもお話があります」

ソファに腰を掛けてリリアーナは皇帝との間で決めた話し合いの内容について語る。魔族の侵攻や恵理の裏切り、王国の被害そしてこの世界の真実やその他諸々を話してハジメと浩二のことについてもリリアーナはガハルドに少し話した。既に知っている浩二はともかくハジメのことについては流石のガハルドも冗談だと信じたかったようだ。

だが、大切なのはこれから。

魔族に備えた支援や今後の連携。それと対外的に関係強化を示すことでリリアーナは皇太子と婚約話をまとめ、帝都でそれを発表する。とはいえ、すぐに帝国に輿入れは不可能なので王国が落ち着いたら改めて輿入れする。

俗に言う。政略結婚という政治的やり取りの一つだ。

「……そうですか」

それに対しての浩二の返答はそれだけだ。

何故ならそれは王族として生きる者の果たさなければならぬ義務だからだ。リリアーナもそれを承知している。それをこの世界の人間ではない浩二が口を挟むべきことではない。

「……それで陛下は浩二さんを手に入れようとデューク家のご令嬢を差し向けたようですが」

「ええ、まさに今、困っていますよ」

女性をコレクションのように言うのも気が引けるが浩二はこれ以上増やすつもりはない。だけど自身を自尊心を傷つけられたレイナは宣戦布告通り、あらゆる手段を使って浩二を惚れさせようとするだろう。

ブルリ、と悪寒が走る。

(本当に去勢してやろうか、あの野郎……)

今なら何の副作用もなく去勢することができる浩二は割と本気で考えた。皇帝から女帝にしてやろうかと。

「浩二さん。何を考えているのかわかりませんが一応言います。やめてください」

どうやら王女様には人の心を読む技能が備わっているようだ。

「いえ、香織と雫から浩二さんが人の顔とは思えない邪悪に満ちた笑みを浮かべていたらろくでもないことを考えていると聞いているので」

流星は幼馴染。浩二の事を良く知っている。

「というよりもどうして陛下に対して浩二さんはそんなにも辛辣なのですか？」

「あいつは雫を愛人にしようとした。つまり、俺の敵、いや、怨敵だ」

以前に雫を愛人にしようとしたことをまだ根に持っているようだ。「やはり、浩二さんにとって雫は？特別」なお方なのですね……」

王都に戻ってきてからの浩二と雫の様子を見ていたりリアーナは薄々そうではないかと思っていた。

「ということはデューク家のご令嬢とは……」

「断る一択ですよ。そもそも俺はティニア達と一緒に元の世界に帰るつもりですし、例え帰れなかったとしても帝国に仕える気はありません。この国で生活しようとも思いませんし」

今日の観光であちらこちらと見て回って住みたいとは思えないほどの粗野な人達が多い。

「帰れなかったら場合は王都で病院、医療院でも建ててそこで医者として生活しようとは思ってます」

(まあ、帰れないなんてことはないだろうけど……)

それでも万が一の事も考えておく。

「まあ、俺の事はいいです。どうせレイナがどんな手段を使っても断り続けるだけですし、あの糞、皇帝陛下の思惑通りになるのも癪に障りますから」

どうやら浩二はとことん皇帝陛下が嫌いなようだ。

「それよりも俺達にも何か手伝えることはありますか？色々とやることもあるでしょう？皇帝暗殺ならぬ皇帝去勢なら今すぐにでも実行可能ですよ？王女様」

「やらないでくださいね？いいですか？絶対にやらないでくださいね？……ってなんですか!?その不満そうな顔は!?どれだけ去勢させたいんですか!?!」

「皇帝が女帝になるまで」

「浩二さんもなにもしなくて結構ですから変な行動だけは起こさないでくださいね!!いいですか!?!」

「保証はしません」

「素直に?はい」って言いなさい!!」

「王女様、夜中に大声をあげるのにはマナー違反ですよ?」

「誰のせいですか!?!誰の!?!」

声を荒げるリリアーナ。そして浩二達はヘリーナによって丁重に部屋から追い出されて浩二達は用意されている部屋に向かう道中でティニアが浩二に尋ねた。

「浩二様。どうしてリリアーナ姫殿下を怒らせるようなことを？」

「少しでも感情を吐き出せばスツキリするだろう？ 王女だからって色々溜め込み過ぎなんだよ、あの王女様は」

ティニアは浩二がわざとリリアーナに大声を上げさせるように仕向けた。溜め込んでいるものを声と一緒に吐き出させる為に。

「ティニア。お前なら自然に王女様の傍にいられるだろう？ 色々お手助けしてやってくれ。何かあれば南雲から貰った念話石で報告を頼む」

「かしこまりました」

「エフェルとイリエは俺の傍にいてくれ。レイナと二人つきりは避けたい」

「わかりました」

「わかった」

今後どうするかを決めて浩二達も用意されている部屋に入って身体を休ませる。

帝都に訪れた次の日。

「さあ、始めますわよ」

浩二はまたしてもレイナによって訓練場に連れて来られた。

「……始めるってまた勝負か？」

昨日に続いて今日もまた勝負？ 流石に一日二日で勝てるような相手ではないことぐらいはほど愚かではない筈だ。するとレイナは言う。

「それは勿論ですわ。負けっぱなしは性に合いませんし、私はこう見えてとても負けず嫌いなんです」

オホホ、と笑うレイナだけどその目は笑っていないかった。

「実力差がわからないわけないだろ？ 俺とお前とでは——」

「勝負にもならないとでも仰りたいので？ そんなことは百も承知ですわ。ですがそれほどまでの強者を前にして喜ばない帝国人はおりませんことよ？ それも私の将来の夫となるのならその強さをもっと知りたいと思うのも当然のことではありまして？ それならば私は何度でも挑み続けますわ」

強者との戦いを喜び、挑み続けるのもレイナが帝国人だからだろう。浩二も武術を身に付けている端くれとしてその気持ちはわからなくはないのだが……。

「……あのな、俺はお前の夫になるつもりはないし、この帝国に長く滞在する予定もないぞ」

早くても数日、長くても一週間以内に浩二達は帝国を去る予定だ。そして帝国に来る日はもうないと言っていいだろう。だからいくら挑まれても限度があるし、その間でレイナが浩二を惚れさせるのも不可能に近い。するとレイナはあっけらかんと言う。

「それでしたら心配無用ですわ。私は貴方のパーティーに入って行動を共にしますので」

「はあ？ 何を勝手に……」

「断られても勝手について行きますわよ。どこへでも」

「……」

浩二は悟る。あの目はマジだと。

「……ついてきたとしても今のお前の実力じゃ死ぬかもしれないほどの危険な旅だぞ？ それでも俺に挑む為だけについてくるのか？

それともそこまでして俺を惚れさせたいのか？ この際だからハッキリ言うぞ？ 俺はお前の夫にはならないし、お前がついて来てもお荷物の上に迷惑だ。俺の事を諦めて帝国にいろ」

浩二が帝国にいる間は挑み続けるのはまだいい。その間、惚れさせようとあの手この手を使ってくるのも容認する。しかし旅についてくるとなれば話が変わる。確かにレイナは強いが、それはこの世界の人間を基準にすればの話で大迷宮に挑戦できるほどではない。だから諦めて帝国にいろと浩二は告げるも……。

「嫌ですわ」

レイナはそれを拒絶した。

「諦めろと言われて諦めるほど私は大人ではありませんの。それに弱ければ強くなればいいだけではありまして？」

「それはまあそうだが……」

「それと浩二は一つ勘違いなされているようですけど、私は貴方に意見など求めてはいませんわ。私がそうしたいからそうするだけの話ですわ」

なんて自分勝手な……。

「それに実のところ私はあまり物事には執着しない性格なのですが、不思議なことに貴方に敗れてからというもの胸が熱くなつて頭から貴方のことが離れませんの」

レイナは自身の胸元に手を当てる。

「この焦がれる想いが愛だというのであれば光栄に思ってください。私が一人の殿方にここまで執着するのは浩二が初めてですわ。私の初めて奪った責任を取ってくださいまし」

「誰が取るか！」

「あら、いけず。それならば私を諦めさせてくださいまし。いつまでも、どこまでも私は何度でも貴方に勝負を申し込めますわ。そして私の執着が勝利するか、貴方の頑固な意志が勝利するか、勝負といきましよう」

その碧眼はもはや一種の狂気を感じた浩二は思わず引いた。

「どうやら浩二がレイナの中に眠る目覚めてはいけない何かを目覚めさせてしまったようだ。だがしかし、ここで折れる浩二ではない。」

「……いいだろう。その勝負を受けてやる」

ここで逃げれば男が廃る。その勝負を真正面から受けた上でレイナを諦めさせてみせる。そして浩二は昨日と同じく八重檉流体術の構えを取り、レイナは細剣の剣先を浩二に向けて言う。

「さあ、私達の勝負を始めますわよ」

こうして二人の勝負は始まった。

主人公22

「そんな……どうして……」

浩二はレイナと勝負デートをしていた。レイナの執着愛が勝利して浩二を惚れさせるのが先か、浩二がレイナを諦めさせるのが先かという勝負デート。それを受けた浩二は目の前の光景が信じられなかった。

「ありえない……俺が、俺がこんな……」

ただ信じられなかった。目の前の光景が、余裕の笑みを浮かべるレイナが浩二の自信を打ち砕いて行く。

「ふふ、私を甘く見た結果ですわ。現実を受け入れなさいな」

「受け入れられるものかよッ！　こんな……ッ！」

まるで現実から目を逸らしたい子供のように言い訳を述べる浩二だが、現実は残酷だ。いつだって浩二の予想を上回る。それでも浩二は受け入れたくなかった。それこそ都合のいいことしか受け入れない勇者こうきのように。

「駄々を捏ねるのはお止めなさいな。その行為は己の価値を下げるみつともないことですわよ？」

「ぐっ……ッ！」

言い返せなかった。レイナの言葉に何一つ言い返すことが出来ず浩二はただ目の前の現実南雲ハジメに歯を噛み締めるしかない。神の使徒と戦い、主人公とも戦ってようやく自分に自信を持てるようになったのに、これでは何も変わっていない。あの頃の脇役で甘んじていた時と何も変わらない。

「結局俺は、何も変われなかったというのか……ッ！」

強くなったと思っていた。レベルやステータスではなく心身共に強くなったと思っていた。しかしそれは眼前の現実を目の当たりにしてそれはただの淡い幻想でしかなかった。

そこにイリエが言う。

「いや、何であんたが落ち込んでいるの？」

呆れるような眼差し共に告げられる言葉に続いてエフェルが少し困ったように言う。

「えつと、旦那様。とりあえずこの方を掘り出しませんか？」

二人の視線には首から下が地面に埋まっているレイナがふてぶてしい顔で笑みを浮かべてそのレイナの目の前で浩二が四つん這いで落ち込んでいるという奇妙な光景だ。

「そうですわよ。早く出して下さいませ」

「……お前の神経はいったいどれだけ図太いんだよ」

溜息を吐きながらレイナを地面から引きずり出す。

朝からレイナと勝負を行い、浩二はあの手この手でレイナを諦めさせようとした。始めは純粹に圧倒的な力量差を見せつけたり、抗えない絶対的なまでの力を振るったりとしたのだが、それでもレイナは折れなかった。ならばと浩二は日本十トータスに存在している《ソウルシスターズ》に行った対女性の嫌がらせ攻撃を実行した。それはあまりにも鬱陶しくつこい《ソウルシスターズ》に怒りを覚えた浩二が開発した乙女が嫌がる嫌がらせ攻撃。乙女なら確実にトラウマになること待ったなしのその嫌がらせ攻撃は見慣れた幼馴染でもドン引きするほどだ。そしてこの世界？トータス”に召喚されてその嫌がらせ攻撃はバージョンアップした上に幅も広がって無駄に洗練された無駄のない嫌がらせ攻撃に昇華されている。

《ソウルシスターズ》の自称義妹の女性騎士を実験動物に進化したはずの嫌がらせ攻撃が何一つレイナの心を折ることが出来なかった。

あの近衛解任された女性騎士でさえも、折るまではいかなくても見せしめとしてはいい効果があったというのにレイナにはまるで効果がなかったことに浩二は落ち込んでいた。

今まで積み重ねてきたものが崩壊したかのようにどこか喪失感を抱く浩二に対してレイナの顔から笑みは消えなかった。それどころか増している。嫌なぐらいに。

「お前ってマゾ？」

真顔でそう尋ねる程に。

第二の変態^{テイオ}? そう思っただけで尋ねた浩二にレイナは少し怒ったようにムツとする。

「失礼ですわね。そのような変態と一緒にしないでくださいませ」

聞けばレイナの天職は？不屈者」と呼ばれている天職で主に耐性系の技能を多く持っている。物理や魔法の耐性だけではなく状態異常や精神に関する耐性も持っている。だから浩二の嫌がらせ攻撃にも耐えることができたようだ。

「それに私は帝国の令嬢ですわよ？ 苦痛など慣れておりますわ」

実力至上主義である帝国はある意味では弱肉強食の国だ。それならば強者になろうと己の身体を痛めつけるのは当然のこと。それを聞いて浩二は一応は納得したが、それでもと思う気持ちはある。

「さて、それでは勝負の続きと行きますわよ」

得物を手に構えるレイナ。もう何度目になるのかもわからない勝負に浩二は思わず問う。

「……どうしてそこまでする必要があるんだよ？ いくら耐えることができるといえど、お前がそこまでする必要があるのか？」

帝国の為か、家の為か、それとも個人的な理由なのかは定かではない浩二はどうしてそこまで浩二に執着するのかがわからなかった。するとレイナはそれに答える。

「あら、女が男に執着する理由なんて惚れている以上の理由が必要でして？」

「……………はっ！」

浩二は鳩が豆鉄砲を食ったようにポカンとしている。まさに、何を言われたのか分からないという様子だ。

「いや、意味が分からん。お前、皇帝陛下に言われて俺を婿養子にしようとしているんだろ？」

「ええ、始めはそうでしたわ。皇帝陛下から直々に貴方を帝国のモノにしろと言われましたし、私の顔に泥を塗った貴方を惚れさせようと思っただのも本当ですわ。意地でも貴方を惚れさせようとして勝負を申し込むんでいるのがいい証拠ですわね」

「ならなんで？」

「二つ目の理由としましては私が帝国人だからですわね。私を一撃で倒した強者である貴方に心が惹かれたから。帝国人なら大体の人はそうですし」

強者に惹かれる。それは確かに実力至上主義を掲げている帝国人ならあり得そうなことだ。

「二つ目の理由としましてはこうして貴方と勝負するのがとても楽しいのですわ。今までにない程に私の心は踊っておりますの。貴方ともつと戦いたい、勝負したい、その強さをこの身と心に刻み込み私だけのモノにしたいとそう心の底から思えるほどに私は貴方を求めていますわ」

「戦闘狂はお断りだ……」

「あら残念。ですが私はそれ以上に貴方が欲しい。貴方の全てを私のモノにしたいのですわ。故に私は貴方を私の所有物にするまでどこまでも貴方を追いかけますわ。王国だろうと別の国であろうとも別世界でも私は貴方を追い続けて決して逃がさない。貴方を私のモノにするその日まで絶対に逃がしませんわ」

ゾクリと浩二達は悪寒が走り、浩二は見覚えのあるその瞳に気づいた。

(あの瞳は香織と同じ……ッ！)

南雲ハジメに恋心を抱いて犯罪一步手前までハジメをストーキングしていた頃の香織と同じ瞳。何度もやり過ぎないように浩二は雫と共に止めに入った際に見てきたその瞳は香織以上に危ない光を宿している。

テイオのような変態だと思えば違った。レイナの瞳から感じる狂気はストーカーのそれに近い。

もし、香織に第二の天職があればそれは？「追跡者」と断言できる。そんな香織が身近にいた浩二だからこそ気づいた。このまま放置しておけば第二の変態ではなく第二の香織が誕生してしまう。

(使うか……?)

浩二は？「侵入」の派生技能である？「記憶操作」を使ってレイナの記憶から平野浩二を消そうと思案する。しかし相手は一応は帝国の令嬢だ。両者同意の勝負でならともかく、一方的それも浩二の個人的な理由でレイナの記憶を消して責任を取れとも言われたらまずいから使うのに躊躇いを覚えてしまう。

ここは帝国。そして帝国は浩二を欲している以上は下手な真似はできない。怪しい行動を取ればそれに付け込んで平野浩二を帝国のモノにしようと画策しているはずだ。

「ふふ、私が貴方を諦めるのを諦めてくださいませ」

浩二は確信した。

こいつは絶対に諦めない。それこそ香織がハジメを諦めないのと同じように諦めようとしなない。

（俺は、とんでもない女に狙われてしまった……）

浩二は死んだ魚の目で見上げた。

主人公23

ハジメ達はシアの家族、ハウリア族を助ける為に大迷宮の攻略を後回しにして帝都に赴いていた。雑談と情報収集をしながら帝都内を歩いているとハジメはふと思ったことを浩二αに訊いてみた。

「浩二α。そう言えばオリジナルのお前も姫さんと一緒に先に帝都に来たよな？ やっぱり帝城内にいるのか？」

帝国に捕まっているハウリア族とはある親切な元牢番が快く教えてくれたこともあって現在ハウリア族は帝城にある地下牢にいることが判明した。そこでハジメは先にリリアーナと共に帝城にいてであろうオリジナルの方の浩二にどうか協力できないかを浩二αに訊いてみた。

「いや、オリジナルの俺は帝城より少し離れた場所にいるようだ」

浩二のオリジナル魔法である？クローン”は浩二自身の肉体と魂を複製している為に互いにどこにいるのか大まかな位置は常時把握できるようになっている。

「……シアさんの家族が捕まっているのに浩二は何してるんだ？」

浩二もハウリア族が帝国に捕まっているのは知っているはずだ。それなのに助けようとしてもしていない浩二に光輝は歯噛みしながらそう呟く。そこに浩二αが。

「いや、光輝。オリジナルは助けたくても助けられないんだよ。その理由わかるか？」

「助けられない理由なんてない筈だろ！　すぐ近くにいるのなら助けるのが当然だろ!」

いつもの正義スイッチをONにした光輝が浩二αにそう物申すが……。

「ならオリジナルがハウリア族を助けた後はどうなると思う？」

「……どう、とは？」

「まず真っ先に王女様が疑われるな。ハウリア族を逃がした罪に問われる可能性が高い」

「なっ!?!　リリイは関係ないだろ!?!」

「そうだな。だけど帝国にそんなことは関係ない。帝国にとってハウリア族、亜人族は自分達の所有物であって逃がす理由がない。それならば他国の人間、リリイに容疑が向けられる。当然、オリジナルである俺にもな」

そして残念なことにそれが実行できるほどの実力を浩二達は有している。

「それは……」

「それに仮に助けたところでどうやってハウリア族を帝城から樹海まで連れて行くんだ？俺もオリジナルも南雲のように複数人を一度に移動させる手段なんてないぞ？樹海に連れ帰れたとしても帝国からの亜人族の捕獲活動が激化する可能性だってある。それでも助けた方がいいのか？」

「……」

「奴隷にされている亜人族を助きたい気持ちはわかるが、助けた後のことも考えろ。恵理のような存在を増やしたくはないだろう？」

浩二αに言い負かされて黙り込む光輝。自身が恵理のような存在を生み出した元凶だと自覚しているからこそ何も言えなくなり、黙り込んだのだろう。

「話は終わったか？それなら浩二α。平野がいるところに案内してくれ」

「了解。こっちだ」

浩二αを先頭にハジメ達はいくくと、帝城のすぐ近くにある訓練場と思われる場所に到着する。しかし、訓練場というには人がいない。それどころか近くを通った帝国兵がそこを避けるように移動している。

ハジメ達は首を傾げながら浩二αに？ここで合っているのか？“という視線を向けるも浩二αは頷いて肯定した。怪訝しながらもハジメ達は訓練場に足を踏み入れてそこであるモノを目撃した。

「このメス豚があ!! 強情っぱりもいい加減にしやがれ! お前は家畜だ! 家畜は家畜らしく鳴いている!」

「甘い、甘いですわ! この程度で私が根を上げるとお思いで!? 随

分とお優しいことぞ！」

「上等だ！ この？ピー」が!! お前が根を上げるまでとことん痛めつけてやる!!」

鎖で縛り上げて激しい罵倒と共に鞭打ちする浩二と鞭を打たれながらも笑みが消えないどころか更に挑発する女性。それを少し離れた位置から呆然としながら死んだ魚の目で見守っているエフェルとイリエの姿にハジメ達は啞然呆然とせずにはいられない。

「なにがあった!? オリジナル!!」

浩二αがハジメ達の思っていることを代弁してくれた。その声に気付いたのか、浩二が後ろに振り返ってようやくハジメ達の存在に気づいた。

「……ああ、南雲それに雫達も帝都に来たんだな」

そしてごく普通に声をかけてきた。

「いや、お前、帝都に来てまで何してんだよ……?」

「見ての通り勝負だが?」

——そんなデートがあるか!!

ハジメ達一同の心情は見事一致した。どう見てもただのアブノーマルなプレイにしか見えない。

「いや、オリジナル。いくら縛られている女性がオリジナルに惚れてどうにか諦めさせようとしているのはわかるが、傍から見たらただの変態だぞ?」

「しょうがねえだろ? どうにか俺を諦めさせようとしたら自然とこうなったんだよ。あ、とりあえず? 戻れ」

浩二αは浩二と一つになって元に戻る。

「あら? 浩二のご友人でして? お初にお目にかかりますわ。私はレイナ・デュークと申します。夫共々よろしくお願ひしますわね」

縛られて鞭打ちされていたのにご丁寧にこやかに挨拶してくるレイナにハジメ達は軽く引いた。え、なにこの人? どうして普通に挨拶してるの? 縛られて鞭打ちされているのに。だがしかし、再び浩二の鞭が唸る。

「誰が発言を許可した!? お前が発していい言葉は? 浩二の事を諦め

ますの一言だけだ！ それすらもできないのか!? この?ピー!!

「淑女たるもの挨拶は肝心ですわ。それが夫のご友人であればなおさら」

「誰が！ いつ！ お前の夫になった!? 妄想も大概にしやがれ!!」

「いくらご友人の方の前だからといってそんなに照れなくてもよろしくてよ？ ここは素直に私のモノになりなさいな」

「誰がなるか!？」

ビシッバシッと打撃音が響き渡る。

ハジメ達は納得した。道理で誰も近づこうとしないことに。

こんなものを見せられたら誰も近づこうとは思わない。しかし、ティオだけはもの凄く羨ましそうに息をハアハアしていらっしやる。

「うわ……SMだよ……」

「まあ、その素質はあつただろうな」

「ああ、今の浩二、今までに見たことがないぐらいに輝いている」

「……そうね」

「だ、大丈夫だよ、雫ちゃん！ 普段の浩二くんはいい人だから！」

鈴十幼馴染ズはどこか遠い眼差しで呟き、雫はこんなDSに心底惚れられている事にどこか危機感を抱く。しかし、浩二の恋を応援している香織は懸命に浩二のフォローに入るが目の前でアブノーマルな光景を見せられている以上はそのフォローも虚しく終わりそうだ。

「……なぜでしょうか？ 何故か急に浩二さんと父様達を会わせてはいけない気がしました」

「……シア、もう手遅れ」

「ハアハア……本当にエフェルが羨ましいのじゃ……。ご主人様に負けず劣らずの罵声を毎日のように浴びれるのじゃから堪らんじやろうてえ……」

「それならお前も逝ってきやがれ」

ハジメ達の眼前に映るのはただのアブノーマルなプレイ。浩二的にはそのプレイをする理由があるようだけど鞭を振るう度に見せる笑顔は誰がどう見てもただのDSである。

「あ、そうだ。おい、南雲」

「なんだ？」

「？侵入」

ハジメの額に手を当てて灰色の魔力がハジメの頭を包み込むとそれと同時に帝城の構造と帝城の地下牢獄の道のがハジメの頭に流れ込んでくる。

「役に立つか？」

「……ああ、十分だ」

どうやら浩二はただアブノーマルなプレイに興じていたわけではなかったようだ。ちゃんとハウリア族を助ける為の事前準備はしていた。

「ああそれと、王女様や皇帝陛下達は今日は色々と忙しそうにしていたから王女様に会うのなら明日にしてやれよ？」

——仕込みは完了。ハウリア族を助けるなら今夜がベストだ。

暗にそう告げている浩二にハジメは気付いて頷く。

「そうか。それなら姫さんに会うのは明日にしとくか」

これで潜入もスマートにできるとわかったハジメ達は踵を返してその場から離れていく。

「なに悦んでいやがる！ この卑しいメス豚がッ！ ？ピー”して？ピー”されたくなかったらさっさと俺の事を諦めやがれ!!」

「諦めませんわ！ できるのならどうぞご自由に！ 貴方を私のモノにするまで私は決して折れませんわ!!」

背後から聞こえる罵声と打撃音。ハジメ達は耳を塞いで速やかにその場から離れていく。

主人公24

「どうやら無事に助け出せたようだな……」

帝城内の一室で浩二は帝城内で地下牢のハウリア族が脱獄したという話を耳にしてハジメ達は無事にハウリア族、シアの家族を助けることが出来たことに一安心する。

それ以外にも仮面集団の騒ぎもあるが、帝城内ではリリアーナと皇太子の婚約発表を兼ねた歓迎パーティーが催されることになっており、リリアーナ達はその準備で大忙しだ。

「浩二様、よろしかったのでしょうか？」

「何が？」

「リリアーナ姫殿下にも今回のことについて説明した方が……」

「その必要はない。それにこれ以上王女様に負担を強いらせるわけにはいかないしな」

リリアーナにハウリア族の脱獄も仮面集団の騒動のことについての説明は不要だと告げる。ただでさえ今は余裕がないのにこれ以上の負担を強いらせるのは酷というものだ。

すると部屋の扉がノックされて使用人の一人が扉を開ける。

「失礼します。浩二様、ガハルド皇帝陛下がお呼びです。すぐに謁見の部屋へ移動をお願いします」

「わかりました」

今日はレイナと勝負^{デート}をしていない理由はまさにこれである。ガハルド皇帝陛下との謁見がある為だ。とはいえ、いくら勝負^{デート}がないとはいえ……。

「あら、浩二。昨夜は随分と面白いことがありましたわね」

レイナと会わないわけではない。レイナもまた浩二同様にガハルドに呼ばれていたのだ。

「そうみたいだな」

「ええ、それで気になって帝城に住む方にお話を伺ってみましたら、なんでも昨夜急に眠気が襲ってきたようですわ。それも帝城に住む方全員が。その間に兎人族が脱獄したとか。不思議なこともあるものです

わね」

「今夜の準備で昨日は忙しそうにしていたからな。兎人族もそれに気付けてチャンスだと思っただんじゃね？」

「そのようすわね。それに帝都では仮面集団の一人が光属性の魔法を自在に操り、眩い光を纏うアーティファクトの剣を振るっていたそうすわ。まるで噂にきく勇者のような剣を」

「勇者願望でもあるんじゃないのか？ その仮面集団」

「ふふ、そうかもしれませんわね」

にこやかに微笑みながら浩二の表情を観察してくるレイナだけど浩二の表情は崩れない。僅かな変化すら見せない。するとレイナは……。

「まあ、別にそれらに浩二が加担していようがしてしまいながらもいいですわ。それらを許してしまつた帝国が悪いのですから」

その言葉は浩二からしたら少し意外だった。てつきりもう少し探りでも入れてくると思つていたから。

「今の私は浩二を私のモノにできるのなら帝国が滅んでもいいとさえ思つておりますので」

「おい、帝国の令嬢」

思わずツツコミを入れた。帝国の令嬢とは思えない発言だ。

「冗談ですわ。ただそれだけ私は貴方に執着愛しているという話ですわ」

「重いわ……」

冗談か本気かわからない会話をしながら浩二達は謁見の部屋に到着する。

通された部屋は三十人は座れる縦長のテーブルが置かれた、ほとんど装飾のない簡素な部屋だった。そのテーブルの上座の位置に、頬杖をついて不敵な笑みを浮かべているガハルドがいた。彼の背後には二人、見るからに手練れと分かる、研ぎ澄まされた空気を纏った男性が控えている。そして、部屋の中に姿は見えないが、壁の裏に更に二人、天井裏に四人いることぐらい浩二達は気付いている。

「久しぶりだな、平野浩二。お前のおかげで俺は暫くの間、不能扱いさ

れたぞ?」

「お久しぶりです、皇帝陛下。クソ野郎あの時のことは深く反省しております。チツ、不能になっちゃえばいいのに申し訳ございません」

露骨に如何にも取り繕った顔で謝罪するも、ガハルド皇帝陛下相手にその態度を取る浩二にレイナは面白さのあまり、口に手を当てて思わず肩を震わせる。

「フン、心にもないことを。それとそんな取り繕った顔も声もやめろ。俺は素のお前の方が面白い」

「それならそうする」

浩二はあつさり取り繕った顔と声をやめる。

「少ししたらリリアーナ姫もここにやってくるが、その前に一つ聞かせろ。レイナとの式は何時にするんだ? 皇帝である俺が直々に祝つてやる」

「……いったいどうしてそうなった? 俺はこいつと式を挙げるつもりもなければ帝国に仕える気もない」

「あら、つれませんわ。せつかなのですから今夜のパーティーで皇太子とリリアーナ様と一緒に私達の婚約も祝つて頂きましょう」

「それはいいな。今なら少し手間が増えるだけで終わる」

「勝手に話を進めるな。俺はお前と結婚する気もなければ婚約するつもりもない」

「あら残念」

ちつとも残念そうにしないレイナを無視して浩二はガハルドに言う。

「というよりも皇帝陛下。どうして俺にこの女を差し向けてきた?」

おかげでこっちはいい迷惑だ」

「あくそのことなんだが、俺も正直レイナがそこまでお前に執着するとは思ってなかったんだ」

つまり、あわよくば程度の期待で浩二にレイナを差し向けただけのようなのだ。ガハルド自身、レイナがそこまで浩二に執着するとは予想外のことだったらしい。

「まあ、いいじゃねえか。それだけお前の事を気に入っている証拠だ

ろ？ 婚約しちまえ」

「それで帝国の為に働けと？ 断固拒否する」

「たくつ、頭の固いガキだ……」

ガハルドはガリガリと頭を掻きながら悪態を吐く。そこでハジメ達が謁見の部屋に到着した。

そこでガハルドはハジメにアーティファクトの供与のこと尋ねたり、その実力や人格のことを確かめたり、シア、兎人族のことについて尋問するもハジメはのらりくらりとやり過ごした。ガハルドはハジメのことについて最低限のことを確認すると、爆弾発言を残して部屋を出て行った。

「ああ、そうだ。今夜、リリアーナ姫の歓迎パーティーを開く。お前達も是非、出席してくれ。姫と息子の婚約パーティーも兼ねているからな。真実は異なってもそれを知らないのなら？ 勇者？ や？ 神の使徒」の祝福は外聞がいい。頼んだぞ？」

そう告げて颯爽と部屋から出て行ったガハルドに突然の爆弾発言から正気を取り戻した光輝達がリリアーナに詰問する。

「リリイ、婚約ってどういうことだ！ 一体、何があつたんだ！」

「それは……たとえ、狂った神の遊戯でも、魔族が攻めてくれれば戦わざるを得ません。我が国の王が亡くなり、その後継が未だ十歳と若く、国の舵取りが十全でない以上、同盟国との関係強化は必要なことなのです」

なんでもないように語るリリアーナに光輝は絶句する。

代わりに雫が厳しい表情で尋ねた。

「それが、リリイと皇子の結婚ということなのね？」

「はい。お相手は皇太子様ですね。ずっと以前から皇太子様との婚約の話がありました。事実上の婚約者でしたが、今回のパーティーで正式なものとするのです。魔族の侵攻で揺らいでいる今だからこそ、というわけです」

「王国は？ 協議が必要ではないの？」

「事後承認ではありませんが、反対はないでしょう。元々そういう話だったわけです。それに、今の王国の実質的トップは私です。ラン

デルは未だ形だけですし、お母様も前には出ない人ですから。なので、問題はありません。今は何事も迅速さが必要な時なのです」

リリアーナは極めて冷静だ。悲劇のヒロインのような雰囲気は微塵もない。ただ、自分の役目を全うすべく全力を注いでいる、という様子だ。

光輝は、苦虫を噛み潰したような表情をしながら口を開いた。

「……リリイは、その人のことが好きなのか？」

その質問には、流石のリリアーナも困った顔になった。

「……好き嫌いの話ではないのです。国同士の繋がりのための結婚ですから。ただ次期皇帝陛下候補ともなれば側室を多く娶る必要があつて、現在の愛人の方々の中からも選ばれる方がいると思います。……ふふふつ、私の立場上、彼女達を差し置いて正室になるのですよ。すごいでしょう。まあ、後宮内の調整に関しては、私が最年少ですし、胃がしくしくしちゃうのですが……」

冗談めかしてドヤ顔をしたり、わざとらしくお腹をさすったりして雰囲気明るくしようとするリリアーナ。するとそこにレイナが声を発した。

「しかし、リリアーナ様も大変ですわね。あの皇太子の婚約なされるのですから」

不意に発したその言葉に光輝は思わず尋ねる。

「あの、それはどういう意味で……？」

「あら、聞いておりませんか？ リリアーナ様の婚約者であるバイアス皇太子はまさに帝国皇太子のような方ですわ。欲しいものは奪う、弱者は強者に従うのは当然。自分に楯突く人を蹴って屈服させることが何よりもお好きな方ですわ。まあ、それができるだけの実力者ではありませんが」

なんてこともないように告げられるレイナの言葉に光輝達は啞然とし、リリアーナの顔も僅かに青ざめる。

「な、なんでそんな奴がリリイと！ そんなのおかしいだろ!」

それを聞いて一番に声を荒げたのは光輝だ。

——だがしかし。

「何もおかしくはありませんわよ？ 勇者様。先ほどもリリアーナ様が仰った通り、これは国同士の繋がりのための結婚。つまり、両国の関係強化を示すことですね。そこに個々の感情など不要ですよ」
「だが、それでも……ッ！」

「いくら勇者様が言い募ろうともこれは国の為。ああ、それともこう申し上げた方がよろしくて？ リリアーナ様には両国の為に生贄になって貰いますわ。リリアーナ様という尊い犠牲のおかげで両国の繋がりを強化することができますわ、と」

「そんな言い方はないだろう!? どうしてそんなことが言えるんだ!？」

「似たようなものですわよ？ バイアス皇太子に嫁ぐというのは。それとも勇者様がどうかしてくださいませの？」

「それは……けど」

何も言えない光輝にレイナは呆れるように口を開く。

「まるで子供ですわね。嫌なことに駄々を捏ねるだけの子供。リリアーナ様とバイアス皇太子の結婚を否定されたのでしたらそれ而代之の何かを代替しませんと。ああ、それとも勇者様がリリアーナ様を攫って逃避行というのもロマンがあるのでは？」

「……ッ！」

光輝はただ歯を噛み締めながら睨むだけで何も言えなかった。

「まあ、同じ女としてリリアーナ様に言えることは一つだけ。バイアス皇太子に処女を捧げたくないのでしたらまだ気が許せる相手に捧げた方が幸せですわよ？」

「……ッ！」

レイナの言葉にリリアーナはドレスの裾を強く握りしめる。その言葉に光輝は何か言おうとしたが、雫が光輝を止める。

「光輝、落ち着きなさい。それと、そこまで深刻にならなくてもいいかもしれないわよ？」

光輝が、雫に愕然とした表情を向ける。心配じゃないのかと、責めるような目を向ける。だが、続く苦笑い気味の香織や鈴、龍太郎の言葉でハツとした。

「う、うん。そうだよ。それどころじゃなくなるかもだし……」
「歓迎パーティーやるんだね……。鈴、なんだかお腹が痛くなってきたよ」

「ある意味、パーティー、だな。歓迎はしたくないと思うけどよ」
光輝は無言になった。すごく微妙な表情になる。

これから起こることの結果次第では、どっちにしろ……。

そんな彼等の様子を見て、

「え？ え？ ちよつと皆さん？ なんですか、その感じ。もの凄く不安に駆られるのですけどー！」

リリアーナは震えながら問い質したが、やはり答えは返って来なかった。胃のしくしくが強くなったリリアーナは浩二にお薬でも貰おうとするも、そこには浩二達の姿はなかった。

「いいのか？ さっきのことを皇帝陛下に報告しなくて」

謁見の部屋から出た浩二は帝城の通路でレイナにそう問いかけた。レイナは帝国の人間。先ほどの光輝達の態度から何かを企んでいることぐらいは明白だ。それをガハルドに報告しないことに疑念を抱くもレイナは言う。

「別に構いませんわ。報告する義務などありませんし、仮に勇者様方が何かを企み、それを実行して成功したとしてもそれは帝国側が弱かっただけのお話ですわ」

あつさりと言いつつ切ったレイナを見て浩二は改めて思った。

良くも悪くもこいつは実力至上主義を掲げる帝国人だと。

主人公25

リリアーナとバイアス皇太子の婚約パーティーの前にリリアーナはヘリーナを筆頭に、帝国側の侍女達を交えてドレスの選別などに精を出す。

「まあ、素敵ですわ、リリアーナ様！」

「本当に……まるで花の妖精のようです」

「きつと、殿下もお喜びになりますわ！」

帝国側の侍女達がこぞって称賛の言葉を並べた。

決してお世辞ではない、純粋な称賛であることは、彼女達のうつつとりました表情が証明している。

十四歳という、少女と女の狭間にある絶妙な魅力が、淡い桃色のドレスと相まって最大限に引き立てられていた。まさに花の精と表現すべき可憐さだ。

「ふつ、当然でしょう」

「ヘリーナ、どうして貴女が胸を張っているのですか」

何故かドヤ顔のヘリーナに小さく笑ってから、リリアーナ自身も自分のドレス姿に納得したように頷く。

いくらこれが政略結婚であり、バイアス皇太子がレイナの言っていた嫌な奴でも夫になる相手であることには変わらない。であるなら、パートナーとして恥をかかせるわけにはいかないし、自分の婚約パーティーでもある以上、リリアーナも最大限に着飾ろうと思っていた。

それでも？ 憧れがある。絶体絶命の姫を、颯爽と現れて救う英雄のお伽噺。偶然の出会いに惹かれ合って、身分違いでありながらも多くの障害を乗り越えて結ばれるというラブストーリー。

馬鹿馬鹿しい。あり得ない未来だ。

頭を振って頭から追い出す。

リリアーナは聡明であったが故に、幼い頃から自分に課せられた使命とも言えるべき在り方を受け入れていた。だから、心の底では嫌悪感を抱く相手であっても、立派な妻になろうという気持ちは本当であり、今夜のパーティーも立派に皇太子妃として務め上げようと決意し

ていた。

叱咤するように、自分に言い聞かせる。

と、その時、部屋の外が騒がしくなった。かと思つた次の瞬間、ノックもなしに扉は開け放たれ、大柄の男が遠慮の欠片もなくズカズカと部屋の中に入ってきた。

「ほう、今夜のドレスか……まあまあだな」

「……バイアス様。いきなり淑女の部屋に押し入るといふのは感心致しませんわ」

「あん？ 俺はお前の夫になる男だぞ？ なにを口答えしてんだ？」

注意したりリアーナに、粗野かつ横暴な言葉で返した者こそ、リアーナの婚約者であるバイアス・D・ヘルシャーだ。外見は父親であるガハルドに似ている年齢は二十六歳。

リアーナは王族同士の付き合いで一年ほど前にも顔を合わせているが、相も変わらずといった態度だ。その度の過ぎた横暴振りも、他者を見下す態度も、嗜虐的な雰囲気も、リアーナをまるで玩具を見るような目で見てくるところも、まるで変つていない。

上から下まで舐めるように見てくるバイアスの目に、リアーナは悪寒を感じてぶるりと震えた。

「おい、お前ら全員出ていけ」

ニヤアと口元を歪ませると、侍女や近衛騎士達にそう命じた。帝国側の侍女達は慌てて部屋を出て行ったが、当然、近衛騎士達は渋る。ヘリーナなど露骨に不審と憤りを瞳に浮かべている。

それを見てバイアスの目が剣呑に細められたことに気がついたりリアーナは、何をするか分からないと慌ててヘリーナ達を下がらせた。

「何かありましたら、必ず大声をお上げください」

去り際にヘリーナが小さな声で耳打ちする。リアーナも小さく頷いた。

最後まで心配そうにしながら全員が部屋から出て扉が閉まる。

「ふん。飼いだの羨ぐらい、しつかりやっておけ」

「……飼いだではありません。大切な臣下ですわ」

「相変わらず反抗的だな？ ククツ、まだ十にも届かないガキの分際で、いつちよ前に俺を睨んだだけはある。あの時からな、いつか俺のものにしてやろうと思っただけなんだ」

そういうと、バイアスは顔を強張らせつつも真っ直ぐに自分を見るリリアーナに心底樂しげで嫌らしい笑みを向けた。そして、いきなり彼女の胸を鷲掴みにした。

「っ!? いやあ！ 痛っ！」

「そこそこ育ってんな。まだまだ足りねえが、それなりに美味そうだな」「や、やめっ」

乱暴にされてリリアーナの表情が苦痛に歪む。その表情を見て、ますます興奮したように嗤うバイアスは、そのままリリアーナを床に押し倒した。

リリアーナは悲鳴を上げるが、外の近衛騎士団は反応しない。

「いくらでも泣き叫んでいいぞ？ この部屋は特殊な仕掛けがしてあるから、外には一切、音が漏れない。まあ、仮に飼犬共が入っても、皇太子である俺に何ができるわけでもないからな。なんなら、処女を散らすところを奴等に見てもらおうか？ くはははっ」

リリアーナはこれからされることに顔を青ざめてようやくレイナの言っていた言葉を実感した。

バイアスは自分に楯突く奴を黽って屈服させることが何よりも好きで、自分はその標的になっていることを。

「あなたという人はっ……」

「なあ、リリアーナ。結婚どころか、婚約パーティーの前に純潔を散らしたお前は、どんな顔でパーティーに出るんだ？ ああ、楽しみで仕方ねえ」

レイナの言う通り、この男はある意味正しく帝国皇太子である。それでもと妻として支え諫めていけば、いつかきつと立派な皇帝になってくれる、いや、自分がそうしてみせるという考えも決意も甘かった。

バイアスに恥をかかすまいと選んだドレスが、彼の手により引きちぎられる。

シミ一つない玉の肌が晒され、リリアーナは羞恥で顔を真っ赤にし

た。

唇を奪うつもりなのか、バイアスの顔がゆつくりと近づいてくる。まるで、リリアーナの恐怖心でも煽るかのように目は見開かれたままだ。

片手で顎を掴まれ、顔を逸らすこともできないリリアーナは、恐怖と羞恥で遂に流れ落ちた涙すら気づかずに、ふと思った。

望んだ通りの結婚なんてあり得ないと覚悟はしていたけれど、こんなのはあんまりだと。本当は、好きな人に身も心も捧げて幸せになりたかったと。

それは、王女という鎧で覆った心から僅かに漏れ出たただの女の子としての気持ち。そうして、香織や雫に聞いた話を思い出す。

ピンチの時に颯爽と現れて、襲い来る理不尽を更なる理不尽で押し潰し、危難の沼から救い上げてもらったという、まるでお伽噺のような物語。

もし、願ったなら、自分にも救いが訪れるのだろうか。

リリアーナは、王女としての自分が「何を馬鹿な」と嗤う声を聞きながら、それでも止められず心の中で呟いた。

—— 助けて

その時だった。

「こういう時は助けてって言えばいいんだよ、王女様」

聞き慣れた声と共に打撃音がリリアーナの耳朵を震わせた。

「え……？」

突然の事に目を見開いたりリアーナの視界には浩二がいた。

「少なくともお前を助けに来る奴はここにいるんだから」

ポンと優しくリリアーナの頭に手を置いて撫でる浩二にリリアーナは？ どうしてここに……？ と目で訴える。

「この帝城に入る前からずっと傍にいたぞ？ ？ 改造」

浩二は自らの身体と装いを改造するとそこには見覚えのある近衛騎士の姿が。

「それと俺はオリジナルの複製体である浩二βだ。ヘリーナさんに頼んで近衛騎士に紛れ込んでいたんだよ。万が一に備えてな」

浩二は浩二αをハジメ達と共に浩二βを近衛騎士に変装してリリアーナの傍にいた。万が一に原作知識とは違う場面に遭遇しても大丈夫なように。これは原作通りではあったものの思わず浩二βはバイアスを殴り飛ばしてしまった。するとここで浩二βに殴り飛ばされたバイアスが怒りで顔を歪ませながら起き上がる。

「クソガキがあ……ッ！ いったい誰に手を出したのかわかってんのか!? 俺はこの国の皇太子だぞ!? 神の使徒だがなんだか知らねえが俺を殴ったことを後悔させてやる!?!」

怒り狂うように吠えるバイアス。しかし、ここにいるのはかつて皇帝陛下すら漢女にしようとした男である。

「ん？ 皇帝陛下にでも言うのお？ パパ、こいつ僕を殴った、僕の代わりに怒ってなんて〜。プークスクス！ いい大人が情けないの〜。あ、もしかしてパパにも叩かれたことがなかったの？ それはごめんね〜ぼく〜」

ビキリ、とバイアスの中で何かが切れた。しかし浩二βは止まらな
い!

「あれれ〜どうしたのかなあ〜？ もしかして泣いちゃう？ 泣いちゃうの？ 赤ちゃんのようにえ〜んって泣いちゃうほど痛かったんでちゆか？ ごめんね〜、一応手加減してあげただけど……あ、回復魔法はいるかな〜？」

それはもう煽る煽る。うぜえと思わせる某ゴーレムさんのように煽りまくる。

「この——」
クソガキ!! と吠えるよりも早く浩二βがバイアスの顔を鷲掴みにして宙づりにする。

「!?!? —— つ!!」
「大人がガキみたいに吠えるなよ。みつともない」

冷淡に告げられるその言葉と一切の熱を宿さない冷酷な眼差しを向けるバイアスはそこで初めて戦慄する。

(う、動けねえ! この俺がこんなガキに……ッ!!)

鷲掴みにされた顔を引き剥がそうと暴れるも浩二βはビクともし

ない。自分よりも年下の子供相手にまるで手も足も出ないバイアスは生まれて初めて他者に対する恐怖心が生まれた。しかし、バイアスは何かの間違いだとその恐怖心を誤魔化すかのように両手両足を動かして浩二βに拳や蹴りを入れるもまるで鋼鉄でも叩いているかのようにピクリとも動かない。それどころか驚掴みにされている手に力が込められる。

「……………つ……………う」

声も出せない激痛。バイアスの顔が苦悶に歪む。

「……………ああそうそう。オリジナルから共有された情報ではバイアス皇太子様は自分より弱い者を蹴る趣味があるようですね。ふふ、奇遇ですね。実は私も好きなんですよ。自分が他人よりも強いつて勘違いして、他人を見下すお調子者のプライドを粉々にするのが。よく雫や光輝達にもやり過ぎだと注意されましたよ。本当に貴方のような人なんて壊しても誰も困らないというのに」

まるで日常会話でもするかのように穏やかな口調で語る浩二βだが、バイアスの顔は赤を通り越して赤黒くなってきた。ミシミシと自分の頭の骨が軋む音が聞こえてくる。

「どうですか？ 私は今、貴方のプライドをズタズタにできていますか？」

バイアスは答ええない、いや、答えられない。何故なら今まさにその通りだからだ。生まれて初めて圧倒的で絶対的な力を我が身に受けている。これまでの自分が積み上げてきたものが崩れようとしている最中なのだ。しかし、浩二はそれをするのを止めてバイアスを解放した。

「まあ、安心してください。私は弱い人を虐める趣味はありませんのでここで解放してあげましょう。但し、よく覚えておいてください」
浩二はバイアスの髪を掴み上げて強引に顔を上げさせ嗤いながら告げる。

「二度目はない。次はお前の身体も心もズタズタにしてやる。消えろ」

そう告げられたバイアスは怒りや恐怖や屈辱など。様々な感情で

顔を歪ませながら逃げるように部屋から出て行った。

(あそこまで言えばもう手出しはしないだろう)

バイアスがこのことを皇帝陛下、父親に報告することはないだろう。自分より年下のガキに手も足も出ずに逃げ出したなんて情けないことをバイアスのようなプライドの高い奴が言うはずがない。仮に皇帝陛下に告げたとしてもガハルドなら？弱いお前が悪い”と言いつ切るだろう。

そうして取り残された浩二βとリリアーナだが、浩二βはリリアーナに言う。

「すぐにヘリーナさんが来ますので後処理をお願いします。では」

そうして浩二βは溶けるように姿を消した。どうやらオリジナルの方の浩二が魔法を解いたらしい。

「こ、浩二さん!？」

破れたドレスの前を寄せて肌を隠し、窓際に行こうとするも危機から逃れることができた安心感で腰が抜けて座り込む。啞然とするなか、少ししてリリアーナは思わず微笑みを浮かべた。

「ありがとう……浩二さん」

ポツリと零れた感謝の言葉。

リリアーナがバイアスの婚約者である以上、今、助けられたところで、それはその場凌ぎでしかないと分かっている。だが、それでも、今この時、救いを求める心の叫びに応えてくれたことが、どうしようもなく嬉しかった。

胸元で破れた服を押えてギュツと握られたリリアーナの両手は、あるいは、他の何かを握り締めているかのようだった。

主人公26

帝城内のパーティー会場は、流石と言うべき絢爛豪華さだった。立食形式のパーティーで、純白なテーブルクロスが敷かれたテーブルの上には何百種類もの趣向を凝らした料理やスイーツが並べられている。装飾や調度品も素晴らしく、つい目が奪われる華やかさだ。そのパーティーで帝国貴族達はハジメや浩二以外にも？勇者一行は注目の的で、少しでも面識を得ようと話しかけていた。当然個人的な繋がりを持ちたいという下心たつぷりで。

もともとハジメそれと浩二に話しかけている者達だけは、別の意味で下心が満載だ。

彼等の目的は言わずもがな。

パーティーが始まってから片時も傍を離れない美貌の女性陣だ。特にハジメの傍にいるユエ、シア、ティオ、香織。それぞれの魅力を引き出すドレスを着ており、注目の的だ。しかし浩二の傍にいるティニア、エフェル、イリエも負けず劣らずだ。

「そう言えばメイド服姿じゃないティニアは凄く新鮮だな……。うん、綺麗だ」

「ふふ、ありがとうございます」

薄っすらと微笑むティニアはいつも身に付けているメイド服ではなく、空色を基調とした華やかなドレスだが、流れるような銀髪によく映えている。

「旦那様。私はどうですか？」

「ああ、エフェルもよく似合ってる」

エフェルはティオとは色違いの白いロングドレス姿だ。身体のラインが出るようなタイプのドレスなので凹凸の激しいボディラインが丸わかりである。ティオほどではなくとも十分に見事な双丘が浩二の傍で揺れている。

「あたしがここにいていいの……？」

「別に気にする必要はないと思うぞ？　ただ飯できると思っておけば」

人間族と同じように浅黒い肌は白く、耳も丸いイリエはスレンダーラインのドレス。髪と同じ赤いドレスはよく目立つ。

雫や鈴も帝国の令嬢方に負けなくらいに華やかなのだが、どうしてもユエ達と比べると大人しい印象なのであまり目立っていない。

光輝は帝国の令嬢に群がられて姿すら見えないし、龍太郎や鈴は料理を貪っている。

「雫。可愛いぞ」

「ありがとう……。お世辞でも嬉しいわ」

ティニア達という美少女に囲まれておきながら自分の方にまで歩み寄って褒めてくれた浩二にそう返す。

「俺がお前にお世辞を言うわけないだろ？ 本心だ」

「……はいはい。わかったわ」

いつものように対応する雫だが、浩二はそんなこと気にも止めずに褒めまくっていると。

「あら、こんなところにいましたのね。浩二」

レイナが現れた。

漆黒のプリンセスラインのドレス姿でいつものにこやかな笑みと共に歩み寄る。するとレイナは雫を一瞥してすぐに視線を浩二に向ける。

「浩二。私と一曲お相手をお願いしますわ」

「それで俺の事を諦めるのならいいぞ。最後の思い出としてな」

「あら、そんなことで私が諦めるとお思いで？」

「思っていないから言ってるんだよ」

流石の浩二もレイナの扱い方には慣れてきたようだ。

「まあいいですわ。そろそろ主役が来ますわよ」

レイナの言葉通り、今回のパーティーの主役であるリリアーナとバィアスがご登場。文官風の男が大声で風情たつぷりに二人の登場を伝えた。

大仰に開けられた扉から現れたリリアーナ。その姿に、会場の人々が困惑と驚きの混じった声を上げる。

リリアーナは、全ての光を吸い込んでしまいそうな漆黒のドレスを

着ていたのだ。本来なら、リリアーナの容姿や歓迎・婚約祝いという趣旨を考えれば、もっと明るい色のドレスが相応しい。

その如何にも「義務としてここにいます」と言わんばかりの澄まし顔と合わせて、漆黒のドレスはリリアーナが張った防壁のように見えただ。

パートナーのバイアスの方も、どこか苦虫を噛み潰したような表情であり、どう見てもこれから夫婦になる二人には見えない。それに時折浩二の方に視線を向けては睨んでいるが浩二は綺麗に無視^{スルー}。

会場は取り敢えず拍手で二人を迎え入れたものの、なんとも微妙な雰囲気だ。

困惑を残したままパーティーは進行され、会場に音楽が流れ始めて会場の中央では踊りが始まった。リリアーナとバイアスも踊るが、リリアーナはどこか機械的だ。いつものリリアーナらしくない。

(まあ、強姦未遂の後だからな……)

ティニア以外にも念の為にリリアーナの傍に置いていた浩二βから届いた情報で浩二だけはリリアーナの態度に納得している。

「さて、では浩二。私達も踊りませんか？」

「いやなんでだよ？ お前と踊るつもりは——」

ない。と言おうとした浩二にレイナは耳打ちする。

「そちらの方と踊りたいのではなくて？」

それを聞いた浩二は思わず固まる。

「踊りたいのでしたら淑女^{レディ}に恥をかかせない程度に殿方がリードしなければなりませんわ。貴方なら一度踊ればそれなりにできるでしょう？ その為に私で練習しませんこと？」

「……」

正直に言えば浩二は雫と踊りたい。だけど踊ろうとも踊り方がわからない。それならばレイナの言う通り、彼女で練習をすれば付け焼刃にはなるもある程度はできるようになれる。

浩二は少し悩んでうえで頷いた。

「……一回だけだぞ？」

「ええ、それで構いませんわ」

雫と踊りたい為に仕方がなくレイナと踊ることになった浩二だが、レイナは浩二と踊れただけでも満足そうだ。そして一通り踊り終えると浩二は雫に手を伸ばす。

「雫。一曲踊らないか？」

「……私は別に」

「あ、拒否権はないからな」

「え、ちよつ、ちよつと!？」

強引に雫の手を取って会場の中央に連れて行く浩二に雫は渋々ダンスに付き合う。浩二は事前にレイナと踊っていたこともあつてそれなりに様にはなっていたが、どうにも二人の間には微妙な距離がある。

「雫。もっとこっちに寄れ」

「で、でも、これ以上は……」

「ほら」

微妙に距離があつた為に曖昧な感じになっていたが、浩二が雫を抱き寄せることで形になってきた。だが雫は浩二と顔が近いことに意識して踊りどころではなかった。

少し離れた位置でティニア達が次は誰が浩二と踊るのか話し合っていた。香織は踊っている二人を少しだけ羨ましそうに見るもすぐに嬉しそうに微笑む。親友と幼馴染の仲が進展したことが嬉しいようだ。

(浩二ってこんな顔をしているのね……)

幼い頃から家族のように育つた雫は踊りながらそう思った。これほどまで至近距離で浩二の顔を見るのは初めてかもしれない。そのせいか余計に意識して心臓の鼓動が早く感じている。

(本当に変わったわね……)

内心でどこか寂しそうに呟いた雫はまるで置いて行かれた子供のようだ。

そうして雫との踊りを終えて浩二と踊ろうとティニアが進み出ようとしたが、その足は止まった。

「平野浩二様。一曲、踊って頂けませんか？」

「どうやらティニアが足を止めた理由はリリアーナのようだ。」

「バイアス皇太子と離れてもよろしいのですか？」

「挨拶回りなら大体終わりましたし、今はパーティーを楽しむ時間ですよ。もともと、何曲かは他の人と踊るものです。ほら、バイアス様も愛人の一人と踊っていらつしやいますし」

リリアーナの言う通りだ。浩二は一度ティニアに視線を向けるとティニアはリリアーナを優先して欲しいと目で訴えてきた。

「喜んでお相手致します。王女様」

「……はい」

ゆったりとした曲調の旋律が流れ始める。ゆらりゆらりと優雅に体を揺らしながら密着するリリアーナと浩二。

浩二の肩口に顔を寄せながら、リリアーナはそつと呟くように話しかけた。

「……先程はありがとうございました」

「別に気にする必要はありませんよ。個人的にもああいう奴は好きじゃありません」

「たとえそうでも嬉しかったですよ」

そう言って、リリアーナは浩二の肩口から少し顔を離すと、言葉通り嬉しそうな微笑みを浮かべた。

「それにしてもそのドレスとさつききの態度は当てつけですか？」

「ええ、婚約者を暴行するような夫にはこの程度で十分ですから。それより……私のあられもない姿を見ましたよね？ ああ、もうお嫁に行けません」

「あ、安心してくれ。小さい胸に興味は——」

浩二はリリアーナにおもつきり足を踏まれた。

「何か？」

「いえ、なんでもありません」

至近距離で迫力のある笑みを浮かべるリリアーナに浩二はそう答ええた。

「それよりも少々密着しすぎでは？ バイアス皇太子様が凄く顔をしていますよっ..」

「いいじゃないですか。今夜が終われば私は実質的に皇太子妃です。今くらい、女の子で居させて下さい。それとも、近い内に暴行されて、愛人達に苛められる哀れな姫の些細なわがままも聞いてくれないのですか?」

「それは確定ですか?」

「確定ですよ」

そこでリリアーナは、一度ギュツと浩二に抱きつくと言情を隠しながらポツリと、つい零れ落ちたかのような声音で呟いた。

「……もし……もし、?助けて」と言ったらどうしますか?」

リリアーナ自身、こんなことを聞くつもりはなかった。

帝国の皇子との婚姻関係の締結は今後の為にやらねばならないこと。両国が魔物と魔人族の襲撃によりダメージを負い、聖教教会総本山が消滅して不安定になっている北大陸の人々を安心させるために、見て分かる形で人間族の結束の強さを示さなければならぬ。

王族の一員として、果たさねばならない役目なのだ。たとえ、尊厳すら奪われかねない辛い結婚生活が待っていたとしても。そんなリリアーナに浩二は。

「助けるさ。他の誰でもないリリイがそれを望むのなら」

「え?」

初めて浩二の口から聞いたリリイという愛称。これまで頑なに?王女様”だったのに今確かに?リリイ”とそう呼んだ。

「あの日、リリイが俺を抱きしめてくれなかったら俺の心は折れていた。リリイがいてくれたから俺はこうしてられる」

雫にフラれたあの日の夜。浩二はリリアーナがいてくれたからこそまだ耐えることができた。抱きしめ、慰めてくれたから心が折れることはなかった。

「だから助けるさ。他の誰でもない俺を救ってくれたリリイの為に」
「で、ですが……」

浩二のお言葉を王女であるリリアーナが否定しようとしてくる。それは駄目だ。果たさなければならぬ責務だ。都合のいい夢想を抱くなど。しかし……。

「国の為とか、王族の責務とか、そういう理由をつけて自分を納得させる必要も、自分一人だけ辛い思いをする必要もない。それでもまだ懸念があるのならそんなもん全部俺がなんとかしてやる。だからもう一人で抱え込むな」

「——っ」

浩二の言葉が王女としてのリリアーナの呪縛を壊していく。

「もう少し周りに甘えてみる。何があってもリリイの味方でいてくれる奴なんて大勢いるんだから」

「……あ」

リリアーナは思い浮かぶ。いつも自分の傍にいてくれる人、心配してくれる人、味方でいてくれる人、そして助けようとしてくれる人達
の事を。

「……もう、浩二さんは雫という想いを寄せている人がいるのに、デューク家のレイナさん続いて私まで落とすつもりですか？」

「いや、そのつもりは全くない。特にあいつはない」

心外だとハッキリと口にする。

浩二は自分を救ってくれた恩返しのためでリリアーナを助けようとしているだけのつもりだ。するとリリアーナは「ふう」と息を吐くと、体を浩二に預けて、ただ今この瞬間のダンスを楽しむことにした。

そうして、余韻をたっぷり残して曲が終わり、どこか名残惜しげに体を離れたリリアーナは、繋いだ手を離さずに少しの間ジツと浩二を見つめて……「ありがとう」と呟いた。

咲き誇る満開の花の如き可憐な微笑みと共に。

それはただの十四歳の女の子の微笑み。あまりに純粹で濁りのない笑みは、それを見た全ての心を撃ち抜いた。そこかしこから熱の籠った溜息が漏れ聞こえる。

リリアーナは、他のお偉いさんと踊る必要があるようだったので、途中で別れてティニア達の所に戻った。

「浩二様。リリアーナ姫殿下も受け入れるのですか？」

「いや、なんでそうなるの？」

口説く意図は微塵もない。ただ自分を救ってくれた恩を返すつもりだけである。

「私はリリアーナ姫殿下なら喜んで歓迎しますよ。エフェル様も反対しないでしよう」

「そうですね。旦那様をお慕いしているのでしたら拒む理由はありませんし」

「どうして二人はそう増やそうとしてくるのかな……？」

ティニア達は何故か歓迎モードだ。浩二的には？大切。二人で十分だというのに。

すると司会進行役の男が声を張り上げた。どうやらガハルドがスピーチと再度の乾杯をするらしい。

壇上上がったガハルドが、よく通る声で話し始めた。

「改めて、リリアーナ姫の我が国訪問と、息子との正式な婚約を祝うパーティーに集まってもらったことを感謝する。いろいろとサプライズがあつて実に面白い催しとなった」

そこでガハルドは意味ありげな視線をハジメに向けるも、ハジメは明後日の方向を向いている。

「パーティーはまだまだ始まったばかりだ。今宵は、大いに食べ、大いに飲み、大いに踊って心ゆくまで楽しんでくれ。それが、息子と義理の娘の門出に対する何よりの祝福となる。さあ、杯を掲げろ！」

ガハルドは、会場の全員が杯を掲げるのを確認すると、自らもワインをなみなみと注がれた杯を掲げて一呼吸置く。そして息をスウーツと吸うと覇気に満ちた声で音頭を取った。

「この婚姻により人間族の結束はより強固となった！ 恐れるものなど何もない！ 我等、人間族に栄光あれ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

その瞬間、全ての光が消え失せ、会場は闇に呑み込まれた。

主人公27

全ての光が消え失せ、会場は闇に呑み込まれた。

一瞬で五感の一つを奪われた帝国貴族達が、混乱と動揺に声を震わせながら怒声を上げたり、比較的冷静だった者達が指示を出しながら魔法で灯りを確保しようとするも闇に乗じてハウリア族が強襲してくる。

そんな闇の中で浩二の瞳はハウリア族達が見えている。

「浩二様。リリアーナ姫殿下の保護に動いても」

「大丈夫だとは思うけど、頼む」

ハウリア族がリリアーナに危害を加えることはないとは思っても念のためにリリアーナを保護に向かうティニア。天職が？探索者”であるティニアからすれば暗闇だろうとも乱戦だろうとも関係なくリリアーナの元に辿り着いて保護できるだろう。

「落ち着けえ！ 貴様等それでも帝国人かつ！」

暗闇の中、ガハルドの覇気に満ちた声が響き渡る。

闇夜を払拭しそうなほど大音量の喝は、暗闇と悲鳴の連鎖で恐怖に陥りかけた帝国貴族達の精神を強制的に立て直した。流星は実力至上主義を掲げる国の皇帝に在るだけはある。

しかし、そんなガハルドに矢が強襲する。それも驚くほどの速度と威力を秘めた上に実に嫌らしい位置を狙って正確無比に間断なく打ち込まれているので、さしものガハルドも防戦一方に追い込まれてしまった。

それでも真つ暗闇の中、風切り音だけで矢の位置を掴み、儀礼剣だけで捌いているのは流星というべきだろう。しかし、そこにやけに股間に集中して飛んでくるナイフやフォークがあるのは何故だろうか？ それもハウリア族の動きを一切阻害することなく神業レベルまでの正確無比な精密性を発揮している。

「旦那様。先ほどから何をなされているのですか？」

「何もしてないよ」

暗闇なのにさつと視線を逸らしながらそう答える。

断じてハウリア族の強襲と暗闇に乗じてガハルドを不能にしようとは企んでいない。

次々と上がる悲鳴と、物や人が倒れる音が響く中、ようやく冷静さを取り戻した幾人かの者達が灯りとして火球を作り出すことに成功した。反撃に入ろうとする帝国人だが、その結果首が宙を舞った。

死神の鎌に等しい暗闇と襲撃者の存在に帝国人、令嬢や文官それと前線から引いて贅沢の極みを尽くしてきた元軍の将校達は一人の例外もなく、何もできないまま、そしてしないまま、音もなく肉薄した黒装束に手足の腱を切られて、痛みへのたうちながら倒れ伏すことになったのだが……。

「暗闇と共に強襲とは随分と楽しませてくれますわね！」

ガハルドやその側近達や近衛達を除いて貴族のなかには例外がいた。レイナだ。ドレスの内側にでも隠し持っていたのか、短剣で暗闇と共に帝国人達を倒していくハウリア族の攻撃を凌いでいる。

気配を殺して、連携を駆使して攻めるもレイナは倒れない。むしろ、もうそんなもの慣れたといわんばかりにハウリア族に攻撃を当て始めている。

(うわあ、あいつマジかよ……)

皇帝陛下達でさえ防戦一方だというのにもう反撃している。いくらガハルド達よりもレイナを狙っているハウリア族の数が少ないとはいえ、これは浩二さんも引いた。

そこにハジメから念話が届いた。

『おい、あいつどうなってる？』

流星のハジメも驚きを隠せないでいる。

『知らん。あいつがおかしいだけだ』

浩二さんは正直な気持ちで答えた。

『あいつらの攻撃は確かに当たっているんだが、全然怯まねえ……。むしろ攻撃を受けて笑っているぞ。変態テイオの同類か？』

ハジメの言う通り、ハウリア族の攻撃は当たっている。だが通じていない。その理由はレイナの持つ技能にある？物理耐性”の派生技能である？金剛”を使つて防いでいるからだ。

『……違うと言いたい』

浩二は本気でそう言いたかった。しかし、「ホホホホホ！」という愉快な笑い声が聞こえてくる。

「この程度、浩二との勝負に比べたらたいしたことありませんわねえ！ 浩二はもつと強く、激しかったですわよ!!」

『おい、元凶』

浩二は耳を塞いだ。暗闇だというのに光輝達からジッと視線を向けられている気がする。？お前の仕業か!?”という無言の圧力まで伝わってくる。

そんなレイナの活躍？ もあつてかガハルド達は十個近い《炎弾》を作り出して闇を払い始めて反撃を開始しようとするも目の前に転がってくる金属塊がカツ！ と光が爆ぜ、キイイイイーン！ と耳を裂く爆音が周囲を無差別に蹂躪する。あまりの不意打ちにガハルド達は一時的に視力と聴力を失うことになった。

そして、その絶好のチャンスを襲撃者たるハウリア族が見逃すはずもない。

絶妙なタイミングで窮迫した黒装束のハウリア族が、極限の気配殺しで標的の懐に踏み込む。そして、漆黒の小太刀を一閃、二閃。それによる近衛達の手足の腱はあっさり切り裂かれてしまった。

激痛な痛みに悲鳴を上げて倒れ伏す近衛達の口にナイフを突き込ませて舌を裂き、詠唱を封じる。離れた位置でも同じように、反撃しようとしていた者は容赦なく首を飛ばされている。

そんな中、ガハルドそしてレイナはハウリア族の斬撃を凌いでいた。目も耳も潰された状態で、極限まで気配を殺したハウリア族の斬撃からだ。これは襲撃者であるハウリア族も驚きをあらわにした。

ガハルドはまだいい。驚きはするもまだ納得できる。しかし、ハウリア族にとつてもハジメ達にとつてもレイナの存在は予想外だ。まさかここまで耐えるとは。

それもそれも全ては浩二の仕業だ。おかげ

反撃するガハルド。目も耳も使えない状態で正確な斬撃を繰り出し、ハウリア族を吹き飛ばし、迫りくる矢を？風壁”で防いで？炎弾

“で矢の射線に沿って一斉に掃射する。

魔法の発動速度も威力も尋常ではなく、気配を殺して近づいても何故か気がつく。鞭のようにしなる剣劇には防御が精一杯。そんなガハルドにハウリア族は戦慄が湧き上がる。これが軍事国家の頭。力こそ全てと豪語する戦闘者たちの王。

そしてもう一人……。

「まだパーティーは終わっていませんわよお！」

ある意味、浩二の手によって魔改造されたレイナはガハルド同様に目も耳も潰された状態だというのにハウリア族に攻撃を当てている。ハウリア族の攻撃は当たるも刃は通らず、むしろ当たった瞬間にレイナはそれを頼りにハウリア族の攻撃している。視覚と聴覚が駄目なら触覚でどうだと言わんばかりだ。

おまけに……。

「パターンも読めてきましたわ」

今度はハウリア族が攻撃を仕掛けようと動いた瞬間にレイナはそこに短剣を振るう。背後から襲撃するハウリア族の刃をひらりと躲して飛んでくる矢も見えているかのように素手で取る。

どこから、どのように、どんな攻撃がくるのかハウリア族の攻撃パターンを先読みするかのように動き出す。おまけにハウリア族の攻撃は通らないほどの鉄壁の防御力。

そんな二人の実力を実感したハウリア族は……

「上等」

「なます斬りにしてやる」

萎縮するどころか誰もがその口元に凄惨な笑みを浮かべた。覆面の隙間から覗く瞳はギラギラと獰猛に輝き、一人一人から濃密な殺気が噴き出す。

四方八方からヒット&アウェイを基本とした絶技と言っても過言ではないレベルの連携攻撃が二人に殺到する。

「ククク、心地いい殺気を放つじゃねえか！ なあ、ハウリアあー！」

「ふふ、いい殺気ですわ！ ゾクゾクしますわね！」

ここで心の底から笑う二人はまさに帝国人。おまけに襲撃者は

とつづくにハウリア族だとばれていたようだ。

「ああ？ ビビッと声も出せねえのか!？」

言葉からして、やはり、魔法のおかげで聴力だけは少し回復しているらしい。そのガハルドの叫びに、一際強烈な殺気を振りまくハウリア——カムが小太刀の二刀を振るいながら、その溢れ出る殺意とは裏腹に無機質な声をポツリと返した。

「戦場に言葉は無粋。切り抜けてみる」

「ハッ、上等だ」

暗闇に火花が舞い散り、更に激しさを増す剣戟は嵐の如く。それを聞いたレイナはほくそ笑む。

「あらあら、皇帝陛下は楽しそうですね」

「それなら私達が楽しませてあげるわ」

「ええ、よろしくお願いしますわ」

そんなレイナにハウリア族——？疾影のラニンフェリナ”、ラナに続くハウリア族の女性陣がレイナと激しい剣の舞踏会が開かれる。

ガハルドとレイナが単体戦力では圧倒。しかし、ハウリア族は群体力。両者の力は拮抗し、互いに決定打が打てない千日手状態。

数十秒か、数分か……。

会場で、意識はあるものの口も手足も切り裂かれて苦悶に表情を歪める者達は、なぜ外から誰も駆け付けないのかと苛立ちながらも自分達の王の勝利を祈る。

だが同時に、襲撃者が兎人族であるというあり得ない事態に、その未知に、恐怖に慄く体を止められずにいた。

と、その時、彼等の期待を裏切るように事態が動いた。

「ッ！ なんだっ？ 体がっ」

ガハルドが突如ふらつき始め、急速にその動きを鈍らせたのである。「待ってましたあ！」と言わんばかりに、四方八方からハウリア族が飛びかかった。

それからはあつという間だ。ガハルドは隠し持っていた魔法陣やアーティファクトを破壊または弾き飛ばされ、腕と足に矢が突き立つ。迸る激痛。悲鳴こそ上げなかったが、その体は意志に反してゆっ

くりと傾いて……ガハルドは倒れ伏した。ヘルシャー帝国皇帝陛下の敗北。その事実は、帝国人から言葉あるいは思考自体を奪うには十分過ぎる衝撃だったのだが……。

「あらあら、皇帝陛下。負けましたのね」

レイナだけはまだ交戦中だった。それも自分の国の皇帝が倒されたというのに平然としている。

「なんで……ッ!？」

平然と動いていられるのか？ ガハルドが突如ふらつき始めた理由を知っているハウリア族だからこそ驚愕を隠せない。何故ならハウリア族は魔物用の麻痺毒を散布していたからだ。それが原因でガハルドは倒された。

しかし、皇帝陛下でもなければ王族でもない帝国の令嬢であるレイナがまだ戦っていることに驚くなど言う方が無理かもしれない。そんなラナの驚愕を察したのかレイナは言う。

「ああ、もしかして毒でも散布されていますか？ それならお生憎様。私に毒は効きませんわ。浩二との勝負^{デイト}で？ 状態異常耐性^{デイト}に？ 毒無効^{デイト}の派生技能が目覚めましたので」

浩二との勝負^{デイト}。それはレイナにとって多くの壁を越える結果を生み出した。それこそ、浩二を逃がさない、私のモノにするという執念^愛が為せる偉業。

レイナは止まらない。それこそ浩二を我がモノにするまでは。

「地の底に眠りし金眼の蜥蜴、大地が産みし魔眼の主——」

レイナが詠唱を始めた。

その詠唱を聞いたガハルドは目を見開いた。

「止せ！ 動けない奴等まで石化させる気か!？」

レイナが唱えているのは土属性上級攻撃魔法？ 落牢^{デイト}。石化する灰色の煙を撒き散らす魔法だ。ほんの僅かでも触れれば、そこから徐々に浸食され石化してしまう魔法だ。確かに一対多数ならこの密閉された空間では有効な魔法ではあるが、それはハウリア族だけではないハウリア族によってその場から動けないガハルドも含めた帝国人まで石化させてしまう。

「宿るは暗闇見通し射抜く呪い、もたらすは永久不変の闇牢獄」

しかし、レイナの詠唱は止まらない。皇帝陛下であるガハルドの言葉を無視して詠唱を続ける。まるで敗北した弱者の言葉に耳を傾ける価値すらないかのように。

「恐怖も絶望も悲嘆もなく、その眼を以て己が敵の全てを閉じる」

その詠唱を止めようとカム達は一齐に動き出す。一つの生き物のように連携を駆使してレイナの首を飛ばそうとするもレイナは倒れない。

「残るは終焉。物言わぬ冷たき彫像。ならば、ものみな砕いて大地へ還せ」

そうして詠唱が完了してしまった。

ハジメ達や浩二達。そして土属性に耐性を持つ者はまだ大丈夫だろう。だが、そうでもない人達は物言わぬ石像へと変えてしまう。レイナはハウリア族を倒す為に帝国人すらを巻き込んだ魔法を発動する。

「?落牢!」

詠唱は完了した。それと同時にハウリア族は詠唱を阻止できなかったことを悔やみながら即座に撤退を選択。ガハルドを含めた帝国人は顔を青くするのだが……。

「あら?」

本来、レイナの手から石化させる灰色の煙が出るのだが、どういうことか魔法が発動しなかった。確かに詠唱してその分の魔力も消費した筈なのにどういいうわけか魔法が発動しない。それどころか?落牢に魔力を使った為にもう?金剛を維持するだけの魔力も残されていない。

ハウリア族はそのチャンス逃さない。魔力による強化外装である?金剛が消えた今ならレイナの身体に刃が通る。迫りくるハウリア族にレイナは小さく溜息を零した。

「まったく無粋な人……」

呆れるように、仕方がないかのように、それでも余計な手出しをしたことに少し腹を立てながら魔法を発動させなかった人がいた方向

に視線を向けたレイナはその身を切り刻まれる。そしてカムがレイナの首を斬り飛ばそうと刃を一閃する。

「そこまでだ」

だが、その刃を受け止めた者がいた。

血塗れのレイナを抱えてカムの刃を防いだ浩二はハウリア族に告げる。

「皇帝が倒れた今、もうお前等の戦いは終わったはずだ。これ以上の血を流すのなら俺が相手になる」

「……いいだろう」

カム達は武器を収めた。それは浩二の言うことも一理あって浩二が娘のシアと自分達が崇拝しているハジメの友人でもあるからだ。戦いが終わった今、どうしてもレイナを殺す必要はない。

なにより、カム達は気付いている。浩二が先ほどのレイナの魔法からこの場にいる者達を守ったことを。そして悟った。自分達では浩二には勝てないという事実を。故にカム達は武器を収めたのだ。

ハジメ達にとって予想外な展開もあったが、これで帝国は最弱種族によって落とされた。

主人公28

(まったく、まさかこいつがここまで強くなっていたなんて予想外だ……)

レイナを腕に抱きながら治療する浩二はレイナの強さにタフネス性呆れていた。本来ならば帝国人であるレイナと帝国を落とそうとしているハウリア族の戦いに手を出すつもりはなかったが、流石にレイナが発動しようとしていた土属性上級攻撃魔法である？「落牢」をこんなところで発動させれば動けない人達にまで被害が及んでしまう。その為にそれを妨害した。

闇系魔法と魂魄魔法の応用で魔法の発動を阻止した。まだ開発途中のオリジナル魔法故に名前はまだ決めてはいないし、完全に効果が発揮するかは不安ではあったが、上手く成功したようだ。

原作知識にある雫が使っていた？「魄崩」。対象の魔力、体力、精神といった斬りたいものだけを斬るといふ雫の技を参考にいずれは魔法を妨害もしくは何かしらの形で封印できるようにするのが目標である。

しかし、そのせいでレイナがハウリア族に殺されたら浩二がレイナを殺したも同然の為に浩二はカムの刃を防いで戦いを終わらせたのだが……。

「……離れろ」

「嫌ですわ」

とつくに治療は終わっているのにレイナは浩二の首に腕を回して抱き着いたまま離れなかった。

「そんなに照れなくてもよろしくてよ？ ふふ、ハウリア族の刃から私を守ってくださいるなんて浩二は素直ではありませんわね。まあ、少々無料ではありませんが……」

助けてくれたことや治療してくれたことは素直に感謝して喜んでいるも、戦いの邪魔をしてくれたことに関してはレイナは少々思うところがあるようだ。だが……。

「そりゃ止めるわ。この場所で石化の魔法を使うお前が悪い。なに考

えてんだ？」

確かにその魔法を使えばハウリア族を倒すことはできたかもしれない。魔法が使えない亜人族は同時に魔法に対する耐性が無い。直撃すればひとたまりもないだろうし、形勢逆転もできたかもしれない。しかしそれは倒れている帝国人を無視してまで行う魔法ではない筈だ。

「知ったことではありませんわ。無様に転がっている人達が悪いのですわ」

しかしレイナは悪びれもせずになんと言ったのけた。

流石は帝国の令嬢。弱者にはとことん興味も感心もないようだ。それには浩二も深い溜息を吐かざるを得ない。

「……とにかく大人しくしてろ。向こうもこちらから手を出さなければ攻撃してくることはないだろうし」

「ええ。浩二に腕の中で大人しくしていますわ」

「いや、離れろよ」

もう完全に治療は済ませた。それなのに更に密着してくるレイナを引き剥がそうとするもレイナは離れない。

「本当に素直ではありませんんこと。本当に私のことを嫌っていらっしやるのならあのまま見殺しにすればいい筈ですのに浩二はそれをしなかった。つまり浩二は私に少なからずの好意があるから助けたのではなくて？」

「……無駄に血を流すのが嫌だったただけだ」

「確かにそれもあるのでしょう。しかし、それは私を助ける理由にはなりませんわ。むしろ本当に私のことを嫌い、鬱陶しいと感じているのでしたら放置を選ぶ筈ですわ」

それがレイナが浩二に言う？素直ではない。という言葉の根拠だ。本当に嫌っているのならハウリア族に任せていればいい、あのままレイナに迫るカムの刃を見てみぬフリをすればいい。だけど浩二はそれをしなかった。

レイナを守るようにカムの刃を受け止めたその事実はまだもう変えようがない。

「ふふ、どうやら勝負をした甲斐はあったようですねえ」

にんまりと笑みを浮かべるレイナに苛立った浩二だが、溜息を零すだけで肯定も否定も取らなかつた。それでもレイナは満足そうに浩二に寄り添うように抱き着く。

そうこうしている間にカムはガハルドに要求していた。それは？ 誓約”だ。

ハジメが作ったアーティファクトである？ 誓約の首輪”

魂魄魔法により、口にした誓約は魂レベルで遵守させる効果を持つ。また、？連なる魂を持つ者”——ガハルドの一族に対しても効果があり、同じく？誓約の首輪”を付けなければ死ぬことになる。

それを使ってカムがガハルド——帝国に誓約させる内容はどうと……。

一つ、現亜人奴隷の解放。

二つ、樹海への不可侵・不干渉の確約。

三つ、亜人族の奴隷化・迫害の禁止。

四つ、その法定化と法の遵守。

計四つの誓約を誓わせようとしていた。

ガハルドはそれを拒否した。ここで自分達が殺されようとも帝国は潰れない。そして万軍を率いてフェアベルゲンを滅ぼそうとする。その結果、皇太子であるバイアスの首が宙を飛んだ。

それでも誓約をしないガハルドに待っていたのは兵舎の爆破である。それから軍の治療院も爆破して三度目の轟音が響く。カムは更なる爆破を仲間達に告げようとしたところでガハルドは負けを認め

た。

「——ヘルシャーを代表してここに誓う！ 全ての亜人奴隷の解放する！ ハルツィナ樹海には一切干渉しない！ 今、この時より亜人に対する奴隷化と迫害を禁止する！ これを破った者には帝国が厳罰に処す！ その旨を帝国の新たな法として制定する！」

ガハルドは最後に、皇帝として宣言した。

「この決断に文句がある奴は、俺の所に来い！ 俺に勝てば帝国はくれてやる！ 後は好きにしろ！」

それは本当に実力至上主義を体現した男の言葉であった。
そうして？誓約の首輪”は正しく発動し、亜人族、いや、ハウリア族が帝国に勝利した瞬間であった。

ハウリア族が帝国に勝利してその日の内にガハルドは始めとして帝国の軍部や執政部など、帝国の主要機関を担う者達には現状が伝達され、亜人奴隷達の解放を急ぎ行われた。

帝国民達に奴隷を解放させるといふ問題をどう伝えるか頭を抱えたが、そこはハジメ監督の手によってどうにかかなり、浩二は傷ついた亜人奴隷の治療を行っている。

亜人奴隷は傷は勿論、不衛生な場所に押し込められていた者達もあり、病気を患っている者もいればストレスで身体を弱らせている者もいる。中には四肢を失った者や生きているだけの状態の者達もいる。

浩二は目に見える傷などは香織に任せてそういった重症患者の治療を行っている。

「？焦天」

軍の治療院ではなく一般の治療院を使って運ばれてくる亜人奴隷を治療していく。

「？絶象」

再生魔法まで行使して五体満足の状態に戻す浩二の奇跡の治療の前には傷ついた亜人奴隷達に取ってまさに奇跡にしか見えぬ、傷ついた同胞が癒えていく姿に亜人奴隷達が浩二を見る目が感謝だけではなくどこか救世主でも見るかのような目で見ている。

「体内にいるウイルスが身体を蝕んでいるな。エフェル、その薬を取ってくれ。それとテイニアはその熊人族の応急処置を頼む。イリエは悪いけど南雲に魔力回復薬を持ってくるように言っ来てくれ」

浩二の指示にテイニア達は応じる。

一人でも多くの人を治す。今の浩二はただそれだけに意識を集中させている。だが……。

「離せ！ 誰が人間族なんかに……ッ！」

運ばれてきたのは狼人族の女性だった。傷らしい傷は見当たらないが、全体的にやせ細っており、顔色も悪くて僅かに異臭がする。ざっと診察して浩二は彼女はそういう奴隷だったのだと気づいた。そしてそういう病気を患っているからここに運ばれてきたことにも。

「安心しろ。もうお前達は自由の身だ。明日にはお前達の故郷に――」

安心させようと声をかける浩二だけど狼人族の女性は鋭い眼で浩二を睨みつける。

「近づくな！ 人間族が今度は何を企んでいる!？」

どうやら彼女は亜人奴隷が解放されたことを信じていないようだ。しかしそれは無理もない。あまりにも急なことで理解が追いつかないのもわかるし、彼女の瞳からはもう何も信じられない猜疑心と人間族に対する憎悪が込められている。彼女からして見たら浩二達は何か悪だくみをしているとしか思えないのだろう。

しかし、浩二にはそんなこと知ったことではない。

「ちよつと大人しくしてろよ」

暴れられても面倒だ。そう言わんばかりの手腕で？ 医学”の派生技能である？ 経穴”を使って狼人族の女性の動きを封じて治療を行う。治療行為とはいえ問答無用に触れてくる浩二に狼人族の女性はせめての抵抗と言わんばかりに睨んでくるも。

「お前が人間族に向けるその感情は当然なものだ。何も間違っていない」

浩二はそう口を開く。

「だから恨むなども憎むなども言わないし、感謝しろとも言わない。ただどフェアベルゲン、お前の故郷には家族だっているだろ？ その家族の為に少しでも元気な姿を見せてやって安心させてやる為にも今は大人しく治療を受けておけ」

狼人族の女性が抱く人間族に対する恨みや憎しみを浩二は否定しない。何故ならそれは亜人族も人間族も魔人族も関係ない至極当然

の感情だからだ。だから浩二はその感情を否定はしないし、治療されることに感謝しろとも言わない。

ただ家族に元気な姿を見せてやって欲しい、安心させて欲しい。浩二が彼女達、亜人奴隷達に求めるのはそれだけだ。その為にも治療を行っているとも言える。

「俺達、人間族が信じられないのならそれでもいい。無理矢理にでも治療するだけだ」

「……」

問答無用とばかりに告げられた言葉に狼人族の女性は何も答ええない。ただ浩二から視線を外して大人しくなった。

こうして浩二は一晩かけて重症だった全ての亜人奴隷達の治療に行った。

そうしてハジメ達の所へ足を運ぼうとしたその時だった。

「浩二」

聞き覚えのある声音が浩二の耳朶を震わせた。それはこの場には決していない筈だ。しかしながら彼女は浩二の前に姿を現した。

「恵理……」

浩二達のクラスメイトであり、王国を裏切って魔族側についた筈の中村恵理が浩二の前に姿を現した。

主人公29

ハウリア族が帝国に勝利を収めて帝国にいる亜人奴隷達は全て解放されることになった。そして浩二は亜人奴隷達の治療を終えてハジメ達の下へ足を動かさそうとした際に恵理が浩二の前に姿を現した。「まさかこんなところで再会するとはな……」

浩二はそう口にするも内心は疑問が尽きなかった。

(どうして恵理がここに……?)

本来なら恵理はここにはいない。魔人族の国である「ガーランド」にいる筈だ。そこで戦力増強、原作で出てきた屍獣兵を育てている筈だ。

なのに恵理はここにいる。浩二の前に姿を見せている。

本物か？ と浩二は一瞬疑ったが紛れもない本物。共にこの世界に召喚された中村恵理本人だと理解した。

「……俺達のところに戻ってくる気になったのか？」

「まさか。僕は戻る気なんてないよ」

肩を竦めながらそう答える恵理の返答は予想通りであったために驚きはしない。しかし、それならばどうしてここに姿を現したのか？

そう問いかけようとした時に恵理が浩二が出てきた治療院に目を向ける。

「ちよつと見てたよ。こっちの世界でも君のそういうところは変わらないよね。反吐が出るほどにお節介でお人好しで皆を裏切った僕がこうして姿を現しているのに捕まえようとしなないもんね」

「捕まえて欲しいのなら捕まえてやるが？」

「冗談。その気もない癖によく言うよ」

ここで恵理を捕まえるのは簡単だ。二秒で捕縛、意識を奪うことができる。しかしここで恵理を捕まえれば王城で恵理を逃がした意味がなくなってしまう。だから恵理は浩二が無理に自身を捕まえる気はないことに気づいている。

「それならどうして俺の前に姿を現したんだ？」

わざわざ捕まるかもしれないリスクを犯してまで浩二に会いに来

た恵理のその理由を問いかけると。

「浩二はさ、人間って自分勝手な生物だと思わない？」

前後のかみ合わない言葉に浩二は口を閉ざす。

「僕の母親も僕を犯そうとしたあの男も光輝くんも、自分の事だけで考えて気にくわなければ逆恨み。自分の都合しか考えない人間なんて酷く醜いよね。まあ、今となっては僕も人の事は言えないけど」

「……そうだな。だけどそれも人間という生物だ。おかしなところはない」

「ハハ、人を殺すような危険な女にそんなことを言うのは浩二だけだよ」

「かもな……」

自分でも何を言っているのかという思う。

「僕が言えた義理じゃないけど君は変わってるよね。王国を裏切ってクラスメイトを殺した僕を逃がしただけでもおかしいのに、こうして会っても前と変わらない目で僕を見てくる。鈴とかなら面白いぐらいに驚くだろうに」

その様子が目に浮かぶとでも言わんばかりに告げる恵理だけどそれには浩二も同意見だ。

しかし――

「鈴はお前の事を諦めていないぞ。もう一度話すんだって今も必死に努力している。お前の為に」

恵理と会って話をする為に鈴は今よりも強くなろうと努力、躍起になっっている。

「無理だよ。あんな臆病者がいくら努力しても僕は止められないし、変わらない。それは元親友よりも君の方が知っているでしょう？」

「……そうだな。鈴、いや、俺でもお前を救うことはできない」

それはわかっていたことだ。だからこそ浩二は皆の前にこう告げたのだ。？終わらせる”と。？助ける”でも？救う”でもない。終わらせることが恵理にとっての最後の救済だ。何故なら恵理はもう……。

「自覚はしているよ。僕はとっくに壊れている。今の僕は中村恵理と

いう形をした？ 獣”。疑心と猜疑心でいっぱい誰も信用も信頼もせず、ただ内から溢れ出る衝動のままに動く獣同然の女だよ」

己を語る。

「それでもまだ僕が？ 人間」として呼べる部分があるとすればそれは君が懲りずに声をかけて来てくれたおかげかもね。だから、どうしても君にだけは伝えたかった」

「何をだ？」

尋ねる浩二に恵理は告げる。

「僕はこの世界を壊す。そして皆をお人形にする。その中で浩二、君だけは特別に可愛がってあげるよ」

歪んだ瞳と笑みと共に告げられる恐ろしくもおぞましい内容に浩二は言う。

「勧誘か告白でもされるかと思った……」

予想外と言わんばかりに少し驚いた顔をする浩二に恵理はハッと啜う。

「僕が君に告白するわけないでしょう。それに勧誘しても君が応じないのはわかってのことだしね」

軽薄な声音でそう言い返す。

自分の告白にそう返してくるとは恵理も予想外なのだろう。

「まあ、確かに。世界を壊すつて言うのなら俺はそれを阻止する方に動くな。あと、人形にされるのも可愛がられるのも遠慮する。雫なら別に構わないけど」

「……もう自分の気持ちを抑えるのは止めたんだ」

「ああ、色々と吹っ切れたからな」

「……そう」

恵理は踵を返して浩二に背を向ける。

「僕が言いたいのはそれだけ。次会う時は敵同士。その時は必ず僕の手で君を殺す」

「殺されるつもりはないからいつでもかかってこい。お前が納得できる答えを出すまで俺はお前を生かす。終わらせるのはお前が答えを出した後だ」

「……本当に君はお節介でお人好しだよ」

その言葉を最後に恵理はこの場を去っていく。浩二は今にも壊れそうなその小さな背が見えなくなるまで恵理を見送った。

魔人族の国【ガーランド】

その国の王城付近で大型の鳥の魔物の背から跳び降りる恵理。その恵理に近づくと一人の男性。魔人族の軍部で最高司令官である將軍の地位にいるフリード・バグアーが歩み寄ってきた。

「恵理。どこへ行っていた？ 独断行動は裏切り行為と——」

「フリード。僕は今から大迷宮に挑みに行くから試作品をいくつか持って行くね」

フリードの言葉を遮るように告げられた恵理の言葉にフリードは思わず口を閉ざす。

「今のままじゃ駄目だ。もっと力が、神代魔法が僕には必要だ。ふふふ、待っていてね、浩二。僕は君が思っているほど甘い女じゃないってことを思い知らせてあげる……」

「……」

それは怨嗟や憎悪といった負の感情でもなければ愛情でも物欲のような欲望でもない。なんとも形容しがたい恵理の表情にフリードは顔を強張らせる。

（浩二、平野浩二か……）

恵理の言葉から出てきたその名にフリードは思い出す。

ミハイルの恋人であるカトレアを殺した張本人であり、薬を調合して多くの人間族の病から救っている。しかしそれだけではなく、イレギュラーである南雲ハジメと同等の実力者という報告は既にフリードに届いている。

しかし、その危険性はイレギュラーである南雲ハジメほどではないと軽視していたが、恵理のこの態度を見てフリードは思う。

（恵理がここまで執着する平野浩二とは何者なんだ……？）

そんな疑念を抱いた。

主人公30

ハウリア族が帝国に勝利して亜人奴隷達を解放することに成功した。そして現在はハジメが製作した飛空用アーティファクト。その船底に外付けされた超大型のゴンドラに亜人族を搭乗させて亜人族の故郷である「ハルツィナ樹海」への帰路の途中なのだ。

しかし、数千人の亜人族を乗せ、樹海に帰路の途中にあるフェルニルだけでもその驚異的な運搬能力の代償に、操縦者は結構な負担を強いられる。

「あ~~~~」

その証拠に今のハジメはだらけきっている。

重量に比例して魔力消費量と操縦難易度が上がる為に今のハジメは割と余裕がない為にその姿も仕方がない。

莫大な魔力消費に耐えつつ、操縦に集中し、更には魔力操作の訓練までしているハジメは、本当に真面目に頑張っている努力の人なのだが、悲しいことにこの場にいる全員にはその強さへのひたむきな内面は伝わっていない。

何故なら左右にユエとシアがハジメに密着状態で香織も、ハジメの背後から抱き着くように密着している。つまり、誰から見ても今のハジメはハーレム野郎にしか見えない。

だが――

そのハーレム野郎はこの場にもう一人いるのだ。

「どうしてお前がここにいるっ..」

「あら、私言いましたよ？　ついて行きますと。ええ、どこまでも貴方について行きますわ」

浩二の腕にくっついてるのは帝国の令嬢であるレイナだ。いつの間にか皇帝と共にこのフェルニルに同乗していた。全ては浩二を夫にするまでレイナはどこまでも浩二のことを追いかけるだろう。それが本気だということは勝負デュエルの際に嫌と言うほどに思い知らされた浩二さんである。

「レイナ様。浩二様はお疲れです。ご遠慮ください」

しかし、そんなレイナにティニアが物申す。

「それでしたら私の膝の上で休ませて差し上げますわ」

自分の膝をポンポンと叩くレイナにティニアは表情一つ変えることなく告げる。

「浩二様がお疲れなのも帝国が亜人奴隷に非人道的な行いをしていてせいで本来、帝国が負担すべきモノを代わりに行ったからということをお忘れなきようお願いします」

ティニアの言う通り、亜人奴隷が受けた傷や病は全ては帝国による亜人奴隷の扱いが原因だ。奴隷解放されて重症患者であった亜人奴隷の治療は本来であれば帝国が行わなければいけない負担であるが、浩二がその負担を一身に引き受けて亜人奴隷達を治療した。だからティニアは少しでも恩を感じているのなら、申し訳なく思っているなら遠慮しろと、言外にそう告げている。

しかしそこで折れるレイナではない。

「それならば浩二には恩赦を与えるべきですわね。どうぞ、浩二。思う存分に私が膝枕をして差し上げますわ」

「失礼ながらレイナ様では浩二様も存分に安らぐことはできないでしょう。ここは浩二様のメイドである私がお役目を果たしますのでレイナ様も皇帝陛下と共に艦内の探検に行かれたらどうでしょう?」

互いに表情一つ変えずに浩二を膝枕しようとする二人だが、そこにレイナの反対側に座っているエフェルが浩二に言う。

「旦那様、私の膝の上で休まれますか?」

そう提案してくるエフェルはすぐ近くに竜人族の姫であるティオが恍惚痙攣しているというのにまるでないものとして扱っているあたり成長したというべきか、それとも現実逃避しているのか、もしくは浩二に膝枕して気持ちを落ち着かせたいのかはわからない。

「ああ、頼む」

とはいえエフェルの誘いを断る理由はない浩二はお言葉に甘えてエフェルの膝の上に頭を置いてあくびをする。そんな浩二ををエフェルは愛おしそうに微笑みながら優しく浩二の頭を撫でる。

流石の浩二も徹夜での治療は心身共に限界だったみたいだが、本来なら別に問題はない。

いつもなら体内にある魔法薬などで消耗した分を回復させることができるが、これからすぐにはないが「ハルツィナ樹海」にある大迷宮に挑む為にも、自然回復できるものは自然回復させるようにして体内にある魔法薬などの消費を抑えている。だからこそ疲労が残っている為に疲れているのだ。それに少しだけ誰かに？甘えたい”という気持ちもなくはない為にそういう理由を述べているのかもしれない。

仮にその理由がなくてもティニアもエフェルも存分に浩二を甘やかすだろう。その証拠に現在進行形でエフェルは浩二を甘やかしていることに嬉しそうに頬を緩めている。

「お待ちなさい、浩二。そちらの方より私の」

「なりません。イリエ様」

「……はいはい」

「ちよ!? 放しなさい!」

ティニアの言葉にイリエは呆れながらレイナを拘束して強制的に浩二から距離を取らせる。排除するべきモノを排除したティニアは毛布を持ってきて浩二にそつとかけるのであった。

甲斐甲斐しく一人の男に奉仕する美女二人。徹夜で亜人奴隷を治療して疲れているのはわかっていても南雲同様にただのハーレム野郎にしか見えなかった。

「……おいおい。皇帝を前に随分な態度だな、南雲ハジメ、平野浩二
艦橋の扉をウインと開けて入ってきた【ハルシャー帝国】皇帝陛下
——ガハルド・D・ヘルシャーが、呆れと怒り半々のジト目を二人に向けた。

「うらやま——ごほんっ。ふしだらですよ、南雲さん、浩二さん」
「リリアーナ様。本音がダダ漏れでございます」

苦言を呈したのは、【ハイリヒ王国】の女王——リリアーナ・S・B・ハイリヒ。そして、的確にツツコミを入れたのは専属侍女のヘリーナだ。彼女達がここにいるのはガハルドの宣誓を見届けるため

でもある。

そして何故かリリアーナはハジメよりも浩二の方に強い眼差しを向けている。

浩二が疲れて休んでいるその間、ガハルドはハジメが製作したこのフェルニルがお気に召してハジメに交渉するも、

「俺が本当に欲しいものは、この通り、既に腕の中にあるんだ。これ以上、何を望めってんだ？」

ユエとシアをグツと抱き寄せてそう言い切る。

ガハルドは交渉が失敗に終わると今度は浩二に目を付けた。

「いい女に手厚く看病されて羨ましい限りだな、おい、平野浩二。まあ、それでも一応言わせてもらおうぞ。今の帝国は今回の奴隷解放で労働力はガタ落ち。演説した帝都はともかく、他の町では騒動が起きるのは確実。その辺の対応と鎮圧にも人手を割かなきゃならん。おまけに今回のリリアーナ姫の婚約も白紙になった今、帝国が王国に援助を頼みたい状況だ」

状況が落ち着いて皇族の命が一応でも保証されれば今度は帝国から王族に娘を嫁がせるのがベターだと語るガハルドは続けて浩二に言う。

「それで状況次第ではお前さんの力も借りたい。無論、無償で力を借りようとは思ってねえ。そうだな……」

ガハルドはチラリとリリアーナに視線を向けて言う。

「リリアーナ姫が欲しけりや皇帝の権力をフル活用して協力してやるぞ？」

「なっ!? 陛下! 何を言っているのですか! わ、私はそんな……」

「ちよつと皇帝陛下! 浩二は私が! そう、私が手に入れますのよ! ！ これ以上お邪魔虫を増やさないでくださいまし!」

激しく動揺するリリアーナは浩二をチラ見すると頬を染め、もじもじしながら。そこにレイナがガハルドの発言に異を唱える。これ以上ライバルというお邪魔虫を増やさない為に。

しかし当の本人はというと……。

「あの、旦那様、浩二さんはお休みにいられているのですが……」

自身の膝の上で小さく寝息をたてながら眠りについている浩二にエフェルは少し申し訳なさそうに告げた。道理で先程から何も言っていないと思えば寝ていて話を全く聞いていなかったからだ。

まるで皇帝陛下の話なんかどうでもいいかのように熟睡している。

「……南雲ハジメといい、平野浩二といい……俺は皇帝だぞ……」

ハジメに続いて浩二にまで雑な扱いをされる皇帝陛下。いや、この場合は話を全く聞こうともせずに寝ることを選んだ浩二の方がハジメよりも酷いかもしれない。

見事なまでに熟睡している浩二にガハルドは起こす気もなれず、気分転換をしに甲板で景色を堪能しに艦橋を出て行った。

ガハルドが出て行って艦橋の居心地が悪い。目の前で堂々イチャつくハジメや皇帝陛下の話をフル無視した浩二。それと浩二の態度にリリアーナが少しだけへこんでいる。どうやらガハルドの質問に答えようとしなかった浩二の態度に思うところがあつたのだろう。

と、そこで、ハジメの背後と足元から声が上がった。

「うう、ユエとシアだけずるいよ！　ね、ねえ、ハジメくん。？腕の中”っていうのは比喩的な表現だよ？　ユエとシア限定って意味ないよね？　ね？」

「ご主人様よ。素晴らしい足技を頂いた直後ではあるが、妾も抱き締めてくれんか？　？腕の中”がいいのじゃ……」

香織とティオはそれぞれ必死な感じに自分の存在をアピールするも、そこにユエが言う。

「……残念でした」

「ど、どういう意味っ!？」

「むっ!?!　今のは聞き捨てならんぞ、ユエ!」

無表情で告げるユエに憤る香織とティオにユエはおもむろに自分とシアを指差し、

「……勝者」

次いで、香織とティオを指差し、

「……敗者」

と、無表情で言つてのけた。そして、そのままハジメの胸元に頬を

スリスリ。その瞬間、艦橋内に？ブチッ”と何かが切れる音が響いた。

「フ、フフフ……ユエったらおかしいね？ 訳の分からないことをいきなり……きつと、どこか悪いんだね？」

「そうじゃな。きつと、そうに違いない。ならば妾達が直してやらねばな」

ゆらりと揺れる香織に同様にゆらりと立ち上がるティオは言った。「叩いて直すー！」「叩いて直すのじゃー！」

そんな凄まじい怒気？ 闘気？ みたいな何かが溢れ出している。そんな二人を前にしてもユエは……。

「……やめて？ 本気でやったら、私に勝てるわけないでしょ？」

素晴らしくイラツとさせる素敵なセリフを二人に送った。それに更にヒートアップする香織とティオにユエは煽る煽る。

「ちよっ、ちよっ”と三人共！ 落ち着きなさいって！”っていうか、南雲君！ 見てないで止めなさいよー！」

雫が、あせあせ、オロオロとしながら頑張つて仲裁しようとするも早々に諦めてハジメに助けを求めた。

「無理。だるい……」

だがそのハジメはぐてぐとソファ―に沈み込んだ。動く気は全くないようだ。

「浩二！ お願いだから起きて三人を止めて！」

こいつは駄目だ！ と見切りをつけた雫は共に香織の暴走を止めてきた同じ苦労人の業を背負っている浩二に仲裁して貰おうと浩二の身体を揺すつて起こそうとするも、浩二は寝惚けた眼で雫が視界に入ると雫の背に腕を回して拘束。そのまま雫を抱き枕にする。

その際、浩二の顔は雫の胸に埋まるように抱き枕にされた。

「ちよっ!?! 浩二!?!」

突然抱きしめられてそのまま抱き枕にされてしまった雫は自分の胸に顔をスリスリしている浩二に顔を真っ赤にしながら叫ぶも浩二は聞く耳持たず、まるで最高に寝心地のいい抱き枕でも見つけたかのように抱き着いている。

(そういえば浩二様、お好きでしたね……)

(私に抱き着く時もこのような感じでしたね……)

ティニアとエフェルは自身の胸に触れる。そんな浩二の姿に覚えがあるからだ。共に寝る際に浩二がたまに寝惚けて胸元に顔を埋めてくること。まるで子供が愛情を求めるとかのように抱き着いてくるので二人はそれが愛らしく可愛くも思えたのでよく覚えていた。

「離さない！ 浩二！ 離して！」

雫は必死に浩二を引き剥がそうとするも手放してなるものか！

と言わんばかりに浩二の力は強く、引き剥がせない。

「雫、羨ましい！ やはり胸ですか!? 胸なんですか!？」

「あらあら、それでしたらリリアーナ様はお悔やみ申し上げますわ。私はある方なので」

自身の胸に触れて思わず叫びを上げてしまいうりりアーナにイリエに拘束されているレイナは勝ち誇った笑みを浮かべているが、リリアーナもないわけではない。これから期待だ。

「……」

イリエは無言で自身の胸をそつと撫でる。しかし、そこにあるのは山ではなく小山が精々だろう。

「雫ちゃん！」

「香織！」

浩二に抱き枕にされた雫に香織が声を投げる。自分を助けてくれる親友に雫は顔を上げると香織は満面の笑みで親指を立てる。

「大丈夫！ 私には浩二くんから貰った切り札があるから心配しないで！」

親友は助けてはくれなかった。

違う、そうじゃない。そつちの心配じゃなくて、と雫は色々と言葉を出すも香織はただ慈愛に満ちた笑みを浮かべたまま。まるで二人を祝福する聖女のような微笑みで親友と幼馴染を見守っている。

そして。

「私もユエに勝って雫ちゃんと浩二くんのようにイチヤつくからね！」

恋に燃える乙女の如く、香織もまたハジメとイチャつく為に倒さなければならぬ相手と対峙する。

「よくぞ言ったぞ！ 香織！ 妾もエフェルのようにご主人様に膝枕したいのじゃ！ 鈴よ、防御は任せたぞ！」

「え？ 鈴も入ってる!?!」

竜人族の膂力で首根つこを掴まれた鈴は涙目で引きずられていく。

鈴は光輝や龍太郎に助けを求めるも二人はサツと視線を逸らした。女の戦いにはノータッチでいきたいのだろう。

「見捨てたな！ 鈴を見捨てたな！ 後で覚えてろお〜」

という鈴の怨嗟の声は虚しく終わる。

「……シア、前衛は任せる」

「はいですう！ 何人もユエさんのもとには行かせませんよお！ 全員まとめて、うつさうさにしてやんよ！ ですう！」

気合十分のバグウサギは口元に不敵な笑みを浮かべて荒ぶっている。

「……ハジメ、行ってくる。格の違いを叩き込んでくるから」

「お〜う、行ってら〜。ほどほどになあ」

「……帰ったら、頑張ったご褒美にぎゅっとして？」

「早く帰ってこいよ〜」

「……んっ」

そのやり取りがまた般若陣営を煽る煽る。戦意は既に天井知らずだ。

「ユエ、勝たせて貰うよ。私には浩二くんから貰った秘薬がある！」

「……ドーピングでもなんでも好きにすればいい。その上で格の違いを教えてあげる」

「シアよ。勝たせてもらおうぞ」

「かかってこいやあ！ ですう！」

そうして、巻き込まれた悲壮感漂う一人を除いて、香織達は艦橋から出て行った。

空の上は常に快晴だ。いつでも戦闘日和である。

しばらくすると、派手な轟音やら爆音やらが聞こえ始めた。

ビクツとする光輝と龍太郎。本当に放っておいて大丈夫かと心配
そうな表情になる。

「楽しそうだなあ」

しかし、ハジメの感想はそれだけらしい。浩二に至っては雫を抱き
しめたまま眠っていらっしやる。まるで聞こえてくる轟音や爆音な
ど聞こえないかのように。

「はあく、どうしたのかしら……」

聞こえてくる轟音や爆音を耳にしながら雫はどうしたものかと頭
を悩ませるも、幸せそうに寝ている浩二の寝顔に若干イラツとするの
であった。

主人公31

飛空艇での一悶着があった後、ハジメ達は無事に「フェアベルゲン」に到着。奴隷にされていた亜人達は無事に家族と再会することができた。声を嗄らす勢いで喜びを分かち合う亜人達はちよつとしたお祭り騒ぎだ。

そんな歓喜が溢れる亜人達の喧騒の中、浩二達もフェルニルから降り立った。

フェルニルから降りて浩二が最初に目撃したのは治療の際に睨んできた狼人族の女性は両親と思われる家族と無事に再会している姿だ。その光景に浩二も自然に頬を緩ませる。

しかし、何故かその背には香織をおんぶしているが……。

「あう〜」

私、もうだめ……。と言わんばかりの弱り切った声を出す香織に浩二は若干呆れながら言う。

「ユエに勝ちたい気持ちはわからなくはないけど、過剰摂取は駄目だって説明書に書いておいただろう?」

「だって、だって……」

「お薬はきちんと用量、用法を守りなさい」

「……はい」

香織がこうなったのには理由がある。それは「エリセン」で浩二が香織に渡した魔法薬にある。赤、青、緑と色分けされたその魔法薬には? 調合? の派生技能にある? 特殊調合? によって調合した特殊な魔法薬であり、強力なドーピング薬でもある。飲むだけで身体能力だけではなく反射神経や反応速度、ステータス上昇、魔力増幅などといった簡単に言えば飲むだけで? 限界突破? できる魔法薬である。

飲むだけで? 限界突破? できる魔法薬だが、それには当然のように副作用がある。それも色によって副作用は違い、香織はユエに勝ちたいが一心でその魔法薬を2本も飲んでしまった。

「でも、ユエには勝てたよ……」

「負けた本人は今も南雲の隣にいるけどな」

勝ちはしたのも香織は副作用の影響で魔力が枯渇して自分の力では立つこともできず、浩二におんぶされている。そして香織に敗北した筈のユエは動けない香織を弄るかのようにはジメとイチャついている。負けたちよつとした腹いせだろう。

「うう、勝つたのに……。浩二くん、お願いだから治して〜」

「ちようどいいから副作用が完全に消えるまでおとなしくしていなさい」

「そんな〜」

香織の身体から副作用を消すことぐらい今の浩二なら朝飯前だけどそれでは香織の為にはならない為にあえてしない。また同じようなことをしない為にもここできちんと反省して貰わなければ。

そこで香織は何かを思い出したかのように浩二に尋ねた。

「ところで雫ちゃんの抱き心地はどうだったの？」

「最高だった。少なくとも代価を受ける価値はあった」

浩二の頬には綺麗な紅葉の跡がある。

目が覚めたら目の前に雫がいた。どうして雫を抱き枕にして眠っていたのか、疑問が浮上したがその答えを知る前に顔を真っ赤にした雫から平手打ちを受けた。その後で龍太郎や鈴に訊いてみればどうやら寝惚けて雫を抱き枕にしていたそうだ。それも雫の育った二つの果実に顔を押し付けた状態で。

乙女の胸に顔を押し付けていれば怒るのも無理はない。

(そう言えば最近、妙に抱き癖あるよなあ、俺……)

別に抱き枕がないと眠れないということはない。しかし、ここ最近目は覚めたらティニアやエフェルに抱き着いた状態で目を覚ますことが多くなっている。雫に抱き着いてしまったのもそのせいだろう。

しかしそれはそれとして、最高の抱き心地だったのは間違いではなかった。

「だよね、だよね。雫ちゃんって抱き心地いいよね」

「ああ、香織がよく雫に抱き着くのもわかる気がする」

「うんうん」

雫のことで意気揚々と話を弾ませている二人。当の本人である雫は二人から若干距離を取っている。自分のことを話題にされて会話を弾ませていることが恥ずかしいのだろう。それに思わず浩二の頬を叩いてしまったことに対して気まずい気持ちもあるのかもしれない。

そんな会話を弾ませている二人を見て鈴は思わず口を開く。

「前々から思っていたんだけど、浩二くんはカオリンのお父さんなの？ カオリンにだけ妙に過保護なんだけど」

それはもう娘に溺愛しているお父さんのように厳しくも甘やかしている。今だつて本当の父娘だと思わせるようなやり取りだ。

「香織もだが、子供の頃から色々と面倒を見ていたからな」

「えへへ、私も浩二くんのことお兄ちゃんみたいに思っているからね」
子供の頃から雫共々、香織だけではなく光輝や龍太郎達にも振り回されて苦労する日々だった為に今となってはすっかり面倒を見るのが当たり前のようになっていいる。幼馴染というよりも家族のような関係に近い。

だからか、浩二も香織もお互いに異性として見ることはないのだろう。

そこに雫を加わればまさに……。

「カオリンは浩二くんとシズシズのむ……」

「鈴。それ以上言ったら斬るわよ」

「？ 縮地」を使ってまで一瞬で鈴の背後に移動した雫は鈴にそれ以上は言わせないように肩に手を置いたが、鈴の肩を力強く握りしめている雫に鈴は顔を真っ青にしてコクコクと何度も首を縦に振った。

もし、それ以上のことを言ってしまうれば本当に斬られると、本能が警告している。

その話を聞いたティニア達は。

「浩二様。子煩悩になりそうですね」

「いいではありませんか。良き父親になれるのですから」

子煩悩になりそうな浩二との将来のことを考えて思わず微笑ましい気持ちになっていた。

「平野、悪いが頼めるか？」

そこでハジメが浩二に頼んだ。どうやらフェルニルの着陸によって壊した木々を修復して欲しいようだ。

「たくつ。？絶象」

嘆息しながら再生魔法である？絶象”。あらゆる損壊を再生し復元する魔法を行使する。それによってバツキバキな木々が一瞬で姿を取り戻した。それを見た亜人達はどういうと……。

「おおっ！ 医神様が奇跡をお見せくださったぞ！」

「医神様！」

「我等の神よ！」

「医神様万歳!!」

多くの亜人達は浩二の前に跪いて崇めた。その光景に浩二は盛大に頬を引きつかせたのは言うまでもない。

無宗教だったはずの亜人達の中に、医神教が生まれそうな混沌とした状況の中、アルテナが祖父であるアルフレリックに耳打ちする。

「お祖父様。立ち話もそれくらいになさって、そろそろ……」

アルテナの視線は、たった今、フェルニルから降りてきた最後の乗客——ガハルドとレイナ、リリアーナ達王国一行に注がれている。

一応、ガハルドには「フェアベルゲン」の情報を極力渡さないよう、光と音を完全遮断するフルフェイスの仮面を被らせているが、レイナは堂々と素顔を晒して何食わぬ顔で浩二の隣に移動する。

「お前、ここがどこなのかわかってるのか？ せめて顔ぐらい隠せ」

不？戴天の仇である帝国のトップであるガハルドは顔を隠しているもレイナは素顔のまま。自分が帝国の人間、それも貴族だと亜人達に知られれば暴徒を起こすかもしれないのに。

「あら？ 心配してくださいの？ ふふ、ご安心なさいな。襲ってくる輩は返り討ちにしてさし上げますわ」

「やめろ」

軽く言うもこの女ならマジでやりかねない。

今後の帝国との関係の為にも問題を起こす訳にはいかない。

そんな懸念を抱きながらカムが人材確保の為の演説を行ったり、そ

れについてシアは居たたまれない気持ちになる。遠からず、ほぼ間違
いなく、気弱で温厚な兎人族は絶滅し、代わりにヒヤツハーな兎人族
として生まれ変わることだろう。

そこへレイナが浩二の傍から離れる。

「さて、それでは私は帝城での戦いに決着をつけて参りますわ。どこ
かの誰かさんのおかげで不完全燃焼でしたもので」

細剣レイピアを手にハウリア族の方に歩み寄るレイナ。カム達もそんなレイ
ナと同じ気持ちを抱いていたのか「上等だ！ 今度こそ斬り刻んでや
るよ！」という殺意が溢れ出るもレイナは笑ってそれを受け流しなが
らパーティーでつけられなかった戦いに決着をつけに行った。

若干、いや、かなり呆れながら溜息を零す浩二はまあ、別に問題は
ないだろうと気持ちを切り替える。

カム達は言わずとも、レイナの実力も戦闘センスもずば抜けてい
る。そう簡単に殺されるような女ではない。現にパーティー内で起
きたハウリア族の奇襲でさえもレイナは最後まで立っていたのだか
ら。いや、浩二が邪魔をしなければもしかしたらレイナは勝っていた
のかもしれない。それほどまでにレイナは強いのだ。

「んんっ、さて、それではそろそろ奥に案内しようか。アルテナ、頼む
ぞ」

ハウリア増殖の可能性に、同じく冷や汗を流すアルフレリックが、
どうにか気を取り直して孫娘に案内を促した。

「それでは皆様、こちらにどうぞ。案内致します。さあ、医神様も」

「浩二です」

浩二は真顔でそう返した。どうやら亜人達の間では浩二が医神様
というのは共通認識のようだ。

「それでは浩二様と呼ばせて頂きます」

「もうそれでいいです……」

これはもう何を言っても無駄だろうと、諦観する浩二の手を取ろう
とするアルテナであったが香織を背負っている為に浩二の両手は塞
がっているからそれは断念して先導し始める。

しかし、浩二は特に気にはしている様子はないが、アルテナが浩二

に向ける態度は明かに他の人達とは違う。

巫人達が？ 医神”と崇めているからだろうか？ もしくは……。

どちらにしても察しのいい人達はアルテナが浩二に何かしらの感情を抱いていることには気づいている。

「本当に変わっちゃったなあ……。浩二の奴」

「……ああ」

今更ながら幼馴染の変化を改めて実感した龍太郎に光輝もなんとも言えない表情で頷いた。

香織を背負っている今の姿は別にいつも通りではあるも、言動や雰囲気などは二人の知っている浩二ではなかった。二人の知っている浩二は後ろから皆を支えるような、縁の下の力持ちのような存在で表で活躍するよりも陰に徹するような存在が二人の知っている浩二だ。

現に光輝達から離れる前も回復や援護に徹底していて前に出て戦うことはなかった。しかし、戻ってきた浩二は若干見た目が変わっただけではなく、まるで何かを乗り越えたかのように堂々としている。

「まあ、それでも浩二は浩二だ。行こうぜ、光輝」

「……そう、だな。ああ、行こうか」

変わってもそれが浩二であることには変わりはない。龍太郎も浩二達の後に続くも光輝は少し遅れてから歩み出すも、その表情はどこか暗く、手を強く握りしめている。

「俺は……」

小さく呟いた光輝の言葉が聞こえた人は誰もいない。

主人公32

無事に奴隷にされていた亜人達を故郷である「フェアベルゲン」に帰すことができたハジメ達。そしてアルテナに案内された場所で皇帝であるガハルドからの敗北宣言と誓約の内容が長老達に伝えられる。

長老達は数百年も続いた価値観の相違や恨み辛みなど、己の中の名状し難い感情を整理しながらも、この歴史的瞬間を呑み込もうとしている。

しかし、ガハルドの不遜な態度によく思わない亜人達はそんなガハルドに隠しきれない殺意や憎悪を滲ませるも、ガハルドが敬意を払うのは強い者だけ。戦場で強さを示したハウリア族だけだ。

そんな一触即発の空気が漂う。張り詰めた緊張の糸が今にも切れて、凄惨な殺意の応酬が繰り広げられる光景が幻視してしまう。

誰もが生唾を呑み込むような空気の中、その空気をぶち破ったハジメさんがガハルドを？ゲート”の向こうへ投げたことによつて長老達や戦士達の溜飲が下がる。

そして此度の功績によつてハウリア族の族長であるカムを新たな長老の座を用意しようとアルフレリックが提案するもカムはそれを断り、兎人族の独立、一種族にしてフェアベルゲンと対等と認められ、更に大樹近辺と南方一帯を使うと追加要求。傍若無人な父親に對してシアは両手で顔を覆ってしまった。

その後、どうにか話はまとまり、浩二達はようやくゆっくりするこゝとができるようになった。

都に滞在している三日間、アルフレリック達のもてなしもあって、ハジメ達は中々快適な時間を過ごすことができた。

主に絡んだり、絡まれたりしながら楽しく過ごした三日間。そしてハジメ達は遂に「ハルツィナ樹海」の真の大迷宮がある？大樹ウーア・アルト”のもとへ向かう道中で大迷宮初挑戦の光輝達にウォーミングアップを行わせている。

【オルクス大迷宮】とは異なる亜人族以外の種族の感覚を狂わせる樹

海での戦闘。本来であれば光輝達は苦戦を強いられるのも無理ではないのだが……。

「ハッ！」

「オラッ！」

「この！」

光輝達は善戦とまでは言わなくても苦戦に強いられることもなく戦闘を行っていた。それにはハジメも少し意外そうにしている。

「疾ッ！」

「……そッ！……こうやって……こう！」

雫も香織も神の使徒の力を使いこなせる為に自主的に鍛錬をしている。黒刀に？分解”を付与して残像すら残る速度で魔物を次々と切り捨てていく雫に白堊色の羽を操作して魔物を一瞬で分解・消滅させる香織。

「ここですわ！」

「フッ！」

戦闘を始める前に何故かレイナは既にボロボロ状態だった。どうやらハウリア族と相当激しい殺し合いをしていたのだろう。しかし、レイナはそんなことお構いなしに細剣レイピアで魔物の急所を的確に突いては次の魔物を仕留めに行く。攻撃を受けてもオホホホッ！と高笑いする姿は少し不気味だ。

何故かハウリア族は仲間を見る目でレイナの戦闘を見守っているのが気のせいにしておきたい。

余りにもボロボロの姿だった為に浩二は一応イリエにレイナのサポートをするようお願いしたが、余計なお世話だったのかもしれない。

「香織や八重樫達はまだしも、天之河達は戦えているのはお前が何かしたのか？ 平野」

「まあな」

やはり、と言わんばかりに浩二の返答に納得する。

王国を旅立つ前から光輝達の面倒をみていた浩二はハジメ達の疑問を解消させるように説明する。

「ちよつと人体改造を施しただけだ」

ちよつと？ ハジメ達はその言葉が喉元まで出かかったがどうか呑み込んだ。

「あ、光輝には特別なことはしていないぞ。？魔力操作”を出来るようにしただけだから後はあいつの実力だ。元々スペックは高いから少し背中を押すだけであいつには十分だからな」

どうやら今戦えているのは光輝自身の実力のようだ。

（とはいえ、大迷宮に攻略を認めてもらえるかどうかと言えば難しいだろう……）

光輝は原作よりも確かに強くはなっている。だが、精神の幼さはたいてい変化はない。いくら浩二でも精神を改善させるには時間を有する為に光輝が大迷宮に攻略を認めて貰えるかどうかは定かではない。

（そこは光輝自身に何とかしてもらうしかないか……）

その結果どうなるうともそれを受け入れて貰うしかない。

「龍太郎と鈴には？魔力操作”は勿論、？改造”と魔法薬によるステータスの上昇及び五感の強化。そしてそれを十二分に扱えるように最適化させている。大迷宮クラスの魔物でも十分に通用するだろう」

「へえ」

流石だなと、ハジメは改めて浩二の腕前に内心驚かされる。

浩二の天職は？医療師”。後方支援を得意とする。仲間の回復は勿論のことサポートもお手の物。仲間を強化させることなど浩二にとっては朝飯前ということだろう。

「それに龍太郎と鈴には切り札を施している。それは見てからのお楽しみだ」

切り札。そう言われて気にならないハジメではないが、そう言われたら追言できない。二人がその切り札を使う時まで楽しみにしていることにした。

「ちなみにあいつには？」

「あいつは色々とおかしいだけだ。気にするな」

光輝や浩二の？改造”によって強くなった龍太郎や鈴に後れを取ることなく戦えているレイナはいつたいたいということなのだろうか？ 本当におかしいとしか言えない。

そうこうしている内にハジメ達は枯れた巨木な木がそびえ立っている大樹の下まで到着した。

「これが……大樹……」

「でけえ……」

「すごい……大きいね……」

頭上を見上げ、大樹の天辺が見えないことと、横幅がありすぎて一見するとただの壁のようにしか見えないことに、口をポカンと開けて啞然とする光輝達。

ハジメは？宝物庫”から攻略した大迷宮の証を取り出しながら、根元にある石板のもとへ歩み寄った。光輝達も正気を取り戻してハジメのもとへ集まる。

ここからは何が起こってもおかしくない本当の魔境。気を引き締めると、ハジメは鋭い視線を巡らせる。

カム達、ハウリア族を下がらせてハジメは攻略の証を石板の窪みにはめ込んだ。一拍おいて、石板が淡く輝き出し文字が浮き出始める。

—— 四つの証

—— 再生の力

—— 紡がれた絆の道標

—— 全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう

それら条件を満たしてハジメ達はここにいる。

石板に攻略の証をはめ込み、ユエが大樹に再生魔法を行使すると枯れた木が生命力を取り戻したかのようになり大樹は鮮やかな緑を取り戻した。そして、突如、正面の幹が裂けるように左右に分かれ大樹に数十人が優に入れる洞が出来上がった。

ハジメ達は顔を見合わせ頷き合うと、躊躇うことなく巨大な洞の中へ足を踏み入れたが、洞の中は特に何も無いようで、ただ大きな空間がドーム状に広がっているだけである。

「行き止まりなのか？」

光輝が訝しそうに呟いた。

直後、洞の入口が逆再生でもしているように閉じ始める。

徐々に細くなっていく外の光。思わず慌てる光輝にハジメが一喝する。入口が完全に閉じ暗闇に包まれた洞の中で、咄嗟にユエが光源を確保しようと手をかざした。が、その必要はなかった。

なぜなら、足元に大きな魔法陣が出現し強烈な光を発したからだ。

「うわっ、なんだこりゃー！」

「なになに！ なんなのっ！」

「騒ぐな！ 転移系の魔法陣だ！ 転移先で呆けるなよ！」

動揺する龍太郎や鈴にハジメが注意した直後、彼等の視界は暗転した。

主人公33

「っ……ここは……」

【ハルツィナ樹海】の真の大迷宮に挑む為に大樹に中へと足を踏み入れたハジメ達は転移系の魔法によつてどこかに飛ばされてしまった。光を取り戻したハジメ達の視界に映ったのは、木々が生い茂る樹海だった。一瞬、大樹の外へ放り出されただけかと錯覚したハジメ達だが、わざわざ転移させる必要性はないので、ここが大迷宮の中なのは確かだろう。

大樹の中の大樹……なんとも奇妙な状況だ。

「みんな、無事か？」

光輝が、軽く頭を振りながら周囲の状況を確認し、仲間の安否を確認した。それに雫達が「大丈夫」と返事をする。ハジメや浩二達も特に問題はないようで、既に周囲を警戒し視線を飛ばしている。

光輝は困惑したように尋ねる。

「南雲、ここが本当の大迷宮なんだよな……？ どっちに向かえばいいんだ？」

周囲三百六十度、全てが木々に囲まれたサークル上の空き地であり、取るべき進路を示す道標は特に見当たらなかった。上は濃霧で覆われているので、飛び上がって上空から道を探すことはできそうにない。

「……取り敢えず、探すしかないな」

ハジメは、どこか不機嫌そうな表情で、微妙に噛み合わない言葉を呟いた。

その視線も、光輝には向いていない。

「……そうか。俺が先頭に行く。何か気づいたら教えてくれ」

ハジメの言葉を訝しみつつも、光輝は先陣を切った。神代魔法は、大迷宮に試練攻略を認められないと授かれないと聞いていたので、率先して動きたかったのだろう。

特に異論もなく、そろそろと他の者達もその後をついて行く――

――と思われたが、何故か、ハジメと浩二だけはその場を動かない。前

を行く者達の背を、冷たい眼差しで見据えている。

「浩二様。いかが——」

なさいましたか？ とティニアが浩二を心配して歩み寄ったその瞬間、浩二は抜刀。ティニアの首を斬り落とした。

ゴロゴロと、ティニアの首が地面を転がる。

突然のことに一拍の静寂。目の前で起きた光景に理解が追いつかず誰の思考も真つ白に染まり上がり、そこから徐々に現実を認識してようやく浩二がティニアの首を斬り落としたことを理解した。

「きやああああああああああああああああああッ!!」

悲鳴をあげる。

悲鳴を上げなくても誰もが顔を青ざめて茫然自失するなか、今度はハジメが神速で？宝物庫から拘束用のアーティファクトであるポーラを取り出し投げつけたのである。

標的はユエ、ティオ、そして龍太郎だ。三人共、浩二の首斬りによって抵抗する余地すらなくワイヤーに絡みつかれ空間に固定されてしまった。

「……ん!？」

「ご主人様!？」

「いきなり何しやがるっ」

ジタバタともがくユエ、ティオ、龍太郎。

ハジメは銃口をティオ、龍太郎に向けて躊躇うことなく引き金を引いた。額を撃ち抜かれた二人、茫然自失するなか一番に我に返った光輝は思わず怒声を上げて二人に意図を問おうとする。

「光輝。よく見ろ」

だが、その前に浩二が静かな口調でそう語りかける。

「いったい何を見ろって——ッ!？」

鋭い眼差しを浩二に向けながら文句を言おうとしたが、そこで光輝の視界にはあるモノが映った。それは浩二が斬り落としたティニアと首と胴体。切断面からは血が一切出ていないだけではなく、その身体はドロリと溶けて赤銅色のスライムのようなものだった。そしてそれはそのまま地面の染みとなった。ティオ、龍太郎も同様にスライ

ムのようになって地面の染みとなる。

「そういうことだ。で、聞きたいことだけ答えろ、紛い物」

その場が極寒の地になったかのような殺気交じりの声。あまりにも濃密な殺気に光輝達は呼吸が自然と浅くなり冷汗が滝のように流れ落ちた。

「お前はなんだ？ 本物のユエはどこにいる？」

「……」

ユエの姿をしたスライムは何も答えない。無機質な霧囲気を纏って無言を貫いた。ハジメはユエモドキの肩に銃弾を撃ち込むも表情一つ変えない。痛覚はないようだ。

「答える気はないか。いや、答える機能を持っていないのか。ならもういい。死ね」

ドンナーの銃口を額に向けると、レールガンで吹き飛ばした。そしてユエモドキは先程のティニア達同様にスライムに戻って地面の染みとなった。

「チツ。流石、大迷宮だ。いきなりやつてくれる……」

ハジメがドンナーをホルスターに仕舞いながら悪態を吐く。

「ハジメさん……ユエさんとティオさんは……」

「転移の際、別の場所に飛ばされたんだろうな。僅かに、神代魔法を取得する時の記憶を探られる感覚があつた。あの擬態能力を持っている赤銅色のスライムに記憶でも植え付けて成り済ませ、隙を見て背後からって感じじゃないか？」

ハジメがユエをダシにされて不機嫌そうに表情を歪ませる。ハジメの推測を聞いて、雫と鈴はゾツとしたように身震いした。

「なるほどね。……いきなり浩二がティニアさんの首を斬った時はどうしたのかと思つたわ」

「だよ。……いくらなんでもあれには鈴も真つ青だよ」

よほど浩二の首斬りがショッキングだったのだろう。二人の顔はまだ青ざめたままだ。そんな二人に代わって光輝がどうやって気付いたのかを浩二に問いかけた。

「神山で手に入れた魂魄魔法との相性が良くてな。俺には生物の魂が

見えるんだよ」

「？魂眼」と名付けた浩二の瞳には生物の魂が手に取るようにわかる。それだけじゃなく、その魂から相手の性格や本質、嘘まで見抜けて？医療師の技能も含めて肉体構造まで完璧に把握することができる為にとれだけ精度の高い偽装や擬態も浩二の前では無意味に終わる。

「なら、南雲はどうやって？」

「どうって言われてもな。見た瞬間、分かったとしか言いようがない。目の前のこいつは？俺のユエじゃない」って。平野が動いたおかげで俺も？魔眼石で違和感を見抜くことができたし、それ以外だと、普段の様子や性格を照らし合わせて、自力で気が付くしかないな」

「そ、そっか。でも龍太郎くんとか、どうやって見分ければいいのかなあ。鈴的に、脳筋発言された時点で、むしろ『本物だ！』ってなりそうなんだけど」

「も、もしかして、龍太郎が替え玉に選ばれたのは、そのせいか……くっ、龍太郎……」

「お前等、酷いな」

しかし、それを否定しない浩二も大概だ。

「でも、浩二くん。いくら偽物だとわかっていてもいきなりあれはどうかと思うな……」

「そうね。流星にあれば……」

どうやら突然の首斬りに思うことはあるようだ。いくら偽物だとわかっていてもハジメのように拘束する手段も持ち合わせているのにいきなり首を斬り落とすのはどうかと思うのだろう。それに対して浩二も思うことがあるようだ。

「……まあ、ティニアが利用されて少し頭に血が上っていたからな。俺もまだまだだ、か……」

どうやら大迷宮に大切な人を利用されたことに腹を立てて思わず斬ったようだ。それでもいきなり首斬りはどうかとは思いますが、ハジメだけはわかると言いたげに頷いた。

と、その時、シアが何か思いついたようで、ウサミミをピコンツと

させた。

そして、もじもじとしつつ期待を込めた眼差しでハジメに問うた。
「あのう、ハジメさん。……私でも見た瞬間に気が付いてくれますか？」

「！」

シアの問いかけに香織が敏感に反応。グリンツと顔をハジメに向けると、視線で「私はどうかな!? かな!?」と問いかける。

「旦那様、その、私が偽物にすり替えられても腹を立てて頂けますか……?」

「当然私でも怒りますわよね?」

なんとなく視線が二人に集まる。微妙に甘酸っぱい雰囲気の中、二人は特に気負った様子もなくあっさり答えた。

「さあ? 見た瞬間は無理じゃないか?」

「……」

普通なら「もちろん、気が付くに決まってる」と答えるべき場面で、しかし、容赦なく、いらぬ正直さを発揮するハジメクオリティーにシアと香織は思わずジト目になる。

「当たり前だろ。大切なお前を利用して心が穏やかでいられるか」

「旦那様……」

そう言つて貫えて嬉しそうに頬を緩ませるエフェルだが、浩二はレイナは完全に無視する。しかし、レイナはその程度で屈するほど柔な女ではない。むしろそれを糧にして行動する女である。

「くつ、浩二に勝つにはまだまだだのようですね。ですが、これもまた面白いですわ」

まだまだ勝負が^{デイト}必要のようですね。という呟きが聞こえるも浩二は無視^{スルー}。

「カ、カオリン、シアシア! 元氣出して!」

「香織は本当に、なんだってあんな奴を……」

羨ましそうな目でエフェルを見ながらほっぺをぷっくりと膨らませるシアと香織に鈴のフォローや光輝の呟きを耳にしつつハジメは小さく苦笑いを浮かべながら前を歩く。

「……」

そんななかで雫は何とも言えないような顔で浩二を見ると浩二と目が合って思わず視線を逸らした。するとポンと頭を軽く叩かれた雫は思わず頭を両手で押さえて叩いた張本人である浩二に視線を向けるも浩二は何も言わずに前へ歩き始める。

(浩二……)

前を歩く浩二の背中が雫にはとても大きく見えた。

主人公34

擬態した仲間を見破って大迷宮を進むハジメ達は樹海の中を当てもなく彷徨うことしばし、ヴヴヴッ!! と、まるで扇風機を最大で動かしているかのような音。一つや二つではない。おびただしい数だ。

「魔物か! 南雲、浩二、俺達が戦う! 手を出さないでくれ!」

「まあ、初戦だしな」

「了解」

光輝が前に出た。少々、意気込みが強過ぎて危うい感じはするものの、ハジメ達に対応しては一緒に来た意味がない。それに光輝達にしてみればこれが初めての、本当の大迷宮での魔物戦だ。雫や鈴が緊張の面持ちで光輝の背後に控えようとしたが、浩二が雫を下がらせる。

「雫。お前の實力なら今はまだ控えている。代わりにイリエとレイナが行くから」

「え?」

「どうして? と言わんばかりに浩二を見る。」

「今のお前の實力なら二人の為にならない。いざという時まで控えた方がいい」

「でも」

「雫。俺達なら大丈夫だ」

「そうだよ! シズシズ! 鈴達だって浩二くんの特訓を受けてきたんだからここは任せて!」

二人の言葉に雫は渋々と言わんばかりの顔で下がる。それでもいつでも動けるように身構えているのは雫らしいと浩二は内心で笑みを浮かべた。

「それじゃあ、イリエ、レイナ。二人のサポートを頼む」

「了解」

「ええ、言われなくても行きますわ」

雫の代わりにイリエとレイナが前に出る。

「この音、羽音ですよ! 皆さん、気を付けてください! 飛行型の

魔物の中でも、特に樹海の魔物は回避能力がすつごく高いですよ
！」

「光輝くん、鈴ちゃん、頑張つて！」

シアがアドバイス一つ。香織が声援を送る。

直後、木々の隙間をすり抜けるようにして、魔物の群れが襲来して
きた。

その姿は？蜂”。ただし、赤ん坊ほどの大きさで、百足のようにな
しやわしや動く無数の足がある。蜘蛛の如き口はギチギチと開閉さ
れ、盛り上がった複眼は七つ。黄色と黒の毒々しい色合いに、ねちよ
りとした緑の粘液を纏っていて、尾の針を伝ってびちゃびちゃと撒き
散らしている。

直視は避けたい、生理的にも受け付けられないような蜂モドキのそ
の姿に鈴は……。

「？天絶”！！」

怯むことなく結界を展開。押し寄せてくる蜂モドキの波を、分断
し、誘導する結界の道を作り出す。そこに光輝は十八番である？天翔
閃”を発動――

「？炎狼”！！」

するのではなく炎属性中級魔法である？炎狼”を発動した。範囲
魔法である炎の津波は光輝が得意とする光属性の魔法に比べてやや
劣るものの蟲の魔物だからか、眼前に現れた炎の津波に僅かに怯ん
だ。

「？天翔閃！！」

その怯んだ一瞬の隙を見逃すことなくお得意の？天翔閃”で蜂モ
ドキを一刀両断する。だが、蜂モドキの数は減らない。それどころか
仲間が殺されたことに怒っているのか、その動きは激しさを増し、炎
の津波をもともせず突っ込んでくる。

「くっ！」

炎の津波の津波を突破してきた蜂モドキの鋭角移動するような俊
敏性を目の当たりにして苦渋の顔を作る。蜂モドキはその蜘蛛のよ
うな口で光輝を捕食しようと襲いかかるも、光輝は後退ではなく踏み

込んで突きを放つ。

——八重樫流刀術 霞穿

光輝は八重樫流の技で迎撃した。

「まだだー」

——王国騎士剣術 旋刃

片手で横薙ぎした剣を、そのまま背中側で、もう片方の手に渡し、まったく同一方向からの横薙ぎを二連続で振るう王国騎士剣術。今は亡きハイリヒ王国騎士団前騎士団長メルド・ロギンスから教わった技を繰り広げた。

光輝は身に付けた二つの剣術を使い分けて大迷宮の魔物と戦えている。

「くそっ」

しかし、光輝は顔は何とも言えない、複雑な表情をしていた。

何故ならこうして自分が戦えているのは他でもない浩二との訓練のおかげだからだ。

『光輝。お前の戦い方は正直に言っただけで単純なんだよ』

それは浩二の魔法？クローン”によって生み出された浩二αに言われた。

『お前は基礎スペックは高い。それに聖剣の力もあるからゴリ押しでこれまでは戦えて来た』

『ゴリッ!? こ、浩二！ お前は俺が龍太郎と同じって言いたいのか!?』

『ぶっちゃけたら龍太郎よりマシって感じだな』

二人共、息をするかのように龍太郎を脳筋扱い。

『思い出してみろ。お前がこれまで使ってきた技を。基本的に同じ技しか使っていないだろ?』

『うっ』

そう言われたら心当たりがある。

光属性の性質が付与されている聖剣のこともあって光輝が基本的に使う魔法は光属性だ。勿論他の属性の魔法も使えるのだが、使用頻度は決して多くない。

『せっかく全属性適正や複合魔法の技能もあるのにそれを活用しないなんて龍太郎と同じだと思われても仕方がないだろう?』

『くっ』

光輝さんは何も言い返せなかった。

『逆に言えばこれまでゴリ押し of 戦闘でも戦えていたのは聖剣の力とお前自身のスペックの高さがあったからだ。だけど、これから先の戦いではゴリ押しだけじゃ通じないことはお前も理解しているだろう?』

『……』

無言のまま静かに首を縦に振った。

魔人族が使役していた魔物。その魔物相手に苦戦を強いられたことは光輝は身を持って知っている。

『だからこれから俺がお前に教える、というよりも治すのは剣術の矯正と戦闘に使う手札を増やすこの二つだ。光輝、お前は八重樫流とメルド団長から教わった騎士剣術を戦闘で使い分けろ。そして手札を増やせ』

浩二αは抜刀する。

『時間もないから荒療治で行くぞ。安心しろ、死んでも三分以内なら蘇生可能だ』

そして今、その訓練の成果を發揮している。

(だけど、俺は……ッ!)

確かに強くなれた。こうして大迷宮の魔物と戦えるぐらいには。しかし、納得できているかと言われたらどうとも言えない。そんな光輝の心の隙をつくかのように蜂モドキは振り下ろされる聖剣を回避して光輝に毒針を突き刺そうとする。

「しま——」

目を見開く光輝。しかし、その毒針は光輝に突き刺さることはなかった。

「やれやれですわね。しつかりしなさいな、勇者様」

レイナがその身を挺して毒針を受けたからだ。

「ッ!? このー!」

身を挺して守ってくれたレイナに一瞬驚くもすぐに我に返った光

輝は聖剣でレイナに毒針を突き刺している蜂モドキを斬り捨てる。

「浩二！ レイナさんを!!」

治療してくれ。そう言おうとするも。

「ん？ ああ、大丈夫大丈夫」

どうでもいいかのようにそう返した。毒針を受けた仲間に対してなんて雑な対応。光輝は浩二に憤りを感じるも、レイナは腹に突き刺さっている毒針を素手で引き抜いた。

「ふふ、流石は大迷宮ですわ。面白い、ええ、とても面白いですわ!!」
腹から流れる血を無視してレイナは歓喜の笑みと共に蜂モドキに突貫していく。

え、ちよ、ちよつと、と言いたげな顔でレイナを引き止めようと光輝は手を伸ばすもそれは空を切った。毒針を受けている筈なのに、腹から血を流している筈なのに、そんなことよりも闘争を！ と言わんばかりに蜂モドキと戦うレイナの顔はそれはもう新しい玩具を買って貰った子供のように嬉しさに満ちていた。

「……」

勇者は思わず引いた。表情も引き攣った。

おかしい、浩二、この人おかしい。特に頭が。そんな光輝の視線に気づいのか、浩二は諦観した眼差しで小さく首を横に振った。もう手遅れですと、言わんばかりに。

「オホホホホホ!!」

高笑いする声が大迷宮に響く。

「天絶天絶天絶う!」

光属性中級防御魔法？天絶”を連続で発動する鈴は蜂モドキの尾からマシンガンの如く掃射される針を防いでいた。しかし、絶えず周囲を旋回しながら多角的に撃ち込まれている。

？天絶”は展開数を重視した障壁であり、障壁自体の強度はそれほどでもない。しかし、？結界師”の鈴が展開する？天絶”は並の強度ではない上に浩二の特訓と人体改造によってその強度は大幅に上がっている。

油断さえしなければ蜂モドキが鈴の障壁を突破することはない。

それでも鈴の表情からは焦りが生じている。

(こんなところで立ち止まるわけにはいかない……ッ！)

それは一秒でも早く強くなりたい、神代魔法を手に入れたという焦りだ。その理由は親友だと思っていた中村恵理のことを浩二から聞いたから。

帝都に出発する前に鈴は浩二に呼ばれてついていくと浩二は鈴に言う。

『鈴。さつき恵理と会った』

『…え?』

『?僕はこの世界を壊す”。その言葉を伝えに来ていたんだ、恵理は』

恵理が帝都に来ていたことにも、その言葉にも鈴はどうしても信じられなかった。どうして? という気持ちの方が強い。

『どうして……? どうして恵理はそこまでして……』

『恵理の中にある破壊衝動がそうさせているんだろうな。だからこそ恵理は本気で俺達を、この世界を壊そうとするだろう』

それこそ原作で光輝を自分だけのモノにしようとした以上に。浩二が中途半端にカウンセリングをしたせいで妄執に囚われることなく、ただその衝動のままに目に映る全てを破壊しようとする。

『鈴、先に言っておく。光輝はもちろん俺でも恵理を救うことはできない。俺にできることは精々終わらせてやることだ』

?終わらせる”その意味がわからない鈴ではない。

『当然、香織や雫、南雲達でも無理だ。本当の意味で恵理を救うことができるとすればそれはずっと恵理の傍にいた鈴、お前だけだ』

『……鈴が?』

『ああ、だけどそれはあくまで恵理を救える可能性があるのが、という話だ。むしろ救えない可能性の方が遥かに高い。恵理だって何も考えずにこの世界を壊すなんて宣言はしないだろう。だからきつと俺達と同じように神代魔法を手に入れようとするはずだ』

浩二は鈴の肩に手を置き、告げる。

『もし、鈴が本気で恵理を救いたいというのなら神代魔法は必須。僅かな期待も淡い希望も捨てろ。そうでなければ俺が恵理を終わらせ

る』

刀に手を当ててそれがどういう意味なのかを伝える。
そうさせない為にも鈴は今ここにいる。

「鈴は、恵理と会うんだ!! 会って、恵理とお話するんだ!!」
鈴の決意と覚悟。

強くなる為に、神代魔法を手に入れる為に、恵理に、親友に会う為にも鈴はこんなところで立ち止まるわけにはいかない。そこにイリエが声をかける。

「鈴で合ってる?」

「え? う、うん」

「前が出る。だからあたしを守って」

「っ! 任せて! イリリン!」

前に出るイリエ。一人、単騎に攻めるイリエを蜂モドキは恰好の的かのような襲いかかるも。

「?天絶!」

鈴が障壁を展開させてイリエを守った。

イリエ一人に対して多方面から攻撃を仕掛けてくる蜂モドキの攻撃を高速で障壁を展開させて防ぐ鈴。そしてイリエはその槍を振るう。

「?魂斬」

槍を一振り。攻撃を受けた蜂モドキは無傷にも関わらず、まるで糸が切れた人形のように動かなくなった。

イリエは神山で手に入れた新たな神代魔法、魂魄魔法を扱えるように訓練して一つの技に昇華させたのが?魂斬だ。それは相手の物理的な防御を突破して魂へ直接攻撃する防御力無効化攻撃。

いくら高い防御力を持っていてもこの技の前では無意味。そしてイリエが得意とする?幻惑によって蜂モドキからはイリエの正確な位置が掴めず、攻撃が空振りに終わる。

動きも鈴の結界のおかげで制限されているし、防御も鈴に任せているから気にしなくてもいいからイリエは非常に戦いやすかった。

(訓練の成果は出ているようだな……)

浩二も蜂モドキを撃退しながら強くなっている二人を見て安心していた。

主人公35

「ハルツィナ樹海」の大迷宮の初戦。襲いかかってくる蜂モドキに奮闘する光輝達は確実に強くなっている。

しかし、蜂モドキの強みはその数の多さだ。

蜂モドキは幾百の群れ、数の力で光輝達を押し切ろうと迫りくる。

——が。

不意に蜂モドキ達は地面へと墜落して動かなくなった。

「何が……？」

あまりにも唐突なことに驚きながらも困惑する光輝だったがその理由もすぐに判明した。

「浩二か……？」

突然蜂モドキが動かなくなったその理由は他の誰でもない幼馴染である浩二の仕業だと理解するにはそう難しいことではなかった。というか、こんな芸当ができるのは浩二ぐらいしか思いつかなかった。

そして光輝の考えは正しかった。

いくら光輝達が強くなったとしても幾百の数の蜂モドキを相手にできるほどではない。だから浩二は魔物のみにも有効のあるウイルスを体内で生成、放出することで蜂モドキの生命活動を停止させた。

「お疲れ様。光輝それに鈴、特訓の成果は出たみたいだな」

「あ、ああ……」

「うん！ イリリンのおかげだよ！」

「どういたしまして」

無事に特訓の成果を発揮した二人に嬉しそうに頷く浩二に光輝はとりあえず頷き、鈴はイリエに抱き着いていた。

「とはいえ、流石にあの数はきついだろうから手を出させて貰ったが、ひとまずは大迷宮の魔物相手でも通用できることは証明されたな」

通用するとはわかっていても実際に戦わなければわからないこともある。だが、今回は問題はないようで浩二も一安心だ。

「こ、浩二……。私のことを忘れていきますわよ……」

「ひいー」

地面に這いつくばって近づいてきたのは身体中がズタボロ状態の血塗られたレイナだ。魔物の返り血や自身の血も含めて服が血塗れとなっているレイナは見て分かるように瀕死の状態だ。光輝を守った時の怪我也含めて全身怪我だらけ。むしろ怪我をしていないところを探す方が難しい。

それでも這いつくばって近づいてくるだけの力は残しているようだが、その凄惨な姿に鈴は思わず悲鳴を上げた。

「なんだ、生きていたのか？」

しかし浩二はその姿のレイナを見てもお前、いたの？ みたいな反応で返した。

「当然ですわ……。浩二を私のモノにするまで死ぬつもりはありませんわよ。ですが、回復魔法をお願いしますわ……。そろそろ意識が……」

「一回死んだら少しは大人しくなるんじゃないか？」

死に体であるレイナに死体蹴りでもするかのように言い返す浩二は治す気はないようだ。むしろ、一度心肺停止してから蘇生させようとさえ考えている。

「浩二。レイナさんを治してあげてくれ。彼女の怪我は俺を庇ってくれたせいでもあるんだ」

「チツ。優しい勇者様に感謝しろよ。？絶象」

舌打ちして再生魔法を行使する浩二。流石に幼馴染である光輝の懇願を無視するのは気が引けるし、きちんと光輝のサポートはしていたのは事実。再生魔法の光がレイナに降り注がれて怪我が完治したレイナは何事もなかったかのように立ち上がる。

「流石は大迷宮ですわね。楽しませてくれますわ」

あれほどの怪我を負っていたにも関わらず、戦意は揺れるどころか増すばかり。これだから戦闘狂はと、浩二は内心で愚痴を溢していた。

「レイナさん、すまない。俺のせいで怪我を負わせてしまって……」

「あら、謝る必要はありませんわよ？ 浩二に頼まれたことでもあり

ますし、子供の世話ぐらいみる器量はありましてよ」

「こ、子供……う？」

光輝のことを手間のかかる子供のように言うレイナにどういうことか説明して貰おうとした光輝であったが、レイナは光輝を置いて浩二に抱き着こうとするもアイアンクローを受けている最中だった。

「……」

地面に倒れている蜂モドキを見つめていると自然に光輝の手に力が入る。

強くはなつた。それは確かだ。だが、幼馴染である浩二は自分が苦戦した蜂モドキを一瞬で全滅することができたことに隔絶した実力差を嫌というほど痛感した。

無言で佇む光輝を、ハジメはチラリと見やった。

「……天之河」

「っ。な、なんだ？」

「今は、お前の幼馴染を捜し出すことだけ考えとけ。あれこれ悩むのは、やることやってからで十分だろ」

「……言われなくても分かっている。そんなこと」

多少言葉に棘が含まれながらも、ハジメの言葉に頷く光輝。一度大きく息を吐くと、行方不明の親友を思っただけを引締め直す。

ハジメは、そんな光輝をしばらく見つめた後、頭を振って視線を逸らした。

実のところ、ハジメには光輝が今抱いているものがどういう感情か、手に取るように分かっていた。劣等感や焦燥感、強さへの嫉妬……かつて、ハジメも抱いたこともある感情だ。

（平野も苦労しているわけだ……）

ハジメは元来の性格から割り切ることもできたが、なんでも持っていた光輝には持たざる経験がない。己の中の暗い感情を律するように教育している浩二の苦労が少し分かった気がした。

「ハジメさん、向こうは片付きましたよお」

「こつちも終わったよ」

はぐれた仲間を捜すべく、一行は樹海の奥へと進んで行くのだっ

た。

「あれは……猿か？」

暫く樹海の奥へと進んでいたハジメ達は猿モドキの魔物と遭遇したのだが……。

「仲間割れ、か……？」

困惑するように呟く光輝。棍棒や石のナイフなど一応の武装をした猿モドキの群れは一体の猿モドキを攻撃していた。猿モドキの群れに両手に棍棒を持って応戦する猿モドキ。

仲間割れか、リンチか。判断に悩むハジメ達よりも先に動いたのは浩二である。

一瞬で一体の猿モドキを攻撃していた猿モドキの首を刎ね、次々に猿モドキ達を切り裂いていく。

俊敏さと樹海という地の利を活かしたトリツキーな動きで浩二を翻弄させようとすることも、そんなものが浩二に通用することもなく瞬く間に猿モドキは瞬殺されていく。すると茂みの奥から満身創痍の龍太郎が姿を現した。

「龍太郎!？」

行方不明だった親友に光輝は思わず龍太郎の傍に駆けつけようとしたが、その前に浩二が龍太郎の首を斬って捨てた。

茫然自失する光輝。しかし、首を刎ねられた龍太郎の姿が猿モドキになった光景で先の赤銅色のスライムのようにこの猿モドキも？擬態”の固有魔法を持っていて彼等も大迷宮からハジメ達の情報を受け取っていたのだろうと理解した。

それでもいくら？擬態”しているのがわかっていたとはいえ、一瞬の躊躇いもなく幼馴染の姿をした猿モドキの首を刎ねるのもどうかとは思うが。

そして猿モドキの群れに応戦していた一体だけを残して全滅した浩二はその猿モドキに歩み寄り、口を開く。

「ここにいたのか、ティニア」

「キキ」

「なるほど。転移した後、気が付いたらその姿になっていたのか」
「キキ。キキキ」

「肉体も変質して、装備も失って、魔法も使えなくなっていたから姿を隠していたけど見つかってどうにか応戦していたのか。まあ、お前が無事でよかったよ」

「キキキ」

「謝る必要なんてないぞ。お前を助けるなんて当然のことなんだから」

猿モドキと普通に会話する浩二。

そんな浩二に置いてけぼりにされてポカンと口を開けて呆ける光輝達はハツと正気を取り戻した。

「いやいやいやいや、待て待て待て」

「ちよっと待って浩二、その猿がティニアさんなの？ どう見てもそうは見えないのだけど……」

「といつかなんで普通に会話してるの!? なんでわかるの!? 鈴にはキキとしか聞こえないよ!」

阿吽の呼吸でツツコミを入れる光輝、雫、鈴。それに対して浩二は当たり前のように言う。

「なんでって説明しただろ？ 俺の眼には魂が見えるって。だから一目でティニアだと気づいたし、会話だって視線の動きを見ればわかる」

「浩二くん、当たり前のように言っているけど普通はできないからね」
辛辣な言葉を頂戴する浩二。そしてハジメ達は魔物の姿をしているティニアを見て頷いていた。

「なるほどな。魔物がユエ達の姿に擬態していたようにユエ達も魔物の姿に変えられているようだな」

「この様子ですとユエさん達も……」

「ああ、急いで捜した方がいいかもしれないねえな」

危機感を抱くハジメ達。とりあえず言葉が通じないのは不便なので猿モドキとなっているティニアには？念話石^①を渡した。

『皆様、お手数をおかけして申し訳ございません』

「いえ、そのような姿になっているのでしたら仕方ありませんよ」
猿モドキとなつて姿を変えられた今のティニアは戦力にはなれない。そのことに申し訳なきように謝罪するもエフエルは気にしていないかのよう答える。

その間、浩二はティニアに再生魔法を行使したり、元に戻す方法を模索してはいるも原作通り肉体そのものが変質している為に元に戻すことはできない。？改造”の技能を使えば元の姿に改造することはできるかもしれないが、大迷宮を進めば元には戻るのは分かっている為に余計な手を出せば本当に元に戻らないかもしれないのでそのままにしておいた。

「よし、先を急ぐぞ」

ティニア同様に魔物の姿になっている可能性が高いユエを一刻も早く見つけたいハジメは先を急ぐのであった。

主人公36

大迷宮の試練によって猿モドキへと姿を変貌されたティニアと再会することができた浩二達はユエ達もティニアと同じように魔物の姿に変えられ散る可能性が高く、ユエ達の為にも南雲達はユエ達を探す為の大迷宮を進んで行くなかで浩二が光輝に言う。

「しかし光輝、俺がいてよかったな」

「いきなりどうした？ それはまあ、浩二のおかげで強くはなれてはいるが…」

ユエ達を搜索している道中で突拍子もなく言う浩二に光輝は少し複雑そうな顔でそう言うが浩二はそれを否定した。

「いや、そつちじゃない。魔物の姿に変えられているティニア達に見て気づくことができるのは俺か南雲ぐらいだろ？ 後は日頃からその人の仕草や行動などで判断するしかない」

「ああ」

「もし、俺がこの大迷宮に参加せずに最初に出会ったのは姿を変えられたユエだったらお前はようになっていたと思う？」

「それは……」

そこまで口を開いて光輝はハジメに視線を向けて血の気が引いたかのように顔を青ざめる。光輝の直情的な性格をよく知っている雫達も同様に顔を青ざめた。

きつと魔物と間違えて攻撃していただろう。ただでさえ大迷宮を攻略しようと躍起になっているのだからユエ達に気づくことなく攻撃を仕掛けてその後もしくはその前にハジメの手によって……。

「浩二。ありがとう……」

「ああ、気にするな」

光輝さんは心からの感謝の言葉を浩二に送った。もう命の恩人と言ってもいいだろう。

そこにハジメが呆れたように口を開く。

「いや、流石に殺しはしねえよ。お前等、俺を何だと思ってるんだ？」

流石のハジメもいくら相手が光輝だからといって問答無用に殺す

ことはしない。いくら魔物の姿に変えられたとはいえユエはユエだ。一目見ればすぐに気付く確信はハジメにはあった。だから仮にそうなっていたとしても光輝がユエに攻撃をする前に止める自信はある。「精々、地獄を見せるだけだ」

冗談半分のように告げるハジメだったが全員少しハジメと距離を取った。

「浩二。貴方の眼が頼りよ」

「ああ、早くユエさんを見つけてくれ」

二人は頼りになる幼馴染に速くユエを見つけてもらおうように頼み込む。他の皆もどうようにどうにかしてくれと縋るように浩二を見ている。どうやらハジメの冗談が冗談とは思えなかったのだろう。

シア以外の全員がまるで危険人物でも見るかのような眼差しでハジメを見ている。

「いや、冗談なんだが……」

「いえいえハジメさん。全然冗談には聞こえませんよお。目が本気でしたよ」

ハジメ的には冗談のつもりでも、万が一にそんなことになっていればと思えば本当に地獄を見せるつもりだったのだろう。皆の為に一刻も早くユエを見つける必要がある。

「しようがない。？魂感知」

すると波打つ波紋のように浩二を中心に何か広がっていく。

「何をしたんだ？」

「魂魄魔法の応用をしたソナー探知」

「？魂感知」。魂魄魔法を応用した索敵能力。使用者を中心とした一定範囲内の魂魄を見つける魔法だ。だが、そんな便利な魔法があるのならもっと早く使ってくれと、ハジメ達は目で訴えたが、それに察した浩二はそれに答える。

「ティニアに比べたら俺のはそこまで範囲は広くないからな」

天職が？探索者であるティニアに比べて浩二のは精度は高くても範囲はそこまで広くはない。だからある程度は迷宮を進まないといけないかった。

『申し訳ございません。この姿でなければ私が…』

探知・感知系の技能を多く有する？探索者”であるティニアが最も本領を発揮できる状況だというのに今のティニアは大迷宮の影響で魔物の姿に変えられている為に技能どころか魔法すらも使えない。

仕方がないこととはいえ、自分の不甲斐無さを責めてしまおうが。

「ティニア。気にするなつて言ってもティニアは納得できないだろう。だから元の姿に戻ったら頼りにするからそれまでは俺を頼ってくれ」

『……はい』

優しく告げられたその言葉にティニアは嬉しそうに頷く。

「さて、こつちだ」

ユエ達の魂を感じた浩二はハジメ達の先頭に立って歩き始める。しばらく歩き始めるとハジメも？「気配感知」でこちらから近づいている生物の気配に気づき、シアもウサミミを動かしている。

そしてハジメ達が発見したのは一体のゴブリンだった。

「グギャッー」

ゴブリンはハジメ達の姿を見つけるとどこか弾んだ声で鳴くも、自分の声にハツとしたように動きを止める。そんなゴブリンにハジメは愛おしそうに言う。

「ユエ」

浩二に確認して貰うまでもない。魔眼石を使うこともない。一目でそのゴブリンがユエだと断言できるハジメは愛する人の名を口にした。

ゴブリン姿のユエ——ユエゴブは自分と呼ぶハジメの言葉に嬉しそうに泣きながら駆け出してハジメの胸に飛び込んだ。ハジメも自分の胸に飛び込んできたユエゴブを愛おしそうに抱きとめる。

一見すると、抱きしめ合うゴブリンと男の囃——なのだが、周囲に満ちる空気はどこまでも甘やかで桃色だった。

「後は龍太郎とティオか……。ティオの魂はこの近くにあるからすぐに見つかるな」

ティニアに続いてユエとも合流することができたハジメ達は今度

は近くにいるテイオの方へ足を向ける。

「……ハジメさん。浩二さんに確認して貰わなくてもわかります。あれがテイオさんだつて」

「私も分かるよ。どう見てもテイオだよ」

『……ん。むしろ、テイオ以外にあんなのがいたら大変』

「姫様……」

「よしよし、エフェル。元気だしてな」

「満場一致で、あれがテイオだな」

なんとも冷たい目を前方に向けているハジメ達。それはまさに、汚物を見るかのような蔑みの目だ。雫と鈴それにイリエは「うわあ」とドン引き顔で、ティニアと光輝は直視できないと言わんばかりに顔を背けている。そしてその姿にエフェルは頭を押さえ、浩二は慰めに入っている。

「グギャー！ ギゲゲゲツ!!」

「ひぎい!？」

「ゴフウツ!! ゴブブブウ!!」

「ぶひいっ!？」

鳴き声で分かる通り、ハジメ達の視線の先にいたのはゴブリンの集団だった。その集団は、寄ってたかって一匹のゴブリンに殴る蹴るの暴行を加えている。

しかし、そこには相手を殺傷しようという意図はなく、どこかイジメじみた雰囲気か漂っていた。事実、暴行を受けて蹲っているゴブリンに目立った傷はない。

それだけなら、仲間内の序列争いとか、あるいはただの弱い者イジメと考えられるのだが……。

「あく、一応、誰がテイオか言った方がいいか？」

『結構です』

全員が声を揃えてそう言った。

誰が見てもイジメを受けている方がテイオだつてわかる。だつて

どう見ても虐められて恍惚している。そんな顔をするのは一人しかいない為に確認するまでもなかった。

「テイオ、お前って奴は……。お前等、あいつはもう手遅れだ。残念だが諦めよう」

ハジメは悲しげな表情で頭を振ると、そつと踵を返した。ユエ達もなんの躊躇いもなく追隨する。

「お待ちください」

だが、浩二に慰められていたエフェルがハジメ達の足を止めさせた。浩二の傍からスツと離れるエフェルのその表情はまるでこれから死地に赴くことを決意した戦士のような表情でハジメに歩み寄る。

「南雲さん、念話石を」

「お、おう……」

後退りさせるほどに気迫に満ちた表情にハジメは言われた通りに念話石をエフェルに渡すと、エフェルは「ありがとうございます」とお礼を言っつてゴブリンになっているテイオに歩み寄る。

「グギャ？ ギャギャギャ!!」

「!?」

テイオを虐めていたゴブリン達は近づいてくるエフェルの気迫に押され、逃げるようにその場から離れていく。そしてテイオはこれまで見たことのないほどの気迫に満ちたエフェルに思わずビクツと、肩を振るわせてしまい、額から冷や汗が流れ落ちる。

エフェルは畏まるかのようにその場に膝をついてテイオに念話石を渡す。

「テイオ様。お話したいことがございます」

『な、なんじゃ……?』

「私は幼少の頃よりテイオ様を尊敬し敬愛して憧れております。貴女様のお役に立ちたくて、貴女様のようになりたくて己を磨き、ヴェンリ様より淑女としてのなんたるかを教わり、いずれは貴女様の従者としてお傍に置いて貰うのが私の夢でございます」

『う、うむ……。そうじゃったのか』

「はい。族長、アドウル様の任務を果たしたその時はテイオ様に従者

にして頂けるか直訴するつもりでいました。なのに……姫様はどうして、姫様ではなくなつたのですか……？」

『……』

「臀部に杭を打ち込まれたままでならともかく、それでどうして変態になられてしまうのですか？ 再会した時にテイオ様に変態になつたと耳にしたとき、私がどれだけ心を痛めたのかわかりますか？ 私にはテイオ様のように痛みを快楽にすることなどできないのですよ？ それなのに行動を共にするにつれて見るに堪えない言動をするたびに私は旦那様から頭痛薬と胃薬を頂いているんですよ？ 夜、涙を流す私を慰めて頂いているんですよ？」

『な、仲睦まじくてなによりじゃ……』

「ありがとうございます。テイオ様の仰つて下さるようにとてもよくして頂いております。とはいえ、それは今のテイオ様を受け入れていないことでもあります。そのせいで変態であるテイオ様を見てみぬフリをしておりましたが、もう止めになります」

一呼吸置いてエフェルは告げる。

「不幸中の幸い、とでも言いましょうか。少なくとも竜人族でテイオ様の変化を知っているのは私だけです。ですので、私さえ受け入れれば何も問題はございません。里の皆さんはまだ私達の知っている姫様のままです」

エフェルの言葉に怪訝する。

するとエフェルの竜眼がこれでもかと縦に割れる。

「テイオ様は私が矯正します!!」

『きょっ!!』

思わぬ言葉にぎよつとする。

「ヴェンリ様に代わって私がテイオ様に淑女としてのなんたるかを叩き込みます！ 大迷宮を攻略した後はお覚悟を!!」

『ま、待つて欲しいのじゃ！ これも妾の個性じゃ！ 受け入れてたもうー！』

「ですから私は受け入れます！ 私の前ではいくらでもハアハアして頂いて構いません！ ですが、このままでは竜人族は変態ではないの

かという風評被害を受けてしまいます！　なによりテイオ様が変態となったことが里の皆さん、特にヴェンリ様に知られたらシヨック死してしまわれるかもしれませぬ!!」

『そこまで言うか!?!』

「言います！　ですから私は里の皆の心を御守りする為にも竜人族の未来の為にも私がテイオ様を私達の知るテイオ様へと矯正させてみせませぬ!」

テイオの変態性をどうにかしようという覚悟を固めたエフエルにテイオはただただ冷汗を流す。これは真剣だマツと瞳がそう語っている。

(これは俺も協力することになるだろうな……)

しかし、エフエルに頼まれたら断ることはしない。なにより浩二自身もテイオの性癖が本当に矯正できるものなのか色々と試してみたい気持ちもある。

『第一、お主も人の事は言えぬじゃろうが！　妾は知っておるのじゃぞ！　夜中、浩二にそれはもうたっぷりと後ろから』

「私は時と場所は弁えています！　それにテイオ様のような暴言や暴力で悦ぶ性癖は持ち合わせておりませぬ!!　……ってなに人の情事を覗いているのですか!?!」

顔を真っ赤にして叫ぶエフエルを置いてハジメ達は一斉に浩二に視線を向けるも浩二は視線を逸らして知らぬ存ぜぬに徹した。

そして騒ぐ竜人族が落ち着くまで数分の時間を有した。

主人公37

テイオの変態を矯正しようとは決意したエフェル。二人の竜人族の話し合いの詳細はとりあえず大迷宮攻略後ということで落ち着きはしたもののテイオは項垂れていた。攻略後に矯正される自分でも想像したのだろうか？

そんなこんなで大迷宮を進んで行くとオーガ同士の死闘に遭遇し、そのうちの一体が龍太郎だとすぐに判明した。その一体だけやたら洗練された武道の動き——空手をしていたのですぐに分かったのだが、逃げればいいものの何故かガチンコで殴り合いをしていた。光輝達が慌てて助けに入り事なきを得た龍太郎だったが、その後でオカンモードの雫にめちやくちや説教を受けた。

だけどこれで逸れたメンバーとも合流することができたハジメ達は巨木が鎮座している場所に辿り着いたのだが……到着直後、その巨木が暴れ始めた。

この階層の主と思われる巨大トレント。この先を進むには打倒することが必要だと思い、光輝、鈴、イリエ、レイナ、龍太郎オーガが前線に出て、相手が相手なので香織と浩二が回復要員で参加している。

『べらっおおおー！』

実際のオーガと変わらない雄叫びを上げながら、岩のような拳を振るう龍太郎。元の姿でならともかく今の姿では本来の力を十二分に発揮できていないのは痛手だ。そんな龍太郎に丸太のような太さの枝が風を切り裂きながら迫る。

「龍太郎！ 伏せろ！ ?天翔閃”！」

『うおっ!?!』

だが、すぐに光輝が十八番である?天翔閃”。光の斬撃を放って枝を斬り落とした。

「油断するな！ 龍太郎！」

『悪い！ 助かった！』

しかし、光輝達が攻めあぐねているのは事実。

「ぐうう！ 重い攻撃ですわね…ッ！」

「天絶天絶天絶ッ！ ああもう！ 数が多すぎるよ!!」

「近づけない…ッ!」

巨大トレントの鞭のようにしなり不規則な軌道を描いて襲い来る巨大な枝。刃物のように舞い散り飛び交う葉。砲弾のように撃ち込まれる木の実。突如、地面から鋭い切っ先を向けて飛び出してくる槍のような根。一つ一つが致死の攻撃。

撃ち込まれる木の実をレイナは？金剛”で防ぎ、鈴は高速展開する結界を常時発動させて葉や木の実から光輝達を守り続けているも攻撃の多さに思わず愚痴を叫ぶ。

イリエは？幻惑”を駆使しながら巨大トレントに近づこうとするも巨大トレントには？幻惑”が通用しないのか、接近することができずにいる。

香織と浩二のおかげで継戦能力の心配はないが、気を緩めれば即座に命を刈られかねない。とはいえ、攻撃力不足は明白。そこで鈴が……。

「光輝くん！ ? 神威” を使つて!」

「なっ、いやだが……」

鈴の言葉に光輝は即断できなかつた。

浩二のおかげで？魔力操作” を使えるようになってから無詠唱で発動することはできるようになったが？神威” を放つのに意識を？神威” に集中させる必要がある。つまり溜めの時間が有する。

タダでさえ巨大トレントの猛攻を防ぐのに精一杯なこの状況で無防備な状態を晒すのはリスクでしかない。しかし、鈴は言う。

「大丈夫！ 皆は鈴が守ってみせる!! だから鈴を信じて!!」

力強いその言葉に光輝は決断する。

「……わかつた。鈴を信じる!」

光輝が、その場で聖剣を頭上に掲げたまま微動だにしなくなった。？神威” を発動させる溜めを始める。その隙を巨大トレントが見逃すはずもなく、左右から木の枝が、頭上から竜巻のように迫る葉の刃が、正面から木の実の砲弾が襲いかかる。

「イリリン！ レイレイ！ ついでに龍太郎くんも光輝くんの近くに

！」

「了解」

「レイレイって私のことですか？ まあ、構いませんが」

『俺はついでおかよ!?』

鈴の言葉に即座に行動する三人は光輝の傍まで辿り着くと鈴は大きく息を吸う。

「浩二くん！ カオリン！ 後で回復お願い！」

そこで鈴は切り札を発動する。

「？第二魔力炉起動！！」

刹那、鈴の魔力が爆発的に上昇してその場を橙色で染め上げる。その光景を目撃したハジメ達も目をパチクリさせて浩二はニヤリと笑みを浮かべていた。

「？聖絶！！」

橙色の障壁を展開。今まで何度も自分達の窮地を救ってきた十八番の障壁は初撃の集中砲火を全て凌ぎ切っただけではない。それがどうしたと言わんばかりの強固を見せつける。

それに対して巨大トレントは障壁を粉碎するかのような連続攻撃を放つも鈴の障壁は亀裂どころか傷すら与えない。

これこそ浩二が鈴に与えた切り札？第二魔力炉”。

その正体は複製した神の使徒の魔石に似た器官を浩二が？改造”の技能を駆使して造り上げて鈴の体内に移植させた。とはいえ、あくまで複製品の為に神の使徒の技能を使うこともステータスが神の使徒同様上がるわけでもない。代わりに得られるその器官の特性は？魔力蓄積”。

本来持つ魔力とは別に魔力を溜め込むことができる器官を鈴に移植させて起動ワードと共に魔力炉は解放されて通常以上に強力な魔法を行使することができるし、発動時間も伸びる。今の鈴は魔力だけなら神の使徒に匹敵する力を行使できる。

それが浩二が鈴に施した？神の使徒対策”の切り札。

神の使徒との戦いは避けては通れない道。だから万が一にも神の使徒と戦える戦力を増やす為に浩二は鈴と龍太郎にその切り札を施

したのだ。

だが欠点もある。

通常魔力は自然回復を待つか回復薬や回復魔法などで回復することができ、？第二魔力炉^①は回復魔法でしか回復することができない。回復役である香織と浩二がいるから鈴は？第二魔力炉^②を使うことに躊躇いがなかった。

いや、例え回復役がいなくても鈴はここで使っていたかもしれない。今の鈴は前に進まなければいけない。恵理の為に、力を、神代魔法を手に入れようと鈴も必死なんだ。

「鈴は、進まなきゃいけないんだ!! 邪魔しないで!!」

歩む道を阻む巨大トレントに向けて鈴は叫ぶ。そんな焦りを感じさせるような痛々しい叫びに香織は「鈴ちゃん…」と悲し気に彼女の名を口にする。

(鈴…)

言葉にはしないも浩二も香織と同じ心境だ。親友を助ける為に、浩二に親友を殺させない為に鈴は力を求めている。

そこで遂に光輝から膨大な魔力が迸り、掲げる聖剣に収束した。太陽のように燦燦と輝く聖剣をグツと握り直した光輝は、大きく息を吸う。

「行くぞー！——？神威^③ ツ!!」

自身の切り札たる最大の魔法を解き放った。

光の奔流が射線上の地面を削り飛ばしながら爆進する。葉の刃を吹き飛ばし、木の枝を消滅させ、木の実の砲撃を真正面から呑み込み

轟音と共に光が爆せ、周囲を白に染め上げる。

「やったかー」

光輝が会心の笑みを浮かべて叫ぶ。

後方に控えて観戦していたハジメが、思わず「あ、フラグ立てやがった……」と呟く。

フラグはきっちり回収された。光が収まり粉塵が晴れた先には……あちこち欠損しつつも、堂々と立ち塞がる巨大トレントの姿が

あった。

「うそ、だろ……」

光輝の呆然とした声が虚しく虚空に響く。だがそれも無理もない。神威”は勇者の切り札に相応しい威力を持った最上級の攻撃魔法だ。トータス世界に來たばかりの光輝ならいざ知らず、練度も上がり、それなりの戦闘経験を積んできた今なら大抵の敵は屠れる。文字通りの必殺技だ。

だがそれは直撃していたらの話だ。

巨大トレントの手前には木端微塵になった大量の木々が散乱していた。それは巨大トレントの固有魔法？樹海現界”によって大量の木々を生み出し、それを操って光輝の？神威”が直撃するのを防いだのだ。

光輝が？限界突破”していたらそれごと巨大トレントを屠れたかもしれない。だがそんなの今更の話だ。

茫然自失する光輝。だがしかしこの瞬間、巨大トレントの猛攻は止んでいた。

巨大トレントの眼前に現れる二つの影。

イリエとレイナは巨大トレントに接近して得物を構えていた。

「ここまで近づければ」

「倒せますわ」

二人は別に光輝のことを信用していないわけでも巨大トレントの固有魔法を知っていたわけでもない。どちらかと言えば二人が動いたのはこれまで積み重ねてきた戦闘経験による直感のようなものだ。

光輝の？神威”では倒せないかもしれない。その可能性が脳裏を過った二人は光輝が？神威”を放ったと同時に動いた。光輝の？神威”で倒されたのならそれでよし。そうでないのなら自分の手で倒す。ただそれだけの話だ。

魔族の兵士と帝国人。共に数多くの戦闘経験を誇る二人だからこそその可能性を感じ取ったのかもしれない。

そして振るわれる二つの刃は巨大トレントを切り裂いた。

地面に倒れ伏せる巨大トレント。動かなくなったことを確認して

得物を収める。

「ふう、流石は大迷宮ですわ。胸が躍りますわねえ、イリエ」

「あたしは別に」

満足そうにするレイナはイリエに同意を求めるもイリエはレイナのような戦闘凶ではないので同意しなかった。「つれませんわね……」と少し不服そうにしながら光輝達の下へ戻ると香織は地面に座り込んでいる鈴に回復魔法をかけ、浩二は光輝と龍太郎の傷を治している。

「鈴ちゃん。大丈夫？」

「うん！ カオリンのおかげで鈴はまだまだいけるよ！」

元気いっぱいです！　と言わんばかりにいつものように明るく振る舞う鈴だが、先ほどの必死になっている鈴を見たせいか、香織は無理をしているように見えてしまう。

「あの、二人共……一ついいか？　どうして俺の？　神威」が防がれると思っただ？」

それとは別に光輝はイリエとレイナにそう尋ねていた。

光輝からしても文句のない一撃だった。直撃していたら確実に倒せていた。それなのに二人は巨大トレントを倒す為に動いていた理由を光輝は知りたかった。それに対して二人は……。

「なんとなく？」

揃って首を傾げながらそう答えた。

「そ、そうか……」

思いも寄らない答えに光輝は何も言えなかった。

「あら？」

すると地面からメキメキツという地響きを立てながら生えてきて、急速に成長する巨木の姿。先の巨大トレントそっくりの為に身構える光輝達だったが、巨大トレントは特に襲いかかるでもなく、しばらく佇むと大樹の時と同じように洞を作り始めた。幹が裂けるように左右に割れて中に空間が出来上がる。

「中ボスっぽいなとは思っていたが、次のステージに行く扉でもあったんだな」

ハジメが納得したように頷き、躊躇うことなく洞に向かった。その後モユエ達も付いて行く。身構えていた光輝達も構えを解いて慌てて追隨した。

案の定、大迷宮の入口同様に全員が入った直後、洞の入口は勝手に閉じていき、ほぼ同時に足元が輝き出した。そして全員の視界は莫大な光によって塗り潰された。

主人公38

「おはようございます。浩二様」

目を覚ました浩二が最初に見るものはカーテンの隙間から差し込む朝日に反射して輝く銀色の輝き。その輝くような銀色の髪をしたメイド服姿の女性、ティニアがまだ意識が曖昧な浩二を優しく起こしていた。

「……もう、朝?」

「はい。そろそろ朝食のお時間ですので起こしに参りました」

「ん、ありがとう」

ティニアに起こされて上半身を起こす浩二は大きな欠伸をすると、ティニアはクスリと小さく笑みを溢した。

「遅くまで勉強を頑張るのはいいことですが、無理はなさらないでくださいね」

「うん」

「今日も遅くまで起きていたら私が寝かしつけに行きますからね。寝間着に着替えさせて、添い寝しながら子守唄を歌いますからね」

「…はい」

それは冗談ではなく本気だと寝惚けた頭でもすぐに理解できた浩二は思わず敬語で返事をしてベッドから出る。

「お着替えの手伝いはいりませんか?」

「いりません」

浩二はティニアを部屋から出して用意してくれている学生服に手を伸ばして制服に着替える。

今日も学校に行く為に。

(それにしても毎朝美女メイドに起こされるなんて羨ましい生活してるな、俺…)

今となつてはいつも通りの朝だというのに感慨深くもそう思ってしまう。

ティニアは日本の文化を学ぶ為に日本の大学を選んで日本に訪れたまではよかったが、不幸にも事故に遭ってしまった。そこにたまた

ま近くにいた浩二が的確な応急処置を施したおかげで一命を取り留めることができ、助けてくれた浩二に恩返しがしたいということでは浩二の家にホームステイしている。ちなみにメイドをしているのは本人の趣味だそうだ。

制服に袖を通して鏡で身嗜みを整えると浩二はふと違和感を覚えた。

（あれ？ 俺の眼って片方紅色じゃなかったっけ？ ……いや、そんなわけではないか）

自分は生粋な日本人である為にオツドアイなわけではない。まだ頭が寝惚けているんだなど、思いながら着替えてリビングに向かう。

「あ、おはようございます。旦那、失礼、浩二さん」

「うん、おはよう。後、旦那様じゃないから」

リビングに顔を出すと和服を着たエプロン姿の美女——エフェルが柔和な笑みで声をかけてきた。どうやら今日の朝食はエフェルが用意してみたようだ。

「本当の私の旦那様になって頂いてもいいのですよ？ 勿論ティニアさんも一緒に」

「私もいつでも操を捧げる準備はできています」

「日本は一夫多妻制じゃないからね、二人共」

冗談？ 交じりで朝からそんな会話をする三人はいつものようにテーブルに座って食事をする。浩二の両親が二人共医者ということもあってどちらも多忙の日々を送っていて家を空けることが多い。そんな両親が自分の子供を心配してお手伝いさんを雇ったのだ。それがエフェル。

エフェルは毎日のように甲斐甲斐しくも浩二の身の回りの世話をしてくれていて今となつては住み込みでこの家で働いている。

（いやまあ、美女二人に好意を寄せられるのは悪い気はしないけど…）
浩二も鈍感ではない。二人が浩二に好意を寄せていることぐらい気付いている。だけど浩二には既に想い人がいるのだ。

そこにピンポンとインターホンが鳴った。

「あ、やべ。もうそんな時間か」

残った料理を急いで食べて浩二は慌てて玄関まで行くとそこには幼馴染の雫が立っていた。

「おはよう、雫」

「ええ、おはよう。浩二」

幼馴染であり浩二が想いを寄せている女性——八重樫雫と共に浩二は学校に向かうのであった。

「あれ？ 光輝達は？」

家を出ていつものメンバーである光輝、龍太郎、香織の姿が見えないことに怪訝すると。

「まだ寝惚けているの？ 二人共部活だからもう学校に行っているわよ」

「え？ああ、そうだったな」

雫に言われて納得する。

光輝はバスケット部、龍太郎は空手部に所属していて高校生になってから一緒に登下校することが少なくなってきた。

「それに香織は南雲君と一緒に登校するようになったでしょ？」

「ああ、告白が成功して二人共付き合うようになったもんな」

ハジメと香織は付き合い始めてから毎日、一緒に登下校している。

ハジメに好意を寄せていた香織。その香織の初恋を浩二と雫は一緒に応援し、支え、励まし、高校二年生になってようやく告白に成功したのだった。

香織の告白が成功して雫と一緒に涙を流した。今では二人の熱愛ぶりにこつちが胸やけするような思いをしている。

「今となってはもう、私達二人だけね」

「……そう、だな」

光輝が、龍太郎が、香織が、前に進んで歩んでいる。そこに寂しさが無いといえは嘘になる。

「いっそのこと、俺達も付き合い合ってみるか？ なんて」

冗談のようにだけどちよっぴりだけ期待も込めてそんなことを口走る浩二に雫は頬を薄っすらと赤くして俯いた。

「か、考えておくわ……」

「え？ あの、雫さん？」

思わぬ返答に戸惑う浩二はどういう意味か追言しようとしたその時。

「お姉様から離れろ!!」

そこに奇襲を仕掛けてくるのは一人の女子生徒。浩二と雫にとつて後輩にあたるその女子生徒は朝から声を張り上げながら浩二に襲いかかる。

「まったく」

だけど浩二は臆さず、怯まず、それどころか呆れながら襲いかかってくる後輩の腕を掴んでそのままゴミ箱に放り投げた。

「ふべ!!」

頭から綺麗に入った後輩を無視して浩二は雫と共に何事もなかったかのようにスタスタと歩き始める。

「ちよつと先輩！ 後輩をゴミ箱に投げておいて放置ですか!? この鬼畜！」

「朝から襲いかかってくる後輩に鬼畜呼ばわりされる筋合いはないぞ、後輩」

そう、浩二に投げられた後輩は雫のことをお姉様と慕い、お姉様に近づく害虫は駆除することも厭わない自称義妹。そしてその自称義妹のみで結成された組織が《ソウルシスターズ》だ。

この後輩もまたその《ソウルシスターズ》の一員である。

「朝から襲いかかるとはどういう了見だ？ しまいによってはお前等ソウルシスターズ全員に三日三晩は収まらない腹下しの薬でも盛るぞ」

「なに平然と恐ろしいことを!? お姉様！ やっぱりこの人は鬼畜の外道です！ 離れた方がいいですよ!!」

「まったくあなた達は……」

お姉様の口からは溜息が出た。

「会長の言っていた通り、もう既に二人の女性を侍らせているというのにお姉様にまで毒牙にかけるなんて……ッ！ 先輩！ 人としてそれはどうなんですか!?!」

「侍らせてもいねえし、毒牙にもかけてねえよ」

(美月ちゃんめ…。今度会ったらお仕置きしてやる)

光輝の妹である天之河美月はソウルシスターズ会長である。その会長の情報を元に後輩は朝から奇襲を仕掛けてきたようだ。

「とにかく、これ以上何かしてくるならケツに直接下剤をぶち込むぞ」
「ヒツ!？」

思わずお尻を守る後輩。

「浩二。それは止めてあげて」

本気でやりかねない幼馴染に流石に止めに入るお姉様。

「こ、この変態先輩！ 鬼畜！ サディウツ!？」

「浩二。おはよう」

「おう、助かった。イリエ」

後輩の意識を刈り取ったのは赤髪に褐色肌の女子生徒——イリエは手慣れた動きで後輩を荷物のように担ぐ。

「いつも助かる」

「問題ない。もう慣れたから」

女子生徒の後輩で唯一浩二の味方をしてくれるイリエは主を守る忠実な兵士のようにソウルシスターズの魔の手から浩二を守っている。

「他にも何人かソウルシスターズがいたけど全部片づけておいたから」

「相変わらずソウルシスターズの連携というか、結束力はどうなっているのやら……」

呆れを通り越してもはや尊敬の念すら抱くほどに。

「あたしはもう行くけど他はどうする?」

「放置でいいだろう。遅刻したらしたで自業自得だ」

「了解」

頷いて後輩を担ぎながら学校に向かうイリエ。

(本当に懐かれてるな……)

親のことについて相談してからイリエはこうして浩二のボディガードのように動いている。浩二自身も助かるから文句などはない

が。

(日頃のお礼も兼ねて今度飯でも奢ってやるか)
イリエに感謝しつつそのお礼について考える。

「はい、ハジメくん。あくん」

「えっと、香織さん。流石にここではちよつと……」

昼休み。恋人同士となったハジメと香織は一緒に昼食を取るようになって香織はハジメにおかずを食べさせようとすも流石に人目のある教室ではそれは恥ずかしいハジメはそれを口にはできなかつた。

だがそんなハジメを睨む者がいる。

それはもう人をも殺しそうな鋭い眼差しでハジメを睨んでいる。その視線に気づいたのか、ハジメはそつとそちらに目を向けるとそこには香織の幼馴染である浩二が凄く目で訴えている。

？香織の手料理が食えないって言うのか？ ああ？」

言葉は発していなくてもそう目で訴えている。それを見てハジメは悟った。これを食べなければ酷い目にあわされると。ゴクリと生唾を呑み込んで意を決したハジメは香織の料理を食べる。

「あ、相変わらず香織さんの料理は美味しいよ」

「えへへ、もっと上手になれるように頑張るからね」

嬉しそうに微笑む香織に満足そうに頷く浩二。ハジメはこれからもコレが続くと思うと胃が痛くなってきた。

「過保護」

「いや、雫も人のこと言えないだろうが」

「私はまだセーフよ」

浩二がハジメを睨まなければハジメの髪は数本宙を舞っていただろう。そして教室の壁にはシャーペンが突き刺さっていたかもしれない。

「いや、二人共香織に対して過保護過ぎるだろう」

「そうだぞ、二人共。南雲と香織はまだ付き合い始めたばかりなんだ

から二人のペースでやらせてやるべきだ」

香織に対して過保護過ぎる二人に呆れる龍太郎とそんな二人を諫める光輝。

「そういう光輝は変わったよな。以前のお前なら香織と一緒に飯を食べる南雲に何か言っていただろうにな。香織に甘えるなどか、香織に食事を用意させるなんてどういうことだとか」

「そんなことは……いや、言っていたかもしれない。だけど俺だって成長しているんだ。正しいことが全てじゃない。疑うことも大事だって」

以前のように自分の都合のいいことしか目を向けられない光輝は成長してきちんと現実にも目を向け、疑うことを知った。きちんと幼馴染が成長してくれて浩二も雫も嬉しく思う。

(ん？　　というか南雲の傍にいたのは香織じゃなかったような……)

イチャつくハジメと香織の光景にどこか違和感を覚える。確か金髪の美少女だったような気がしてならない。

(いや、そんなわけないよな……)

今もこうして大切な幼馴染の恋が報われているんだ。それを疑うのはよろしくない。

「そういえば光輝、また女子に告白されたんだっけ？　その女子と付き合うのか？」

「いや、今は部活に集中したいから丁重に断ったよ」

「ケツ、リア充が。女には困らないってか」

イケメンに思わず悪態を吐く浩二さん。

「いや、浩二も人のこと言えねえじゃねえの？　美女二人と同棲してんだからよ」

「一緒に住んでいるのと、彼女がいるのとはまた別問題です」

それとこれとは別問題のようだ。

「それよりさつきから気になっていたのだけど、浩二はさつきから何を聴いているの？」

「ああこれ？」

片方だけイヤホンを付けて何かを聴いている浩二に雫は尋ねると

浩二はイヤホンを外して雫に付ける。

「リリイから送られてきた新曲」

「ああ、あのアイドルの」

浩二の答えに納得する雫。

人気上昇中のアイドルリリイ。男女問わず絶大とも言える人気を誇るリリイから贈り物を聴かないわけにはいかない。

(まさかアイドルと知り合いになれる日がくるとは……)

路地裏で屈強な男に強姦されかけた時に浩二が助けた相手がりりイだった。それからリリイは今回のように新曲やチケットなどを浩二に送っている。

「……なんだか浩二の周りには女の人しかいないわね」

「そんなことねえよ、雫。光輝じゃないんだから」

そんなまさかと、笑う浩二。しかし雫は？「冗談よ」とは言わなかった。

「さあ、浩二！ 今日^{デート}も勝負ですわ!!」

「鬱陶しいのが来やがった……」

放課後、八重樫流の道場で雫や他の門下生と共に鍛錬に励んでいた浩二の下にいつものように現れたのは金髪碧眼の美少女であるレイナがやってきた。

「今日こそはこちらにサインをして頂きましょう!!」

取り出したのは婚姻届。既に片方には名前が記されている。

「誰がサインするか!? 国へ帰れ!!」

「お断りしますわ! さあ、勝負^{デート}ですわ!!」

木剣を片手に有無言わずに襲いかかってくるレイナに浩二は今日も相手をするのであった。そして師範を含めた他の門下生は浩二を助けに入ることなくむしろ茶菓子を用意して観戦モードに入っている。どう見ても面白がっていることにイラツと腹を立てる。

こうなったのもレイナは道場破りの如く八重樫流の道場にやってきて勝負を申し込んできた。そこへ師範である雫の父親、虎一さんが

まずは門下生である浩二を相手にするように告げられた。

八重樫流の門下生である以上は負けるつもりはない浩二はレイナに勝利したのだが、その勝負をきっかけにレイナはこうして毎日のように浩二を自分の夫にしようと勝負^{デート}をしている。

「国へ帰れ！ 戦闘狂はお断りだ！」

「つれませんわね！ ですが頑な貴方を領かせるのも一興ですわ！」
「もうやだこいつ!!」

更に戦意を燃やすレイナに嫌々ながら対応する浩二。道場の隅で観戦しながら野次を飛ばす門下生達は後でしばき倒すと心に誓う。

それから少しして今日の勝負^{デート}も浩二の勝ち。負けたレイナは「明日も来ますわ！」という言葉を残して道場を後にした。浩二は「もう来るな！」と叫んで塩をまいた。

レイナが去った後、浩二は師範と門下生をしばき倒しにかかる。

「痛っ!? 雫、もう少し優しくしてくれ」

「これぐらいがいい薬よ。まったく無茶をするんだから」

浩二は師範や門下生達をしばき倒そうとするも多勢に無勢。数の差には抗えずに敗北して稽古後に傷の手当てを雫にして貰っていた。

「クソ、師範達め。今度は毒針でも仕込んで口から泡でも吹かせてやる」

「毒は止めなさい、毒は」

やられた分はやり返す。怒りを燃やす浩二を諫めるように告げる雫の口からは息が漏れる。

「はい終わり」

「おう、サンキュ」

手当てが終えて立ち上がる浩二は着替えようと更衣室に向かう。

「あ、浩二」

のだが、雫に呼び止められてしまった。

「どうした？」

「えっと、その……浩二は私のことが好き？」

「え？」

予想外な内容に浩二は目を丸くする。しかし、雫は頬を赤くしながらも言葉を続ける。

「私は浩二のことが好きよ。家族としてではなく一人の男の人として……」

「雫……」

「自分でもおかしいとは思っているのよ？　だってこれまでずっと幼馴染、ううん、家族として接してきたもの。私が貴方に抱く感情は家族愛、親愛のようなものだと思っていたわ」

だけど。

「けど、けどね、最近になってようやく自覚したの。だって貴方の周りには女の人ばかりなんですから。貴方が私以外の女の人と話をするたびに私の胸は痛いよ……」

胸に手を当てて雫は想いを口にしていくな。

「そのことを香織に話したら？　それは恋だよ、雫ちゃん！」　ってまるで自分ごとのように話してくれたわ」

その姿が目には浮かぶ。

「この想いを伝えるべきか本気で悩んだわ。私なんかよりも魅力的な異性に囲まれている貴方に余計な負担を抱えさせるべきじゃないって。だけど」

雫は浩二に寄り添って想いを告げる。

「私は浩二が好き。だから私を選んで」

まさかの相思相愛。浩二が雫のことが好きだったように雫もまた浩二のことが好きだった。そんな人からの想いを聞いて以上、浩二の答えは決まっている。

本来であれば男である自分の方から言うべき筈なのに、言えなかった自分が情けなく思うも浩二は雫に自分の想いを伝える。

「雫、俺も——」

——……ごめんなさい

お前のことが好きだと、言おうとするも突然その言葉が頭の中に響いた。

……そっか

再び、声が聞こえる。

そして浩二の胸に激しい痛みが走る。

「ぐっー！」

「浩二!？」

思わず胸を押えて膝をつく浩二に雫は声を荒げた。

息を荒げる浩二はその痛みを知っている。

(ああ、そうだ、俺は……)

胸に走る痛みと共に記憶が駆け巡る。日本ではない別世界で浩二は既に自分の想いを雫に告げてフラれたという事実。

痛かった、苦しかった、辛かった。もう何もかもが崩れ落ちてしま
うぐらいに悲しかった。

たった一言のごめんなさいという言葉に。

(どうして俺はそんなことを忘れていたんだ……。忘れて、今の甘い
生活に溺れていたんだ……)

雫にフラれたあの日の一夜。それは決して忘れてはいけな
い思い出。それを忘れて今の世界に溺れていた自分あまりにも恥
ずかしかった。

「浩二。大丈夫なの？」

心配そうに身を案じてくれる。そんな雫がどうしても愛おしくて
仕方がない。

「……本当に大迷宮は原作知識があっても油断できないな」

苦笑いを浮かべながらそうぼやいて浩二は立ち上がると、そこには
道着姿の浩二はいない。異世界で変化した片目は紅色に戻り、恰好も
元に戻った。

「浩二、その恰好は……」

突然の浩二の変化に戸惑う雫。浩二は雫の頬にそつと手を当てる。

「ごめんな、雫。俺は行くよ」

「行くってどこに……?」

「この夢のように甘い世界じゃない。元いた現実の世界に」

その言葉に雫は驚き、そして縋るかのように浩二に身を寄せる。

「お願い！ここにいて！なんでもする！私にできることならなんでもするから！」

瞳に涙を溜めながら悲痛な声をあげる雫に浩二は思わず頷いてしまいそうになった。例え偽物だとわかっていてもこの夢の世界に、理想の世界に雫や皆と一緒にいたいとそう思ってしまうから。

（嘘だと言いたい、抱きしめて傍にいたいと言いたい…）

込み上げてくる想いをぐっと噛みしめる。

「ぐめん」

雫の肩を掴んで自分から引き剥がす。

「……どうして、なの？」

理想通りの世界のはずなのに、それを振り切ることができなのか疑問の声が上がった。

「俺の本当に欲しいモノはこの世界じゃ決して手に入らないからだ」

それは雫からの告白の返事。雫の本心。それはこの世界では決して手に入らない想い。

「だから行かないといけない。現実の世界に戻って返事を聞かないと」

踵を返して目の前にある扉に手をかけると。

「……合格ですわ。甘く優しいだけのものに価値はない。与えられるだけじゃ意味がない。たとえ辛くとも、苦しくとも、現実で積み重ね、紡いだものこそが貴方を幸せにするのです。忘れないでください」

それは雫とは全く異なる声音。女性的にも男性的にも聞こえる。だが、酷く優しい声音だ。

浩二は意識が途切れる前に。

「その言葉、忘れない」

最後にそう告げた。

主人公39

背中と後頭部に当たる冷たく硬い感触と乾いた空気。それを感じて、僅かに微睡んでいた浩二の意識は急速に浮上した。

「……は……」

頭を振りながら身体を起こし、サツと周囲を確認する。

光源は一切なく真つ暗闇だったが、改造した浩二の瞳には暗闇など関係ない。その結果、どうやら気を失う寸前に入った巨樹の洞と同じような、されど二回り大きい場所にいると分かった。

ただ一点、ドーム状の空間の中に規則正しく円周上に置かれている一人人がすっぽり入れるぐらいの、柩のようなモノがあった。

浩二が目を覚ました場所は円周上に並ぶそれらの内の一つ。部屋の中央は特に何も無い。周囲の壁にも出入り口らしきものは一切なかった。

浩二は「ああ、そつか……」と原作知識を思い出して一人納得し、念のために棺から出て全員無事かどうか見て回る。

「どうやら南雲より俺の方が早かったみたいだな……」

琥珀のように黄褐色の物質の中で目を閉じて静かに横たわっているハジメ達。大迷宮で姿が変貌していたユエ達も元の姿に戻っていることにホッと一息ついた。

泡沫の夢。

甘い蜜で誘い、一度捕えれば二度と放さない食虫植物の如き仮初の世界を、皆が見せられている。そして、あの世界から脱出できれば、現実において目の前の琥珀の檻から解放される。

浩二はそうだとわかっていながらも危うく誘惑に負けてあの世界に囚われたままだっただろう。

(皮肉だな……。雫にフラれたからこそ脱出することができたなんて……)

雫が閉じ込められている琥珀を見つめながら浩二はおかしそうに笑った。

もし、あの夜の告白が成功して恋人同士になっていれば、告白もせ

ず、まだ幼馴染のままの関係に甘えていればきつと脱出することはできなかつただろう。

あの日、あの夜に雫に告白して玉砕し、フラれた痛みと悲しみを知ったからこそ脱出することができた。

「早く答えを聞かせてくれよ、雫……」

雫の眠る琥珀に触れながらそう呟く。

またあんな想いをするかもしれない恐怖や不安がある。そんな想いをするぐらいならいつそのこと諦めてしまえばいいとさえ思うことだつてある。

だけどそれでも浩二は待ち続ける。家族のように過ごしてきた雫が悩み、考え抜いた答えを雫本人の口から聞くその時まで。

すると琥珀の一つが仄かな光を放ち始めた。それを見て浩二はその光る琥珀に近づくと光は徐々に収まっていき、次に端からトロリと溶け始めた。

溶けた琥珀はそのまま棺自体に吸収されるようにして消えていき、五分もしない内に琥珀は完全に消えてしまった。

「っ……んんは……」

「おはよう、南雲」

目を覚ましたのは南雲ハジメ。起きたハジメに声をかける浩二にハジメは小さく息を吐いて言う。

「どうやらお前の方が早かつたみたいだな、平野」

「俺もさつき目覚めたばかりだから対して違いはないだろう」

「…ユエ達は、どこだ？」

目を覚ましてすぐにユエ達の安否を気にするハジメに浩二はユエが眠る棺を指すとハジメはその棺に近づいて本物のユエが眠っていることに安堵する。

「姿を変えられたティニア達は皆、元に戻ってる。そしてあの夢の世界の誘惑から脱出できたら現実に戻って来られるみたいだ」

「ああ、ところで平野はどんな夢だったんだ？」

「元の世界で皆がいて平和な日常の中で雫に告白された夢。南雲は？」

「俺も、この世界に召喚されず、平和な日常の中でユエやシア達と過ごしていくって夢だったな。……おそらく、過去に受けた大きな苦痛を伴う出来事をなかったことにして、その上で今ある幸せを組み込んだ世界を見させられるって感じなんだろう」

ハジメの推測に浩二も思わず納得してしまふ。

確かに浩二にとって雫に告白してフラれる。今でもあれ以上の苦痛などない。そういう意味ではハジメの推測は正しいと言える。

そう推測したハジメはユエの琥珀の棺に腰掛けると、目を閉じて横たわる愛しい恋人にそつと手を伸ばした。もちろん琥珀に阻まれて手は届かないが、それでもユエの顔をなぞるように手を這わせる。

「俺は雫達の方を見てくる」

「……ああ」

早く会いたい。そんな想いを抱くハジメの気持ちに察した浩二はそつとハジメ達から距離を取った。すると別の琥珀の棺が光を放ち始める。

ユエのではない。いや、ユエのものではあるが二つの琥珀の棺がほぼ同時に光を放ち始めて徐々に収まっていく。そして琥珀が棺に完全に吸収されて目を覚ましたのはユエと……。

「おはよう、ティニア」

「浩二様……？」

ティニアだ。目を覚ましたティニアはまだ意識がはつきりしておらず、状況も呑み込めていない為にただ一心に浩二を見つめる。浩二はそんなティニアをそつと抱き寄せる。

「どんな夢だったか訊いてもいいか？」

「……私が浩二様の特別になって王都の医療院で皆様と共に働いている夢を見ていました」

「そっか」

「ですが、私は浩二様の特別ではないと気づいて戻って来れました」
「後悔しているか？」

浩二にとって特別は雫。それは何があっても決して揺らぐことはない。それでもティニアは浩二の特別という椅子に座ろうと浩二に

尽くしている。そのことについて後悔しているのかと思ひ尋ねるもテイニアは首を横に振った。

「いえ、後悔など微塵もありません。貴方様が私のことも愛して下さることに変わりはありません。ですが少しでも我儘を申してもよろしいでしょうか?」

「ああ、なんでも言ってくれ」

「もう少しだけこのまま抱きしめてください」

「ああ」

背に腕を回して抱擁する二人。近くから咳払いのような異音が聞こえるも無視して互いの温もりを確認し合うように抱きしめ合うと別の琥珀の棺が光を放ち始めた。

「ぬがぁー!!」主人様の折檻はそんなに生温くないわぁーっ! ーから出直してくるんじやな!」

テイオであった。

部屋全体に響き渡るような声を共に宙に拳を振るうテイオにハジメ達は思わず、無言となり蔑んだ眼差しを向ける。特に、ハジメの目が冷たい。ツンドラだ。理想の世界で、自分は何をやらされていたのか、と。

その視線を受けた途端、テイオの背筋がブルリと震えた。軽くうつとりした表情になりつつパツと振り返り、そこに極寒の眼差しがあることを認識して更に身体を震わせる。

そして、ハジメと視線が合うや否や、飼い主を見つけたワンコの如く走り出した。

「ご主人様あく、ただいま戻ったのじゃ〜! 愛でておくれ〜!」

ル○ンダイブを決めながら飛び込んでくるテイオにハジメはドンナーしようとして手を伸ばすも。

「お戯れもほどほどにしてくださいませ、姫様」

「ぐふっ!」

いつの間にか目覚めていたエフェルがテイオの衿を掴んでテイオの変態的奇行を止めたのであった。

「エ、エフェル……。お主も無事に戻って来れたようじやな……」

「はい。おかげさまで。ところで姫様、ちよつとお話がありますのであちらの隅にまでお越し頂けますか？」

笑顔のまま部屋の隅を指すエフェルにティオは冷汗を流す。

迫力の秘めた笑顔と声は返答など求めていない。ティオの意志など関係なく連れて行くつもりである。

「南雲ハジメさん。少しだけティオ様をお借りしますね」

「おう」

「ご主人様!？」

笑顔で了承するハジメにティオは悲痛の顔で助けを求める。だが、現実残酷だ。この場でティオを助ける者など誰一人いなかった。

「旦那様。それにティニアさんもお目覚めになられてなりよりです。申し訳ございませんがお話は後でよろしいでしょうか？ 至急、やらなければならぬことができましたので」

「ああ、後でゆっくり話そう」

「ありがとうございます。それとは別に後で私もティニアさんのように甘えさせてくださいね」

「存分に甘やかしてやる」

浩二の言葉に破顔の笑みを浮かべるエフェルはティオを引きずりながら部屋の隅にまで行くとティオを正座させて何か言っているが浩二達は聞こえないふりをするのであった。

そして別の琥珀が輝いた。

次に脱出してきたのはイリエ。浩二はティニアから離れてイリエの傍まで歩み寄るとイリエは浩二を視認するとその胸に顔を埋めてきた。

「どうした？」

慰めるように頭を撫でながら尋ねるとイリエはどんな夢を見ていたのか話した。

イリエが見た夢は父も母も生きていて戦争が終わった世界で家族と浩二達と一緒に幸せな生活をしていた。戦争が終わった未来の夢を見せられていたらしい。

「だけど、そうじゃない。あたしの家族はもういない」

多くの魔族の為に、これからの平和の為に異を唱え続けた結果、イリエの父親はフリードの手によって斬首され、一族郎党神罰が下された。

そして母親と共に逃走するも母親はイリエを守る為に自ら命を断った。それは変えることのできない事実。

「あの夢の中にいたかった…。父さんと母さんがいるあの夢の中に。だけどあたしの家族はもういない。だからあたしは父さんが為そうとしていたことを為すと決めた。魔族の未来の為にフリード様達と戦うと」

「そうか」

甘いあの夢の世界にいたい気持ちを抑え込み、己の果たすべきことを為す為にイリエは戻ってきた。自分を見失うことなく己の意志で戻ってきたんだ。

「頑張ったな。少し休んでいろ」

「うん…」

戻ってきたイリエを励まして休ませる。イリエも今だけはその言葉に甘えて休みを取る。いくら幼少の頃から軍、兵士として心身共に鍛えられていたとしても心の痛みは意志や身体の強さに関係ない。休める時は休むべきだ。

(香織の方も起きたか…)

見れば香織も目を覚ましていた。ユエに弄られている所を見る辺り、夢の中で色々あったのだろう。

「生温いですわ!!」

そんな声と共に飛び起きてきたのはレイナだ。飛び起きると同時に周囲を見渡すと浩二を発見、ロックオン。跳ねるように跳躍して拳を握りしめて浩二に寝起きの一撃を与えんとするも。

「? 回復パンチ」

「ふぐっ!」

あっさりとは反撃されてレイナの顔に浩二の拳が入ってレイナは殴り飛ばされるも満足そうに笑みを見せる。

「それでこそ私の夫ですわ。やはり、あのような夢などクソ喰らえで

すわね」

「夢の中で俺に何をさせた」

殴ると同時に回復魔法をかけたおかげでレイナは無傷だが、普段よりも口調が少し汚い。

「まったくもってつまらない夢ですわ。あのような戦いで浩二に勝つて私の夫になるだなんてちつとも嬉しくもなんともありませんわ。やはり浩二は容赦も情けもなく徹底的に攻めてこそ浩二ですわ!」

「人をそんな鬼畜みたいに言うな」

どうやらレイナはいつもの勝負^{デイト}で浩二に勝って浩二を自分の夫にしたようだが、そんなつまらない勝負^{デイト}に勝ったことに不満を抱いている。戻って来ることができたみたいだ。

流石の大迷宮も頭のおかしい戦闘狂を満足させることができる夢は見せられなかったようだ。しかし、これでハジメ達そして浩二達は全員帰還することができた。残されているのは光輝達のみ。一時間休憩した後で強制脱出する事に決定した。それまでは光輝達が自力で脱出するのを待つことにした。

それから食事を取りながら休息を取っていると琥珀の一つが輝き出した。

「あの琥珀は……鈴ちゃん!」

「意外じゃな。妾は雫だと思っておったが……」

「まあ、谷口は気合が入っていたいな」

雫よりも先に鈴が先に夢の世界から脱出することができた。香織は一目散に駆け寄り、起き上がるとうする鈴を支える。そして鈴は辺りを見渡して顔を暗くする。

「そっか……恵理はいないんだね……」

それだけでどんな夢を見ていたのか察した。香織はそつと鈴を抱きしめて鈴を慰める。鈴も無事に戻ってきてハジメ達は各々で休息を続けること約三時間ほど待たせても出てくることはなかった。

「そろそろ潮時かもな……」

「……ん。確かに」

「ですわね。……区切りをつけないとキリがないですし」

ハジメが琥珀を見つめながら、遂に強制脱出を切り出す。ユエとシアも、そろそろ仕方がないかと同意を示した。しかし、そこに香織達がストップをかける。

「でも……もう少し、もう少しだけダメかな？ 雫ちゃん達ならきつと……」

「そうだよ。鈴だつて戻つて来れたんだから」

「南雲。もう少しだけ頼む」

雫達の必死さ、神代魔法を手に入れようとしている気持ちを知っている為にもう少しだけ雫達が自力で脱出できるだけの時間を懇願する。香織達にハジメも肩を竦めてもう少しだけ待つことにした。

その直後、遂に琥珀の一つが輝き出した。

「雫、だな」

溶け出していく琥珀を見て、香織は一目散に駆け寄ろうとしたが、先に動く浩二の姿にその足を止めて優しい眼差しを向ける。雫は少し呻き声を出しながらも直ぐに目を覚まし、体を起こした。

「ここは……浩二？」

目を覚ました雫に浩二は雫を抱きしめた。

「ちよっ!? え!? こ、浩二!」

突然抱きしめられた雫は顔を赤くしながら困惑するように声を荒げるも。

「何も言わないし何も聞かない。ただ少しの間だけこうさせてくれ」

優しく、だけど大事なモノは確かにこの腕の中にあると言わんばかりに強く抱きしめる浩二の言葉に雫はそれ以上は何も言えず、ただ浩二の腕の中で借りてきた猫のように大人しくなる。

その光景にハジメとユエはニヤニヤと笑みを浮かべ、シアはハジメをチラチラと見ながら私もあんな風に抱きしめられたいですと、言いたそうな目をハジメに向ける。

ティニア達はやはりと思いつながらもそれでも雫に対して羨望や嫉妬の眼差しを向ける。浩二にとって？ 特別”は雫だけ。そうわかっただけでも羨ましいと思ってしまう。

そして香織は中々素直になれない子供の成長を見守る母親のよう

な慈愛に満ちた表情で二人を見ている。

約十秒間、雫を抱きしめていた浩二は雫を解放した。

「悪いな、雫。少し休んでいろ」

「え、ええ……」

満足したのか、雫の傍から離れる浩二に雫はただ頷く。そして今度は浩二の代わりに香織が雫の傍までやってきた。

「雫ちゃん、お帰りなさい」

「ええ、香織。ただいま」

親友の姿にいつもの調子を取り戻す雫。これで残りは光輝と龍太郎の二人は雫が精神的な疲れも十分に回復するまで待つていたが未だ戻ってきていない為に強制脱出が決定された。

と、思いきや……。

「へえ、意外だな……」

強制脱出を行おうとした直前に琥珀の一つが輝き出した。溶け出していく琥珀。そして棺から呻き声を出しながら起き上がってきたのは……。

「ギリギリだったな、龍太郎」

「浩二……?」

目を覚ましたのは龍太郎だ。強制脱出を行う直前に龍太郎は夢から目を覚まして戻ってきた。

(まさか龍太郎も目覚めるなんて……)

幼馴染の龍太郎が無事に戻ってきたことに安堵しながらも内心驚愕に包まれている。原作では光輝、龍太郎、鈴の三人は夢から目を覚ますことなく香織の手によって強制脱出させられるはずだった。だが、鈴に続いて龍太郎まで戻ってきたことは浩二も予想外なことだった。

「ということとは戻って来れたのか? 光輝は?」

目を覚まして光輝はどうなったかを尋ねる龍太郎に浩二はまだ眠っている光輝を指して答える。

「まだ目を覚ましていないのは光輝だけだ」

「……そうか」

まだ起きていない親友の姿に肩を落とす龍太郎に浩二はどんな夢だったのかを訊いてみた。

「ところで龍太郎。どんな夢を見てたんだ？」

「あゝ、その、なんだ……」

「？ まあ、言いたくないのなら別にいいけど」

龍太郎にしては珍しくもはっきりしない言葉に浩二は深追いはしなかった。言いたくない事だつてあるのだろうとそう自己解釈して龍太郎に食事を用意させて休ませる。

それからある程度の時間が経つても光輝が目覚める気配はなかった。

「なあ、南雲よお。もう少しだけ待ってやってくれねえか？」

「気持ちにはわからなくもないがもう十分待ってやった。そろそろ区切りをつけねえといつまで経つても先には進まねえぞ」

龍太郎が待ったをかけるもハジメはもう待つ気はなかった。ハジメの言う通り、もう十分と言っていいほどに時間は与えた。これ以上はこれから先の迷宮攻略にも支障が出るからハジメは龍太郎の頼みを断つた。龍太郎も龍太郎でハジメの言葉に何も言い返せず、仕方がないと口を閉ざした。

「――？分解」

そして香織の分解能力によって琥珀は空中に霧散して完全に分解される。一応用心として光輝に異常がないかをチェックするが何も問題がなかったことに安堵する。

「……あ？ あれ、香織？ 雫？ ここは？ 俺は二人と……」

そう時間もおかずに光輝は目を覚ました。

（光輝は無理だったか……）

龍太郎が目を覚ましたからもしかしたらとは思っていた。だが、現実には甘くはなく光輝は失敗した。光輝自身も先程まで見ていたのが夢だったのだと理解し、自分だけが失敗したことに暗い表情で拳を震わせる。

主人公40

理想の世界から脱出することができたハジメ達は部屋の中央に出現した魔法陣で次のステージに送られた。そこは最初と同じ樹海の中だった。だが、最初のどこに向かえばいいのか見当もつかないような広大さはなく、天井も向かうべき目標も見えていた。

見れば、他の木々がほぼ同じ高さであるのに対して、一番奥に一際巨大な樹がそびえ立っていた。セオリーからして、新たな転移陣のある場所だろう。

「今回は全員いるみたいだな」

ハジメは目を細めながらメンバーに視線を巡らせて浩二に確認を取るかのように視線を向けるも浩二も問題ないかのように頷く。

ハジメと浩二。二人の眼も感覚も本物だと示している為に一様はほっと肩の力を抜いた。

鬱蒼と茂る樹海と、遠くに見える巨樹を見て、ハジメが出発の号令をかける。チラリと肩越しに振り返れば、未だどこか表情に影が差している光輝の姿があった。

唯一一人だけ先の理想の世界から脱出することができなかった光輝の瞳には暗い影を宿し、何かを堪えるように務めて表情を消す有様から、酷い危うい印象を受ける。

ここは大迷宮。殺意高めの魔境だ。ほんの一秒後には絶体絶命の修羅場に陥っても全くおかしくない場所。いつまでも引きずっていは命に関わる。

そこでハジメはそんな光輝に一言物申そうとするが。

「光輝」

その前に浩二が光輝に声をかけた。

「どんな夢を見ていたのかは知らないが、さっきの試練をクリアできなかったのは紛れもない事実だ。お前がどう思おうともそれは変わることができない現実だ」

多少辛辣のある物言い。その言葉に光輝が何か言おうとするがその前に浩二は言葉を続ける。

「あの理想の世界が現実ならどれだけいいのか、その気持ちはわかる。だけどそうならないからこそ現実には残酷なんだ。そして、その残酷な現実に俺達は歯を噛み締めて、それでもと前に進む」

綴る言葉。浩二は光輝を指して言う。

「お前はここで足を止めるのか？ 光輝。たった一回の失敗で立ち止まってしまおうのか？」

浩二の瞳はじつと光輝を見据える。

その瞳を向けられた光輝は何かを言いたそうに何度も開こうとするも閉ざす。

光輝もわかっている。自分だけが先の試練をクリアできなかったことぐらい。ここで胸に抱く感情を浩二にぶつけたところで何の解決にもならない。

光輝は一度瞑目して何度も深呼吸をして空気と共に胸にある感情を吐き出すと、パンツと自分の頬を叩いた。

「立ち止まらない。浩二、俺はまだ前に進める！」

目に力が戻った。調子を取り戻した光輝に浩二も満足そうに頷いて「流石は勇者様だ」と軽口と共に肩を軽く叩いた。それに続いて龍太郎も「やってやろうぜ！ 光輝！」と肩をバシッ！と強く叩く。

「そうだよ！ まだ挽回のチャンスはある筈だよ！」

「ええ、一回ミスしただけで攻略が認められないわけではないわ」

鈴も雫も光輝を励ます。

周囲の励ましもあってやる気を取り戻した光輝にハジメは視線を前に戻して巨樹を指して真つ直ぐ進む。

樹海は、虫の鳴き声一つ聞こえない静寂で満ちている。風すら吹いていないので葉擦れの音も聞こえない。それが逆に薄気味悪く、まるで嵐の前の静けさのようだ。

緊張感と警戒心を満ちた鋭い視線を周囲に飛ばし、ハジメは偵察用のアーティファクト多目的蜘蛛型ゴーレム？アラクネ”を先行させているも特に何もなかった。

そう感じていたその瞬間に異変が訪れた。

「……………ん？ 雨か？」

「ほんとだ。ぽつぽつ来てるね」

突然、頭上から感じた水気に光輝は顔をしかめる。それに鈴が手をかざしながら同意する。が、次の瞬間、顔を見合わせると総毛立った。気が付いたからだ。

この場所で、雨が降るなど絶対にあり得ないと。

「チツ。ユエ!!」

「……んっ。——？聖絶」

ハジメがその異常性にいち早く反応しユエに呼びかける。ユエは阿吽の呼吸で障壁を展開した。

直後、ザアアアアツと、スコールじみた激しい雨が降り注いだ。際どいタイミングで間に合ったユエの？聖絶が雨の侵入を防ぐ。だが、誰も安心などしなかった。むしろ、その表情はますます強張っている。

当然だろう。降り注ぐ？それ〃は障壁の表面をどろりと滑り落ちていくのだから。

どう見ても雨水ではない。

「南雲君、周りがっ」

この状況でも冷静に目を凝らして障壁の外を注視していた雫が、緊迫した声音でハジメを呼ぶ。その視線の先には、木々、草、地面、あらゆる場所からにじみ出てくる乳白色の何かの姿があった。

それを見て浩二はティニアに視線を向けるもティニアは首を横に振った。

天職が？探索者〃であるティニアでさえ察知することができなかった。それだけではなく……。

「スライムか？クソツ。気配遮断タイプにしても、魔眼石にすら感知されないなんてどんな隠密性だよ」

「俺の魂眼でも視えなかった。大迷宮は本当に厄介だな！」

ハジメも浩二にすらも感知することができなかった。

先の試練に続いて原作知識があったとしても手の打ちようがない大迷宮の試練。その厄介さは知っていたとしてもどうすることもできない場面が続いている。それだけ大迷宮が厄介だと証明している

のだ。

「南雲！ 浩二！ 足元からも来たぞ！」

足元の地面からも乳白色のスライムが噴き出してきた。

「きゃつ、このっ——？ 分解！」

突然、足元からドバツ！ と飛び出した乳白色スライムに、膝下まで？ み込まれた香織が急いで？ 分解”を発動する。

さらさらと細かな粒子となって崩れ去っていく乳白色スライム。

「オラツ。引っ付くんじゃねえ！」

龍太郎が、背後からガバツと面積を広げて覆い被さろうとしてきた乳白色スライムに拳を叩き込む。籠手型のアーティファクトの効果で浸透勁にも似た衝撃が伝わるのだが、乳白色スライムは爆散して周囲に飛び散った。

「ちよつ、バカ、龍太郎！ こつちにも飛び散ってきただろう！」

「この脳筋！ 思いつきりかかったじゃない！」

「お？ すまん、すまん！」

「うえ〜。ネチヨネチヨだよお。気持ち悪いよお」

「……あたしなんて頭から」

光輝と雫が、豪快かつはた迷惑な龍太郎の倒し方に抗議の声を上げた。べつちより被った鈴は半泣きになり、その鈴の傍にいたイリエは目が軽く死んでいる。

「全く、大丈夫か、しず——」

「ええ。大丈夫よ、光輝。こいつら案外簡単に死ぬわ……って、どうしたの？」

「えつ、いやつ、なんでもないぞ！ ああ、なんでもない！」

光輝の慌てた様子に雫は首を傾げた。

その理由は乳白色スライム——もとい、その身体を構成するどろりとした乳白色の粘液にある。つまり、雫達の見た目は非常に不味いことになっている。

(……あとで光輝と龍太郎の記憶から抹消しておこう)

無論、当然その理由に気付いている浩二は後のことを考えて後で光

輝と龍太郎の記憶からこのことを消しておこうと決めた。

ハジメ達そして浩二達もそれぞれの方法で乳白色スライムを消していく。運が悪い事にティオはシアが吹き飛ばした乳白色スライムの飛沫をもちに浴びてしまった。絵面的に完全アウト。しかし、最初の数滴や僅かに飛び散った飛沫はこの場にいる全員に付着している。

？分解”を持つ浩二、ティニア、香織、雫は最も被害はないが、今なおスライムが豪雨となって降り注いでいる。地上で波打つスライムの群れは、まるで乳白色の海のようにだ。

「ユエ。結界は頼むぞ。一切合切、全部焼き滅ぼすから」
「……んっ。任せて」

その言葉通り、ハジメは一切合切、全部焼き滅ぼした。

クロスビットによる絨毯爆撃、円月輪から転移・放出されるタールの豪雨。それによって乳白色スライムの海は瞬く間に紅蓮の海に塗り替えられ、凄絶な熱量の炎が樹海ごと空間を舐め尽くし、発生した上昇気流が緋色の尖塔を築き上げる。

まるで過激なテロリストの如き樹海を焦土に変えていくハジメに光輝達は顔を引きつらせ、鈴に至っては雫にヒシツと抱きつく。

そうして全てのタールが燃え尽き、一部溶岩化した地面と、灰燼に帰した樹海、ぷすぷすと煙を上げる炭化した何か。ひとまずは目に映る範囲の乳白色スライムは焼き払ったが、まだ油断はできない。余裕ができた今の内に休息を取ろうするも、不意に結界が消えた。

それだけではなく。

「浩二様……」

「……旦那様」

ティニアとエフェルは火傷しそうなほど熱い吐息をし、うるうると潤んだ瞳と共に浩二にその身を摺り寄せる。ハジメも同様、ユエとシア、それだけではなく香織までもハジメに熱のこもった瞳を向けている。

光輝達も例外ではない。

「うう、うう……なにこれえ」

「くう……」

自分を抱き締めるように蹲る鈴に、イリエは必死に歯を噛み締めながら耐えている。

「うおおお……おおっ!!」

龍太郎も耐え難い何かに抗っているが、急に叫びをあげると同時に地面に頭を叩きつけて動かなくなった。どうやら正気を失う前に自らの意識を断ったようだ。

光輝は血走った目で傍らの雫を見つめており、おもむろに立ち上がると雫へと手を伸ばし始めた。

「ふうふう……っ、負けて、たまるものですか」

雫は身悶えた後、グツと唇を噛めた。ツーと血が滴り落ちるのも気にせず、むしろ、その痛みで僅かに正気が戻った隙に、すつと背筋を伸ばして座り直して瞑目し、その後は微動だにしない。

雫の名を呟きながら、正気を感じられない眼差しの光輝が、直ぐ傍まで迫っている。

「?縛煌鎖」

だが、そんなことを許す浩二ではない。ジャラジャラと音を立てながら地面から無数の鎖を生み出し、光輝を拘束する。振り解けないほどにきつく。

「これは媚薬ですわね」

「うむ。レイナの言う通り、どうやら、あの魔物の粘液は、強力な媚薬になっておったようじゃな」

不意にかかった声。レイナとテイオは平然とした表情、かつ、しっかりと足取りで、異常事態の考察までしていた。

「帝国でもよく使われておりますのですぐに気付きましたわ。叔父に盛られたこともありますし。とはいえ、ただの媚薬ではないようですよわね」

「そうじゃな。強烈な快楽作用で魔法行使すら阻害しておる。時間が経てば経つほど正気を失い、快楽のまま性に溺れることになるじやろうて。厄介なのは、これが実は粘液に媒介した物理的な作用ではなく、精神的な作用だという点じゃ。敢えて称するなら、?媚薬”ではなく?媚法”の固有魔法というべきか。状態異常の魔法の一種じや

な」

理路整然。テイオの鋭い考察が朗々と語られる。

「ご主人様が無事じゃったのは、浴びた量が最初の雨粒数滴で、後は？ 纏雷」で全て弾いたからじゃろう。数滴程度では、ご主人様の耐性を突破できなかったのじゃろうな」

テイオはチラリと浩二を見る。

浩二も間違いなく乳白色スライムの飛沫を浴びている。それなのにどうして平然としていられるのか？

それに浩二は答えた。

「魂魄魔法を応用した？ 魂殻」って技だ。簡単に言えば見えない鎧を纏っている。南雲の？ 纏雷」同様に俺もこれで防いだし、そもそも状態異常は俺にはさほど効果はない」

己の身体を改造して浩二には毒物を始めとした状態異常系の魔法もほぼ通用しない。

「これも試練なんだろうな。この後で絆が保てるかどうか……」

テイニアとエフェルに魂魄魔法の力で精神を落ち着かせながら浩二はハジメを見た。ハジメも同じ気持ちを抱いていたのか、頷いた。

「レイナ。どうしてお前は大丈夫なんだ？」

「テイオも、どうして平然としてんの？ 俺の記憶が確かなら、お前が一番浴びていたと思うんだが。それもコントかっつてくらいもろに」

浩二もハジメもそれぞれの仲間と同じ質問を投げた。

その問いにレイナは浩二に答える。

「私の天職は？ 不屈者」ですわよ。何事にも屈しないからこそ私ですわ」

テイオもハジメに答える。

「確かに、妾の体も粘液の効果が發揮されておる。事実、体を駆け巡る快楽に邪魔されて魔法がまともに使えんからの。じゃがのう、あまり舐めてくれるな、ご主人様よ。妾を誰だと思っておる」

互いに不敵な笑みを浮かべながら胸を張るレイナとテイオ。それだけ強烈な快楽に冒されながらも意思の力だけで正気を保っているというのだ。その強靭な精神力には感嘆の念を覚えずにはいられない

い。

帝国という実力主義の国で強者となるべく心身共に鍛え上げたレイナにたとえ末期のド変態でも、ティオは遙か昔から生き続ける誇り高い竜人族。二人共この程度の魔物の毒素に負けるわけが――

「この程度の快楽など浩二との勝負に比べたら物足りないですわ!!
やはり私を満足させてくれるのは浩二、貴方だけですわ!!」

「妾はご主人様の下僕ぞ! この程度の快楽、ご主人様から与えられる痛みという名の快楽に比べれば生温いにも程があるわ!! 妾を、ご主人様以外に尻を振る軽い女と思うてくれるなよお!!」

目をクワツ!! と見開き、拳を天に掲げてそう力説する戦闘狂と駄竜に、浩二とハジメは互いに目を合わせた。

――そつちも苦労してんだな。

――そつちもな。

お互いの心境は一致した。お互いに相手を哀れむかのように優しい眼差しを向けている。

『平野。大迷宮を攻略したら二人だけで飯でもどうだ? 色々と相談したいことがあるんだ』

『ああ、お互いに語り合おう』

互いに変態に苦労する二人の仲が進展した。

念話で今後のことについて話をするも今はそれは置いておく。今は目の前の問題を解決する方が優先だ。

二人は変態を無視して継りついている者達も語りかけた。

ハジメはユエ達に語り合うように浩二もティニアとエフェルに語り合う。

「二人共、魂魄魔法を施しているから多少は落ち着いた筈だけどどうする?」

地力で耐えるか? 手を借りるか? その二択を用意する浩二に二人は言う。

「大丈夫、です…。これ以上浩二様のお手を、煩わせるつもりはありません…。」

「ティオ様も耐えておられるのです…。私も同じ竜人族として耐え

ねば、恥というものです」

二人は自力で耐える方を選んだ。

(さて、イリエは……)

イリエは大丈夫かと思つてそちらに視線を向けると、イリエは槍を短く持つて自分の足に突き刺していた。痛みで快樂を誤魔化して耐えようとしている。

痛みで快樂を誤魔化するのは有効な手ではあるも、それを実行するとなれば話は違う。自分で自分を傷つける自傷行為は生半可な精神力ではできるものではない。

そういう意味ではイリエの精神力はテイオに匹敵するほどに強いのかも知れない。

(強くなった、な……)

最初に出会った頃に比べて今のイリエには確かに生きる意志が感じられる。そのことが浩二は素直に嬉しかった。

(鈴は、自分の腕を噛んで耐えているな……。龍太郎は……。うん、まあ、いいか……)

鈴もイリエと同じように自分の腕を噛んで痛みで正氣を保っている。そして地面に頭突きをして既に意識を絶っている龍太郎はそのまま放置した。

主人公41

どれぐらい時間が経ったのか。

いつの間にか、熱せられた地面や空気も元の温度を取り戻し、燻っていた火種も完全に鎮火した頃。ハジメ達の周囲は、妙に光沢のあるメタリックな地面へと変わっていた。その金属質の地面は、巨樹の方へ続いている。

「……もう、大丈夫です」

「こちらも、どうやら終わったようです」

湧き出していた快樂が綺麗さっぱりと消えたテイニア達。浩二はハジメ達の方に視線を向けるとユエ達もどうやら無事に耐え切ったようだ。

「ふう……」

「耐えた、耐えたよ……」

イリエと鈴も正気を失いかねないほどの快樂効果を精神力だけで耐えきったようだ。

「焦天」。イリエも鈴もよく耐えきったな」

正気を保つ為に自傷していたイリエの足を回復魔法で治して自ら意識を絶った龍太郎を起こすと、浩二は上着を脱いで雫にかける。

「浩二……?」

「雫も流石だな。とりあえずそれで前を隠しておけ」

「前?」

浩二の言葉に怪訝しながら視線を下に向けるとカクツと頬を染め上げた。

快樂の試練……。恐ろしい試練だった。動かずとも酷く発汗するほど大変な試練だった。誰も彼も、全身、濡れそぼるほどべっとりしている。さぞかし、汗でベトついて気持ちが悪いだらう。

真っ赤な顔で浩二の上着で前を隠し、小さくなる雫は何度も背を向けている浩二をチラチラと見ている。

「南雲。更衣室を頼む」

「ああ」

拘束していた光輝を解放してとある記憶の一部を消去すると浩二はハジメに女性陣が着替える為の簡易な更衣室を作り出して貰う。ハジメは“宝物庫”から予備の服を取り出して浩二もハジメから貰った？宝物庫”で服を取り出した。

「谷口の服は……サイズ的にユエしかいないな」

「……ん。今着ているのと似たようなものがあるから、それを出してあげる」

「光輝と龍太郎の服は俺が用意しているからそれを使ってくれ」

自分の？宝物庫”から、ユエが鈴用の着替えを出している間、ハジメは視線をシアから香織へ滑らせた。が、そこで善意のシアが前に進み出る。

「ではでは、雫さんの着替えは私が——」

「勘弁してください」

雫さん、まさかの土下座。シアが「何故です!？」とウサミミをみよんみよんさせる。

「いや、そりやそうだろう。お前、その露出過多の服……服(？)、むしろ服(笑)しか持ってねえじゃねえか」

「私の衣装に何か文句でも!? っていうか服(笑)ってなんですか!？」

近接戦闘者なのに、女の子の大事な部分しか覆っていない衣装のことです。

「雫様。私の予備のメイド服でよろしければお貸ししますよ。私と雫様ではサイズもちょうどよいでしょうし」

「……それは、ありがたいけど……」

シアのと比べたらいいけど、メイド服は少し雫には抵抗があった。似合いそうなのに。

そこへ救世主が現れる。

「安心しろ、雫。こんなこともあろうかと用意してあるぞ」

「浩二……ッ」

笑顔で親指を立てる浩二に雫は笑みを見せる。

流石は幼馴染。共に苦勞を分かち合ってきた間柄なだけあってよく理解してくれている。何故女物の着替えを持っているのかは今は

置いておいて雫は浩二から服を受け――

「さあ、受け取れ。雫」

取れなかった。

何故ならその服は俗に言うゴスロリ衣装だからだ。

「ちゃんと髪紐代わりのリボンも用意してある」

リボンまでしつかり用意している浩二。え？ その衣装、お前が作ったの？ というツツコミは誰もしなかった。

「勿論ただの服じゃないぞ？ 魔物の皮を素材に特殊な薬液に漬けて伸縮性と耐久性を高めてある。軽度の攻撃なら何も問題はない」

自信満々に語る浩二から少し離れた位置でハジメが香織に訊いた。

「なあ、平野って服を自作できるのか？」

「うん、服じゃないけど私の誕生日の時はお手製のぬいぐるみとか貰ってたよ。雫ちゃんにも同じものをあげてたから浩二くんの手先はすごく器用なんだよ」

お店に売っているものと大差ないよと、教える香織にハジメはマジかよ…とぼやく。

「どうした？ 雫。サイズならちゃんとお前に合うようにしてあるぞ」

「……」

雫さん、葛藤する。

シアの服か、ティニアのメイド服か、浩二のゴスロリ衣装か。

どれを選ぶか、雫さんは葛藤する。

「あら、いい服ですわね。これ、雫が着ないのでしたら私が頂きますわ」

「あ、おい！」

そこにレイナが横から浩二が持っていたゴスロリ衣装をかつきらった。

「いい服ですわね。私に似合いそうですわ」

「返せ！ それはお前用に作ってねえんだよ!!」

「雫が着ないのでしたら私が着てもよろしいでしょうか？ というよりもこれはもう私のモノなので着ますわ」

「ふざけんなー！」

ゴスロリ衣装を手にオホホホッ！ と笑いながら逃げるレイナを追いかける浩二。予想以上の素早い動きを發揮するレイナをそう簡単には捕まえられない。

「あの、雫ちゃん。私、雫ちゃんに合いそうなパンツルックの衣装持っているから」

「親友ー！ 心の友ー！ 私の香織いー！」

ゴスロリ衣装の雫を見てみたいという気持ちは香織にはあるも、今はそれどころではないと自重して親友に合うパンツルックを雫に渡す。

シアの服も、メイド服も、ゴスロリ衣装も着ることなく無事に服の問題は解決した。そして浩二が雫の為に作ったゴスロリ衣装は最終的にレイナの手に渡ってしまった。

「二ヶ月コツコツと頑張って作ったのに……」

「その努力は認めてやるよ」

雫に着て欲しいの一心で毎日コツコツと頑張つて完成させた衣装だが、その努力は実らず、レイナの手に渡ってしまった。そんな浩二にハジメは励ましの言葉を送った。

簡易更衣室で心身を整え、さっぱりした様子で全員が出てくる。だが、光輝は落ち込んでいた。龍太郎も光輝ほどではなくも顔を俯かせている。

媚薬効果で正気を失っていても自分がしたこと記憶は残るらしい。

快樂地獄の果ての人間関係、そして、仲間内の絆を試す——それが、今回の試練だろう。仲間内で、性的な意味で襲い合いそうになったのだから、その気まずさ、罪悪感の半端ないのは仕方がないことだ。

仲間意識の強い龍太郎も自ら意識を絶つたとはいえ、仲間を襲おうとしたことに思うことがあるのだろう。だが、光輝はそれだけじゃない。また自分だけが失敗してしまったという気持ちもあるかもしれない。

でも。

「浩二、きつきは助かった。止めてくれてありがとう」

光輝は浩二に感謝の言葉を送った。

誰かに何か言われたからではない。自分からそれを言いに来たのだ。

「ああ、そろそろ最後だと思うから気を引き締めて行こうぜ。龍太郎もな」

「あ、ああ。そうだな」

言外にお前も気を引き締めろと言う浩二は内心少しだけ嬉しかった。少しだけとは言え、光輝が成長してくれていることに。

（攻略が認められるかどうかは怪しいが、最後の試練をクリアすればもしかしたら……）

光輝も攻略が認められるかもしれない。

（頑張れよ、光輝）

内心、応援する。

そうして浩二達は遂に巨樹のもとへ辿り着いた。

主人公42

その後、ハジメ達は乳白色スライムに襲われることなく順調に進み、遂に巨樹のもとへ辿り着いた。今回も同じく、幹の洞が出来上がり、前と同じく転移陣が輝いて、ハジメ達の視界を強烈な閃光で真っ白に染めた。

「ん？ 転移、したよな？」

「……ん。見て、ハジメ。あつちに出口がある」

ハジメ達が転移した場所は、巨樹の洞とそっくりな洞の中だった。一瞬、転移していないのかと錯覚したハジメだったが、ユエの指さす方向を見れば、なるほど、確かに転移していたと頷く。

周囲を見渡せば誰も欠けることなく転移してきた。つまり、そのまま先へ進めということだろう。

ハジメ達は一つ頷き合うと、光が差し込む出口に向かって行った。そうして、洞の出口から外に出たハジメ達は、そのあまりの光景に、一瞬言葉を失うことになった。最初に、ぽつりとこぼすような所感を口にしたのはハジメだ。

「これは……まるでフェアベルゲンみたいだな」

誰もが頷く。

洞の先は、そのまま通路になっていたが、普通の通路ではなく、洞から続く巨大な枝が通路になっていた。そして、伸びゆく枝の通路は、同じように巨大な木のあちこちから突き出している他の枝通路と空中で絡み合い、複雑な空中回路を作り出していた。

トリックアートじみた巨大空中回路は目の錯覚すら起こしそうだ。

「地下空間……であることは間違いなさそうだが……」

頭上を見上げれば、そこには石壁でできたような天井が見える。馬鹿でかい地下空間の中心に巨大な木が天と地を結ぶようにそびえているようだ。

ただ、異常なのは、巨大な木の先が見えないこと。天井を貫いているのだった。

「……大樹？」

「そういうことになりますよね。ここは大樹の真下の空間ってことで
すか」

「でもそれだと、地上に見えていた大樹って……」

「ほんの一部なんだろうな」

大樹ウール・アルトの本当の大きさはどれほどのものだろうか？

長く生きた竜人族でさえも驚かされる世界の神秘。誰もが大樹の凄
まじいまでの巨大さに度肝を抜かれて無意識に頭上を仰いだ。

誰もが畏敬の念を捧げているかのようには、言葉もなく大樹を仰ぎ続
けたその時、シアのウサミミがピクピク動き出した。

何かの音を捉えたようだ。シアが「なんの音でしょう？」と、ウサ
ミミをびこびここと動かしながら、音源を辿っていく。

ガサガサ、ザワザワと微かに聞こえるそれは、何故かやたらと生理
的嫌悪感を覚えるもので、どうやら、ずっと下の方から響いてきてい
るようだった。

その音に顔をしかめ、鳥肌を立てながらシアは枝通路の端からそつ
と下を覗き込んだ。

「ん、暗くてよく見えないですねえ。……身体強化で視野能力を上
げてっつと」

シアが、視力を上げつつ、夜目がより一層利くように能力を上げた。
そして、ビシッと固まった。

「？ どうした、シア」

返事がない。ウサミミとウサシツポが、今まで見たことがないぐら
い逆立っている。おまけにビーンツと伸びきっている。

シアの異常を認め、ハジメも同じように覗き込んだ。？夜目？と？
遠見？の技能があるので、遥か下の空間でもよく見える。そう、よく
見えてしまった。

そしてビシッと固まった。

「……ハ、ハジメ？ どうしたの？」

「ハジメくん!？」

「ご、ご主人様よ、大丈夫かの？」

硬直した拳句、傍目から分かるほど鳥肌を立てているハジメに、ユ

工達が何事かと心配そうに声をかけた。ギギギギッとまるで油を差し忘れた機械のようなぎこちなさで振り返るハジメ。

その表情を見て、ユエ達のみならず、光輝達も驚愕で目を見開いた。傲岸不遜、大胆不敵。

そんな言葉がピタリと当てはまるハジメが、まるで恐怖に戦くように顔を青ざめていた。一体、何を見たというのか。

「これは……」

「どうした？ ティニア」

「南雲様達の様子が気になり、索敵を試してみたのですが無数の生命反応がありました」

ティニアも何かを察知した。だが、その言葉だけでは誰も何があるのかまではわからない。揃って首を傾げる皆にハジメがポツリと呟いた。

「……悪魔だ。悪魔がいる」

「……「悪魔？」……」

その場にいる全員が一斉に浩二に視線を向けた。確かにここに悪魔のような人間はいるが。

「言いたいことがあるなら聞くぞ？」

笑顔でそう言うも目は全く笑っていないかった。

「えっと、南雲君？ 悪魔って……あの悪魔？」

雫が、聖書に出てくるような悪魔をイメージして問うもハジメはその勘違いを察して頭を振った。

「いいや、もっと凶悪な奴だ。地獄の悪魔なんて目じゃない。お前等もよく知っている黒い奴等——台所の悪魔だよ……」

「ああ、なるほど」

こいつ何言ってるんだ……という視線が光輝達からハジメに突き刺さるなか、浩二はそれを聞いて原作知識でその悪魔の正体を思い出した。

ハジメはクロスビットを一機だけ取り出して下に飛ばした。そして、小型水晶ディスプレイを皆が見えるように掲げる。

それを覗き込むユエ達の眼前で、僅かなノイズの後、映し出された

のは……

「「「ツ!?」「」」」

奴等がいた。一匹見つけたら三十匹はいると思え！ という言葉と共に恐れられてきた、黒い悪魔の名を冠する頭文字にGのあんちくしょう。いつもカサカサと這い寄る混沌。陰から高速で移動し、途轍もない生命力でしぶとく生き足掻く。宙へ飛べば、地球であっても混沌と恐慌の状態異常をもたらす固有魔法まで使える強者。お母さん達と飲食店の怨敵。

その名——ゴキブリ。

そのゴキブリが、この地下空間の底部に、数百万、数千万、否、もはや測定不可能なほど蠢いているのだ。

例えるならゴキブリの海。波の如く寄せてはゴキブリの波だ。ガサガサ、ザワザワという音は、おびただしい数のゴキブリが奏でる活動音だったのだ。

「な、なんてもの見せるのよ……」

「うえ、Gがあんなにいっぱい、いっぱいい〜」

雫と鈴がハジメと同じように顔を青褪めて目を背ける。二人共、腕に鳥肌をこれでもかと立てていた。

光輝と龍太郎も「おおぅ……」と奇怪な呻き声を上げて、全力で視線を逸らしている。

硬直が解けたシアは、両手でウサミミをぺたりと折り畳んで塞ぎ、しやがみ込んで涙目になっている。

ティオとエフェル、それとレイナは比較的ましな方だが、それでも若干、顔が青い。

ティニアとイリエは顔を青褪めながら浩二の袖を握っている。

そして香織は……既に白目を? いていた。

だが、ただ一人。

「凄い数だな」

浩二だけは平然とただディスプレイに映し出された光景を見ていた。

「平野……お前、平気なのかよ」

「昔からゴキブリに対して嫌悪感とかはないな。まあ、流石に触るのには抵抗はあるが」

前世も含めて浩二はゴキブリに対して特に思うことはない。

「それよりもこの世界のゴキブリも元の世界のゴキブリに似ていることに驚いている。見た感じだと姿形は同じだけど、何か違いはあるのか？ ふむ、光輝、ちよつと降りて二、三匹ほど捕まえて来てくれな
いか？」

「嫌に決まってるだろ!？」

光輝は心から拒絶した。死んでも行つて堪るかといわんばかりに。

「勇者だろ？ 勇気をみせないでどうする？」

「少なくともここで勇者としての勇気をみせる時じゃないだろ!？」

「とうか止めなさい！ あんなもの捕まえようとししないで！」

「そうだよ！ 本気で止めて！」

全員から否定的な声が上がリ、浩二は不満そうにえくとぼやく。本気で捕まえて研究しようとしていたのか……。

「と、とにかくさっさと攻略しまおう。ここにとどまっていたら、それこそ襲われるかもしれないしな」

ハジメの言葉に（約一名を除いた）全員がいつも以上に真剣な表情になると、これまたいつも以上にしっかりと頷いた。

取り敢えず、枝通路が四本合流していて大きな足場になっている場所が見えていたので、一行はそこを目指すことになった。

途中、ゴキブリ達が飛び上がってこないか戦々恐々としながらも大きな足場に到着したハジメ達。公園ぐらゐの広さがあるのでゆつたりと周囲を見渡す余裕が生まれる。

「さて、どうすつかかな……何か見えたりしないか？」

「……ん。特には……」

「ないですねえ」

「南雲。大樹の反対側じゃないか？」

などと、全員で空間全体を見渡しつつ意見を出し合ったりしている
と……

——ヴヴヴヴヴッ!!

恐れていた音が響いてきた。羽ばたき音だ。それも大量の。「来ます！」

ティニアの一声。ハジメ達は表情を引き攣らせつつ、慌てて底部を確認すると、案の定、黒い津波の如きゴキブリの大群が羽ばたきながら猛烈な勢いで上昇してくる。

「くそつたれえ!!」

「んーっ。——？雷龍う」

「嫌ですうーっ!! ぶっ飛べ」

「やあああああ!! ブンカイツブンカイツ!!」

「く、来るでないわあああ。——」ブレスう!!」

ハジメはオルカンによるロケット弾の雨を降らせ、ユエは？雷龍”を、シアはドリユツケンで炸裂スラッグ弾を、香織は分解の砲撃を、ティオは？ブレス”を繰り出した。

「しようがねえ。？溶解霧」

「散りなさい!!」

「？ブレス”!!」

「？炎天”!!」

「？落牢”!!」

浩二は広範囲に及ぶ溶解毒を、ティニアは？分解”が付与した白銀羽を、エフェルはティオ同様に？ブレス”を、イリエは炎属性の上級魔法？炎天”を、レイナは土属性上級攻撃魔法？落牢”を繰り出す。

光輝達もそれぞれ咄嗟に放てる遠距離攻撃を一斉にぶっ放す。意外にも雫だけが「ふみい」と奇妙な呻き声を漏らして意識を飛ばしかけているが。

とはいえ、流石はチート達の火力。

圧倒的な殲滅力。だが、それだけの攻撃を放つても、数の暴力を前にすると焼け石に水状態。怖気を震う羽音を響かせた黒い津波は、どれだけ攻撃を受けても、まるで衰えを感じさせずに迫ってくる。

ゴキブリの津波は空間全体に広がりながら、まるで鳥が行う集団行動のように一糸乱れぬ動きで縦横無尽に飛び回る。

「うう、せ、？聖絶う”！」

既に半泣きになりながら、鈴が障壁を張った。

直後、ハジメ達のいる広場の更に上空まで、ザアアアアアー!!と音を響かせながらせり上がったゴキブリの津波は、そのまま重力に引かれるようにして一気にハジメ達へ襲いかかった。

一瞬にして、障壁の外が蠢く黒一色に染め上げられる。障壁に衝突し体液を撒き散らしながら潰れるゴキブリもいれば、カサカサと障壁外部を這い回るゴキブリもいる。

「——む、り」

「鈴! しつかり!」

「鈴う! 寝るな! 寝たら死ぬぞ! 俺達の精神がつ!!」
全く以て、その通りである。

フツと意識を失いかけた鈴にイリエと光輝が必死さを滲む声で励まし、ユエが鈴の? 聖絶”に重ねるようにして? 聖絶”を展開した。

「流石は大迷宮。精神攻撃も俺以上にえげつない」

「うむ。やはり、他の大迷宮の攻略を前提にしておるだけに、あるいは難易度も数段上に設定されておるのかもしれない」

比較的冷静な浩二とテイオが分析するようにそう口にする。

「れ、れれれ、冷静に分析してないで、どうにかしないと!」

「香織、大丈夫よ。問題ないわ。あれはただの黒ごまだもの。黒ごまプリンとか黒ごまふりかけとか、私、結構好きよ。特に? 黒ごまふりかけ・しょうゆ風味”は美味だわ。ご飯がとても進むの」

「浩二くん! 助けて!! 雫ちゃんが既に壊れかけてるう!!」

「? 鎮魂”。ほい、これで正気に戻ったぞ」

「正気に戻さないでよ!?! 浩二!!」

あらゆる状態異常を払拭する魂魄魔法で正気を取り戻させた雫はイヤイヤと頭を抱える。よほど正気を失いたいのだろう。だが眼前のゴキブリの津波を見ればそれも無理はない。

すると、障壁に群がっていたゴキブリが一齐に引いたのだ。

何事かと訝しむハジメ達の前でゴキブリの波は空中で球体を作ると、それを中心にして囲むように円環を作り出した。

巨大な円環の外周に更に円環が重ねられ、次には無数の縦列飛行す

るゴキブリが円環のあちこちに並び始める。次第に幾何学的な模様が空中に作り出されるその光景を見て、ハジメ達の頬は盛大に引き攣った。

「おいおいおい、まさか……魔法陣を形成しているのか？」

どう考えても不味い事態。本能がけたましく警鐘を鳴らしている。

ゴキブリの魔法陣形勢を止めようとするも、波打つゴキブリの津波が文字通りの肉壁となつてその身を盾に立ち塞がる。

そしてそうこうしている内に魔法陣が完成してしまい、中央の球体——一見すると卵にも見えるそれが脈動を始め、ドクンドクンツと鼓動のような音を響かせ、内側から押されるようにして蠢き、形を変えて行く。

直後、球体が弾けた。そうして現れたのは全長三メートルの巨大なゴキブリ。ただし、その姿は歪な人型というおぞましいフォルムだ。放たれる威圧感、そしてその冒瀆的な姿。おそらくこの大迷宮の最終ガーディアンにして試練なのだろうと確信させる。

「ギチチチチチチッ!!」

？人型”は、そんな不快な鳴き声を発しながら赤黒い燐光を纏った。

すると、？人型”の周囲にゴキブリが集まり、更に魔法陣を形成し始めた。どうやら？人型”は他のゴキブリを自由に操れるらしい。

新たな魔法陣の中央に、幾分小さめの球体が幾つも形成され始める。？人型”ほどではないが、大きく特殊なゴキブリが出現するのは明かだった。

その魔法陣に対して攻撃を加えようとした瞬間、突然、足元に大きな魔力の奔流を感じて動きを止める。一見すると足場に異常は見られない。だが、足場の下——広場たる枝通路の裏側にいつの間にかゴキブリが集まって魔法陣を形成していた。

不味い！ そう思った刹那、正体不明の魔法は発動した。

広場を透過して赤黒い魔力が天を衝いた。竜巻のように螺旋を描いて噴き上がる。

激しい光にハジメ達は顔を手で庇った。

爆発したかのように閃光が周囲一帯を包み込み、視界を塗り潰す。ものの数秒で光は霧散。

そこには、特にダメージを負った様子もない、無傷のハジメ達がいるた。

異常はないか？ と無事を確認しようとハジメ達はお互いの顔を見て言葉を失った。

湧き上がった感情は無事な姿に対する安堵ではない。

——嫌悪だった。

主人公43

？人型”のゴキブリが形成する魔法陣。それとは別にハジメ達の足元で形成された魔法陣。その魔法が発動して無事を確認しようとハジメ達は顔を見合わせたその瞬間、凄まじい嫌悪感が湧き上がった。

憎悪とも言い換えてもいいかもしれない。そんな暗い感情を抱き、その表情も憎々しげに歪められ、瞳には殺意すら宿っている。

(ああ、解体バラしたい……)

無論それは浩二でさえも例外ではない。雫達を見るだけで解体して苦痛の果てに殺してやりたいという暗い感情を抱いている。

感情の反転。それがこの大迷宮での最後の試練。

記憶、あるいは絆を以て反転した感情を振り払い元に戻れるか、あるいは、悪感情を抱いたままでも、今までの自分達を信じて共に困難を挑めるか。

質が悪いことに、絆が深ければ深いほど反転した時の感情は大きくなる。

そして、敵であり、否応なく嫌悪感を抱くはずの黒い悪魔が愛しさすら感じてしまっている。

味方同士は絆の深さ故に憎しみ合い、嫌悪を抱く敵だからこそ愛しく思えて刃が鈍るといふそういう狙いなのだろう。本当に嫌らしい試練だ。

明かに異常をきたらしているハジメ達に再びゴキブリの大群が押し寄せてきている。

？人型”がいくつもの魔法陣と黒い球体を作り出し、次々に縮小版の人型ゴキブリを作り出している。？人型”に比べ全体的に歪で、普通のゴキブリ——？小型”同士の結合も甘いようだ。

おそらく、？人型”の劣化版なのだろう。？半人型”というべきか。それを量産している。？人型”をボスとするなら、？小型”は兵士、？半人型”は騎士というべきか。

だがこのままでは連携はおろか、足を引っ張り合って？小型”の津

波に呑み込まれるか、？人型”と、次々と生み出されている体長一メートルくらいなの？半人型”を前に刃が鈍り、餌食になるか……。

今ここにいる全員の感性は、ゴキブリという存在は非常に愛するべき、庇護欲をそそのる生き物になっている。そんな生き物に危害を加えられるものか。

だから

「ああ、本当に愛らしいな。——じゃあ、死ね」

「……ん。本当に素敵。——取り敢えず、死ね」

——電磁加速式対物狙撃砲 シュラーゲン

——空間魔法 震天

同時に放たれる凶悪な攻撃。

ハジメの貫通特化の紅い砲撃。ユエの空間振動による衝撃波にゴキブリは塵芥となった。

愛しくても、可愛くても、殺したくなくても敵である。ならば殺す。

好悪の感情など、挟む余地はない。慈悲もない。

本当に感情が反転しているのか疑わしい二人を脅威に感じたのか、？人型”は無尽蔵に近い？小型”を呼び寄せる。二人に対抗するには戦力を二分している余裕はないようだ。

だがそれは妥当の判断。

強力かつ凶悪な殲滅力を持つこの二人を前に余裕ぶつてはいられない。だが、その代わりと言わんばかりにシア達の前には？人型”を二回りほど小さくした？半人型”の群れ。

数は優に二百……否、現在進行形で増殖している。

ハジメやユエ達はともかくとして、感情が反転しているシア達にとっては強敵なうえに戦いたくない相手。本来の実力を出せるかどうかとも怪しいのだが。

「ハッ。舐められたもんだ」

——八重樫流抜刀術改 魔血月刃

突如、？半人型”に襲いかかる赤黒い斬撃の嵐。そしてその斬撃を放ったであろう人物はスタスタと雫達より前に出る。

「浩二……」

驚きながら憎々しい者の名を口にする。だが、浩二はそんなこと気にもせずに皆に告げる。

「お前達は何の為にここに来た？ 生半可な覚悟でここまで来たのか？」

厳しく、咎めるかのような言葉に雫達の表情は更に厳しくなる。お前から葬ってやろうか？ と言っているほどに。

——だが

「違うだろ？ 俺も、お前達も自分達の意志でここにいる。覚悟を決めて大迷宮に挑みにきた。ならやることは簡単だ」

憎々しくも、忌々しくも思う浩二のその言葉は何故か心に響かせる。

「心を定めろ。顔を上げて前を見る。突き進め。己の意志と共に」

その言葉を置いて灰翼を広げて浩二は結界を飛び越え、？半人型”がいる戦場へ飛び立った。

——八重樫流刀術改 双刀紅月

刀を持つていない左手から自らの血を凝固させた血の刀を生み出し、二振りの刀で？半人型”を斬り捨てていく。

浩二は自分には才能も素質もないことは嫌というほど知っている。

ハジメとの戦いで色々と吹っ切れてはいるもの、それはどうしようも変えようがない事実だ。

今こそは高いステータスや自身の技能と応用力でどうにかなくてはいるものの素の剣術勝負でなら雫はおろか光輝にすら劣る。

そこで開発したのが？八重樫流改”だ。

トータスに転移する前から磨き続けてきた八重樫流と技能を組み合わせることで浩二は自分だけの技へと昇華させた。浩二だけの浩二しかできない。それが八重樫流改。

幼少の頃から雫の父親、師範から教わり、磨き続けてきた八重樫流に手を加えることに些かの抵抗もあった。だけど大事なものはそれに拘ることじゃない。強くなる為に自分がどうあるべきかだ。

だから浩二は元の世界、日本に帰ったら師範に全てを打ち明けるともりでいる。勝手に八重樫流を改造したことで破門を言い渡された

ら浩二は二度と八重樫流の門を潜らないことを覚悟して。

——八重樫流忍術 轟炎魔浪

刹那、？半人型”を襲う炎の津波。

最初に放った魔力を込めた血の斬撃を？魔力操作”の派生？遠隔操作”によつて魔法陣を形成し、炎の津波を発動した。正確に言えば？忍術”ではなく？魔法”で、それも神の使徒が使っていた？劫火浪”という属性魔法なのだが、その辺は本人の趣味が反映していそう

だ。だが、？半人型”はその炎の津波を飛び越えて浩二に襲いかかる。どうやらいくつかの？半人型”を肉壁にして炎の津波を飛び越えてきたようだ。

迎撃しようとする浩二だが、白銀色の羽が？半人型”を仕留めた。

「憎々しいですが、貴方様の言う通りでしょうね」

「そうですね。貴女と同意見なのは不服ですが」

ティニアが氷のように冷たい眼差しを浩二に向けながらも浩二を助けて、エフェルもまたティニアと同意見だったことに不服そうにするも、二人は己の果たすことに意識を集中させる。

「浩二様。援護しますので気にせず戦ってください」

「旦那様、敵の数を減らしますよ」

「ああ」

ティニアの正確無比な？分解”が付与されている銀羽で浩二の死角から襲う？半人型”を仕留めてエフェルの？プレス”が？半人型”を消し飛ばしていく。

「チツ。サディストに先を越されたですう！」

悪態と共にシアもまた動き出す。

虚空に出現する巨大な赤い球体——劍玉。

直後に響くは、大気すら戦くような衝撃と轟音。

直径二メートルの巨大な金属球が、ドリユツケンに叩き出されて砲弾と化する。

進路上にいた？半人型”は出端を挫かれる形で潰され、ひしゃげ、碎けながら吹き飛んだ。

「放置とか許しませんよ！ おチビとドS!!」

憎い相手が、自分には目もくれず戦場へ飛び出していったことが屈辱だったのか……。シアは剣玉の砲撃で空いた大穴へ飛び込み、ハジメとユエのもとへ行こうとするが、そうさせまいと？半人型”が四方八方から殺到した。

「ええいつ、この構ってちゃん達め！ ですう！」

ちよつぱり頬を染めながら、殺到する？半人型”達に足を止められたことにウサミミを荒ぶらせるシアはドリユツケンで？半人型”をぶつ叩く。

？半人型”は腐蝕のオーラを纏おうとも、ドリユツケンが一度振られるだけで発生する衝撃波が全て蹴散らす。全方位同時攻撃をしようとも、鎖で繋がった剣玉が、シアの回転に合わせて周囲一帯を薙ぎ払う。まさに暴風。

「……そうだ。あたしは」

浩二の言葉にイリエもまた動き出す。

父親が為せなかつた魔族の未来の為にここにいる。それを実現する為の力を求めて仲間と共に大迷宮に挑みにきた。だからここで足を止めているわけにはいかない。

「強くなる為に、あたしはここにいます」

イリエもまた槍を構えて？半人型”と戦う。

「まったく、私としたことが出遅れましたわ」

愛らしいゴキブリ達に攻撃を躊躇ってしまった。そんな自分に情けないと思いつつも先の浩二の言葉で目を覚ました。

「どれだけ愛らしくても夫のように強くなければ愛せませんわ」
細剣で？半人型”を突き刺していくレイナ。

愛らしくても強くなければ意味がない。まずは強くなければどれだけ愛おしくても愛せない。

「私の愛が欲しければまずは強さを証明しなさいな！」

そう言って攻撃を繰り出す。

「……そうだ、やらなきゃいけない」

「そうだよ、鈴だつて……」

龍太郎や鈴もまた動き出そうと前へ出る。

「なっ、戦う気か!？」

光輝がハツとしたように龍太郎を見た。正気を疑うような目だ。

この期に及んで躊躇いがあるらしい光輝に、雫が苛立たしげに語気を荒らげる。

「光輝。やるのよ。聞いたでしょう？ 感情が反転しているって。今抱いている感情は、本当の感情じゃあないのよ。やらなきゃ死ぬわ」
「だ、だけど……そうだっ、浩二がいる！ 殺さなくても防御に徹していれば、浩二が終わらせてくれるはずだ！」

光輝がたじろぐ。雫という腹立たしい相手より、信頼できる浩二に任せようとするが。

「馬鹿野郎！ 光輝！ あんな奴に任せっぱなしでいいのかよ!？」

龍太郎が叫んだ。

「だ、だけど……」

「俺はその為にここに来たんじゃないやねえ！ 俺は俺の意志でここに来た!! 強くなる為に!!」

「鈴も恵理ともう一度お話する為にここに来たんだ!!」

だからこそ龍太郎そして鈴は浩二より与えられた切り札を使う。

「? 竜人化”!!」

「? 第二魔力炉起動”!!」

鈴は第二魔力炉を起動させて結界を強化させると同時に龍太郎の身体が変貌する。

その背より広がる翼、鋼のような鱗、無骨な鉤爪、口腔から見える鋭牙。その姿は人の形をした竜そのもの。それが浩二が龍太郎に与えた切り札。

龍太郎は神の使徒との適性が低い上に鈴のように? 第二魔力炉”を与えても十全にそれを活用することはできない。自らの肉体を武器にする龍太郎をどう改造しようかと浩二自身も悩んだ。

だが、龍太郎の身体を調べる際に浩二はあることが判明した。

龍太郎は神の使徒との適性が低い代わりに魔物との適性が非常に高い。ハジメのように魔物の固有魔法を獲得できるほどに。だが、今

からオルクス大迷宮に行く時間はない。そこで浩二は閃いた。

——なら南雲から貰えばいいじゃねえか、と。

ハジメから（こつそりと無断で）血液を採血し、ついでに竜人族であるテイオとエフェルからも血液を採血し、それを調合して改造し、龍太郎に注入させた。

その結果、完成したのが？竜人化”

竜人族の？竜化” 同様にその状態の時だけ龍太郎のステータスは跳ね上がる……だけじゃない。

「？限界突破”!!」

その身体から深緑色の光が包み込む。

？勇者”である光輝とハジメしか持っていない？限界突破”の技能。ハジメの血液も注入したからか、もしくは限界を超えてでも強くなりたいたいという龍太郎の意志が生み出したものなのかは定かではないが、現に龍太郎はその技能を獲得した。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

雄叫びと同時にその翼を広げて？半人型”に突貫する龍太郎。荒ぶる竜のようにその猛威を？半人型”に振るう。しかし、その顔は自分の新たな力が通用することができる喜びよりも焦りに近い。

龍太郎はこの世界？トータス”に召喚されて戦争に参加することになっても特に深くは考えなかった。

光輝がいればなんとかなる。それに何かあっても浩二や雫がフォローしてくれるから自分は光輝を助けてやればいつも通り、なんとなくとそう思っていた。

魔族が襲撃してくるまでは。

これまでの魔物とは比べものにならない強さの前に光輝は敗北し、もう駄目かと思った矢先、浩二が魔物を倒し、魔族を殺した。

わかっていた。自分達がやっているのは魔物退治ではない。戦争であることを。だが、それを自覚せずに生半可な覚悟で戦場に出ていた。そして浩二だけは覚悟していたということ。龍太郎はそこで初めて自分の覚悟の無さを痛感した。だがその結果、浩二は皆の前から姿を消した。

人の死を間近で見た皆は人を殺した浩二と距離を取っていた。だから浩二は皆の士気を下げない為に皆の前から消えることを選んだ。

香織はハジメについて行き、浩二は王城、王都から去った。雫の様子もおかしく、光輝もどこかおかしく、これまでずっと一緒にいた仲間であり友人であり大切な幼馴染がバラバラになっただけでいい。

だから龍太郎は俺が強くならねえと思っただけでいい。以上で鍛錬に励んだ。

しかし、王都襲撃の際に恵理の裏切りに龍太郎は何もできず、戻ってきた浩二は自分達以上に強くなって戻ってきた。勇者である光輝を圧倒するほどに。

何もできなかった。強くなると決意したのに、光輝達のことを頼まれたのに何もできなかった。

龍太郎は自分を恥じた。強くなりたいと心から願った。

それが人を辞める結果になったとしても龍太郎に後悔はない。

「どうした？ 龍太郎。その程度か？」

「うるせえ!!」

挑発するような言葉に龍太郎は苛立ちを吐き捨てるようにそう返す。

「すごい……」

「？半人型」を相手に無双する浩二達を見て、香織は妬ましそうにそう呟いた。

浩二もシアも強いのは知っていた。だが、間近でその戦いを見るのは初めてだった。いや、浩二とシアだけではない。テイニアやエフェル、イリエにレイナ、龍太郎までも奮闘している。しかし香織も負けではない。襲ってきている？半人型」を、大剣で切り裂いては、分解の魔力を纏う銀羽の弾幕で撃墜し続けているので、香織自身も圧倒的な戦闘力を示しているのだが……

（私のは……貰った力だし）

という思いが、湧き上がってしまう。

貰った力というのであれば鈴や龍太郎達も同じだが、それでもそう思ってしまう。

「その感情は、メルジーネで克服したのではなかったのかの？」
「え？」

ブレスを散弾のように拡散させて連射しながら、ティオがチラリと香織へ視線を寄越しながら呟いた。

完全に内心を見透かされて、香織の中の悪感情が膨れ上がる。

だが、ティオはお構いなしに続けた。

「どのような手段であれ、手にした力はお主の力じゃ。そんな顔をするではないよ」

思わずティオに視線が吸い寄せられて、一瞬の隙を晒してしまった香織。振り返った香織の頭上から？半人型”が迫るが、ティオが見もせず片手間に放った風刃があっさり両断してしまう。

「胸を張って良いのじゃよ、香織。一途な想いも、その努力も、今この場に立っていることも、お主は誇ってよい」

「……うるさい。別に、ティオに言われなくたって分かっているもん”
”つい子供じみた文句を言ってしまう香織は八つ当たり気味に、分解の砲撃を放ちながら扇状に薙ぎ払う。軌道上にいた全ての？半人型”が風化したように塵となって落ちていく。

やはり、見透かしているのか。そんな香織に小さく笑いながら、ティオは「それに」と続けた。

「シアもまた、特別な子じゃ。誰かと比べられるものではない」

確かに、シアは特別だ。亜人族で唯一、魔力を有し、あんなにも強い。

香織がそう思っていると、ティオは首を横に振った。

「そうではないよ。あの子の能力を言うておるのではない。心のことを言うておる」

「心？」

「そう、心。元より、シアは兎人族。その心は平穏を愛し、争いを苦手とする」

けれど、それでも望みは叶えられないから。

「怯えながら一歩を踏み出し、泣きべそ掻きながら戦い、愛した者と、友の傍に立ち続けた。どうやら、世界は光輝に勇者の称号を与えたよ

うじゃが……」

ティオの視線が、シアへと流れる。

「妾からすれば、光輝も、それどころかご主人様ですら、その称号には不相応。真に？勇者ある者」とは、？勇者」とは——シア・ハウリアのことであろうよ」

ティオにとって、仲間の中で最も敬愛の念を抱いていたのは、驚いたことにシアだったらしい。

それに気が付いた香織は当然驚いたが、しかし、それよりも驚くところがある。というより、疑問がある。

「……ねえ、ティオ。感情、反転してる、よね？」

自分に対する言動、シアに対する隠すこともない敬愛の念。どう見ても悪感情を抱いているようには見えない。

「ふんっ。お主等のことは気に食わん。今も、憎々しい感情が湧き上がっている。……じゃがなあ、それがどうしたというのじゃ？」

「え？」

ティオの視線が、再び香織へ向いた。その瞳に宿る？深さ”に、？重み”に、香織は思わず息を呑んだ。

ふっと笑ったティオは、またも隙を晒した香織の背後へブレスを放ちつつ、事もなげに言った。

「感情の好悪など……そんなものに左右されるようでは、五百年も生きておれんよ」

記憶と、魂の標が、ティオに正しい判断を与えている。一度抱いた想いを、容易に忘れて感情に流されるようでは、彼女の長きを生きる心はとつくの昔に壊れている。だから、今憎くても、好意を抱いていた時の記憶さえあれば、ティオ・クラルスは決して流されない。正も負も、愛も憎しみも、全てを呑み込み背負うのだ。

「それに妾はシア以上に浩二の方に驚かされておる」

「浩二くんが……？」

確かに浩二は強い。今だって？半人型”相手に無双している。だけれどそうではない。

「シアのように？勇ある者」とはまた違う。心を定め、ただひたすら

に前へ突き進む強い精神力と胆力。どれほど高い壁が立ち塞がって
いようとも、強大な敵が待ち受けていたとしても浩二の歩みを止める
ものは恐らくおらぬであろう」

それこそハジメが立ちはだかろうとも浩二は怯むことなく突き進
む。

「突き進むその姿、その言葉は迷う者の心を鼓舞する。現に妾も先の
浩二の言葉は胸に響いた。お主もそうであろう?」

「……」

無言になるもそれは肯定だった。

勿論それは香織だけではない。憎々しいと思うも先の浩二の言葉
は嫌でも胸に響いた。その言葉にティニア達だけではない龍太郎や
鈴も動かした。

「残酷な現実には打ちのめされようとも、絶望を突き付けられたとして
も、それでもと前を見て、突き進むことができる者の言葉は人の心を
震わせ、ただひたすらに前に突き進むその背は憧憬を抱かせる。それ
が人々が英雄と呼ばれるモノの在り方じゃ」

偉業を為したから英雄と呼ばれるのではない。誰かにそう認めら
れた時点でその人はもう英雄なんだ。

例え本人にその自覚はなくても、もう既に浩二は多くの人に認めら
れている。

認められているからこそ人々を動かすことができる。

それがどれだけ憎々しくても忌々しくても関係ない。自分自身が
そう認めているから動いてしまうのだ。

「エフェルも良い男を選んだものじゃ」

彼女を幼少の頃から知っているティオは本心を口にする。とはい
え、今はそれどころではない。

為すべきことを為さなければいけない。

「香織。お主のことも、妾が守ろうぞ。天職? 守護者”を持つ、黒竜
ティオ・クラルスの名に懸けて」

身に纏うは王の如き覇気。他者に与えるは大樹の如き安らぎ、瞳に
宿るは鋼鉄の意志。

炎と風に黒髪を靡かせて、誇りを宣言するその姿は、思わず見惚れるほど美しい。

「け、けけ結構です！ 私、自分で戦えるから！」

「またも、子供じみた言葉を返してしまう香織。頬が微妙に熱くなっている。」

香織は思った。感情反転の魔法は凄まじい、と。

ド変態が、物凄く恰好良く見える！ と。

おそらく、乱れる感情を制御するために、余計な趣味嗜好を削ぎ落している結果として？ 竜人ティオ・クラルス”が全面的に表出しているのだろうか……

「まともなティオが、格好良くも美しい、誇り高き理想の？ お姉様”だった。」

それがハジメ達と出会う前のティオだとしたらエフェルが落ち込むのも理解できる。そんな理想のお姉様がどうしようもないド変態の駄竜になってしまえばそうなるのも頷ける。

「きゃっ!？」

不意に悲鳴が響いた。

雫が足元に付着していた？ 半人型”の体液で足を滑らせ転倒していた。その隙を？ 半人型”は見逃すことなく腐蝕を纏った腕を振りかぶる。

——八重樫流刀術改 壊刻斬像

しかし、振りかぶるその腕は雫に触れる前に？ 半人型”は斬られていた。

「何が……」

起きたのか？ 理解ができない雫だったが不意に雫を見ている浩二と目が合った。

（浩二が私を、助けた？ この距離で……？）

距離も離れているのにどうやって？ 半人型”を斬ったのか。それは再生魔法によるものだ。

？ 壊刻”という対象が過去に負った傷や損壊を再生する魔法。それを応用して斬撃を再生魔法によって再生させた。斬撃の再生。

斬った時間を再生魔法で復元した。その斬撃によって？半人型”は斬られたのだ。

だけど雫は感謝よりも苛立ちを募らせる。憎々しくも気に入らない相手に助けられたから。

「雫ちゃん！」

「か、香織……」

「ほらっ、立って雫ちゃん！ 休んでいる暇なんてないよ！」

「え、あ、うん」

手を引つ張られて、わたわたと起き上がる雫。戸惑いながら香織を見れば、香織は既に雫に背を見せて大剣を構えていた。

「大丈夫だよ。雫ちゃんには守ってくれる人がいるから」

それが誰なのか、聞かずともわかる。

「あ……」

いつだってそうだ。誰が自分を守り、助けてくれたのか。

『心を定めろ。顔を上げて前を見ろ。突き進め。己の意志と共に』

先の浩二の言葉が蘇る。

その言葉が胸を響かせる。まるで心の奥底にまで届いたかのように雫は自然と香織に背を向けた。

憎い相手だから——ではない。背を預け、背を預かる為に。

親友と背中合わせになって、雫は力強い声で言う。

「ありがとう、香織。もう大丈夫よ」

抜刀一閃。

先程までより格段に鋭さを増した抜刀術が？半人型”を両断した。

「うん！」

銀羽が乱舞する。回復魔法の輝きが駆け巡り、魔力も体力も傷も、みんなまとめて回復させる。

「ティオ！ こっちは私と雫ちゃんに対応するから、反対側をお願い！」

「うむっ、心得た！」

ティオが即応した。

これによって如何に？半人型”が？神の使徒”を模倣した魔物と

いえど、そのスペックは？人型”の劣化版。数の暴力が強みではあるが、一人の英雄の活躍によってもはや試練にはなり得なかった。

主人公44

——八重樫流投擲術改 鮮血時雨

魔力が込められた血を体外へ放出。血を凝固させて？魔力操作“の派生技能？魔力硬化”で強化させて投擲。空から降り注ぐ雨のように血の投擲武器が？半人型”を襲う。

——八重樫流体術改 魔鋼撃鉄

？改造”の派生技能？肉体硬化”と？魔力操作”の派生技能？魔力硬化”で硬質化させた肘鉄を？半人型”に食らわせる。肉体と魔力の同時硬化によって硬質化した浩二の肘鉄は？半人型”の胴体に風穴を空ける。

(キリがねえな……)

内心でそうぼやく。

無限に等しい数のゴキブリ。？小型”や？半人型”をいくら倒しても終わりが見えない。？人型”はハジメとユエの方に集中しているようだが、このままではまずい。

(俺はまだ余裕がある。だけど龍太郎は？竜人化”と？限界突破”を二つ同時に使っているから消耗は激しい筈だからもう長くはもたないだろう)

ちよくちよく回復はしているも根本的な解決にはなっていない。シア達はまだ大丈夫のようだが、それもいつまで続くかと言われれば何も答えられない。

(殲滅能力が乏しい自分が嫌だな……)

浩二が本領を發揮するのは対人戦闘。元々八重樫流を身に付ける際に自然と身についた対人の戦い方。それに自身の強化だけでなく相手の意識を誘導したり、逸らしたり、五感を鈍くしたりなど弱体化を促す。だから肉体構造をよく知っている人間相手に浩二は本領發揮できる。

殲滅戦が苦手というわけではないが、ハジメやユエのように銃器や兵器での物理的な殲滅や魔法による殲滅力は持ち合わせていない。

(今度、その辺りも考えてみるか)

殲滅力は今後の課題として置いておいて浩二は仲間達に視線を向ける。

(特に問題はないようだけど、光輝は駄目っぽいな……)

感情が反転し、敵への情から精彩が欠けている。それでも無事なのは香織達がフオローしているからだ。

(大迷宮を攻略できたら反省会だな、こりや……)

恐らくは大迷宮の攻略が認められず、神代魔法が手に入らないだろうと推測した浩二は攻略後のこれからのことについて反省会を開くことにした。

すると膨大な魔力の奔流がこの空間に響き渡る。

見ればハジメから紅の魔力が竜巻となって天と地を繋いでいる。

「限界突破」の最終派生技能？「覇潰」だ。

(終わりが近い、か……)

何かに集中しているユエを守るように動くハジメを見て浩二は確信した。次のユエの一手で終わることを。

それなら……。

(俺も全力を出しますか……)

「？改造・限界解除」

リミッター
生存本能を意図的に破壊して本来使えない力に手を付ける疑似的な？「限界突破」。？「改造」の派生技能？「限界解除」を発動させる。

そんな浩二を本能的に危険と察知したのか、数十体の？「半人型」が全方位同時攻撃を仕掛けるも瞬く間に斬り捨てられる。

「行くぞ」

その言葉と同時に浩二は消えた。

否、残像すら残さない圧倒的な速度で？「半人型」を次々斬り捨てていく。？「半人型」は攻撃も防御もする暇も隙もなく気が付いたら斬られていた。

「凄……」

次々と？「半人型」を斬り捨てていく浩二の姿に雫は思わず感嘆の声を出した。それは単純に強いという意味ではない。技能によって強化されていたとしてもその動きには無駄がなく洗練されている。

その動きが雫が良く知っている八重樫流の動きとは若干異なっており、無骨とも言えるほど余計な動きはない。

剣を極めた者の動きは一種の舞のような動きにも見えるもの。幼少の頃より剣術を磨き続けてきた雫がまさにそれだ。素人が雫の剣技を見れば舞を踊っているように見えるだろう。だが、お世辞にも浩二の動きからは舞と呼べる動きではない。ただ淡々と敵を斬り捨てていくその動きに雫は「凄い」としか言えなかった。

浩二には才能がないことぐらい誰よりも理解している。だからどこまでも実直に愚直に一からコツコツと己を鍛え、剣技を磨き続けることしかできなかった。

だからか、その剣技には舞のような美しさなどはなかった。けど、いや、だからこそただ圧倒されるような凄さがそこにあった。

「……」

「？半人型」を斬り捨てながらも雫はなんとも言えない複雑な表情で浩二を見据えて、その浩二を心から慕うティニア達に視線を向けてしまう。

それは葛藤か、羨望か、もしくは嫉妬なのかは雫自身にもわからない。い。

「うわぁ」

だが、そんな浩二の口からそんな声が漏れた。

噴火、そう錯覚するほどの勢いで、全ての壁からゴキブリの大群が噴出したのだ。

津波などという表現ではまるで足りない、地下空間の壁の縮小ともいうべき現象だった。

噴出するゴキブリで、壁や天井はもちろんのこと、もはや大樹も見えない。まさに、数億、数十億という数のゴキブリによる閉鎖空間。

——？神の使徒”を、まともに相手取るな。本体を叩け。さもなくば吞まれるぞ。

そういう大迷宮の、引いては解放者達のメッセージなのだと思った。

(本当に大迷宮は色々と考えさせられる……)

原作知識でわかっていたとしても大迷宮はそんなものは何の役にも立たないかのよう理不尽を押し付けてくる。だからこそ、原作知識に頼ることも依存することもない考えを身に付けなければこれから先の戦いでは生き残ることができない。

「――？・選定」

紡がれた言葉。

ユエの胸元には、祈るように合わされた小さな手。その中から漏れ出す蒼い光が、静かに脈動した。

不可視の、しかし確実に力ある何か波紋を広げるのを、？人型”は明確な恐怖と共に感じ取った。

ユエが、そっと壊れ物を扱うように手を開いた。そこにあったのは、渦巻く小さな焰。蒼く煌めく、小さな小さな一粒の焰。

ハツと、？人型”は我を取り戻し、危機感と焦燥感を滲ませた絶叫を上げるも、全ては遅すぎた。

「――？・神罰之焰」

直後、その魔法は殲滅の意志を乗せて発動された。

蒼く輝く星が、一際強く脈打った。

次の瞬間、蒼き星を中心に光が膨れ上がり、地下空間へと広がっていく。

まるで風いだ水面に落ちた一滴の水滴がもたらす波紋の如く。静かに、穏やかに、されど慈悲など微塵も宿さずに。

まず、閉鎖空間を作っていたゴキブリが灰燼に帰した。一瞬の内に、一匹も余さず。

？人型”もまた？神罰之焰”と詠われた瞬間、脱兎の如く逃げ出したが、幾ばくも距離を取らない内に、空間全てを蹂躪する蒼い光に捕まって、悲鳴を上げることができずにあっさり消滅した。

しかし、浩二達には傷一つ付いていない。それだけではなく大樹や枝通路すらも傷ついておらず、ただゴキブリだけを滅ぼしていく。

不可思議で恐るべき現象の原因。それは、

―― 炎・重力・魂魄複合最上級魔法 神罰之焰

炎属性最上級魔法？蒼天”を、重力魔法によって計十発分圧縮し、

更に、魂魄魔法？選定”によってユエが指定した魂を持つ者だけ、あるいは指定しなかった魂を持つ者だけを焼き滅ぼす超広域殲滅魔法である。

(とんでもねえな、おい)

蒼炎による火傷一つない。原作知識で知っていたとはいえ、やはりとんでもない魔法だ。

(これはユエにしかできねえな……)

？御業”に相応しい魔法を前にただ圧倒されながらも、？限界解除”を解いて雫達がいるところに戻る。

「皆、無事か？」

「おう」

「うん」

？竜人化”を解いて肩で息をしながらその場に座り込んでいる龍太郎はかなりの疲労が見られるもその顔は晴れやか。自分を全力を出し切ったと言いたげな顔だ。

鈴も息を乱してはいるも？結界師”としての役目を最後まで全うした。そのかいてもあって大きな怪我を負ったものは誰一人いない。

「問題ありません」

「旦那様、それに皆さんの活躍のおかげで」

「大丈夫」

「ええ、問題ありませんわ」

ティニア達の方も問題ないようだ。香織達の方に視線を向けると香織は問題ないと、頷いた。

(雫も、大丈夫そうだ……)

雫にも怪我はない。だけど、先ほどから浩二に視線を合わせようとしてこない。いや、チラチラと浩二を見てはいるもすぐに視線を逸らす。

そんな雫の反応に気にはなるも、今は雫よりも気にしなければならぬ人物がいる。

——光輝だ。

感情反転魔法の効果が消えて正気を完全に取り戻した光輝はまた

何もできなかったことに暗い表情のまま顔を俯かせていた。

(攻略は、認められないだろう……)

浩二自身、認められるかどうかはまだわからないが、少なくとも光輝は認められないだろう。龍太郎や鈴のように活躍していればまだわからなかったが、原作通り、光輝は駄目だろう。

(実力は問題なかった。となれば、やはり精神的問題か……。今度の大迷宮攻略前にどうにかしておかないとな……)

光輝の今後についてを頭の片隅に置きながら浩二達はハジメとユエの二人がいる場所に移動を開始する。

主人公45

「ユエさくくん、ハジメさくくん。大丈夫でしたか？ こっちは大丈夫じゃなかったです！ ティオさんが格好良くて気持ち悪かったです！」

「ハジメくん、ユエ！ 聞いて聞いて！ ティオがね、すつごく？ お姉さん”で怖かったよ！”」

若干のやつれた感があるものの、傷などは回復したハジメと、やたらツヤツヤしたユエが広場へと戻ってくると、シアと香織が早速その声を張り上げた。

さっきの魔法はなんだったのかとか、終わって早タイチャつきすぎでしょうか、言うべきことはたくさんあるはずなのに、二人の第一声はそれだった。

「うっ、うっ……」

そしてエフエルは泣いていた。

ポロポロとその瞳からまるで抑えきれない感情が溢れて止まらないかのように涙を流しながらポツリと……。

「姫様は……姫様はまだ、お亡くなりになっておられなかったのですね……」

「お主の中では妾は死んでおるのかえ!？」

ティオは思わず吠えた。

え？ 妾、死んでいるの？ と言わんばかりに驚愕を露にしている。

感情反転魔法による影響下で？ 普通に伝説の竜人族モード”を目の当たりにしたエフエルはまるで一粒の希望でも見つけたかのようにティオの両手を手に取る。

「ティオ様。先ほどのことを決してお忘れにならないようにしてくださいね。そして一緒に元の姫様に戻るように頑張ってくださいませう」

「今の妾が否定されているような気がするのじゃが……」

しかし、私も頑張りますと、燃え上がる同族の瞳を目の当たりにし

てテイオは強くは言えず、何とも言えない表情のまま周囲に助けを求め、全員が一齐に視線を明後日の方向に向けた。ノータッチで行きたいようだ。

その後、全員が回復に専念したり休息することしばし。

その間、敢えて感情反転の際の言動には言及しない。いろいろ藪蛇になりそうな者もいるし、何より、黒いあんちくしょうへの感情を、誰も思い出したくないからだ。

そうして、ある程度、全員の肉体的疲労が回復した頃、まるでそれを待っていたかのようなタイミングで、突如、天井付近にある大樹の一部が輝き始めた。その輝く場所から、メキメキツと音を響かせて大きな枝が生え始め、広場まで到達する。

波打つような形を変えて天へと続く階段となつてハジメ達はその階段を上りきると、大樹の幹に見慣れた洞ができていた。

そこにある転移魔法陣に乗って、いつも通り光が溢れ出し、転移が始まった。

光が収まった後、ハジメ達の目の前に広がっていたのは——庭園だった。

空気がとても澄んでいて、空が非常に近く感じられる。

庭園の広さは学校の体育館くらい。美しい庭園で、清い水が流れる可愛らしい水路に、芝生のような地面が広がっている。小さな木々には果実が実っているようだ。その木々に囲まれるようにして、小さな白亜の建物もある。

「おい、南雲！ あれか!？」

光輝が、どこか逸る様子で指を差した。

庭園の最奥に、一際大きな木があった。今立っている場所と同じように、水路に囲まれた円形の小島の上に生えている。木の根元には、めり込むようにして石板があった。

ここが大樹ウーア・アルトの天辺にあることに驚きながらハジメ達は石板のもとへ歩いて行った。

最奥の小島に続く可愛らしいアーチを渡る。

途端、石板が輝き出し、水路に若草色の魔力が流れ込んだ。水路そ

のものが魔法陣となっていたらしい。煌めく水路から螢火のような
燐光がゆらゆらと立ち上がる。

大迷宮攻略の際、いつも行われる記憶を精査されるような感覚と、
その直後の知識を無理やり刻み込まれる感覚が襲ってきた。

(よし、昇華魔法を手に入れた……)

原作知識と流れ込んできた知識から新たな神代魔法である？昇華
魔法”を手に入れることができた浩二は攻略が認められたことと神
代魔法を手に入れた達成感に小さく拳を作る。

テイニア達も攻略が認められたが、それ以上に浩二が攻略に認めら
れたことの方が嬉しそうに微笑んでいる。

その時、にわかに石板の木がうねり始めた。

何事かとハジメ達が身構える。

そんなハジメ達を尻目に、立ち上がる燐光に照らされた木はぐねぐ
ねと形を変えていき、やがて、その幹の真ん中に人の顔を作り始めた。
ググツとせり出し、肩から上だけの、女性と分かる容姿が出来上
がっていく。

そうして完全に顔が出来上がると、その女性は閉じていた目を開
け、そつと口を開いた。

『まずは、おめでどうと言わせていただきますわ。よく、数々の大迷宮
と、わたくしの——このリユーティリス・ハルツイナの用意した試練
を乗り越えましたわね。あなた方に最大限の敬意と表すと共に、酷く
辛い試練を与えたことを深くお詫びいたしますわ』

木を媒体にした記録のようだ。

「……なんだか王女様みたい」

香織の呟きに、ハジメ達も「確かに」と頷いた。

リリアーナのような王族に通じる気品と威厳があるように感じる。
『しかし、これもまた必要なこと。他の大迷宮を乗り越えてきたあな
た方ならば、神々と我々の関係、過去の悲劇、そして今、起きている
何か……全て把握しているはずですわね？ それ故に、揺るがぬ絆
と、揺らぎ得る心というものを知って欲しかったのです。ここまで辿
り着いたあなた方なら、心の強さというものも、逆に、弱さというも

のも理解なさったでしょう。それが、この先の未来で、あなた方の力になることを切に願っています』

神妙な顔でリユーテイリスの話を書く浩二達だが、ハジメは既に焦れてきたようだ。

『あなた方が、どんな目的のために、わたくしの魔法——？昇華魔法“を得ようとしたのかは分かりません。どう使おうとも、あなた方の自由ですわ。ですが、どうか、どうか力に溺れることだけはありませんよう。そうなりそうな時は、絆の標に縋りなさい』

ハジメがキョロキョロと攻略の証を探しているので浩二は大人しく話を聞いてると、ハジメの脇腹に肘鉄を喰らわせる。うっ、と声が漏れるハジメは浩二を睨むも当人は無視^{スルー}。

『わたくしの与えた神代の魔法？昇華“は、全ての？力“を最低でも一段進化させますわ。与えた知識の通りに。けれど、この魔法の真価は、もっと別のところにあります』

昇華魔法の真価など与えられた知識の中にはない。

『昇華魔法は、文字通り全ての？力“を昇華させます。それは神代魔法も例外ではありません。生成魔法、重力魔法、魂魄魔法、変成魔法、空間魔法、再生魔法……これらは理の根幹に作用する強大な力。その全てが一段進化し、更に組み合わせることで神代魔法を超える魔法に至る。神の御業とも言うべき魔法——？概念魔法“に』

誰かがゴクリと生唾を飲み込んだ。その音が、やけに大きく響いた。

『概念魔法——そのままの意味ですわ。あらゆる概念をこの世に顕現・作用させる魔法なのです。ただし、この魔法は全ての神代魔法を手に入れたとしても、容易に修得することはできません。なぜなら、概念魔法は理論ではなく、極限の意志によって生み出されるものだからです』

それが魔法陣による知識転写ができなかった理由。

『わたくし達？解放者“七人がかりでも、たった三つの概念魔法しか生み出すことができませんでした。もつとも、わたくし達にはそれで十分ではあったのですけど……そのうちの一つを、あなた方に贈りま

しょう』

リユーティリスがそう言った直後、石板の中央がスライドし、奥から懐中時計のようなものが出てきた。

それを手に取るハジメ。表には半透明の蓋があり、中には指針が一本だけあった。裏側にはリユーティリス・ハルツィナの紋様が描かれていて、どうやら攻略の証も兼ねているようだ。

『名を？導越の羅針盤』。込められた概念は——』

——望んだ場所を指し示す。

「!？」

その言葉を聞いた瞬間、ハジメは、自分の心臓が跳ねる音を確かに聞いた。

『望めば、その場所へと導いてくれますわ。探し人の所在でも、隠された物の在処であつても、あるいは——別の世界であつても』

「——っ」

きつと、リユーティリスの言っている？別の世界”とは、神のいる世界のことだろう。だが、別の世界であつても、神の世界ですら、その場所を示して導いてくれるというのなら、日本でも可能なはずだ。

羅針盤を握るハジメの手が震える。

ようやくつかんだ手掛かりにどうしようもない歓喜が湧き上がるも、まだその時ではないと必死に堪える。

『全ての神代魔法を手に入れ、そこに確かな意思があるのなら、あなた方はどこにでも行けますわ』

記録の向こう側、遙かな過去の世界で、彼女が込めた心からの祈りが、今を生きるハジメ達に——届いた。

『自由な意思のもと、未来を選択できますよう。あなた方の進む道の先に幸多からんことを、心から祈っておりますわ』

微笑みをそのままに、リユーティリスは再び木の中へと戻つていった。

輝きを収めた石板の前で、余韻に浸かっているような、あるいは、今起きた出来事を一生懸命咀嚼しているかのような静かな時間が流れる。そよそよと吹く風の音と、葉擦れの音だけが辺りに響いていた。

やがて、その静寂をハジメが破った。

努めて冷静であろうとしているかのように、感情を抑えた声音でユエに尋ねる。

「ユエ、念のために聞くが……昇華魔法を使えば……空間魔法で……世界を超えられるか？」

その言葉の重みにユエは即答は避け、必死にその可能性を探る。

吟味と思考を重ね、トライアンドエラーを繰り返し、その結果、得た答えは……

「……………ごめんなさい」

「そうか……」

そういうことだ。ただ昇華しただけの空間魔法で世界を超えられるなら、きつと解放者達も苦労しなかったに違いない。

「なに、問題ないさ。あわよくばって思ったただけだ。必要な神代魔法はあと一つ。それを手に入ればいいだけだからな。なんにせよ、ユエがそんな顔をする必要はねえよ」

ハジメが笑って言う。

その見慣れたはずの恋人の笑顔に、しかし、ユエは自分の心臓が跳ねる音を聞いた。

どこかが違う、ハジメの笑み。

柔らかく、温かい。ハジメという人間を、今までよりずっと、大きく、深く見せる笑い方。それはまるで、そう、この大樹のような……（あっちは放っておいていいだろう……）

いつも通り、イチヤイチャするハジメとユエはシア達に放り投げて浩二は光輝達に尋ねる。

「さて、どうやら元の世界に帰れる手掛かりは南雲が手に入れたようだからいいけど、皆は攻略はどうだった？」

元の世界に帰れる手掛かりはハジメが掴んだ。だけど、最初の問題、大迷宮に攻略が認められたかを確認する。光輝達はそのつもりで大迷宮に挑んだのだから。

「問題ありません」

「こちらは大丈夫です」

「問題ない」

テイニア、エフェル、イリエは当然のように頷いた。

「手に入れましたわよ。これが神代魔法なのですわね」

レイナも神代魔法を手に入れていた。

(本当、こいつはどうなってるんだ……?)

浩二はもう驚かない。

この世界に召喚された浩二達チート集団はまだいい。そして改造を施したテイニアや竜人族であるエフェルに固有魔法を持っているイリエが攻略に認められてもおかしくはない。だけど、レイナはこの世界の住人であり、固有魔法も持つておらず、ステータスだけで見ればこのメンバーの中でも最弱に分類される人間族だ。

それなのにさも当然のように初の大迷宮を攻略し、神代魔法を手に入れたレイナはただ歓喜する。

「ふふ、これでもっともっと浩二と熱い勝負が楽しめますわあ」^{デート}

うつとりとした恍惚な笑みを浮かべながら子供のようにはしゃぐレイナに浩二は深い溜息を溢す。厄介な奴が厄介な力を手に入れたことに嘆きたい気分だ。

そんなレイナを無視して浩二は光輝達を見る。

「お、おう。なんとか攻略が認められたみてえだ」

「うん、鈴も手に入れたよ」

始めての大迷宮攻略の際に記憶を精査されるような感覚と、その直後の知識を無理やり刻み込まれる感覚に戸惑いながら二人は攻略が認められたことを肯定する。

原作では龍太郎も鈴も攻略が認められなかったが、二人の活躍を振り返れば攻略が認められても不思議ではない。

チラリと浩二は雫を見ると雫はビクツと一瞬だけ肩を震わせるも首を縦に振った。

「ええ、私も使えるみたい」

「どうやら雫も無事に攻略が認められたようだ。」

だが……。

「……」

一人だけ、そうではなかった。

皆が神代魔法を手に入れたことに素直に祝福したい気持ちと自分だけが神代魔法を手に入れられなかったことに表情に影を落とす光輝。

(まあ、そうだよな……)

大迷宮に入って直後の蜂モドキとの戦闘、巨大トレントとの戦闘は決して悪くはなかった。むしろ、原作よりも良かったと断言できる。だがしかし、それだけで攻略が認められるほど大迷宮は甘くはなかった。

主人公46

「ハルツィナ大迷宮」を無事に攻略したハジメ達は地上に帰還してすぐにフェアベルゲンに戻って、大迷宮での疲れを癒す為に早々に休息に入った。

のだが……。

「それでは大迷宮攻略反省会を開くぞ」

食事と風呂を貰ってすぐに浩二は光輝、龍太郎、鈴、雫をほぼ強制的に連行してとある一室で大迷宮についての反省会を開くのであった。

どこからか調達したのか、学校にある机のようなテーブルに雫達を座らせ、浩二自身はどこぞの教師かというような恰好を着こなして眼鏡をかけ、またしてもどこから調達したのか、黒板のような壁に貼り付けられている黒い板をチョークのような棒で？大迷宮攻略反省会“と書く。

雫がスツと手を挙げる。

「はい、雫」

「こんなものどこから用意したの？」

「アルテナに用意して貰った」

それはもう快く用意して貰った。浩二が思わず表情を引き攣らせるほどに。

大迷宮に挑む前に攻略後はどのみち反省会やそれに近いことはする予定だったのでアルテナに頼んで机や黒板のようなものを簡単に説明して用意して貰えるように頼むとアルテナは快く承諾し、攻略後、予想以上に完成度の高い机と黒板を用意してくれていたことに頼んでいた浩二ですら驚きを隠せなかった。

？「医神」という名は浩二が思っていた以上に浸透しているような。下手をすればフェアベルゲンの新たな神として降臨し、信者ができるかもしれない。

いや、もうできているかもしれない。

それをまるっと無視して浩二は話を続ける。

「こういうのは記憶が新鮮なうちにやっておくべきだからな」

「それはまあ、わかるけど……」

早く休みたいという気持ちもあるが、浩二の言うことにも一理ある。

「反省会というのなら、香織達はいいの？」

「……」

浩二は無言で外を指す。

部屋の外から何やら激しい闘争音が聞こえてきて雫達は納得した。

大迷宮を攻略したばかりだということに元気なものだ。

「ティニア達は後でやるからいいとして。先に雫達としておこうと思っただけな」

(まあ、問題はないとは思うけど……)

次の大迷宮の試練。原作知識としてその内容を知っている浩二はティニア達はそこまで問題はないと踏んでいる。勿論、絶対ではないが、よほどヘマをしない限りは問題はない。

(問題があるとすればこいつらだから……特に)

浩二はチラリと光輝を見る。その視線に気づいたのか、光輝が反省会の内容について問いかける。

「浩二。反省会って具体的には何をやるんだ？」

「そうだな。まず、初めての大迷宮はどうだったか、振り返ってみようか。鈴から」

「うえ!? え、えっと、まあ、鈴は浩二くんのおかげで攻略できたものかな? 魔力炉がなかったら無理だったと思う……」

「ふむふむ。次は龍太郎」

「俺も鈴と同じだな。浩二がいなかったらやばかった」

「なるほど。雫」

「私は攻略したという感じがしなかったわね。光輝達と違って戦闘にも碌に参加しなかったし、皆のおかげで攻略させて貰った感じがするわ」

「光輝」

「……俺だって頑張った。攻略できていたはずなんだ。あんな精神攻

撃ばかりしてくるような卑劣な場所であれば、俺だって攻略できていた」

拳を握りしめながら光輝は、どこか鬱屈した雰囲気を纏いながらそう吐き出す様に言葉を放った。

だが浩二は今はその言葉には何も言わずに話を進める。

「よし。なら、振り返ったところで今後どうするか決めようか」

「今後？」

龍太郎が怪訝しながらそう問い返す。それに浩二は小さく息を吐いて言う。

「南雲達と共に次の大迷宮に挑むか、王都に戻るか、自分達で他の大迷宮の攻略を目指すか」

そこで光輝達は思い出す。

元々、そのつもりでハジメ達と同行しているのだ。神代魔法を一つ手に入るだけでも大迷宮の攻略に決定的な差がでる。だから一度だけでもついて行かせて貰えるかどうか頼んだ。

だから、今後はどうするかは光輝達自身で決めなければいけない。

「……浩二はどうするの？」

「俺は再び南雲達と一緒に次の大迷宮に挑む」

それは変わらない浩二の方針。

ティニア達もそれに続くように浩二についていくのはもう決まっている。

「だけど光輝達はどうするのか、それは自分達で決めないといけない。南雲に言えば王都までの“ゲート”を開いてくれるだろうし、次の大迷宮に挑むのなら同行して貰えるように口添えはするけど、決めるのはあくまで光輝達だからな」

ここで王都に戻ってもハジメは何も言わないだろう。元より一度だけのつもりで同行を許しているのだから。仮に王都に戻ったとしてもリリアーナ達なら喜んで迎え入れてくれるはず。

だからどうするか、それを選ぶ選択権は光輝達にある。

その選択をどう選ぶか、頭を悩ませる光輝達のなかで鈴が一番に口

を開いた。

「鈴は南雲君に頼んで次の大迷宮にも連れて行ってもらおう」

迷いもなくそう言い切った。

「どうしてだ？ 神代魔法を手に入れた今の鈴ならもう無茶をして大迷宮に挑む必要もないだろう？」

浩二はあえて理由を訊いた。

「うん。だけど、鈴はもう一度恵理と会ってお話したい。そのためには力がある。せめてもう一つ、鈴には神代魔法が必要だと思う。だからね、大迷宮にもう一度挑戦したいんだ。それで結果はどうなっても、生きて出られたら……そのまま魔人族の国に行こうと思う」

「鈴っ、それはっ」

雫が、思わずといった様子で鈴の肩を掴んだ。単身で魔人族の国【ガーランド】に行こうなど、友人としてとても許容できるものではない。

だが、鈴の瞳には確かな決意の強さがあった。思わず、雫が気圧されて手を離してしまうほどに。

【氷雪洞窟】がある【シユネー雪原】は南大陸の東側。南大陸中央にある【ガーランド】とはお隣である。

だから鈴は恵理と話をする為に大迷宮攻略後、そのまま魔人族の本拠地である魔王城に乗り込むつもりだ。

「……わかった。鈴の意思を尊重する。それと安心しろ、鈴。俺も恵理には用がある。お前一人で行く必要はない」

「浩二くん……うん、ありがとう」

頼もしい同伴者がいることに心強く思った鈴は感謝するように頷く。そんな鈴に続くように。

「ま、確かに、鈴一人で行かせるわけにはいかねえな。俺も行くぜ！今の俺なら壁役ぐらいにはなれっからな！」

お前達が行くなら俺も行くぜ！ 的なノリで龍太郎も鈴と同じく再びハジメ達と行動を共にすることを決める。

「俺も行く！ 俺も、いや、俺こそが恵理と話をしなきゃいけない。それに……このままじゃ、終われないんだ！ 次は、次こそは必ず力を

手にしてみせるっ！ 次に行く大迷宮は、あの魔族の男が攻略できるところなんだろう？ なら、俺だつて必ずっ！」

「光輝……」

拳を震わせ、声を荒げる光輝に、雫が心配そうな眼差しを向ける。自分だけ神代魔法を手に入れることができなかつた。そんなどこか危うい幼馴染の姿に、雫は不安を隠しきれない様子だ。

「わかつた。全員このまま同行するってことでいいな？ なら、次の大迷宮攻略に向けて今回の大迷宮で何が悪かつたのか考えようか。まず、大迷宮に入つてすぐティニア達に擬態したスライムについて」
思い出す大迷宮に入つてすぐのこと。この場にいる龍太郎以外は少し顔を青ざめた。

「……いたね。浩二くんがティニアさんを首チョンパしたの」

「ええ、思い出すだけでも少し震えが止まらないわ」

「ああ、いくら偽物でも、あれは……」

「浩二。お前、何やつたんだ？」

鈴、雫、光輝はブルリと身体を震わせ、龍太郎は呆れるような眼差しを浩二に向けるも当の本人は目を逸らした。

「そういうえば龍太郎くんの偽物にも首チョンパしてたね」

「浩二!? 本当に何やつたんだ!?!」

偽物とはいえ、自分の姿をした何かを首チョンパしたことにぎよつと目を見開きながら龍太郎は自分の首を守るように触る。

「……大丈夫。本物でも三分以内なら蘇生はできる」

「そういう問題じゃねえ!!」

龍太郎は叫ぶ。光輝達はうんうんと首を縦に振る。浩二の味方はいなかった。

それから反省会は続く。

何か悪かつたのか、ここはこうすればよかつたとか、浩二が話を進ませながら互いに欠点や改善点を出し合いながら反省会は続くなか、最後に浩二は光輝に一番の問題点というよりも今回の反省会の本題について話し合うことにした。

「さて、最後に光輝。お前についての反省会だ」

「俺の……?」

首を傾げる光輝。どうして自分だけについての反省会が必要なのか? 本当に分からない顔で怪訝する。だが、浩二が決定的な言葉を光輝に告げる。

「光輝。ハッキリ言う。今のままだとお前は次の大迷宮に挑んでも失敗する。絶対に」

「なっ!? な、なんの根拠があつてそんなことを言うんだ!? そんなのやってみないとわからないだろう!」

「わかるからこそ言つてんだよ。光輝、お前は今回の大迷宮について振り返った際、あんな精神攻撃ばかりしてくる卑劣な場所でなければつて言つていたよな?」

「それがどうした?」

「お前、大迷宮の試練を試合か何かと勘違いしていないか? ただ相手に勝てばいいだけの試合とは違う。自分の力を与えるかどうか見極める為に解放者が用意した試練はどちらかといえば試されるのは精神的、メンタル面だろ? 実力だけ攻略できるのならお前だつて攻略が認められているはずだ」

確かにそうだ。

光輝は最後を除いた戦闘ではそれなりに活躍はした。実力だけなら攻略が認められてもおかしくはない。だが、そうではないから攻略が認められなかった。

「だからこそお前は攻略が認められなかった。この世界に転移する前から抱えているお前自身の悪癖のせいだ」

「俺にどんな悪癖があるつて言うんだ!? 俺は別におかしなところなんてない!!」

「……」

まるで気付いていない。自分の悪癖。何度も注意してきたというのに都合のいいことにか目を向けない光輝には本当に気付いていないのだろう。

それに溜息を溢す浩二はあることを言う。

「?自分の正しさを疑わない」。それがお前の悪癖だよ、光輝。お前

は自分が正しいと思ったことを疑わない。それが間違っただとしても認めないで強引に押し通そうとする。お前にはそれが通ってしまう才能とカリスマ性があるからな」

嫌というほど実感している。光輝はまさに才能の塊だと。だからこそ、自分の正しさが通ってしまう。だけどこの世界に転移してから光輝のスペックやご都合解釈だけでは思い通りにいかなくなった。

「光輝。お前は子供だ。特撮番組に出てくるヒーローを見て、理想の正しさを掲げる子供と同じようにお前の正しさは清濁の？濁”の部分は一切認めない正しさだ」

子供が特撮番組を見てそうなるのは別におかしいことではない。

そこから日々の生活を重ねていく上で、現実の壁に直面し多くの失敗を繰り返し、時に挫折し、諦めることを覚えて、割り切りと妥協の仕方を学び、上手く現実という名の荒波に乗る方法を自然と学んでいく。

だが、光輝は生まれながらの高いスペックとカリスマ性によって自分の理想通りに乗り越えてしまった。

子供の理想が、まかり通せてしまったのだ。

「そんな正しさを疑わず、何かあればご都合解釈で正しさを維持する。元々のカリスマ性もあるから他の奴等もそんなお前を支持していたのも原因の一つだけだ」

光輝の行動は善意一色であるから、一部の人間を除いて多くの人が光輝を支持し、後押しされることで光輝の正しさがまかり通ってしまった。

「この世界でそれも通じなくなっている。現実というものをお前は直視し始めている。今回の大迷宮攻略で失敗したのもそうだ。自分の理想通りにいかない事から自分の失敗から目を背けている」

「そんなことはない！俺だって自分の失敗ぐらい反省している！だからこうやって……」

「反省会に来ているか？あのな、光輝。反省ぐらいなら誰だってできる。大切なのは失敗したことを受け入れることだ。そしてその失敗をどうすればいいのか考え、次に活かす為の努力をする。人はそう

やって強くなっていくんだ」

光輝の顔がどんどん歪んでいくのが見て分かる。

認めたくない、聞きたくない、自分の理想通りにならないものはいらない。そんな子供の我儘みたいな表情だ。だけど浩二は幼馴染として、家族として言う。

「自分の理想通りに行かないのは当然のことだ。誰だってそうだ。俺だって何度も挫けそうになったし、諦めようとも思ったことだってある。それでも歯を食いしばって何度も現実の壁に直面した。自分だけが特別だなんて思うなよ？」 光輝。お前だって一人の人間なんだから」

そこで浩二は一息ついて。

「いい加減に理想から離れて現実を見る、光輝。そうしなければお前はそう遠くない内に取り返しつかない過ちを犯すことになるぞ」「うるさいっ!!」

その言葉に光輝は感情のまま机をバンツ！ と叩きつけて勢いよく立ち上がった。

「俺はちゃんとしている！ 現実だって見ている!! 目を背けてなんていない!! これ以上、反省会をしないというのなら俺はもう休ませてもらおうからな!!」

そう叫んで部屋から出て行った光輝。

光輝が去った後、静まり返るなか、浩二は小さく溜息を溢した。

(言葉だけじゃ無理なのかね……?)

言葉で駄目なら物理的な会話をするしかないが、それはそれで後ほど面倒なので避けたい。

「浩二。流石に今のは言い過ぎじゃないかしら?」

雫が光輝を気遣うかのようにそう言うが。

「光輝がああなったのは今までハッキリと言わなかった俺達の責任でもある。それは雫もわかっているだろ?」

「それはそうだけど……」

「誰かがいずれば言わなければいけないことだ。その役目が俺だった。ただそれだけの話だ」

ポン、と雫の肩に手を置く。

「反省会もこれでひとまず終わり。雫も休んでおけよ。鈴と龍太郎もな」

そう告げて浩二もまた部屋から去って行く。

(光輝、頼むから原作通りに敵側にならないでくれよ……)

浩二にはある不安要素がある。

それは原作通りに光輝がエヒト側についてしまうことだ。原作では恵理の？縛魂”によって操られて敵側に回ってしまうが、ここですのの問題点がある。

(恵理は光輝に何の執着も抱いていない)

原作では異常とも呼べるほどの光輝に対する執着があった。けど、浩二というイレギュラーによってその執着は消え、代わりといわんばかりの破壊衝動を抱えるようになった恵理が光輝を操るだけで終わらせるとは思えない。

光輝が敵側になっても生きていられたのは恵理の執着があったからであって、それが無い恵理が光輝をどうするかは浩二ですらわからない。

だからこそ浩二には今の内に光輝をどうにかしておきたい。少なくとも自分の正しさを疑う程度には矯正しておかなければ光輝自身の命まで危ういことになりかねない。

「どうしたものか……」

浩二はこれからのことについて頭を悩ませる。

主人公47

雫達との大迷宮反省会を終わらせた浩二は今度はティニア達を呼んで雫達と同様の反省会を開いたのだが、ティニア達の行動方針は変わらずに浩二と共に行動することであり、大迷宮での反省会も雫達よりもスムーズに終わらせることができた。

「武器は南雲に頼むとして、新しい神代魔法を使いこなせるようになるのはもちろん、自分達の力も磨いておく必要があるな」
「それでよろしいかと」

特にコレという異論も否定もなくティニア達は頷いた。

「浩二。私もそろそろ？ 魔力操作」を覚えたいですわ」

「ああ、そうだな。これからの戦闘では必要だな。後はエフェル、お前の？ 竜化」を改良しておきたい」

「できるのですか？」

「ああ。龍太郎といういいモル……コホン、竜人族の？ 竜化」については概ね把握した。昇華魔法を手に入れた今の俺なら改良も可能だ」
その言葉にエフェルは少なくとも驚きを見せる。

竜人族の代名詞である固有魔法？ 竜化」。その形態は生まれた時から決まっついていて大きさ自体は年齢や修練で変わるが、姿形自体が変わることはない。

？ 部分竜化」という竜人族の中でも限られた物しか使えない能力もあるが、残念ながらいくら修練を積んでもエフェルはそれが使えないことに悩んでいた。

「……それは？ 部分竜化」も可能になる、ということでしょうか？」

「ああ」

浩二はあっさりとは肯定した。

嘘でも冗談の類ではない。エフェルは浩二のその瞳を見て確信する。

(本当に、凄いお方ですね。旦那様は……)

ここ最近、エフェルは自身の力の伸びしろに悩みを抱えていた。

旦那様と慕う浩二はどんどん強くなって前に進んでいるという

のに自分はまだ浩二と出会ったあの日から碌に前に進めていない。神代魔法は手に入れてはいるも、それだけだ。

どうしても、竜人族の姫君であるティオの下位互換になってしま
う。

(きつと、私の悩みも見透かした上での提案なのでしょう)

なら、自分はどうすればいいのか？ そんなものは決まっている。

「よろしく願います、旦那様」

「任せろ」

心から信じ、その身を委ねるのみ。

自分の愛する人とその仲間の為に更なる力を手にする為に。

「浩二」

イリエが少しだけ申し訳なさそうに言う。

「次に向かう大迷宮……フリード様が攻略した大迷宮——【氷雪洞窟】
のことを少しでも知っていれば役に立つのだけど、一兵士であったあ
たしには何も教えてはくれなかったから、わかるのは精々場所ぐら
いで肝心の大迷宮については何も知らない。父さんなら知っていたか
もしれないけど」

「いや、イリエが気にすることじゃないから心配するな」

無論、少しでも情報があればよかったという考えもあった。しか
し、それにばかり頼るのもよろしくない。

(一応、原作知識として内容はわかってはいるが……)

次の大迷宮のコンセプトがどのようなものか、それはわかってい
る。

わかっているからこそ困難なのかもしれない。

(光輝、雫だけじゃない。俺にとっても一番の鬼門なのかもしれない
な……)

下手をすれば失敗するかもしれない。

それこそ今、ここにいる仲間の誰よりもその可能性はある。

「それよりも浩二様。一つよろしいでしょうか？」

「どうした？」

「あの勇者も連れていかれるのですか？」

冷静に淡々と告げるも、その顔は少し嫌そうにしていた。

「盗み聞きをするつもりはなかったのですが、先ほどの雫様達との反省会で勇者の声が部屋の外にまで聞こえまして」

「あゝ、いや、か？」

「そうとは申しませんが、危惧は抱いております。あの勇者が浩二様に剣を向けるのではないかと」

ティニアは勇者である光輝を快く思っていないようだ。

そして浩二は思う。確かに次の大迷宮ではそれもありえそうだと。

(原作では南雲だったけど、俺になったりしてな……)

いや、流石にそうはならないだろうけど。そう自分に言い聞かせることにした。

「ちなみに他の皆は？」

一応、ティニア以外にも勇者の同行についても訊いてみる。

「旦那様が良いのでしたら私は構いません。ですが、今のままでは危ないというティニアさんの考えはわかります」

「そうですね。一人だけ攻略が認められませんでしたし、思うものもあるのは理解できますわ。それを必死に抑えているようにも見えますけど、明らかに不満などを募らせているのは一目瞭然ですわね。というか、前から思っていたことなのですけど、あの方は本当に勇者なのですか？ 一応、勇者様相手にこうは言いたくはありませんが、まるで小さな子供がそのまま成長した。そんな感じがしますわね」

「……才能はあると思う。勇者としての素質も。けど、心が駄目」
(なんか、思っていた以上に言われているな、光輝のこと……)

浩二からして見ればすっかり慣れてしまったことではあるも、普通はこういう反応なのだろう。

だけど、幼馴染として家族としてこうも言われたら苦笑するしかない。

「まあ、皆の気持ちはわかる……とは俺の口からだと言えないか。けど、皆には悪いけど光輝は連れて行く。あいつ自身がそれを拒んだとしても、だ」

「何か理由でもありますか？ 正直、あの勇者が次の大迷宮も攻略で

きないと思いますけど?」

レイナの問いに浩二は頷いた。

「ああ、一つはさつきも皆が言っていた通り、今の光輝は危険だ。それこそちよつとした甘い誘惑に負けてしまうぐらいに。それこそ神の使徒が使う魅了なら一発で墮ちるだろうな」

「なるほど。確かに今の勇者ならあり得そうですね」

「ああ、仮に光輝をリリイ達がいる王城や一人で別の大迷宮に向かわせてみる。悪巧みに長けたあの神がそんな勇者を利用しない手はない」

「それならば旦那様、私達の傍に居て貰った方がまだ安全ですね」

「そういうこと。光輝のメンタル面はともかく才能と実力だけは一級品だからな。敵に回すと厄介だ」

「……確かに戦闘では何も問題なかった」

むしろ、才能と実力だけで大迷宮の魔物相手に互角以上の戦いをしていた。搦め手には弱いだろうが、正面からの戦いであればイリエでも勝てるとは断言できない。

「後は光輝、あいつ自身も強くなって貰わないと困る、というよりもなって貰うしかない」

「それはどうしてですか?」

「あいつが?勇者? だからだ」

浩二のその言葉にティニア達は首を傾げる。

「天職は才能だ。その領分においては無類の才能を發揮する。ならば?勇者?の才能とはなんだ?」

「これが?剣士? や?拳士? もしくは?治癒師? や?医療師? ならまだわかる。

?錬成師? でもそれぞれの才能に特化したものだど理解はできる。

なら?勇者?とはなんだ?

いったい何の才能があつて?勇者?なのだろうか?

「?勇ある者?が勇者としての才能なら他にも天職が?勇者?の奴もいる筈だ。レイナ、お前の知る限りでそんな奴はいるか?」

「……いませんわね。少なくとも帝国でそのような人がいれば皇帝陛

下が放置するわけがありませんわ。つまり、浩二はあの勇者には特別な何かがある。そう仰りたいので？」

「多分だけどな。もし、？勇者」に何かしらの意味があるのなら光輝にはもつと強くなって貰わないといけない」

ティニア達は気に入らないかもだけど、と内心付け加える。

(とはいえ、本当にそれでいいのかどうかはわからないけど……)

原作では光輝がいなければ勝てないというそんな場面はなかった。むしろ敵側に回っていた。エヒトはハジメとユエが倒しているし、光輝が絶対に必要な場面などない筈だけど。

(それでも強くなって貰うことには変わらない。とりあえず今はティニア達を納得させる理由にはなっているし、それでいいだろう)

「……かしこまりました。浩二様の意志に従います」

「悪いな。俺のことを心配してくれているのにこんな我儘を言っちゃまって」

「いえ、浩二様らしいとは思いますが」

薄っすらと微笑みを浮かべるティニアに浩二はコホンと咳払い。

「さて、反省会もこのぐらいにして今日はもう休もうか。ティニア、俺は少し薬の補充をしてから寝るから、悪いけど明日の昼前ぐらいに起こしに来てくれ」

「かしこまりました。ですが、浩二様もしつかりとお休みしてくださいね」

「そうですよ。旦那様はいつも一人で無茶をするのですから」

「浩二も早く休むべき」

「なんなら私が添い寝してあげてもよろしくってよ？」

「わかった、わかったから。俺もできる限り早く休む。だからそんなに心配しないでくれ。それとレイナ、お前の添い寝はいらん」

戦闘狂と同じ部屋で寝ても全然休めん、と告げるも「夫婦が寝所を共にするのは当然のことですよ？」ともう夫婦であることが当然のように言うレイナの意識を強制的に断つ。これで暫くは目を覚まさない。

「それじゃ、おやすみ」

これで安心して休める。浩二は用意された個室に向かう。

主人公48

早朝特有の、静謐で満ちる「フェアベルゲン」の都。

その凪いだ水面のような静けさに波紋を広げるが如く、小鳥の囀りが少しずつ大きくなっていく。葉擦れの音と相まって優しい森の音楽のようだ。

だが、そんな「フェアベルゲン」にあっても、都の外れ——森の奥の人気のない場所では、相反する鋭い音が響いていた。

「疾っ！ ふっ！ はっ！」

短く鋭い呼気に合わせ、ヒュッヒュッと空気を裂く音が鳴る。

同時に、霧を散らす様に黒線が宙を奔った。それは、淀みなく、水が大きいから低きへと流れるような自然さを以って振るわれる黒刀の軌跡。

使い手の動きも極めて洗練されていて、翻る特徴的な黒髪と合わさると、まるで神に捧げる神楽舞の如き神秘性すら感じられた。

円を描くようにして、木の葉が舞い落ちる森の中で踊る黒刀と黒髪。

彼女の作り出した剣界に入った木の葉は尽く四散し、それに交じって玉の汗が飛び散る。

一体、何時間そうやって踊り続けていたのか。

彼女——雫の足元には、すり足が地面に刻んだ幾条もの円と、細切れになった木の葉の残骸が無数に散らばっていた。

一本芯を通したような美しい姿勢で、ただひたすら無心となって刀を振るう。

「——っ」

が、このまま永遠に踊り続けるのでは思われた雫の演舞に、突如、乱れが生じた。

剣筋がぶれて斬るはずだった木の葉をすり抜ける。

くるりくるりと地面に落ちる木の葉と同じく、雫も円運動の遠心力に弄ばれてくるりくるりとバランスを崩した。

辛うじて転倒するという無様だけは避けられた雫だったが、たたら

を踏んで黒刀の鞘を支えにする己の姿には、剣士として苦い顔をせざるを得ない。

「はあはあ……ああつ、もうっ!!」

苛立たしげに頭を振る雫。トレードマークの黒髪ポニーテールが、その心情を表すように右に左にと盛大に荒ぶる。

「明鏡止水。明鏡止水よ、私」

わざわざ言葉にしつつ、大きく深呼吸をして心に静謐な泉を思い浮かべる。

精神を整え、静かな状態を保つ練習は、日本にいた頃、それこそ剣術を習い始めた当初からやっていることだ。もはや習慣にすらなっているそれにより、雫の荒れた心は直ぐにと、思われたが、その水面にゆらりと浮かび上がる少年の姿が……

「ぬああああいつ!!」

途端、そんな女の子にあるまじき雄々しい絶叫を上げながら、雫は心に描いた水面を叩き斬るように、黒刀を大上段から振り下ろした。

「何やってんだ、アホ」

ガキン、と金属同士が衝突する音と共に呆れを滲ませた声音が響く。

「っ、浩二!?!」

予想外の人物の登場にぎよつとする雫に浩二は雫にタオルを投げ渡す。

「汗だくじゃねえか。それにその様子だと睡眠も取ってないだろ?」

これ以上はドクターストップ。鍛錬を終わらせて部屋に戻って眠りなさい。はい、浩二さんお手製の疲労回復薬」

「あ、ありがとう……」

手渡される回復薬を口にする雫は飲んですぐに体の疲れが取れていくのを実感する。

「反省会が終わって部屋で休んでいると思ったら、まったく……」

呆れてものも言えない、と言いたげだ。

「眠れなくても横になっているだけでだいぶ違う。心は休めなくても身体だけでも休ませておけ。これ以上はどちらにも影響が出てくる」

どちらにしても雫のこれ以上の鍛錬は見過ごせないようだ。

「……浩二はどうしてここに？」

「ティニア達の反省会を終わらせて部屋で薬の補充をしていてな。それが一段落したから気晴らしに素振りでもしようと思ったたら雫がいた」

(ということとは浩二も寝ていないんじゃない?)

そう思うも自分もほぼ徹夜で黒刀を振り続けていた為に人のことは言えない雫さんだった。

「それよりもどうしたんだよ? 少し前から見ていたけど、ここが道場だったら叱責ものだぞ。師範がいなくてよかったな」

(誰のせいでも……ッ!?)

暢気にそんなことを言ってくる浩二に雫はキツと睨みつける。

「別に。ずっと刀を振るっていたから疲れているだけよ……」

「そうか」

ムスツとした表情ではぐらかすかのようにそう答える雫に浩二は納得しておいた。

「それじゃあ俺は少しだけ鍛錬するけど、雫は部屋に戻って休んで——」

「浩二」

おけよ、と告げようとした浩二の言葉を雫は遮るように言った。

「最後に少しだけ手合わせをお願いできないかしら?」

まるで何かを確かめたいかのように黒刀を構える雫。その構えに呆れながらも「最後だぞ?」と言いながら了承する浩二もまた自身の刀を構える。

似ているようで似ていない両者の構え。二人は同時に刀を振るう。キンツと互いの刀が衝突して両者の間に激しい火花が飛び散る。

黒と紅の斬閃を描きながら互いの得物を時に衝突させ、時に受け流し、時に躲し合う二人の動きはやはり似ているようで異なる。

(八重樫流改だったわね……)

大迷宮で見せた浩二だけの八重樫流。同じ流派の剣術でありながらそうではない浩二だけの剣術。対峙することでそれがどうい

のなのが見えてくる。

(なるほど、これは確かに浩二だけの剣術ね)

根本は八重樫流。しかし、そこから浩二自身にとっての無駄を省き、より実戦的に改造を施したのが？八重樫流改”なのだろう。

いつの間にそんなものを……と思いつながら、も雫は速度を上げる。

？無拍子”からの？縮地”。緩急自在、予備動作なしの移動術と？地を縮めたような速度”が合わさって、常人では視認すら難しい超高速戦闘を実現し、？縮地”中に？縮地”を重ねることで超高速を維持したまま方向転換、更なる加速を実現する？重縮地”まで使い出す。

超高速の世界に突入した雫は神速の速度を以て浩二に黒刀を振るう。

——しかし。

(嘘でしょうッ!?)

浩二はその速度に対応している。

正面からのフェイントを交えた攻撃も、背後からの奇襲も、死角からの不意打ちでさえ浩二は対応してみせた。

ありえない。ステータスにたいして差はない。それどころか速度に関しては雫の方が上手だ。雫以上に速い剣士なんて他にいない。

(まだ……ッ！)

超高速戦闘から雫は技を繰り出す。

——八重樫流刀術 無明打ち

わざと鏢迫り合いに持ち込み、刀身で作り出した死角から鞘による殴打を繰り出す技。

——八重樫流刀術改 流麗独楽

その技に対して浩二は独楽のように身体を回転して鏢迫り合いになっっている雫の黒刀を受け流し、鞘による攻撃を弾いた。そこから回転の向きを変えて雫の頭部に鞘による一撃が雫を襲う。

——八重樫流体術 雷突

それを、雫は黒刀で受け止めつつ、深く相手の懐に潜り込んで肘鉄を打ち込む。

——八重樫流体術改 弧輪破肘

肘が腹にめり込む瞬間、その肘を支点に回転ドアのように回った浩二は雫の後頭部に肘鉄を当てようとすると、雫は肘鉄の踏み込みをそのままに、前方に躍り出ること回避する。

「即座に？縮地」からの？重縮地」。一瞬で浩二の背後に回り込み、同時に納刀して黒刀の鯉口を切る。リンツと、澄んだ音が鳴り響いた。鞘走りと技能による斬撃速度の上昇が合わさって、剣閃すら知覚させない一撃が放たれる。

——筈だった。

「はい。お終い」

その声は雫の背後から聞こえた。

雫の眼前にいた筈の浩二は気がつけばそこにはおらず、首筋にはひんやりとしたものが当てられている。

「え？」

視線を下に向け、雫は首筋に刃が当てられていることに気付き、背後に振り返ると息一つ乱していない浩二がそこにいた。

(いつのまに……)

油断なんてしていない。目も逸らしていない。本当に気がついたら浩二が背後に立っていた。

「いったいどうやって……？」と疑問が過るなか、浩二は刀を鞘に納める。

「ほら、雫はもう部屋に戻って休みなさい。これ以上続けるのなら強制的に眠らせるからな」

部屋に戻るように促す浩二。その気遣いに雫は気付いた。

「？少しだけ」手合わせをお願いした雫に浩二は本当に少しだけ手合わせしたに過ぎない。これ以上、雫の身体に負担がかからない程度に留めたのだ。

要は手加減されたのだ。浩二に。

(前はこうじゃなかったのに……)

以前なら間違いなく私が勝っていた、と雫は確信とまでは言わないが、その自信はあった。道場で一緒に稽古していた時も、試合や模擬戦だって雫は浩二に勝ってきた。

それなのに今は違う。本気を出したのに手も足も出ずに雫は負けた。それも手加減された状態で。

「いったい今の雫と浩二とは何が違うのか、雫は思わず問う。

「ねえ、浩二。どうして貴方はそこまで強くなれたのかしら？」

いつまでも部屋に戻らない雫に浩二は早く休めよ、と思いつつうんと首を傾げ、こう答えた。

「自分に正直になれたから、かな？」

「……どういう意味？」

「そのままの意味だよ」

言葉の意味がわからず、困惑する雫に浩二は言葉を続ける。

「雫、もし俺がお前や光輝達の事を憎んでいると言ってもいいぐらいに妬んでいたと言ったら信じる？」

「え？」

唐突に告げられた言葉に驚く雫。一瞬、冗談だと思ったかった雫だけど浩二のその顔がそうではないと語っている。

「だってそうだろ？ 光輝は言わずとも才能の塊で、雫だって剣の才能があるし、龍太郎は脳筋だけど格闘技の才能がある。香織は……まあ、香織だし」

最後、ちよつと言葉を濁らせた。

「まあ、とにかく俺にはお前等のような才能なんて欠片もなかった。そんな天才達の傍にいたら劣等感を抱くのも妬むのも当然だろ？」

「それは……でも浩二は今でも道場を続けているでしょ？ 努力をし続けるのも一つの才能じゃ」

「違うな。努力をするのも、努力を続けるのも、目的や目標の為にやる手段や方法」であってそれは才能とは呼ばない」

雫の言葉を浩二ははつきりと否定し。

「それに雫は知らないだろうが、俺は子供の頃に師範から才能がないことを理由に道場を辞めるように言われたことがある」

衝撃な事実を口にする。

「うそ、お父さんがそんなこと……」

「事実だ。まあ、師範は俺の身を案じてそう言ってくれたんだろうが、

取り敢えず腹が立ったから脳天をカチ割ってやろうとした」

返り討ちにあつたが、と当時のことを思い出したのかチツと舌打ちする。

「今思えば劣等感に苛まれる前に雫達と距離を取らせたかったのかも
しれないな」

しかし、浩二は道場を辞めることなく続けた結果、劣等感に苛まれて自分に自信が持てず、自分は脇役だとそう強く認識するようになっていた。

「……」

その言葉を聞いて雫は無言になる。

知らなかった。幼馴染である浩二がそんなにも悩んでいたことも、自分に嫉妬の感情を抱いていたことにも全然気づかなかった。

雫はそんな自分に酷く嫌気を差した。

「……それなら浩二はどうして道場を辞めなかったの？ どうして私達の傍から離れようと思わなかったの？」

それでも訊きたかった。

辞めようと思えば辞めることもできたはずなのに、離れようと思えば離れることもできたはずだ。それなのに今でもこうしてずっと傍にいてくれる。何故か？

それは……。

「惚れた女の傍にいたいと思うのは当然のことだろ？」

「——っ」

そういうことらしい。

「それに妬んではいたけど光輝も龍太郎も香織のことも俺の大切な幼馴染だ。嫌いになんてなれるわけないだろ？」

むしろ嫌う理由を浩二は探していた。それを理由に距離を取ろうとさえ思っていた時期がある。しかし、そんなものはなかった。

面倒と思ったことがある。鬱陶しいとも感じたこともある。だけど、それを踏まえて浩二は幼馴染達を嫌うことができなかった。

どうしようもなく妬んでいたとしても、それ以上に浩二は幼馴染との関係が大切になっていた。

けど……。

「だからこそずっと蓋をしていた。劣等感コンプレックスを隠し続けてきた。俺の醜い感情をお前達に知られたくなかった」

大切な幼馴染だからこそ自分の醜い感情を知られたくなかった。だからそれを隠し続けてきた。

この世界？ トータス”に召喚されてもそれは同じだった。

「でも、それは間違いだった。そのせいで俺は多くの間違いを犯した。お前にフラれるまで俺はそれに気付くことさえできなかった」

惚れた女に振り向いて欲しかった。雫というヒロインの主人公になりたかった。

そればかりを考え、最低なことをした。本当に目を向けなければいけないことからずっと目を逸らしていた。

「一時は本気でお前のことを諦めようとした。けど、諦めきれなかった。白状すると俺はどうしようもないぐらいにお前に惚れている。お前の全てが愛しいとそう思えるほどに」

「……っ」

その言葉に雫の頬が若干赤く染まる。

「だから俺は南雲と戦った。自分を乗り越える為に？ 力”と？ 強さ”と？ 自信”を手に入れて、今度こそお前を守る主人公に俺はなりた
い」

真っ直ぐ、真意ある瞳を向けながら浩二は己の心情を語り、「話が逸れたな……」と言って話を最初に戻す。

「自分に正直になった、というよりも自分の醜い感情を受け入れるようになったというのが正しいのかもな。それとこんな俺を受け入れてくれる人達の存在も大きい。そうじゃなかったら俺はここにはいない」

「……ティニアさん達のこと？」

「ああ」

肯定した。

「雫から見て俺が強くなれたというのなら、それはきつと強くなりた
い」という明確な意志があるからだ。だから頑張れるし、強くなろうと

その一步を踏み出せる。仲間の為に、何よりお前の為に俺はもつと強くなる為に前に進む。それだけだ」

告げられたその言葉は普段通りの口調の筈なのにどこか重みと凄みを感じさせる。

「さて、話はこれで終わり。ほら、雫は部屋に戻りなさい」

部屋に戻るように促す浩二に雫はその場に座り込む。

「……少し、見てもいいかしら？ 浩二の剣術を参考にさせてちょうだい」

「まったく、少しだけだぞ」

部屋に戻らない雫に若干呆れながらも浩二は刀を抜いて素振りを始める。

その動きはやはり、雫の演舞じみた武芸に比べれば流麗さは欠けるだろう。しかし、その動きにはただ圧倒されるような凄みがある。

（いえ、そうじゃないわね。これはきつと浩二が積み重ねてきた努力が実を結んだ結果ね）

才能がないことに嘆き、嫉妬し、挫け、折れそうになっても、ただひたすら愚直に一步ずつ前へ進むことを諦めることなく磨き続けたからこそ身についた剣技。その刀の一振り一振りがもはや必殺と呼べる重さがそこにあった。

それは光輝は勿論のこと雫にもないものだ。

（きつと、私の思っている以上に努力しているのね……）

浩二が努力家だということは雫も知っている。けど、きつと雫が思っている以上に浩二は努力しているのだろう。

「……凄いわね」

雫はただそれだけ呟いて、知らない間に目蓋が重くなつて意識を手放すのであった。

「まったく、だから部屋に戻って言ったのに」

座ったまま眠る雫。無防備に寝顔を晒している雫に微笑みながら刀を鞘に納めて雫を抱える。

「お前を食べてしまうオオカミが目の前にいるのに、こんなにも無防備な姿を見せられたらお持ち帰りされても文句は言えねえぞ」

冗談を言いながらお姫様抱っこで雫の寝顔を鑑賞する。
すると。

「……浩二」

ポツリと雫が浩二の名を呼んだ。

起きたのか？　と違って顔を見るもしっかりと寝ている。ただ寝惚けていただけのようだ。

「寝言か……」

優しい眼差しを雫に向けながら浩二は雫を抱えたまま部屋に戻る。

「必ず俺に惚れさせてみせるから覚悟してろよ、雫」

眠りについている雫にそう告げながら浩二は雫を香織に預けて自身もまた部屋に戻るのであった。

主人公49

「んう……んう？」

どこか艶めかしさを感じさせる声を漏らしながら、雫は薄く目を開けた。

意識は未だ微睡みの中にあり、焦点の合わない瞳がぼくつと虚空を見つめている。

その視線の先には木目調の天井があつた。更に、半覚醒状態の意識が、背後と後頭部に柔らかな感触を伝えてくる。

そんな寝起きの無防備な顔を晒してぼへくとしている雫に、耳慣れた声がかかった。

「あ、雫ちゃん、起きた？　ぐっすりだったね。もうお昼だよ」

「う？　……香織？」

雫が親友の方へふらふらと視線を向けると、そこには確かに親友の姿があつた。すっかり身支度を整えており、窓際の椅子に腰掛けたまま雫に優しい微笑みを向けている。

深い水底から浮上していくように意識がはつきりとしてきた雫は、上体を起こして女の子座りをしつつ、丸めた手で目元をコシコシとこすつた。ぼんやりとした頭で、意識がなくなる前の記憶を辿つていく。

「ん？　私、どうして部屋に……確か、森の奥で……っていうか、ここ、香織の部屋？」

「フェアベルゲン」では、それぞれ個室が用意されている。そのため、見覚えのない部屋で香織がいることからすれば、ここは香織の部屋と推測できる。

香織は、こてんつと首を傾げながら尋ねてくる雫の可愛らしい姿に、ちよつぱり頬を染めつつ答えた。

「うん、私の部屋だよ。朝、早い時間にね、浩二くんが雫ちゃんを連れてきたの。徹夜で鍛錬してたんだってね？　もう、ダメだよ、大迷宮から帰ってきたばかりなんだから、ちゃんと休まないよ」

「え、えーと、そうね。ごめんなさい。そ、それで、浩二が私を連れて

きてくれたの？ 全然、覚えてないのだけど」

「雫ちゃん、ぐっすりだったからね。すっごく疲れていたんだよ」

メツ！ と叱るように指を立てる香織を尻目に、雫はどこか落ち着きなくそわそわと身を振らせた。

普段、ポニーテールにしている長い黒髪が下ろされているせいか、クールさよりも大人しさを感じさせ、女の子座りと相まって中々のギャップを発揮している。

見れば服も脱がされており、シャツ一枚という姿。

こんな姿をクラスの男子達や、雫を？お姉様”と呼び慕う女子達が目撃でもしようものなら、きつと鼻血で虚空にアーチを作りながら良い笑顔で血の海に沈んだことだろう。

雫は、頬を少し染めながら、上目遣いでおずおずと香織に尋ねた。

「えっと、浩二はどうやって私を？」

「お姫様抱っこで雫ちゃんを私の部屋まで運んできたよ。浩二くん、凄く優しい顔で雫ちゃんを見ていたよ」

慈愛に満ちた表情で告げる親友の言葉に雫の顔を毛布で隠す。

そんな乙女を發揮する雫を香織はよしよしと撫でる。

すると、外から何やら騒がしい音が響いてきた。更には「オホホホホッ！」という高笑いや「ええいつ！ いい加減しつけえぞ!!」という聞き慣れた声が聞こえてきた。

「な、なんだか騒がしいわね？ 何かあったのかしら？」

「あゝ あれは浩二くんとレイナさんだね。浩二くんが起きてからずっと勝負デイトしているんだよ」

「勝負？」

それは男女が手を繋いで遊ぶデイトものではない。戦闘・闘争という名の血みどろで血生臭い勝負デイトだ。

雫が目覚めるより少し前。

「浩二様。起きてください」

「……………んう」

浩二は雫を香織に預けた後で自分の部屋で休んでいるとティニアに起こされた。優しく声をかけられ、ゆつくりと揺さぶられながら浩二は寝惚けたまま上体を起こす。

「おはようございませす」

「……………ん、おはよう」

まだ意識が目覚めていないせいか、上体は起こすもまだ眠たそうにしている。「あと、五分……………」とか言いそうだ。

そんな子供っぽい浩二のティニアは薄っすらと笑みを浮かばせながら浩二の目を覚まさせる。

「目をお覚まし下さい。もう皆様、食堂に集まっていますよ」

「……………ん」

ゆつくりと動きながらベッドから出ながらティニアが用意してくれたであろう服に手を伸ばしながら身支度を整える。その間に寝惚けていた頭も徐々に目覚めていく。

「実は今朝方、アルテナ様が浩二様のお部屋に尋ねてきました」

「アルテナが？ 要件は？」

「いえ、要件と呼ぶほどではないようです。ただ浩二様を起こしに来ただけと」

丁重にお帰り頂きましたが、と付け加えて告げるティニアにそうか、と答える浩二はん？ と疑問が過った。

「……………なあ、ティニア。いつからいたの？」

今朝アルテナが浩二の部屋に来たということは、恐らくは雫を香織の部屋に連れて行き、自分の部屋で休み始めた頃だろう。そしてその頃にはティニアは既に起きて浩二の部屋の近くにいたということになる。

「浩二様の寝顔、しつかりと堪能させて頂きました」

「……………うん、まあ、寝顔なんて今更だし、別にいいけど」

「あと、抱き枕の代わりを少し」

「本格的に抱き癖がついているな、俺……………」

誰かに甘えたい年頃なのか？ といい歳した青年はそんなことに思わず悩んでしまう。しかし、ティニアからすれば役得なのでむしろ

嬉しい限りだが。

どうにかしないと、と思いながら浩二はテイニアと共に皆がいる食堂に向かうと、そこには既にハジメ達がいてそれ以外にもエフエル、イリエ、レイナの他に給仕係の亜人族とアルテナとその側仕えが多数いる。

「旦那様、おはようございます」

「浩二、おはよう」

「ようやくお目覚めのようですわね。浩二」

エフエル、イリエ、レイナが浩二の存在に気づいて声をかける。浩二もそれに応えるように軽く「おはよう」と挨拶する。ついでにハジメ達にも。

「浩二様。おはようございますわ。すぐにお食事の用意をしますわ」

アルテナが浩二の傍に歩み寄り、給仕係に食事の用意をさせようとするもテイニアがストップをかける。

「アルテナ様。浩二様の食事につきましては既にこちらで用意させて頂いておりますのでお気遣いは結構です」

見ればテーブルの上には食事が用意されている。恐らくそれが浩二用の食事なのだろう。

あれ？ さつきまではそこになかったよね？ さつき見た時はなかった筈の食事が気がついたら用意されていた。本当にいつの間、と浩二は言いたそうだ。

「では食後の飲み物の用意でもしましょう。いい茶葉がありますので」

しかし、アルテナは退かない。

森のお姫様に相応しい素敵な笑顔で言い寄ろうとするアルテナ。だが、テイニアは冷然と対応する。

「いえ、そちらも結構です。茶葉の用意もこちらでしておりますのでお気になさらず」

甲斐甲斐しく浩二の世話をしようとするアルテナをテイニアは丁重に断りを入れていく。その光景を少し離れた位置で見っていたハジメとユエはニヤニヤと底意地の悪い笑みを見せる。

「流石は？医神様だ。森のお姫様も籠絡したか」

「……ん、順調にハーレムを築いてる」

「いや、ハジメさん。浩二さんがあなつたのもハジメさんのせいですよ？ 浩二さんを見てくださいよ、見て分かるぐらいにオロオロしてますよ。それにユエさんもそんな意地悪を言わないであげてください」

自分を巡って言い争う森のお姫様にメイドさん。その二人の間でどうしようかとオロオロする浩二をシアは擁護する。

「ふむ。どうやら浩二は自分に好意などを向けられることには慣れておらぬようじゃのう。かといって冷たくあしらうこともできぬようじゃ。攻めは良くても守りには弱いのお、浩二は」

「……ん、押しに弱いところはハジメに似ている」

ハジメの顔から底意地の悪い笑みは消えて同情的なもしくは仲間を見つけたかのような眼差しで浩二を見始めた。

そしてようやくアルテナは引き下がり、浩二はやつと食事に手を付けることができるようになった。

「そういうえば光輝達は？」

食事をしながらこの場に光輝達がいなことに気付く。

雫はまだ寝ていて香織は雫の傍にいてことぐらいは予想できるも、光輝達はもう起きていてもいい筈だ。

「鈴達なら外で新しい神代魔法の練習をしている。勇者は自室」

イリエが端的にそう教える。

「そつか。まあ、せつかく新しい力が手に入ったのだから試したくもなるか」

納得し、食事を進めながら光輝について考える。

(昨日の俺の言葉をよく考えてくれるといいんだけど……)

そう願うも無理だろうと予測できる。

光輝の歪んだ正義感、自己解釈がそう簡単に変えられるわけがない。簡単に変えられるのなら苦労はない。きっと今は浩二の言った言葉を自分の都合のいいように解釈しているのだろう。

(さて、どうしたものか……)

光輝について悩みながら食事を終わらせ、ティニアに食後の飲み物でも用意して貰おうとすると。

「さて浩二。勝負ですわ」

「はあ？」

不意にレイナが椅子から立ち上がりながらそんなことを言ってきた。

「いや、俺、今、飯を食い終わったばかりなんだけど」

「いいではありませんの。食後の運動になりますわよ」

「いや、せめて時間をくれよ。後で付き合つてやるから」

「私が我慢できませんわ」

レイナは火照った顔で艶のある吐息を漏らしながら頬に手を当てながら浩二に言う。

「この火照った身体を鎮める為には浩二との血湧き肉躍る闘争を求めますわ。ふふ、私はもう浩二無しでは生きられない身体になってしまいました。その責任を取ってくださいませ」

「御免被る」

浩二さん、真顔で拒否した。

だが、それで止まる戦闘狂ではない。

「問答無用ですわ!!」

「うおっ!!」

レイナは細剣で鋭い一突きを放つ。それを紙一重で回避する浩二は面倒だ、と言わんばかりに小さく舌打ちする。

「お前、場所ぐらい考えろ!?! ここ食堂!! 食べるどころ!! わかる!?!」

「闘争に時も場所も関係ありませんわ!!」

「ああもう! これだから戦闘狂は!!」

応戦する浩二だが、ティニア達やハジメ達はともかくとしてここにはアルテナや戦闘に不慣れな亜人族もいる。場所を変えようとするも先程のレイナの攻撃から回避した場所が悪かったのか、背後にはアルテナがいることに気付いた。

「ちよつと待て! レイナ!!」

「待ちませんわ!!」

浩二の制止も聞かずに些かな躊躇いもなく細剣レイピアによる鋭い攻撃を行う。浩二だけなら避けるのも容易い。しかし、後ろにいるアルテナはそうではない。避ければ間違はなくレイナの細剣レイピアがアルテナを貫くだろう。

「ひっ」

アルテナが小さく悲鳴を漏らす。

「くそっ」

仕方がねえ、と思った浩二は咄嗟にアルテナを抱えてレイナの攻撃を躲す。

「え?」

「悪い。ちよつと我慢してくれ」

「は、はい」

浩二の顔がすぐ近くにあり。お姫様抱っこだ。

アルテナを側使えの近くで降ろし、浩二は食堂の窓を開けて飛び出す。レイナはそれをつかさず追いかける。そしてアルテナは浩二達が飛び出した窓の外をぼけと見つめている。

「…………お兄様」

ブルリ、とこの瞬間、浩二の背に亜寒が走った。

「なんだ!? 今の寒気は!？」

「余所見は厳禁ですわよ!!」

今までに感じたことのない亜寒に身を震わせた浩二は思わず周囲をキョロキョロと見渡す。余所見をする浩二にレイナはお仕置きの一突きを与えようと突きを放つ。

「くらうかッ!」

だが、余所見をしたぐらいで攻撃を受けてしまうほど浩二は甘くはない。更にはお返しと言わんばかりに蹴撃をレイナの腹部に叩き付ける。

「ぐふっ!？」

蹴り飛ばされるレイナは樹に背中を強打させる。しかし、その顔は凄絶な笑みを見せる。

「流石は浩二！ 情け容赦のない攻撃に私、滾ってきますわ！」
「俺は滾らねえよ」

むしろ萎える。だが浩二の心情など知ったことかとレイナは浩二に向かって駆け出し、細剣レイピアによる連続突きを炸裂させる。

一突き一突きがとても洗練されており、雨の如く突き放たれる刺突は普通の人間なら回避不可能。全身が穴だらけになってしまいが、浩二はそれを紙一重で躲し続ける。

「それでこそ私の夫ですわ!! さあさあ、もっと激しく踊りますわよ!!」

オホホホッ！ と笑うレイナに浩二は叫ぶ。

「ええいつ！ いい加減しつけえぞ!!」

浩二さん、あまりにもしつこいレイナに思わず叫ぶ。どういうわけかレイナを暴走もとい闘争または勝負デイトをティニア達は止めてくれない。遠くから微笑ましく眺めるだけだ。

「まだまだ行きますわ!!」

その時、レイナの動きが加速した。

「ッ!」

それには流石の浩二も思わず目を見開いた。

何故ならレイナの身体から淡紅色の魔力を纏っている。

「身体強化!?! しかもお前、それ、魔力操作だろ!?!」

? 身体強化”の技能はある。レイナがそれを使うこと自体は別に不思議ではない。むしろ納得すらできる。問題は無詠唱、詠唱も魔法陣も無しで身体強化を発動させたのだ。

驚く浩二にレイナは不思議そうに答える。

「あら? 魔力操作を使えるようにしたのは浩二でしょう?」
「確かにそうだけど! だけどな……ッ!」

レイナが? 魔力操作”を使えるように寝ている内にちやっちやと浩二は済ませていた。目覚めてステータスプレートを確認すれば? 魔力操作”の技能が発現していることぐらい気付くだろう。

だが、すぐに使えるようになるのは別問題だ。

特にこの世界トータスの人間ならば尚更、詠唱や魔法陣有りでのやり方に慣れている。だから無詠唱での魔法の使用は慣れるまで難しいだろうと踏んでいた。

それをレイナは元から使えますが何か？　と言いたげに使いこなしている。それも？身体強化”のおまけ付きで。

「ああ、身体強化は今使えるようになりましたわ」

「このバグキャラめツ!!」

レイナのステータスプレートを見れば？魔力操作”の派生技能に？身体強化”が追加されているだろう。発現したばかりの派生技能を昔から使えるように使いこなすレイナに浩二は叫ばずにはいられない。

鬪争という名の勝負を繰り広げる二人の騒ぎを嗅ぎつけたのか、多くの亜人族がぞろぞろと集まり始める。

「何事か!?　あ、あれは？・医神”様!?”

「あれほどの攻撃もああも容易く躲し続けるとは……ツ!　?医神”様は武にも秀でておられたとは!!」

「皆の者、集まれ!　?医神”浩二様の戦いが見られるぞ!!」

いや、止めてくれてもいいんだよ?　我々は決して邪魔をいたしませんみたいな眼を向けなくてもいいからね?　子供達も「がんばれ!」って応援しなくてもいいからね?

浩二の心情とは裏腹に亜人族、それも戦士達は浩二の動きを一挙手一投足見逃すことがないように目をしっかりと見開いて観察し、亜人族の子供達からは応援される浩二の心情は複雑だ。

「ああ、?医神”様……なんて素敵なのでしょう」

「我等、亜人族にも分け隔てなく接してくださいさる慈愛の御心だけでなく、あれほどまでにお強いなんて……」

「お兄様!　頑張ってくださいまし!!」

「アルテナ様!!　今なんとツ!?”

亜人族の女性陣に紛れてさりと何か聞こえた気がしたが浩二は突発性難聴のせいで聞こえなかった。そう、聞こえなかった。聞こえ

なかつたら聞こえなかつた。

「えつと、どういう状況なのかしら？」

「おはようございます、雫様。いつも通り、レイナ様と浩二様の勝負で
ございます」

「いつもなのね……」

食堂にやってきた雫は眼前に繰り広げている浩二とレイナの勝負
に何とも言えない表情を浮かべる。

「いつもしているの？」

「そうですね。基本的には毎日でしょうか」

「毎日……あれを？」

「浩二は基本的に素手だけどね」

一応手加減ハンデはしている。それでも毎日ああも激しい闘争を繰り広
げているともなると呆れを通り越して何も言えなくなる。

そんなこんなと思っている内に勝負は終盤に近づいていた。

「さあ、最後に行きますわよ!! ? 禁域解放」

レイナは新たに手に入れた力、神代魔法を行使した。

あらゆる能力を最低でも一段階進化させる神代の魔法——昇華魔
法の一つ。

時の流れが遅くなり、世界が色褪せる。知覚能力が拡大し、感覚が
鋭敏になる。

消費魔力が大きい為に今のレイナの扱えるのは一瞬だけ。だから
この一瞬にレイナは己の全てを愛する者にぶつける。

「——ッ」

浩二は反射的だった。

これまでレイナとの勝負で決して抜かなかつた刀に手をかけた。
そうしなければマズイと反射的に察知したからだ。

交差は一瞬。

決着も一瞬。

レイナの手から細剣がこぼれ落ちるもレイナの表情は晴れやかだ。

「……………やつと、抜きましたわね」

「……………ああ、認めるよ」

抜けなければ今のレイナの一撃を受けていた。

「次は私が勝ちますわ、よ……」

パタリ、と倒れるレイナ。峰打ちとはいえ、ちよつと強く打ち過ぎたことを反省して浩二はレイナに回復魔法を施しておく。

「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」「」」」

信仰する神に捧げるような、勝利を祝福する雄叫びが「フェアベルゲン」に轟く。

あまりの雄叫びに浩二の肩がビクツ！ と震えた。

「お兄様！」

「おつと!? ん? お兄様……?」

アルテナが浩二の胸に跳び込んできた。

上目遣いで顔を上げるアルテナ。恍惚した表情で熱が籠った眼差しで浩二をじーっと見上げてくる。美少女なだけあって男であればその顔だけで一目惚れしてもおかしくないのだが、浩二は盛大に頬を引きつかせている。

(いや、ちよつと待って、待ってくれ……)

この顔、見たことがある。元の世界でも、この世界でも何度も見たことがある。それ故に浩二は見間違えるわけがなかった。

そう、雫をお姉様と慕う《ソウルシスターズ》が雫に向けるものと全く同じ……。

「強く優しいお兄様。どうかわたくしのお兄様になってくださいまし」

(逃げよう)

浩二は迷うことなく逃走を選んだ。そしてほとぼりが冷めるまで、もしくは次の大迷宮に向けて出発するまで身を隠そうと思い、逃げようとしたが、アルテナの力が予想以上に強かった。

何があっても逃がさない。腕を背に回して力強く抱き着いてくるアルテナに浩二は身動きが取れなかった。

本当にお姫様なの!? と叫びたいほどに強く抱きしめられている。

強引に振り解こうと思えばできないこともないが、浩二は知っている。それをしたとしてもアルテナはめげない、挫けない、折れない。

雫を慕う《ソウルシスターズ》がそうであるようにどこまでも追いかけてくる。

(どうしてこうなった!?)

意味が分からない。だが今は逃げるのが先決。浩二は食堂の窓からこちらを見ている雫に助けを求める。

「雫!! 雫さーん!! 助けてー!! ヘルプ・ミー!!」

必死に助けを求める浩二さん。

だが、当のお姉様はぷい、と顔を逸らした。

「浩二もお兄様になってしまえばいいのよ」

「雫!」

見捨てられた浩二の悲痛の叫びが「フェアベルゲン」に響いた。

「ふふ、お兄様♡」

「ひい」

この時、浩二は《ソウルシスターズ》に慕われるお姉様の気持ちに嫌というほど理解した。

主人公50

「フェアベルゲン」側も、復興やら負傷者の回復、何より奴隷だった同胞の解放に助力したことで、ハジメ達は大きな恩と好意を抱いてくれているらしく、それが待遇という形で示されている為にハジメ達は非常に快適な日々を送っている。

—— 筈だった。

美しき「フェアベルゲン」。その近くで二人の少女が対峙していた。

一人は亜人族の中でも地位の高い森人族の長老の孫娘であり、同族の間でも高貴な存在と見られている「フェアベルゲン」のお姫様。足元まである長く美しい金髪を波打させた、翡翠の瞳を持つ美少女だ。

小さい頃から森のお姫様に相応の扱いと教育を受けて育ち、その能力は高く、気構えも申し分ない。聡明で心優しい少女に育った森人族の族長の孫娘——アルテナ・ハイピスト。

多くの同族達からも慕われ、人柄、容姿、能力も高いアルテナは弓を構え、矢を番える。

「さあ、勝負ですわ」

その顔は真剣。その顔には姫に相応しい気品ある笑みの欠片もなくただ射抜くように真つ直ぐ相手を見る。

貴女だけには絶対に負けない。何があっても絶対に。

アルテナから伝わる凄まじいまでの気迫。あまりの気迫に戦いの行く末を見守っているアルテナの付き人や侍女達、そしてその場にいる多くの亜人族はその気迫に思わず後退る。

アルテナは本気だ。誰が見ても真剣だ。

かつて見たことがあるだろうか？ アルテナのあの真剣な表情を。多くの同族達に慕われ、絶えず微笑むアルテナがその微笑みを消してまで弓をその手に持ち、意を決したかのように矢先を相手に向けたことが。

いや、いない。

それだけにアルテナは本気だ。本気だからこそ勝たなければいけない。

例え、これから先の戦い全てに敗北することになってもこの戦いだけは何が何でも勝たなければいけない。

アルテナがそこまでしてまで勝たなければいけない相手とは誰か？

「構えてくださいまし。香織様、いえ、白崎香織！」

鋭い眼差しを向ける相手——白崎香織は自分に挑戦してくる挑戦者に対して不敵な笑みと共に告げる。

「いいよ。相手になつてあげる」

両手に大剣を構えて戦闘態勢を取る香織はアルテナに言う。

「浩二くんの妹の座は誰にも渡さないよ！」

「お兄様の妹はわたくしですわ！」

対峙する二人の少女。

その行く末を見守るなか、一人の青年もとい元凶である——平野浩二は仲間から向けられるジト目を見てみぬフリをしながらただ戦いの行く末を見守るしかなかった。

どうしてこうなったのか？ それは少し前に遡る。

「フェアベルゲン」の住民達は復興の続きや、解放された同胞の世話、戦士団の再編などに忙しく、浩二達もその手伝いや自己鍛錬、次の旅の準備をしている。

浩二も怪我人や病人の治療またその予防や対策、ケアなど、亜人族の為に身を粉にして働いていた。

「ありがとうございます、ありがとうございます」

「？医神様。本当にありがとうございます」

「いえ、お大事に」

もう崇められることにも慣れてきた浩二は『南雲の野郎、本当にあいつは……』と崇められる原因となったハジメに内心で文句を溢す。

だが、それは今はたいした問題ではない。今問題なのは……。

「お兄様♡」

「ゲツ、アルテナ……」

浩二の腕に抱き着いてくるのは先日、レイナとの模擬戦から浩二のことを？お兄様”と慕う森のお姫様、アルテナだ。熱を孕んだ瞳で浩二を見つめる。

「お兄様。わたくしもお兄様のお仕事をお手伝いしますわ」

「いや、お前は族長、お前のお爺さんから仕事を任されていただろ？」
「そんなものよりもお兄様ですわ。お兄様の為なら「フェアベルゲン」だって陥落させてみせますわ」

「お姫様が言っているいいセリフじゃないだろ」

祖父に任された大切な仕事よりも浩二を取るアルテナ。ああもう、どうしてこうなったのかと頭を悩ませる。

（これがレイナなら簡単なのに……）

悪意、敵意、害意もしくはレイナのような闘争心ならば浩二も武力行使することに躊躇いはない。現に雫を慕うソウルシスターズに対しても浩二は一切の躊躇いもなくお仕置きができる。

それか邪な感情を抱いていても浩二は躊躇わない。しかし、アルテナが浩二に向けるのは純粹までの？好意”なのだ。

好意がこれほどまでに厄介だったとは、浩二はソウルシスターズに慕われている雫の気苦労を身を持って知ることになった。

「あ、雫！」

そこにちょうど復興の手伝いをしている雫と遭遇。助けて貰おうとするが、雫はプイ、とそっぽを向いて早足でどこかへ行ってしまった。

「雫さん!!」

助けてくれないの？ 大事な幼馴染だよね？ 俺達。

（だけどもずい。このままでは……）

そう、浩二は知っている。アルテナはまだ一人目だということ。そしてここからソウルシスターズのように一気に増殖していくということ。

それはつまり、雫がこれまでしてきた苦労を浩二もすることになると同義。

なんとかしなければそう遠くない未来で浩二のことをお兄様と呼

んでくる自称義妹達が浩二のもとに押し寄せてくる。ずっと雫の傍にいてソウルシスターズを迎撃してきた浩二だからこそそれがどれだけ苦勞することなのかを一番よく知っている。心の平穩、そして安寧の為に浩二はそれだけは阻止したい。

そこに――

「アルテナ。ここにいたか」

「お祖父さま!? どうしてこちらに!？」

「当然。お前を連れ戻しにだ。まったく、仕事もせずに浩二殿に迷惑をかけるでない」

アルテナの祖父、アルフレリックが孫娘を迎えに来た。

「嫌ですわ! わたくしにはお兄様が必要なのですわ!」

「浩二殿はハジメ殿と同じく多くの亜人族を治療してくださいだった大恩人だ。その中にはもう助からぬ者もいた。その者達の命を浩二殿が救ってくださいだったのだ。今まで浮いた話がないお前にそういう感情が芽生えてくれたのは祖父として嬉しい限りだが、限度がある。さ、仕事に戻るぞ」

「いやーでーすーわー! わたくしはお兄様とずっと一緒にいますの!」

取り上げられようとしている大事な人形を護るかのように浩二に抱き着く、しがみつくアルテナにアルフレリックも浩二も深い溜息を出した。

「浩二殿。孫娘がすまぬ」

「いえ、アルフレリックさんこそ……あ、これ胃薬いっものです」

「助かる」

孫娘の覚醒にストレスでお腹を痛めるアルフレリックに浩二は調合したお薬を手渡すとすぐにそれを服用した。即効性もあるからすぐに効能が発揮してアルフレリックの表情が晴れやかなものになる。

「して浩二殿。話は変わるが浩二殿から見て孫娘はどう思う?」

「はい?」

「身内びいきに聞こえるかもしれぬが、孫娘は容姿も能力にも優れておる。正妻でなくても側室としてなら――」

「何言ってんだ、あんたは」

浩二さん、敬語を忘れて思わずツツコム。

アルフレリックは浩二と視線を逸らしてボソリとぼやく。

「……ぶっちゃけ、アルテナを貰ってくれるなら誰でもよいと思っておる」

「ぶっちゃけたな!!」

本当に。

そこにこれ以上にないぐらいに瞳を輝かせるアルテナが言う。

「お兄様。わたくし、妹と妻は両立できると思いますわ!」

「できないから!」

味方だと思っていたアルフレリック。しかし、アルフレリックも孫娘は可愛いもの。孫娘が慕う相手と結ばれて欲しいと思うのも祖父として当然のこと。

(クソツ! どうすれば……ツ!?)

浩二とて好意を向けられるのは素直に嬉しい。その気持ちに素直に応えてやりたいという考えだつてある。だけど、いやだからこそ誠実でありたいと思つている。

(ティニア達を……いや、無理か)

ティニア達は浩二が複数の女性を囲むことに抵抗がない。むしろ推奨している。ちゃんと浩二のことを愛しているのならティニア達はそれを受け入れる。

(俺に味方はいないのかツ!?)

浩二の新たな嫁? 妹? が誕生するかもしれないその時、天使がやってきた。

「浩二くん。向こうの人達の治療は終わったよ。次はどうするの?」

「香織ツ!!」

浩二と同じく亜人族達の治療に回っていた香織がこれからどうするのか相談しようと浩二のところへやってきた。すると浩二は香織を見て何かを閃いた。

「……アルテナ。悪いが、俺はお前の兄になることはできない」

「え?」

突然の言葉に啞然とする。何を言っているのか理解できなかった、いや、したくなかったアルテナの顔はこの世の終わりかのように青ざめる。

そんなアルテナの腕を振り解き、浩二は香織に近づく。

「何故なら俺には既に可愛い妹がいるからだ!!」

「え?」

「な、なんですって!!?」

これが俺の妹だと主張するかのように香織を前に出す浩二に「え、浩二くん、何を言っているのかな?」と尋ねるも浩二は答えない。

「お前の好意は素直に嬉しい。けど、妹がいるのにこれ以上義妹を増やすのはよくないだろ?」

「私、いつから浩二くんの妹になったのかな? 確かに浩二くんのこと

とお兄ちゃんみたいだとは思っているけど……」

「……南雲の身体データを贈呈」

「浩二くんは私のお兄ちゃんだよ! アルテナさんには悪いけど諦めて!!」

ボソリと呟いた香織を動かす魔法の言葉に香織は一瞬で浩二の妹と化す。伊達に雫と一緒に幼馴染の面倒をみてきていない。香織の思考を読むことも言葉で誘導することも浩二にとっては朝飯前。

「み、認めませんわ!!」

だが、ここで折れるアルテナではなかった。

「勝負ですわ! 香織様!! お兄様の妹の座を賭けてわたくしと勝負なさい!!」

「望むところだよ!」

妹の座を賭けて二人の少女が互いに火花を飛ばし合う。

「……浩二殿」

「なんか、すみません……」

主人公51

「フェアベルゲン」のすぐ近くで急遽行われるようになったアルテナと香織の決闘。浩二の妹の座を賭けて二人は互いを得物を手に互いに強い眼差しを向け合う。

瞳に宿る意志は強い。互いに視線を逸らすことなく射抜くように、睨みつけるように見詰め合う。

その瞳に宿る意志はただ一つ？ 貴女に勝つ”。ただそれだけ。

アルテナは愛用の弓矢を構え、香織は二振りの大剣を握りしめて両者一步も譲れない決闘が行われようとしていた。

そしてこの決闘が行われるようになった元凶はというと……。

「浩二。貴方、香織に何を吹き込んだのよ？」

「浩二……」

「浩二くん……」

雫、龍太郎、鈴から呆れるような眼差しを一身に受けていた。

「仕方なかったんだ……俺だってこうなるとは思わなかったんだ……」

言い訳する浩二さん。

そこにイリエが不思議そうに尋ねてくる。

「好かれているならいいんじゃないの？」

敵意や害意といった悪意ではなく好意の類なら別に難しく考える必要はないのでは？ そう尋ねるイリエにシアも同意するように頷く。

「私もそう思いますよ？ 浩二さんは何でそこまで嫌がっているのですう？」

シアもまたイリエも同じ気持ちで浩二に尋ねる。

それに対して浩二は神妙な顔で答えた。

「……普通に好意を持ってくれるのは俺だって嬉しいさ。だがな、イリエ、シア。お前達でもわかるように説明するとだな……ティオ並みの変態がネズミ算で増えて？ お姉様”と慕ってきたらどうする？」

「……………めん」

「ごめんなさい、浩二さん。私が間違っていました」

「お、お主等、そんなに妾を虐めて楽しいのかえ？ くふ……」

「テイオ様……」

ペコリ、と浩二に頭を下げるイリエとシア。自分の考えが足りなかった、と言わんばかりの反省顔にテイオは恍惚の笑みを浮かべ、エフェルがそんなテイオにジト目を向ける。

「……ということは雫さんは」

「そう、年上年下関係なく現在進行形で義妹を量産しているお姉様だ」「私だって好きでそう呼ばれているわけじゃないわよ!! 知らない間に勝手に増殖したのよ!」

ポニーテールを揺らしながら必死に否定するお姉様だが、その言葉に説得力は皆無だ。元の世界でもこの世界でも義妹を生み出し、量産しているお姉様の言葉に耳を傾けるのはソウルシスターズだけだ。

「奴等は、ソウルシスターズはしぶとい。それこそGのようにしぶとく数も多く、どこからでも現れる。その場に一人いれば三十人いるのは当たり前。そして奴等はお姉様に近づく者を排除する為なら手段を選ばない畜生の如き本能のままに牙を剥く」

「ね、ねえ、浩二くん、何か恨みでもあるの？ さっきから言葉に悪意しか感じないよ……」

わざわざ黒光りする悪魔で例える浩二に鈴は思わず尋ねると浩二は当然のように答える。

「恨み？ 何を言ってるんだ？ 鈴。そんなのあるに決まってるんだろ。俺が奴等を駆除するのにどれだけ苦労したか……。しかも奴等の連携力は底知れない。義妹共通の情報網を駆使して情報を共有しているせいか一度使った手は二度は通用しない。そろそろ何か別の方法を考えないと……」

「ねえ、浩二？ 流石にしないわよね？ いくら貴方でもあの子達に口では言えないことしないわよね？」

何か真剣に考える浩二さんに雫は嫌な予感がして確認するかのよう問いかけるも浩二は微笑むだけで何も答えなかった。

「さて、そんなことよりも今は目の前の問題だ」

「ちよつと浩二！ 答えて！ お願いだから!!」

お姉様は必死に浩二を揺さぶるも浩二は見事に無視^{スルー}。

「香織には勝って貰わないと……妹分である香織はともかく俺は零のようになりたくないからな」

「浩二!?!」

「カオリンはいいんだ……」

「まあ、浩二は小さい頃から香織の面倒を見ていたからな」

それはもう目を離すとすぐにどこかに突撃する突撃娘を放置することなどできず、もはや面倒を見るのが当然のようになっていたから香織が妹分であることは今更の話。

「しかし、勝負になるのでしょうか?」

ティニアが疑問を口にする。

アルテナの実力はわからないが、香織は既にチートと呼ぶに相応しいステータスと技能を持つ。

勇者である光輝を上回る身体能力に、?分解”という凶悪な能力、魔法も全属性に適性があつて無詠唱・魔法陣無しで発動可能。更には剣術も未だ上限は見えず、回復魔法のエキスパートでもある。

アルテナはこの世界?トータス”の住人だからステータスは当然、光輝達よりも低くて魔法も使えない。普通に考えれば勝負にならない。

「まあ、普通に考えればそうだな……」

ティニアの言葉にその考え方は何もおかしくはないように頷く浩二はふと気づいた。

(南雲とユエがいない……)

新しい兵器の開発しているかもしれないハジメはともかく、ユエなら香織を弄りに来てもおかしくない筈だが……。

「さて、それでは準備はよろしくて?」

「うん!」

「いつでも構いませんわ!」

審判役を買って出たレイナ。その表情はとても生き生きしている。戦闘はするのも見るのも好きなのかもしれない。

「それでは浩二の妹の座を賭けて、ファイ!!」

審判の合図と同時にアルテナは後方に跳んだ。

真白な濃霧が漂う樹海にその身を包ませて身を潜めるアルテナに周囲を警戒する香織。その香織目掛けて濃霧の奥から頭部、鳩尾、腹部を狙った三カ所同時撃ち。

「どうやったら三発同時に矢を放つことができるのか? それを初手で繰り出す森人族のお姫様の弓の腕前と自称浩二の妹の本気がよくわかる。」

「とっ」

だが香織は危なげなく矢を斬り落とすも、上空から二本の矢が香織の死角を狙う。

「どうやら三本矢は囷。本命は香織の頭上、死角を狙った二本の矢。その矢が香織を串刺しにせんと迫りくる。」

「危ないな、と」

それでも香織は大剣で矢を防ぐ。

濃霧の奥から「くっ…」と悔しそうな声が小さく響いた。

「うくん、どうしようかな……」

攻めあぐねる香織。それには理由がある。

「普通に戦えば香織が勝つのは当然だ。それだけ実力に差がある。だけど相手は魔物でもなければ香織が全力を出しても大丈夫な相手でもない。まだ神の使徒の力を掌握しきれていない、手加減が難しい香織にとって樹海の濃霧に隠れているアルテナを倒すのは難しい」

防ぐことはできる。避けることも。

しかし、殺さない程度に手加減しながら相手^{アルテナ}を倒すのは今の香織には下手な強敵よりも難しい相手だ。

「そうね。香織のことだからできるだけ傷つけないでしようし」

雫も浩二の言葉に納得する。

香織は優しい。それこそ傷ついている人がいれば放っておくことができないほどに心根優しい女の子である。

「んじゃ、森人族のお姫さんが勝つのか?」

「でも矢の本数も限りがあるから、それまでカオリンが凌げたら勝ち、

かも」

龍太郎も鈴もどちらが勝つのだろうか考える。

「では香織さんの勝ちですか?」

「そうとも言えぬ。地の利は森の姫にある。それに何の勝算もなく香織に勝負を持ち掛けるとも思えぬ。それこそ香織が問答無用で樹海を分解せぬ限りは勝負の行方は——」

わからぬ。

そう言葉が続けようとしたテイオの視界にカツ! と強烈な光が降り注いだ。

何事か? そう思っただけで見れば香織が片手を突き出した状態でそこにいた。そして……。

「?分解」

樹海目掛けて分解の砲撃を放った。

「香織!」

雫さん悲痛に叫ぶ。それに気付いた香織はニコと微笑む。

「大丈夫だよ、雫ちゃん。後で元に戻すから」

再生魔法を使えば分解した樹海も元には戻るが、雫が言いたいのはそこではなかった。

「テイニア」

「外れます。ギリギリではありませんが……」

アルテナの安否を確かめようと天職が?探索者”であるテイニアに確認を取らせる。どうやら外れていたようだ。

「ちよつ、テイオさん! どうするんですか!? テイオさんが余計なことを言ったせいで!」

「わ、妾が悪いのかえ!」

ブンカイ、ブンカイと口にしながら樹海を更地にでも変えるかのよりに分解していく香織に「す、鈴! 結界だ! 亜人族達を守るんだ!」「う、うん!」「あたしも手伝う」「協力します」と龍太郎達は観客ギャラリを守る為に奔走し始める。

「香織も南雲に染まってきた、と思うべきか」

「今度南雲君と話しましょう。香織のことについて」

「そうだな」

今後、香織に対する扱いについて話し合いをしようと過保護な二人は強くそう思った。

そして分解により樹海は消え、それによって濃霧も薄れて行き、濃霧に身を潜めていたアルテナに香織は狙いを定めた。

「ごめんね」

「——っ」

身体能力ステータス頼りの敏捷。アルテナにとって目にも止まらぬ速さで接近してきた香織の一撃をその身で受けてしまう。

「ふぐっ!？」

とてもお姫様の口から出てはいけない奇声が出たが、それを気にする人は今はいない。

地面に伏せるアルテナに香織は追撃はしない。

勝敗はもう決した。ここからアルテナに逆転する術はない。

「ま、まだ、まだですわ……ッ」

それでもアルテナは諦めてなるものかと、その意志と気迫のみで足に力を入れて立ち上がるうとする。

「わたくしはお兄様の妹に……ッ」

想像する。

浩二を兄と慕い、褒められ、頭を撫でられ、甘やかされる未来を妄想する。

デレ、と頬を緩ませる。だがすぐに目の前の勝負に目を向ける。

「わたくしとお兄様の未来の為に……香織、貴女には勝たなければいけませんわッ!」

吼える。

泥臭くても、醜くても、輝かしい未来もっそうの為にアルテナは立ち上がる。

その時だった。

——力が欲しいか？

そんな声が響いた。

主人公52

——力が欲しいか？

浩二の妹の座を賭けて勝負をしている香織とアルテナ。だが、香織の圧倒的実力ステータスを前に得意の弓術は何も通用せず、亜人族以外は感覚を狂わせる濃霧でその身を隠す戦法も？分解” という凶悪な力によって無力化された。

香織の一撃をその身に受け、それでもなお立ち上がろうとするアルテナに神かまたは悪魔の誘いかのような声が響いた。

「だ、誰ですの!？」

唐突の声に驚いて周囲を確認するも誰もいない。空耳？ と自身の耳を疑うも。

——汝、力を求めるか？

また聞こえた。

まるで耳元に囁くかのような、男の音が確かにアルテナの耳に届いた。

いったい誰？ と疑うアルテナ。しかしどこか聞き覚えのあるようなという疑問が過る前に再度声は聞こえる。

——汝、力を求めるか？ 己の心のままに望むものを欲する為に。

ゴクリ、と唾を飲み込む。

その声は誰の声かはわからない。しかし、その言葉は今のアルテナにとってあまりにも魅力的だった。

「……欲しい、欲しいです！ わたくしは力が欲しい!!」

まるで天上に住む神々に懇願するかのように天に向けて手を伸ばす。

アルテナは幼少の頃から亜人族の中でも地位の高い森人族の長老の孫娘であり、「フェアベルゲン」のお姫様でもある。だから同族の間でも高貴な存在として見られ、小さい頃から相応の扱いを受けてきた。

同年代の少年少女と同じ時間を過ごしても、常に優先され敬われるのはある意味、当然のことだった。

だからアルテナが浩二を意識するのは必然だったかもしれない。

亜人族を蔑むこともなく、奇跡のような御業を振るう浩二がアルテナ達、亜人族からして見れば神の御業と遜色ないほど。

それこそ？ 医神”と亜人族が新たな宗教を開くほどの信仰心を抱かせるほどに。

多くの亜人族に信仰に近い思慕の念を抱く？ 医神”の伴侶または側近になることで？ 医神”の庇護を授かろうとする森人族の姫の矜持か故か。

またはアルテナを含めた多くの亜人族を治療し、今もなお奴隷にされかけた、なつた亜人族の為に心砕いて親身に接してくれる浩二の優しさに触れたからか。

どちらにしてもアルテナにとってある意味初恋に近い念は確かに芽吹いた。

心奪われた乙女の如く、本能的に浩二のことを？ お兄様”と慕うアルテナは可能なら？ 妹”と？ 妻”の両方の座を獲得したいと思わせるほどに今のアルテナは浩二を慕っている。

そう、同性であろうともお姉様相手なら喜んでベッドの中であろうとも共にする。むしろ共にしようとする義妹^{ソウルシスターズ}達のように。

その声が例え、対価に魂を要求する悪魔の誘いであろうともアルテナは求める。

浩二の妹の座を獲得している香織からその座を篡奪する為の力を。

そんなアルテナの魂の叫びが通じたのか、それはまるで天からの贈り物かのようにアルテナの前に現れた。

——力は授けた。後は汝次第だ。

「はいー。」

——是非とも面白、ゴホン、存分に戦え。

「勿論ですわー！」

アルテナは声の主から授かったであろう装備を身に付けてその装備の脅威を香織に向ける。

「え？ それって——」

それを見た香織は目を丸くする。

だが遅い。アルテナはもう準備は万全だ。

「まだ、勝負は終わりではありませんわ!!」

片眼鏡を装着し、先ほど使っていた弓より一回り大きな弓と金属製の矢を手にするアルテナは弓を構え、矢を番える。

「天より授かりし力を見せて差し上げます!!」

その装備を見て誰もが開いた口が塞がらなかった。

だってどう見てもアーティファクトだから。

「南雲おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおツツ!!」

主人公に一杯食わされた敵キャラのように驚きと怒りの怒声が「フェアベルゲン」に響き渡る。誰の叫びかは言わずとも。

それをそう遠くない位置から見ていたハジメは悪戯に成功した子供のように口角を曲げていた。

「……ハジメ、どうしてこんなことを?」

「この方が面白いだろ?」

あのまま決着では面白くない。そうだ、どうせなら森人族のお姫様にアーティファクトを送ってやろう。そんな気持ちでユエの空間魔法を通してハジメはハウリア族と同じ、亜人族でも使えるアーティファクトをアルテナに送ったのだ。

「……」

だがユエは気付いている。それだけではないことに。

ハジメにとって浩二は強くなる為の決意を抱かせたライバルであり、対等な?友達?である。だからユエが香織について意地悪したくなるようにハジメもまた浩二を困らせて楽しんでる。

『このサド野郎!!』『出てこい! モルモットにしてやる!!』『この魔王が!!』と怒りの形相でその魔王を捜しに行こうとする浩二をその場にいた仲間達の手によって止められている。

しかしハジメはその叫びに『お前に言われたくねえよ、サド野郎』『モルモットは勘弁だ』『誰が魔王だ、誰が』とわざわざ聞こえもしないのに丁寧なツツコミを入れている。

そのハジメの顔はとても楽しそうだ。

それこそ友達と楽しそうに遊んでいる子供のような顔にユエも楽しそうに微笑む。

ただ訂正を加えるのなら友達とではなく友達で遊んでいるのだが、残念なことにこの場にそれをツツコミことができる人はいない。

アーティファクトを手にしたアルテナは先ほどとは比較にならない威力の矢を放つ。香織も容易に弾けない威力が包容された矢だけではない。香織の動きを先読みするかのように狙い澄ました精密性によって香織も簡単にはその場から動けない。

「ハジメくんの馬鹿あ!!」

私なにかした!? と叫ぶ香織だが残念なことにユエに耳を塞がれたハジメの耳には届かない。そして別に香織が何かしたわけでもない。ただ香織が不憫だったただけだ。

「てめえ!! 南雲!! 絶対に見つけ出してユエにどうしてもと言われて調合した超強力精力剤『盛りMAX』の被験体にしてやる!! てめえの毒耐性が通用すると思うなよ!!」

浩二は浩二で怒髪冠を衝く勢いでそう叫び散らす。

「浩二さん! ぜひとその話を詳しく!!」

「浩二よ!! 妾も被験体になろうぞお!!」

その話に食いつくシアとティオ。

「浩二くん! 私にも後で詳しく!!」

ハジメのことなら地獄耳も発揮する香織も食いついた。

「……ユエ?」

「……な、なんのことかわからない」

ジト目で隣にいるユエを見るもユエは視線を明後日の方向に向けて誤魔化した。

「……あとであいつ専用のアーティファクトでも作ってやるか」

ハジメはもしもの時に備えてそう決めた。

断じてその精力剤が怖いわけではない。そしてそれを調合するよ
うに頼んだユエとは後で話し合う必要があるそうだ。

「そこまでだ!!」

そこに制止の声が轟いた。

戦っているアルテナも香織も、そして鬼の形相でハジメを探そうとする浩二やその浩二を取り押さえている雫達も一斉に動きを止めてその声の方を見る。

そこには亜人族の集団。森人族を始めとした虎人族、熊人族、狐人族、狼人族、狐人族、土人族、翼人族そして何人かの兎人族まで含まれた亜人族の集団。その集団の長と思われる狼人族の女性。

その女性に浩二は見覚えがある。

かつて帝国が所有する奴隷の一人で浩二が治療した狼人族の一人。そしてよく見ればその女性の後ろにいる人達の大半は浩二が手当て、治療を施した者達ばかり。

ま、まさか……。と浩二はそんな彼等彼女等を見て頬に冷汗を垂らす。

そしてその予感は的中した。

「我等は平野浩二殿もとい？ 医神」を敬愛する信徒である!! そしてその戦いもとい聖戦に参加する為に参上した!!」

浩二は彼女が何を言っているのか、耳に入れたくなかった。

「我等も？ 医神」様をお慕いする者の一人! よって義妹または義弟の座は決して譲れるものではない!!」

「そうよ!! アルテナ様だけずるいわ!!」

「義妹は何人いたつていい筈よ!!」

「義弟だつて悪くねえ筈だ!!」

？ 医神」の信徒達は各々で自分の想いを魂を叫び武器を手にする。

「皆! 我等の忠義を？ 医神」様にお見せするぞ!!」

「「「「「オオオツツ!!」」」」」

忠誠と闘志の叫びが【フェアベルゲン】に響き渡り、？ 医神」の信徒達はなだれ込むように香織とアルテナに向かって突撃する。

「えええっ!? 嘘ッ!?」

「み、みなさま!?」

狂信のように怯まず、臆せず、香織とアルテナを神敵かのように睨みつける？ 医神」の信徒達の前に香織とアルテナは目を合わせ領き

合う。

「悪いけど負けないよ!」

「お兄様の妹はわたくしですわ!!」

一時休戦。まずは目の前の自称?医神”の信徒達をどうにかする方から始める二人は互いに背を預けて共闘する。先ほどまでの戦闘は何だったのか、それとも戦闘で芽生えた友情とでも言えばいいのか?

もはや混沌^{カオス}。

どうすればいいのかもうわからない浩二はふと笑みを浮かべた。

「うばあ」

浩二の口から奇怪な呻き声が漏れ出した。ついでに、エクトプラズムのように浩二の魂魄が肉体から離れて空に昇っていく。さよくなら、と魂魄状態の浩二が手を振っているのが見える。

浩二は肉体を捨てて現実逃避に走ったのだった。

こうしてハウリア族を除いた亜人族の殆どが浩二、否、医神教の信徒になったのであった。

そんな頃、とある王国の一室で。

「リリアーナ様。医神教を入信したいという方々の書類をお持ちしました」

「ありがとうございます。これでようやく新たな宗教の開けるだけの人数が揃いましたね」

リリアーナは微笑みながら書類にペンを走らせる。

「しかし、本当によろしかったのでしょうか? 浩二様の許可もなくこのようなことをしてしまって」

「大丈夫ですよ。浩二さんもきっとわかってくれます。それにこちらの方が浩二さんが調査してくださった薬の信頼性も高まりますし、信者に調査方法を開示すれば多くの?調査師”や?薬師”も集まるでしょう。そうなれば王国の為にもなります」

この時、浩二はまだ知らなかった。

この世界？トータス”に召喚されて調合されたお薬は今、医神の薬として世間に広まってその薬によって助かった人達は医神教に入信する人々が後を絶たないという現実だ。

ハジメが作った？医神”という言葉がリリアーナはちやっかり有効活用していた。

「それにこうして少しずつ外堀を埋めて行けば……」

腹黒さと乙女心の二面性の笑みを見せるリリアーナにヘリーナは薄く微笑むのみだった。

主人公53

樹海の大迷宮攻略を終え、「フェアベルゲン」での新たな宗教？ 医神教”が生まれ、香織とアルテナによる義妹決闘も滅茶苦茶になったり、浩二の魂魄が現実逃避したり、全ての元凶であるハジメに浩二が怒り狂い、大暴れしたりと休むに休めない日々を送り、遂に最後の大迷宮がある【氷雪洞窟】に向けて旅立つのだった。

【氷雪洞窟】がある【シユネー雪原】——大陸最南東一帯を覆う一大雪原。晴れることのない雲天が常闇の如き暗い世界を作り出し、たださえさ最悪の視界を、更に猛烈な吹雪がホワイトアウトさせる。

その雲天よりも更に上空、空の海を遊泳するように飛行する物体——飛空艇？フェルニル”。

そのフェルニル甲板で浩二達は新たなアーティファクトに慣れる為の訓練を行っている。

「うん、まあ悪くない」

新たなアーティファクトを手に通り使ってみた感想を口にする浩二。悪くはないようだ。後は実戦でどう使っていくかは実戦を経験してどうにかしていくしかない。

(新しいアーティファクトの性能……ひとまずは俺の欠点は補えそうだ)

新しいアーティファクトの性能具合に納得するように頷く。

アーティファクト以外にも【フェアベルゲン】で開発した新しい技もある。上手く活用すれば【氷雪洞窟】でも遅れは取らないだろう。

(雫達も問題はなさそうだが……)

浩二以外にもハジメからアーティファクトを貰った者もいる。

雫は今ある黒刀を更に強化した状態で、龍太郎、光輝、イリエ、レイナは今ある武器を改良して貰い、？空力”が付与されたブーツも与えられている。

鈴に至っては完全に新しいアーティファクト。それを使いこなせるかは鈴次第といったところか。

ティニアは自らの力を高めたいということで自分が納得いく状態

になるまで「フェアベルゲン」で特訓を続け、エフェルは浩二の手で新たな領域に辿り着いた。その力を使い慣れる為の訓練も浩二は共に行った。

全員気合も準備も万全。そう思いたい浩二であるのだが……。

(やっぱり一番の心配は光輝か……)

龍太郎と一緒に新しく生まれ変わった聖剣の性能確認を行っている光輝はどこか複雑そうだ。新しい聖剣が気に入らないというよりも納得できないような、そんな顔だ。

浩二は光輝の心に揺らいでいるその感情が悪い方向に進むのではないか、そう危惧している。

(原作だとそうだったし、だからといって今の俺が何を言っても逆効果か)

今の浩二と光輝の間には断崖とまでは言わないが、亀裂が生じている。

それは光輝の一方的な子供の癪癪に近い感情によるものだが、だからといってそれを理解して納得しろというのは光輝にはできないことだ。もし、あれこれと浩二が光輝に対して何か言えばそれこそ修復不可能なほどに関係を崩してしまうことになる。

(雫を通して間接的にがベストか……)

雫の言葉ならまだ問題ないかもしれない。雫に負担をかけてしまうことは申し訳なく思うもそうでもしなければ光輝は浩二の言葉に耳を傾けない。

(さてそろそろいい頃合だな)

全員の性能慣れや疲労具合を考慮してそろそろ訓練を打ち止めにし、休憩する為に全員をブリッジに誘導する為にパンパンと手を叩く。

「休憩がてらそろそろ戻るぞ」

浩二の言葉に雫達は頷く。確かに少し熱を入れ過ぎた自覚はあるようだ。

もうすぐ大迷宮ということもあつてか、レイナも浩二に勝負を仕掛けてくることがない。いくら戦闘凶でもそれぐらいの配慮はあるよ

うだ。

そうして全員がハジメ達がいるブリッジに戻ると、そこにはいつものようにイチャイチャしているハジメ達とどういいうわけか着物がはだけた状態で正座し、エフェルに説教を受けているティオがいた。

「お帰りなさいませ、すぐにお飲み物を用意しますね」

「ああ、頼む」

浩二達が戻ってきたのを確認したティニアは飲み物を用意し始める。そしてエフェルに説教を受けているティオを置いて浩二達はソファーに座った。

「それでどうだった？ 不具合はあったか？」

尋ねるハジメ。

「ああ、問題はなかった。というか驚いたよ。魔力の通りが段違いだ。出力自体も随分と上がっているし、新しい能力もかなり有用だ」

そう言いながらも、光輝の表情は何とも複雑だ。

「いやあ、マジですごいぜ！ 空中を踏むって感覚は戸惑ったけどよ、慣れればマジ使える。籠手の威力も倍増しだしよ。実戦で使うのが楽しみだぜ！」

快活に笑いながら改造された籠手をガツンガツンと打ち合わせて、龍太郎は、まるで新しい玩具を与えられた子供のように喜びをあらわにした。その上機嫌な心情をあらわにするように、打ち合わされた籠手から衝撃波が迸る。

隣に座る鈴が、ちよろりと伸びた二房のおさげ髪を盛大に煽られて、ちよつと迷惑そうな顔をしつつ頷いた。

「龍太郎くん達と違って、鈴は完全に新しいアーティファクトだから、ちゃんと扱えるかちよつと心配だったんだけど、実際に使ってみるとすごかったよ！ これで鈴も……ちゃんと戦える。守るだけじゃない。戦える！ ありがとう！ 南雲くん！」

屈託のない、けれど強い意思を感じさせる笑顔を見せる鈴。

恵理ともう一度話をする為にもう一つ神代魔法を獲得したい鈴。その為の力が欲しいその意気込みにハジメは戦う為の力を与えたのかもしれない。

「私も問題ないわ。むしろ、機能が多すぎて実戦の中での選択に戸惑わないか不安だけど……そこは経験値を稼ぐしかないわね」

そして龍太郎、鈴、雫も手に入れた神代魔法についても着実にモノにしてきている。それも実戦で使ってみるしかない。

「俺の方も問題はない」

「大丈夫」

「ええ、むしろ早く実戦で試したいですわ」

浩二、イリエ、レイナも問題ないように頷く。

「そいつは重畳。昇華魔法の練習がてらとはいえ、本気で手を加えた甲斐があつたみたいだな。つつても、天之河の聖剣に関しては少々納得し難いところなんだが……」

「え？　ちよつ、ちよつと待て南雲！　なんだその不吉な言葉は!？」

まさか、不具合を聞いたのは「あれ、ネジが一本余つたな……まあ、ちゃんと動いているならいいか!」みたいなノリの質問だったのか!?!と光輝は顔を青ざめさせた。

ハジメは苦笑しながら首を振る。

「心配すんな、そういう意味じゃねえよ。ただ、聖剣ってのはやっぱり特別製みたいでな。キャパシティを余すことなく、精密かつ絶妙なバランスの上に作られていたんだ」

「えつと、つまりどういうことだ?」

「聖剣は、それで改良の余地もなく完成しているってことだよ。下手に根幹部分に手を出したら、逆に性能を弱めそうでな。だから俺がしたのは、整備と外付けオプションの追加くらいだ。とても改造なんて言える仕事はしていないな」

曰く、聖剣は相当古いアーティファクトのようで、長い年月により少し機能不全を起こしていたらしく、ハジメがしたのは、言わば錆落としのようなものだったらしい。

ハジメをして、改良の余地なしと言わせる聖剣に誰もが目を丸くした。特に、光輝はマジマジと聖剣を見つめている。

「そう言えば宝物庫にあるアーティファクト。他のはともかくその聖剣だけは光輝以外使える人はいなかったってメルド団長も言ってい

たな。光輝、少しその聖剣を貸してくれないか？」

「ん？ ああ」

光輝は浩二に聖剣を手渡す。それに怪訝するハジメは浩二に尋ねる。

「どうするんだ？」

「別の方向性から聖剣がどんなものか調べてみようと思ってな。ほら、ファンタジーものでも意思のある武器とかあるだろ？ それなら俺の技能で何かわかるかもしれない」

もし意思のあるものであれば浩二の技能である？侵入”でその意思を読み取ることができると昇華魔法も手に入れた今なら武器に宿る残留思念さえもそれが可能だ。

「？侵入”」

浩二は聖剣に触れて？侵入”を行使する。灰色の魔力色が聖剣に包み込まれるように広がっていき……弾けた。

その光景に誰もが首を傾げた。ただ浩二だけは驚いたように聖剣を見据える。

「浩二……？」

光輝が呼びかける。しかし、返答がない。

困惑するなか、浩二はゆっくりと口を開いた。

「……弾かれた」

「……どうということだ？」

「聖剣の意思もしくは残留思念を読み取ろうとして弾かれた。あれだな、中学の時にうっかり着替え中の雫の部屋の扉を開けてしまっただけで追いつかれた、みたいな感じだ」

「浩二!? どうしてそこで私を出すのよ!？」

雫が顔を真っ赤にして叫ぶ。どうやらその時のことを思い出したようだ。

「手加減抜きの雫の拳は痛かった……あの痛みは生涯忘れない」

「ノックもなしでいきなり部屋に入ってきた浩二が悪いでしょうが!!」

わざとらしく頬を擦る浩二に雫は自分に非はないように言う。事

故とはいえ、着替え中の乙女の部屋に入ったのだ、それぐらい当然の罰だ。

「浩二は雫の家に住んでますの?」

それを聞いたレイナはそう尋ねる。

「いや、ただ長期の休みになるとだいたい雫の家に泊まっているだけじゃないと師範達に夜襲ができないからな」

「そんな理由でうちに泊まったの!」

どうやら雫も初耳のようだ。

事実、師範達の普段のしごきに怒りを抱いた浩二は師範達から「いつでもかかってくるがいい」というお許しを頂いたのならお言葉に甘えて奇襲、夜襲を仕掛けることはある意味では八重樫家では日常になっっていることを雫は知らない。

「まあ、だから休みの日はだいたい雫と一緒に生活しているから、もはや八重樫家は俺にとって第二の実家みたいなものだな」

八重樫家に泊まりに行くときも雫の両親からは「いらっしやい」ではなく「おかえり」になっているほどに八重樫家は浩二を家族のように扱っている。

「あ、だから休みの日に雫ちゃんの家遊びに行くといつも浩二くんがいるんだね。門下生だからって思っていたよ」

「まあそれも間違いではないからな」

門下生であることにも変わりはない。現に泊りがけで八重樫流を鍛えていたのも事実だ。

「ただまあ、雫とは本当の兄弟のように育ったのも確かだな」

「……ええ、そうね」

雫は若干眉根を寄せて浩二の言葉を肯定する。

(でも浩二は私のことが……)

本当の家族、兄弟のように育った。そのことについては雫も同じ気持ちだ。八重樫流の教えだけではない、寝食を共にして生活してきたから八重樫流の教え以上に雫は浩二のことを本当の家族の一員だと思っていた。しかし、浩二はそうではなかった。

雫のことを一人の異性として見ていた。家族としてではない、雫を

一人の女として好意を向けている。

雫もきつと浩二も同じ気持ちだろうと思っていた。一人の家族として自分のことを好いてくれるのだろうと思っていたけど雫は浩二から告白されるまで浩二の気持ちに気付くことができなかった。

(浩二、私は……)

思い悩む雫。それは家族としてか、一人の女としてか、浩二に向けるその感情はいつたいたいなんなのか雫自身でさえはわからなかった。

そんな雫の苦悩を他所に浩二は聖剣を光輝に返した。

「でも弾いたってことはその聖剣には何らかの意思が込められているのは確かだな。もしかしたら光輝の呼びかけにも応えるかもしれない」

「そ、そうか……」

意思が込められている聖剣。しかし、光輝はこれまで聖剣を使ってくるにはいるもそんな意思らしく反応は少しもなかった。もしかしたら勇者である光輝に何か足りないせいかもしれない。

そうこうしているうちに一行は氷の峡谷へ到着するのであった。

主人公54

氷と雪でできた大迷宮【氷雪洞窟】に向かう為に氷の峡谷に到着したハジメ達はフェルニルを下降させて雲の下に降りる。暴風と雨粒が弾丸のように窓を叩き、石が弾けるような連続した音がブリツジに響いた。

無数の氷の礫が激突しているらしい。落雷もフェルニルを襲うも、ハジメのフェルニルは揺らぎもしなかった。自然の猛威が具現化したような雲の中を通ったのは、ほんの数秒ほどだった。直ぐにホバツと雲天を吹き飛ばすようにして下界へと突き抜ける。

「ほわあく。ハジメさんハジメさん！ 外が凄いいことに！」

「落ち着けよ、シア。初めて見た光景で興奮するのは分かるけどな、ウサミミがめっちゃパタパタしてっから。さつきからちよくちよく俺の目を突いているから」

窓の外は、横殴りの猛烈な吹雪で荒れ狂っていた。加えて、窓の表面がピキピキツツと音を立てて凍てついていく。そんな初めての氷雪世界に、シアのテンションがアゲアゲだ。ハジメの腕に抱きつきながらウサミミを猛烈にパタパタさせている。狙い澄ましたようにハジメの目を突く！

「ふむ、確かに？ 極寒」というに相応しい有様じゃな。……妾、寒いのはあまり得意ではないんじゃないのう」

「私もです……」

眼下の銀世界と視界を閉ざす猛吹雪を見て嫌そうな顔をするティオとエフェル。竜人族は寒さに弱いのかもしれない。

この極まった駄竜なら、突き刺すような寒ささえ快樂に変換できるに違いない。あまり調子に乗るようなら、裸に剥いて放り出してやるか……とか思っていたハジメは、意外そうな目をティオに向けた。

ティオさん、いろいろ察してぶるりっ&ハアハア。この愛しいご主人様めっ。

「ティオ様？」

「うむ。何も無いのじゃ」

テイオのハアハアに察したエフエルがギロリと竜眼をテイオに向ける。テイオは一瞬でハアハアを止める。おおつ、とテイオの矯正が順調に進んでいることに皆、感嘆の声が漏れる。

ハジメは若干尊敬の眼差しをエフエルに向けて自身の胸元からペンダントを取り出した。

透明度の高い水色の水晶、八角柱に加工し鎖に繋いだもの。外気調整用アーティファクト？エアゾーン”だ。

「グリユーエン大火山の時と同じ轍は踏まねえよ。お前等、俺が渡したアーティファクトは失くすなよ。それがあれば常に快適な大迷宮の旅が約束されるからな」

「それと俺が調合した薬もな」

浩二が取り出したのは魔法薬。浩二がハジメが持つ？神水”を研究して調合した回復薬？偽神水”。効果は本物には劣りはするものの通常の回復薬よりも遥かに高い効果を持つ。浩二はその調合に成功してこの場にいるメンバー全員に一人三本は持たせている。

万が一に分断された際の回復手段。使わないのであれば問題はないが、大迷宮ではそれもわからない為に用心しておいて損はない。

渡された？偽神水”を取り出してハジメは言う。

「？偽神水” って言うが……ほぼ？神水”と変わらねえだろ」

「本物よりも劣る以上は？神水”とは呼べない。それに一つ作るのにかなり複雑な調合方法を用いたから量産も難しい」

少し悔しそうに言う浩二。

？医療師”として本物を超える物が調合できなかつたことに悔やんでいるようだ。

（そもそも？神結晶”は魔力そのものが千年以上の時間をかけて結晶化したもの。そこから数百年かけて飽和状態になると？神水”を生み出す。俺が調合したのはあくまで模造品。元となる？神水”があったから調合できた代物だ。けどいつかは？神水”を超える魔法薬を調合してみせる）

究極の回復薬である？神水”。？医療師”としてそれを超える回復薬を調合することに内心燃える浩二だった。

「……ん。ハジメのお手製。素敵」

「ですねえ、雪の結晶をモチーフにしてる辺りがなかなか憎いです」
「ハジメくんからの贈り物第三弾……えへへ」

ユエ達も胸元にしまっていた惚れた男からの贈り物であるペンダントを取り出して頬を綻んでいる。ハジメ用の無骨なデザインと異なり、ユエ達のは雪の結晶をモチーフに意匠を凝らした、精巧で美麗なデザインなのだが、そこで微妙そうな声音が響いた。

「のう、ご主人様よ。何故、妾だけちっちゃな雪だるまなんじゃ？ いや、これはこれで可愛いとは思うんじゃが……妾も、できれば意匠を凝らしたアクセサリーの方が……」

なんとも言えない微妙な表情で、ペンダントを顔の高さまで摘まみ上げたのはティオだ。とつても陽気な雰囲気雪だるま型のペンダントが、そこにあつた。今にも、「H A H A H A H A ツー！」というアメリカンな笑い声が聞こえてきそうである。

ちなみに浩二達のパーティー（十雫）は兎だ。今にも跳び跳ねそうなほど躍動感ある可愛い兎のアクセサリーだった。それにうわあ、と嬉しそうな声を漏らした乙女が一人。それに嫉妬の眼差しをハジメに向ける男が一人いた。

それはさておき、ユエ達の美しいペンダントと自分の雪だるまをチラチラと見比べて物欲しそうな表情をしているティオを見て、ハジメは言う。

「俺は知っている」

「な、何をじゃ？」

思いのほか真剣なハジメさん。ティオは、ちよつとたじろぎながら問い返す。

キツと睨むような力強い眼差しで、ハジメは告げた。

「お前の中に、スーパーティオさんが眠っていることを」
「!?」

ピシャ！ とら雷が落ちたかのような衝撃がブリッジを駆け抜けた。

——スーパーティオさん

樹海の大迷宮で、精神反転の魔法をかけられた際、テイオに生じた異常。

そう、出現したのだ。

？お姉さん過ぎて怖いテイオ”が。

？格好良すぎて気持ち悪いテイオ”がつ。

つまり、まともなテイオ・クラルスさんが!!

「都市伝説の類いかと思ったけどな。シアと香織、大迷宮攻略後も散々恐ろしそうに語ったんだ。それに俺達と出会う前、お前がまだ里とやらにいた時からの付き合いがあるサンドルの言葉が真実なら……実在するんだろう。まともなテイオなんてものが」

「ご主人様よ。やたら真剣な雰囲気のところ悪いがの、めちやくちや失礼なこと言うてるからな？ 妾、割と普通にカチンときてるからな？」

珍しくむすつとした顔で元凶たるシアと香織を見やるテイオ。二人は動揺しつつ反論を試みる。

「しよ、しようがないじゃない！ だって、本当に怖かったんだもん！ 私のことを守るとか、女王様みたいな雰囲気と言って……うっかり、変な気分になりかけたんだから！」

「別にどこもおかしくないじゃろ!? なんで怖いんじゃ!?」

「怖いですよ！ だって、テイオさんですよ！ あんな泰然として揺るぎのない格好良いテイオさんなんて！ 今、思い出しただけでも——うっぶ」

「ちよつと待つのはじやシアア!! なんで吐きそうになつとる!? 泣くぞ！ いい加減にせんと、妾、恥も外聞もなく泣き喚くからな！」

「香織さん！ シアさん！ いくらなんでもテイオ様に失礼です！ あれが本来のテイオ様なのですから！」

「本来のとはどういう意味じゃ!? 今の妾は本来のではないと申すか!?!」

そう言いながらも、ちよつと頬を染めているテイオは、やはり末期なのだろう。

とはいえ、まだ諦めるのはまだ早い！ はず！ と、ハジメは雪だ

るまペンダントをビシツと指さした。

「俺は、きつとまだお前の中にいるはずのスーパーテイオさんを見てみたい。冰雪洞窟の攻略中に、是非、实在証明をしてくれ。そうしたら、頑張ったご褒美にお前が望むデザインのアクセサリを贈ってやる」

「ひ、酷いのじゃ……それはつまり、妾には女らしい贈り物を一生せんということか!? あんまりじゃつ、ご主人様よ! お仕置きは大好物じゃが仲間外れは嫌じゃ!!」

「おいこら、駄竜。何を『もうあの頃の私はいないの!』みたいな顔してんだ。性癖の不治は確定事項にするなよ」

泣きべそ掻きながら縋り付くテイオに、ハジメは頭を抱えながら浩二を見た。それに察した浩二が口を開く。

「性癖の改善は難しい。エフェルの頼みもあつて薬やカウンセリングなどもやってはいるが、あまり効果がない。だから今は改善ではなく抑制する方向性でいってはいるも、根本から完治するのはほぼ不可能だ」

それを聞いてガクリと首を前に折る。

「あ、でも一つ面白い仮説はできたぞ。エフェルから里にいた時のテイオの扱いを聞いて蝶よ花よと叱られるようなこともあまりない、お姫様のように育てられることで叱責や痛みに新鮮な喜びを覚えてしまうという仮説ができた。あとテイオのような変態が二人か三人ほどこいればその仮説は正しいと証明される」

「なかなか面白い仮説ですわね、浩二。しかし、それでしたらリアーナ様もそうなのでは?」

「可能性としてはあり得るな」

その仮説を聞いてハジメ達はシン、と黙り込む。

「……えつと、つまり」

「浩二さんの仮説が正しいのでしたら……」

「やっぱりテイオを目覚めさせたのって」

全ての視線が一点に集中する。全員の視線を一身に受けているハジメは全力で皆からの視線を無視する。そんなハジメに浩二は慈愛

に満ちた笑みを浮かべながら優しくハジメの肩に手を置いた。

「責任取って定期的にテイオのお尻をぺんぺんしてテイオの性癖を発散させてやりなさい」

「……………いや、待て。待ってくれ。治療行為なら別に俺でなくても」

往生際が悪い。どうにか逃れようとするハジメにテイオが言う。

「往生際が悪いぞ、ご主人様よお！ 快楽というものはっ、信頼する他者から与えられんと意味がないのじゃ!! 故に妾をこんな身体にした責任を取って妾のお尻をぺんぺんするのじゃ!」

ほれ! はようはよう!! 早く妾のお尻を叩くのじゃ!! と尻をハジメに向けてフリフリと腰を振るテイオにハジメは何とも言えない顔のまま周囲に助けを求めるも、残念なことに誰も助けてくれない。

自業自得。その言葉がハジメの脳裏を過る。

プルプルと震えるハジメの手。それは自分の愚かさに対する怒りか、子供には見せられない顔でハアハアするテイオに対する怒りによるものなのか、ハジメにしかわからない。

「テイオ様……………」

「エフェル、おいで」

「大丈夫、これは治療行為なのですから」

エフェルは竜人族の姫として人には見せてはいけない顔に呆れと共に溜息を漏らし、浩二とテイニアの二人に慰められる。レイナは面白そうに見学し、イリエを始めとする光輝達は見てもぬフリに徹する。

ハジメに味方はいない。ユエ達でさえ、これはハジメが悪いと言いたげな顔でじつと見ている。もはやハジメに逃れる術はない。だからこそハジメはその手を振り上げ……………。

「こ、の駄竜がッ!!!」

「ありがとうございますっ」

振り下ろしたのであった。

主人公55

ハジメとテイオのプレイもといテイオの治療後に【氷雪洞窟】に続く【氷雪の峡谷】^{巨大クレバス}の先に大迷宮の入口がある。しかし、峡谷の終わりが見えたにも関わらず、【氷雪洞窟】の入口は見えなかったことに怪訝したハジメ達は進路の先の峡谷は雪が降り積もって上を塞がれた状態だったと気付く。

そして谷底の着地は無理であった為に崖の上にフェルニルを下ろす。

(いよいよか……)

ここからが本番だと気を引き締める。

それは浩二だけではなく他の皆も同様なのだが、唯一シアだけは初めての雪に興奮してウサミミみよんみよん！ ウサシツポぶんぶん！ 早く雪を堪能したい気持ちでいっぱいだったことから若干気が抜ける思いもしている。

下部ハッチを開けると、船内に身を刺すような冷気が流れ込んできた。

「ふひゃ!? さむうー!」

「これはきついわね……ぴくちつ」

鈴が首を竦めて飛び上がり、雫も思わずくしゃみしながら自分を抱き締める。

どの程度の気温なのか体感しておこうとエアゾーンを起動していなかったのだ。それはハジメ達も同じで、全員、一瞬ぶると身震いし慌てて起動させた。

外に出ると、さつそく大量の吹雪が襲ってきた。顔面に張り付くようにして、ハジメ達の顔に白い化粧を施していく。

「わっ、これが雪ですか! あははっ、しゃくしゃくしますう! ふわっふわですう!」

皆がコートのフードを目深く被るなかでシアだけがフードを被らないどころかコートの前すら閉じないで、おおはしゃぎしている。

上機嫌に笑いながら足を踏み鳴らしたり、手で雪をすくったりしな

がら存分に人生初の雪を楽しんでいる。

「おい、シア。行くぞ。あんまりはしゃぐな——」

「これはもう、ダイブするしかないですよお！」

「……聞けよ」

諫めるハジメの言葉も聞く耳、聞くウサミミ持たず。シアはそのまま「とお！」と元気に声を上げてダイブを敢行した。

着弾地点は、目の前の汚れなき純白の雪——

「今日から私は雪ウサギいああああ~~~~」

情けない悲鳴が木霊した。そして、シアの姿が消えた。

後には、シアの形をした穴だけが残っている。どうやら、ダイブした場所はクレバスの直上で、雪が降り積もっていただけだったらしい。

一拍。

「その後、愚かなウサギを見た者は誰もいない……」

「シア、安らかに」

シアが落ちた穴にジト目を向けながら、ハジメはRPGでゲームオーバーした時のナレーション風に呟き、浩二は胸元で十字を切る。

「いやいやいやっ、なに落ち着いているのよ!? シアが死んじゃうわ!」

「ひいひいつ、シアシアあ~~~~!!」

突然の事態に絶句し硬直していた雫と鈴が、顔を真っ青にしながらパニックに陥る。光輝と龍太郎も、まさかの事態に呆然としている。

「高いところから落ちたくらいで、シアがどうこうなるわけないだろう? それより、俺達も下に降りるぞ」

ハジメは、なんでもなしのように手を振りながらフェルニルを宝物庫へ回収。

そして、そのまま散歩でもしているかのような気軽さで飛び降りた。谷底まで六百メートルはありそうな絶壁を、躊躇なく。

光輝達が「エツ!?!」と声を漏らして目を剥く。その視線の先で、ユエもあっさり飛び降りた。二人が消えた崖の縁に、ひゅおくと、どこか虚しく風が吹く……

「あつ、二人共々、ちょっと待ってよお」

続いて香織もぴよんつと跳ねながら飛び降りた。

「ティニア。大丈夫だとは思うけど迷子になる可能性もあると思うからシアを探してきてくれ」

「かしこまりました。ではお先に」

浩二の頼みにティニアは浩二達に一礼してからひよいつとあつさり飛び降りる。

「ふふつ、今回の大迷宮はどこまで私を楽しませてくれるのかしら？

では浩二、お先に行つてきますわー！」

「おう、逝つてきていいぞ」

浩二の雑な返し。しかしそれでもレイナは楽しそうに谷底に向けてジャンプ。断崖絶壁を躊躇うどころか楽しそうに「オホホホッ」という笑いながら飛び降りていく。

「……落ちてても雪がクッションになると思うから」

飛び降りることに躊躇している光輝達にそう言いながらイリエもまた飛び降りた。

先ほど飛び降りたレイナやイリエ、そして光輝達全員に「空力ブーツ」が支給されている上に、魔法で風を起こして落下速度を落とすという方法も取れるので、冷静に考えれば光輝達だって問題はない。

とはいえ、理屈は理屈。感情は感情だ。断崖絶壁をフリーフォールするというのは、普通の感性からすると勇気がいるものなのである。

「鈴と光輝はどうする？ 俺達が運びながら降りるというのもできるが？」

浩二、雫、ティオ、エフェル、龍太郎は空を飛ぶ飛行手段を持ち合わせている。

しかし鈴と光輝はそれを持ち合わせていない為に浩二は一応どうするかを尋ねる。

「……鈴は、行くよ」

「鈴……」

谷底を覗いた鈴は決死の覚悟を決めたかのように崖っ縁に立つ。全てはもう一度、親友と話をする為に鈴は大迷宮に挑戦する。こんな

ところで足を止めている暇なんてないのだ。

(鈴、貴方は……)

親友の為に力を求める鈴のその小さな背を雫はじっと見据える。

その背にはいったいどれだけの覚悟を抱えているのか？ 雫には想像もできない。

すると浩二がそんな鈴の肩に手を置いた。

「よし行け」

そして押した。

「へ?」

「え?」

鈴と雫の声が重なる。

トン、と軽く押された鈴はそのまま谷底に向かって落ちていく。

「こ、浩二くんのばかああああああああ………」

せっかく覚悟を決めて自分の意志で飛び降りようとしたのにそれを台無しにするかのような所業。鈴は自身を谷底に突き落とした犯人に怒りながら落ちていくのであった。

「ちよつ!! 浩二!!」

「大丈夫。大地の染みになっても俺や香織もいるからどうにでもなる」

「そういう問題じゃないでしょう!」

鈴になんてことを! と憤る雫を置いて浩二は次に光輝に視線を向ける。「お前は どうする?」と瞳が物語っている。

「くそお!」

落とされるぐらいなら自分で! 光輝はやけっぱちの気持ちで飛び降りていく。

「よし」

「よし、じゃねえよ。たく」

浩二の行動に呆れながら龍太郎も親友を追いかけるように降りていく。飛べるということもあって精神的余裕があるからか龍太郎は割とあっさり飛び降りて行った。

(龍太郎、なんか雰囲気少し変わったなあ……)

いつもと変わらないけどどこか少しだけ大人びたような雰囲気の時折醸し出すようになった気がする。

(大迷宮を攻略して心境の変化でもあったのか?)

どちらにしてもいい傾向だ。

「はあ、浩二。降りたら鈴に謝りなさいよ?」

「へいへい」

雫そして浩二も飛び降りていく。そして最後に残ったティオとエフエルも。

「ではティオ様。我等も」

「うむ。ではエフエル。妾に」

捕まれ、と言おうとするティオにエフエルは首を横に振った。

「いえ、ティオ様のお手を煩わせることもありません」

バツ! と背から翼を出す。

「……エフエル、お主?部分竜化”を」

「はい。旦那様のおかげです。それではティオ様お先に失礼します」

?部分竜化”の竜の翼を広げてゆつくりと谷底に向かって降りていくエフエルにティオは笑みを見せる。

「まったく嬉しそうな顔をしておって……」

竜人族の中でも限られた者しか使えない能力。エフエルにはそれが使えないと思っていたティオにとつて目を見開かせるもの。

「浩二には後で礼を言っておくべきかのお」

エフエルが力の伸びしろに悩んでいたことにはティオも察していた。だがそれがどうだ? 今ではこれまでできなかった?部分竜化”が当然のように使えている。

浩二がエフエルに何をしたのかはティオは知らない。けれどエフエルの悩みを解消したことには変わりない。

「さて、妾も行くとするか」

ティオもひよいと飛んで崖下へのフリーフォールを行った。

主人公56

「浩二くんのバカ！ 鬼畜！ 外道！ サディスト！」

【氷雪の峡谷】でポカポカと効果音が聞こえてくるかのようには鈴は浩二の胸を涙目で叩いていた。

谷底へ突き落された恨みを突き落とした犯人にぶつけている。

「悪い悪い」

しかし、当の本人からは全く誠意のない謝罪。こんにやろう、と鈴は手に力を込める。

「肩の力は抜けたか？」

「え？」

「親友の為に気張るのはいいが、もう少し気楽にしろ。でないといざという時に気張れなくなるぞ？」

その言葉に鈴は手に込めた力を緩める。

浩二の言う通り、鈴は親友である恵理と話をする為にもう一つの神代魔法を獲得しようとしてここにいます。

気張っていないと言えば嘘になるし、肩の力だつて入っている。

(もしかして浩二くんはわざと鈴を……)

やり方は鬼畜ではあるも多少は肩の力が抜けた気がした。

「でも突き落とす必要はないんじゃないかな？」

浩二さんはスツと視線を明後日の方向に向けた。あ、綺麗な雪景色。

鈴の手に再び力が込められるのも無理はない。

「まあよろしいではありませんの。無事だったのですから」

「鈴ならこの程度問題ない」

レイナとイリエがまあまあと鈴を宥めに入る。

するとその直後、シアを抱えるティニアが降りて来た。どうやらハジメ達とは違う位置に落ちていた所をティニアに発見されて連れて来て貰ったようだ。

「いやあ、参りました。狡猾な罠でしたね。まさか私の童心を弄び谷底に落とそうとは——へぶっ!？」

恥ずかしさを誤魔化すように、笑うシアの脳天に、ハジメの拳骨が炸裂した。

「馬鹿やろう。まだ大迷宮じゃないが、ここが危険地帯であることに変わりないんだぞ? 気を抜くな」

「あう、すみません。ちよつと調子に乗りましたあ」

叱られたシアは、しょぼんと肩を落とす。ウサミミもへたあくとなる。

そんな残念ウサギを慰め、ウサミミを優しく撫でるハジメとユエにシアは嬉しそうに気恥ずかしそうに見ている方が身悶えするような仕草を見せる。

ハジメとユエとの間に度々展開する桃色空間。それがシアを中心に発生している。

周りの雪も解けそうな熱さ。

「こうして見ると本当にシアを受け入れたんだよなあ、南雲は。雫、あそこに香織を入れるにはどうするべきだと思う?」

「そうね。突撃でもさせたらどうかしら? 香織ならそれで行けると思うのだけど」

「いっそのこと南雲に強力な精力剤をブチ込んで香織と一緒に部屋に閉じ込めて既成事実でも」

「浩二くん!?! 雫ちゃんまで何を考えているのかな?! かな?!」

難しい顔で何かを企むように考える浩二と雫に香織は思わず二人に荒げた声を飛ばす。

香織に対して相も変わらずの過保護な二人に鈴達は呆れるも浩二は真剣な口調で香織に告げる。

「香織。お前のお母さん、薫子さんは智一さんと既成事実を——」

「やめて!! 親のそんな話聞きたくない!! というかどうして浩二くんがそんなこと知っているの!?!」

「普通に香織の家にお邪魔した時に教えて貰ったぞ」

というよりも香織の父親である智一から「香織は妻に似ているからもしかしたらそういうこともあるかも」と教えて貰ったというよりも愚痴を聞かされたの方が正しい。

「私そんなことしないからね!! ……ね、ねえ、どうして目を逸らすの？ ねえつたら」

浩二と雫は香織と視線を合わせない。

香織の突撃を良く知っている二人は香織がそう言うことをしてしまふ可能性があるるとつい考えてしまったから。だからユサユサと香織に揺られながらも決して視線を合わせようとしなかった。

すると雫はふと慈愛に満ちた眼差しを香織に向けて優しく肩に手を置く。

「大丈夫よ、香織。何があつても私達は貴女の味方だから」

「ああ。安心しろ。智一さんの説得は俺も付き合うから」

「もう!! 二人のバカ!!」

ぷんすかと怒る。

私、怒っています！ かのように頬を膨らませる香織を二人はごめんと謝りながら香織を慰めに入る。

「道は……こつちだな。お前等、遊んでないでそろそろ出発するぞ」

ハジメは手元の羅針盤を見ながら先へ進み始めた。

大迷宮の入口があると思われる方角には、三つに枝分かれた大きな氷のトンネルが続いている。羅針盤は一番右のトンネルを指し示していた。

氷壁と、峡谷の上の積雪で作られた天然トンネルは、まるで風の回廊のようだった。

突風……というほどではないが、トンネルの奥から身を刺すような冷たい風が吹き付けてくる。

エアゾーンがなければどれだけ厚着をしても体力が削られてしまう厳しい環境。魔法で火を起こし暖を取れたとしてもこの極寒の中ではそう長くは持たないのは明白。

そんなことを考えつつも、油断なく進むことしばし。

トンネルの中は、当然のことながら整備などされていない。天然の鍾乳洞のように、氷塊や氷柱で埋め尽くされ、道は蛇のようにならねり、あるいは波のようにアップダウンしている。

それらを、時に乗り越え、時に迂回し、時に破壊しながら進んでい

ると、

「何か近づいてきます」

「おや？ 何かいますね」

天職？探索者」のティニアとシアのウサミミが反応した。

それなりに拾い通路の右側に剣山のように乱立する氷柱があるのだが、その隙間に何かいるようだ。

「きゆうん」

「わあっ、かわいいー！」

姿を見せたのは子ウサギだった。

そして、思わず黄色い歓声を上げたのは雫だった。

全員の視線が可愛いもの大好きな雫ちゃんへ向く。眼差しが、とても生暖かい。

「ご、ごほんっ。……魔物かしらね？ 可愛い外見で惑わそうなんて、中々恐ろしい特性だわ」

「雫ちゃん、取り繕えてないよ？」

「シズシズ。お耳、真っ赤だよ？」

そんなことを言っている間にも、子ウサギがそろりそろりと氷柱の隙間から出てきた。

普通の子ウサギではないことは確かだ。体毛は白銀で、氷雪と同化してしまいそうな見た目であり、全身から雪の結晶でも振りまいているのかキラキラと輝いている。

だが、魔物かと言われると……少し疑問だ。魔物共通の特徴である赤黒い目ではなく、白銀の瞳である点から断言できない。

「きゆうきゆうっ？」

なんとも愛らしい。小首を傾げ、そろりそろりと近寄ってくる姿は、違う意味で凶悪だ。ユエ達まで少し頬を染めている。

「……みんな、一応言っておくけどこれはそんな可愛い魔物じゃあ」

イリエが可愛い外見に完全に騙されている皆に注意しようとした瞬間。

白銀の子ウサギは、先頭にいたハジメの足元へやってきた。ふんふ

んと可愛らしく鼻を鳴らし、ハジメを上目遣いで見上げる。

ハジメは、穏やかな表情でふっと笑った。

ああ、と誰もが思った。

やはり、樹海の大迷宮攻略した後、ハジメは変わったと。

敵か、そうでないか。世界をたつた二色に分けて、立ち塞がる全てを殺し尽くす。

故郷に帰るといふ目的のためなら、なんだって切り捨てる。

そんなハジメも、念願の成就を前に、そして今までの多くの出会いと出来事によって少しずつ前の優しい自分を取り戻して――

「あざといんだよ、この汚物が」

グシャ!! と音がした。とても、生々しい音だった。

あれ? と多くの者が思った。

ハジメの靴の下から滲み出てくる赤い液体はなんだろうか?

あれ? どうして小さな子ウサギさんの体がビクンビクンと痙攣しているんだろう? 頭はどこですか? 靴の下ですかそうですか……

「ぎゃあああああつ、南雲くんの悪魔あああああつ」

鈴の絶叫。その姿は、まるでムンクの『叫び』による。

雫はふつと意識を失って後ろに倒れ込みそうになるも、浩二は支える。香織は両手で顔を覆ってしゃがみ込んでおり、ユエとティオは顔を見合わせて溜息を一つ。

ティニアとエフェルは周囲を警戒して頭を失った子ウサギを目視せず、レイナは「あらまあ」と暢気に口に手を当てていた。イリエは絶叫する鈴の肩に優しく手を置いた。

鈴はイリエに抱きついて泣いた。

そして、シアは、無残に踏み潰された虫のような子ウサギの成れの果てを見て「ひいっ」と悲鳴を上げて後退った。

「ぎゅきゅう!?!」

「ぎゅ〜!?!」

追加の子ウサギさんが現れた! 踏み潰され痙攣する仲間を見て、まるで家族の死を見たかのような絶叫を上げる。

直後、ハジメに向かってぴよんぴよんと駆け出した。迫力は皆無だ。そのまま、ぽふぽふとなんのダメージもない体当たりをしてくる。

どう見ても、非力で可愛らしいだけの小動物だった。

なので、

「チツ。うざってえな」

プチツと踏み潰すハジメさん。更にぴよんと跳ねたもう一匹の子ウサギのウサミミを鷲掴みでキャッチ。子ウサギさんが「もういじめないで？」と言いたげに、ぷるぷるしながら悲しげな鳴き声を漏らしている。

耐えかねたようにシアが口を挟んだ。

「あ、あの、ハジメさん？ もう、いいんじゃないでしょうか？ ほら、なんの攻撃もしてこないですし、その子、怯えてますし……」

「はあ？ お前、なに言ってるんだ？」

まるで通じてないハートとハート。シアは「あれえ？」と首を傾げながら、なお言い募る！ 復活した雫と鈴がシアにエールを送る！ あの悪魔を止めて！

「ハジメさん！ 私、ハジメさんの恋人ですよね！」

「お、おう。そうだけど、なんだよいきなり。なんか照れるだろ」

ちよつと恥ずかしそうに視線を逸らすハジメの姿。シアやユエ達的にプライスレス。

ユエ以外には今まであまり見せたことのないその姿は、やはり、ハジメの心境が柔らかく変化したことこの証のはず……。

「そう、私はハジメさんの恋人です！ そして、ハジメさんのウサギです！」

ぴよんぴよん！ ウサミミを両手に添えてウサミミアピール！

「あのなあ……時と場所を考えろよ。嬉しい言葉だけど、俺の理性がやばいだろ」

明確に、シアの誘惑に負けそうだと困った顔で言っちゃうハジメさん、やっぱりプライスレス！

その貴重なお顔のまま、ゴミを捨てるような気軽さで子ウサギをぶ

ん投げた。勢いが強すぎて、ブチツとウサミミが千切れる。子ウサギは砲弾のような勢いで飛び、壁に激突。

ただの染みとなった。美しい氷壁を、真っ赤な何がずるりっと這い落ちていく。

「チツ。汚ねえウサミミだ」

ハジメは、千切れたウサミミを心底嫌そうな表情で見た後、やつぱりゴミのように投げ捨てた。

「うわああああああんっ。ユエさあ〜んっ。わたしい、もうハジメさんが分かりませえ〜んっ」

「……んっ。ハジメ！ メツ」

「わけが分からん」

ユエに抱きつくシアと、そんなシアを抱き締めながら何故か叱ってくるユエ。

ハジメは困惑を隠せない。

「あのね、ハジメくん。シア的に、同じウサギなんだし、そんなに可愛いんだし、容赦なく殺すのはどうなんだろうって言いたかったんだと思うよ？」

青ざめた表情で香織がシアの乙女心を解説してくれる。

「そういうことじゃ、ご主人様よ。そもそも絵面的にかなり——」

テイオまでなんとも言えない表情で苦言を呈してきたその時、

「「きゅきゅ〜んっ」」

氷柱の影から、たくさんの子ウサギさん達が！

なので、ハジメは宝物庫を光らせて——ガシヨンバシヨンガシヨンバシヨン!!

圧縮された空気が解放される僅かな音と同時に、射出された散弾針で子ウサギさん達をハリネズミにしていく。

——リボルバー式エアショットガン アルウス

激発音とレールガンの高すぎる破壊力・衝撃力を抑えつつ、致命的殺傷力を求めて創られたアーティファクト。

炸裂の代わりに、昇華魔法により創れるようになった極小かつ脆い使い捨ての宝物庫がセットされている。撃鉄に叩かれることで崩壊

し、圧縮して込められていた空気が解放されて散弾針が飛び出す仕組みだ。針には奈落製の猛毒が塗り込まれている。

「おい、お前等。何ぼさつとしてんだ。さつさと殺れよ。この辺りは天井の積雪が雪崩起こすかもしれないから、音と衝撃に気を付けろよ」

歴戦の特殊部隊員の如き、合理的かつ必要最小限の動きで子ウサギさん達を血祭りにあげていく至って真面目なハジメさん。

「……えっと、このウサギも立派な魔物で対象から熱を奪う固有魔法を持つているから、外見に騙されたらいけない」

「あらそうですの」

この場で唯一子ウサギの脅威を知っているイリエは皆にそう説明したが、そんなことは光輝達には関係なく。

「「こ、この悪魔めえええつ」」

と、叫んだのだった。ハジメが元の優しさを取り戻しつつあるという認識を彼方にぶつ飛ばしながら。取り敢えず、その絶叫で雪崩が起ることはなかった。

(大丈夫か、おい……)

ただ一人浩二だけはここから先の迷宮攻略について心配するのだった。